平成３０年度事業報告書

社会福祉法人　筑波会

法人の概要

平成31年3月31日現在

法人名　　社会福祉法人　筑波会
住所　　茨城県つくば市前野308番地5
代表者名　　理事長　宮田　浩明
連絡先　　TEL:029-896-6001　FAX:029-896-6002

法人実施事業

代表者名　　施設長 小林　弘典

児童養護施設　筑波愛児園
住所　　茨城県つくば市前野308番地5
連絡先　　TEL:029-896-6001　FAX:029-896-6002
定員　　40名

地域小規模児童養護施設　筑波愛児園第一分園「つくしホーム」
住所　　茨城県つくば市大曽根2758番地2
連絡先　　TEL/FAX:029-875-6275
定員　　6名

子育て短期支援事業(つくば市・龍ヶ崎市)
住所　　茨城県つくば市前野308番地5
連絡先　　TEL:029-896-6001　FAX:029-896-6002

役員等の状況

平成31年3月31日現在

理事会

No.	役職名	氏名	任　　期
1	理事長	宮田　浩明	平成30年6月26日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
3	理事	小林　弘典	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
4	理事	横田　直和	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
5	理事	中島　肇	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
6	理事	杉浦　瑞泉	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
7	理事	中村　猛夫	平成30年5月30日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
8	監事	萩原　慎二	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで
9	監事	延島　マイ	平成29年6月14日～平成31年度の定時評議員会の終結の時まで

評議員会

No.	役職名	氏名	任　　期
1	評議員	荒井　勇夫	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
2	評議員	木村　卓司	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
3	評議員	権藤　聖一	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
4	評議員	山越　典夫	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
5	評議員	堤　孝夫	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
6	評議員	木村　卓郎	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
7	評議員	藤島　磐根	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで
8	評議員	中里　晋三	平成29年4月1日～平成33年度の定時評議員会の終結の時まで

理事会の開催状況

◇第1回　平成30年4月25日(水)13:00～14:00

議案第1号　　黒田邦夫常務理事の辞任について

◇第2回　平成30年5月30日(水)14:00～15:50

議案第1号　　平成29年度社会福祉法人筑波会事業報告書(案)について

議案第2号　　平成29年度社会福祉法人筑波会事業決算報告書(案)について

議案第3号　　社会福祉法人筑波会理事の選任について

議案第4号　　荒川区の施設誘致に対する対応について

追加議案第1号　　社会福祉法人筑波会評議員選任・解任委員の解任について

追加議案第2号　　社会福祉法人筑波会評議員選任・解任委員の選任について

◇第3回　平成30年6月26日(火)13:00～14:15

議案第1号　　平成30年度社会福祉法人筑波会理事長選任について

議案第2号　　平成30年度社会福祉法人筑波会常務理事の選任について

◇第4回　平成30年10月3日(水)14:00～15:15

議案第1号　　平成30年度社会福祉法人筑波会第一次補正予算書(サービス区分:本部)(案)について

議案第2号　　平成30年度社会福祉法人筑波会第一次補正予算書(サービス区分:施設)(案)について

追加議案第1号　　社会福祉法人筑波会児童養護施設筑波愛児園給与規程の改正(案)について

追加議案第2号　　社会福祉法人筑波会児童養護施設筑波愛児園準職員・非常勤職員就業規則の改正(案)について

追加議案第3号　　社会福祉法人筑波会児童養護施設筑波愛児園嘱託職員就業規則の改正(案)について

◇第5回　平成31年3月27日(水)14:00～17:10

議案第1号　　平成30年度社会福祉法人筑波会最終補正予算書(サービス区分:本部)(案)について

議案第2号　　平成30年度社会福祉法人筑波会最終補正予算書(サービス区分:施設)(案)について

議案第3号　　2019年度社会福祉法人筑波会当初予算書(サービス区分:本部)(案)について

議案第4号　　2019年度社会福祉法人筑波会当初予算書(サービス区分:施設)(案)について

議案第5号　　2019年度社会福祉法人筑波会事業計画書(案)について

議案第6号　　社会福祉法人筑波会就業規則の改正(案)について

議案第7号　　社会福祉法人筑波会役員の任期満了に伴う改選(案)について

議案第8号　　社会福祉法人筑波会理事長の業務執行状況の報告について

評議員会の開催状況

◇第1回　平成30年4月25日(水)17:00～17:40

議案第1号　　黒田邦夫常務理事の辞任について

◇第2回　平成30年6月26日(火)10:00～12:00

議案第1号　　平成29年度社会福祉法人筑波会理事の選任について

議案第2号　　平成29年度社会福祉法人筑波会事業決算報告書の承認について

監事監査の開催状況

◇平成30年5月28日(月)14:00～15:00

平成29年4月1日から平成30年3月31日までの平成29年度に関する理事の業務執行の状況及び社会福祉法人筑波会の財産の状況について

職員の状況

(1)職員の構成(平成31年3月31日現在)

		施設長	事務員	児童指導員・保育士	家庭支援専門相談員	個別対応職員	心理療法担当職員	治療指導員	自立支援コーディネーター	医療機関等連携調整員	地域支援担当	栄養士	調理員	嘱託医	用務	小計	合計
本園	常勤	1	2	22	2	1	1	1	1	1	1	1	4			38	**40**
	非常勤													1	1	2	
GH	常勤			3												3	3
	非常勤																

(2)採用者

氏　　名	職種	採用年月日
高井　志保里	児童指導員	平成30年4月1日
大畠　未帆	保育士	平成30年4月1日
野木　　怜	准看護師	平成30年11月1日
稲葉　智美	調理員	平成30年12月1日

(3)退職者

氏　　名	職種	退職年月日
横田　真衣	児童指導員	平成31年3月31日

児童の状況

(1)入退所の状況

	入所		計
	本園	つくし	
男	5		5
女	3		3
計	8		8

	退所		計
	本園	つくし	
男	3	1	4
女	1		1
計	4	1	5

(2)入所の内訳

	新規		措置変更		その他		計
	本園	つくし	本園	つくし	本園	つくし	
男	3				2		5
女	3						3
計	6				2		8

(2)退所の内訳

	家庭復帰		措置変更		養育家庭		自立		その他		計
	本園	つくし	本園	つくし	本園	つくし	本園	つくし	本園	つくし	
男	1						2	1			4
女							1				1
計	1						3	1			5

(3)各月の入所状況　(在籍:各月初日現在)

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計	月平均
本園	在籍	34	36	37	36	36	37	38	38	38	38	40	40	448	39.2
	一時保護委託	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		22	
	(停止)			(1)	(1)	(1)									
つくし	在籍	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	72	6.0
	一時保護委託														
合計		42	44	45	44	44	45	46	46	46	46	48	46	542	

子育て短期支援事業事業実施状況

受入状況

	年齢	性別	学年	受入期間
1	8歳4ヵ月	女	小2	平成31年(2019年)2月19日(火)～21日(木) 3日間

合計 延べ1名

平成30年度　児童養護施設筑波愛児園事業報告（概要）

はじめに

全国の児童相談所における平成 29 年度（平成 30 年 8 月発表）の児童虐待に関する相談対応件数は 133,778 件（11,203 件増）となり、依然として増加の一途を辿っています。内訳としては心理的虐待が全体のおよそ半数（54.0%）を占め、面前 DV による警察からの通告が引き続き増加（＋9,011 件）している状況です。そのうちのおよそ 1 割（13,707 件）は東京都の児童相談所が対応したもので、内訳等は同様の傾向が見られます。

その様な状況のなか平成 28 年の児童福祉法改正により「子どもが権利の主体であること」、「家庭養育優先の理念」等が明記されました。そしてその改正法の理念を具現化するために、平成 29 年 8 月には「新しい社会的養育ビジョン」が取りまとめられました。2019 年度（令和元年度）中にはそれらを盛り込んだ社会的養育推進計画が各都道府県等から発出される計画となっており、従来の社会的養護の枠組みが大きく変わろうとしています。更にこの法改正により特別区は児童相談所を設置することができるようになりました。都内各区では自区での子育て支援を充実させるためにその準備を進めていますが、自区での子育て支援を充実させることが目的の一つとしてあるため、措置先は自区内または近隣地区を想定しています。このことにより特別区出身の子どもが区外に措置される人数は減少することが懸念されています。

また労働人口の減少などによる人材確保難は今後もより一層厳しい見通しとなっています。平成 30 年版高齢社会白書（内閣府）によると 2020 年と 2065 年の比較で総人口は 30%減少（12,532 万人⇒　8,808 万人）生産人口は 39%減少（7,406 万人⇒4,529 万人）、14 歳以下人口は 40%減少（1,507 万人⇒898 万人）すると予測されています。つまり労働者もこれから働きに出る若者たちも大きく減少し、人材確保自体が困難な状況に突入していきます。事業の継続・向上を図るうえでも、人材の確保・育成・定着に関する取り組みはより重要度を増しています。

かつてないほどの大きな変化を迎えようとしている児童養護施設の運営ですが、今年度もこれらのことについて職員全体で共有し取り組み、向上に繋げました。

１．重点的な取り組み

１）高等学校等卒業後の上級学校進学への取り組みについて

上級学校への進学については､外部支援団体等の支援も受けながら平成２６年度より施設内でロールモデルを作り、取り組みを進めてきました。この間、進学や住居に要する費用等の支援を頂けたことにより、高卒後に上級学校へ進学することは職員・児童共に実現可能な進路選択として進められてきており、高等学校を卒業した 14 名のうち９名（今年度卒業生は 4 名中 3 名が進学）が進学をすることができ、一定の到達点に達することができました。

一方、進学した６名のうち５名は退学や休学により継続ができていない状況にあります。また高等学校入学後におよそ 30%が退学をしている状況にあります。新たな課題として、高等学校進学後と上級学校進学後のフォローがあり、在園中の更なる取り組みの充実が必要となっております。

２）人材対策に関する取り組みについて

人材対策委員会が中心になり人材の確保・育成・定着を目的に施設説明会、広報活動、外部研修の受講やＯＪＴの実施などを進めています。これらのことが入職希望者の増加や外部研修の受講、OJT の具体的な取り組みなどに大きく効果をあげております。当初より当面の重要課題として全体共有して取り組みを進めていることで、他の委員会や係、各部署の運営等にもそのことへの意識が醸成されてきており、将来構想委員会の業務整理への取り組み（無駄な超過勤務撲滅)、衛生推進係の偏りのない勤務作りへの取り組み、心理療法担当職員のメンタルヘルスへの取り組み等々、施設全体で「働き続けられる職場環境づくり」について取り組みを継続しました。また今年度は運営検討委員会による職員へのヒアリングや会議見学等々が行われ、改善点が示されました。これらについては次年度の取り組みに反映させ更なる向上に繋げます。

３）小規模化及び多機能化、家庭的養育の推進に関する取り組みについて

2014 年１月 18 日に施設の新築移転が完了し、本体施設はユニット化され概ね家庭的養育の形態になりました。またそれぞれの生活棟（ユニット）において子ども達との対話をベースにした生活作りがされ、基本理念の具現化が図られています。今年度は 2019 年度に発出される都道府県社会的養育推進計画への対応を見据え、家庭復帰までの取り組みや必要とされていた期間、ケースマネジメントの方法や協議・共有する時期等を全体で共有し、現在の施設の状況把握に取り組みました。また幼児単独ユニットの方向性についても協議を始めました。今後、都道府県社会的養育推進計画発出後、その対応及び具体化を図ります。

４）東京都内への拠点の整備に関する取り組みついて

当園は都外施設であり、都内施設に比べると関係機関、保護者、対象児・者等と距離が離れています。そのため様々な取り組みを進めるうえでは、距離を縮める努力を必要としています。更に平成 28 年の児童福祉法改正により特別区は児童相談所を設置することができることになりました。児童相談所が開設した場合は以前のように全東京都での入所調整ではなくなり設置した区毎に措置先を調整するので、区外の施設や都外施設は入所が安定しないことが懸念されています。2020 年度には先行 3 区で児童相談所が開設される予定であり、現時点ではその動向や情勢の変化等の情報収集に取り組んでいます。

2　運営の充実について

①　職員体制

平成３０年度も全職員との個別面談及び施設内人事委員の体制（案）を踏まえ、適材適所に職員を配置しました。新規採用職員は 4 月に治療指導担当職員とケアワーカーを各１名、11 月に医療機関等連絡調整員を１名、12 月に調理員を１名雇用し、基準を満たす職員数を確保することができました。また新たな制度（乳児院等多機能化推進事業）も取り込んで実施することができました。しかし基準外の職員の確保には至りませんでした。年度末にはケアワーカー１名（自己都合退職）の退職がありました。

②　運営システム及び運営の適正化

施設運営にあたっては情報共有とボトムアップの手順による意思決定を大切にし、そのプロセスの透明化を図ることを運営の基本として取り組みました。部署毎や各種係・委員会等で会議を定期開催し、全員参加の職員会議で様々な決定をすることにより、人材育成及び職員の意欲向上を図ることを継続しています。そしてそのプロセスを通して、自主的・主体的に働くことができる職員を育成できるように取り組みました。

また今ある運営組織の理解を深めるために、当園で平成 14 年に発覚した施設内虐待とその背景にあったもの、そしてそれから築いてきた運営組織と大切にしていること等々の学習会を 3 回に分けて行いました。

③　権利擁護

権利擁護意識の醸成と事故等の防止のために、リスクマネジメント係・性教育委員会を中心に「児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト（職員版）」を 5 月・2 月に、「児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト（施設版）」は 2 月に、「子どもに性教育をするケアワーカーのためのチェックリスト」を 5 月に、「被虐待児童防止チェックリスト」を 7 月に実施し、達成度（評価点）が低い項目については施設全体で結果を共有しました。更に、半期毎に理念・権利擁護係を中心に職員会議内で養育理念と被措置児童虐待の防止と通告義務について確認し、3 月には子ども達にもそのことについての説明を実施しました。その他、倫理綱領の読み合わせ等を行い、権利意識や倫理観の向上を図りました。また今年度も運営の適正化を図るために児童養護施設サービス評価を受審しました。ほか苦情解決体制の整備と周知、第三者委員の活動、児童へのアンケートなどの取り組みを実施しました。子ども達に対しては権利の学習会として、年間を通して権利ノートの読み合わせをユニット毎に行いました。これらそれぞれの機会が、職員の倫理性や規律性の向上につながっています。

④　災害訓練・避難訓練・安全教育

訓練については防災係を中心に年間２回の実施を定められている総合訓練（避難・消化・通報）、夜間訓練（18:00 より実施）を含め毎月１回実施することができました。また年度初めに、全職員を対象とした消防設備の使用方法の確認及び体験の機会を設けました。今後もより充実した訓練を定期的に行い、安心・安全を守ることができるように取り組んでいきます。

⑤　環境整備

安心・安全かつ衛生的な生活環境を維持していくために、主に環境美化係、リスクマネジメント係が中心となり、危険個所のチェック、害虫等の駆除、定期的な一斉清掃等々を行いました。また正門出入口に事故防止のためにカーブミラーを設置しました。他、門扉の修繕、ゴミ捨て場の照明設置等を行い、安全対策を図りました。ユニット内の清掃については、子どもたちの経験と習慣付けを意識しながら、各担当棟の職員が継続的に取り組みを行っています。

⑥　地域に根ざした施設づくり

水城子供会に加盟し円滑な交流が図られ、今年度もすべての年間行事に参加することができました。また青年会や子供会など地域の要望に応じて備品の貸し出しをしました。納涼祭では水守囃子連の和太鼓演奏、前野地区のオカリナ演奏が恒例となっており地域との繋がりを感じる行事の一つとなっていますが、今年度は雨の影響で水守囃子連の和太鼓演奏が急遽中止となってしまい非常に残念でした。納涼祭にはステージ発表も含め大勢の方達が足を運んでくれており、年々人数が増えています。他、年末には園でついた餅を近隣の方達に配り、ご挨拶に伺っています。また今年度は係の者が地域の清掃活動にも参加しました。今後も地域の一員としてより身近に感じてもらえるように取り組みを進めます。

⑦　　実習生・研修の受け入れ

今年度も実習生係と人材対策委員会が連携し、実習生が児童養護施設への関心・興味がどれだけあるのか等を把握すること、児童養護施設を知ってもらうことをより丁寧に行いました。事前・事後アンケートを取ること、また事前オリエンテーションおよび実習終了後のオリエンテーションを実施する等、より丁寧に学生の不安や疑問を受け止められるように取り組みました。

今年度は１４校（−３校）２６名（−６名）、197 日（−14 日）の実習生を受け入れ、その他県外の施設職員を１カ月程度受け入れました。

⑧　ボランティア

ボランティアの存在は、子どもに対して充実した支援、安心・安全な生活を提供す

る上でとても欠かせないものとなっています。更に本園の子どもが将来社会に出ていくことを考えた時、様々な大人と関わる事は子どもの生きる力を育成する上で重要な経験と成り得るものと考えます。今年度もボランティア係が窓口となり、施設・ボランティア両者のニーズを照らし合わせ、活動がスムーズ且つ効果的に行われるように調整を図りました。筑波大学学習ボランティアの方々には、週１回程度の定期的な学習指導と施設で実施する行事の補助スタッフとしてのサポート等を、他、職員の補助や読み聞かせ等として６名の個人ボランティアを受け入れました。また様々な機会の提供として７団体のボランティアを受け入れました。

⑨　苦情受付

当園では「苦情」をネガティブなイメージでとらえるのではなく「利用者の声」として捉え、支援（サービス）の質の向上に繋げることが重要だと考えています。今年度は「あのねポスト」に１件の投函がありました。特定のユニット担当職員の言動が他の職員と違う、みんなで決めたことを勝手に変えてしまうというもので、これらについては当該職員、ユニット、係、第三者委員と連携し対応をしました。

今年度も担当者が中心になり、子どもからの訴えや生活状況を把握する機会として実態調査を行い、問題・課題の早期把握と早期対応に取り組みました。また第三者委員にも定期的に来園いただき、子どもとの面談を実施しました。

⑩　各学校等との連携

園の生活とともに学校生活は、社会性を身につけ、集団への関わり方を学ぶと共に学力をつけるために重要な場と時間です。入所までの養育環境が不適切であったため、学校集団への適応が難しく、トラブルが起こることも少なくありません。各学校とは、日常的な情報交換を丁寧に行い、情報共有及び支援の統一を図りました。また主たる通学先としてある秀峰つくば義務教育学校と筑波高校とは、合同で定期的に連絡協議会を開催しました。

⑪　広報活動

定期的な広報誌の発行やホームページを活用して園の情報を発信しています。特にホームページは細目に更新し市民などの理解に取り組んでいます。寄付や寄贈等の支援も増えており、ボランティア活動の拡大にも繋がっています。利用者のリーズに沿った受け入れができるように、引き続き体制整備を行います。

以上、平成 30 年度事業報告概要とします。各々の詳細については「2018 年度総括・2019年度方針」をご参照ください。

平成30年度筑波愛児園事業概要

部署総括

1 事務部 ---------- 1－5
2 専門部 ---------- 6－14
3 家庭支援専門相談員 ---------- 15－43
4 個別対応職員 ---------- 43－55
5 心理療法担当職員 ---------- 56－70
6 治療指導担当職員 ---------- 71－75
7 自立支援コーディネーター ---------- 76－83
8 地域支援担当職員 ---------- 84－90
9 青空棟 ---------- 91－121
10 太陽棟 ---------- 122－149
11 さくら棟 ---------- 150－176
12 つくしホーム ---------- 177－197
13 調理部 ---------- 198－210
14 東京都専門機能強化型児童養護施設制度 ------ 211－227

委員会・係総括

1 運営委員会 ---------- 228－239
2 将来構想委員会 ---------- 240－247
3 性教育委員会 ---------- 248－252
4 児童会運営委員会 ---------- 253－259
5 行事委員会 ---------- 260－268
6 人材対策員会 ---------- 269－287
7 東京都社会福祉協議会従事者会運営委員会 ------ 291－294
8 茨城県児童福祉施設協議会 ---------- 295－298
9 施設実習 ---------- 299－311
10 ボランティア ---------- 312－320
11 広報 ---------- 321－320
12 リスクマネジメント ---------- 321－323
13 苦情受付 ---------- 324－332
14 保健衛生 ---------- 333－338
15 日用品・保菌検査 ---------- 339－342
16 衛生推進 ---------- 343－345
17 防災 ---------- 346－349
18 育成会 ---------- 350－357
19 理念権利擁護 ---------- 358－359
20 環境美化 ---------- 360－361
21 福利厚生 ---------- 362－363
22 車両 ---------- 364－367
23 感染症対策 ---------- 368－369
370－371

事務部

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

事務　根本　敬子
小林　早苗

◇事務内容

法人事務会計全般、雇用関係（社会保険・雇用保険・退職共済・従事者共済等）
施設事務会計（給与・各業者支払い・小口現金等）、措置費・補助金請求、入所児童に関する事務的関係手続き、各種保険関係、その他

総括

ほとんど全ての社会福祉施設に事務職が配置され、経理や庶務等の仕事にあたっています。経理では地方自治体への運営費の請求、財務管理、職員の給与事務などの業務があります。また、庶務では文書の作成、発信・授受、管理、施設設備の維持管理など多岐にわたります。

これらについては、業種関係なく全ての職員の共同と協同が必要であり、職員待遇や入所している児童の安心安全にも深く関わってきます。また、何時も課題にあがります職員間での情報共有の徹底をこれまで以上に取り組む必要があると考えます。

ここ数年の時代の変化スピードは凄まじいものがあります。1990年にインターネットが登場してから数十年が経ち、その頃には考えられないようなサービスや働き方が当たり前となっています。将来は AI（人工知能）や暗号通貨（ビットコインなど）の普及が使われる時代が来るでしょう。実際に洗濯畳みロボットが開発され販売されていますし、数年後には片付けロボットが販売されると言われています。

このような時代ですが、児童養護施設の役割である、社会生活に必要なスキルを得られるよう支援を行ったり、自立に向けた支援や退所した者に対してのアフターケア支援については、今後もロボットではなく人間だからこそ成せる役割だと考えます。子ども達が健やかに暮らせるように子どもに寄り添い、サポートする体制を施設全体で取り組むことが求められます。そして、新しい事に興味を持ちながら、これまでの固定観念に縛られることのないよう柔軟な思考を持って、今出来ることを着実に行っていくとこが必要と感じています。

しかし、時代の流れにも乗らなければなりません。ハード面については、施設全体で業務省力化を意識し、業務の効率化を目指し務めていきたいと考えます。身近なもので言えば、サイボウズの活用です。サイボウズには、主に次のような機能があります。

・スケジュール、施設予約　・メッセージ　・掲示板　・ファイル管理　・ワークフロー　・メール
・電話メモ　・アドレス帳、ユーザー名簿　・報告書　・プロジェクト　・ToDo リスト　・タイムカード

このような業務改革といえる機能のサイボウズを、全体で活用を広げていきたいと考えます。

何かを始めるには、ソフトとハード両面をしっかりと準備することが必要です。また、何かを改善したり問題を解決したりする場合には、本当に必要なことを見極めることが重要だと考えます。日頃から職員同士が互いに協力し合いながら、このような見極める力をつける努力も個々に必要だと感じています。それらがすべて働き方改革にも繋がり、そして、入所している子どもたちへの支援にも繋がっていくのではないでしょうか。

<u>2018 年度方針に対しての状況</u>

＊データの共有化を図る。

サイボウズの活用推進。

施設内情報を個人で保有しない。

報告・連絡・相談。引き継ぎ作業を怠らない。など

➡ **□サイボウズの活用が出来ていない。**

□施設内情報(写真等含む)の個人保有が見受けられる。

＊ドライブレコーダーの設置を含めた車輌運行管理支援システム(仮称)の導入

ドライバーの運転傾向を詳細に把握し、的確かつ効果的な安全運転指導を受けることにより事故を防ぐ。

➡ **□引き続き導入に向け対応していく。**

＊事務処理のミス防止対応

日常より的確かつスピーディーに応えられる運営が強く求められています。

こうした中で、システムのプログラムミスや職員の不注意などによる事務処理のミスにより、信頼を損なうような事例が発生しないよう務めることが重要です。チェック漏れ、確認忘れ、記載誤り、パソコンの操作誤りなど、日常業務の中でのちょっとした不注意・不作為、気の緩みなどが原因となります。

施設、または法人全体の損害を与えかねないリスクが、日頃の業務の中に潜んでいることを全職員が改めて十分認識するとともに、他で起こった事務処理ミスは自分のところでも起こり得るということを常に意識し、ミス等の防止について、施設全体で取り組んでいく必要があります。

➡ **□今後も引き続き取り組んでいく。**

＊施設に届くメール確認作業を怠らない。また、各サイトには不用意にメールアドレスの登録をしない。

施設には毎日多くのメールが届きます。中には迷惑メールなるものも含まれていますが、その殆どが業務を遂行する上で大切な情報です。担当していない部署や係のものであっても、一通り目を通し把握することで施設全体の動きを捉えることもでき、職員間の情

報共有にも繋がると考えます。詰めの甘い業務とならないようメール確認作業を全体で取り組みたいと考えます。

また、ネット購入時や入所児童対応のためやむを得ず各サイトへのメールアドレスの登録を行うこともあると思いますが、必要以上に登録を行わないこと、やむを得ず登録した場合には、必要がなくなった時点で速やかに登録削除、配信停止手続きが必要と考えます。業務以外のメールを多く受信すると、重要なメールの確認漏れがでる可能性を危惧しています。また、現代のコンピューターウイルスは非常に巧妙になっていると言われており、万が一ウィルス感染してしまった場合を考えると、情報の流出等が考えられ非常に危険と感じます。

➡ **□迷惑メールですが、減るばかりか増える一方です。今後も対策が必要です。**
□様式「メール配信システム登録届」があります。使用の徹底をしていく。

◇寄付・支援そして情報発信

今年度も、多くの方に支援して頂き、子ども達への継続した支援が出来ている事に日々、感謝しなければなりません。学習塾への通塾が増え、子ども達の学習意欲も高まっています。習い事でも、子ども達の個性を活かし、さまざまな体験をし、自立に向けた支援が充実することで、子ども達の明るい未来へ繋いでいけると考えます。

多くの方々の支えがある事を決して忘れる事なく、子ども達にも支援者の気持ちを伝え、職員一人ひとりが子ども達と向き合う事で、より良い支援となると考えます。

2018 年度習い事一覧

	習い事の内容	月謝	年間合計	入会月
S.K	下妻ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ(ｽｲﾐﾝｸﾞ)	6,480	77,760	2016.6～
K.T	下妻ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ(ｽｲﾐﾝｸﾞ)	6,480	77,760	2017.6～
S.H	下妻ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ(ｽｲﾐﾝｸﾞ)	6,480	77,760	2017.7～
R.T	下妻ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ(ｽｲﾐﾝｸﾞ)	6,480	77,760	2017.9～
J.I	いばしん	18,684	280,324	2014.4～ 2018.11
A.T	いばしん	31,968	127,872	2016.5～ 2018.7
M.T	いばしん	22,248	133,488	2016.5～ 2018.9
U.K	いばしん	55,188	777,086	2017.10～
N.T	いばしん	38,988	526,697	2018.6～
S.T	いばしん	35,488	332,284	2018.8～
T.K	いばしん	34,840	272,608	2018.8～
E.T	いばしん	34,668	202,645	2018.10～
R.M	ｽｸｰﾙ IE	41,040	503,170	2016.7～ 2018.2
S.N	ｽｸｰﾙ IE	41,040	503,170	2016.10～

				2018.2
Y.N	思学舎	23,760	226,800	2015.5～ 2018.12
K.R	思学舎	36,720	360,666	2018.9～
T.O	ドラムレッスン	9,720	58,320	2017.9～ 2018.9
T.N	少年野球	3,000	40,500	2018.2～
K.I	バトミントン	3,800	26,000	2018.10～
M.I	自動車教習所		299,295	
J.I	自動車教習所		283,866	
T.K	自動車教習所		283,866	
Y.N	自動車教習所		272,938	
12 名	バス回数券(塾・バイト)		292,400	
A.I	自立支援金	50,000	600,000	2015.4～ 2019.3
M.S	自立支援金	50,000	600,000	2017.4～
	合　　計		7,315,035	

【寄附金品の受入状況】 2019 年 1 月末日現在
◇寄附金　　11,834,627 円
◇寄附物品　衣類、靴、玩具等(市場価格換算　434,392 円)

◇児童手当

支給時期は 6 月、10 月、2 月にそれぞれの前月分までの手当を支給されている。児童手当は、通常の小遣いとは別に出納管理を行ってきた。

≪参考≫

2018 年度児童手当支給状況　33 名　　3,720,000 円
2019 年度児童手当支給予定　28 名　　3,360,000 円

◇事務処理関係

○提出書類について

旅行命令簿兼旅費請求内訳書、仮払い請求書、物品伺い書、金種別表等、事務提出書類は大切な書類です。コピーを重ねたものや、雑な裁断された書類の提出が多く見受けられました。丁寧に記載することを個々で意識することが必要だと考えます。

○小口現金出納帳の取り扱い

現金を使用した場合、その日のうちに現金と帳簿の確認を行い金種別表の記入をする事になっていますが、記入が漏れている事がありました。それと同時に小口現金出納帳の記載誤りが見られます。その都度、レシート、現金、帳簿の確認を怠らないように職員それぞれの心掛けが必要だと感じました。

また、帳簿の記載誤りを定規等使用せず訂正していたり、印鑑が漏れていることがあったため、声掛けを行ってきました。

○仮払い請求について

1 万円以上の仮払い請求書は 1 週間前、1 万円未満の物品伺い書は執行日より 3 日前までに請求となっていますが、請求漏れがありました。請求漏れのないように棟・ユニット内での情報共有が大切だと考えます。

◇法人・施設調査について

社会福祉法人及び社会福祉施設に対する指導監査は、社会福祉法などの関係法令・通知に基づき、法人・施設運営、事業経営及び利用者の処遇などの指導事項について監査を行うとともに、運営全般について助言、指導を行うことによって、適正な法人・施設運営と円滑な社会福祉事業の経営の確保を図るものです。改善又は是正を要すると認められる事項について指摘して頂き、それらを改善・是正することによって、事業の透明性を確保することができます。また、サービスの質の向上に繋がっていくと考えます。

今年度は、茨城県による施設調査が行われました。

【茨城県】平成 30 年度社会福祉施設一般検査(施設検査)

◇2018 年 10 月 22 日(月)実施

◇対象:児童養護施設 筑波愛児園

地域小規模児童養護施設(つくしホーム)

◇是正又は改善を要する事項、及び処理状況

①火災・地震のほか、風水害等の災害発生時に円滑かつ迅速な避難、救護等を確保するための具体的な計画を策定すること。

➡平成 31 年 4 月 1 日付で施行できるよう現在作成中です。
作成出来次第送付します。

②経理規程が、現行の会計基準に準拠したものとなっていないので、速やかに改正すること。

➡次回理事会平成 31 年 3 月 27 日(水)で議題提出いたします。
承認後、改訂後の経理規程を送付します。

③平成 29 年度賃貸借表について、資産の部合計と負債及び純資産の部合計が合致していないので、精査のうえ次年度決算に反映させること。

➡顧問会計事務所へ報告済みです。
平成 30 年度事業決算で不合致の部分を反映させます。

以上

専門部

2018年度総括・2019年度方針

家庭支援専門相談員	斎藤　朋義
	小松崎　比呂子
個別対応職員	田中　義一
心理療法担当職員	立川　弘司
自立支援コーディネーター	大澤　亮
治療指導員	高井　志保里
地域支援担当職員	川村　いくみ
医療機関等連絡調整員	野木　怜
	（11 月より）

１．全体総括

専門部では各専門職員が高い専門性を持って棟・つくしホーム（以下ホーム）と連携して子ども支援にあたることを本来業務としているが、ケース検討や勤務補助、施設運営に関わる業務など専門部がチームとして担う業務もある。本来業務とチーム業務がより確実に遂行できるよう、各専門部職員がスケジュール立てを十分に行うとともに、部署会議等を通して情報共有、議題検討を行っている。

さて、専門部が専門職集団として成り立つためには、各専門職が意識を高く持ち、個々の力量を向上させ、子どもの様子を把握し、子どもの課題へのアセスメントと対応を的確にアドバイスできることが求められる。職域に関することはもちろんであるが、ケースマネジメントや職員間の連携なども含め、積極的に棟・ホームとコミュニケーションをはかり、より良い子ども支援に寄与できるように努めなければならない。

そのためには各専門職が専門業務を確立することが前提となり、その上でチーム支援が成り立つと考える。各専門職が職域に関することで相談に足る相手となることがまずは必要であり、それからチームとしてどう機能するか、そして棟・ホームとどう業務連携するかの検討が必要となっていくと考える。

今年度、専門部では治療指導員、地域支援担当職員、医療機関等連絡調整員（新規）を新たな職員に迎え、園全体に関わる補助業務や専門部担当の係、委員会業務を専門職全体でサポートしながら業務に従事してきた。チーム支援の基本業務となるケース検討では、早急な対応が求められたM・T（高 2 女子）、N・M（高 2 男子）ケースを中心に生活棟とケース会議を行い共働し支援してきた。ただ、会議の内容はまだ中身の濃い議論が達成できているとは言い難い。次年度も各専門職がより高い専門性を持って協議を行い他部署と密に連携を取りながらチーム支援を実践していく。

さて、専門部では 11 月に生活棟における子どもと職員の関係性をより向上させる目的で、愛児園運動会（キラリンピック 2018）を企画し実施した。目的達成の点から見れば一定の効果はあったと思われる。次年度の実施については以下に記載したが、今後の実施については丁寧な協議を継続していく。

詳しい総括については項目ごとに以下に総括する。

２．専門部会議

≪2018 年度方針≫
◇会議のシステム化に沿った積極的で効率の良い部署会議を行う。
◇ケース検討の方法に従い、棟・ホームのニーズに沿ったケース検討を行う。

１）専門部会議

専門部では効率的かつ積極的な部署会議を目標に取り組んでいる。共有サーバーに会議録を作成し、事前にスケジュールや議題を記載し、個々が議題について考えをまとめ、積極的な議論ができるように取り組んでいる。

その結果、会議時間短縮の定着ははかれているのだが、中身の濃い議論が達成できているとは言い難い。各専門職が主体的に会議に参与し、議題、または子ども支援方法の具体化などが活発に議論できることが理想だと思われる。

そのためには各自が専門職としての知識や技術の向上、子どもの状況把握、情報共有をより深めつつ連携した支援が展開できるよう、資質向上にも努めなければならない。

今年度はキラリンピックの企画・準備で長期にわたり同じ議題を協議してきた。その中で分担されたものについて責任をもって原案を作成し、それぞれの準備を行ってきた。

反省としては、より積極的な議題提示も必要だと考える。施設全体をみて、必要な取組みなどをより主体的に議論できると良いと考える。

２）部署内ケース検討

ケース検討は、①棟・ユニットとのケース検討と②専門部内でのケース検討の２種類ある。会議に「ケース検討」の枠を設けているが、まだまだ積極的に活用できていない状態にある。各専門職が自身の業務の中から課題等を抽出し、部署内でケース検討ができることをイメージしているのだが、実施にいたるケースは少なかった。各専門職が「ケース検討」の目的や意義を理解し、積極的に活用するかたちを検討したいと考える。

「ケース検討」となるとハードルが高いイメージがあるのだが、棟でいうケース会議をイメージしたい。問題が大きくなってから対応を考えるのではなく、問題と思われる兆候が出た段階で対応をはかれることが重要だと考える。そのためには施設全体を見通し、子どもの様子などを丁寧に観察する力が求められる。

この点で言えば、Ｍ・Ｔ（高２女児）、Ｎ・Ｍ（高２男児）のケースは専門部からの主体的な働きかけがあったケースだと考える。

各専門職が携わるケースだけでなく、日々の養育日誌等の読み込み、対応を検討すべき事項のピックアップ､小さな出来事から課題を抽出するなどの主体的な動きも求められる。今後も同様の実践を通じ、より効果的で意義のある部署内のケース検討を模索していく。

≪2019年度方針≫
◆会議のシステム化に沿った積極的で効率の良い部署会議を行う。
◆ケース検討の方法に従い、棟・ホームのニーズに沿ったケース検討を行う。

３．情報の共有化

≪2018 年度方針≫
◇各自が業務日誌や各部署との情報共有を通し、積極的な連携がはかれるように取組む。

◇専門部会議内に事後報告に新たな方法を導入し、専門部内の情報共有、また各業務の振り返りを行うことでより良い子ども支援を検討する。
◇専門職日報を継続し使いやすさを追求していく。

１）連絡会

今年度の 9 月に連絡会のあり方について職員会議で見直され、連絡会は平日の 9 時から行っていたが、9 時半に変更となった。そのため、専門部も勤務時間内で連絡会に参加する事が可能となり、連絡会はより多くの職員が情報共有だけでなく児童支援や業務確認ができる場所となっている。休日については変更なく、専門部が業務日誌をまとめる作業を概ね 10 時に行っている。各部署が共有サーバーを通して閲覧できることから印刷は全体で 1 部としている。業務日誌への記載漏れ等の課題がある為、次年度は課題の改善をしつつ連絡会を活用し、各部署と必要な情報を共有していきたいと考える。

２）情報の共有化

「情報の共有化」は、①専門部内においての共有化、②専門部と各部署間の共有化に区別される。

業務内容、公用車使用状況、会議室利用状況等のスケジュール確認が行えるサイボウズシステムの利用に関しては昨年度よりも定着をしてきている。

専門部内の情報共有は、会議内でそれぞれの業務に関する情報交換を行ってきた。専門部は個々が独立した領域で業務に従事しているため、情報を共有しやすい環境にはない。そのため、会議だけにとどまらず回覧を通して情報共有を図っている。会議内での「専門業務の事後報告」は活用できておらず、より効果的な方法を検討しなくてはならない。

各部署との情報共有については、連絡会や棟・ユニット会議、養育日誌、職員会議等を通して積極的に行うように取り組んでいる。より意味のある情報共有のためには、各自が“待ち”の姿勢であってはならない。今年度は専門部からの発信によりケース検討会を行うこともできたため、次年度も相互的な情報発信や情報共有を行っていきたいと考える。

３）各専門職の動向の共有化

業務月報は昨年度に引き続き、専門部全体ではなく各々で継続している。当日の動向については、専門部会議で事前確認や業務日誌に記載するなどして全体周知を図っている。

≪2019年度方針≫
◆各自が業務日誌や養育日誌、各部署との情報共有を通し、積極的な連携がはかれるように取組む。
◆専門部内の情報共有は、専門部会議内での伝達や回覧を用いて行い、各業務の振り返りをすることでより良い子ども支援を検討する。

４．専門部のチーム支援

１）チーム支援

≪2018 年度方針≫
◇自立支援計画書を基にしたケース検討を通し、多面的なアセスメント、より有機的な連携をベースにした子ども支援を検討し、実施していく。
◇「アセスメント」を入所前と入所後（半年・１年）とし、それぞれの職域の中で子ども

の見立てと取組みの具体化を図る。
◇各専門職の領域は分かれているが、専門職集団としてのチーム支援のあり方を模索し、具体化を図っていく。

自立支援計画書を基にしたケース検討については、書式内には自立支援計画書の短期目標等記載する部分があり、目に触れる機会にはなっているが、その目標に関してケース検討内で議論することはない状況である。それよりも日々の課題に対してどのように取り組んでいくのかの視点が最優先されている現状にある。その原因として日々の課題が緊急性のあるものや、課題をクリアしていかなければ次のステップに進めない状況にあるケースが多いため、将来を見据えた自立支援計画書を基にしたケース検討が結果後回しになっている。そのような状況を打破するためには現状の課題をクリアにすることが最優先されるケースだけではなく、将来を見据えてこの先どのようにケース進行をしていくのか課題にあがっているケースを検討する場を意識的に持つ必要がある。そういったケース検討を実施することで日頃の支援だけに着目しない将来を見据えた支援に着眼点を持ったケース検討がおこなわれるものだと考える。今後も思考錯誤しながら計画的な実施をしていく。

新規入所児のアセスメントについては、入所前検討と入所後半年・1 年後ケース検討に分けて行っている。入所前検討については児童票に記載されている情報以外に必要な情報は何か、記載はあるがより詳細な情報を掘り下げる必要があるものは何か等、入所にあたって必要な情報の見立てをするものとなっている。入所後半年・1 年後ケース検討については、入所してからの支援の様子や生活の様子の結果、新たな課題への取り組み状況等を話合う場となっている。しかし個々の意見を伝え、それをどのように具現化するのかまでの議論にはなっていない。時間的な制約もあるためＣＷが話合いで出た意見を参考にして取り入れられるのかどうかを判断し、実施している現状にある。

専門職集団としてのチーム支援のあり方について専門部内で議論できていない。専門職を集団と捉えるのか個々と捉えるのかによってあり方も変わってくる。個々の専門領域を大事にしながら連携を模索する必要もあると考える。子どもや親を中心に考えた時にＣＷと専門職の立ち位置や支援方法は違って良いと考える。ただその違いを認め合い情報の共有化をしてはじめてより良い支援に繋がるものだと考えるため、今後専門部内でも議論を深めていきたい。

以下にあげるアセスメントの考え方は重要なことであるので、個々の専門職が専門職となりうるためにも必要不可欠な考え方である。現状で専門職としてのアセスメントも不十分であると感じている。

アセスメントとは子どもの置かれている状況を把握し、どのような生活ニーズがあるのかを明らかにすることである。自立支援計画書の作成前におこなうものは事前評価であり、作成後におこなうものは事後評価となる。最低限、行うべきアセスメント課題を確認することが必要な状況である。３つのアセスメントの視点①問題解決のためのアセスメント、②ストレングス視点のアセスメント、③受け入れ前の情報収集の中での見立てのアセスメントがあるのだが、②のストレングス視点のアセスメントは議論をする中ではとても弱い部分である。どうしても子どもの強みを議論する前に、弱みに着目してしまう。弱みよりも強みの視点を持てるように意識づけをしていく。子どもの生育歴・生活環境・家族との関わり・特性・性格等、多方面にわたっての見立てを一番近くで子どもを見ているケアワ

ーカーがおこなうのはもちろんのこと、専門職が違った角度から見立てることはとても重要なこととしてよりアセスメントの確立を目指していく。

≪2019 年度方針≫
◆自立支援計画書を基にしたケース検討を通し、多面的なアセスメント、より有機的な連携をベースにした子ども支援を検討し、実施していく。
◆「アセスメント」を入所前と入所後（半年・１年）とし、それぞれの職域の中で子どもの見立てと取組みの具体化を図る。
◆各専門職の領域は分かれているが、専門職集団としてのチーム支援のあり方を模索し、具体化を図っていく。

２）個別対応プロジェクトチーム

≪2018 年度方針≫
◇問題が起こってからの支援ではなく、日頃の支援からの連携・取り組みをしていく。

① 棟・ユニット会議

各専門職が、個々の専門領域の中で必要に応じて棟・ユニット会議や養育日誌や職員との会話を通して子どもの現状を把握している。CW と専門職がお互いに発信者になり必要に応じて話合いの場を持ち、役割分担しながらケースを生きたものとして動かしていく。そのためには片方だけの発信ではなく、双方向からの発信を専門部としても心がけていく。

② 個別対応プロジェクト

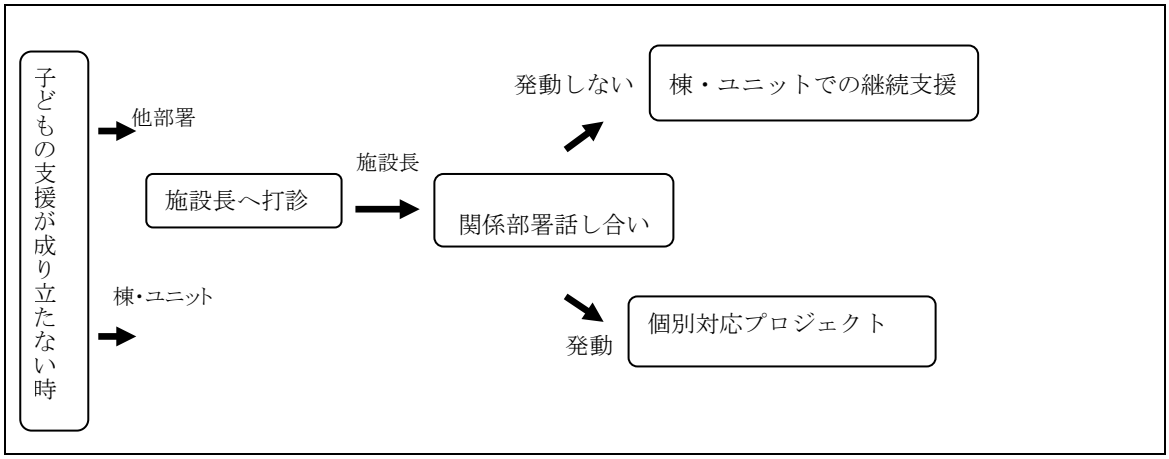
M・T（高 2 女子）のケースについては個別対応プロジェクトとして 4 月～9 月まで計 12 回話合いを行い、現状確認・取り組み・課題の抽出等について議論をしてきた。取り組まなくてはいけない課題が多岐にわたり毎回、的を絞って議論をしてきた。夏休み前は夏休みに向けての課題に絞って対応方法を確認してきた。そのため夏休みも大きな逸脱行動は見られなかった。ただ大人が見えない部分での実態把握はとても困難であった。子どもの居場所の把握は子どもとのやり取りで行く場所・関わる人を把握する形となっていた。「信じることと騙されること」は裏腹に存在している。ただ個別対応プロジェクトチームで確認をすることで職員の安心感が生まれることになったのではないかと考える。個別対応プロジェクトの発動はユニット及びホームで子ども支援の方針が立たなくなった時、また棟・ユニット職員以外が必要であると判断した時となっている。専門職集団としては出来ないこと探しではなく、一緒に取り組む一員としてあり続けたいと考える。

また年度途中からN・M（高 2 男子）のケースを個別対応プロジェクトではなかったがケース検討として議論を重ねてきた。問題の長期化が想定され、先行きが見えないことへの不安が付きまとうケースとなった。入院をきっかけに専門部が細分化された役割を担うこととなった。このようなやり方について専門職集団として今後振り返りをおこなって行く。

≪個別対応プロジェクト発動について≫

ユニット及びホームで子ども支援の方針が立たなくなった時、また棟・ユニット職員以外が必要であると判断した時

≪個別対応プロジェクト発動手順≫



≪2019 年度方針≫
◆問題が起こってからの支援ではなく、日頃の支援からの連携・取り組みをしていく。

５．勤務補助

＜2018 年度方針＞
◇新任職員サポートは、対象ホームのニーズを聞いて調整をはかり取組む。
◇勤務依頼に関しては、施設長判断の元各部署と調整しながら実施する。

１）勤務補助について

今年度は新任職員が 2 名入職した。ケアワーカー1 名の新任職員フォローに関しては、担当ユニットの職員と連携してフォロー体制を作り、OJT を行った。ユニットのルーティンワークを働きながら伝える事で、即実践につながり支援を行う上での大切さなどを伝える機会となった。

つくしホームへの勤務補助は青空､太陽棟のフリー職員が宿直補助､日勤補助を行った。さくら棟への補助は地域支援担当職員とフリー職員でフォロー体制を敷き対応したが、地域支援担当職員とフリー職員の日程とさくら棟のニーズが重ならいことが多く、調整を繰り返しながら対応した。

アルバイトの送迎や通塾対応に関しては、引き続き筑波大学習ボランティアの学生アルバイトを雇用した。今年度は土曜日のスイミングスクールの送迎対応も新規依頼し、対応をはかった。次年度に向け、中高生のスケジュールの把握を再度行い、ニーズがあるところに学生を配置できるように月毎にスケジュールの見直しを行い対応していきたい。

今年度、各棟から出された勤務補助依頼については、19 件あり児童対応が 13 件、職員の体調不良に伴う補助が 6 件であった。勤務変更を伴う事態が発生した場合、該当部署だけでは勤務補償を行おうとすればどうにかできることもあるが、勤務がタイトになるだけであり、適切に勤務補助依頼を出すことで、負担軽減にもつながると思われる。

勤務補助依頼については、各棟の運営委員、衛生推進担当者から勤務についての相談を受けることで、該当部署ができることや専門部が通常業務でできることなど、多角的に検討することで、新しい対応方法などが見つかることもあった。そのため勤務補助依頼はあ

くまでも対応方法が無い場合に行うものであり、専門部の通常業務内で対応出来ることや該当部署の勤務を変更することで対応できる場合もあり、多角的に検討することが重要であると感じた。

≪勤務補助調整手順≫

	担当者	内容・確認事項
1　補助依頼提出	各棟・GH 衛生推進担当者	・補助依頼の内容説明 ・棟・GH 内調整の状況の説明
2　審査	施設長	・補助依頼内容が適正か ・勤務調整が充分されているか
3　調整	フリー職員 衛生推進担当者	・依頼内容を把握し部内で調整
4　調整　㋐	フリー職員対応	・勤務補助実施
調整不可の場合		
5　調整　㋑	専門部衛生推進調整・対応	・依頼内容を把握し調整 ・勤務補助実施
調整不可の場合		
6　調整　㋒	調理部衛生推進調整・対応	・依頼内容を把握し調整 ・勤務補助実施
調整不可の場合		
7　調整	ホーム再調整・対応	・現状を受けて再調整
調整不可の場合		
セーフティネット調整・対応		

≪2019 年度方針≫

◆勤務依頼に関しては、施設長判断の元各部署と調整しながら実施する。

◆新任職員サポートは、対象ユニットのニーズを聞いて調整をはかり取組む。

≪勤務補助調整手順≫

	担当者	内容・確認事項
1　補助依頼提出	各棟・GH 衛生推進担当者	・補助依頼の内容説明 ・棟・GH 内調整の状況の説明
2　審査	施設長	・補助依頼内容が適正か ・勤務調整が充分されているか
3　調整	フリー職員 衛生推進担当者	・依頼内容を把握し部内で調整
4　調整　㋐	フリー職員対応	・勤務補助実施
調整不可の場合		
5　調整　㋑	専門部衛生推進調整・対応	・依頼内容を把握し調整

		・勤務補助実施
調整不可の場合		
6　調整　㋐	調理部衛生推進調整・対応	・依頼内容を把握し調整 ・勤務補助実施
調整不可の場合		
7　調整	ホーム再調整・対応	・現状を受けて再調整
調整不可の場合		
セーフティネット調整・対応		

≪2019 年度方針≫
◆勤務依頼に関しては、施設長判断の元各部署と調整しながら実施する。
◆新任職員サポートは、対象ユニットのニーズを聞いて調整をはかり取組む。

６．専門部担当の行事

≪2018 年度方針≫
◇施設運営・各ユニット運営を行っていく上で、専門部として何ができるか年度を通して議論し、企画・立案を行う。
例）・七夕の笹準備　・施設の清掃　・行事の立案　など

専門部の担当行事の「こいのぼり」「七夕」のマネジメント・サポートを行った。鯉のぼりの掲示に関しては、昨年同様に各棟で準備、購入を行った。手作りの棟もあれば、既製品を購入する棟もあり、また飾るまでの日数にバラつきがあった。そのため、次年度については専門部から声掛けを行い、飾りつけにバラつきがないよう、飾りつけを行う期間なども提示して早めに促していきたい。

七夕行事では、飾りつけの直前に笹の準備を行なうことで、当日まで笹が枯れることなく飾ることができた。飾りつけでは、子ども達のユニークな願い、職員と子どもとで行なった色とりどりの飾りつけがみられ、工夫がみられた。笹の後片付けを各ユニットが行うことで、時期が過ぎても笹が残っているということはなかった。

筑波愛児園運動会（キラリンピック 2018）は、「子ども間、及び 『子ども－職員』間の関係強化」、「ユニット（集団）として相互に支えあう関係強化」、「順位を競うだけでなく、話合いの過程や応援の様子も評価し、チーム力の向上」を目的に企画・運営を行った。実施にかかる費用については一般社団法人 TU コモンズ　夢のアトリエの小澤さんからの寄附があり実施することができた。

計画については昨年度にそのアイデアをまとめ、予算の見通しがたったうえで、具体的な計画立案にあたった。キラリンピックの競技内容については、目的に沿ったかたちで検討し、また異年齢グループでも楽しめるようなものを具体化した。

また事前に話合いや練習を通し、キラリンピックの目的が達成できるような流れも検討した。各ユニットで練習を早期に実施できるようにと考えてはいたが、その準備や具体化が遅れ、十分な練習時間の確保はできなかったと反省する。

各ユニットで子どもの年齢構成が異なることから、そこが大きなハンデとならないよう

に、競技ルールやタイムスケジュールなどを十分に吟味し、各職員が子どもと十分に練習に臨めるように競技説明書も作成した。その他、当日の司会進行や会場予約、競技に使用する物品準備を行い、昼食や副賞商品の発注などは調理部と連携して行った。

さらに、競技だけで順位を決めるのではなく、事前の話合いや競技練習、また当日の応援の様子も評価することで、各ユニットのチームとしてのまとまりをさらに向上してもらうことを意図した。各ユニットでまとまりをつくるために、オリジナルのTシャツも作成した。各ユニットで話合いなどを通し、ユニットらしさが表現できたのではないかと考える。

子どもの参加は、日程を早めに伝え、学校行事がある場合の不参加は仕方がないと思われるが、それ以外の予定についてはキラリンピック参加を優先してもらった。行事参加については、夏季キャンプ参加と同等の扱いにし、部活動加算についても検討を行った。しかし、直前になって参加しない子どもがいることが明らかになった。そのため、競技ルールについて再調整し、人数が少なくなるチームには専門部から2名を配置した。

キラシンピックの運営や競技に関しては、タイムスケジュールは良かったのだが、全種目2回ずつだと運動量は多くハードだったという意見も聞かれた。また事前の練習などは、専門部からみた様子だと、あまり実施されなかった印象であった。

副賞のお肉は、「高級」とまではいかなかったのだが、お腹いっぱいになるぐらいの量は準備できたと思われる。

キラリンピック開催後、各職員・子ども達にはアンケート調査を行った。「また実施したいか？」という質問で「はい」と答えた人が64%、「いいえ」と答えた人が31%であった。この31%の声を専門部でも慎重に検討し、専門部の意図するところと現場（職員・子ども）のニーズが一致しているのか、より現場のニーズに沿った企画にするためには更に内容等を精査する必要があるのではとの結論に至った。開催費用もかかることから、次年度は実施せず、現場のニーズを図りながら今後の開催について検討を進めたいと考える。

≪2019年度方針≫

◆施設運営・各ユニット運営を行っていく上で、専門部として何ができるか年度を通して議論し、企画・立案を行う。

例）・七夕の笹準備　・施設の清掃　・行事の立案　など

家庭支援専門相談員

2018年度総括、及び2019年度方針

担当者名　　小松崎比呂子　斎藤 朋義

☆家庭支援専門相談員とは☆

虐待等の家庭環境上の理由により、入所している児童の保護者等に対し、児童相談所との密接な連携のもとに電話、面会等により児童の早期家庭復帰、里親委託等を可能とするための相談援助等の支援を行い、入所児童の早期の退所を促進し、親子関係の再構築等が図られることを目的とする。

また業務内容は以下の通りです。

(1) 対象児童の早期家庭復帰のための保護者等に対する相談援助業務
　①保護者等への施設内又は保護者宅訪問による相談援助
　②保護者等への家庭復帰後における相談援助
(2) 退所後の児童に対する継続的な相談援助
(3) 里親委託の推進のための業務
　①里親希望家庭への相談援助
　②里親への委託後における相談援助
　③里親の新規開拓
(4) 養子縁組の推進のための業務
　①養子縁組を希望する家庭への相談援助等
　②養子縁組の成立後における相談援助等
(5) 地域の子育て家庭に対する育児不安解消ための相談援助
(6) 要保護児童の状況の把握や情報交換を行うための協議会への参画
(7) 施設職員への指導・助言及びケース会議への出席
(8) 児童相談所等関係機関との連携・調整
(9) その他業務の遂行に必要な業務

目次

１．2018年度方針に対する全体総括

２．家庭療法事業について

３．親子宿泊棟の整備および利用について

４．専門的業務について

1)今年度家庭復帰児童

2)来年度家庭復帰を目指す児童

3)アフターケア

4)里親委託促進の為の業務

5)フレンドホーム事業

○登録家庭数及び交流児童数の状況

6)新養育ビジョンについて

５．会計

６．2019年度方針(案)

添付資料

○　ケースマネジメントフローチャート

2018年度方針（太字は重点方針）

- **家庭訪問の実施（家庭の状況把握）**
  - ✧ ABケースを中心におこなう。関係者会議などの前に親の状況把握や気持ちを聞く機会を設ける。家族との信頼関係構築および家族のアセスメントの強化を図る。

- **家族のアセスメント（入所時前後・半年後）**
  - ✧ ジェノグラム・エコマップの活用・前籍学校へ行き情報収集
    家庭訪問時の情報を活用して家族の課題やストレングス視点をユニット職員と共有化を図る
- **親子宿泊棟（ファミリールーム）の積極的活用**
  - ✧ 面会・外出・外泊についてのアセスメント
  - ✧ 親子交流そのものがイベントにならないように配慮する。
  - ✧ 日常の生活（学習、掃除、買い物、食事作りなど）が親子関係において取り戻すべきものであるので意識して取り入れられるようにする。
  - ✧ 面会時などにアルバム制作を親子で出来るように可能な範囲で取り組んでいく。
- **親支援の充実**
  - ✧ ペアレントトレーニングの実施
- 日曜の家（フレンドホーム）の開拓および積極的活用
  - ✧ 新たなFH宅開拓に向け里親会などに参加する
- 入退所時には親・福祉司との関係構築のために立ち会えるように勤務調整を図る
- 児童相談所や親との連絡調整をFSWが主におこない、ユニット・棟職員と情報を共有していく。（役割の明確化を図る）
- 系統立ったケースマネジメントへの取り組み
  - ✧ 児童自立支援計画書に基づいた支援と振り返りができるように、定期的なケース検討を活かし各ユニット・棟担当者と意見交換をする
  - ✧ 退所後支援計画とそれに基づいたアフターケアを実施する。
- 都や県で実施される情報交換会や研修には積極的に参加し、その取り組みや動向について情報を得るとともに、施設にフィードバックする
- 仕事の透明性を図るため活動予定をあげ、報告については口頭ではもちろんのこと養育日誌に丁寧に記載して各ユニット・棟と連携を図っていく。

⇓

家族療法事業の取り組みが子どもと親の関係を再構築出来るものになるように実施していく。

1．2018年度全体総括

今年度も昨年度同様に、家庭専門相談員（以下FSW）の業務を2名体制で遂行することとなった。2名体制でおこなう利点は情報共有や議論を丁寧にする中で、お互いの考えを整理し、客観的視点から議論や助言をすることが出来ることである。同じ業務をやっているからわかることは数多く存在する。またCWからの意見はとても大切なものであると捉えている。しかしCWは子ども寄りにFSWは親寄りになることが多いポジションである。ただどちらの意見が正しいかではなく、話し合いの中で、時には意見が違うことはあるが、お互いの意見を理解し、その上で最善の方法を探っていくことが仕事を協働する上で大切な考え方である。その考え方を大切に今後も業務をおこなっていく。

今年度、家族支援の中で交流後の振り返りをFSWとしておこなうケースが増えた。より親の考え、課題を把握するためには大事なことであるため来年度も積極的に関わっていく。ジェノグラム作成は定着している。家族を知る上ではとても分かりやすいものである。またケースワークとして問題発生時の初期初動の動きはより敏速さを意識して取り組んだ。その結果問題が大きくならない内に対処することが出来た。しかしアフターケアでは生活環境が変わってしまった子どももいた。退所後1年の生活がその後の生活を大きく左右することがわかった。だからこそ丁寧に退所後支援計画を元に支援の継続を図る。繋がりを切らさないことが子ども達や親の生活の安定に繋がることは実践から痛感している。

インケアからアフターケアへの移行、移行後の支援も業務となっている。課題を小さい内にキャッチ出来るようにする。またジェノグラム同様にアセスメントツールとしてエコマップがある。エコマップとは、家族の暮らしに影響を与えている機関や人物の関係性を明らかにするものである。これについてもジェノグラムが標準化されているので同水準にしていく。家族のアセスメントを「FSW家族アセスメント記録」の活用を通してどのケースにも基礎情報として提示出来るように取り組む。

家族療法事業については、より家族関係再構築や関係強化においてプラスに作用出来るように親子交流行事事業/親の役割講座事業/親子宿泊・面会事業/家庭訪問事業/アフターケア事業のさらなる具体化を図る。今年度は企画・運営が年度末になってしまったことや、企画内容に不備があったこと等があった。そのような反省を生かしてより具体的な実施計画と実践・評価をしていきたい。

親支援の中ではまず、①親を知ること②理解すること③信じることが土台にあって一歩がスタート出来るものであると考えている。③信じることは難しい。裏切られることもある。しかし親自身も自分の親を信じることが出来ない家庭環境で生きてきたケースがほとんどである。人との信頼関係を構築することが難しいケースが年々増えてきている。そのような親と付き合う時に、まずは信じてあげること。裏切られても信じ続けることで信頼関係が少しずつ構築出来るものである。しかし子どもをこの理論に当てはめることはなかなか出来ない。親を知る上で時と場所・発達状況によっては親と向き合うことも必要な時もある。そのことからも施設にいる間の生い立ちの整理を通して、親を知ることを実践することはFSWの大きな役目であると考え来年度は具体化を図り実施する。親の現状をありのまま知ることも必要である。施設にいる間は守られていてもいつかは施設を出る。その時にはじめて親のことを詳しく知るもしくは知らないまま家庭復帰や自立することがあるが、知らないまま退園させない取り組みをおこなう。今年度は親の養育スキルを上げる一貫としてのペアレント・トレーニング実施は出来なった。

また毎年感じることとして、親の評価は各棟・ユニットによって違いや、各職員によっても違いがある。各職員の違いはあってもそれをユニットや棟としてはある一定の親の評価ベースがなければいけないと考える。親に子どもの様子を伝える時の、親の状況を把握してどのように伝えるのか等も考えて取り組むことが求められる。職員によって子どもの評価はもちろんのこと親の評価も違うことがある。先ほど述べたように個々の評価は違っても親に伝える内容等はある程度一緒でなければ当事者である親が戸惑い混乱することになる。そのような部分をより丁寧にCWと家庭支援専門相談員が話合い子ども支援・親支援に取り組み、標準化を図る。

CWとの連携においては、FSWとして把握した情報はすぐにCWに伝えるように意識して取り組んだ。養育日誌への記載・報告書の作成をおこなってきた。そのことで情報の共有は一定の成果があったと評価している。今後も情報は敏速に伝えられるように取り組んでいく。

昨年度の総括でも記載したが、FSWは親側の気持ちを代弁する施設内では大きな役割がある専門職であると考えている。親のダメさをクローズアップさせるのではなく、親の可能性をどのように広げ、継続できるように支援するにはどのようにしたら良いかを議論してきた。子どもの支援が必要なように親も支援が必要であることをケースワークの柱としている。ただ親を治療対象とはしていない。薬物依存等医療的な支援が必要な親には治療が必要であると考える。しかし児童養護施設のFSWは医者ではない。医療につなげたりするためのコーディネートは出来ても治療は出来ないと考える。親子が同じ過ちを繰り返さないために、自分のしてしまったことの反省・子どもへの謝罪と同じことを繰り返さない気持ちや養育力の向上・地域支援の活用を出来るようにケースワークするのがFSWであると考える。

FSWの業務内容から基本的な業務の流れを提示する

時期	項目
入所前	・情報収集・共有 ・ジェノグラム・エコマップ作成（親子のアセスメントの実施→FSW家族アセスメント記録活用） ・入所児童事前面会同行 ・前籍学校訪問①（①②の時期のどちらかで）
入所日	・筑波愛児園の説明→書類関係（保護者の皆様へ・広報誌への掲載・予防接種同意書等）
入所中	・情報収集・共有 ・子どもとの面談（家族との関係性図式・エコマップ作成の実施等） ・家庭訪問実施 ・関係者会議の実施 （親子交流の具体化） ・親支援（ペアレントトレーニングの実施等） ・前籍学校訪問②（①②の時期のどちらかで） ・個別家庭外出の実施 ・フレンドホームの開拓および交流 ・ファミリールームの整備・管理
家庭復帰を目指す1年前～	・情報収集・共有 ・関係者会議の実施（1年間の進め方の確認） →子どもを含めた話し合い・意識付け

	・地域関係機関との話し合い ・新しく通う予定学校との話し合い ・個別家庭外出の実施 ・退所後支援計画策定
退所日	・退所後支援計画の説明
退所後	・情報収集・共有 ・家庭復帰後の家庭訪問実施（親・子どもにアンケート配布・回収） ・通っている学校との話し合い ・基本退所後子どもが集まる行事企画・運営

【2018年度重点児童】＊**太字児童**（家庭復帰目標児童）

＊網掛け児童（家族交流実施児童）

青空棟		**さくら棟**	
すいれんユニット	なのはなユニット	みつばユニット	ちゅーりっぷユニット
R・T（小5）・K・T（小2）	**R・M（小2）**	S・O（小2）	**K・M（年長）**
T・N（小4）	A・K（（小6）・S・K（小4）	S・I（中1）	H・O（年長）
太陽棟		つくし	
ジャスミンユニット	ひまわりユニット	Y・N（高1）・S・N（中3）	
K・M（小2）	Y・K（中3）	R・M（中3）	
R・K（中3）	Y・M（中1）	K・I（小6）	
	N・M（高2）		
	H・T（小5）		

＊新規入所児童についても重点児童とする＊

【2019年度重点児童】＊**太字児童**（家庭復帰目標児童）

＊網掛け児童（家族交流実施児童）

青空棟		**さくら棟**	
すいれんユニット	なのはなユニット	みつばユニット	ちゅーりっぷユニット
K・T（小3）・R・T（小5）	A・K（（中1）・S・K（小5）	S・O（小3）	R・O（年長）
K・S（小2）			K・M（年長）
			M・S（年長）
			H・O（小1）
太陽棟		つくし	
ジャスミンユニット	ひまわりユニット		
A・H（小3）	Y・K（高1）	R・M（高1）	
R・M（小5）	M・T（高3）	**K・I（中1）**	
		C・O（小1）	

＊新規入所児童についても重点児童とする＊

2018年度家庭復帰を目指したケース

ユニット名	氏名	結果
すいれん	K・T(小3)・R・T(小4)	母親の気持ちの変化により今年度の家庭復帰なし
なのはな・ちゅーりっぷ	R・M(小2)・K・M(年長)	家庭復帰予定

2019年度家庭復帰の可能性があるケース(3ケース)

ユニット名	氏名
すいれん	K・T(小3)・R・T(小5)
みつば	S・O(小3)
つくし	K・I(中1)

毎年、家庭復帰ケースについては、より丁寧にケースワークをおこなってきた。関係機関(児童相談所・地域支援機関等)との連携を重要視した。子どもの帰りたい気持ちがあるのか、そこには不安がないのかを把握しながら取り組んでいた。これは親側にも言えることである。双方が一緒に生活をしたいと言う気持ちと施設入所した理由への反省と改善が見込まれてこそ家庭復帰が現実味を帯びてくる。交流を図りながらお互いの良い所や課題が見えてくる。そのため交流が出来るのであれば出来るだけ交流を図った。自宅に帰った後の生活を考えると、自宅での交流はより家庭生活を子ども自身が感じることが出来るものとなる。また親自身も子どもとの生活をより想像出来る取り組みとなるため今後も交流の機会は積極的に持っていく。

全ケースに関わりを等しく持つことは難しい。ポイントになる話し合いに参加すること・ケースの進行管理をすること・各関係機関との調整役・親の生育歴や苦しさを把握すること・家族の情報収取をすること等ではないかと考える。CWと違った角度から親や家族を見る視点を忘れず今後も丁寧に取り組んでいきたい。

次年度は筑波愛児園としての親支援の流れを確立できるようにケースを通して作りあげていく。そのためには今までは、どちらかというとCWの考え方に沿う形でケースワークを実施してきたが、親と関わることが多い実情からも親視点でのアプローチも必要であると感じている。時には良い意味で意見をぶつけてより良い家族支援へとつなげていきたい。そのためには日頃からのコミュニケーションが大切であるため今まで通りCWと一緒に家族を支える存在になり得る様に連携を図って行く。

親支援同様に、子どもを理解することはとても大切なことである。そのためには日常生活の中で子どもを感じる取り組みが必要であるが、とても取り組みとしては薄かったと感じている。外周りと子どもとの接点をどのようにバランスを保っていけるかが毎年の大きな課題の一つである。

ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝｹｱからｲﾝｹｱに関する情報共有については、「入所時ﾁｪｯｸｼｰﾄ」の作成や「FSW家族アセスメント記録」の事前配布等は出来なかった。これについても家族支援をするうえで重要な基礎情報となるので、次年度は事前配布が出来るように取り組んでいく。

今年度の大きな取り組みの柱として

家庭訪問の実施（家庭の状況把握）

家庭訪問および関係者会議実施状況［過去2年との比較］

	家庭訪問	関係者会議	合計
2016年度	47	66	113
2017年度	39	84	123
2018年度	38	63	101

家庭訪問に行くことで生活環境の把握・子どもの育ちをより理解できるとても大切な機会となった。家庭訪問は家族をアセスメントする機会でもあり、より丁寧に実施していきたい。家庭訪問記録をより精度があがるように家族の現状把握はもちろんのこと、今後の希望などをより丁寧に聞き取り今後の方針につなげる取り組みとしたい。

1.フレンドホームの開拓および積極的活用・交流が中断しているFHについては生活ユニットと協働し調整を図る。

フレンドホームの開拓については、実習生の事前オリエンテーション時に広報活動をおこなった。しかしそのことがフレンドホーム登録数を伸ばす取り組みとは直結していない。筑波愛児園のホームページを見て興味関心を抱き連絡してくれる方が大半であった。

積極的活用について、フレンドホームは施設の養育機能の一つとして捉えてもらいたい。子ども支援の中ではプラスになることであると考えている。施設内だけで子どもを支えることも大切であるが、子どもにいろいろな経験をする環境を与えることも我々の仕事の1つではないかと考えている。子ども達それぞれは家庭生活の中で虐待等さまざまな経験をして入所している。フレンドホームを利用してすぐに理解出来なくても次の3点は大切なものとして考えている。①家庭にはいろいろな形があり、違って良いこと②子どもにとっての○○さんという個別な存在③子どもが生活していた家庭が家庭の全てではないことについて交流を通して体験し、いつか子ども達が家庭を持つ時にあんな家庭があった。僕や私を受け止めてくれた人の存在は子ども達が成長する上でとても大切なものであるためフレンドホームの活用を積極的に促していく。

【フレンドホーム制度の目的】

フレンドホーム制度では、児童養護施設又は乳児院に入所している児童に、夏休み、冬休み又は週末、祝日等の学校が休みの間の数日間、家庭での生活体験をさせることにより、当該児童の情緒の安定や社会性の発達を促し、児童の健全な育成に寄与することを目的としています。また、併せて、フレンドホーム制度の実施を通じて、養育家庭制度の普及に寄与することも目的としています。

2018年度　交流状況

児童名	交流状況	交流
S・H（小3）	本児自身は交流を望んでいるが、フレンドホーム宅に里子が来たため里子との生活を崩さない様に慎重に交流を図っている。	交流継続
J・I（高3） Y・I（高1）	不定期であるが交流を行っている。2人にとっては施設外の居場所となっており子どもとしては良い関係が継続出来ている。しかし	交流継続

	フレンドホームが思い描いている交流と本児達の交流中の様子に少なからず差があるためその差の理解を双方に促している状況	
Y・N（高3）	少ない交流日数ではあるが、小さい頃より交流があるため自然な交流が出来ている。	交流継続
K・Y（年中）	親子交流がないためフレンドホームとの繋がりを考えて交流を図っている。まだ正式な交流をおこなう全段階の顔合わせて数回おこない、順調な交流となっている。	交流開始

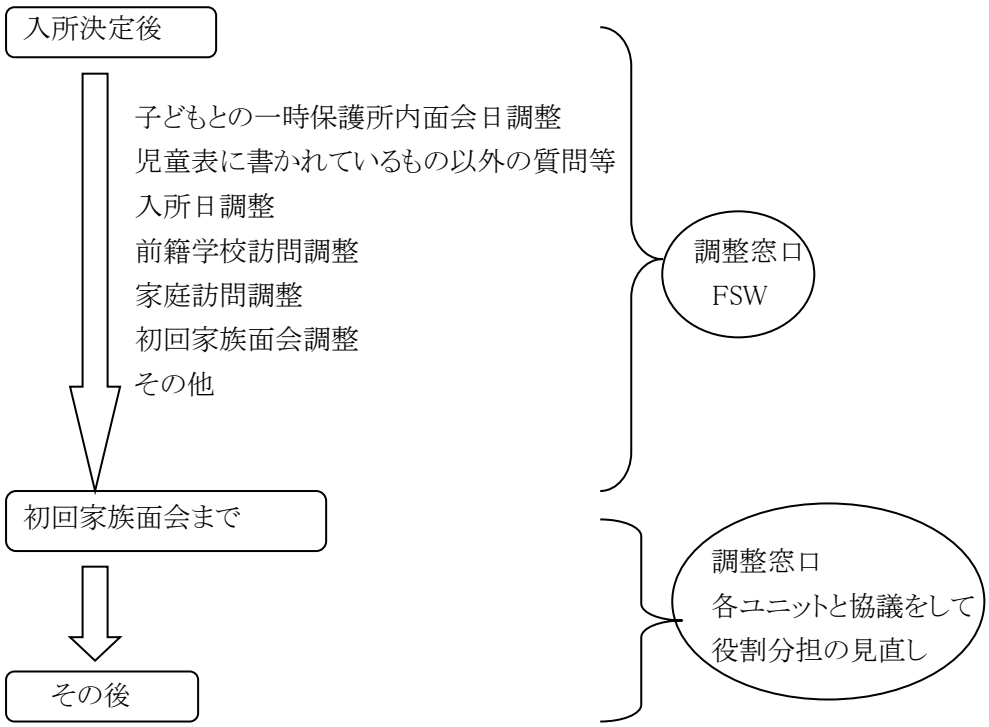
2.入退所時には親・福祉司との関係構築のために立ち会えるように勤務調整を図る

今年度、入所したケースは4ケース　内立ち会えたケースは3ケースであった。日程調整をCWがおこなっているため日程が合わないケースは参加することが出来なかった。

入所日の子ども達の不安感の軽減のために紙芝居形式で「筑波愛児園へようこそ」と題して一緒にがんばって行こうメッセージを伝えたりした。今後はさらなる取り組みの強化を図り、内容等さらなる精査が必要である。また家庭支援専門員の仕事・役割について説明する機会も設ける。

3.児童相談所や親との連絡調整をFSWが主におこない、ユニット・棟職員と情報を共有していく。

各ユニットによって調整方法は違っているのが現状であった。違う良さもあるが、対外的なことを考えると、筑波愛児園としてのFSWの入所時の関わり、関係機関との連絡調整、親との面会設定等について流れを以下に提案する。まず次年度は下記の流れで取り組みを新規入所児でおこなう。また総括時に現行のやり方と新しいやり方を精査して筑波愛児園としての役割分担を明確にしていく。（来年度、試験的に実施して総活時に取り組みの評価をして筑波愛児園としてのFSWの業務の標準化を提示する）



4.系統立ったｹｰｽﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄへの取り組み

児童自立支援計画書に基づいた支援と振り返りができるように、定期的なｹｰｽ検討を活かし各ﾕﾆｯﾄ・棟担当者と意見交換をする

退所後支援計画とそれに基づいたｱﾌﾀｰｹｱを実施する。

ケース検討会議を専門職とユニット職員と行う時間を設定して各ユニットとおこなってきた。児童自立支援計画書の共有など適切なｱｾｽﾒﾝﾄに基づく実践及びﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄをすることで、施設としてその機能を位置付け、取り組みを強化・共有していくことを大きな目的としたものである。そのなかで自立支援計画書が個々の子ども支援の根拠となるものであるため、より実践の記録となるように、ケース検討がおこなわれている。情報の共有化を図る意味でも自立支援計画書および成長の記録をどのように活用していけるかで施設としての処遇向上に結びつくことであるが、現在、子ども支援に有効に活用できていない実態がある。目的意識の共有、課題の抽出、多面的な評価になるようにしたい。

5.都や県で実施される情報交換会や研修には積極的に参加し、その取り組みや動向について情報を得るとともに、施設にﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸする

専門職制度委員会に所属して活動をおこなった。委員会活動で情報交換をすることで、他施設の取り組みなど参考にすることが出来た。また研修等もあり、自分自身のスキルアップにつなげることが出来、有意義な時間となった。次年度も積極的に参加していき専門職が施設の中で役に立つポジションになり得るように努力していく。

6.仕事の透明性を図るため活動予定をあげ、報告については口頭ではもちろんのこと養育日誌に丁寧に記載して各ユニット・棟と連携を図っていく。

業務の透明性を図るためにその日の動きは業務日誌への記載の徹底を図った。FSW内はもちろんCWとも情報共有を密におこなってきた。専門部内でも週1回の会議でわかっている動きについては専門職会議録への打ち込みを徹底した。家族との電話連絡・家庭訪問・関係者会議等の情報についてはユニット・棟職員に出来るだけ早い報告を心がけ、電話連絡はもちろんのこと、なるべく早い日誌への記載を意識して取り組んだことで一定の成果があった。

7.家庭訪問記録の改定（家族アセスメント記録）

家族のアセスメントをするにあたって今までは聞く項目など決まっていなかったものを精査してより家族を把握出来るシートに変更した。来年度1年間使用して評価する。

2019 年 FSW 家族アセスメント記録（例）

<table>
<tr><td colspan="2">2019 年　月　日（ ）</td><td>時間</td><td>記録　FSW</td></tr>
<tr><td colspan="2">話し合い参加者
【　　】</td><td colspan="2">住所</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">基本情報</td></tr>
<tr><td rowspan="2">生活歴
家族状況</td><td colspan="3">（生活歴）</td></tr>
<tr><td colspan="3">（家族状況：ジェノグラム表記）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">居住環境
社会との関わり</td><td colspan="3">（住環境）間取り図式化</td></tr>
<tr><td colspan="3">（社会との関わり）
友達関係</td></tr>
<tr><td>コミュニケーション能力
特別な状況</td><td colspan="2">（コミュニケーション能力）</td><td>（特別な状況）</td></tr>
<tr><td>仕事・収入</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>病歴
医療の状況
（医療機関・受診科目・頻度・服薬状況等）</td><td colspan="2">病歴</td><td colspan="2">医療の状況（服薬等）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">支援の状況</td><td></td><td>提供機関・提供者</td><td>支援内容</td><td>頻度</td></tr>
<tr><td>公的支援</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>その他の
支援</td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

家族の要望		
子どもが施設に入所していることの主訴（事実）と両親の理解	主訴（事実）	両親の理解
社会関係図	本人と関わりを持つ機関・人物等（役割）エコマップ	
両親（自分）の課題	自己評価をどのようにしているか	
子どもへの気持ち		
今後のスケジュール		
決定事項		
備考		

8.各ユニットとの支援目標共有

各ケースの支援目標共有が年度当初出来ていない。出来ない原因として支援目標が年度当初に間に合うように作成出来ていない点がある。来年度に向けて各ケースの支援目標（家族の部分）の立案を元に年度はじめにCWと家族について支援方針を立てていく。

9.退所前ケース検討および退所後支援計画書

退所後のアフターケアの重要性を意識しながら、退所後支援計画を作成してアフターケアに取り組んだ。退所先学校や家庭訪問・関係機関との連携を通して、課題はあるものの再入所等重篤になるケースとはならなかった。しかし生活場所が変わった子どももおり、より丁寧なアセスメントをして家庭復帰を目指さなければならないことを痛感した。今後はより慎重さと的確なアセスメントを実施し対応していく。退所予定児童については、退所日までに退所後支援計画書を作成して、両親と子ども本人に退所後のアフターケアについて説明をおこない理解をしてもらえるように取り組んでだ。来年度も継続して実施する。

今年度は「退所前ケース検討」を専門部と該当ユニットとで検討することになった。11月と2月の2回を予定し進めてきたが、11月の1回のみの実施となった。11月は主に退所までの支援方法について、2月は退所後の支援について検討する場としていたが日程の調整不足のため実施する事が出来なかった。来年度は実施方法を含め自立支援コーディネーターと協議をおこなう。

2018年度について、以下の児童について書類を作成する。

ユニット名	氏名	作成期日
なのはな・ちゅーりっぷ	R・M(小2)　K・M(5歳)	退所日の1週間前まで

2.家族療法事業について

はじめに

「家族療法事業」とは、児童福祉施設（児童家庭局所管施設）における施設機能強化推進 費に基づき児童養護施設、乳児院、情緒障害児短期治療施設及び児童自立支援施設を 対象に実施する事業を指す。具体的には、閉じこもり対策、虐待予防・再発防止（虐待相 談)、親子関係の再構築を目指した取り組みである。

事業費の限度額

実施延家族数が年間 125 家族以上	年額	2,010,000 円
実施延家族数が年間 125 家族未満	年額	1,005,000 円

ただし年度内における実施延家族数が年間75家族数を下回る場合はこの経費の支弁の対象としない。

目　的

施設が都外にあり、児童が保護者と距離的に遠く離れて入所しなければならないことから児童と保護者の関係が疎遠になりやすく、児童も見捨てられ感や孤立感を抱きやすくなるため、施設生活を主体的に受け入れにくい実情がある。また保護者も面会や帰省についても、経済的に負担も交通費も含めて多くかかることから親子関係の再構築への努力ができにくく、十分とはいえない状況である。

施設入所の原因が、児童ではなく保護者の側にあることから、保護者への働きかけを抜きにしては児童の安心感や信頼感を培うことは困難である。入所後の支援としての再統合や親子関係の修復は両者が養育関係を通して段階的に課題をクリアし再統合（家庭復帰）へと結びつくものである

家族療法事業の内容

入所児童と保護者の関係性の構築及び保護者の抱える課題（養育・相談）への援助

①親子宿泊事業

面会や宿泊をとおして家庭生活の再現し養育関係の構築を図る

②家庭訪問事業

家庭状況を把握し面会や宿泊に結びつける

③保護者とのレクリェーション事業

都内の遊園地等で保護者や親戚等の関係者との交流を図る

④保護者の役割講座の開催

思春期の行動特性と保護者の役割（小6の卒業式後・中3の卒業式後・家庭引き取り時）

今年度の活動について

今年度も125家族以上の取り組みを行った。主な取り組みとしては、「親子宿泊事業」「家庭訪問事業」である。

親子宿泊事業では、昨年度より継続しての家族13組が定期的に利用した。週末や長期休みの利用であったため居室の調整を要した。交流状況を確認し必要に応じて助言も行ってきた。課題を改善することで内泊から外泊に移行した家族が2件あった。

外泊に向けての家庭訪問、家族の生活状況把握のための家庭訪問、アフターケアと目的別に実施してきた。生活保護受給者や低所得者家族も多く、家族交流を積極的に進めて行きたいが保護者から面会時の交通費が負担であるとの話しが挙がっており問題は深刻である。面会時の交通費負担を軽減するためその確認資料として児童相談所から児童入所施設徴収金額の確認をおこなうこと。また東京都及び茨城県の各担当部署に承認をもらい実施していく。

今年度も「親子交流会」は個別ではなく集団での活動を予定している。交流中に他の家族の関わり方を見ることで、養育についての気づきなど得られるものがあるのではないかと思い集団での活動を企画した。また親子が一緒に取り組めるプログラムも予定している。実施後に児童、保護者から意見を聞き今後に活かしていく。実施時期が年度末になってしまったことや参加家庭の選出など説明が不十分の点については反省し改善策を考えいかなければならない。

3. 親子宿泊棟の整備および利用について

親子宿泊棟（ファミリールーム）の整備について、室外の環境整備として季節ごとに植物を植え替え華やかな雰囲気を作ってきた。夏場は雨が少なく夕方に水やりを行った。台風などの悪天候でプランターが風で煽られたことや支柱が倒れることがあり都度補強や片付けるなどの対応をした。設置の強化など考えていく必要がある。

室内の環境の整備について、玩具などが乱雑になっていたこともあり収納ケースを用意することでひとつにまとめることが出来た。今後は使いやすさを目指して収納を考えていく。利用後に室内清掃をすることで害虫発生もなく利用する方からの苦情もなかった。

衛生面を考慮し調味料は使用時に必要な物を確認して渡すようにしていたが、すぐに用意できないなどの課題もみられた。衛生的で効率よく準備できる方法を見出していく。

親子宿泊棟（ファミリールーム）の利用について、保護者には利用後きちんと片づけするよう伝えているが、手助けを要する家庭もいる。共有の場所であることや整理整頓された環境で生活することでの心地よさを感じ取って貰えるよう保護者に伝達し支援していく。

親子交流について、園内での交流に飽きてしまい生活棟に戻ってしまう児童の姿も見られたため、交流が退屈しないよう環境面を整備した。(テレビゲームやホットプレートを用意)親子、きょうだいが一緒に活動することで会話も増え生活棟に戻る時間も減少した。親子での交流を深めていくため次年度は、貸し出し簿を活用しながら利用者に DVD やゲーム機を貸し出していきたい。置き場所として全体倉庫内に整備する。 貸し出しに関しての資料を添付します。

貸出日時	DVD／本の名前	貸出者/利用者	返却日時
例　2月3日	ファインティング・二モ	職員名/ 児童名	2月4日
		/	

※貸し出しについて、交流終了後に返却する。宿泊の場合は最長 1 泊 2 日とする。

「交流ノート」について、交流を振りかえるためには必要なツールと考えているが定着までには至っていない。交流状況が分かるものであり、保護者が記載しやすいものでなければならない。どの家庭にも対応できるよう書式の見直しを図っていく。

ファミリールームを利用する家族から、食事に関しての問い合わせがありマニュアルの見直しを図った。食事づくりで使用する食材や使用できる金額をわかりやすく表記した。使用しながら改善を図っていく。以下に資料を添付します。

○ファミリールーム使用時の食事について○

◇食事作りの場合

朝食	昼食	夕食
200 円	300 円	500 円

・ひとり分の金額です。

・児童分も含みます。

・レシートを預かり予算内で返金します。予算に満たない場合はその金額を返金します。

※レシートがないと返金できません。

・食材のみ対象です。惣菜、菓子パン、菓子類、インスタント麺など調理済みのものは対象外。

※購入して良いか判断がつかない物がありましたら職員にきいてください。

【対象内】



【対象外】



◇調理に食事を依頼する場合

朝食	昼食	夕食
200 円	400 円	400 円

・ひとり分の金額になります

・児童分は含みません

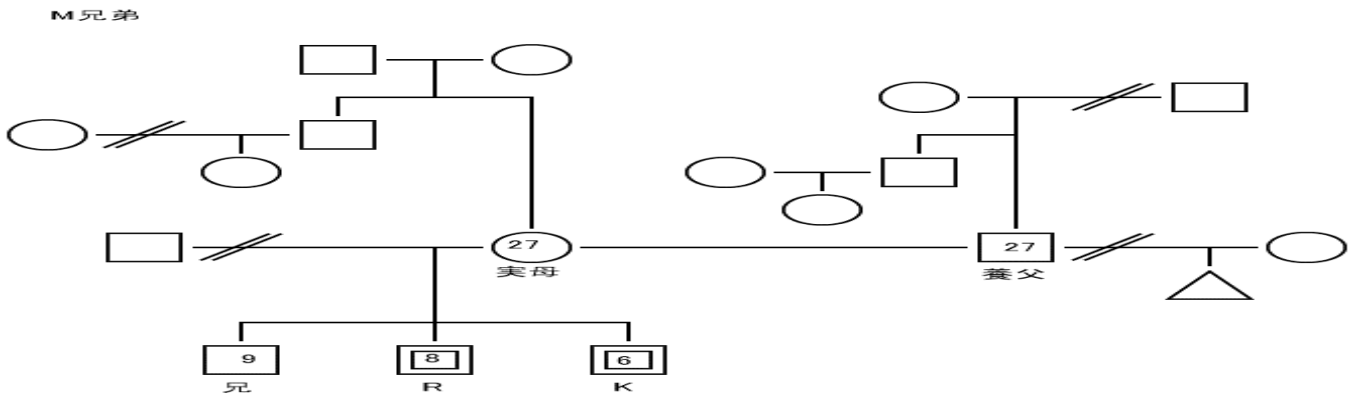
・現金での徴収となります

今年度ファミリールーム利用状況【過去との比較】

	家族数(人数)					利用日数				
	2014	2015	2016	2017	2018	2014	2015	2016	2017	2018
面会交流	4	15	11	15	12	24	68	75	76	78
宿泊交流	9	13	10	8	6	32	77	67	76	66
合計	13	28	21	23	18	56	145	142	152	144

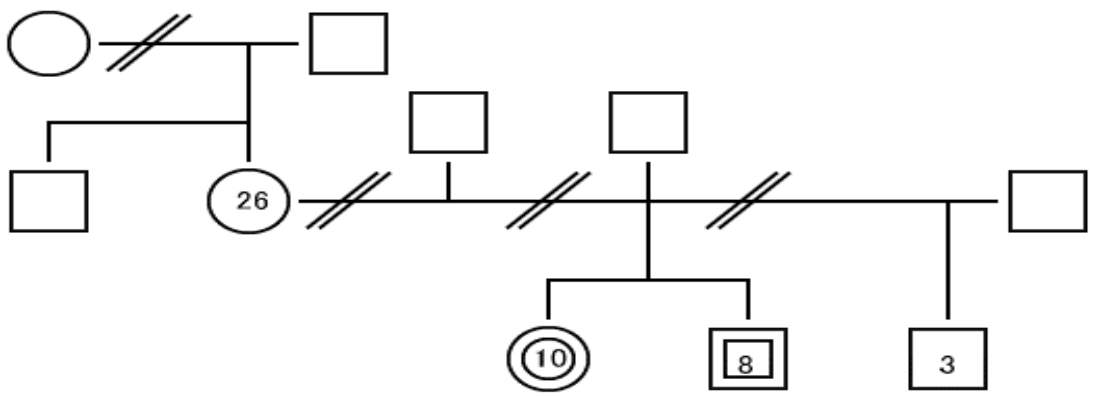
4．専門的業務

(1)今年度家庭復帰児童

R・M（小 2 男児）年齢超過での措置変更　2017 年 3 月 30 日　入所 K・M（年長）　　年齢超過での措置変更　2017 年 3 月 30 日　入所	
（ジェノグラム）  	
入所理由	○入所理由（主訴：養護・被虐） 実父から母親に対しての DV があり警察に保護を求めた。 2013 年 6 月 17 日　母子相談センターに一時保護 母親の精神的不安定や本児らへの暴言等不適切な養育態度及び養育困難の訴えがあり一時保護 2013 年 8 月 21 日　乳児院入所（K・M） 2014 年 4 月 8 日父親とは離婚 母親の不適切な養育への指導が必要なことから児童養護施設入所 年齢超過での措置変更
経緯 入所～現在	本児らの兄は先に家庭復帰し母親と同居。入所後直ぐに母親に彼氏の存在が浮上し身元調査などの必要性が出てきた。2017 年 6 月 22 日母親の彼氏と面談を実施した。2017 年 7 月 18 日母親が再婚 2017 年 8 月 10 日母親の再婚相手との交流が開始した。2017 年 9 月 1 日養子となる。2017 年 12 月 9 日継父方祖母と面会した。外出交流、園内泊を経て現在は月 3 回週末を利用して自宅への外泊交流を実施した。2018 年夏休みの家庭復帰を目指し交流を重ねてきた。交流状況が良好であることを確認し、春休み（7 日間）GW（5 日間）長期外泊を実施した。両親間での意見の食い違いで口論となりその状況を子ども達も目撃していたが両親から子ども達に謝罪したことで解決した。前年度に引き続き学校行事や幼稚園行事には可能な限り参加した。子ども達それぞれが夏休み前に家庭復帰の説明を福祉司より受けた。2018 年 7 月 21 日より家庭復帰も兼ねての外泊となったが、2018 年 7 月 22 日　外出中の車内で両親が口論となり父親が苛立ちからカーナビを破損した。父親に対して母親が恐怖を感じたことで子ども達も施設に戻ることになった。両親、子ども達から聞き取りを実施し児相内での協議も経て夏休み中の家庭復帰は白紙になった。両親で話し合いを重ね子ども達へ謝罪をした。2018 年 9 月より交流が再開し外出、外泊と進めている。冬休みは 14 日間の長期外泊を行なった。年度末に向けての家庭復帰を目指している。

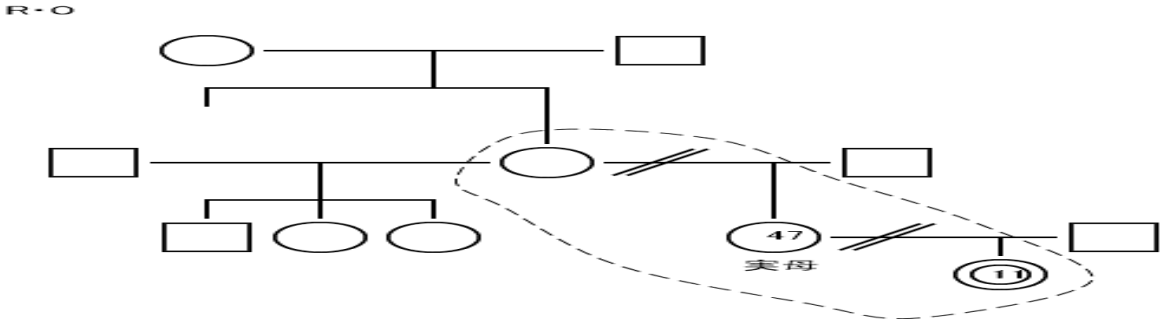
課題	○課題 ・母親の精神面での不安や安定した養育 ・父親の感情のコントロール ・夫婦間の意見の食い違いからのトラブル（夫婦喧嘩）
取り組み	年度初めに夏休みの家庭復帰で進めて行くことを確認した。家族間の良好な関係性を築くため、月2回～3回に交流を増やしてきた。また長期休みの際は祖父母などの協力も得ながら長期外泊を実施してきた。帰園後の子ども達の様子からも、子どもと母親、子どもと父親、兄弟間の関係性が構築されつつあった。しかしGW、夏休みの外泊中に外出先で両親間での意見の食い違いから子どもがいる場面で口論していたことが発覚した。両親共に課題があり家庭復帰に向けては改善が必要となった。日頃から話し合う場面を十分に設けていくことや決定事項については曖昧にせず確認することを意識して取り組んでいくよう伝えた。外泊後には両親と振り返りの時間を設け、子どもとの関わり、両親間での話し合い、困ったことなど外泊中の状況について両親から話しを聞き助言してきた。家庭復帰が白紙になったこともあり子ども達の様子については注意深く見ていくことにした。幼稚園行事や学校行事に積極的な参加を促してきた。生活担当職員には子ども達から交流の様子を確認してもらい気になる関わりについては迅速に保護者に確認するなどの対応をとった。合わせて児相福祉司にも報告し情報共有を図った。家庭復帰に向けて交流を重ね家族の関係性を深めていけるよう支援していく。
今後の対応	・各関係機関との調整 ・交流状況を確認し些細な変化に気づき迅速に対応していく
資源活用	・地域管轄の児童相談所、市役所（子ども課）、学校・放課後クラブ

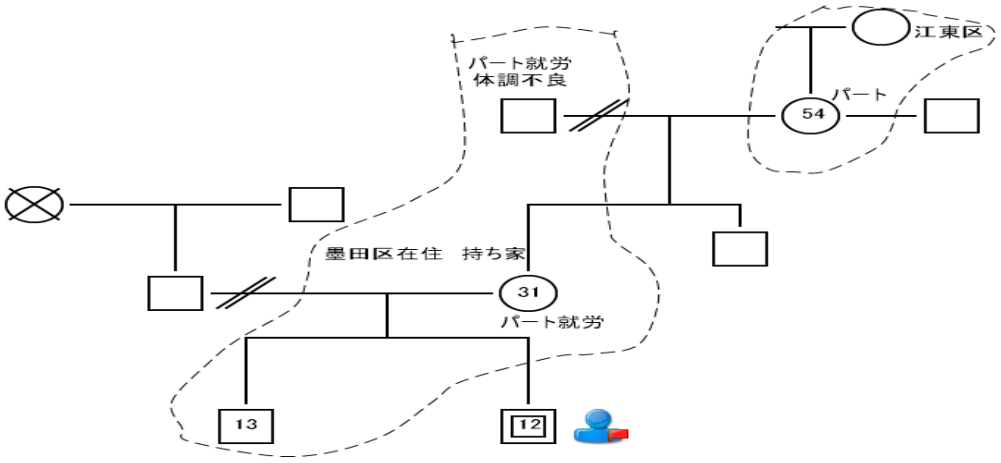
(2) 来年度家庭復帰を目指す児童

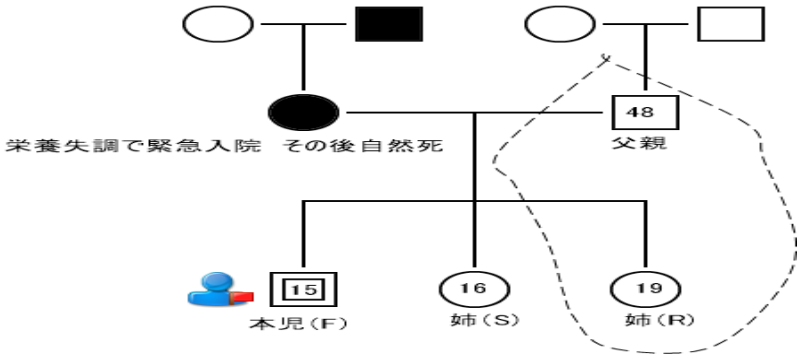
R・T（小4女児）ネグレクト　2016年11月24日　入所 **K・T（小2男児）ネグレクト　2016年11月24日　入所**
（ジェノグラム） Tきょうだい 

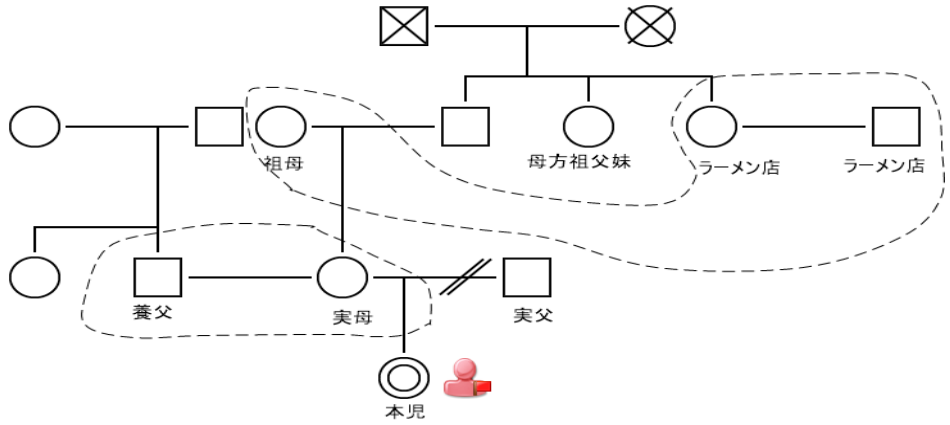
入所理由	母親はお金を稼ぐために子ども達を放置し働いていた。生後 3 ヶ月の異父弟の面倒を子ども達にさせていた。母からの暴力も受けており指導を行うが、反省も見られず養育の意思も希薄。祖父は養育の意思を示すが夜間放置の事実を把握しておらず夜間放置が繰り返される可能性が高いことから保護。
経緯 **入所～現在**	2017 年 1 月 4 日に母親、祖父と入所後初めての面会を実施した。その後月 1 回から 2 回の交流を重ね、定期的に実施し関係性も良好のため、2017 年 7 月 22 日から外泊交流、2017 年 11 月 11 日から園内泊と進めてきた。ステップアップするごとに関係者会議を行い次の目標を提示してきた。学校行事にも積極的に参加している。2018 年 1 月 1 日より異父弟との交流も始まった。2017 年 4 月から母親は都内小学校で給食業務を行っている。祖父は観光バスの運転手をしており全国各地に仕事で出かけている。異父弟は都内乳児院に入所中である。交流状況も良好なことから長期休暇のみ外泊が許可され、2018 年 5 月に外泊を開始した。2018 年 6 月の関係者会議にて、母親より給食センターの仕事を自己退職し内職をしているとの報告とネイリストの資格取得のため家庭復帰を 1 年先送りにして欲しいとの要望があった。2018 年 9 月母親より男性と交際しているとの話があったが 2018 年 10 月交際を解消している。母親の体調不良や祖父の仕事の都合で交流日程が変更になったことはあったが内泊・外泊ともに順調に交流を重ねている。
課題	○課題 ・母親の生活環境と就労 ・祖父の勤務体制 ・母親、祖父との情報共有
取り組み	外泊交流を開始するにあたり福祉司から母親、祖父に説明を行った。母親、祖父ともに理解力に欠ける面があり分かりやすく伝達することで納得をした。母親の生活環境の変化に伴い話し合いを実施し、母親の意向を組みながら今後の交流と子ども達への説明について確認をした。母親には環境や気持ちの変化がみられた際には職員や福祉司に隠さず伝えるよう都度話をしてきた。母親からは異性との交流やネイリストの資格取得についての報告があり状況を把握することができた。家族から子ども達への思いや生活状況、就労について確認をしていきながら、家庭復帰に向けてスケジュールを立てていく。児相、保護者とは継続して情報共有を図っていく。
今後の **対応**	・母親の生活環境や就労状況の確認をしていく ・養育状況を確認しながら適切な助言をしてく ・次年度の家庭復帰を目標に各関係機関と調整を図る
資源活用	・担当児相、生活ユニット

(3) アフターケア

R・O(小 5 女児) 2014 年 12 月 5 日 入所 在籍期間 3 年 3 ケ月	
(ジェノグラム)  	
入所理由	○入所理由(主訴:養護・養育困難) 2014 年 10 月 24 日 母親が窃盗で逮捕。2012 年 2 月、平成 2013 年 5 月にも窃盗を犯していいため実刑となった。母子家庭で本児を養育する親類がいないため保護となる。
援助目標	・家庭生活や学校生活に慣れ、安定した生活を送れることを目標に家庭訪問を実施し状況把握に努めていく ・各関係機関と連携を図り側面から支援していく
本人意向	・家庭復帰を希望
援助方法	・家庭訪問の実施 7 月実施予定 ※以後は状況に応じて訪問する →登下校時の対応確認と学校の生活状況確認 →定期通院時の対応確認、服薬管理の確認 →親族の支援体制について ・各関係機関との情報共有 ・納涼祭の案内をする
取り組み状況	・7 月に家庭訪問実施 本児母親と面会し生活状況、学校生活について確認した。 ・9 月に本児が通う小学校の運動会を拝見 本児、母親から生活状況確認した。 ・納涼祭の案内、誕生日のカード、年賀状を郵送 ・長期休み後に様子伺いの連絡を小学校、児童相談所、市役所(子ども課)入れた ・10 月関係者会議を実施した。
他機関連携	・管轄児童相談所、市役所(子ども課)、小学校

S･A(中1男子) 2012 年 11 月 30 日入所 在籍期間 5 年 3 ヶ月	
(ジェノグラム)  	
入所理由	最初の通報は、本児がまだ 1 歳半過ぎくらいに親戚から兄弟間差別が激しいと親族から区の方に連絡があり、保育園入園を勧め、関係機関で見守ってきた。その後も本児の身長、体重の増加がないため、入院して成長ホルモンが分泌されているかを精査したが、養育環境による可能性があると言われた。一時母子関係がよくなったことで終了しているが、再度の虐待受理。以前から痣ややけどの痕があり保護者に指導してきたが、新たに痣が見つかった。顔にお線香をつけられたと思われる傷や、青あざなどが認められているため入所となった。
援助目標	･定期的な家庭訪問の実施(状況把握等) ･関係機関との情報共有体制強化
本人意向	家庭復帰を望んでいる
援助方法	･定期的な家庭訪問の実施(下記は実施予定)4 月 ･家庭訪問 7 月･10 月･1 月 ･学校との連絡協議会の実施 4 月･7 月･10 月
取り組み状況	4/24 塾同行 6/8 病院引率 4/25 6/1 9/26 寺島中学校にてケース会議 5/19 体育祭 4/26 子ども食堂引率 5/31 8/15 11/10 1/30 家庭訪問 学校担任に 1 か月に 1 回電話連絡 本児との電話連絡
他機関連携	･寺島中学校･墨田区子育て総合支援センター･こども食堂･江東児童相談所･家庭教師トライグループ

F・I(高1　男子)　2016 年 1 月 21 日入所　在籍期間　2 年1ヶ月	
(ジェノグラム)  	
入所理由	教育相談 H 氏へ父親から相談あり、不登校の続く本児に対し父は養育ができないことから殴るけるの暴力を振るってしまうという。2015 年 5 月には限界感じ本児とともに海に行き殺してしまおうと考えた。(実際に行ったが未遂に終わる)養育はできないので施設に預けたい。
援助目標	・学校生活を軌道に乗せ、生活の基盤を安定させることを目標に、家庭訪問や学期ごとの学校と連携 ・協議会を実施して状況把握をしながら側面からサポートする。
本人意向	家庭復帰を望んでいる
援助方法	・家庭訪問の実施(下記は実施予定)7 月・1 月 ・学期ごとの学校との連絡協議会の実施　4 月・9 月 ・納涼祭の案内・誕生日・正月の挨拶をおこなう。
取り組み状況	10/231 淵江高校担任との話し合い 父親に状況確認の電話
他機関連携	・淵江高等学校　東京都足立区東保木間 2 丁目 10－1

M・F（小4女子） 2012 年 1 月 27 日入所 在籍期間 6 年1ヶ月）	
（ジェノグラム）  	
入所理由	母は知り合いの男性から付きまとわれて自宅まで押しかけられる状態となり、警察が入って逃げる形で女性相談センター入所。母は自分自身のことで一杯いっぱいであり、自分の生活をまず立て直さなければいけないと考えている。本児を施設に預けたい。 2008 年にも同様のことあり。女性相談センターから母子生活支援施設（2 年間）に入り、アパート転宅して半年後に今回の件。繰り返す可能性あり。母は愛の手帳 4 度。危険回避ができずに危険な男性に近づいてしまう。今回の男性は覚せい剤使用の疑いもある。養育能力低い。女性相談センターでも養育の不十分さが見えている。食事作れない、入浴介助不十分、掃除できず。
援助目標	・定期的な関係者会議の実施（状況把握等） ・学校との連絡協議会の実施 ・納涼祭等の行事の案内
本人意向	・家庭復帰を望んでいる
援助方法	・定期的な家庭訪問の実施（下記は実施予定）5 月・7月・10 月 ・行事の案内 7 月 ・学校との連絡協議会 4 月・10 月
取り組み状況	母親との話し合い 8/21 福田家家庭訪問 9/3 学校への電話連絡 祖母宅家庭訪問 1/16 2/13 母親/福田さんと電話連絡による状況確認/相談
他機関連携	八千代市子ども部子ども福祉課子ども相談センター 足立区子ども家庭支援センター 八千代市立南高津小学校

(4)里親委託促進の為の業務

特定の大人との継続した安心安全な関係や、適度な依存など構築していくことを考えると、養育家庭への委託は必要と考える。該当ケースがあった時は担当ホーム・児相と方針を協議して子どもの未来にとって最善の道筋を立てていきたい。

次年度以降も、支援方針に基づき各ユニット・棟との調整を図る。
また都内の里親とのつながりも模索する必要があると考えている。茨城の里親会だけでなく都内の里親会に参加して取り組みや状況確認をしていきたい。

(5)ﾌﾚﾝﾄﾞﾎｰﾑ事業

子ども達にとって、特定の人との関係構築・気持ちを受け止めてもらえる体験・家族との問題で入所してきた子どもにとっていろいろな家族の形を知る機会はとても大切である。また個別の受け止めをしてもらえる場としも、家族の形はそれぞれでどの形も家族であり、どの形もあって良いことを実体験する場となる。積極的にフレンドホームを活用していくために各ユニットより候補児童やFSWとして経験させたい子をあげ積極的利用を図っていきたい。フレンドホームは施設生活とは違った環境を体験させてもらう一つの方策として子ども支援の一徐となっている。

フレンドホームについては子どもの年齢があがることで交流の難しさ・各家庭の状況の変化などで交流が途絶えるケースがあった。フレンドホーム側の問題というよりは子どもの生活環境の変化が大きい。今年度実施出来なかったが年1回のフレンドホーム継続の確認などより丁寧に対応していきたい。今年度新規フレンドホーム家庭　4件であった。また新規フレンドホーム利用児童は1名となった。

◎フレンドホーム交流実績報告書作成までの流れ

以前は1か月に1回交流実績を東京都に報告していたが、年度末に1年間の交流実績を提出すること。また年度当初に交流見込みを予測して予算立てをおこなったものと実績を照らし合わせ予算の余剰分は返金の手続きを事務に協力を得て実施している。

期　日	内　　容
年度初め	年間の交流見込みを作成して予算立て
年度末	年間の交流実績から予算執行額を算出 フレンドホームへの交流実績払い(銀行振込み)

○登録家庭数及び交流児童数の状況

	登録家庭数	交流家庭数	交流児童数
2019年1月	31	5	6

(　)内は不調及び中断している

(6)新養育ビジョンについて

新養育ビジョンでは入所後 3 年を目標に家庭再統合を目指すと記載されている。このことから分かるように改めて施設は通過点であることである認識を持つ。ただ家庭支援において家庭復帰を目指すにあたり確かに期間的目途は必要であると感じると共に、危険性も感じる。3 年が強調されることで中身の支援の抜けがないようにしなければならない。筑波愛児園が移転してから 4 年間の入所～退所年数は 3 年から 5 年未満が多く、理由としては 進学の時期に合わせての退所や家庭環境の改善となっている。家族の再構築を優先に支援していく。

2014 年度～2017 年度　退所一覧　　(移転後から現在)

氏名	退所学年	入所期間	退所理由	退所年度
Y・S	中 3	13 年 7 ヶ月	家庭環境改善	2014 年度（4 名）
K・T	中 3	4 年 4 ヶ月	家庭環境改善	
K・U	中 3	11 ヶ月	家庭環境改善	
K・T	中 3	1 年 7 ヶ月	家庭環境改善	
M・K	中 1	4 年 8 ヶ月	家庭復帰	2015 年度（6 名）
H・K	小 6	6 年 1 ヶ月	家庭復帰	
H・ I	小 5	8 年 7 ヶ月	家庭環境改善	
N・I	中 1	8 年 7 ヶ月	家庭環境改善	
Y・K	中 2	7 年 7 ヶ月	施設不調での家庭復帰	
N・K	中 3	6 年 0 ヶ月	家庭環境改善	
T・I	高 3	3 年 1 ヶ月	家庭復帰（高校中退）	2016 年度（6 名）
R・I	高 3	3 年 1 ヶ月	家庭復帰（高校中退）	
K・H	高 1	3 年 3 ヶ月	家庭復帰（高校中退）	
A・O	中 3	3 年 0 ヶ月	家庭復帰	
K・M	中 3	4 年 3 ヶ月	家庭環境改善	
R・T	中 3	1 年 9 ヶ月	家庭環境改善	
R・Y	年長	2 年 6 ヶ月	家庭環境改善	2017 年度（6 名）
A・B	高 2	1 年 9 ヶ月	家庭復帰（高校中退）	
H・I	中 3	2 年 2 ヶ月	家庭環境改善	
R・O	小 4	3 年 3 ヶ月	家庭環境改善	
S・A	小 6	5 年 4 ヶ月	家庭環境改善	
M・Y	高 1	3 年 11 ヶ月	家庭復帰（高校中退）	

○退所人数

2014 年度～2017 年度　　22 名

○在園期間

入所～退所までの期間	人数
1 年未満	1 名
1 年から 3 年未満	6 名
3 年から 5 年未満	8 名
5 年から 10 年未満	6 名
10 年以上	1 名

○退所学年

小学 6 年生　　2 名

中学 3 年生　　10 名

その他の学年　　10 名

入所後 3 年計画（案）

期間	内容
入所後 1 年以内	・親状況確認（児童相談所での面会を複数回実施） ・通っていた学校訪問（子ども・親の状況確認） ・地域関係機関との話合いの実施→アセスメントの実施 ・親が取り組むべき支援の確認と実行 ・親が子どもへの謝罪の場（双方の状況によって） ・児童相談所と今後の方針の確認（交流等について）
1年～2 年	・交流の評価・課題抽出 ・親が取り組むべき支援の評価・課題抽出 ・再アセスメントの実施（課題とストレングスの見極め）→家庭再統の可能性を議論
2 年～3 年	・交流の評価・課台抽出 ・親が取り組むべき支援の評価・課題抽出 ・再アセスメントの実施（課題とストレングスの見極め）→家庭再統の可能性を議論

家庭再統合に向けての最低限クリア―する条件として

・親が入所理由を納得している
・親に反省がある（二度と同じ過ちを繰り返さない意思）
・子どもに謝罪をおこなっている。
・親が反省を元に一緒に暮らしたい気持ちがある
・子どもが親と一緒に暮らしたい気持ちがある
・親が子どもの不安軽減に取り組んでいる
　→プログラムへの参加・病院への通院・カウンセリング等
・地域支援機関とのつながりを拒まない
・家庭復帰後、施設職員の家庭訪問の受け入れへの承諾
・家庭復帰後、転校先/入学先学校と施設職員のつながりをもつ事への承認
・親が頼りにする親族等の考えを聞く機会を作る

5. 会計

2019 年度　家族療法事業活動予算

項目	内容	金額
給食費	FR での食費補助、親子交流会、卒園生との交流会、調味料	210,000 円
被服費	シーツ、毛布　など	15,000 円
教養娯楽費	親子交流会、卒園生との交流会、FR 環境整備、保護者向けの勉強会	740,000 円
日用品	洗剤、シャンプー、リンス、ボディーソープ、ごみ袋　など	20,000 円
消耗器具備品	冷蔵庫、調理器具、食器、踏み台、浴室カーテン、収納ケース　など	70,000 円
保健衛生	医薬品、体温計、爪きり、めんぼう　など	15,000 円
旅費交通費	交流時の交通費	600,000 円
合計		1670,000 円

6. 2019 年度方針

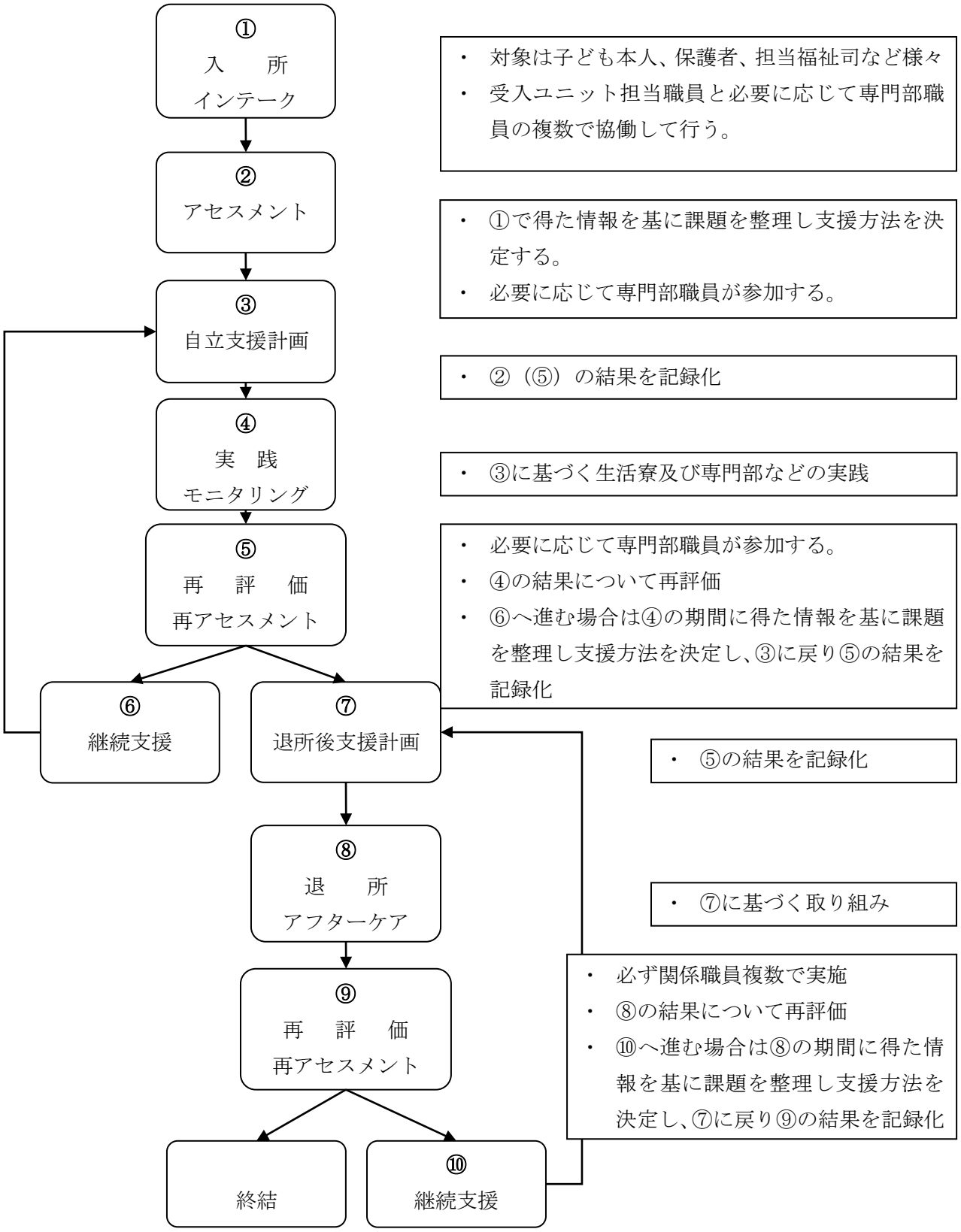
2019年度方針（太字は重点方針）

- **家庭訪問の実施（家庭の状況把握）**
  - ✧ ABケースを中心におこなう。関係者会議などの前に親の状況把握や気持ちを聞く機会を設ける。家族との信頼関係構築および家族のアセスメントの強化を図る。

- **家族のアセスメント（入所時前後・半年後）**
  - ✧ ジェノグラム・エコマップの活用・前籍学校へ行き情報収集
    家庭訪問時の情報を活用して家族の課題やストレングス視点をユニット職員と共有化を図る
- **親子宿泊棟（ファミリールーム）の積極的活用**
  - ✧ 面会・外出・外泊についてのアセスメント
  - ✧ 親子交流そのものがイベントにならないように配慮する。
  - ✧ 日常の生活（学習、掃除、買い物、食事作りなど）が親子関係において取り戻すべきものであるので意識して取り入れられるようにする。
  - ✧ 面会時などにアルバム制作を親子で出来るように可能な範囲で取り組んでいく。
- **親支援の充実**
  - ✧ ペアレントトレーニングの実施
- フレンドホームの開拓および積極的活用
  - ✧ 新たなFH宅開拓に向け里親会などに参加する
- 入退所時には親・福祉司との関係構築のために立ち会えるように勤務調整を図る
- 児童相談所や親との連絡調整をFSWが主におこない、ユニット・棟職員と情報を共有していく。（役割の明確化を図る）
- 系統立ったケースマネジメントへの取り組み
  - ✧ 児童自立支援計画書に基づいた支援と振り返りができるように、定期的なケース検討を活かし各ユニット・棟担当者と意見交換をする
  - ✧ 退所後支援計画とそれに基づいたアフターケアを実施する。
- 都や県で実施される情報交換会や研修には積極的に参加し、その取り組みや動向について情報を得るとともに、施設にフィードバックする
- 仕事の透明性を図るため活動予定をあげ、報告については口頭ではもちろんのこと養育日誌に丁寧に記載して各ユニット・棟と連携を図っていく。

⇓

家族療法事業の取り組みが子どもと親の関係を再構築出来るものになるように実施していく。


①
入　所
インテーク
・ 対象は子ども本人、保護者、担当福祉司など様々
・ 受入ユニット担当職員と必要に応じて専門部職員の複数で協働して行う。
②
アセスメント
・ ①で得た情報を基に課題を整理し支援方法を決定する。
・ 必要に応じて専門部職員が参加する。
③
自立支援計画
・ ②（⑤）の結果を記録化
④
実　践
モニタリング
・ ③に基づく生活寮及び専門部などの実践
⑤
再　評　価
再アセスメント
・ 必要に応じて専門部職員が参加する。
・ ④の結果について再評価
・ ⑥へ進む場合は④の期間に得た情報を基に課題を整理し支援方法を決定し、③に戻り⑤の結果を記録化
⑥
継続支援
⑦
退所後支援計画
・ ⑤の結果を記録化
⑧
退　所
アフターケア
・ ⑦に基づく取り組み
⑨
再　評　価
再アセスメント
・ 必ず関係職員複数で実施
・ ⑧の結果について再評価
・ ⑩へ進む場合は⑧の期間に得た情報を基に課題を整理し支援方法を決定し、⑦に戻り⑨の結果を記録化
終結
⑩
継続支援

個別対応

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

専門部　個別対応職員　田中義一

目次

Ⅰ．2018 年度方針

Ⅱ．平成 2018 年度総括
　1 個別対応の目的
　2 個別面談
　3 各ユニット（棟）との関係
　4 専門部内における業務
　5 個別対応業務体系の確立
　6 個別支援計画及び実践報告
　　① 2018 年度個別支援計画（N・M ケース）
　　② 個別支援記録
　7 個別対応業務長期計画

Ⅲ．個別対応会計報告及び次年度予算

Ⅳ．平成 2019 年度方針

Ⅰ．平成 2018 年度方針

1　個別の関わり通して、子どもに安全・安心な生活を保障していく。
2　児童一人一人の特性に沿ったより専門性の高い個別面談を実施していく。
3　集団内のおける個別支援の業務確立を目指す。
4　専門部の一員として専門部内における職務に責任を持って遂行していく。
5　個別対応業務をより精査し、内容の具体化を図っていく。
6　個別支援計画を作成し、児童一人一人のニーズに合った支援を実践していく。
7　長期計画における 2018 年度計画内容を確実に実施していく。

Ⅱ．総括

1　個別対応の目的

虐待を受けた児童に他の人との関係を再び良好にするためのケアや、どのように甘えたらよいかわからないなど愛着障害を起こしている児童のケアを行っていくためには個別の対応が必要であり、平成１４年度より定員５０人以上の児童養護施設に個別対応職員を配置しているところである。児童養護施設はもとより母子生活支援施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設においても虐待を受けた児童の入所が増加していることから、平成１６年度からは、これら全施設に個別対応職員を配置することにより、虐待を受けた児童のケアの向上を図っている。

個別対応業務は児童への集団支援を基礎とした上に、より専門性を持ち個別場面にて児童を支援する事を主とするものである。また、個別支援がもたらす集中力の向上、丁寧な支援提供、愛情不足の解消等その効果は計り知れないものがある。虐待を受けた児童は、大人への不信感、コミュニケーションスキルの不足等が背景にある為、他者と良好な関係を築くことができるようになるまで長期化する場合がある。これを解決する有効な支援として児童への１対１の面接、生活場面での１対１の対応が挙げられ、個別対応職員と児童との関係が良好になることにより、次第に他の人に対しての関係が良好になっていく。また、集団から個別に児童を取り上げることで、集団内に生活する児童へより良い影響をもたらすことも有効な効果として挙げられる。確かに 1 対 1 の個別支援を行っている時の児童の表情を見ると、愛情不足が解消された穏やかなものとなっている。職員が自分だけを見てくれている喜びを職員とのコミュニケーションの中で大いに見せてくれる。個別対応は、個別的な関わりが確保されることで愛着障害へ適切なケアを行い入所児童への健全な育成通して、安全・安心を保障するものである。

今年度も個別対応業務として、個別面談をはじめ送迎、通院等 1 対 1 の個別支援を中心に専門業務を行ってきた。特に本園の事業計画書の主な事業計画にある「養護内容の質の向上にむけて」にある専門的、且つ適切な養育実践の取り組みを念頭に入れて継続的な個別支援を実施してきた。在園する児童の約 7 割が虐待経験をもつ児童であり、その中には何かしらの障害を抱えている児童が少なくない。これら児童の支援にあたっては、より専門性の高い支援すなわち適切な支援計画のもと児童一人一人にあった支援の実践が求められる。

詳しい支援内容については項目ごとに以下に総括する。

２　個別面談

児童一人ひとりが抱える悩みを受け止め、今何が必要とされているのかを十分に考察する上で 1 対 1 で行われる個別面談は重要な役割を果たしている。面談には計画的に継続面談と日々の生活の中で突発的に必要となる単発面談の 2 種類がある。継続面談を実施するにあたっては緊張感を出すことなく、児童がリラックスした状態で面談に臨めるよう型にはまった問答形式ではなく、児童の興味関心のある話題から入り会話の中に聞きたいポイントを入れ情報を集めることが重要となる。また、狭いところでの問答にならないように興味関心があるものはもちろん、ホーム生活、学校生活、親子関係、他児童との関係等、様々な角度から児童を捉えることが大切となる。単発面談では、主に児童の関係するトラブル後に設定する面談であり、落ち着かせ傾聴することが面談の入り口となる。いずれにせよ、どの面談においても 3 者的立場からの視点を生かして児童らの持つ悩みや戸惑い、困っていること等を十分に受け止める事が出来るよう児童との信頼関係は欠かせない。

今年度、ADHD、自閉傾向及び知的障害（IQ55）と診断され愛の手帳 4 度を所持している児童について、トラブル後の単発面談を行った。特別支援を必要とする児童の面談実施においては、児童の持つ特性を十分に理解し支援を構築することが大切となる。特筆すべき内容については都度各ユニットに口頭で伝えてきた。

個別面談記録

対象児童：N・T ケース（ADHD、自閉傾向、知的障害、愛の手帳 4 度所持）

実施日：2018.12.14（金）17：00～18：00

場　所：本園面談室

本児の特性：

・自分の考えや気持ちを自ら発信することが難しい。

・衝動的に行動してしまう。

・他人に対して過度な関わりを求める。

・他人とのコミュニケーションが苦手。

・その場での注意は入り反省することができるが、直ぐに忘れてしまう。

状況：

生活ユニットでテレビをみて過ごす中、過度な関わりを求めて年下の他児にちょっかいを出し泣かせてしまう。職員より足を掴んだのかと確認をされ、掴んでいないことを伝えるも、その後「もういい」と言ってユニットを飛び出し事務棟玄関で座り込んでしまった。

支援内容：

本人が玄関でうずくまっているのが事務室内から見ることができたが直ぐには駆け寄らず、本児が本当に困っている、誰かに伝えたい気持ちが表出するのを待つこととした。しぐさ、表情を観察しタイミングを見計らって本児の前に出ると、こちらから「どうしたの？」と言わなくても、本児から「〇〇ちゃんに嫌と言われて泣かした。どうしたらかわいがれるかな？」と話しかけてきた。その後、面談室に入ることを促し面談を行った。実際の支援では、紙に書きながら質問に対しては回答ではなく選択枝を与え、極力自分で考え答えを導きだせるよう問答を行った。現状理解から解決方法までを一通り伝達すると、本児の表情も穏やかになっていたが、どこまで理解できたかは確認できなかった。本児の特性に合った面談の進め方、分かりやすい言葉の選択等、より専門性の高い支援ができるよう更なる考察が必要である。

面談内容：

≪現状理解≫

○○ちゃんと遊びたいと思った時、頭の中にはどんな気持ちがあったかな。

①「遊びたい」

②「○○ちゃん、かわいい。」

③「○○ちゃんは遊びたいと思っているかな。」

①と②の「遊びたい」と「かわいい」は誰の気持ち？→自分の気持ち。

そうだね、じゃあ、③と④の「遊びたい」と「楽しそう」は誰の気持ち？→○○ちゃんの気持ち。

①～④で頭の中にはどの気持ちがあった？→①と②

ということは頭の中になかったのは？→相手の気持ちがなかった。

そうだね、相手の気持ちがなかった、つまり相手の気持ちを考えて行動していないってことになるね。

≪対策伝達≫

相手のこと、気持ちを考えて行動するってどういうことだろう。→・・・・(返答なし)

「③の○○ちゃんは遊びたいと思っているかな？」

「④の○○ちゃんは楽しいそうな顔をしているかな？」

「○○ちゃんに今話しかけても大丈夫かな？」

「○○ちゃんの顔はどうかな？いらいらしていないかな？」

まずは相手の気持ちを考えることだね。

その後どう行動するかきめるかな。

相手が起こっている時どうする？→②

①「遊ぶ」

②「遊ばない」

③「わからない」

③のどうしていいか分からないときはどうする？→わからないときは、職員に聞く。

正解。きっと職員さんは「今、けんかしたあとだから、いま遊ぼうって言わない方がいいよ」と教えてくれるよ。

≪まとめ≫

○○ちゃんに謝罪すること。

相手の気持ちを考えて行動できる人にはみんなあつまってくるし、かっこいい。

どうしていいか分からないときは職員に聞く。

支援考察：

・選択肢を与えることについて

児童からの相談を受けた時、その解決方法を大人が子供に伝えてしまうことが多い。相談ケースにもよるが大人が容易に解決方法を与えてしまうと、児童は「この人に言えば解決できる、答えを教えてくれる」と言う考えになり、自分で考えたり判断したりする能力が成長しにくくなる。また、答えが欲しい時に周りに大人が居なければ情緒不安定になる等自立の妨げになりかねない。面談において、特に悩み相談ではその解決方法を大人がすぐに与えるのではなく、回答の選択肢を児童に与えその中から児童自らが考え解決方法を見つけ判断することが重要だと考える。そのために、支援者には対象となる児童がどのような特性を持ち、どのくらいの思考力があるのかを適切に見極めどの様な選択肢を用意するか、といったことが求められる。

３　各ユニット（棟）と関係

各ユニットとの関係については、個別対応業務の実態把握も踏まえて、その関係性を柔軟に理解する為に、受動的且つ流動的に関わることを意図的に行ってきた。ただ、個別対応の面から見て、棟よりニーズの打診がなくても日頃の児童との関わりの中で個別支援の必要性を感じたときはこちらから打診してきた。今年度は、ユニットより N・M（高 2）ケースの日中の過ごし方ついて相談があったため、生活時間を活動時間と余暇時間に分け、それぞれの時間に目的を設定し生活日課の構築を行った。また、メリハリのある時間の使い方を意識した日課とするために切り替える時間を設けるなど時間の使い方、活動時間帯の設定等、様々な面から考察しユニット職員と議論を重ねながら作成した。次年度においても、本総括を受けて受動的と積極的関わり、流動的と計画的関わりの 2 点について自己学習を行い、より良いバランスをとりながら課題解決に向けての取り組みを行っていく。

○生活日課

	活動時間	余暇時間
時間	・職員が用意する課題に取り組む時間 ・集中力を高める時間 ・勉強する時間 ・運動する時間	・自由時間 ・何をするかは自分で考えて過ごす時間 ・リラックスする時間 ・楽しい時間
目標	いやなことでも我慢して取り組む。	リラックスできる方法を見つける。
内容	学習、運動、工作など	音楽、ゲームなど

時間	内容	備考
6:30	起床・洗面・布団畳み	
6:40	朝食	
7:15	朝食片付け、食器洗い	
8:30	掃除	
9:00～9:50	活動①	
9:50～10:00	切り替え時間	活動の評価、飲み物休憩 次の時間の目的、内容の確認
10:00～10:30	余暇時間	
10:30～10:40	切り替え時間	
10:40～11:30	活動②	
11:30	昼食準備	
12:00～13:00	昼食、昼食片付け	
13:00～14:00	余暇時間	
14:00～14:10	切り替え時間	
14:10～15:00	活動③	
15:00～15:10	切り替え時間	
15:10～16:00	余暇時間	
16:00～17:00	入浴時間	
17:00～17:25	ミサンガを作る時間	

17:35～18:00	夕食準備	
18:00	夕食	
18:30	後片付け	
19:00	日記を書く	
20:00	振り返り	
20:30～22:00	余暇時間	
22:00	就寝	

４　専門部内における業務

専門部との関係においては、定期的な部署会議等を通して情報交換を図り有効且つ効果的な連携を図ってきた。また、個別対応業務を行う中でより専門性の高い支援が求められるケースに関しては、専門部内の会議にて専門部全体でのケース検討の必要性を発信し、他の専門部職員への協力を求めることとした。今年度ではＮ・Ｍ（高 2）ケースとＭ・Ｔ（高 2）ケースがこれにあたる。個別対応業務に従事する上で、各専門職から多面的な分析、考察を提供して頂けることはより専門的な支援を可能とするために重要な機会として位置づけられ、一人業務をする個別対応職員にとって専門部の存在は大変心強いものがある。次年度も情報の共有化を図りながら、専門部の一員として責任ある業務遂行を目指していく。

５　個別対応業務体系の確立

全国の児童養護施設全般において、個別対応業務の在り方は様々であり、不確定な部分が存在するのが現状である。その背景には、行政より指針されている業務内容が各施設の現状に必ずしも一致していないことが考えられ、そのニーズの見解のずれが個別対応業務の確立を難しくしているものと思われる。個別対応業務は、行政より位置づけられたものに、施設の現状を踏まえ、児童への支援がより効果的に行われるものでなければならない。

被虐待児童個別対応　業務体系

個別業務	業務体系	具体的内容	備　　考
1 対 1 個別対応	計画的業務	個別面談	継続面談 単発面談 新規入所児童面談
		個別学習支援	園内にて実施 活動記録を共有サーバー内に記録 特質すべき事項に関しては、口頭、棟会議にて至急伝達
		情緒活動支援	園内、園外にて実施 活動記録を共有サーバー内に記録 特質すべき事項に関しては、口頭、棟会議にて至急伝達
		継続的個別支援	特別支援を必要とする児童を選出
		個別支援計画の実施	該当者Ｉ名を選定して実施

		通院、買い物	棟よりの依頼を受けて実施
		学校等との協議参加	棟よりの依頼を受けて実施
集団内における個別対応	流動的業務	宿題支援	棟と協議の上実施 1対1個別対応に組み込む場合あり
		学習時間補助	棟との協議の上実施 1対1個別対応に組み込む場合あり
		食事補助	事前通知 調理への報告
		就寝補助	棟との協議の上実施 事前通知
		緊急的個別支援	トラブル等の対応
ホーム会議参加	巡回業務	通常会議参加	事前通知　ケース検討参加 通院、買い物日程協議 その他、検討事項への協議参加、助言、指導
		自立支援計画協議参加	
		成長の記録協議参加	
専門部内業務	随時実施		分担業務の遂行
助言・指導	随時実施		
研修参加	随時実施		

6　個別支援計画及び実践報告

個別支援計画とは、特別な教育的支援が必要な児童のニーズを把握し、長期的視点で、的確な支援を行うことを目的として作成されるものであり、その活用のメリットには以下の事が挙げられる。

a　情報の共有と共通理解

様々な領域の関係者が意見を出し合うことで、情報を共有する事が出来、対象児童についての理解が深まる。そして、支援の目標を共通理解した上で、それぞれの支援に生かすことができる。

b　支援ニーズの明確化

本児、各部署関係者が話し合う中で、その児童にとっての支援ニーズが明らかになる。

c　役割分担及び連携した支援

各部署関係者のそれぞれの立場や観点から見た支援の在り方が明らかになるので、役割分担したり、連携を取り合ったりして、支援を行うことができる。

d　継続した支援

各部署が積み上げてきた療育、支援の方法を検討を加えながら引き継ぎをして行くので、長期的な展望の下、将来の生活を見据えた継続的支援が出来る。

今年度も、個別支援計画を基にした実践業務の確立をめざし継続した個別支援を行った。学校でのトラブルが元で登校停止となった特別支援を必要とする児童を対象児として継続支援を行った。以下にN・M（高2）の個別支援計画及び実践報告を記述する。

① 2018 年度個別支援計画

ホーム名	太陽	氏　名	N. M	支援者	田中義一		
主訴	非行　虞犯行為等		生年月日	平成 13 年 8 月 6 日		性別	男
学校	学校等名〔つくば特別支援学校高等部〕及び学年〔　2 年　〕						

≪実施形態≫

登校停止中の本児であったため、日中の活動時間を使って週 2～3 回程度、10：40～11：30 もしくは 15：10～16：00 の時間帯で個別学習、個別運動を行う。

≪本児の状況≫

・特別支援学校登校停止
・自分の考えや気持ちを自ら発信することが難しい。
・衝動的に行動してしまう。
・学習能力は小学生 2～3 学年程度。
・走ることやバスケットボールなど運動が得意。
・余暇時間はテレビを見て過ごすことが多い。
・データ等をノートにまとめることが得意。

≪個別支援目標≫

・自由に過ごす余暇時間と決められた内容を取り組む活動時間においてメリハリのある時間の使い方を習得させる。
・学習や運動を通して前向きな思考や自信を付けさせる。

≪個別活動内容及び支援工夫≫

都道府県調べ

・資料やデータをもとに 47 都道府県それぞれの特徴をワークシートにまとめさせる。
・ワークシートの記入内容には、数字、漢字、色をわかりやすく記入できるよう工夫した。
・各都道府県について本児と問答しながら興味、関心を持たせる。
・取り組ませる箇所は本児に選択させ学習意欲を高める。
・学習したことの達成感を味わえるようにワークシートは１つのファイルにまとめた。

ランニング

・本園前調整池の外周をランニングする。
・ランニング前の準備体操をルーティン化しその重要性を伝える場とした。
・毎回タイムを計ることとし意欲向上につなげた。
・自室にタイム記録表を掲示し、目標達成の確認をするとともに、タイム向上を可視化することで自己肯定感を高めることとした。

≪事前面談≫

実施日：2018.29.10.14（金）13：00～14：00　場所：面談室

日中自転車で無断外出、戻ってきた時本園玄関先で「ごめんなさい、ごめんなさい」と連呼し不安定な状態でうずくまっている本児を発見した。ユニット職員と協議しユニットに戻す前に個別対応を図ることとし個別面談を行った。

①落ち着かせるため支援

・怪我の無いことを確認

・反省している点、戻ってきた点を評価

②行動確認

・11 時前のころリビングにいたが、職員がいなかったのでテラスから抜け出した。

・自転車で行こうと思ったが見つかるのでやめた。

・調整池と駐輪場の間から抜け出した。

・見つからなくても戻るつもりだった。

・東京にも行くつもりだった。

※児童観察のための職員の居場所について再構築が必要。

③行動理由の確認

・急に逃げ出したくなった。

・他の施設に行くかもしれない不安から逃げ出したくなった。

・やることがなくなって何をしていいかわからなくなって逃げだした。

※不安を取り除く作業が必要。

※日中の過ごし方について再構築が必要。

④所持金確認

・持っていない。

⑤不安のある将来へのについて

・〇〇園→仕事が農作業なのでいいと思った。

・〇〇ホーム→仕事が難しそう。仕事が自分にできるか不安。

※自己肯定感の強化が必要

面談では職員の質問に対しては真剣に耳を傾けしっかりとした言葉づかいで話すことができ、また、本児の発言には都度共感をしながら丁寧に傾聴することを心掛けた。面談の中で日中の過ごし方についての再構築と自己肯定感の強化が課題として見えてきたため、日中に個別の時間を継続して設け課題解決のための活動を一緒に行っていくことを本児と確認した。最後に本児より職員に「怒られるのがいや」との発言があったため次の 2 点について本児に伝達した。

・悪いことをしたら叱られるのは当たり前、反省の気持ちがあるならしっかり謝るように。

・どうでもいい子には叱らない、周りの大人がしっかり考えてくれていることを忘れない。

面談終了時には落ち着きを取り戻し冷静に物事を考えられる状態が見て取れたため、その後の支援をユニット職員に引き継ぎ面談を終了した。

② 個別支援記録

事前面談を受けて 10 月より本児の継続的個別支援をスタートさせた。最初に活動時間の目的と内容を本児と確認し、今後しっかりやっていけるかの意思確認を行った。実際の活動では活動時間の前半は学習を、後半は運動を行うこととし、学習では、都度どのくらいのレベルの内容でどのくらい集中できるかを図りながら取り組んだ。取り組む課題が本児の興味関心が高いものであったのと本児の得意な調べ学習であったことから、おそらく 1 時間は集中して取り組めると考えた。学習に対する姿勢もよく、集中力も高かったため 11 月からは学習 1 時間、運動 30 分の組み立てで実践した。学習も運動も、少しきつめの内容を設定したが、あきらめることなく集中して取り組むことが出来ていたが、月半ばで運動がきつくなったのか「活動時間はすべて学習時間にしたいです。」との要求があった。つらいことから逃げてしまう本児の特性が表れ始めたため、改めて活動時間は職員が用意する課

題に取り組む時間、いやなことでも我慢して取り組むことを伝え、メリハリのある時間の使い方をするよう本児に促した。

個別学習全般では出された課題に集中して取り組むことができていた。字を丁寧に書いたり資料を見ながら一生懸命に考えたりと、活動する時間としてのメリハリができていた。

テレビから多くの知識を得ているらしく自分が行っていることが話題に出ると嬉しそうな表情で多くを発言する姿が見て取れた。また、都道府県についての知識を与えると「知らなかったです！凄いですね」と高い関心をみせた。11 月からは休憩なしでほぼ１時間の取り組みとなったが、終始集中力を研ぎらすことなく一生懸命取り組むことができた。

活動時間中、余暇時間に不安定になる、過ごし方がわからないとの相談があった。基本余暇時間は何をするかは自分で考えて過ごす時間として設定していたが、なかなか自分で考えることができない本児であったため、ユニット職員へのプレゼントにミサンガを作成することを本児に提案した。「まずは田中さんの分をお願いね」と伝えると「何色がいいですか」と嬉しそうに笑顔を見せていた。

１２月に入ると、活動開始時に少し緩んだ雰囲気が本児にみられるようになった。そのため余暇時間と活動時間の違いを感じさせるため、緊張感のある雰囲気作りを意識し支援を行った。色々な面でメリハリが聞いておらず、ただ愛児園は楽しく、楽なところと感じている印象を受けた。生活時間、場所、内容共に再度状況を確認し、生活目標を踏まえた支援について再度協議が必要かと思われる。12 月 21 日、精神科病棟入院のため継続支援を終了とした。

７　個別対応業務長期計画

本園における個別対応業務の確立に向けて、その長期計画を下記に記述する。

児童を支援するにあたって、個別対応の重要性は先の目的に述べたとおりであり、その整備は早急に求められているものである。業務確立までには実態把握→実践計画作成→実践→精査、協議、→評価、総括→確立と慎重且つ綿密に実施していかなければならず、一方で児童の成長を考えるといち早くより良い業務体系を確立していくことが個別対応職員としての責務となる。

個別対応業務長期計画

年　度	計画内容
2019 年度	・業務体系を元にした実践 ・個別支援計画の実施 実践案の精査、協議、修正 実践案の評価、総括
2020 年度	・業務体系を元にした実践 ・個別対応業務全体の総括及び確立
2021 年度	・個別業務の実践 ↓ 以後、総括を踏まえよりよい業務体系を作っていく。

Ⅲ　個別対応会計報告及び次年度予算

2018年度個別対応会計報告

収入	36,000円	※3,000円×12ヶ月
支出	27,237円	※2019年2月21日現在
残金	8763円	※残金については2月、3月に執行予定

支出内訳

月	請求額	内訳	小計	使用日	備考	購入先
4月	3,000	780		4月18日	お菓子作り材料費	無印良品
		2,030			個別教材整理箱	コーナン
			2,810			
6月	3,000	864		6月6日	ギター弦代	ヤマハ
		1,980			個別工作用木材	山新
			2,844			
7月	3,000	3,198		7月9日	個別活動用空気入れ	山新
			3,198			
8月	3,000	3,132		8月24日	けん玉	アカデミア
					野菜辞典	
			3,132			
9月	3,000	2,894		9月28日	個別教材図鑑	アカデミア
			2,894			
10月	3,000	3,542		10月26日	工作用工具	ホーマック
			3,542			
11月	3,000	2,289		11月13日	バトミントンシャトル	ゼビオ
		880			パズル本	アカデミア
			3,169			
12月	3,000	1,728		12月11日	切り絵本	アカデミア
		1,166			工具	コーナン
			2,894			
1月	3,000	2,754		1月9日	個別用ギター部品	ハードオフ
			2,754			
2月	3,000				個別学習用教材（受験用）	
3月	5,763				個別工作用プラモデル	
			27,237			
		残金	8,763			

2019年度　個別対応予算（案）

科目	請求額	備考
教養娯楽費	60,000	5,000円×12ヶ月 用途：個別活動教材代
合計	60,000	

Ⅳ　2019 年度方針

1　個別の関わり通して、子どもに安全・安心な生活を保障していく。
2　児童一人一人の特性に沿ったより専門性の高い個別面談を実施していく。
3　集団内のおける個別支援の業務確立を目指す。
4　専門部の一員として専門部内における職務に責任を持って遂行していく。
5　個別対応業務をより精査し、内容の具体化を図っていく。
6　個別支援計画を作成し、児童一人一人のニーズに合った支援を実践していく。
7　長期計画における 2019 年度計画内容を確実に実施していく。

心理療法担当職員

2018 年度総括、および 2019 年度方針

心理療法担当職員
立川　弘司

１．全体総括

「新しい社会的養護ビジョン」が示され、各都道府県で推進計画が策定されている。そのスケジュールは改めて示されることとなっているが、基本的な考え方に大きな変更はない。児童養護施設を含めた社会的養護に大きな変革が求められている。その中で児童養護施設への入所は「できる限り良好な家庭的な養育環境のもとで、短期の入所を原則とする」となっており、期間については、現時点では「学童期以降は１年以内（特別なケアが必要な子どもであっても３年以内を原則とする）」となっている。

この１年（３年）という期間にその支援・判断をするためには、施設側にも高度な専門性が求められることとなる。提言の中にも「児童福祉施設には、トラウマやアタッチメントに関する理解とこれらを認識した生活支援、日常生活において表現される子どもの問題行動への対応技術、家族の抱える問題（家族病理）に対する深い理解とそれに基づく子ども・家族への支援など、極めて高度な専門性が求められる」と示されている。

保護者支援においても「単に親子の交流や面会を促進するという視点ではなく、不適切な養育に至った経過や力動を親自身が自覚し､その問題点に関して子どもに謝罪するなど、子どもの支援のために親ができることを模索するという観点に立つことが必要である」とも示されている。

この短期間に家庭復帰が可能かどうかを判断し、または里親委託をすすめるためには、これまでの施設養護のやり方を変革する必要があると考える。つまり、従来の施設養育の方法ではなく、新たな支援の枠組みを構築する必要が出てくる。実施スケジュールや細部については新たに示されるとは思うが、それが示されてから準備をスタートするのではなく、今から準備をすすめ、新たなビジョンにも合致するような方法の具体化をスタートさせなければならない。これは施設全体で考えるべき課題ではあるが、心理としても新たな時代に向けた準備をすすめたいと考えている。

以下の支援モデルは昨年度総括で示したものであるが、これが「１年」となるとさらにその時期を早めることとなる。これらの動きにも合致するような方法論についても検討を重ねていきたいと考える。

≪「3 年間の入所期間」に対する支援モデル≫

	子ども支援	保護者支援
入所前	子ども・保護者の状況の詳細を把握し、入所前ケース検討をさらに充実させる	
入所後 3 ヶ月	子どもの再アセスメントを行い､課題等への支援の開始 ※自立支援計画書の立案	保護者の課題等を明確にし､関係機関と役割分担を行い、支援開始
3 ヶ月前後	ケース状況、保護者の課題等をふまえ、家族交流の検討・具体化	

1年後	支援内容の評価と支援の再検討	支援内容の評価と支援の再検討
	児童相談所との協議	
2年後	支援内容の評価と支援の再検討	支援内容の評価と支援の再検討
	児童相談所との協議 家庭復帰についての判断	
2年～2年半後	家庭復帰についての判断を、子ども・保護者へ説明する	
	① 保護者との交流を深める ② 里親との交流を開始	措置解除後の想定される課題に対する支援を開始
2年半～3年後	保護者、または里親との交流を深め､施設を出た後の想定される課題に対する支援も平行させる	支援内容の評価と支援の再検討 アフターケアの具体化と保護者への説明
3年後～	① 家庭復帰（措置解除） ② 里親委託（措置変更）	アフターケアの実施と支援の再検討

短期間に、子どもの課題に対する支援と保護者の課題に対する支援、家庭復帰の是非の判断を行うためには、児童相談所とさらに連携を密にしながらも、施設側も明確な根拠をもって判断の一翼を担わなければならない。そしてその判断には明確な根拠を示さなければならないのだが、主観や感覚ではなく、説明ができる支援内容と評価が求められる。そのためには児童養護施設の支援内容の専門性をさらに高め、根拠に足る支援を実践していくことになる。

これらの動きにあわせ、子どものアセスメントや支援の具体化、子どもの課題等を一定期間で改善できるようなケアワーカーとの連携、さらには保護者のアセスメントや支援の具体化など、心理職として専門性をさらに高めていきたいと考える。今年度方針で達成できてないものも多く、理想が高いものもあるが、機能することで子ども支援の充実に貢献できると考え、確実な実践を目指したいと考える。

心理療法についてであるが、これまでは遊戯療法や創作活動等の諸活動を通した活動が中心であったが､虐待を受けた子どもや発達障害などの特性をもつ子どもの増加にあわせ、より治療的な枠組みへと変換していく必要がある。虐待が主訴の入所児が約６割を占め、日常生活の組立てや心理療法もそれに対応したものに変えていくことが求められていると考える。虐待はアタッチメント（愛着）に影響を与え、適切な人間関係構築を阻害することが示されている｡安全･安心な環境に置かれれば子どもの問題が改善するわけではなく、つまずいているところや問題行動等から「育て直し」をするような支援が必要となっている。

心理職として、職員のメンタルヘルスに貢献する取組みも具体化したいと考えている。職員が安定して勤務できるかどうかは、子ども支援に直結する問題である。各職員が自身の状態を把握することが、心身の健康への第一歩だと考える。必要に応じ、心理職と職員の面談や森田 Dr.との面談の機会も検討し、職員の心身の健康維持にも貢献したいと考える。

２．活動報告

１）心理療法

≪2018 年度方針≫
◇新規入所児に対する面接バッテリーを確立し、各専門職と連携したケース運営を検討する
◇年度中期、また年度末の再評価を行い、棟・ユニットと連携したケース運営を確立する
◇個々の子どものアセスメントを行い、心理対象児を棟・ユニットと協議しピックアップする
◇トラウマへのアプローチが必要な子どもをピックアップし、担当棟・ユニットまた関係職員と連携しながら支援していく
◇発達のキャッチアップや子どもの適応を促すためのプログラムを実施する
◇小集団への性（生）教育プログラムを実施する
◇専門部内でも新規入所児へのインテイク面接について協議し、部署内でのケース運営についてのマネジメントを行う
◇「新しい社会的養育ビジョン」をふまえた専門部・心理職としての子ども支援を精査し、検討を行っていく

① 新規入所児に対する面接バッテリーを確立し、各専門職と連携したケース運営を検討する

子どもは概ね１か月ぐらいすると施設生活に慣れていく。この時期に心理的な検査やアプローチを実施し、子どもの課題等に関するアセスメントを行い、支援方法を具体化する必要がある。また入所後半年、1 年後の定期評価を行い入所時の結果と比較することで、自分たちの支援に効果があったのか、また重点的に支援する課題についての判断材料になると考える。

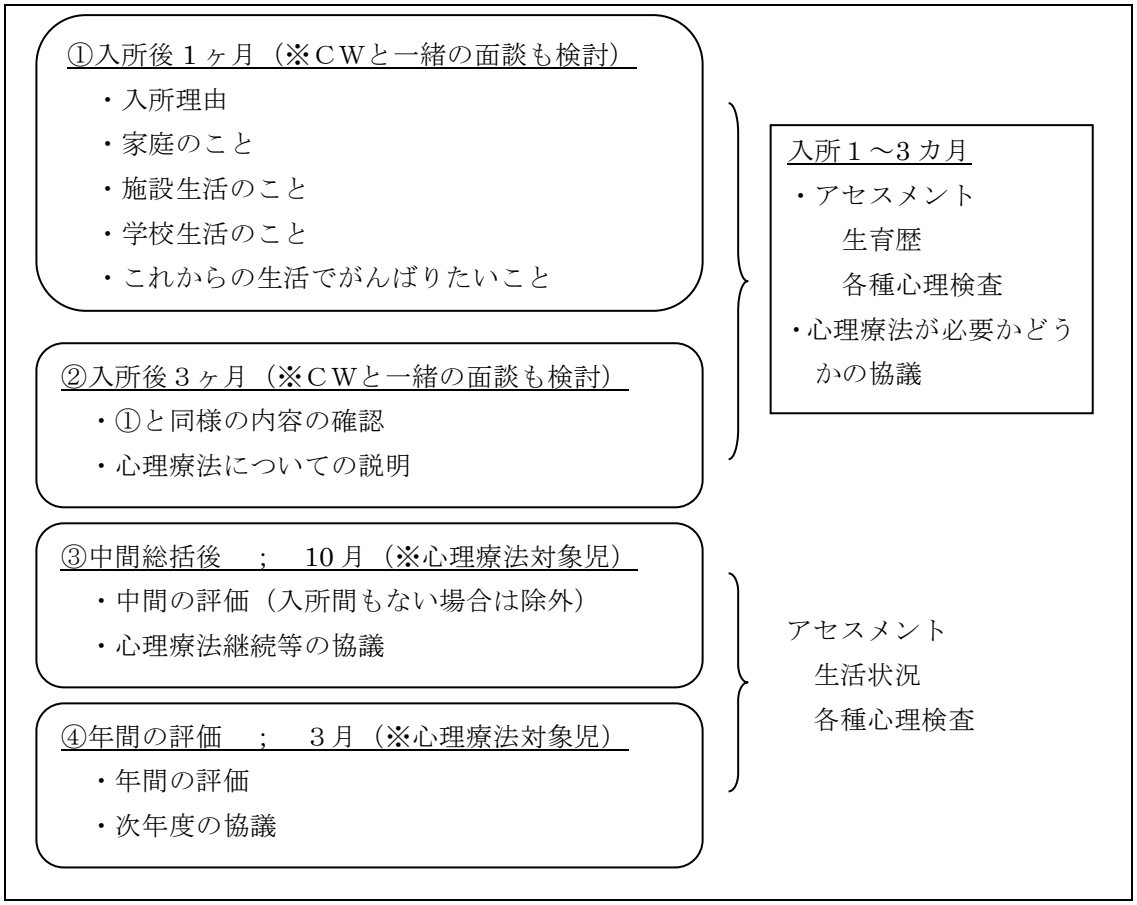
新規入所児の面接バッテリーは、入所１か月前後に生活状況や適応状況の確認、入所理由（保護者や児童相談所からどのように説明されているのか）の確認、権利ノートの説明を行いたいと考える。そして入所後３か月に同様の確認を行い、その間に心理療法の対象とするかを棟・ユニットと協議したいと考える。

この取組みを実施するうえでは、各専門職間でケースの棲み分けをしなければならないと考えている。子どもの負担を考え、専門職間で誰がどのような取組みを行うのかを確認し、そして情報の共有と課題についての検討を行う必要があると考える。

また問題行動が顕在しているかどうかが、各専門職の関りの頻度にも関係してくる。つまり、問題行動を抱えるＡに対しては各専門職がそれぞれ関わり、問題行動がないＢには誰も関わらないという状況が起こってしまう。潜在的な問題を抱える子どもについても、アセスメント等の結果をふまえ、各専門職が連携して子ども支援を実施できるよう、部署としても具体化をはかりたいと考えている。

「新しい社会的養育ビジョン」を考えると、児童相談所のアセスメントに加え、生活を始めた早期段階で施設のアセスメントを実施し、子どもの抱える課題等に対して早期介入していくことが必要だと考えている。専門部でもこれらのことを十分に検討し、心理職としてもこの面接バッテリーの確立に向けて具体化をはかっていきたいと考える。

≪新規入所児への面接の流れ、及び心理療法対象児の再評価の流れ≫



② 個々の子どものアセスメントを行い、心理対象児を棟・ユニットと協議しピックアップする

子どものアセスメントは、心理検査の結果のみならず、入所前の生育歴や入所後の様子なども含めたものがその材料となる。

新規入所児に関しては、入所前ケース検討を活用し、入所後の支援や配慮すべき点などを各棟・ユニットに伝えてきた。問題行動に関する理解や入所後に想定される問題行動等は、知的能力や発達特性などを考慮し、実践可能な支援を助言してきたつもりではある。実際の生活の中で問題行動は予想を超える場合もあり、その都度、子どもの特性や生育歴を考慮した支援方法について各棟・ユニットと協議してきた。

入所後の定期面接、また心理療法の結果をふまえ、棟・ユニットとの協議には至らなかった。個々の職員とは協議してきたが、効果的な子ども支援には全体で共有して支援することが重要であり、その確実な実施に向けて具体化をはかりたいと考える。

≪アセスメントの材料≫

・生育歴…児童票、子どもからの聞取り内容、保護者からの聞取り内容、関係機関からの情報
・生活の様子…施設生活、学校生活など
・心理療法の結果
・心理検査…知能検査、発達検査、トラウマ評価

③ 年度中期、また年度末の再評価を行い、棟・ユニットと連携したケース運営を確立す

る

心理療法の対象ケースは年度当初に目標をたてているのだが、年度中期の再評価や各棟との協議には至らなかった。

子どもへの支援は目標・目的と方法があり、結果を再評価していく一連のプロセスとなる。心理職として時間を確保できていない現状があるが、定期的にセッションを実施し、再評価を繰り返しながら、年間を通してのケース運営を確立したいと考える。

次年度の対象ケース選定や目標設定のためにも、今年度中に各棟と協議したいと考える。また自立支援計画書の計画策定に関しても、心理職の考える子どもの問題や課題をどのように捉えているのかを、この協議を通して伝達・検討したいと思う。

④ トラウマへのアプローチが必要な子どもをピックアップし、担当棟・ユニットまた関係職員と連携しながら支援していく

虐待を主訴に入所するケースは約６割を占め、不適切な養育環境で育ったケースも含めるとさらに多くの子どもが虐待の影響を抱えていることになる。虐待を受けた子どもの多くが大小のトラウマ症状を抱えているのだが、それを改善するためには、日常生活が安心・安全なものとなることが大前提であり、そのうえで治療的なアプローチが意味を持つことになる。トラウマへのアプローチは大別すると、㋐家庭での出来事の整理と㋑トラウマ症状の改善、㋒トラウマ症状から回復するためのリラクゼーション・感情コントロールの獲得となる。いずれもトラウマとなる出来事を想起することになり、情緒的に不安定になることも想定される。その意味で担当棟・ユニットとの連携は必須となる。積極的に家庭でのトラウマ体験を掘り起こすことはしないが、子どもに虐待の影響やトラウマ症状についての一般的な理解を促す必要はあると考えている。

多くの子どもが虐待で入所しているということは、児童養護施設の心理業務としてトラウマへのアプローチは不可欠だと考えている。基本的に虐待ケースは心理療法対象とするが、虐待内容を思い出すことで不安定になるケース、性的虐待で支援者側の性別的に制約があるケースなどは除外したいと考える。

虐待等の影響はかなり深刻であり、単にパニックや情緒的に不安定になるだけでなく、ものごとの認知や行動など広範に至る。注意引き的な言動や挑発的な言動の背景因に虐待の影響があることも多い。子どもの問題行動を考えるうえで、「虐待の影響」というものを再考してもらいたいと考える。

トラウマ症状は、服薬によって症状を抑えることも可能だが、行動・認知面へアプローチすることが根本的な治療につながる。最も効果があるとされる治療法のＥＭＤＲは、実施できる機関が少なく、施設内での取組みを準備している。また東京都の各児相で TF－CBT を治療の技法として取入れている。この点でも各児相と連携し、子どもに必要な支援を具体化していきたいと考えている。

虐待を受けた子どもは、虐待をした保護者に対していろいろな感情を抱えている。これらの感情を適切に表現し、職員（保護者）がそれを受け止めることは、子どもの回復にとって非常に重要なステップになる。しかしいくつかのケースでは、子どもの準備が整う前に保護者との交流が計画されたこともあり、支援を再考する事例もあった。施設としてどのような子ども支援・保護者支援を行っていくのか、そしてそれをどのように統合させていくのかは検討する必要があると考える。「新しい社会的養育ビジョン」をみると、「単に

親子の交流や面会を促進するという視点ではなく、不適切な養育に至った経過や力動を親自身が自覚し、その問題点に関して子どもに謝罪するなど、子どもの支援のために親ができることを模索するという観点に立つことが必要である」と示されている。100%の安全を確保すべきとは思わないが、児相・施設側がどのような点を危惧しているのかを伝達し、それらを保護者に理解してもらう取組みからスタートさせる必要があるのではないかと考える。

次年度以降、心理療法でトラウマにアプローチするケースは増やしていきたいと考える。今年度はケース検討や関係職員とのケース協議にとどまったため、次年度は棟・ユニットとも十分に協議しながらすすめたいと考える。

⑤ 発達のキャッチアップや子どもの適応を促すためのプログラムを実施する

入所児の中には発達障害やその傾向をもっている場合があり、その傾向は増加している。児童養護施設入所児童等調査結果（H27、厚労省）によると、発達障害があると示されたのが 23.4%となっており、約 4 人に 1 人は発達障害（またはその傾向）があることになる。

発達のキャッチアップや子どもの適応を促すための定期的なセッションの実施には至っていない。発達の問題は、心理療法だけでなく、日常の支援や学校等での支援も重要になり、日々の生活上の支援と発達促進プログラムが両輪となってはじめて効果が出ると考える。子どもに必要な支援を具体化し、各棟・ユニット、さらには教育機関とも連携した支援を具体化したいと考える。

今年度はケース検討や関係職員との協議にとどまった。次年度は棟・ユニットとも十分に協議しながらすすめたいと考える。

⑥ 小集団への生（性）教育プログラムを実施する

子どもの適切な性や生についての考え方を促すため、また子どもが相互に相談できるような集団作りも目的として、中・高校生男児の小集団セッションを予定したが、実施には至らなかった。

性教育委員会からも、定期的なセッション実施を求められているところではあり、中・高校生男児グループ（青空棟男児グループ、太陽棟男児グループ、みつば男児グループ、つくし男児グループ）への生（性）教育プログラムを計画し、実践したい。

⑦ 専門部内でも新規入所児へのインテイク面接について協議し、部署内でのケース運営についてのマネジメントを行う

現在の各専門職の子ども（ケース）への関わりは、棟と専門職間で協議し、実施されている。しかし本来であれば、外部との関係者協議のように、ケースに携わる支援者で協議や情報共有をしながらケース運営をすすめていくべきだと考える。

各専門職が独立して子ども支援を行っていくのではなく、連携・情報共有しながら支援を行っていくことが理想であり、そのような枠組みやケース運営を目指し、専門部で協議をしたいと考える。

⑧ 「新しい社会的養育ビジョン」をふまえた専門部・心理職としての子ども支援を精査し、検討を行っていく

都道府県の推進計画が示されておらず、そこが明確になり次第、専門部でも検討できるようにしたいと考える。現段階では、新しい社会的養育ビジョンにの柱に沿った、心理職としての必要な支援について精査を行っていく。

≪2019 年度方針≫

◆新規入所児に対する面接バッテリーを確立し、各専門職と連携したケース運営を検討する
◆専門部内でも新規入所児へのインテイク面接について協議し、部署内でのケース運営についてのマネジメントを行う
◆個々の子どものアセスメントを行い、心理対象児を棟・ユニットと協議しピックアップする
◆トラウマへのアプローチが必要な子どもをピックアップし、担当棟・ユニットまた関係職員と連携しながら支援していく
◆発達のキャッチアップや子どもの適応を促すためのプログラムを実施する
◆年度中期、また年度末の再評価を行い、棟・ユニットと連携したケース運営を確立する
◆小集団への性（生）教育プログラムを実施する
◆「新しい社会的養育ビジョン」をふまえた専門部・心理職としての子ども支援を精査し、検討を行っていく

２）心理検査

≪2018 年度方針≫
◇定期的、また必要に応じて知能検査、発達検査などの心理検査を実施し、子どものアセスメントや支援の評価を行う
◇描画や子どもの行動チェックリスト、トラウマ評価を実施し、子どもの変化を記録していく
◇子ども支援に必要な心理検査等を整備する

① 定期的、また必要に応じて知能検査、発達検査などの心理検査を実施し、子どものアセスメントや支援に評価を行う

一般的に、子どもの問題行動への支援を考えるとき、㋐対症的な支援と㋑根本的な課題への支援に別かれる。日常で起こる問題行動の改善はもちろん大切ではあるが、その根本にもアプローチしなければ本当の意味で改善とは言えないのではないだろうか。

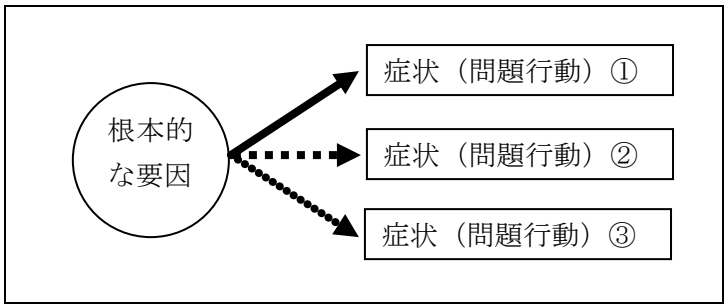
このことは病気に例えると理解しやすい。「咳が出る」という症状があったとして、咳止めの薬を飲めば咳の症状は治まるが、その本当の原因に対処しなければ再び症状が出ることになる。咳の原因は肺炎かもしれないし、結核かもしれないし、もしかしたら腫瘍かもしれない。

この根本となる要因へアプローチしなければ真の意味での改善には至らない。目の前で起こっている問題行動（症状）にだけに捉われてしまうと、問題の本質を見失うことにもなる。子どもの場合、大人とは違い、適切に言語化できなかったり、論理的に考えることが未熟なために、自分でも訳が分からずに問題行動を繰り返してしまうことも多い。問題行動への支援（短期的な支援）と根本的な支援（長期的な支援）の両方の視点が必要となる。私たちの仕事は、子ども（保護者）の心も扱うことになり、それは「見えない」ため、何が正解でどんなことがヒントになるのかは分からない。試行錯誤を繰り返し、失敗から

多くのことを学んでいくしかないと考える。

この点でいえば、ジャスミンユニット男児（M・R）の例が分かりやすい。排尿をゴミ箱にするなどの排泄の問題が続き、それに支援を行うことでその問題行動は消失した。しかしそれと同時に窃盗の問題が浮上し、様々な支援を試みている段階となっている。

排泄の問題は幼児などの失禁という状態ではなく、窃盗もお店で万引きすることはなく、何らかの基準や本児なりの考え方があると推測される。これらの試行錯誤を通して、本児の「根本的な要因」を探り、そこにアプローチすることが重要だと考える。仮に窃盗が消失したとしても、その要因が解決されなければ、別な問題行動が生起することも考えられる。



症状①が消失したとしても、次の症状が生起することも多い

乳児院では遠城寺式乳幼児分析的発達検査で子どものアセスメントを行っている。この検査対象は5歳までとなっており、乳児院での結果があるようならばちゅーりっぷで活用できるようにしたいと考える。また、就学を控えた子どもにはS-M社会生活能力検査、さらに就学や中学・高校進学を見据え、就学指導の材料となるよう、必要に応じて知能検査を実施したいと考える。

今年度、短期入所で措置変更となった幼児にＳ-Ｍ社会生活能力検査を実施し、その所見を資料として提出した。またジャスミンユニットの男児にS-M社会生活能力検査と知能検査（WISC－Ⅳ）を実施し、男児のアセスメントや支援に活用した。

子どもに多くの検査を実施することは負担であり、子どもの状態にあわせて検査種類や頻度を検討しながら実施したいと考える。検査結果をみることで支援の効果を評価することにも有用だと考える。

また、ユニット・棟だけではなく、各専門職とも連携し、検査の活用や検査結果を支援に反映できるように取組んでいきたい。

施設内で知能検査を実施することは可能だが、外部機関（特別支援学校入学のための資料など）は児童相談所や病院の検査結果の方が望ましいとされている。また療育手帳取得のためには児童相談所で知能検査を実施しなければならない。外部機関に知能検査を依頼する場合、検査者の得意・不得意で検査道具が選択されることもある。検査の種類によっては目的に合致しないこともあり、児童相談所等にオーダーする際には相談してもらえればと考える。

≪心理検査の実施について≫

検査の種類	実施時期
知能検査 ＷＩＳＣ－Ⅳ 田中ビネーⅤ	進学を控え、知的能力等に課題がみられる子ども 年長／小6／中3 夏休みまでに知能検査を実施し、進学・支援の検討材料とする

発達検査	幼児や知的発達の遅れがある子どもに実施し、半年ごとに再評価する
ＴＳＣＣ	主に虐待ケースのアセスメント時期に実施し、1 年ごとに再評価する
描画などの投影法	心理療法時に適宜実施する
その他	必要に応じて適宜実施する

② 描画や子どもの行動チェックリスト、トラウマ評価を実施し、子どもの変化を記録していく

被虐待ケースで、児童相談所で実施していないのであれば、入所後約 1 カ月内で TSCC（Trauma Symptom Checklist for Children）を実施したいと考える。これは治療指導員と連携し、被虐待ケースのアセスメント材料として活用したい。

その他の指標として、子どもの包括的な行動をチェックする CBCL（Child Behavior Check List）があり、森田 Dr.からも実施をすすめられているものであり、定期的な評価を検討したいと考える。

③ 各種心理検査の整備

幼児を対象とした発達検査、トラウマを評価する TSCC、子どもの問題行動等を包括的に評価する CBCL、親子関係の課題を見出す検査など、子ども支援に必要な道具は適宜そろえていきたいと考える。そしてそれらの検査の見いだせる側面を各部署にもアナウンスし、必要なときに活用できるようにしていきたい。

≪2019 年度方針≫

◆定期的、また必要に応じて知能検査、発達検査などの心理検査を実施し、子どものアセスメントや支援の評価を行う
◆描画や子どもの行動チェックリスト、トラウマ評価を実施し、子どもの変化を記録していく
◆子ども支援に必要な心理検査等を整備する

3）生活場面面接

≪2018 年度方針≫
◇食事や園庭遊びの時間など、生活場面に入る機会を活用して、子ども理解につなげていく。

生活場面に入ることは、子どもの普段の様子や子ども理解につながる重要な機会だと考える。実際の子どもの生活の様子をみることで、記録では分からないニュアンスであったり、生活場所の雰囲気などを感じることができ、子どもの理解につながると考える。

主体的に生活場面に入り、子どもの様子のみならず、職員の業務の様子、子どもと職員の関りの様子などの把握のため、意図的に生活場面に入るようにしたいと考える。

≪2019 年度方針≫

◆食事や園庭遊びの時間など、生活場面に入る機会を活用して、子ども理解につなげていく。

４）日常生活や課題等への助言・アドバイス

≪2018 年度方針≫
◇各棟会議に参加し、心理職としての見解を伝える。
◇子どもの問題行動への対応方法について、ケアワーカーと一緒に検討する。

① 各棟会議に参加し、心理職としての見解を伝える

定期的な参加ではないが、必要に応じて会議等に参加し、心理職としての見解を伝えた。また専門部と棟・ユニットのケース検討も活用した。

ケース検討の全体的な印象としては、心理職としての見解というより、ケースマネジメントの方向性の見解を伝えてきた部分が大きい。ケースの方向性が明確になったうえで、各職員がそれぞれの分野での支援を実施することが重要だと考える。

子どもの問題行動の背景には、子ども個人の要因、保護者の要因、生活してきた環境の中で培われた要因などが考えられる。それらをアセスメントし、的確なケースマネジメント、また生活支援が必要になっていく。「新しい社会的養育ビジョン」のスケジュールが明確になれば、それに沿った早期のアセスメントや介入・支援が必要となっていく。入所早期に的確なアセスメントを行うためには、個々の職員の資質向上は必須であり、それに貢献できるように心理職としても各部署との会議を重要視していきたいと考える。

② 子どもの問題行動への対応方法について、ケアワーカーと一緒に検討する

子どもの問題行動をアセスメントし、支援に結びつけるためには、学校や生活状況、子ども個人の課題（生育歴や性格特徴、発達障害など）、保護者の課題や周囲からの支援などの多面的な情報や評価が必要となる。子どもの問題行動は、単なる問題行動ではなく、子どものストーリーを紐解くヒントや将来の適応を促す材料にもなる。問題行動や課題が顕在化することは対応に苦慮することではあるが、適切な支援を通し、子どもをより健全な方向に導く機会に結びつけられるように大局的な視点で問題行動を捉え、今後もケアワーカーと協議していきたいと考える。

子どもの問題行動にばかり目が行きがちであるが、子どもの良い面やストロングポイントを伸ばすことも重要である。短所を少しずつ伸ばしていくことも大切だが、長所で欠点を補うこともできる。子育ての基本は子どもを褒めることだと示されており、子どもをよく観察し、頑張ったり達成できたことはすぐに評価していくことが重要である。子どもの自己肯定感を高めるためにも、子どもの不適切な部分を修正し、適切な部分は褒めて伸ばしていく支援がポイントとなる。

また、発達障害の特性が強い子どもの場合、問題となる行動が、生得的な要因から派生しているのか、二次的な要因で派生しているのかで支援方法が異なる。問題行動からみえてくることをよく観察し、効果的な支援を具体化していくことを継続したいと考える。

例えば、歩くことができない人に「歩けるようになる支援」を行うことには意味がない。歩けないことをカバーできるような車椅子での支援を検討し、それを実践・評価するプロセスが重要となる。これと同じことが発達障害でも言えるのだが、発達障害は「障害が見えない」ことから支援者側にもその難しさがあり（虐待の影響なども同様）、支援者は「見えない部分」の的確なアセスメントと支援が求められることになる。

≪2019 年度方針≫

◆各棟会議に参加し、心理職としての見解を伝える。
◆子どもの問題行動への対応方法について、ケアワーカーと一緒に検討する。

５）保護者支援

≪2018 年度方針≫
◇専門機能強化型事業をさらに具体化させ、子どもに必要な支援を実施していく
◇必要に応じて保護者支援を実施する
◇保護者の特性や精神疾患等を周知し、適切な対応や支援を具体化する

① 専門機能強化児童養護施設事業をさらに具体化させ、子どもに必要な支援を実施していく

事業も 10 年目を迎え、各 Dr.にはそれぞれの役割を担っていただいている。具体的な実施状況や総括については、東京都専門機能強化型児童養護施設制度の総括・方針、治療指導員の総括・方針を参照してもらいたい。

毎年の課題としてあげるが、Dr.からの助言等を、どれだけ日々の支援に反映できているか、積極的に活用できているかは課題となっている。

㋐鈴木Dr.

鈴木Dr.には子ども支援を主に依頼している。子どもの生活場面・学校場面の様子を把握してもらい、子ども支援だけでなく環境調整についても助言等をいただいている。昨年度は授業参観というかたちで学校場面の様子を確認してもらい、支援内容について助言をいただいた。今年度から小中学校が統合されたことから、学校に赴くようになる場合は学校側との協議が必要となる。鈴木Dr.は市議や教育委員会にも顔がひろく、地域の情報なども適宜教えてもらうことがでる。

昨年度、筑波こどものこころクリニックの通院時に持参する書類を改訂し、学校担任等からのコメントや全体周知する内容を明確にできるものにした。通院ファイルは、学校－医療－福祉が連携して子ども支援にあたれることを目的としてスタートした。関係機関が連携しながら子ども支援にあたれることは非常に重要であり、通院ファイルの目的等を再確認してもらいたい。

また通院忘れや服薬内容を問合わせるなど、不手際が目立った。その対応として治療指導員が通院の専任となり､その後､医療機関等連絡調整員も含めた通院対応をとっている。子どもの健康に関することであり、今後もミスがないように対応していきたい。

㋑森田Dr.

森田Dr.には親支援を主に依頼している。また新規入所ケースや退所予定ケースについても相談を行い、インケアへの助言だけでなく、保護者側の課題の明確化やそれらに対する支援についても助言いただいている。つくしのケースでは保護者の主治医としての関わりがある。

筑波愛児園の保護者支援に関して、家族療法事業とリンクさせる必要がある。「新しい社会的養育ビジョン」とも関連するが、保護者への早期アプローチを検討する必要があるのではないか。次年度も、筑波愛児園の家族支援の一環として、包括的な支援体制が確立できるように関係職員と協議したいと考える。

② 必要に応じて保護者支援を実施する

積極的な保護者支援はなかったが、次年度以降も、必要に応じ保護者支援に携わりたいと考えている。

青空・さくら棟の合同ケース検討で、母親の育児ストレス（PSI）について評価することとなり、その結果をまとめた。夏休み中の家庭復帰を予定していたが、父親からの DV が明らかになり、家庭復帰は年度末に延期となった。PSI の結果がどのように活用されたのかは分からないが、このような心理検査の結果なども保護者支援に役立ててもらえたらと考えている。

家族交流とは異なり、家庭復帰後は子どもが毎日家にいる状態となる。その中で起こる問題等に対して、保護者が対応できる能力や養育に自信をつけることは重要なことだと考える。「100%の安心」を求めるわけではないが、少なくともリスクを下げるようなアプローチは必要だと考えている。心理検査の結果で判断するわけではなく、それを上手く使って保護者と課題にアプローチしてもらえればと考えている。

新しい社会的養育ビジョンにも示されているように、短期で家庭復帰の是非を判断するためには、交流機会を積み重ねて家庭復帰を検討するような方法ではなく、明確になった課題に対して支援を行った結果で判断をするような方法が必要となるのではないだろうか。これらの動きにあわせ、心理職としても保護者支援の一翼を担いたいと考える。

③ 保護者の特性や精神疾患等を周知し、適切な対応や支援を具体化する

保護者の精神疾患や特性、発達障害などから、その対応に苦慮するケースは多い。子どもの課題がクリアされたとしても、保護者側の課題が改善されないのであれば、安定した家族交流や家庭復帰は難しくなる。保護者の特性等も考慮したケースマネジメントが重要だと考えている。

そのためには保護者の特性や精神疾患などを理解し、ポイントをおさえた保護者支援が必要となる。部署内の会議や棟・ユニットとの会議などで、または書面にまとめたものを配布し、それらの理解を促していきたいと考える。

≪2019 年度方針≫

◆専門機能強化型事業をさらに具体化させ、子どもに必要な支援を実施していく
◆必要に応じて保護者支援を実施する
◆保護者の特性や精神疾患等を周知し、適切な対応や支援を具体化する

6）外部機関との連携

≪2018 年度方針≫
◇関係機関と連携をとり、子どものより適切な支援について検討する
◇子どもに必要な医療的支援を検討し、協力・連携してもらえる医療機関を開拓する
◇依頼に応じ、心理活動等に支障のない範囲で、備品等の貸出しを行う

① 関係機関と連携をとり、子どものより適切な支援について検討する

㋐学校との連携

小中学校が統合され、これまで実施してきた連絡協議会の新たなかたちが必要となった。専門部で調整し、5 月に第１回の連絡協議会を開催した。その後は生活棟がその役

割を担うこととなった。

個々のケースでは、ひまわりユニットM・Nの性的加害が明らかになり、児相や学校、警察などを含めた関係者協議に参加した。また、みつばユニットＩ・Ｓの自殺企図があり、県教育委員会や市子ども課、警察などを含めた関係者協議に参加した。

次年度以降も、必要に応じ個別ケース、または連絡協議会等に参加したいと考える。

㋑児童相談所

ひまわりユニットＴ・Mのケース協議、また TF‐CBT の実施に関して、児相側との協議に参加した。TF-CBT 実施により、本児が不安定になることが想定されることから、太陽棟のプログラム内容の理解と必要性について協議も行った。

東京都の児童相談所では、心理司が TF-CBT のトレーニングを行っている。このプログラムはトラウマに対する治療プログラムであり、その効果が科学的に実証されているものでもある。子どものトラウマ症状の治療を考えるうえでの方法の１つとして検討してもらいたい。

② 子どもに必要な医療的支援を検討し、協力・連携してもらえる医療機関を開拓する

㋐医療機関

鈴木 Dr. が院長を務める筑波こどものこころクリニックとの連携は容易となっており、精神科でもあることから向精神薬も処方可能となっている。

子どもの心身の症状にあわせ、つくば木の花クリニック（つくば市松野木)、紫峰の森クリニック（つくば市島名)、つくば心療内科クリニック（つくば市研究学園）が通院先となった。また候補として、つくばねむりとこころのクリニック（つくば市妻木）も検討を行った。子どもとドクターの相性などもあり、近隣の発達障害の診断・治療、また精神科的な症状の診断・治療が可能な医療機関は常に開拓していきたいと考える。

㋑婦人科系の医療機関

性的虐待のケース、特に女児の場合、理解のある婦人科に受診できることは重要である。現時点では庄司産婦人科小児科医院（つくば市谷田部)、つくば総合クリニック（つくば市要）が受診しやすい医療機関となっている。今年度配置された医療機関等連絡調整員、また性教育委員会とも連携し、通院可能な医療機関は常に開拓していきたいと考える。

③ 依頼に応じ、心理活動等に支障のない範囲で、備品等の貸出しを行う

学校側から依頼があり、知能検査（WISC－Ⅲ）を貸し出した。施設の役割として、施設内の活動に支障がない範囲で、備品等の貸出しは行っていきたいと考える。

≪2019 年度方針≫

◆関係機関と連携をとり、子どものより適切な支援について検討する
◆子どもに必要な医療的支援を検討し、協力・連携してもらえる医療機関を開拓する
◆依頼に応じ、心理活動等に支障のない範囲で、備品等の貸出しを行う

7）その他

≪2018 年度方針≫
◇心理職からの資料や情報提供を行い、子ども支援に有用なことを伝えていく

◇職員のメンタルヘルスに貢献できる取り組みを具体化し、実施する

① 心理職からの資料や情報提供を行い、子ども支援に有用なことを伝えていく

子どもの問題行動だけではなく、保護者の課題など、必要な情報を適宜各部署に伝えることは、子ども支援だけでなく、ケースマネジメントにとっても重要となる。施設入所するケースは、子どもの課題もあるが、保護者側の「適切な養育が困難」と判断された結果であり、その課題も把握した支援が必要となる。

今年度はまとめた資料の配布はなかったが、個々の事例にあわせて、棟・ユニット職員などとは協議してきた。

② 職員のメンタルヘルスに貢献できる取組みを具体化し、実施する

児童養護施設の職員の定着はどの施設においても課題であり、それは「チームワーク」や「人間関係」が要因となることも多い。前年度から施設をあげて、会議時間の短縮や超過勤務の是正に向けて精力的に取組んできた。これらの「見えるかたち」の働きにくさだけではなく、職場の雰囲気やチームワーク、職員同士の連携、対応困難ケースへの対応など、見えない要因にも目を向けるべきだと考えている。

職員が心身に不調をきたすとき、そのきっかけとなる出来事や人間関係の変化、前兆となる言動が必ずある。子どもの些細な変化を観察するように、職員の変化にも気を配り、早めに対応することがポイントとなる。理想を言えば、職員が不調をきたさないような予防的な取組みが組織的に実践されることだとは思うが、現状では相互にコミュニケーションをはかり、問題が小さなうちに対応することが必要ではないだろうか。

心理職としては、年１回程度のストレスチェックを任意で実施し、自身の心身状態などを把握してもらいたいと考えている。子どもへの支援が確実なものとなるために、またチームとして連携した支援を行うためには、職員が心身に不調をきたすことなく働き続けられることが必須となる。そのためには個々の職員が自身の状態を把握することが第一歩となり、良い意味で、相互に支えあえるような関係づくりにも貢献したいと考える。

一般的に、ストレスフルな事象を経験したとき、それが症状化するかどうかは個人のレジリエンスが大きな要因となる。アメリカの論文（2006）では、深刻な外傷体験をした場合、PTSD を発症するのは 14%程度と報告されており、それを左右するのがレジリエンスと言われている。レジリエンスとは「ストレスなどを跳ね返す力」という意味であり、それを構成要素は「自尊感情」、「安定した愛着」、「ユーモアのセンス」、「楽観主義」、「支持的な人が側にいてくれること」などとなっている。

これは子どもにもあてはまることであり、子どもが将来に精神的不調をきたさないため、施設生活が安定し、自尊感情を育む生活が営まれ、子どもと職員の間に良好な関係が築かれることが重要なポイントとなる。

≪2019 年度方針≫

◆心理職からの資料や情報提供を行い、子ども支援に有用なことを伝えていく
◆職員のメンタルヘルスに貢献できる取り組みを具体化し、実施する

３．予算

心理療法に必要な予算として、以下の予算を計上したい。

心理療法にかかる費用	7,000 円×12 ヶ月＝84,000 円	84,000 円
心理検査道具代	20,000 円	20,000 円
合計		104,000 円

治療指導担当職員

2018 年度総括、及び 2019 年度方針(案)

治療指導担当職員　高井　志保里

１．全体総括

１）専門機能強化型児童養護施設事業

4 月から治療指導員に配属され、他の専門職のサポートを受けながら業務に従事してきた。事業のドクターは月 2 回ずつ来園し、森田ドクターには親支援、鈴木ドクターには子ども支援を主に担当してもらっている。鈴木ドクターには生活場面や学校場面の子どもたちの様子を把握してもらい、適応を促す支援や環境調整などについて助言いただいた。森田ドクターには、新規入所児のケース状況を伝え、子ども支援や保護者支援などケース全体に関わる助言等をいただいた。ドクターとのケース検討や面談は、4～5 月は他の専門職がサポートに入りながら対応にあたった。また 11 月からは医療機関等連絡調整員が専門部に加わったため、鈴木ドクターとの面談に参加してもらっている。

２）治療指導担当職員の位置づけ

治療指導担当職員は、実施要綱に示されている内容からも、ケアワーカーと心理職の中間に位置する。生活場面にも積極的に参与し、生活の中でも子どもの課題や問題行動等の改善に向けたアプローチを展開することが求められる。当然ではあるがケアワーカーとの協議・連携は必須であり、心理職としての観点をもち、生活場面で観察される子どもの様子などからアセスメント・支援につなげることが重要となる。

子どもとの個別面談も重要であり、生活場面ではみせないような感情や言動をみせることがある。子どもの訴えの中には事実と異なることもあるのだが、それは事実を正しく認識できていないこともあるだろうし、生育暦も関係するだろうし、自分の都合のいいように嘘をつこうとしているのかもしれない。要はなぜそのようになるのかを考え、必要な支援を具体化していくこととなる。

３）子どもたちの様子

様々な子どもたちが入所しており、最近は発達障がいやその傾向を抱えるケースが多くなってきている。児童養護施設入所児童等調査によるとその割合は 28.5%となっており、一般の割合の約 4 倍となっている。これらの子どもには個々の特性に合わせた支援が必要であり、成功体験を積み重ねて自己肯定感を育んでいくことが必要である。しかし、「問題行動が続き改善に至らないのは、発達障がいを抱えているからである。」と考えることは安易である。発達障がいによる症状と似た言動をする子どもの中には愛着障害を抱えるケースもあるからである。子どもへのより適切な支援を実践していくためには、ケアワーカーとともに子どもの理解を深め、支援に反映させていく必要がある。

２．活動報告

１）心理ケア

≪2018 年度方針≫

◇心理ケアが必要な子どもへの支援内容を計画し、実施する。
◇ケアワーカーや各専門職、ドクターと連携し、より良い支援内容を検討する。

今年度は私自身の知識・経験不足と子どもたちと関係が築けていないことから、個別面

接での心理ケアプログラムの計画・実施は行うことができなかった。来年度は適宜個別面接を行っていきたいと考える。生活場面では、親子交流や学校生活で上手くいかない気持ちを傾聴し、解決にはどのような方法があるか等を一緒に話をした。また子どもの気になる言動があった時には、ケアワーカーや各専門職とも情報を共有した。

来年度も各専門職やケアワーカー、ドクターと協議をしながら、心理ケアが必要な子どもへの支援を具体化したいと考える。

≪2019 年度方針≫
◆心理ケアが必要な子どもへの支援内容を計画し、実施する。
◆ケアワーカーや各専門職、ドクターと連携し、より良い支援内容を検討する。

２）心理検査の実施

≪2018 年度方針≫

◇心理検査を実施し、子どものアセスメントに役立てる。
◇アセスメントに有用な心理検査を定期に実施し、子どもの状態変化やアセスメント、支援に役立てる。

ＡＤＨＤチェックリストは、ケアワーカーと各学校の担任等に定例実施（7 月、2 月）を依頼している。結果は前回の結果と比較ができるようにし、前回よりも点数の増減が大きかった児童に関しては、ケアワーカーから評価に至った詳しいエピソードなどを伺った。その結果、親子交流や学校が小中一貫校になったことによる影響があることが分かった。このチェックリストの目的は、子どもの変化等を推しはかる指標とするためである。服薬前後での変化や経年での変化など、１つの物差しで変化を継続的に記録していくことができる。その為、2014 年度から 2017 年度の結果を児童ごとにまとめ、服薬や年齢による変化を調べた。その結果、Y・I(高 1)や Y・N（高 3）などの昔から服薬しているケースは ADHD 傾向を低く評価されるようになってきている。また ADHD 傾向の高い子どもの入所理由として、2014 年には「養護困難」ケースが多かったが、2017 年は「」えている。

また昨年度、森田ドクターから、子どもの行動チェックリスト CBCL(Child Behavior Checklist)を実施し、入所時の評価をしてはどうかとアドバイスいただいていたが、今年度は 1 ケースしか実施することができなかった。来年度は CBCL も活用していきたいと考える。

≪2019 年度方針≫
◆アセスメントに有用な心理検査を定期的に実施する。
◆心理検査もとに、子どものアセスメントに役立てる。

３）生活場面面接

≪2018 年度方針≫

◇子どもの生活場面の様子を観察し、子どものアセスメントに役立てる。
◇関係職員とも協議・連携し、生活場面における子ども支援を具体化する。

生活場面に入り、子どもたちの様子を直接観察することは重要となる。ケアワーカーから伝え聞く様子や記録だけではなく、実際の生活場面で観察することも含めて、子どものアセスメントや支援に役立てることが必要となる。

今年度はまず子どもたちの顔や名前を一致させること、子どもたちに治療指導員の顔を

覚えてもらうことから始まった。主に夕方から夜の時間にユニットに入り、学習時間や食事の様子、余暇時間の過ごし方等を観察した。治療指導員とユニット職員では、子どもの態度や話の内容がそれぞれ異なることが多い。その為、職員とは相互に情報共有に努め、連携・役割分担して支援していきたいと考える。また来年度は夜の時間帯だけではなく、休日の昼間の時間帯でも観察を行いたいと考えている。

≪2019 年度方針≫
◆休日に子どもたちと関わり、平日の様子の違いを観察する。
◆関係職員とも協議・連携し、生活場面における子ども支援を具体化する。

４）グループワーク

≪2018 年度方針≫

◇グループワークの実施を検討し、具体化をはかる。
・セカンドステップ
・生（性）教育に関する内容など

今年度はまず日本子どものための委員会が行っているセカンドステップ研修を受講した。その後､小学校高学年の児童 4 名､未就学児 6 名のグループでセカンドステップを行った。また小学校低学年男児 1 名に対し、個別でのセカンドステップを行い、トラブルの対処方法や落ち着く方法について学習した。セカンドステップ行っていく中で、特性のある児童がグループワークで集中することが難しく、課題を進めることが困難だった。このことから、定型発達の児童とペースを同じに進めるのではなく、個別での取り組みで、その子のペースに合わせてレッスンを進めていく必要がある。来年度は未就学児・小学生だけでなく、中・高校生を対象にセカンドステップを行いたいと考えている。またグループワークの効果を考え、生（性）教育に関することがらも検討したい。

≪2019 年度方針≫
◆中・高校生を対象にセカンドステップを行う。
◆対象児の特性に合わせて、個別またはグループワークを行う。

５）日常生活や課題等への助言・アドバイス

≪2018 年度方針≫

◇各棟会議への参加、ケアワーカーとの協議を通して、助言・アドバイス等を行っていく。
◇子どもの問題行動への対応・支援について、ケアワーカーと一緒に検討する。

今年度はケアワーカーに助言・アドバイスをするより、ケアワーカーから治療指導員に適宜助言をいただくことが多かった。また生活場面面接やケアワーカーとの協議の中で、気になった点などは心理職や専門機能のドクターに相談をした。相談した結果等は該当部署に報告し、より良い子ども支援につながるように反映させていく。

≪2019 年度方針≫
◆子どもの問題行動への対応・支援について、ケアワーカーと一緒に検討する。

６）外部機関との連携

≪2018 年度方針≫
◇関係機関と丁寧に連携し、より適切な子ども支援に貢献する。

①筑波こどものこころクリニック

ＡＤＨＤ症状があり､筑波こどものこころクリニックに定期通院しているケースがある。発達障がい・精神疾患等の服薬をする場合には保護者の同意が必要となっている。筑波こどものこころクリニックの鈴木ドクターが来園しているので、来園した際などに事前に情報等を伝えることができる。

今年度は処方薬の一時的紛失と通院漏れという問題が起こった。原因としては、薬を管理する場所が整っておらず、薬ケースの後ろのスペースに残薬が入ってしまったこと、引率職員を決定する・通院ファイルの記載を失念したことがあげられる。このことは子どもの安心･安全に関わることであり、また施設の信用･信頼に関わることでもある。その為、該当の棟だけでなく、筑波こどものこころクリニックに定期通院している子どもすべての通院予定、処方された薬・残薬を把握し、問題の再発防止に努めた。また 11 月からは薬の管理を医療機関等連絡調整員が行うようになり、1 週間分以上の薬は事務棟の医務室に保管されることとなった。通院ファイルについては、通院前に心理職か治療指導員の確認印を押す、通院後に施設長の確認印を押すことで記載漏れや引率職員の確認を徹底することができた。

②学校関係

上記の「心理検査の実施」でも記載したが、7 月、2 月には幼稚園と小・中・高学校にＡＤＨＤチェックリストを依頼してきた。また授業への参加が困難な小学校高学年男児の様子を観察しにユニット職員と学校へ伺った際には、担任の先生が男児の学校での様子を詳しく話してくださった。学校での様子を把握するために、来年度も丁寧に連携していきたいと思う。

≪2019 年度方針≫
◆通院漏れや薬の紛失などの問題の再発防止に努める。
◆関係機関と丁寧に連携し、より適切な子ども支援に貢献する。

７）専門機能強化型児童養護施設制度

≪2018 年度方針≫
◇専門機能強化型児童養護施設事業のドクターとの連携を主に担い、助言等を全体周知する。
◇事業のドクターからの助言等を子ども支援に反映させる。

専門機能強化型児童養護施設制度とは､「治療的･専門的ケアが必要な児童への適切な支援を行い、もって児童の社会的自立の促進を図ること」を目的としている。詳細は「専門機能強化型児童養護事業の総括・方針」で記載する。

この事業によりドクター2 名が月 2 日ずつ来園しており、それぞれのドクターに役割を依頼している。鈴木ドクターには子ども支援を担当していただき、森田ドクターには親支援を担当していただいている。鈴木ドクターには主に子どもの生活状況や学校での様子などを把握してもらい、子ども支援や環境調整について助言いただいている。また 7 月に行ったＡＤＨＤチェックリストの結果を見ていただき、発達障がい傾向の高い子どもに対しては通院の検討を行った。夏季の結果の中で特に傾向の高い評価を受けていた A・H(小 2)は 11 月に通院につなげ服薬することとなった。そして、冬季の結果では、夏季よりもその傾向が低く評価されるようになった。

森田ドクターにはケース全体についての助言をいただき、子ども支援だけでなく親支援についても助言・アドバイスをしていただいている。子どもが保護者と交流を進めるうえで生起するリスクもあり、今年度の夏休み中には、外泊交流をしていた実母が継父に物を壊される実例もあった。ドクターには交流中断の必要性や継父に対する暴力防止プログラムが必要との助言をいただいた。

≪2019 年度方針≫
◆ケアワーカーがドクターへ相談がしやすいように、書類などを整えていく。
◆事業のドクターからの助言等をケアワーカーと共有する。

８）予算

前任の治療指導員が用意した教材や消耗品がまだ多くある為、来年度の予算は削減したいと思う。

≪2019 年度予算≫

内容	内訳	合計
教材費等	4,000 円×12 ヶ月＝48,000 円	48,000 円

自立支援コーディネーター

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

自立支援コーディネーター　大澤　亮

＜全体総括＞

今年度はコーディネーター（以下自立ｃｏ）として２年目を迎え、どのように現場に入り、現場のニーズを確認しながら業務を組み立て、アフターケアを行えばよいかを実践する一年間であった。コーディネーターの主となる業務は２つあり、１つは退園児、卒園児、家庭復帰児童へのアフターケアと在園児のインケア、卒園間近の児童や退園間近の児童を対象にしたリービングケアがメイン業務であり、その他として支援団体などからのキャリアセッション、地域の青年会との調整などを行ってきた。

今年度アフターケアに関しては、対象児が在籍していたユニット、棟の職員と連携、情報共有をしながら対応する事が出来た。自立ｃｏと生活棟職員が連携してアフターケアを対応する事で、柔軟に対応する事が出来た。年度末になり、卒園生の緊急対応が迫られるケースが立て続いて起きているが、そのようなリスクを減らす取り組みとしては、インケア、リービングケアの充実を図る事であると感じた。また進学をした児童の定期的なアフターケアを行い、奨学金や給付金の部分をきちんと把握する事が進学後に学業を継続させる取り組みとして急務であり、園としても通帳管理などの具体的な対応策を検討し実施していく必要性があると感じるため、年度内もしくは年度初めまでに具体化を進めていく。

インケアの部分ではユニットに入り、夕食作りなども行ってきたが、年度後半に連れて、夕食を作る機会も減ってしまい機会を提供することが出来なかった。夕食作りを行う事で、子ども達も手伝いなどを積極的に行ってくれた。食事を作れるようになる事より、作る事に抵抗がないという感覚が養われるように次年度は支援をしていきたい。また次年度については月１回ぐらいの目処に各棟に入り、夕食作りを行なえるように支援していきたい。

インケアとリービングケアの支援として、今年度は新しいキャリアセッションをおこなった。あかるい未来作戦会議については、「施設を出たあとの事を施設にいる間に少しずつ考えて準備をしよう」という目的で、施設を卒園、退所したあとの事を考える場となっている。中高生を対象に月に２回同じプログラムをおこない、対象児童が参加しやすい環境作りを行った。参加率については月々でまばらであり、以前からキャリアセッションに参加していた中高生は抵抗なく参加出来ていた。キャリアセッションに初めて参加した児童も積極的に取り組む姿勢も見られた。またそのような取り組みを行う事で、集団を動かす大変さを感じる一年であった。

児童の参加については、自立ｃｏだけでは参加の促しなども対応しきれず、こども会議やユニット職員からの声掛けの協力などを行ってもらっている。だがスタートの時間に間に合わない児童がいるのは現状であり、時間を意識して行動出来ない中高生にどのようにアプローチしていくかは、ユニット・棟職員と連携して次年度対応していく必要があると感じた。

今年度自活訓練の要綱作成まで手が及ばず、再提案までに至っていない事は反省点であ

り、早急な対応が求められる。自活訓練については、生活棟単位で独自に具体化し、自立ｃｏと連携して対応してきた。次年度の早い段階で自活訓練の要綱を再提案し、自活訓練の枠組みを整理していきたい。

支援団体との調整や支援者とのコミュニケーションについては、今年度は特に大きな問題はなかった。だが支援をして頂く方達に対する考え方や対応については、今一度振り返る必要があると感じる一年であった。愛児園は数多くの支援者に支えられている現状があり、子供たちへのキャリアセッションやイベントなどでは、職員や子供たちがどのように関わるかで支援者に与える印象も変わってしまう。特にキャリアセッションや行事の参加、不参加などについては、相手がいる事を意識して、失礼のないように対する事が必要である。社会人として、職業人としても、児童の見本となるような言動を心掛け、そのような文化が愛児園職員全体に根付くように、次年度も取り組んでいきたい。

CO の業務については東京都から示されている役割は以下の通りである。

①自立支援計画作成への助言及び進行管理
②児童の学習・進学支援、就労支援等必要に関する社会資源との連携、他施設や関係機関との連携
③高校中退者などに個別対応が必要な児童に対する生活支援、再進学又は就労支援
④退所者に関する継続的な状況把握及び助言（アフターケア）

１．アフターケア

≪2018 年度方針≫

・卒園生のアフターケアについては棟・ユニットと調整を行い実施していく。
・退所後支援計画書の確認に関しては、会議日に設定し月１回実施していく。

総括

今年度のアフターケアに関しては各生活棟と連携を取りながら､対応する事が出来たが、後追いの支援が多くなってしまった。生活状況などが心配される対象児には生活棟と連携をして連絡を入れるなどの対応を取っていたが、連絡がつかない対象児などもおり、問題が起きてから対応する事が多かった。

退所後支援計画の運用方法や会議の持ち方に関しては、ＦＳＷと連携して対応方法を協議してきた。今年度から始めた退所前ケース検討に関しては、退所後支援計画書を有効活用する取り組みとして行ってきたが、退所後支援計画書の確認などを行う程度に終わってしまい、有効活用する事が出来なかった。次年度については退所後支援計画書を有効活用出来るようにＦＳＷと連携をして取り組んでいきたい。

≪2019 年度方針≫

・卒園生のアフターケアについては棟・ユニットと調整を行い実施していく。
・ＦＳＷと連携して対処前ケース検討を定期的に実施していく。

2．インケア

≪2018 年度方針≫

・年度初めに中高生を対象にした個別面談を実施し、個々のニーズの把握に努める。
・支援企業や団体の協力を仰ぎ、職場体験を計画的に実施する。
・職場体験先の新規開拓を行う。

2-1　職場体験

総括

個別面談に関してはしっかりとした面談とはいかないが、日々の生活の中で日常会話の中から話しをしてきた。次年度はケースに応じて担当職員と意見交換をしながら、面談やユニットに入り、話しが出来るような環境を整えていきたい。

今年度は職場体験を実施した児童は高校１年生のＡ・Ｔ(高 1)が実施したのみであったが職場体験を通して、色々な仕事を知る良い機会となった。また支援企業や協力団体などと連携して職場体験の開拓を継続して行っている。

夏休みに実施しているシナジーワールドワイドジャパンのインターンはＡ・Ｔ（高１）が取り組んだが、一人暮らし体験を行うことで、社会に出てからの生活を実体験する事が出来た。次年度も 1 名ではなく、2 名の受け入れなどの調整が出来るかどうかの調整と、別企業でのインターン受け入れの調整を進めていきたい。

インケアの取り組みとして、各棟に夕食作りに行くことをおこなってきた。夕食をユニットで作り、職員も 2 名いる事で児童に対して、手厚く対応する事が出来た。だが年度後半になると夕食作りをおこなう日程を確保出来なかったため、次年度は月 1 回程度各棟に入れるように調整をしていきたい。

≪2019 年度方針≫

・支援企業や団体の協力を仰ぎ、職場体験を計画的に実施する。
・職場体験先の新規開拓を行う。
・夕食作りについては、各棟と調整をして実施していく。

2-2　おしごとリップ

総括

今年度おしごとリップについては、「一時休止」となっており、2019 年に向けて体制を整える 1 年となった。2019 年に向けて愛児園ともう 1 施設を対象におしごとリップをおこなって行きたいという思いがあり、担当レベルで調整をした結果、クリスマスヴィレッジと合同で行う事となった。2019 年からのおしごとリップはリビングインピースがオフィスを構えたため、そのオフィスで実施する事となる。中高生を対象に、1 年間のプログラムを行って行く。

次年度については一年間の継続した活動となるため、対象児の人選については、中高生全員に説明を行うのと同時に、各担当職員と連携を取りながら活動に参加する事が必要と思われる児童については、参加出来る方向で調整をしていきたい。

≪2019 年度方針≫

・1 年間の活動を通して、仕事の幅を広げる活動を行う。
・活動を通して、コミュニケーション能力の向上を図る機会としていく。

３．進学支援

≪2018 方針≫

・高校見学については対象児が在籍している棟・ユニットと調整し柔軟に対応する。
・棟・ユニットのニーズに応じて、進学時の奨学金や生活のシミュレーションなどを行う。

総括

高校見学については、対象児童のいるユニット職員と調整を行い、勤務補助を行ってきた。また必要に応じて、送迎対応をおこなった。現場だけでは長期休暇中に高校見学の対応を行いきれないため、自立ｃｏと連携して対応してきた。

アルバイトや奨学金のシミュレーションについては、生活棟職員からのニーズを元に、アルバイト代の計算シミュレーション表の作成や奨学金や自立生活の生活費のシミュレーションを行ってきた。エクセルを使い、計算表を作る事で子ども達に視覚的に働きかける事が出来るため、職員と一緒に考える良い機会となった。

≪2019 年度方針≫

・高校見学については対象児が在籍している棟・ユニットと調整し柔軟に対応する。
・棟・ユニットのニーズに応じて、進学時の奨学金や生活のシミュレーションなどを行う。

４．その他自立に向けた取り組み

≪2018 度方針≫

・卒園を迎える対象児童に必要な資源の確保をしていく。
・生活棟へ卒園を迎える児童がエントリー出来る企画のアナウンスを行う。
・巣立ちのための６０のヒントを使い自立に向けた話し合いを行う。

総括

今年度の取り組みとして、卒園対象児に関しては奨学金の案内や貸付事業などの案内を年度初めから行い、漏れがないように取り組んできた。巣立ちのための６０のヒントを有効活用する事はできなかったが必要に応じて対応してきたが、次年度はその本に書き込みを行い、卒園対象児一人ひとりにプレゼント出来るように予算組みをしていきたい。

今年度も資生堂の「社会への巣立フェスティバル」という抽選で紳士服、レディーススーツが無料でもらえる企画にエントリーし、卒園児童４名当選した。

4－1　卒園児童プログラム

≪2019 年度方針≫

・生活棟へ卒園を迎える児童がエントリー出来る企画のアナウンスを行う。
・巣立ちのための６０のヒントを使い、卒園時に卒園対象児童にプレゼント出来るように一年間かけて本に書き込みをしていく。

4－2　ＩＴ講習

≪2018 年度方針≫

・学年に合わせた IT 講習会の企画し、実施する。
・パソコンなどの機材の寄付の開拓をしていく。

総括

今年度パソコンの講習会などに関しては、企画までには至らなかった。パソコンがユニットに整備されてからはユニット毎に何かあれば職員が対応しており、自立 CO が対応する事はなかった。次年度以降は必要に応じて自立 CO がユニットに入り対応していきたい。

パソコンなどの寄贈に関しては、パソコン寄贈のイベントなどがあるためそれを活用していきたい。

≪2019 年度方針≫

・パソコン寄贈イベントなどに卒園対象児などが参加できるように情報収集、アナウンスを行っていく。
・必要に応じて、Excel、Word、PowerPoint の学習会を個別に実施していく。

4－3 自活訓練

≪2018 年度方針≫

・自活訓練の要綱の作成を行う。
・支援して頂ける企業の開拓を行う。

総括

自活訓練の要綱に関しては、今年度中に整備を行うまでには至らなかった。現在自活訓練の要綱は前任者が作成した物が職員会議で再提案扱いとされており、今年度卒園予定の対象児に関しては、担当職員と連携して対応している状態となっている。次年度の前半には自活訓練の要綱を全体で共有し、承認を得て 2019 年卒園予定児童の自活訓練を行っていきたい。

自活訓練を行う上で、園内で行う自活訓練も必要ではあるが、園外での自活訓練も実施可能な状態となっていれば、そのような機会を通して、得られる物も大きいという思いから、夢のアトリエというキラリンピック 2018 を支援して頂いた方から、園外での自活訓練を行う為に、ウィークリーマンションを借りるための寄付を行ってもらったが、自活訓練の要綱が間に合っておらず実施には至らなかった。次年度は支援して頂ける企業の開拓も同時に進めていきたい。

≪2019 年度方針≫

・自活訓練の要綱の作成を行う。
・支援して頂ける企業の開拓を行う。

4－4 ＹＴＣ（ユースチームチャレンジ）

≪2018 年度方針≫

・YTC の引率の調整、対応を行う。
・YTC の活動報告を職員会議時に行う。

総括

今年度ＹＴＣでは２名の児童を対象に年間のプログラムを通して、行ってきた。ＵＢＳオフィスが大手町にあり学校終了後、大手町まで通う事は多少の負担にもなっている。そのため帰りの移動経路に関しては、高速バスを使ってつくば駅まで帰ってきたが、時間的な物もあり、子ども達と相談しながら帰りの経路を決めている。今年度はみつばユニットのＳ・Ｉ（高 2）とひまわりユニットのＡ・Ｔ（高１）の 2 名が対象であり、前半のプログラムでは積極的に活動する姿が見らえたが、卒業制作ぐらいから日程の変更があり、毎週水曜日に大手町に行くようになると、Ｓ・Ｉの方が不調を起こし、卒業発表に参加する事が出来なかった。原因としては、卒業プログラムに向けた取り組みが進まなかった事と、卒業発表日の付近に各学校の期末テストなどが予定されており、卒業発表日を速めた事が原因である。ＹＴＣに参加していた児童とはコミュニケーションを取り対応していたが、活動が後半になるにつれて、学校関係の予定も慌ただしくなり、各個人の負担が大きくなった事や引率の部分でコミュニケーションをもっと密に取る必要があると感じた。そのため次年度は２ヵ月に一回程度、参加児童と活動について振り返る場を設け、今年度の反省を繰り返さないように取り組んでいきたい。また卒業発表直前に活動回数を増やさないような取り組みとして、課題をきちんと終わらせる事など、協力団体の職員が進捗状況をきちんと確認する事で、予定したスケジュールで実施出来るように次年度は取り組んで行きたい。

次年度の対象児童はつくしホームから 2 名選出しており、Ｔ・Ｏ（高 2）とＳ・Ｎ（中 3）を候補児として対応していく。

ＹＴＣ引率対応スケジュール		
実施日	内容	場所
4 月 18 日	YTC キックオフ	UBS 大手町オフィス
5 月 12 日 5 月 13 日	春合宿 春合宿	筑波愛児園 茨城県鹿嶋市
6 月 24 日	手話イベント	UBS 大手町オフィス
7 月 18 日	定例会	UBS 大手町オフィス
8 月 22 日	オフィスツアー	UBS 大手町オフィス
9 月 15 日 9 月 16 日	秋合宿 秋合宿	山梨県小淵沢 山梨県小淵沢
9 月 29 日	多文化ウォークラリー	多文化共生センター
10 月 10 日	卒業制作	UBS 大手町オフィス
10 月 24 日	卒業制作	UBS 大手町オフィス
10 月 31 日	卒業発表最終回	UBS 大手町オフィス

≪2019 年度方針≫

・YTC の引率の調整、対応を行う。

５．児童部会自立支援コーディネーターグループ委員会

≪2018 年度方針≫

・自立支援コーディネーターグループの活動に参加し、専門業務の向上を目指す。
・活動に参加した場合は職員会議にて内容の報告を行う。

総括

今年度コーディネーター委員会の全体会、学習会には全て参加する事が出来た。全体会や学習会では自立支援に関する情報を得る事が出来た。だが得た情報をその都度職員会議時などに共有するまでには至らなかったので、次年度は運営委員会の報告事項として報告していきたい。

自立支援コーディネーターグループ

≪2019 年度方針≫

・自立支援コーディネーターグループの活動に参加し、専門業務の向上を目指す。
・委員会活動を通して、知りえた情報は運営委員会の報告事項に報告する。

６．他部署との連携

総括

≪青空棟≫

今年度青空棟には卒園対象児がいないため、年度末に向けた自立支援はおこなっていない。だがインケア、リービングケアの一環として、キャリアセッションでは棟内の中高生が参加しており、参加についての意見交換などはその都度行ってきた。また高校受験を迎える児童の対応については、オープンキャンパスなどの日程と自立 CO の日程が合わず、対応しきれなかった。また 2 月にM・M(高 2)の卒園までのスケジュール（案）については、助言を求められ、スケジュールに奨学金や日本学生支援機構の申請のスケジュールを追記するなどの対応を取った。

≪太陽棟≫

太陽棟とは中学生の高校見学や自立生活スタート支援事業の面接などの対応で、引率や留守番対応、面接同行などを行ってきた。高校進学を迎える児童、卒園予定の児童が多く在籍している事から、3 棟の中で一番連携、協同を意識して対応してきた。

自立生活スタート支援事業の申請書類に関しては、各ケース担当が申請書類の作成を行ったが、棟内でマネジメントする職員を 1 名配置してもらい、自立 CO と連携して対応する事が出来た。そのため棟内でも支援事業について、理解が深まる良い機会となった。

≪さくら棟≫

さくら棟には高校進学予定の児童が 2 名いるが、補助体制の部分から自立が補助に入る事はなかった。高校進学者でＮ・Ｔ(中 3)に関しては、高校進学の部分で私立単願受験を選択したため、担当ユニット、自立 CO、と月 1 回の振り返りを行う事となった。Ｎ・Ｔの生活が乱れた時にはその都度話し合いの場を設定し、対応した。

チューリップユニットの幼児とは自立に向けた取り組みを定期的に行う事は出来なかった。各幼児に「将来なりたいものは？」という絵を書いてもらった。見本を見ながら各々好きな絵を書いたが、名前などを書いている時にＫ・Ｙ（5 歳）の鏡文字などを発見する事が出来た。幼児からの自立支援については将来の希望などを膨らませる部分で、四季毎に取り組んでいきたい。

≪つくしホーム≫

つくしホームは高校進学予定の児童が 2 名おり、高校見学の留守番や送迎対応などをおこなってきた。またＴ・Ｏ（高 2）のアルバイト代のシミュレーションなどをおこなった。自立生活スタート支援事業の申請については､ケース担当と連携をして､取り組んできた。面談日に関しては、担当職員が面談に同行するため、自立 CO が留守番対応をおこなった。

自立支援コーディネーター次年度予算

今年度予算立てをしておらず、次年度に向けた活動の一環として、書籍の購入を行いたいと考えています。そのため書籍購入分の予算の計上をお願いしたいと思います。

項目	金額	備考
書籍購入	10,000 円	書籍購入 （巣立ちのための 60 のヒント、その他）

医療機関等連絡調整員

２０１８年度総括、及び２０１９年度方針

医療機関等連絡調整員　　野木　怜

Ⅰ.医療機関等連絡調整員の位置づけ

医療機関等連絡調整員は、実施要綱に示されている内容より、乳児院等における医療機関との連携強化を図り継続的な服薬管理や健康管理が必要な児童等の円滑な受け入れを促進するとしている。医療機関等との連携を密にするとともに、必要に応じて他の関係機関とも連携し効果的な支援ができるように努めることが重要となる。

Ⅱ.医療機関等連絡調整員の業務内容

①医療的ケアが必要な児童等に対する支援及び緊急時における対応等
・対象児童の医療的ケア及び緊急時における対応等
・医師又は嘱託医との連携
・緊急時における医療機関との連絡調整
・対象児童の医療機関への受診及び行事への付き添い

②医療的ケアが必要な児童等の健康管理及び身体発達上や健康上の相談への対応
・常備薬の管理及び与薬
・病欠児及び早退児の観察
・入所者の健康管理

③その他医療的ケアが必要な児童等への支援のために必要な業務
・感染予防
・その他医療機関との連絡調整
・処遇検討会議への出席をすること
・養護に関する必要な研究、調査、統計に関すること

Ⅲ.活動報告

Ⅱ－①
・対象児童の医療的ケア及び緊急時における対応等
総括
Ｎ・Ｍ（高２男児）の異食行為時の緊急対応については、自身が勤務時間外で不在だった為、生活棟職員が対応している。よって入職より現在まで、緊急を要する怪我や病気の対応はしておらず通常通りの通院対応のみの実施となった。今後、緊急を要する児童が出た場合は迅速に対応していく。

・医師又は嘱託医との連携

総括

鈴木医師との面談では対象児の生活の様子や内服薬について話し合い、子ども支援など生活全体に関わる助言を頂いた。今後、児童がより良い日常生活を送れる様、各生活棟職員より医師に相談したいこと等を情報収集し児童の様子を共有していく。

・緊急時における医療機関との連絡調整

総括

Ｎ・Ｍ（高２男児）が入院中であり、病院のケースワーカーとの連絡を心理士と行ってきたが、まだ自身の経験が浅く心理士を中心に連絡をしてもらっている状態の為、心理士・他職員より学び積極的に行動できる様にしたい。

・対象児童の医療機関への受診及び行事への付き添い

総括

生活棟からの通院依頼についてのマニュアルを作成した。生活棟で対応できない通院に対し、通院依頼の窓口を一本化し医療機関等連絡調整員に連絡してもらい医療機関等連絡調整員が対応できる場合は医療機関等連絡調整員が対応し、対応できない場合は治療指導員・個別対応職員に対応してもらい業務を円滑に回せるよう対応してきた。しかし、完全な周知に至っていないため連携ミスがあった。今後、生活棟職員・治療指導員・個別対応職員と情報の共有を行いミスのない様、対応していく。

Ⅱ－②

・常備薬の管理及び与薬

総括

定期通院している児童の内服管理は行っているが、常備薬に関しては今まで通り各生活棟にて管理を行っている。定期通院している児童の内服管理は医務室で一括管理とし、個別の内服ケースに一週間分セットし内服ケースを各生活棟に渡し対応している。始めたばかりは内服忘れが多くみられたが、声掛けし徐々に減ってきている。しかし、まだ内服忘れが無くなってはいない為、引き続き声掛けをする必要がある。

・病欠児及び早退児の観察

総括

体調不良児に対して、未就学児は１日に二回、児童は１日に一回の全身状態の観察を行ってきた。夜間は自身が不在の為、担当職員に注意点を伝え状態観察の確認を行っている。引き続き体調不良児の全身状態の観察を十分に行っていくと共に自身も感染しない様、注意をはらい行っていく。

・入所者の健康管理

総括

出勤後、児童の養育日誌を閲覧し児童の状態を知る他、生活棟に足を運び状態確認を行っている。また可能な限り児童と直接会い観察をしている。今後も引き続き行っていく。

Ⅱ－③

・感染予防

総括

保健衛生係・感染症係に所属し活動している。自分から積極的に発信できるようにスキルアップしていく。

・その他医療機関との連絡調整

総括

場合により児童の予防接種の予約の電話を行っている。生活棟職員に児童の予定を聞き、十分に把握したうえでミスのない様に行っていく。

・処遇検討会議への出席をすること

総括

園内のケース検討会議への出席の他、Ｓ・Ｉ（高２女児）の問題行動について、子どもの通う高校にて開催した関係者会議に参加をした。今後も必要時、関係者会議に参加し子どもの対応を生活棟職員と協力し行っていく。

・養護に関する必要な研究、調査、統計に関すること

総括

現在、実施に至っていない。2 月 15 日アレルギー研修参加予定。

２０１９年度方針

・医師、各生活棟職員と連携し児童がより良い日常を送れる様、支援する。
・緊急時における医療機関との連絡調整を行う。
・対象時児の医療機関への受診及び行事への付き添いを行う。
・体調不良時の状態観察及び入所者の健康管理を行う。
・定期通院児童の服薬管理を正確に行う。
・子供の病気・感染予防等の定期的な勉強会の実施。

地域支援担当職員

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

地域支援担当職員　川村　いくみ

≪2018 年度方針≫

・ショートステイの委託契約した市町村と連携を図りながら利用者の受け入れをおこなっていく
・育成会係と協働しながら地域行事に参加していく
・子ども家庭センター、つくば市の子育て支援センターと連携を図りながら情報収集を行っていく

1.　全体総括

地域支援担当職員としての業務は、子育て支援短期養育事業（以下「ショートステイ」とする）を中心に水守地区との地域交流、地域支援、勤務補助業務、東京都社会福祉協議会の児童部会子育て支援事業委員会、今年度から茨城児童福祉協議会(研修部)活動がある。
前年度に引き続きつくば市とショートステイ事業の委託契約を締結した。また、龍ヶ崎市とも委託契約し各関係機関と連携を図りながらショートステイの受け入れを行ってきた。だが、勤務の兼ね合いもあり受け入れ態勢が取れず、地域支援担当・フリー職員、各棟の衛生推進と密な調整は行ったが今年度は受け入れるまでは至らなかった。スムーズに勤務調整がいかず地域支援担当職員の補助業務が増加したことで、ショートステイの受け入れが難しくなってしまった。
ショートステイを受け入れるにあたり、他施設での取り組み内容や運営方法を学ぶために、施設見学や情報交換をしながら園として取り組める事を参考にし、次年度は取り組んでいきたい。

勤務補助に関しては、さくら棟の補助業務・フリー職員と地域支援担当で（4 週 10 日）を行った。4 月～6 月頃までは、10 日間入る事は出来ていたが業務の都合により 10 日間入れない日もあった。その為、効率よく回す為に衛生推進係と連携し、勤務が出られる日、出られない日の表を作成し業務に支障がないよう対応してきた。また、補助業務内容をフリー2名と地域支援担当と話し合いを行い、業務内容を精査した。その後は、精査をした事で業務に支障をきたす事はなく行う事が出来た。

地域交流として、育成会係や生活棟と連携をしながら、育成会の活動・秀峰義務教育学校の活動に参加した。育成会の活動では、育成会集まり・太鼓練習引率・地域支援担当や係で対応できない部分に関しては、園として協力してもらい対応した。また、S・H(3 年男児)筑波幼稚園の同窓会が開催あり、一緒に同行した。生活棟と連携して早めに日程調整を行ったことで、それぞれの活動に参加することが出来た。育成会・学校行事など積極的に参加して、地域との交流を図っていく。

東京都社会福祉協議会の児童部会子育て支援事業委員会では、主にショートステイ事業についての内容だった。地域間での違いがあるが参考になる部分は取り入れ利用者に最適なサービスを提供できるようにしていく。次年度も引き続き参加し情報を共有しながら知識を深めていく。

活動報告

1）ショートステイ事業

前年度に引き続きつくば市・龍ヶ崎市とショートステイ事業の委託をし連携を図りながらショートステイの受け入れを行ってきた。今後は、子育て支援関係の研修会への参加や施設見学をし、地域の子育て支援について理解を深めていき、地域とのネットワークを広げていく。

利用状況については以下の通りである。
〇ショートステイ事業依頼状況報告
2018 年度ショートステイ利用一覧表

	件数	年齢・性別	人数	利用理由	受入可否・理由
4 月	0 件				
5 月	1 件	兄妹ケース 7 歳男児・3 歳女児	2 名	母親が仕事・祖母が体調不良の為	否・1 泊 2 日 勤務体制調整不可の為キャンセル
6 月	1 件	2 歳男児	1 名	父親が入院する為	否・ 1 週間程 勤務体制調整不可の為キャンセル
7 月	1 件	3 歳女児	1 名	母親が入院する為	否・7 月か 8 月の所 1 週間程 母親が長期の入院が必要な事で一時保護になった。
8 月	1 件	11 歳・10 歳 6 歳・3 歳 全員男児	4 名	母子家庭、末っ子が入院の為	否・1 週間程 勤務体制調整不可の為キャンセル
9 月	0 件				
10 月	0 件				
11 月	0 件	7 歳女児	1 名	母親が仕事の為	否・2 泊 3 日 勤務体制調整不可の為キャンセル
12 月	0 件				
1 月	1 件	8 歳男児・6 歳女児	2 名	母子家庭、母親が入院する為	否・1 週間程 職員体制調整不可の為キャンセル
2 月	1 件	12 歳女児	1 名	母親が病気の為	否・1 週間程 利用者の都合でキャンセル
合計	6 件				

○ショートステイ利用者実績報告
今年度は、実績がなかった。

2) 地域交流

育成会係と日程調整をするなどの連携を図り、水城子供会の活動に協働してきた。地域交流の活動として水守地区の行事に出来る範囲で参加をした。子どもを通して関わりのある保護者と挨拶する程度から始まり、愛児園の職員だと地域の方から覚えてくれるようになった。良い関係性が出来ている為、引き続き水守地区の活動に積極的に参加しながら地域と良好な関係づくりを行っていく。

廃品回収については、毎回新聞紙や段ボールなど各部署に協力を促すなど回収物をより多く提供できるよう心がけてきた。次年度も育成会係と連携を図りながら地域に貢献していきたい。

今年度の活動内容

日付	項目	活動内容
4 月 1 日	育成会総会	研修センター 19:30～
5 月 7 日 5 月 19 日	秀峰連絡協議会 秀峰奉仕作業	秀峰話し合い 16:00～ 小 1 年～小4年
6 月 15 日	田水山小 閉校実行委員会	田水山小 18:30～ 各部会進捗状況確認
6 月 24 日	太鼓練習引率	水守地区公民館 17:30～19:00 小3年生以上参加 太鼓練習引率
7 月 1 日 7 月 1 日	育成会役員会 太鼓練習引率	研修センター 19:30～ 水守地区公民館 17:30～19:00 小3年生以上参加 太鼓練習引率

12 月 2 日	クリスマス会及び 1 年生を迎える会	引率・役員　9:30～14:00
2 月 3 日	育成会役員会	研修センター　19:30～ 来年度の活動計画についての話し合い
2 月 10 日	育成会総会	研修センター　19:30～

3) 勤務補助

職員補助は、地域支援担当とフリーグループとさくら棟（月 10 日程度）、の補助業務を行うこととなった。勤務作成手順として、地域支援担当業務を優先し、該当部署の衛生推進係と連携し補助日の選定を行なった。ショートステイ対応以外にも、茨児協の研修部の集まり・出張・研修など、地域支援担当としての業務を除いて補助を行ったため、棟が必要とする日や時間帯に補助に補助として入る事は少なかった。次年度以降体制が整った際には、今年度の反省を踏まえ各部署と連携を取ながら補助業務を行っていく。

4) その他

①児童部会　子育て支援事業委員会

東京都社会福祉協議会の児童部会子育て支援事業委員会では、主にショートステイ事業についての研修だった。特別区の児相設置の進捗状況や施設見学や乳児院における利用状況や支援事業に求められる役割の学習会や通常ショートステイや要支援ショートステイの各施設の業務内容など、委員会では話し合いを重ねてきた。愛児園として何が出来るのか考えながら利用者に最適なサービスを提供できるように次年度検討していく。

②研修

今年度は、東京都委託事業子どもの育ちを支える小児健康管理、全国社会福祉協議会主催の子どもの育ちを支える、子ども・子育て全国フォーラム、セカンドステップ、職員の確保と定着のために取り組んでいる事、福祉職員キャリアパス管理職員研修に参加した。どの研修も施設で活かせるものだった為、その知識と経験を取り入れていく。

今後こうした取り組みが実践されていくということを踏まえ、地域支援担当として、自治体や地域の子育て支援団体と情報共有をしていく。

3. 会計関係

○2018 年度支出内訳

科目	金額	備考	執行状況
教養娯楽費	10,000	パズル・玩具等	7,230
消耗器具備品	5,000	ジョイントマット	4, 968
日用品	5,000	シャンプー・リンス等	2, 227
合計	20,000		14,425

○2019 年度予算（案）

項目	金額
教養娯楽費（教材費）	10, 000
消耗器具備品	5, 000
日用品	5, 000
保健衛生費	3, 000
合計	23, 000

≪2019 年度方針≫

・ショートステイの委託契約した市町村と連携を図りながら利用者の受け入れをおこなっていく
・育成会係と協働しながら地域行事に参加していく
・子ども家庭センター、つくば市の子育て支援センターと連携を図りながら情報収集を行っていく

青空棟

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

すいれんユニット　茂木　竜也
立川　歩美
渡辺　茜
なのはなユニット　安積　雄介
櫻井　あかね
加藤　輝
フリー　小林　拓巳

ユニット構成

すいれんユニット

１	Y・I	男	茨城県立つくば特別支援学校高等部　１年生
２	E・T	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　９年生
３	R・T	女	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　４年生
４	T・N	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　４年生
５	K・T	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　２年生
６	M・A	女	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　１年生
			※４月２日入所
７	K・S	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　１年生
			※５月１０日入所

なのはなユニット

１	M・M	女	東豊学園つくば松実高等学校　２年生
２	F・Y	男	筑波県立筑波高校　１年生
３	A・K	女	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　６年生
４	S・K	女	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　４年生
５	S・H	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　３年生
６	R・M	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　２年生

全体総括

児童構成に関しては年度初めにM・A（小１女児）とK・S（小１男児）が入所となり、１３名中９名が小学生、４名が中高生であった。小学生の割合が高く、年齢層は広かったが、生活作りにおいては子ども会議で年少児から意見の出ることも多かった。行事の立案においても年齢層を考慮しながら皆が楽しめて、成長していけるような目的を持って取り組む事が出来た。

職員集団に関しては異動等での変更はなく、昨年度と同様の職員構成であった。年度初めには昨年度の職員集団としての振り返りと、より一層の向上をしていく為に何が必要かを話し合う機会を設けた（※資料１）。より一層の向上を図る点では自然と役割分担が出来るように「自発的に主体的に行動できるようになる事」を目標とした。結果、子ども支援において何が必要なのか・先の事をイメージして何が必要になるのかを考えて個々が都度のタイミングで判断し、実行する事が出来た。年度初めに実施した話し合いは新たな年度のスタートにおいて良い機会であった。

部署会議については一人の意見・考えに偏るのではなく、各職員が自身の意見を発信して、多面的な協議が出来ていた。それは職員として一人ひとりの発信する意識が向上した事が要因であった。一つの支援方法に対して意見が分かれる場面もあったが、協議をしていく中でチームとして一つの形にまとめる事が出来ていた。それは発信するだけでなく、他者の意見を聞き、調整する力を個々が持っており、職員集団として取り組む上では大事なことであると認識をしていたからこそ確立出来た事であった。目標及び支援方法、役割分担を徹底していく上で部署会議は大きな役割を担っている。各ユニット在籍児童に関する協議をする際には、必ずユニット職員は参加をした。ユニット児童と一番密接に関わりを持つのはユニット職員であり、ユニット職員は責任と自覚を持つ事が必須である。それと同等に棟職員全員が棟運営であると意識をする事も必須である。会議録においてもユニットを跨いで各職員が記載をする事が多々あり、棟運営に対する意識の表れであった。この両方が確立して会議を行なえたからこそ、年度を通じて質の高い会議に取り組む事が出来た。

人材育成については所属部署内での 0JT が基本になると考える。年間を通じて部署内での 0JT に対する意識が向上し、成果を挙げる事が出来た。仲の良い職員集団で終わるのではなく、時にはお互いに足らない部分・成長を期待する部分を伝え、話し合う機会も多くあった。スーパーバイズ（SV）をする際にはバイザーとバイジー間での信頼関係が必須になる。部署内の雰囲気も含めて職員間の信頼関係・何でも相談できる関係は築けていた。棟内での SV はバイジー側の一層向上をしたいという意識と、バイザー側のどのように成長していってほしいか・それを伝えていく為に自身のスキルアップもしなければいけないという意識の両方があった。だからこそ指導管理するのではなく、視野を広げる・理解を深める成果に繋がったと感じている。また、棟内で重層的 SV の形が確立している事も人材育成に繋がった大きな要因であった。それは一人ひとりが棟でフォローし合い、全体で支え

ていく意識があるから達成できたことである。

年度を通じて些細なことでも情報共有をし、話し合える集団であり、他職員が直面している事案でも自身の事のように捉え、取り組む事が出来た。チーム一丸となって取り組む事で後手の支援ではなく、先を見据えた支援に繋げる事が出来、問題や課題が生じてもチームで乗り越える事が出来た一年間であった。次年度も職員集団としての取り組み全てが子ども支援に繋がっている事を認識し、取り組みを行っていく。

２、養護の基本方向（方針）と重点課題

2-1）基本方針

≪2018 年度方針≫

① あいさつが出来る子になろう ② 嘘をつかない子になろう ③ 人の嫌がることをしない子になろう

棟の基本方針として、日々の子ども達との関わりの中で話題に用いる事が出来ていた。児童間でトラブルが生じた際にも大切な事として子ども達に伝えてきた。棟の基本方針であるという以前に対人スキル・社会で生きていく上で大切な事であると位置づけて伝えて来た。次年度も棟の基本方針として挙げている 3 つを基盤として支援に繋げていく。

≪2019 年度方針≫

① あいさつが出来る子になろう ② 嘘をつかない子になろう ③ 人の嫌がることをしない子になろう

2-2）重点課題

≪2018 年度方針≫

①子どもの問題となる行動や状況 性別関係なく、子ども同士の距離感を伝えていく。 対人スキルの向上を図る取り組みを行う。 ②職員側の課題となる行動や状況 職員間で情報共有をして、支援の統一を図る。 個別の時間の確保をする（生活の中・外出先など）。

子どもについては、それぞれの距離感に限らず、トラブルになった際に具体的な言動をアドバイスすることで、対人スキルの向上にも繋がるよう対応した。小学校高学年に対しては、職員が介入するだけでなく、自分たちで話し合い解決することの必要性や相手の気持ちを考えることについても伝えた。自分たちだけで解決できた時には都度称賛した。相手との距離感については『腕一本分の距離を保つこと』と具体的に話をしてき

たことが、子ども達の意識の中にも定着しつつある。また、同性であっても他児の部屋で遊ぶ場合には職員に一声掛けるということを徹底した結果、子ども達の中にも定着してきた。

職員の行動や現状については、一人ひとりが意識して情報共有を行った。棟会議ではより具体的に『何を目的に』、『どのような過程で』、『だれが』、『何を』、『いつまでに』、『どうするか』などの確認を丁寧に行なったことで、支援を統一する事が出来た。子どもとの個別の時間を確保することについては、就寝前の時間を主に活用した。子どもにとっても気持ちを表出しやすく、職員にとっても気持ちや考えを伝える場となった。この時間に話が出来たことがそれ以降の支援に大きな意味を持つ事が多かった。またM・M(高２女児)、A・K(小６女児)、R・T(小４女児)に関しては、それぞれと話をした上で職員との交換ノートを行なった。子どもが気持ちを表出する一つのツールとして効果があった。個別外出は、子どもの要望に沿った計画を立て実施することが出来た。

集団生活の中でも一人ひとりを個として考え、子ども達が『自分の事をちゃんと見てくれている』という気持ちになれるように支援してきた。

≪2019 年度方針≫

①子どもの問題となる行動や状況
　性別関係なく、子ども同士の距離感を伝えていく。
　対人スキルの向上を図る取り組みを行う。
②職員側の課題となる行動や状況
　職員間で情報共有をして、支援の統一を図る。
　個別の時間の確保をする（生活の中・外出先など)。

３、生活集団への支援（※子どもへの支援内容）

3-1）子ども会議

≪2018 年度方針≫

①週１回、ユニットごとに子ども会議を開催する。
②子どもから議題が発信しやすい環境作りをする。
③内容によって、個々の特性に応じて対応する。

子ども会議は毎週木曜日に実施した。予定を確認するだけでなく、玄関に靴が散らかっていることやおやつ箱に私物を入れていることが多く片付けを促すと、意識して片付けが出来る様になり称賛することもあった。約束事の再確認をし、出来た際には翌週に称賛する機会を設けた。出来ていない際には繰り返し話をして促した。テレビの録画・パソコン・入浴の順番等について要望があった際には、子ども達が主体となり話し合いを行った。特に小学生から意見が出ることが多く、子ども会議の場を通してみんなで意見を出し合い、決定することが定着してきた。子ども会議前には職員間で議題について協議をし、整理をした上で子ども達との話し合いに臨んだ。意見が食い違い子ども達だけで決められない場

合には、職員が介入しアドバイスすることで円滑な話し合いを行うことが出来た。年度初めは自分の意見を押し通そうとする児もいたが、他児の意見を聞きどのようにするべきか改めて考えられるようになってきた。自分だけでなく、全員が納得いく方法を考えることで自然と譲り合う姿も見られるようになった。自分の気持ちを伝えることが苦手な児も、子ども会議の場では積極的に参加し意見を述べることが出来、子どもの成長を感じられる場でもあった。

≪2019 年度方針≫

①週 1 回、ユニットごとに子ども会議を開催する。
②子どもから議題が発信しやすい環境作りをする。
③内容によって、個々の特性に応じて対応する。

3-2）安心安全な生活のための子どもへの支援

≪2018 年度方針≫

①日々の生活や子ども会議で安心安全な生活について話題にあげ、意識を高める。
②ヒヤリハット報告を養育日誌や棟会議で漏れなく共有する。
③子ども会議や就寝時間を使って「権利ノート」への理解を深めていく。また、必要に応じて「生活のしおり」の読み合わせも行なっていく。

子ども会議や日々の会話の中で、身近に起こり得る事件や事故について話題に挙げ、注意喚起した。園生活の安心安全についても、園庭での遊び方や道路で遊ぶことの危険性を伝えた。

ヒヤリハットは養育日誌や棟会議で共有した。些細な事案でも共有する事で、事故を未然に防げるように取り組んだ。

権利ノートについては、年齢構成が幅広かったため、子ども会議での読み合わせに加えて個別で読み合わせをすることで、より深い理解に繋げた。生活のしおりについては、長期休みの前等に確認を行い、生活時間の再確認のために活用した。

≪2019 年度方針≫

①日々の生活や子ども会議で安心安全な生活について話題にあげ、意識を高める。
②ヒヤリハット報告を養育日誌や棟会議で漏れなく共有する。
③子ども会議や就寝時間を使って「権利ノート」への理解を深めていく。また、必要に応じて「生活のしおり」の読み合わせも行なっていく。

3-3)行事

≪2018 年度方針≫

①子どもを交えて話し合い、ユニットごとの行事を年１回は行なう。
②夏季行事・クリスマス会・冬外出は棟で行なう。
③年１回の個別外出を実施する。

ユニットごとの外出については子どもと話し合い、内容を決め GW に外出を行った。夏季行事は子ども達の成長を感じる機会とするため、昨年と同様の活動を行った。昨年はバナナボートに乗れずにいた子どもも今年は乗ることが出来喜ぶ姿が見られた。３日間を通して大きな怪我もなく、年少児から年長児まで楽しんで参加する事が出来、棟としての絆を深める事ができた。秋には棟で男女に分かれて初めて外出を行なった。男児外出ではキャンピングカーをお借りし、いつもとは違う雰囲気を味わうことが出来た。職員と子ども間でも良い関係性作りとなり、とても良い経験となった。クリスマス会も毎年同様棟で実施した。子ども達の食べたいものを事前に聞き、準備・調理に至るまで子どもと職員で役割分担をして行った。また夏季行事の動画を作成し、クリスマス会中に一緒に動画を鑑賞する時間を作り、の思い出など笑顔で話す良い時間となった。今年度も、冬の棟外出として季節感を味わえるよう、イルミネーションを見に行った。帰園後も「綺麗だった。楽しかった。」など子ども達にとって良い機会となった。そして年度末には宿泊の棟外出を予定している。

個別外出については、個々のニーズに応えられるよう話し合い、外出を実施することができた。普段とは違う環境の中で子どもとの関係性を築く機会となった。

次年度以降の行事についても職員が子どもに何を経験させたいか、何を伝えていきたいのかを常に考え、子どもたちと話し合いながら決めていく。

≪2019 年度方針≫

①子どもを交えて話し合い、ユニットごとの行事を年１回は行なう。
②夏季行事・クリスマス会・冬季外出は棟で行なう。
③年１回の個別外出を実施する。

3-4）生・性教育への取り組み

≪2018 度方針≫

①話しやすい環境を作り個々のレベルに合わせ、子ども達が正しい性（生）知識を身につけることが出来るようにしていく。
②自分自身が大切な存在であると感じる機会として、誕生日には職員からの色紙を渡す。

Ｍ・Ａ（小１女児）の入所後、福祉司から弟の死について告知された。ユニット内で他児や職員に弟の話をすることが多かったが、告知を受けてから弟の話をすることが減った。父親・祖父母から貰った手紙を読んで欲しいということがあり、職員が手紙を読

むと涙を流しながら聞いていた。弟の死の悲しみや父親に会いたい気持ちが強く、「なんで先に死んじゃったの」「一人になっちゃった」と泣き叫ぶこともあった。10 月になり弟の話が良く出てくるようになり、改めてケースを見返すと弟の誕生日が近いことが分かった。心理担当職員と連携し、弟の死の悲しみを乗り越える為の支援について模索した。死の理解が出来るよう、棟職員全員で手作りの絵本を作成した。どのようにアプローチをし、その中で何を伝えるのか・本児からはどのような質問があるか・何度も話し合いを重ね、ロールプレイで確認しながら丁寧に取り組んだ。当日は、手作り絵本の導入から始まり、亡くなってしまったが、本児の中でずっと生き続けていること、弟の思い出話や辛くなった時は職員に話をしてきて欲しいことを伝えた。その後、シュークリームにロウソクを立て、弟の誕生日を祝福した。祝福出来たことに驚いており、「来年もお祝いしたい」と笑顔が見られた。翌日以降は、手作りの絵本を読んで欲しいと言ってくることが続き、職員に読み聞かせてくれることもあった。弟の死について触れない方がいいのか迷いもあったが、一緒に祝福出来たことはとても良い機会となった。今回の取り組みを通して、子どもだけでなく職員全員が生について考える良い取り組みであった。

Ｙ・Ｉ(高１男児)は自身に障がいがあるのではないかと職員に話があった。相手と話をする際に目を合わせられない・コミュニケーションが上手く取れないと悩んでいた。自分自身のことに疑問を持ち、知りたいと思う事について肯定し、以前まで服薬していた経緯についても振り返りを行なった。現在服薬を中止し、自身で感情をコントロール出来ていることは大きな成長であると伝えた。障がいがあるないに囚われず、これからも本児らしくいて欲しいこと・何か困ったことや知りたいと思った時はいつでも職員に話をしていいことを伝えた。今後心理担当職員と連携し、障がいについての理解を深める場を設ける。

誕生日にはユニット内で誕生会を開く事が多かった。中高生はユニットか外食をする選択制を取っているが、ほぼ全員がユニットでの誕生会を希望していた。職員だけでなく、子ども達が調理や飾り付けを率先して手伝ってくれることが多く、ユニット全員で祝福することが出来た。職員からのメッセージを書いた色紙を渡したり、ユニット玄関に誕生会の写真を飾った。貰った色紙を大切に居室に飾っている児童も多く、自分自身が大切な存在であると感じる機会となった。

Ｓ・Ｋ（小４女児)、Ｒ・Ｔ（小４女児）は年齢的にも下着を自身で管理出来るよう話をした。下着を異性の職員に見られることへの羞恥心があり、自身で洗濯ネットに入れて洗濯をし、居室で洗濯を干すことを始めた。ただ干すのではなく、下着が見えないようタオルで覆う等、配慮して干すことが出来ていた。

Ａ・Ｋ（小６女児）は同級生と交際していると話があり、都度自身の身体を守ることの大切さや成長期の身体の変化について話をした。生理用品の使用方法や生理用品を入れたポーチを用意し、持ち歩く必要性について同性職員から話をした。

≪2019 年度方針≫

①話しやすい環境を作り個々のレベルに合わせ、子ども達が正しい性（生）知識を身につけることが出来るようにしていく。
②自分自身が大切な存在であると感じる機会として、誕生日には職員からの色紙を渡す。

４．一人ひとりの成長のために

4-1）日常生活への支援

≪2018 年度方針≫

①健康・衛生
・職員が子どもの健康状態を見ながら、早期発見し通院を行なう。
・保菌検査を提出できた際には賞賛する機会を設ける。
・布団を定期的に干す。
・全員が予防接種、健康診断を受ける。
②衣類
・衣類購入の際には、タンスの整理を行ない必要な衣類の購入を行なう。
・季節に合った服を揃え、着用できるようにする。
③整理・身辺自立
・土日の掃除の時間には、子ども自らが掃除機をかけ自室の掃除を行なう。
・小学生には入浴前に衣類をタンスに片付けることができるよう促す。
・中高生には各自で洗濯し、畳んでタンスにしまうことができるよう促す。
・自他の区別が出来るよう、共有スペースに私物は置かない。
・帰園時に自分の靴を下駄箱に片付ける。
④社会性・礼儀・マナー
・挨拶を元気に行なえるよう、職員からも積極的に挨拶をする。
・棟外出・ユニット外出を通して、公共施設でのマナーを身につけられるようにする。
・「ありがとう、ごめんなさい」が素直に言えるよう、声をかける。
・食事中の携帯を使用しないように声をかける。
⑤生活日課
・棟、ユニットで決めたルール（ゲームや入浴に関して）を守る。

健康・衛生の部分では、子どもの健康状態の変化に注意し、引き継ぎの中で通院する必要性を検討した上で、都度体制を取り対応した。保菌検査については、棟の取り組みとして、提出できた児童への賞賛の機会を設けたことで、提出率が上がった。今後も継続した取り組みをしていく。予防接種については、保健衛生係や医療機関等連絡調整員と連携をし、実施できた。

衣類については、ユニット外出や個別外出などを利用し、子どもの趣向に沿った衣類を購入することが出来た。Ｋ・Ｔ（小 2 男児）やＲ・Ｍ（小 2 男児）は、寒い時期の季節に

あった衣服の着用を拒む傾向があったが、職員側で声掛けを徹底し、登校時にはしっかり上着を着ることが出来ていた。衣類によって体温調節をすることで健康維持に繋がるため、次年度も季節に合った衣類を着用する意味を伝えていく。

土日の掃除の時間には、声を掛けても行動に移せない子や、適当に終わらせてしまう子も見られるため、職員が補助に入りながら、タンスの整理を含め居室を綺麗にする意味を伝え、取り組んだ。また、共有スペースに私物が置いてある状況がみられた。私物は居室に入れるよう継続して声掛けをした事で、改善されてきた。玄関の整理がされておらず、とても乱雑な状況があった。就寝前に自身の靴を下駄箱にしまうよう促し、年末の大掃除の際には、ラックを設け、子ども達がよく使用するサンダルなどを置くスペースとして環境を整えた。年度当初と比べ、玄関が整理されている状況があった。しかし、自発的に靴をしまう事は少なかった為、次年度も意識が継続しできるよう取り組みをしていく。

社会性・礼儀・マナーについては、職員側でお手本となるよう意識をして取り組んだ。夏季行事やユニットで外出をした際には、騒がない・挨拶をする等の公共のルールやマナーをしっかり意識して行動することが出来ていた。様々な場面で自然と『ありがとう』や『ごめんなさい』を言える子が多かった。棟全体で感謝の気持ちを伝えることや相手の気持ちを考えることの大切さを伝えてきた成果であった。

棟・ユニットごとの約束事については、皆が気持ちよく生活できるようにするために、子ども会議等を通じて、子どもと職員が一丸となって生活作りが出来ていた。

≪2019 年度方針≫

①健康・衛生
・職員が子どもの健康状態を見ながら、早期発見し通院を行なう。
・保菌検査を提出できた際には賞賛する機会を設ける。
・布団を定期的に干す。
・全員が予防接種、健康診断を受ける。
②衣類
・衣類購入の際には、タンスの整理を行ない必要な衣類の購入を行なう。
・季節に合った服を揃え、着用できるようにする。
③整理・身辺自立
・土日の掃除の時間には、子ども自らが掃除機をかけ自室の掃除を行なう。
・小学生には入浴前に衣類をタンスに片付けることができるよう促す。
・中高生には各自で洗濯し、畳んでタンスにしまうことができるよう促す。
・自他の区別が出来るよう、共有スペースに私物は置かない。
・帰園時に自分の靴を下駄箱に片付ける。
④社会性・礼儀・マナー

・挨拶を元気に行なえるよう、職員からも積極的に挨拶を行う。
・棟外出・ユニット外出を通して、公共施設でのマナーを身につけられるようにする。
・「ありがとう、ごめんなさい」が素直に言えるよう、声をかける。
・食事中の携帯を使用しないように声をかける。
⑤生活日課
・棟、ユニットで決めた約束事（ゲームや入浴に関して）を守る。

4-2）食事への支援

≪2018 年度方針≫

①②は該当しないためなし。
③調理
・子どもと一緒におやつ作りを行なう。
・ユニット内で調理をする機会を設ける。
④食事場面
・「いただきます、ごちそうさまでした」を言えるよう、職員も意識して食事場面に関わる。
・食器を下げる際は、洗う人の事や次に片づける人の事を考え、食器の種類ごとにシンクに置く。
・食事のマナーを身に付ける。

定期的におやつ作りやユニット調理を行った。子ども達も「一緒に作ってみたい」とおやつ作りや夕食作りに参加してくれた。料理をしている際に家庭や学校の話が出る事が多く、子ども達も構えずに話ができる良い時間となった。今年度から新たに土曜日の朝食作りが始まり、必然的にユニット調理を行う回数が増えた。子ども達から「〇〇を作って欲しい」「自分で作るから手伝って」など、発信してくれる場面が増え、調理する楽しさを実感する事が出来た。また、ユニット調理を行う事により子ども同士で『作ってくれた人がいるから残さないで食べよう』という会話をすることもあり、ご飯が出てきて当たり前ではなくご飯を作ってくれている人に感謝することの大切さを伝える良い機会となった。

食事場面はユニットにより雰囲気は異なるが、子どもの特性・様子によって職員側が食事の雰囲気作りをするように心掛けた。学校での出来事など子ども達から話題が出る場面も多く、より家庭的な雰囲気での食事となった。全員が揃うタイミングでご飯を食べ始めるため、「いただきます」はしっかりと言う事が出来ていた。しかし、各々食べ終わるスピードが異なり、早く遊びたいという気持ちもあり「ごちそうさまでした」を言う習慣はあまり浸透していない。職員が意識を高め発信していくことで、子ども達の意識も向上すると考える。今後はより一層意識を高め、子ども達への声掛けを行っていく。食器の片付けは以前より意識して食器の種類ごとにシンクに置くことが出来ていた。また、洗う人の事

を考え「これ水に浸した方が洗いやすいかな」と言ってくれる子もいた。都度洗う際にとても助かると感謝の気持ちを伝えた。まだ乱雑においてしまう子どももいるため、継続して声を掛けていく。食事のマナーについては、なのはなユニットでは年長児が年少児にマナーを教えてくれる場面が多く、年少児の中でも食事のマナーに対する意識が向上している。「毎回言われてしまうから嫌だ」と不満が出る事もあるが、年少児が将来困らないように声を掛けてくれているという気持ちを代弁した。声を掛けてくれる年長児に対しては、感謝の気持ちを伝えつつ、職員側で声を掛けるためあまり気にしすぎなくても大丈夫であると都度話をした。すいれんユニットでは、離席や膝立などが目立ち、食事のマナーが確立されていない。都度声を掛けてはいるが、意識の改善には至っていないため、今後もどのような対応が良いか職員間で確認し合い、マナーの改善を目指していく。

≪2019 年度方針≫

①②は該当しないためなし
③調理
・子どもと一緒におやつ作りを行なう。
・ユニット内で調理をする機会を設ける。
④食事場面
・「いただきます、ごちそうさまでした」を言えるよう、職員も意識して食事場面に関わる。
・食器を下げる際は、洗う人の事や次に片づける人の事を考え、食器の種類ごとにシンクに置く。
・食事のマナーを身に付ける。

4-3）豊かな人間関係づくり

≪2018 年度方針≫

① 地域との連携・学校場面、習い事など
・学校行事や地域行事、部活の保護者会等には積極的に参加する。
②親子関係
・家庭訪問未実施の家庭には FSW・福祉司と連携し家庭訪問に行く。
・外泊時には外泊許可書、面会時には面会許可証を書いてもらい、ファイルに綴っていく。
・外泊・面会時に持ち帰ったものを確認し、預かり書を書いてもらう。
③フレンドホーム
・フレンドホームとの関わりを通じて、家庭の良さを味わいながらコミュニケーション能力向上を図れるよう FSW と連携し、交流を進めていく。

授業参観、親子教室、運動会、文化祭等の学校行事には積極的に参加した。保護者と交

流可能なケースに関しては可能な限り見に来てもらえるよう FSW と連携し調整を図った。子どもたちが日々頑張っている姿を保護者に見てもらうことで、親子関係の構築に繋がるよう取り組みを行なった。習い事に関して年度初めには、５名がスイミングを習っていた。A・K（小６女児）は目標の級に達成することができ、いままで頑張っていた事を称賛した。T・N（小４男児）は昨年度から少年野球に習いっている。技術だけではなく教えてもらえることへの感謝の気持ちや社会性を身に付ける事ができた。

育成会の地域行事に関しても、各部署で役割分担を行い、参加した。子どもたちも祭りの太鼓練習や廃品回収では自分たちの役割をきちんと理解し、最後まで責任をもって取り組むことが出来ていた。地域の輪に入ることで園外の子どもたちと交流する機会も増え、地域に馴染んでいた。

K・S（小１男児）、M・M（高２女児）のケースについては業務分担をしたうえで FSW と福祉司が家庭訪問を実施した。家庭環境の把握が出来、支援につなげることができた。外泊許可書等についても FSW と連携して行った。

S・H（小３男児）、Y・I（高１男児）はフレンドホームとの交流を継続して行なった。Ｓ・Hは、公園やショッピングモールなどで日帰りの交流を行った。Ｙ・Ｉは連休や長期休みを利用し外泊を行った。

今年度方針にコミュニケーション能力の向上を掲げていたが、ユニット生活の中で補える部分である。そのためフレンドホーム交流では本来の目的である家庭的な雰囲気を味わうことに重きを置き、方針を変更する。

≪2019 年度方針≫

①地域との連携・学校場面、習い事など
・学校行事や地域行事、部活の保護者会等には積極的に参加する。
②親子関係
・家庭訪問未実施の家庭には FSW・福祉司と連携し家庭訪問に行く。
・外泊時には外泊許可書、面会時には面会許可証を書いてもらい、ファイルに綴っていく。
・外泊・面会時に持ち帰ったものを確認し、預かり書を書いてもらう。
③フレンドホーム
・フレンドホームとの関わりを通じて、家庭的な雰囲気を味わうことが出来るよう交流を進めていく。

５．学校生活と学力を育てる取り組み

5-1）学校生活への支援

≪2018 年度方針≫

①登校：声掛けを行ない、登校への意識を高める。 下校：子どもたちの状況に応じて迎えなどの対応を取る。定時時間の付き添いは実施する。 ②学校行事などは早めに保護者に連絡し、出来るだけ参加してもらえるようにする。 ③小学生は学校の用意を前の日までに行えるようにする。 ④週末の勤務者が週明けの持ち物・宿題の確認を行ない、正確に引き継ぎを行なう。

小学生は登校時間に合わせて起床や朝食、出発時間等細かく声掛けを行なった。中高生は前日に起床時間を確認し、起床時間以外は自身で時間を見て行動出来る様必要以上に声掛けはしなかった。自身で時間を意識し準備を行なう事が出来ていた。登校時には職員も一緒に門扉のところまで送り出しを行なった。中高生は学校や日常の話をする機会となり、良い個別の時間となっていた。今年度から小学生はスクールバスでの登下校になり、バス停まで生活棟職員が交代で付き添いを行なった。Ｋ・Ｔ（小 2 男児)、Ｒ・Ｍ（小２男児）はスクールバスでのトラブルが多く、前日の就寝時間の振り返りや送り出しの際に職員が事前に声掛けすることを徹底した。安全面の配慮だけでなく、車内でトラブルがあった際には添乗員に状況を確認し、子どもと振り返りを行なった。また、児童会での振り返りをする場を設けた。少しずつではあるが、全員が意識して乗車する事が出来る様になってきた。

運動会や親子教室等の学校行事については、日程が分かり次第交流可能な保護者に連絡を入れ、積極的に参加して貰った。予定が合わない場合や交流が無い子どもは、職員が必ず対応するようにした。

学校の準備については、宿題が終わった後に準備をするよう声掛けを行ってきた。ランドセルや箸セットの準備は出来ていたが、出発時間前に靴下や紅白帽子が無いと探すことが多く、前日にきちんと確認しておくように声掛けを行なってきた。Ｓ・Ｈ（小 3 男児）は忘れ物が多く、トークン法を用いて意識付けを行った。夏休み明けからは、トークン法ではなく毎朝の声掛けや忘れ物をした際の振り返りを行うことで、少しずつ改善が見られた。週末は宿題の範囲・進み具合や持ち物等抜けが無いように書面に書き出し、引継ぎを行なうことで抜けが無かった。

学校生活において、Ｋ・Ｔは友人間でのトラブルが多く見られた。担任教諭と連絡を取り合い情報共有を図った。その結果ユニットでも学校生活の振り返りを行ない、支援の統一ができた。継続して支援することで本児への意識付けにもなるため、週１回の定期連絡を行なった。今後も必要に応じて取り組んで行く。

≪2019 年度方針≫

①登校：声掛けを行ない、登校への意識を高める。
　下校：子どもたちの状況に応じて迎えなどの対応を取る。定時時間の付き添いは実施する。
②学校行事などは早めに保護者に連絡し、出来るだけ参加してもらえるようにする。
③小学生は学校の用意を前の日までに行えるようにする。
④週末の勤務者が週明けの持ち物・宿題の確認を行ない、正確に引き継ぎを行なう。
⑤トラブルがあった際には、学校と定期的に連絡を取る。

5-2）ユニットでの取り組み

≪2018 年度方針≫

①休日の学習時間は朝晩で３０分ずつ行なう。
②外部の学習支援を利用して学力の向上を図る（塾、進研ゼミ）

休日の学習時間は児童にも浸透しており、個々で宿題や課題に取り組んだ。長期休みに入った際には、宿題を確認し必要に応じて子どもと相談しながら、計画表の作成を行った。以前まで計画表を作っていたが、自身で見通しを立てながら取り組めるようになった児童もおり、成長が見られた。

Ｅ・Ｔ（中３男児）が通塾したいと話があった。職員と話し合いを重ね社会・数学の２教科を選択した。その結果数学の点数が上がった。Ｆ・Ｙ（高１男児）に関しては、テスト前指導をしたいと希望があり、学生ボランティアと調整を行ないながら取り組んだ。その結果、学力の向上に繋がった。

≪2019 年度方針≫

①休日の学習時間は朝晩で３０分ずつ行なう。
②外部の学習支援を利用して学力の向上を図る（塾、進研ゼミ）

６．社会的自立・進学への支援、アフターケア

6-1）社会的自立・進学への支援

≪2018 年度方針≫

①自分の小遣いを計画的に使えるようにする。金銭管理をきちんと行うために小遣い帳を漏れなく記入する。
②高校生には早い段階から学校見学などを行ない、目標を意識化できるようにする。
　また将来を見据えて、その子に合った進路選択を提示する。
③中学生には高校進学の為に学習塾や通信教育の利用を促したり、学習ボランティアと連携し、受験生指導等に繋げていく。

金銭管理については、計画的にお小遣いを貯められるようにしてきた。Ｆ・Ｙ（高１

男児）については、高校生活の安定が図れたことと、社会経験について話し合った結果１１月からアルバイトを開始した。その後アルバイトを継続して行い、携帯使用料を支払い続けられる見込みができたため、携帯電話を購入した。本体代は本児の特性を考慮し、アルバイト代と今までの貯蓄を合わせ、一括で支払うこととした。Ｍ・Ｍ（高２女児）については、アルバイト代から毎月の使用金額を職員と相談し、お小遣いに加算してきた。それと並行して貯蓄も行っている。通帳を貯蓄用と使用可能なもので分け、計画的に使える力を付けるため、使用可能なものは自己管理とした。

進路については、Ｍ・Mが夏休み中に興味のある分野のオープンキャンパスに参加した。しかし未だに明確な方向性が出ていないため、今後より様々な選択肢を伝えることで考えを深めながら、具体的な進路確定に繋げていく。

中学生の通塾については、夏休み明けにＥ・Ｔ（中３男児）から「高校受験が不安だ」という理由で希望が挙がった。通塾に対する意思確認を行い、本児の自主学習の様子などを見た上で塾の体験を行った。体験後に再度意思確認を行うと意思は変わりなかったため、週２回通塾することとした。その結果テストの点数が上がり、自信に繋がっている。

≪2019 年度方針≫

①自分の小遣いを計画的に使えるようにする。金銭管理をきちんと行うために小遣い帳を漏れなく記入する。
②高校生には早い段階から学校見学などを行ない、目標を意識化できるようにする。
また将来を見据えて、その子に合った進路選択を提示する。
③中学生には高校進学の為に学習塾や通信教育の利用を促したり、学習ボランティアと連携し、受験生指導等に繋げていく。

6-2）アフターケア

≪2018 年度方針≫

①自立支援コーディネーターや FSW と連携して、退所後援助計画書を作成する。また、その計画書を元に情報共有を行ない、計画書に沿った支援を行なう。
②アフターケアを行った時（訪問・手紙・メール・電話）は、記録に残す。
③緊急なアフターケア対応の時には、勤務補助を依頼する。

対象となる児童に関しては、自立支援コーディネーターやＦＳＷ、関係機関と情報共有を図り、直接本人と連絡を取り合い対応した。ケースによって自立支援コーディネーターや FSW と連携し、臨機応変に対応する事が出来た。

記録に関しては、些細なメールや電話のやり取りの記載が抜けてしまうことが多かった。自立支援コーディネーターやＦＳＷと情報共有は密に行えている為、今後は記録の抜けが無いよう棟内でも声を掛け合い取り組んでいく。

今年度はＲ・Ｓ（２０歳男）が強盗で逮捕され、家庭裁判所の審判の際や鑑別所、少年院へ面会に行った。実母は連絡も取れない状況であり、子どもからは職員が本当の親のようだと話が出ていた。現在は手紙交流を主に行っており、まずは出所後の生活を目標に少年院での生活を頑張りなさいと伝えている。Ｍ・Ｎ（２１歳女）は、交際相手の子どもを妊娠してしまい、どうすればいいかと連絡してきた。相談を聞いてあげることは出来るが、当人同士、家族での話し合いがとても大切になると都度アドバイスした。一度は相手と別れ実家に戻ることになってしまったが、その後の話し合いで結婚し２人で子どもを育てていくことになった。在園中の子どもへの関わりやアフターケアでの関わりを通して、子ども達に「何かあれば職員に相談しよう」という気持ちが根付いていると感じる。今まで行ってきた子ども達への関わりが、全て今のアフターケアに繋がっている。卒園後は自身で生活していかなければいけないが、頼れる大人がいる事や自分の居場所がある事を今後も伝え続けていく。また、職員が子どもの様子を追い続けていくことで、退園しても繋がりが途切れる事はないと子ども達に伝えていく。

≪2019 年度方針≫

①自立支援コーディネーターや FSW と連携して、退所後援助計画書を作成する。また、その計画書を元に情報共有を行ない、計画書に沿った支援を行なう。
②アフターケアを行った時（訪問・手紙・メール・電話）は、記録に残す。
③緊急なアフターケア対応の時には、勤務補助を依頼する。

７．棟運営

7-1）円滑な棟運営のために

≪2018 年度方針≫

①棟会議
会議をスムーズに進められるよう、前日までに会議録の記入を行なう。
児童対応で棟会議に参加出来なかった職員にも周知を図るため、常に会議録の把握ができるようにしておく。
②記録
棟日誌の引き継ぎ欄を活用し、情報の漏れが無いようにする。
養育日誌については児童状況（支援方法・児童の反応）について、全ての職員が情報把握できるよう記載する。
ヒヤリハットは口頭での引き継ぎだけでなく、ヒヤリハット報告書の記入も行なう。
③会計など
帳簿の記入ミスをなくすため、複数人で確認を行ない、補助簿への記入漏れも無いようにする。

仮払い申請書や物品購入伺い書の提出期限を厳守する。

棟会議に関しては事前の会議録への記入も多く、一定の成果を出す事が出来た。一人が疑問に思った事・検討事項に挙げた内容に対して他職員が自身の意見や考えを記入する又は他者の考えを聞き、自身の考えを深める事で会議の質の向上に繋がった。検討事項を提議する事に関してはまだまだ向上を要する部分でもあり次年度も一人ひとりが一層意識し、向上できるように取り組んでいく。引き継ぎ時に各職員が会議録に目を通す事も定着しており、情報共有の徹底に繋がっている。

記録に関しては情報共有の部分では棟日誌の引き継ぎ欄を活用しての対応が出来ていた。養育日誌は要点を捉えた記載をする事が出来ており、情報共有の徹底に繋がった。

会計に関しては金種別表への記入漏れがあった。部署会議内で議題として挙げ、徹底して対応するように周知を図った。しかし、記載漏れがある事もあった為、次年度は物品購入者が責任を持って対応し、金種別表の記入漏れがないかチェックをしていく。仮払い請求や物品購入については部署会議にて請求対応・購入対応の役割分担を行ない、対応する事ができた。

≪2019 年度方針≫

①棟会議

会議をスムーズに進められるよう、前日までに会議録の記入を行なう。

児童対応で棟会議に参加出来なかった職員にも周知を図るため、常に会議録の把握ができるようにしておく。

②記録

棟日誌の引き継ぎ欄を活用し、情報の漏れが無いようにする。

養育日誌については児童状況（支援方法・児童の反応）について、全ての職員が情報把握できるよう記載する。

ヒヤリハットは口頭での引き継ぎだけでなく、ヒヤリハット報告書の記入も行なう。

③会計など

帳簿の記入ミスをなくすため、複数人で確認を行ない、補助簿への記入漏れも無いようにする。

仮払い申請書や物品購入伺い書の提出期限を厳守する。

7-2）安心安全な環境整備

≪2018 年度方針≫

①防災への取り組み

毎月の避難訓練において、災害時を意識して取り組んでいく。

②環境整備

ユニット毎に修繕箇所を集約し、棟会議でまとめて依頼する。また、自分たちで修繕出

来るものに関しては、自分たちで行なう。
子ども達に定期的に声を掛け、自転車置き場の整備を行なう。

子ども達が災害時を意識し行動できるように、職員が声掛けを行ない避難訓練への参加を促してきた。新規入所児には避難経路の説明なども併せて行なった。

棟内の修繕箇所については、施設長への報告を行ない、破損の度合いに応じて職員で修繕をした。駐輪場の整備については、子ども会議などを利用し、子ども達に意識付けを行なったことにより、少しずつ改善が見られた。また、登校の送り出しの際に駐輪場が乱れている様子があれば都度職員が整備した。

≪2019 年度方針≫

①防災への取り組み
毎月の避難訓練において、災害時を意識して取り組んでいく。
②環境整備
ユニット毎に修繕箇所を集約し、棟会議でまとめて依頼する。また、自分たちで修繕出来るものに関しては、自分たちで行なう。
子ども達に定期的に声を掛け、自転車置き場の整備を行なう。

7-3）関係機関との連携

≪2018 年度方針≫

①児童相談所
年度初めにケース担当の福祉司へ挨拶を行ない、必要に応じて電話や面会を行なう。
②学校など
電話連絡などを用いて情報共有を密に行ない、児童状況の把握に努める。
個々の課題を共有し、相互での共通支援を行なっていく。
③医療機関
通院前には、児童状況や薬の残量把握を棟会議で行なう。
各担当医師と児童状況の変化を含めた情報共有を図っていく。
④ボランティア
子どもと学習ボランティアの方と学習の後の進捗状況確認を行い、子どもの意欲向上に繋げる。
個別ボランティアの方と意見交換を行い、情報共有を図る
新たなボランティアの受け入れに関しては、ボランティア係と連携して行なう。
ボランティアへの感謝の気持ちを伝える取り組みをする。

児童相談所とは、年度初めにそれぞれのケース担当を確認する際に挨拶をすることができた。また必要に応じて子どもとの面会などを行った。面会・外泊等交流があった際には保護者や子どもの様子を伝え、情報共有をすることが出来た。Ｍ・Ａ（小１女児）は父親

が弟を虐待死させた疑いがあったため、書類送検されたとメディアで報道された。結果不起訴であったが、都度担当福祉司と連絡を取り合い、最新の情報の共有と対応について協議した。棟として心理職員と連携し、児の今後の生活のためにどのような対応をするか検討した。その内容を担当福祉司当てに送付し、児童相談所内で検討して貰い、それを踏まえて関係者会議を実施した。今後も児にとって長い目で見て寄り添った支援を行えるよう、児童相談所と密に連絡を取り合い対応していく。

学校とは、子どもの様子で共有しておくべき内容は、電話連絡を行い漏れなく情報共有することが出来た。M・Aの上記に関する件は、児童相談所からの情報や児に影響があった際の対応方法など、都度情報共有を行った。父親の書類送検がメディアで報道された際には、職員が学校に行き直接話をした。学校での窓口も教頭先生に一本化され、情報の伝達をスムーズに行う事が出来た。E・T（中３男児）に関しては、受験生としての意識が低く、学校内でガムを噛んだりピアスを開けてしまうなどの逸脱行動が続いた。学校教諭から連絡を受け、帰園後に話をしたり、職員が学校に行き学校教諭と情報共有し、都度協議をして対応した。K・T（小２男児）に関しては、友人に暴言暴力をしてしまう、学校教諭の話が聞けないなど、トラブルがあった際には都度連絡を貰った。園で振り返りをすると自身に非があることは認め、反省する事が出来ていた。また、話の中で先生に対する不満が出た。先生に言っても聞いてくれないという気持ちが強かったため、児の気持ちについて職員から代弁し学校教諭に伝達した。今後も支援方法を統一し対応できるよう、学校教諭と都度連絡を取り合っていく。

医療機関とは、定期通院の際に子どもの情報を共有することが出来ている。棟会議内で通院に行く職員を決め、該当職員のみでなく他職員も意識を高く持ち声を掛け合うことで、抜けなく対応する事ができた。Y・I（高１男児）は小学生の頃からこどものこころクリニックへ定期通院を行っていた。高校生になり、服薬をせずに生活したいという要望が挙がったため、担当医に相談しながら対応した。服薬を開始した経緯について説明し、児もイライラした気持ちを軽減させる薬であると理解を示していた。その上で服薬を止めたいと再度話があり、日々の服薬を止め、イライラした際には服薬するようにと担当医からの指示を受けた。夏季休暇に服薬を止め、その後「イライラするから薬を出して」と数回言ってきたため服薬したが、現在は服薬せずに落ち着いた生活を送ることが出来ている。

ボランティアとは、筑波大学習ボランティアの方々と年２回の定期ミーティングを行い、各自の学習の課題や情報の共有を行った。記録簿やミーティングを活用して子どもの状況や課題などの情報共有をした。記録簿への返信の抜けが多かったため、会議録の中に棟職員全体で確認する枠を設けた。その後は記録簿への抜けもなくなり、活動中の子ども達の様子も詳しく知ることが出来た。担当学生の卒業に伴い活動が終結する際には、子どもから感謝の気持ちを伝える機会を設けたことで、子どもにとってもよい終結となった。個別ボランティアでは昨年度より継続して、毎週火曜日のボランティアを受け入れた。子ども達との関係も良好で、ボランティアが来る日を楽しみにしていた。先方の都合で３月まで

の活動となるため、感謝の気持ちを伝えられるよう、子どもと職員全員で書いた寄せ書きを渡す予定である。今後もボランティアの受け入れを積極的に検討していく。

≪2019 年度方針≫

①児童相談所

年度初めにケース担当の福祉司へ挨拶を行ない、必要に応じて電話や面会を行なう。

②学校など

電話連絡などを用いて情報共有を密に行ない、児童状況の把握に努める。

個々の課題を共有し、相互での共通支援を行なっていく。

③医療機関

通院前には、児童状況や薬の残量把握を棟会議で行なう。

各担当医師と児童状況の変化を含めた情報共有を図っていく。

④ボランティア

子どもと学習ボランティアの方と学習の後の進捗状況確認を行い、子どもの意欲向上に繋げる。

個別ボランティアの方と意見交換を行い、情報共有を図る

新たなボランティアの受け入れに関しては、ボランティア係と連携して行なう。

ボランティアへの感謝の気持ちを伝える取り組みをする。

7-4）性的事故防止のための取り組み

≪2018 年度方針≫

①ユニット間や各部屋の出入りの確認

ユニット間の移動・居室への出入りについて子ども達の意識が低下しないよう確認及び声掛けを行なう。また、他ユニット職員と連携を密にとっていく。子ども達の様子を把握するため、就寝後不規則に居室を見る。

②子ども対応

性的発言、行動について環境を変え、自分自身の言動を振り返る事が出来るようにタイムアウトの時間を設けていく。また、就寝前の時間などを利用し、不安などが話せる環境を作る。

③ヒヤリハットの徹底

日常場面で起こる小さな危険を見落とさずヒヤリハット報告書に記載する。また、起こった経緯や今後の支援方法の確認し、事故防止に繋げて行く。

④子ども関係図

子ども関係図を職員で共有することで、子どもの理解と支援の幅を持てるようにする。また、子ども間の距離を確認することで、意識した声掛け、居場所把握に努める。

ユニット間の移動については職員に伝達することを徹底して行なった。他ユニットに行

く際には、行き先のユニットに内線を掛け、返事を貰ってから行く事を徹底した。職員に言わずに外に行ってしまう児もいたが、その際には職員が声を掛けることで、子ども達の意識は向上した。居室の出入りについても職員に声を掛けてから居室に入る事を促してきた。子ども間でお互いに声を掛け合う事も多く見られ、意識は向上した。就寝時間後は不規則に巡回を行ない、所在の確認をした。その結果、深夜にＹ・Ｉ（高 1 男児）がＥ・Ｔ（中 3 男児）の居室に出入りしていたり、居室を抜け出し、他ユニット児童の居室に行っていたことの発見に繋がった。子どもの安心安全を守るため、今後も継続して対応していく。

性的発言・行動があった際は、その場での注意喚起を第一に行なった。更に個別の関わりの時間を利用して、『何故いけないのか』を子ども達に分かり易いよう伝えた。しかし、年少男児は遊びの中で気持ちが高揚すると性的発言が見られるため、繰り返し話をしていく。性的事故防止のため、小学生の下着は他児の目に触れないよう乾燥機を利用し、職員が管理をすることを徹底した。Ｓ・Ｋ（小 4 女児）、Ａ・Ｋ（小 6 女児）については、男性職員に洗濯物を見られたくないとのことで、自身の居室で洗濯物を干しており、継続することができている。Ｒ・Ｔ（小 4 女児）については、Ｓ・ＫやＡ・Ｋと同様の気持ちがあり、下着類は洗濯ネットに入れることを職員から提案をした。その後、自分で洗濯物を洗いたい・干したいという発信があった。その気持ちはとても良いことであると伝え、年明けから取り組みを開始し、現在も継続して取り組むことができている。

ヒヤリハット報告は、養育日誌への記載を漏れなく行ない、日々の引き継ぎなどで情報有を行なった。また、会議を通じて起こった経緯や支援方法を検討し、都度事故防止にむけて取り組むことが出来た。

子ども同士の関係性については、職員間で情報共有し、把握する事が出来ていた。関係性を職員が把握しておくことで、その後の子ども支援に繋がった。

≪2019 年度方針≫

①ユニット間や各部屋の出入りの確認

ユニット間の移動・居室への出入りについて子ども達の意識が低下しないよう確認及び声掛けを行なう。また、他ユニット職員と連携を密にとっていく。子ども達の様子を把握するため、就寝後不規則に居室を見る。

②子ども対応

性的発言、行動について環境を変え、自分自身の言動を振り返る事が出来るようにタイムアウトの時間を設けていく。また、就寝前の時間などを利用し、不安などが話せる環境を作る。

③ヒヤリハットの徹底

日常場面で起こる小さな危険を見落とさずヒヤリハット報告書に記載する。また、起こ

った経緯や今後の支援方法の確認し、事故防止に繋げて行く。
④子ども関係図
子ども関係図を職員で共有することで、子どもの理解と支援の幅を持てるようにする。また、子ども間の距離を確認することで、意識した声掛け、居場所把握に努める。

８．質の高い勤務体制のために

8－1）職員集団作り

≪2018 年度方針≫

①棟内・ユニット内での引き継ぎを大切にし、情報共有を行っていく。
②会議では対応者を明確にし、それぞれが担った役割に責任を持つ。

各職員が引き継ぎの重要性を理解し、日々の支援の根底にあると意識をして取り組んできた。日々の引き継ぎで受け手の職員から詳細を把握する為に質問がある場面も多く、情報共有に対する意識が向上している様子が見られた。

会議では対応者の役割分担を明確に行なった。役割分担をするだけでなく、対応する職員がどのような目的でどのようにアプローチをすればよいか、また、他の職員はどのようにサポートするのか細部まで協議をした。結果、各々の職員が自身の役割に責任を持ち、チームとして安心して取り組む事が出来た。

≪2019 年度方針≫

①棟内・ユニット内での引き継ぎを大切にし、情報共有を行なっていく。
②会議では対応者を明確にし、それぞれが担った役割に責任を持つ。

8-2）勤務体制

≪2018 年度方針≫

①勤務の加重・偏りがないように調整をする。また、超過になった場合には時間調整を行なう。
②勤務表作成時には、棟職員全員で確認を行なう。

勤務作成後、棟会議内で確認し周知した。児童対応や対外関係などでの勤務変更や超過勤務に関しても棟内での周知を徹底し、時間の調整も臨機応変に対応した。また、棟間交換研修の際に太陽棟の会議録にあった『時間調整一覧』を取り入れることで、超過勤務をより把握しやすくなり、各自の意識向上にも繋がった。「少しくらいなら超勤しても良い」という考えを無くし、１時間単位で時間調整を行うことが出来た。

≪2019 年度方針≫

①勤務の加重・偏りがないように調整をする。また、超過になった場合には時間調整を行なう。

②勤務表作成時には、棟職員全員で確認を行なう。

8-3）研修

≪2018 年度方針≫

①研修
　棟内で研修テーマを掲げ、テーマに沿った研修に参加し情報共有を行う。
②新任研修
　宿直勤務を一緒に行う機会を作る。また、他ユニットの子ども把握のために、反対ユニットでも勤務をする機会を作る。
③複数勤務の時には意識的に役割分担をして勤務する。また、新任職員は他の職員の支援を学ぶ機会、他の職員は新任職員に助言をする機会にする。

年度初めに、役割分担について話しをする場を持ち意識の共有を図った。日々の引継ぎや会議内でも、都度それぞれの役割について話をした。ＯＪＴについては、個々の状況に応じた内容の取り組みを積極的に行うことができた。自発的な質問なども増え、棟会議や子ども支援に厚みが増した。

外部の研修参加後の情報共有については、意識が低く徹底されなかった。研修参加者からの発信はもちろんのこと、他職員からのアプローチや棟会議内での確認など工夫をして対応する。

≪2019 年度方針≫

①研修
　棟内で研修テーマを掲げ、テーマに沿った研修に参加し情報共有を行う。
②新任研修
　宿直勤務を一緒に行う機会を作る。また、他ユニットの子ども把握のために、反対ユニットでも勤務をする機会を作る。
③複数勤務の時には意識的に役割分担をして勤務する。また、新任職員は他の職員の支援を学ぶ機会、他の職員は新任職員に助言をする機会にする。

９．他部署との連携

9-1）事務

≪2018 年度方針≫

①提出物の期日を守る。
②出納帳の記載の間違いをなくす。また複数職員で確認し間違いをなくす。
③学校との領収書の受け取りをスムーズに行う。すぐに受け取ることが出来ない場合には預かり書にサインをもらい事務に渡す。

請求について、期限が過ぎてしまい急遽出してもらうことがあった。小口の間違いについては、棟職員全体で確認をし合い取り組んだ結果、間違いは少なくなった。領収書に関

しては、学校関係はスムーズに受け取ることができた。習い事の月謝に関しても、先方に事前に連絡をし領収書に捺印してもらうことで、迅速に対応した。

≪2019 年度方針≫

①提出物の期日を守る。
② 出納長の記載の間違いをなくす。また複数職員で確認し間違いをなくす。
③学校との領収書の受け取りをスムーズに行う。すぐに受け取ることが出来ない場合には預かり書にサインをもらい事務に渡す。

9-2）ＦＳＷ

≪2018 年度方針≫

①連携し家庭訪問を行えていない家庭へ家庭訪問する。
②情報を共有し親対応も連携する。
③フレンドホーム交流ができるケースを増やしていく。また現在交流をしているケースは、継続して関係を築いていく。

保護者や児童相談所への連絡調整は役割分担を行い、漏れなくスムーズに対応することができた。ケースによっては棟の意向を伝え、ＦＳＷのみで話し合いに行ってもらい、その後情報共有を図った。保護者対応については、Ｋ・Ｓ（小１男児）の母とＦＳＷとで定期的な面会を重ね、その後でＣＷと母の面会に繋げた。今後は本児等を含めた面会の具体化を図る。フレンドホームについては昨年から継続して２件交流を行っている。Ｓ・Ｈ（小３男児）について、フレンドホームが年度初めに里子を迎えたため、、里子を交えて交流を行った。しかし里子の生活が落ち着かない状態が続いたため、まずはフレンドホームと里子との関係作りが第一だと判断し、一旦期間を空けることとした。９月からフレンドホームの旦那さんのみと交流を再開し、継続して行ってきた。その後１月から里子を交えた交流を再開し、問題なく交流している。Ｙ・Ｉ（高１男児）については、ゲーム中心の交流となっていたため、本児を交えて話をした。その後改善は見られたが、本児の認識と先方の認識にずれがあるため、今後も情報共有をして交流を行っていく。フレンドホームに関する話し合いについても同席して貰い、連携して取り組んできた。

Ｆ・Ｙ（高１男児）について、父の入院に同行してもらった。その後も病院に連絡を入れ、詳細を確認してもらい、棟職員との情報共有を図った。

≪2019 年度方針≫

①連携し家庭訪問を行えていない家庭へ家庭訪問する。
②情報を共有し親対応も連携する。
③フレンドホーム交流ができるケースを増やしていく。また現在交流をしているケースは継続して関係を築いていく。

9-3）心理

≪2018 年度方針≫

①情報共有をより密に行い、必要に応じて心理面接・心理検査を行う。
②生活場面でのアドバイスなど専門的な立場からの意見をもらい処遇に活かす。
③心理で行った事をフィードバックしてもらい、処遇に活かす。

Ｍ・Ａ（小１女児）につては様々なアドバイスを貰った。弟の死を理解するためにはどのような支援が必要か相談し、それを元にしてオリジナルの絵本を作成した。その絵本を活用し児への支援を実践した。その取り組みの後は本児の様子を伝えることで、情報共有を図った。また、児童相談所との協議においても、意見をもらい取り組みに活用した。また、Ｓ・Ｋ（小４女児）の癇癪が多発した際には、その対応についてもアドバイスを貰った。

≪2019 年度方針≫

①情報共有をより密に行い、必要に応じて心理面接・心理検査を行う。
②生活場面でのアドバイスなど専門的な立場からの意見をもらい処遇に活かす。
③心理で行った事をフィードバックしてもらい、処遇に活かす。

9-4）個別対応職員

≪2018 年度方針≫

①年度当初に対象児を棟、個別担当職員で協議し決める。
②対象児の活動計画を連携して作る。
③個別だけの様子でなく、生活の様子を見てもらう。

年度当初に対象児の協議を行ったが該当児がいなかったため、必要があれば依頼し、対応する形となった。また、習い事の送迎を依頼し、子どもの様子を見てもらった。

≪2019 年度方針≫

①年度当初に対象児を棟、個別担当職員で協議し決める。
②対象児の活動計画を連携して作る。
③個別だけの様子でなく、生活の様子を見てもらう。

9-5）治療指導員

≪2018 年度方針≫

①生活の様子を見てもらい、具体的なアドバイスをもらう。
②対応が難しい児に対して提言、提案をもらう。
③個別で話した事や学習してもらったものをフィードバックしてもらう。

Ｋ・Ｓ（小１男児）については８月下旬から相手の気持ちを考えられるようになることを目的としてセカンドステップを行ってきた。取り組みを終えてユニットに戻った際には、ユニット職員と治療指導員・本児との三者で振り返りを行うことで、学習内容の

共有と定着を図った。振り返りにはセカンドステップの取り組みをまとめたノートを使い、棟職員と振り返りをし称賛するコメントを記入した。生活の中でトラブルがあった際には、セカンドステップの内容とリンクさせながら話をすることでより意識しできるように取り組んだ。

≪2019 年度方針≫

①生活の様子を見てもらい、具体的なアドバイスをもらう。 ②対応が難しい児に対して提言、提案をもらう。 ③個別で話した事や学習してもらったものをフィードバックしてもらう。

9-6）自立支援コーディネーター

≪2018 年度方針≫

①ユニットに入ってもらい、子どもの生活を見てもらう。 ②学校見学等の引率を依頼し、その子の現状に合ったアドバイスをもらう。 ③アフターケアで関わってもらった際は、日誌や引継ぎで情報共有を行う。

中高校生に関しては、明るい未来作戦会議に参加し、自立に向けた話し合いや講師の方の話を聞いた。子どもたちも自分の特性や向いている仕事等を知ることができ、良い機会となっていた。アフターケアについてはその都度情報共有を行い、役割分担をしながら対応した。

アルバイトを始める際には、自立支援コーディネーターが作成した貯蓄に関するシュミュレ―ション表を活用し、話をした。

≪2019 年度方針≫

①ユニットに入ってもらい、子どもの生活を見てもらう。 ②学校見学等の引率を依頼し、その子の現状に合ったアドバイスをもらう。 ③アフターケアで関わってもらった際は、日誌や引継ぎで情報共有を行う。

9-7）地域支援担当職員

≪2018 年度方針≫

①地域行事への参加の情報共有を図る。 ②地域行事の引率等の調整を行なう。

当部署が担っている育成会係において、行事への引率や総会への参加等、早めに連携し、調整することで抜けなく対応することができた。また、幼稚園の同窓会へも同行してもらった。

≪2019 年度方針≫

①地域行事への参加の情報共有を図る。
②地域行事の引率等の調整を行なう。

9-8）医療機関等連絡調整員

通院の日程調整窓口として、連携してきた。未実施の予防接種に関しては、スケジュールを立ててもらい、それに沿って接種することができた。またヘルペスや蕁麻疹を診てもらい通院の有無を判断してもらった。

≪2018 年度方針≫

①通院を調整依頼し、対応してもらう。
②子供の体調に変化があった際は、診てもらいアドバイスをもらう。

9-9）専門部　セーフティーネット含む

≪2018 年度方針≫

①子どもと関わった際の様子や状況を養育日誌に記載し情報共有を図る。また専門的アドバイスをしてもらう。
②年度初めに継続支援してもらう各該当ケース児童を協議し、候補にあげる。中間で取り組みの評価をし、見直しを行う。年度末に評価を行う。
③補助依頼の期日を守り、補助依頼書を提出する。

年度初めに各専門職ごとに対象児を挙げ、棟の意向を伝達した。該当児がいない場合はその都度依頼をし、対応してもらった。子どもの様子を養育日誌に記載することで、専門部からのアプローチがあり、アドバイスを貰った。また、専門的な視点からのアドバイスを貰うために、棟職員から相談に行き、よりよい支援につなげることができた。緊急対応が入った際にはセーフティーを活用した。

≪2019 年度方針≫

①子どもと関わった際の様子や状況を養育日誌に記載し情報共有を図る。また専門的アドバイスをしてもらう。
②年度初めに継続支援してもらう各該当ケース児童を協議し、候補にあげる。中間で取り組みの評価をし、見直しを行う。年度末に評価を行う。
③補助依頼の期日を守り、補助依頼書を提出する。

9-10）調理

≪2018 年度方針≫

①調理クラブ、出張調理、野菜クラブ、食育便りを通して食育をする。
②調理クラブや野菜クラブの様子を見に行き、生活の中で話題に挙げる。
③外食などの予定の変更や弁当の依頼は分かり次第連絡する。
④できる範囲でユニット内調理を行なう。
⑤検食簿の記載を漏れなく行う。

日常の中で、クラブ活動について話題に挙げてきた。野菜クラブならば現在作っている野菜について・調理クラブならば次回作るメニューについて話をすることで、楽しく活動できるように促した。食事を抜く際や弁当を依頼する際はわかった時点で連絡をいれた。しかし抜けてしまう事もあったため、次年度は部署会議内で誰が伝達をするか明確にする。アルバイトの出勤時間によっては、早めに昼食を準備してもらうこともあり、柔軟に対応してもらった。ユニット調理はメニューを見て、出来る範囲で行なってきた。検食簿については、担当月であることを意識して記入した。

≪2019 年度方針≫

①調理クラブ、出張調理、野菜クラブ、食育便りを通して食育をする。
②調理クラブや野菜クラブの様子を見に行き、生活の中で話題に挙げる。
③外食などの予定の変更や弁当の依頼は分かり次第連絡する。
④できる範囲でユニット内調理を行なう。
⑤検食簿の記載を漏れなく行う。

１０．ユニット総括

すいれんユニット

高校生１名、中学生１名、小学生３名の児童構成でスタートした。

Ｍ・Ａ（小 1 女児）は４月、Ｋ・Ｓ（小１男児）が５月に入所し計７名となり、その内小学生が５名いることもありユニット内が賑やかになった。

Ｍ・Ａについては、弟の死と向き合う為に必要な支援や本児への関わり方、父親が書類送検されたことについて、どのようにアプローチすべきかを心理職員と協議し対応してきた。日々の本児の発言の中で、家族のことに関するワードが出てきた時にはより丁寧に対応をし、職員間で情報共有を徹底した。児童相談所とも連携を図り、今後の方針についても関係者会議を実施し、園としての考えを伝えた上で協議を行なった。今後も本児の将来を見据えながら取り組んで行く。

Ｋ･Ｓは些細なことが原因で、トラブルになることが多く都度話をしてきた。治療指導員とも連携を図り、セカンドステップを導入した。課題と向き合い、棟会議内でも何度も対応について議論を重ね、アプローチについても丁寧に行うことを意識して関わりを持った。その結果少しずつではあるが、本児自身の意識にも変化が見られた。

Ｒ・Ｔ（小４女児）Ｋ・Ｔ（小２男児）については、今年度末の家庭復帰を見送る形と

なった。母親が仕事を辞め、ネイリストの資格を取りたいと言い始めたことがきっかけであった。そのため子ども達へ説明を行い、子ども達の気持ちにペースを合わせ交流に制限を掛けた。その後も、母親と祖父と園内泊や外出を行い、長期休業時には自宅外泊を行なってきた。母親自身、就労に対して考え方が浅いことなどから、今後も福祉司と連携し、家庭復帰までのスケジュールや、子どもたちに対して「絶対にやってはいけないこと」をリストにし、話をしていくことを検討している。

Ｔ・Ｎ（小４男児）は昨年度から地域の野球チームに所属している。毎週末の練習にも休むことなく参加しており、キャッチャーを任される等、監督からは「チームに必要な存在だ」という評価も受けるようになってきた。遊ぶ時間が少ないことから、野球を辞めたいと言ってきた事もあった。その際には、自身で選択し取り組みを始めたこと、ひとつのことを最後までやり遂げてほしいこと、必要とされていることについて話をした。葛藤を繰り返しながらも、毎週末の練習に励んでいる。野球の技術のみならず、職員以外の大人と関わる中で礼儀作法や社会性が身につき、飛躍的な成長が見られた。

Ｅ・Ｔ（中３男児）は学校が統合し、新しい人間関係が生まれ大きく環境が変わったことで、生活していく意識に変化が現れた。学校に呼ばれ職員が対応することや、トラブルを起こすようなことも減少した。部活動に熱心に取り組み、キャプテンを全うした。引退試合後には仲間と一緒に涙を流す姿も見られ、バスケットボールという競技を通して成長をしていく姿を、職員も一丸となって応援した。部活動引退後は受験に対しての意識が低く、通塾を希望してきた時期も他児と比べ出遅れていた。志望校選択の際、本児の意見に傾聴することを大切にしつつ、現実的な話をすることが必要であると職員間で共通の認識を持ち何度も話し合った。目先のことや、軽率な考えばかりを主張する児に対して、先々を考えることや現実的な部分について具体的に伝えながら修正をすることもあった。役割分担を意識しながら何度も本児と向き合い、話し合いの根底には、職員は本児の将来を本気で考えているという気持ちがあるということも伝えた。高校進学を選択する事には自身の責任が伴うということを伝え、そのことについても繰り返し話をした。生活の中で、時間を守れないことや、夜間の出歩きなど逸脱した行動があった際には、当日勤務者のみにかかわらず、何度でも本児と話をした。これから高校生になり、より世界が広がってくることが考えられるため、どんな時でもしっかりと向き合って話をしていく。

Ｙ・Ｉ（高１男児）はつくば特別支援学校高等部へ進学をした。入学当初からアルバイトをしたいという発言があったが、学校側でも原則として禁止されているという事と、まずは自身の生活状況を見直して基本的な生活習慣の確立を目標に毎日を過ごして行く事を具体的に提示し話をした。夏休み中、生活習慣が確立されていなかったため、９月に担任、進路指導担当、ユニット職員、本児とで面談を実施した。学校で見せている真面目で優等生な姿と、園内での飾らない「素」の姿との違いを学校側に知られたくなかった思いから、職員に反発してきたこともあった。その際には、本児が今後生きて行く上では、周囲からのサポートは必須であり、進路選択においても学校との連携は大変重要であると伝えた。

職員は本児の将来を考えた上で話をしているという事を伝え、今後も学校とは連携をしていきながら本児を支えていく考えであると話をしている。普段の会話の中でも、卒園を意識した発言も見られ、その際には本児自身の成長した部分について振り返って話をした。「あの頃は良くなかった」などと自覚を持って考えており、それについても大きな成長の証であると伝えている。

昨年度同様『話し合う』ことが定着しており、何か検討したいことがあると子ども会議で議題に挙げ話し合いをしてきた。その中で小学生は就寝対応の時間割や入浴の時間割、パソコン時間などを決めた。年齢に関係なく自分の意見や気持ちを発信しやすい雰囲気であり、他者の意見を聞く事も出来ている。来年度もそれぞれが生活しやすいユニットを作っていくために、話し合いを大切にしながら『笑顔がいっぱいの１年』にしていく。

なのはなユニット総括

昨年度から児童構成に変更はなく、小学生４名、高校生２名の計６名での生活を送っている。

Ｒ・Ｍ（小２男児）は夏休み明けの家庭復帰を目指し、家族との交流を重ねてきた。夏休みになり長期外泊をはじめてすぐ、両親の喧嘩により外泊が中断となり、夏休み明けの家庭復帰もなくなった。今まで家族交流の頻度が高かった児であるが、交流自体が行えなくなった影響からか、些細な事から癇癪を起こす回数が増加した。職員で対応を協議し、児の心情に共感する事を念頭に置いて出来る支援を模索した。その後は両親から謝罪を受け、家族との交流が再開した安心感から、生活も落ち着いてきた。年度末の家庭復帰を目指し、現在も交流を進めている。

Ｓ・Ｈ（小３男児）は音信不通だった父親から、児童相談所に引き取りを希望する連絡があったため、ＦＳＷ・ＣＷで関係者会議を行った。２年前に面会を予定していたが連絡もなく来園しなかった事について、とてもショックを受けていたと児の気持ちを代弁した。父親はその件は忘れており、連絡がつかなかったことも自身の都合の良いように話をしていた。また裏切られてしまうかもしれないという懸念があるため、現状で面会を行う事は考えられない事を伝えた。その後現在まで、父親からの連絡はない。

Ｓ・Ｋ（小４女児）は以前から自身の意に沿わないと不機嫌になり、癇癪を起こすことがあった。同性の職員に話を聞いて欲しい、関わって欲しいという気持ちが強く、癇癪を起こすのは同性職員の時が多かった。また、その際に物や職員に当たることがあり、異性の職員から気持ちを吐き出すのは間違った事ではないが、物や人に当たる事は間違っていると話をした。その後は癇癪を起こす事もなくなり、意に沿わない事があっても話をして解決する事が出来ている。

Ａ・Ｋ（小６女児）は自身の気持ちを言葉にする事に苦手意識があったが、徐々に友人関係や姉妹関係など、職員に話をする事が出来るようになってきた。まだ気持ちを溜め込んでしまい、些細な事がきっかけで爆発し物に当たることがあるため、吐き出し易い環境

を作っていく。また、以前から課題であった言葉遣いについては、大幅な改善が見られた。相手の年齢や自分との関係を考え、対応を変える事が出来ており、大きな成長であると称賛した。

Ｆ・Ｙ（高１男児）は今年度より高校に進学した。以前から児に注目が集まる行事への参加に苦手意識があったが、都度今後生きていく上で大切な事であると伝えていった。全ての行事に参加出来るようになったわけではないが、徐々に参加できる行事も増え、継続した登校に繋がっている。また、社会性を身に付けるためにアルバイトの必要性を伝え、児の気持ちが固まった１１月よりアルバイトを開始し、継続する事が出来ている。自立のために行動出来る力がついたことは、自身の頑張りの成果であると称賛した。アルバイトに対する責任への認識が低く、当日急に欠勤する事もあるため、都度社会に出るにあたっての責任について話をしている。

Ｍ・Ｍ（高２女児）は４月にアルバイトの欠勤が重なり、アルバイト先から連絡があった。先方に迷惑を掛けている面や、今後の本児のためにならないという面から、職員主導でアルバイト先へ連れて行き謝罪、退職した。アルバイトに対しての考えの甘さや、社会に出る上で通用しない事をそれぞれの職員から伝えた。原因は何か、改善するためにどうすれば良いかを自身で考えられるよう、毎週ユニット職員と話し合う時間を取った。原因や改善策を自ら考え、職員からのアドバイスを参考に実行に移すことがとても大切であると、時間をかけて伝え続けた。その結果、７月よりアルバイトを再開し、現在まで継続する事が出来ている。

小学生が多く在籍するユニットであり、些細な喧嘩が多かった。都度それぞれに日々の生活の称賛をしながら、他者の気持ちを考える事の重要性を伝えてきた。喧嘩が全てなくなるわけではないが、各々が相手の事を考えて生活できるようになってきている。また、小学生は就寝時にそれぞれ個別の時間を確保した。トークン法を用いて 1 日の行動で良かった点を評価したり、職員と交換ノートを行った。同時に、年長児が不満を溜め込まないように日頃の関わりへ感謝の気持ちを伝えたり、年少児へ職員が対応している姿を見せたりするなど、年長児への関わりも職員側で協議し対応してきた。今後も集団生活の中で相手の事を気遣いながら生活が出来るように、それに加えて自身の気持ちを溜め込むことなく職員に話が出来るように継続して支援していく。

今年度末は１名の退所予定がある。次年度は児童構成が変わる事が予想されるが、現在の明るく元気で優しさのある雰囲気をなくすことなく生活が送れるよう、職員間で連携した取り組みを行っていく。

太陽棟

2018年度総括 2019年度方針

ジャスミンユニット	柏谷　杏子
	山田　晃平
	深井　宏起
ひまわりユニット	関　美穂子
	坂寄　裕紀
	道上　紗月
フリー	櫻井　翔太

児童構成

ジャスミンユニット

1、K.M　女　つくば市立秀峰筑波義務教育学校2年
2、A.H　男　つくば市立秀峰筑波義務教育学校2年
3、R.M　男　つくば市立秀峰筑波義務教育学校4年
4、R.K　男　つくば市立秀峰筑波義務教育学校9年
5、R.S　女　茨城県立つくば特別支援学校高等部2年
6、J.I　男　茨城県立下妻第二高等学校3年
7、C.K　女　茨城県立筑波高等学校3年

ひまわりユニット

1、H.T　男　つくば市立秀峰筑波義務教育学校2年
2、Y.M　男　つくば市立秀峰筑波義務教育学校7年
3、Y.K　女　つくば市立秀峰筑波義務教育学校9年
4、A.T　男　茨城県立水海道第二高等学校1年
5、N.M　男　茨城県立つくば特別支援学校高等部2年
6、M.T　女　鹿島学園高等学校2年
7、M.I　男　茨城県立筑波高等学校3年

１、全体総括

昨年度末ジャスミンユニットにＡ・Ｈ（小２男児)、４月にＲ・Ｍ（小４男児）が入所し、高齢児で構成されていた児童集団が小学校２年生から高校３年生までの幅広い児童構成となった。また、自立を控えている児童が３名、高校進学が２名いることから進路の部分では丁寧に話し合いを重ねてきた。高校進学の段階から自己選択と自己責任についても話しをし、今後の将来を考える上で大切な部分であることを繰り返し伝えてきた。目標を持つことは大切であることを伝えつつも、それに伴った言葉の重みや行動について理解を深めた。また、自立を控えた児童についてはより具体的な選択と責任（進学、就職後の生活の組み立て方、金銭管理の大切さなど）について話し、それに伴い家族との今後の付き合い方についても話をおこなった。また、他にも高校生になり、今後自立を控える上で不安を抱え、自分の生い立ち等についてきちんとした理解がないまま今を迎えている児童が多くいる。そのため、今後も成長段階に合わせての生い立ちの整理をしていく必要があり、関係機関、専門部と連携をして取り組む。

職員集団については今年度他部署から 2 名の異動があった。特定の児童を除いては大きな影響は見られなかった。年度初めに職員・児童間で「互いに意見を尊重し、より良い生活を作っていく。」という目標を掲げた。この目標はどんな場面においても通ずる目標であり、棟会議や子どもとの約束事を決める際に意識して生活することが出来たと考える。児童支援の部分においては様々な意見を交わし、時には意見が合わず、時間を要する時もあったが誰もが納得して支援に携われるようにと時間を掛けて議論を行ってきた。それにより意見を言う、聞くというスタンスの部分では一人ひとりが意識しており、活発な棟会議が行えるようになった。児童の発達段階や職員の取り組みレベルについても「このぐらいは出来るだろう。」という憶測の部分で何事も進めるのではなく、児童・職員それぞれの成長度合いに合わせて取り組むことで理解は深まり、自信に繋がることが何よりも大切であると感じた。また、職員が跨ぎ勤務をし、隣のユニットに入ることで普段の生活の中では気づかない部分に気づくことができ、新たな発見や考えを棟会議で伝えることでより良い生活となれるように取り組んできた。それにより棟職員全体で児童を称賛する場が増え、子どもに対しての視点が変わるなど良い効果があった。

しかし、問題解決においての問題提起や支援方法については十分な発信が出来ているとは言い難く、意見を交わすことは問題を解決するためには必要なことと認識した上で議論にあたる気持ちが大切である。自分達の改善すべき部分から目を背けず、少しずつでも前進すること、それには職員集団がまとまり、それぞれの役割を果たす必要がある。再度、それぞれの経験年数に応じた役割を認識し、より良い棟運営が行えるように来年度も取り組んでいく。

２、養護の基本方向（方針）と重点課題

２－１）基本方針

≪2018 年度方針≫

・話し合いや生活を通して、児童の想いを共感しながら、励ましや助け合いができるような関係を築いていく。

総括

子ども会議や生活を通して太陽棟で生活していく上での約束事を決め、児童・職員共に意見を出し合い、互いの意見を傾聴してきた。そのため決めた約束事に関しては児童たちも守ろうという意識は高い。しかし、児童間では助け合おうという感覚が乏しいことが課題であり、それぞれが生活をしているという状況である。まずは職員が児童に対しての支援の部分で模範となれるような声掛けをし、互いのことを励まし助け合えるような雰囲気を作れるように取り組んでいく。

≪2019 年度方針≫

・話し合いや生活を通して児童の想いを共感しながら、励ましや助け合いができるような雰囲気を職員が作り、児童間でも良い関係性が築けるようにしていく。

２－２）重点課題

①児童の問題となる行動や状況

≪2018 年度方針≫

・暴言暴力が生じないよう伝えていくとともに、暴力暴言以外の解決法を伝えていく。

総括

日々の生活の中で、暴言・暴力をしないように注意喚起を行ってきた為、子ども達の中にも浸透してきていた。しかし、N・M（高 2 男児）の注意引きが多くなり、職員が対応に追われてしまったことで他児のストレスも溜まり些細なことから児童間でのトラブルも増えた。それぞれの余計な一言からトラブルになる現状もあり、子ども会議の中でも課題としてあげて目標にし、解決出来るように取り組んできた。暴言・暴力までには発展するようなトラブルは殆どなかったが時より発展しまうこともあり、その際には職員が双方の話しを聞き、気持ちを受け止めつつも良くなかった点の振り返りをし、謝罪をして和解できるように支援してきた。

≪2019 年度方針≫

・暴言暴力が生じないように伝えていくとともに、暴言暴力以外の解決方法を伝えていく。
・互いの良い部分に目を向け、気持ち良く生活できるような環境作りをしていく。

②職員側の課題となる行動や状況

≪2018 年度方針≫

・「いただきます」「ごちそうさま」「ただいま」「いってきます」など生活の中での挨拶が自然に言えるようにするため手本を示すことや、称賛を用いる。
・安心安全な生活を保障するために、職員と児童との関係性を強める。
・取り組みを継続的に行うために、引き継ぎを活用していく。

総括

日常的に必要な挨拶については職員側が意識して声を掛けることで児童自らも発することが出来るようになってきている。また、職員と児童との関係性の部分については、児童と学校や園での生活について職員と話しをする場面も設けることで児童からは注意を受けるのではないかと身構えてしまうことが多かった。そのため、称賛する機会を大切にしていこうと職員間でも意識して取り組んできた。出来ないことが少しでも出来るようになった際にも職員全員で称賛する場を設けることで喜んでいた。今後も職員との関係性が深まるように取り組んでいく。また、年度当初に掲げた『お互いの意見を尊重する』という棟の目標のもとに、児童の気持ちに寄り添い話を傾聴しつつ、物事の分別を付けて話をしてきた。

職員により支援や認識に相違見られた為、引き継ぎや会議時間を利用し共通理解を深めることで支援に差が出ないように努めた。

≪2019 年度方針≫

・安心安全な生活を保障するために、職員と児童との関係性を強める。
・支援や認識に相違がないように、引き継ぎや会議時間を活用し共通認識を深める。

３、生活集団への支援（※児童への支援内容）

３－１）子ども会議

≪2018 年度方針≫

・ユニット単位で週１回の話し合いを行う。
・話し合いで決まった「今週の目標」を毎週ユニット内に掲示する。

総括

毎週木曜日に子ども会議を実施している。日常の会話の中で職員が子どもの意見を汲み取り、子ども会議で検討できるように促しをすることで、年少児も率先して自分の意見を言えるようになってきた。アルバイトや塾があり、子ども会議に参加できない児童もいたため、そういった児童に関しては帰園後に子ども会議で決まったことの伝達を行った。会議の中では児童と職員とで前の週に立てた目標の振り返りを行い、反省や称賛の機会とした。ジャスミンユニットでは児童それぞれ、ひまわりユニットではユニットでひとつの目標を立て、ユニットに掲示することでそれぞれの児童が意識して過ごすことが出来た。

≪2019 年度方針≫

・ユニット単位で週１回の話し合いを行う。
・話し合いで決まった「今週の目標」を毎週ユニット内に掲示する。
・児童が気兼ねなく意見を言い合える雰囲気を作る。

３－２）安心安全な生活のための児童への支援

≪2018 年度方針≫

・日常会話を増やし話しやすい環境を整え、些細なことでも話し合える体制を整えて行く。

総括

児童が些細なことでも職員に相談できるように、日々の会話を意識して行った。高校生は居室で過ごすことが多かった為、年少児の就寝時間以降に個別で関わる時間を設けるなどして話しやすい環境を作った。M･T（高２女児）は今年度より通信制高校へ転学したことで登校時間が遅くなり、個別に関わる時間を作る機会が増えた。登校までの時間に職員が話を聞くことで、自分から話をしてくることが増えた。帰園時間が遅い児童がおり夜間には車での迎えを行った。次年度は、児童が帰ってきたいと思えるようなユニット作りを行い、安心安全に留意した支援をする。

≪2019 年度方針≫

・日常会話を増やし話しやすい環境を整え、些細なことでも話し合える体制を整えて行く。
・児童が帰って来たいと思うユニット作りを行うために、職員間で児童支援の共有を図る。

３－３）行事

≪2018 年度方針≫

・子ども会議を活用し、外出の企画から児童達と検討する。

総括

棟外出やユニット外出に関しては、子ども会議の際に児童を含めて行事の企画を行う事で、児童の意見や要望を反映した行事を実施することが出来た。棟で行った夏季行事では、今年度で卒園予定の高校生 3 名も参加し、和気藹々とした雰囲気の中で思い出作りを行うことが出来た。夏季行事の最後には職員が促しをすることでM･I（高３男児）、J･I(高３男児）がお世話になった青年の家で児童を代表して挨拶を行い、年長児としての意識付けを行った。児童の要望を聞く中で季節を感じられる行事は少なくなってしまった為、次年度は児童に様々な経験をさせる意味でも四季折々の行事を企画していく。

≪2019 年度方針≫

・子ども会議を活用し、外出の企画から児童達と検討する。
・季節折々の行事を企画する。

３－４）生・性教育への取り組み

≪2018 年度方針≫

・個々の年齢・状況に応じて、生活の中で性教育を実施する。
・人権や共生をテーマに、話し合いの機会を設けていく。

総括

性教育に関しては､児童と職員との個別の時間を利用して行った｡M･T(高 2 女児)は、露出度の高い服を着ていたり、SNS に露出度の高い画像を投稿したりしていたため、女性職員を中心に注意喚起を行った。N･M（高 2 男児）は、学校で女児に性的暴行を加えてしまうということがあったため､職員との個別の時間を利用して本児の習熟度に合わせた性教育を実施した。

子ども会議の際に権利ノートの読み合わせを行い､自分が守られることや他者を尊重することを学ぶ機会を設けた。しかし､児童によっては相手の事を考えずに行動してしまうこともあった。その都度話をすることで理解を深めてきた。次年度継続して話し合いをする機会を設ける。

≪2019 年度方針≫

・個々の年齢・状況に応じて、生活の中で性教育を実施する。
・自分が守られることや他者を尊重することを学ぶ機会を設ける。

４、一人ひとりの成長のために

４－１）日常生活への支援

① 健康・衛生

≪2018 年度方針≫

・浴室、トイレ、洗面台などの水回りを清潔に保ち、児童が意識できるよう支援する。
・服薬の確認を行い、日誌に記入する。

総括

年少児も増えたことで、トイレを汚してしまうことが多かったため、トイレで失敗してしまった場合には職員を呼ぶように伝え、職員がトイレを掃除している姿を見せることで児童に意識付けを行った。その結果、失敗してしまった際には自分で綺麗に掃除をしている児童も見られた。

今年度洗体や洗髪を苦手とする児童が多かったため、外出の際には入浴の機会を設け正しい洗体洗髪を行えるよう支援してきた。また、洗体洗髪の仕方を図にし視覚化することで意識を高めた。

服薬を行っている児童が多いため、必ず職員が服薬確認を行い、引き継ぎを行うように意識してきた。しかし、日誌を有効に使うことが出来ておらず、抜けが見られることもあったため、日々の服薬確認の徹底・日誌への記載を行い、職員が意識できるよう会議でも服薬状況の確認を行う。

≪2019 年度方針≫

・身体を清潔に保てるように支援していく。
・服薬の確認を行い、日誌に記入する。

② 衣類

≪2018 年度方針≫

・必要な衣類を仕分けする力を身に付けるため、声かけや共に作業する時間を設ける。
・季節にあった服装ができるよう伝えていく。
・児童の習熟度に応じた介入やアドバイスを行う。

総括

休日の掃除の時間を利用して衣類の整理を行った。Y･M(中 1 男児)・A･T（高 1 男児）に関しては、洗濯物を干さずに寝てしまうことがあり、自室に衣類が散乱してしまっている状況だったため、洗濯物干し、タンスの整理を職員が一緒に行うことで、意識して整頓を行えるようになった。年少児のみならず、中高生に関しても習熟度に合わせた介入を行った。

児童によっては気に入った洋服ばかりを着ており、季節に見合わない服装でいることがあった。今後も継続して声かけを行っていく。

≪2019 年度方針≫

・必要な衣類を仕分けする力を身に付けるため、声かけや共に作業する時間を設ける。
・季節にあった服装ができるよう伝えていく。
・児童の習熟度に応じた介入やアドバイスを行う。

③ 整理・身辺自立

≪2018 年度方針≫

・整理整頓の習慣を身につけるため、普段から整理整頓を促す。
・必要に応じて職員が介入し、部屋が常に整頓されている状態に保つ。

総括

職員が率先して共有スペースの清掃を行うことで、自発的にリビングや玄関の掃除を手伝う児童も増えてきた。A･T(高 1 男児)は自室を清潔に保つことが苦手であり、期限を設けて、それまでに自分できれいにすることが出来なかった場合、職員が介入するといった方法を取った。自立支援コーディネーターにも協力してもらい一度居室を綺麗にしてからは、職員が一緒に掃除を行う事で部屋を整頓されている状態に保つことが出来ている。

≪2019 年度方針≫

・整理整頓の習慣を身につけるため、普段から整理整頓を促す。
・必要に応じて職員が介入し、部屋が常に整頓されている状態に保つ。

④ 社会性・礼儀・マナー

≪2018 年度方針≫

・感謝、謝罪の気持ちを言葉にし、態度で表すことの大切さを教えていく。

総括

職員が率先して感謝・謝罪の気持ちを言葉にし、態度で表すことの大切さを伝えてきた。そのことで、子ども達も自ら『ありがとう』『ごめんなさい』と言えるようになってきた。R･M（小４男児）に関しては、学校で友達の文房具を盗んでしまうということがあったため、本児を連れて相手の児童の家に伺い、職員が頭を下げている姿を見せることで、反省の気持ちを態度で表すことの大切さを伝えた。

≪2019 年度方針≫

・感謝、謝罪の気持ちを言葉にし、態度で表すことの大切さを教えていく。 ・公共の場では節度ある行動ができるように支援していく。

⑤ 生活について

≪2018 年度方針≫

・時間を意識し、自発的に行動できるよう声かけ・促しを行う。

総括

年少児に関しては、入浴や学習の時間の前に、職員が声を掛けることで意識付けを行った。A･H（小２男児）については、入浴時間が長く他児に迷惑を掛けてしまっている状況があったため、トークン法を用いた頑張り表を作成することで、入浴時間を守ることを意識することが出来た。中高生に関しては、自身で時間管理が出来るように促しを行い、必要に応じて職員が声を掛けることで意識して生活を行っている。

≪2019 年度方針≫

・時間を意識し、自発的に行動できるよう声かけ・促しを行う。

４－２）食事への支援（＊本体施設は該当箇所のみ）

① 献立

≪2018 年度方針≫

・連絡会や嗜好調査のアンケートなどで献立についての希望、感想を伝える。

総括

毎日の連絡会、嗜好調査のアンケートや月に一度の給食会議等で献立の感想や希望を伝えてきた。児童の好きな献立の際には、自分で作ってみたいなど料理に興味を示す様子が見られ毎日の食事を楽しみにしている。来年度も引き続き児童の希望が反映されるよう、調理部へ希望・感想を伝えていく。

≪2019 年度方針≫

・連絡会や嗜好調査のアンケートなどで献立についての希望、感想を伝える。

② 食材の購入

≪2018 年度方針≫

・調理部が行っている為ユニットでは実施していない。

≪2019 年度方針≫

・調理部が行っている為ユニットでは実施していない。

③ 調理

≪2018 年度方針≫

・朝食作りや各種イベント時の食事作りの機会を活用する。
・希望メニューを聞き取り、食事作りを行う。
・高校生の弁当作りを行う。

総括

食べることや調理への興味を持てるよう児童と一緒にユニット内での調理を行ってきた。児童から出来立ての物が食べたいと希望が挙がることもあり、ユニットで出来る範囲で調理の一部を行うこともあった。クリスマスや誕生日などのイベントの時には児童から要望を聞き、職員が目の前で調理することで児童の喜ぶ顔を見ることが出来た。高校生の弁当作りを行う中で、児童からも色々な感想が挙がるようになった。今後も児童に食べたいものの希望をとり、一緒に食事作りの機会を設け、調理をする人への感謝の気持ちや食材を大切にすることを伝えていく。

≪2019 年度方針≫

・朝食作りや各種イベント時の食事作りの機会を活用する。
・希望メニューを聞き取り、食事作りを行う。

④ 食事場面

≪2018 年度方針≫

・出された食事をきちんと食べる。
・マナーを意識し、適切な時間・場所で楽しく食事をとる。

総括

好き嫌いが多く、全く手を付けずに捨てようとする児童も見られるため、一口でも食べるように促しを行ってきた。高校生に関してはアルバイトをしており、お金がある為嫌いな食事が出た際には手を付けずに買ってきた惣菜やカップ麺を食べてしまう事が多く見ら

れていた。栄養バランスを考えての食事である事、自身の体つくりの為に施設の食事を摂るよう伝え、少しずつでも苦手な物を食べる児童が増えてきている。今後も少しでも施設の食事がとれるよう、実際に職員が目の前で作る等の工夫をしていく。

食事の雰囲気は楽しいものとなるように、何気ない会話を大切にしている。姿勢、食べ方、食事の際の挨拶については、職員が手本となるように率先して行ってきた。その結果、「いただきます・ごちそうさま」を自発的に言える児童が増えてきた。

≪2019 年度方針≫

・苦手な物も食べられるよう、児童に合った量を盛り付ける。
・マナーを意識し、適切な時間・場所で楽しく食事をとる。

４－３）豊かな人間関係づくり

① 地域との連携（学校場面、習い事など）

≪2018 年度方針≫

・教員との連絡を通じて、交友関係の把握をしていく。
・施設内に友人が遊びに来た時には、声かけを行い開放的な雰囲気を作る。
・友人と遊びに行く際には、相手の名前と連絡先を控え、何かあればその保護者や当人と連絡を取り合えるようにする。
・中学校との連絡協議会の日程調整を行う。

総括

連絡協議会については昨年度までは田水山小学校、筑波西中学校、筑波高校の 3 校共同で行ってきたが、小中一貫校となったため、秀峰筑波義務教育学校とのみ 7 月に実施し、筑波高校を加えた連絡協議会を 2 月に実施した。児童の生活や交友関係について情報共有を行った。また児童個々の情報においても都度学校への連絡を行い密に情報共有を行えるようにしてきた。

児童によっては友人の家に遊びに行くことや、友人を施設に連れてくることが頻繁に見られる。遊びや塾の帰りに友人の保護者に送迎をしてもらった際には職員が直接挨拶、お礼を行うことで、地域の保護者とのつながりを大切にした。また、友人が施設に遊びに来た際には、挨拶などの声かけを行い、開放的な雰囲気を作ってきた。外で会った時などでも児童の友人から愛児園の職員と認識されることも多くなっている。

≪2019 年度方針≫

・教員との連絡を通じて、交友関係の把握をしていく。
・施設内に友人が遊びに来た時には、声かけを行い開放的な雰囲気を作る。
・友人と遊びに行く際には、相手の名前と連絡先を控え、何かあればその保護者や当人と連絡を取り合えるようにする。
・近隣学校との連絡協議会の日程調整を行う。

② 親子関係

≪2018 年度方針≫

・学校行事の参加の促しや親子宿泊棟の活用などを通し、関係作りのために交流の機会を用いていく。
・交流後には親に対する想いの整理を行う。

総括

児童の保護者には学校行事の参加を促せるよう早めに連絡を行ってきた。また、定期的な親子交流が可能な家庭については都度連絡を取り、外泊や親子宿泊棟の利用を含めて円滑に交流が行えるようにしてきた。親子宿泊棟を活用することで自然な関わりが親子共にできており、児童の家庭への想いの再確認ができる場となっている。

家族との交流後には、必要に応じて FSW に同席してもらい児童、保護者との交流の振り返りを行った。家庭の状況や児童の気持ちに応じて交流の方法や場所、期間など調整してきた。

≪2019 年度方針≫

・学校行事の参加の促しや親子宿泊棟の活用などを通し、関係作りのために交流の機会を用いていく。
・交流後には親に対する想いの整理を行う。

③フレンドホーム

≪2018 年度方針≫

・交流を通じて、自身の自立後の家庭のイメージ像を作っていく。
・児童の状況について、フレンドホームと情報共有をしていく。

総括

現在 J･I(高３・男児)が交流の打診があった際にアルバイトの予定と照らし合わせ可能であればフレンドホームとの交流を行っている。アルバイトが忙しく、なかなか交流の機会が取れなかったが、11 月に外泊交流を行った。フレンドホームに対し、大学に合格した際には連絡するなど関係も良好な様子であった。

今後も、新たなフレンドホームの対象児の選定や、フレンドホームに関する情報提供を児童らに行い、積極的に促しをしていく。

≪2019 年度方針≫

・交流を通じて、自身の自立後の家庭のイメージ像を作っていく。
・児童の状況について、フレンドホームと情報共有をしていく。

５、学校生活と学力を育てる取り組み

５－１）学校生活への支援

≪2018 年度方針≫

・情報共有をもとに連携を図っていく。
・称賛の機会とするために、皆勤賞を設ける。

総括

今年度、小中学校が統合したことにより学校の形態が大きく変わった。そのため、児童一人ひとりについて連絡協議会や普段の生活内では連絡帳や学校への電話連絡を通じて情報共有を行ってきた。トラブルなどがあった際には、帰園後すぐ対応している。来年度も些細なことであっても密に連絡を取り合い情報共有するとともに、対応が必要な時には協力していく。

新たに進学した高校に対しても、児童の特徴や施設の情報を学校へ訪問し、事前に伝える機会を設けた。トラブルがあった際にも都度情報共有を行ってきた。来年度も高校へ進学する児童、卒園する児童もいるため、進学する児童・新規入所児童について事前の情報共有をする機会を設けていく。

今年度も学校への登校意欲の向上を図り、称賛の機会とするために皆勤賞を設け、ひと月に一度月皆勤賞を渡す取り組みをしてきた。小中学生は毎月とても楽しみにしており、「今月は全部行けたから月皆勤ある」と言って喜び、体調不良などで学校へ登校できなかった児童には翌日に体調を崩さないよう、励まし登校意欲が下がらないようにしてきた。しかし高校生の登校に課題があり、友人関係や環境面で登校意欲が低下した児童がいた。M・T（高 2 女児）はバス停までの登校見送りを行うことで継続した登校を行うことができた。A・T（高１男児）は部活の先輩とのトラブルにより１か月半ほど登校できない期間があったが、段階を踏んだ登校ができるよう学校と調整を行い、現在は気持ちを立て直し毎日登校することができている。来年度も継続した登校ができるよう、個々の状況に応じた登校支援を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・称賛の機会とするために、皆勤賞を設ける。
・継続した登校ができるよう個々の状況に応じた登校支援を行う。

５－２）ユニットでの取り組み

≪2018 年度方針≫

・個々の学習能力にあった教材を用意し学習意欲を高める。
・希望に応じ通信教育や学習塾を利用する。

総括

今年度も毎日学習時間を取り入れてきた。昨年度末と今年度初めに小学生の入所が続き、集中力を保つことが難しい児童が増えた。しかし職員からの声掛けを行い、わからないと

ころを教えてあげることで小学生も学習時間には学習を始める準備ができるようになった。また、お互いに教えあう様子も見られるようになり、児童自身にも学習習慣が根付いてきている。きちんと取り組めた時や児童が難問を解いた時・丁寧にノートをまとめた際などに称賛をしていくことを継続して行ってきた。来年度も学習意欲を高めるよう継続して支援していく。

児童から通塾の希望が挙がった際には児童と話し合いを行い、生活リズムが崩れないようにすること、最後までやり遂げることを伝え、体験を行った上で実施をするか判断することとした。また通塾中の児童に対しても、履修科目や通塾の回数などを話し合い決定した。特に受験生は通塾に対しての意欲を高く持っており、通常の講義だけではなく長期休暇中の講習や、模擬試験、受験生の特別講習も受講をしたいとの要望が多くみられた。児童が後悔のない進路選択ができるように支援し、来年度からも通塾の要望があれば児童と話し合ったうえで受講を進めるとともに、施設内での学習の充実をできるよう参考書等の購入をしていく。

≪2019 年度方針≫

・個々の学習能力にあった教材を用意し学習意欲を高める。
・希望に応じ通信教育や学習塾を利用する。

６、社会的自立・進学への支援、アフターケア

６－１）社会的自立・進学への支援

≪2018 年度方針≫

・支援金の手続きや学校見学など自立支援コーディネーターとの連携を図って行う。
・一人暮らしにかかる費用など学ぶ機会を日常的に持ち、自立に向けて自力起床など自身でできることを増やしていく。
・高校、大学受験に向けて、学習ボランティアの学習回数を増やすことや、通塾やテキストの購入を通じて、より細かい学習支援を行っていく。

総括

今年度は卒園する児童も多く、進学を希望する児童も２名いたため、奨学金の手続き等を自立支援コーディネーターと連携を図って行ってきた。来年度も卒園する児童がいるため、年間を通して自立支援コーディネーターと連携し奨学金の手続きや進学希望先の見学等を行っていく。

遅刻欠席が多く、継続した登校が難しい児童が多かったため、卒業に向け職員が起床の声掛けを行ってきた。自由登校期間になり自力での起床ができるように取り組みを進めてきたことで自力での起床ができる児童も出てきている。来年度は児童と計画を立て、自立後を意識した生活を送れるように支援していく。

大学進学希望の児童に関しては、希望やニーズに合わせ、通塾を行ってきた。

≪2019 年度方針≫

・支援金の手続きや学校見学など自立支援コーディネーターとの連携を図って行う。
・一人暮らしにかかる費用など学ぶ機会を日常的に持ち、自立に向けて自力起床など自身でできることを増やしていく。
・自立後の生活を想定し、自身で散髪の予約や身の回りの買い物、通院を行えるような機会を設ける。

６－２）アフターケア

≪2018 年度方針≫

・退所後支援計画書を作成する。
・誕生日や成人の日など特別な日には手紙やメールで連絡を取り合う。
・必要に応じて退所児の様子を確認し、共有を図る。

総括

卒園した児童に対し定期的に連絡を取り、近況の確認等を行った。昨年度、卒園したＫ・Ａ（19 歳男児）の家賃が払われていないと職員へ連絡があった。対象児童の家庭訪問を行い、就労状況と金銭整理の部分の確認を行った。それにより、仕事を辞めていたことが発覚し、きょうだいと情報共有を行い、今後の生活について具体化を図った。また、Ｍ・Ｓ（20 歳女性）に関しては、昨年度末に寮費の未払いが発覚し、学費・生活費ともに使い果たしてしまうという状況であった。今年度は日本学生支援機構の貸付型奨学金を利用していたが、2 月に学校から本児が退学したがっているという連絡が入り、学費が未払いということが判明した。

退所児童のアフターケアに関しては、進学先・就職先との情報共有と現状把握が十分に行えていなかったため、次年度以降は定期的な確認を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・退所後支援計画書を作成する。
・誕生日や成人の日など特別な日には手紙やメールで連絡を取り合う。
・定期的に進学先・就職先と情報共有を行う。

７、棟運営

７－１）円滑な棟運営のために

①棟会議

≪2018 年度方針≫

・棟会議では棟の課題を各職員が把握し、積極的な意見交換を行う。
・会議時間短縮の取り組みを行う。

総括

今年度職員の異動があり、棟会議の在り方についてまず話し合いを行った。他部署の

会議の進め方、会議録の書式について知るため話を聞く機会を設けた。従来の会議録の書式では、検討事項が羅列してあるのみで見にくい状況となっていたため、日程・児童一人ひとりのケース・検討事項にまとめ書式の変更を行った。会議時間短縮のために、職員一人ひとりが会議の内容について事前に把握しておくことを目的とし、会議翌日の早勤務者が翌週の会議録を作成した。会議日までに各々がケースや検討事項について打ち込むことで、議題の把握、会議内において意見交換を積極的に行うことができた。対応の難しいケースが多く、議論に時間を要したため会議時間の短縮には至らなかった。会議スケジュールの確認を行うなど、会議時間の短縮に向けた取り組みを行っていく。

≪2019 年度方針≫

・事前に会議録の読み込みを行い、検討内容について把握した上で会議に臨み、積極的な意見交換をする。
・会議スケジュールの確認を行い、会議時間の短縮を図る。

②記録

≪2018 年度方針≫

・引き継ぎを充実させるために各日誌を有効活用していく。

総括

棟日誌、養育日誌を活用し、児童状況や通信関係などを記入し、他職員への情報伝達に漏れがないように努めてきた。また、会議で話し合った日程については、見えやすいよう、公務室の壁に張り出し、新たな予定が入った場合は書き入れるなど抜けがないように取り組んできた。しかし時にメモ書きのみに留まってしまうことや、職員のとらえ方の違いから誤った情報伝達になってしまった部分があった。今後は日誌の活用をしつつ、引き継ぎの際口頭での伝達も行い、抜けや誤りがないように取り組んでいく。また、壁やコルクボードなどに大量の手紙を貼り付けてしまったことで、書類の整理ができなかった。書類の保管については整備を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・引き継ぎ内容に抜け、誤りがないように各日誌を活用する。
・引継ぎの際に棟会議録を活用する。

③会計など

≪2018 年度方針≫

・予算残高を把握し、計画的な予算執行を行う。

総括

今年度は掃除機や電子レンジなど年度途中で壊れてしまったものが多く、その都度予算残高を確認しながら購入を行ってきた。衣類購入については、塾やバイトなどの予定もあり、購入の日程を設けることが難しく、計画的な予算執行ができなかった。来年度

は児童の予定を把握し計画的な予算執行を行っていく。

小口の帳簿については、計算間違いや書き損じなどが多くみられていた。その都度事務からも助言をもらい改善に努めたが、金種別表の書き忘れなどが未だ見られるため抜けがないよう日々の確認を怠らないようにしていく。

≪2019 年度方針≫

・予算残高を把握し、計画的な予算執行を行う。
・小口帳簿や金種別表の記入に書き損じ、書き忘れがないように確認を行っていく。

７－２）安心安全な環境整備（＊職員の取組み）

①防災への取り組み

≪2018 年度方針≫

・月１回の避難訓練の参加率を維持する。

総括

今年度は避難訓練が行われる前日などに予告し参加を促してきたこと、日本各地で自然災害が多く発生したことで余暇時間等に災害についての話をする機会が多かった。児童の中でも防災意識が高まり、避難訓練時に棟内に残っている児童はしっかり参加できた。来年度も余暇時間などで災害や防災の話題が出た際などに避難訓練の大切さを伝え、参加を促していく。

≪2019 年度方針≫

・月１回の避難訓練の参加率を維持する。
・余暇時間などを利用し避難訓練の必要性や災害についての話題をあげ、防災についての意識が持てるようにする。

②環境整備

≪2018 年度方針≫

・共有スペースをきれいに保ち、児童自身が意識できるように利用方法、環境整備を児童たちと話し合いながら決めていく。

総括

整理整頓が苦手な児童がおり、共有スペースの整頓に関しては声かけが必要なことが多かった。職員が声かけを続けてきたことで、一人ひとりの意識は高まりつつあり声をかけられるとすぐに片づけることが出来るようになった。共有スペースの利用の仕方についてはこども会議などで児童からも意見が上がり、きれいにしようとする意識が高まってきた。しかし中高生の中で面倒くさいという気持ちからリビング等に物を放置してしまう児童がいた。また、洗濯物に関しては中高生の児童に声かけや場合により一緒に干すなど児童の習熟度に合わせた支援を行ってきた。どちらも意識して行うことができる児童が増えてきている為、来年度も継続していく。

≪2019 年度方針≫

・共有スペースをきれいに保ち、児童自身が意識できるように利用方法、環境整備を児童たちと話し合いながら決めていく。

７－３）関係機関との連携

①児童相談所

≪2018 年度方針≫

・福祉司に必要に応じて児童の状況を報告し、緊急時にも即座に対応してもらえるよう情報を共有しておく。

総括

情報共有の為に福祉司への連絡を行っているが福祉司の不在が多く、返答も無いためなかなか伝わらないことがあった。同じチームの福祉司に伝えることや、伝言を残し情報共有の漏れがないようにしてきた。

≪2019 年度方針≫

・福祉司に必要に応じて児童の状況を報告し、緊急時にも即座に対応してもらえるよう情報を共有しておく。

②学校など

≪2018 年度方針≫

・職員の学校訪問や電話連絡、話し合いを通して児童たちの状況を共有する。

総括

小中学生については連絡協議会を実施し、情報交換を行った。また、H・T（小５男児）に関しては、学校での問題行動が見られたため、学校に出向き授業上の参加上の確認や必要に応じて話し合いの場を設け、支援の統一を図ってきた。来年度も情報共有を密に行い、児童対応が迅速に行えるようにしていく。

≪2019 年度方針≫

・職員の学校訪問や電話連絡、話し合いを通して児童たちの状況を共有する。

③医療機関（＊定期通院している場合）

≪2018 年度方針≫

・ユニット会議で薬の残数確認と通院時の報告事項についてケースにまとめる。
・予定している通院を会議内で確認していく。
・治療指導員と連携を行い、薬の残量・通院日の情報共有し通院対応をする。

総括

昨年度同様、カレンダーに印を付け会議時に通院日の確認を行ってきたが、勤務変更などが行われた際に抜けが出てしまうことが続いてしまった。現在、治療指導員・医療機関等連絡調整員と連携を図り、薬の残量の管理や通院日の確認、通院対応などを行ってきた。来年度も抜けがないよう、治療指導員、医療機関等連絡調整員と連携を図っていく。

≪2019 年方針≫

・ユニット会議で薬の残数確認と通院時の報告事項についてケースにまとめる。
・予定している通院を会議内で確認していく。
・治療指導員と医療機関等連絡調整員と連携を行い、薬の残量・通院日の情報共有し通院対応をする。

④ボランティア

≪2018 年度方針≫

・ボランティア記録簿や話し合いを通して、児童に合った支援が行われているかを確認する。
・学習ボランティアの記録簿の回答を会議日に確認する。

総括

今年度休日の学習、児童支援の位置づけでボランティアに来てもらった。小学生の学習や遊びの見守りを行ってもらうことで手厚い支援を行うことができた。ボランティアの方から、児童状況を詳しく知りたいとの話があったため、必要な情報の開示を行い、ボランティアがより児童を見やすい環境を整えることができた。

学習ボランティアの記録簿について部署会議時にコメント記入の時間を設けることとしてきたが、児童のケース会議など支援のために部署会議の時間を割くことが多く、記入が抜けてしまうことがあった。来年度はボランティア記録簿の記入が抜けないよう、当日の勤務者が書き込みを行い、会議日に全体で確認を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・ボランティア記録簿や話し合いを通して、児童に合った支援が行われているかを確認する。
・学習ボランティアの記録簿の記入を当日に行い、会議日に確認する。
・ボランティアと児童の関係性が深まるような企画を計画する。

７－４）性的事故防止のための取組み

≪2018 年度方針≫

・児童が他ユニットに移動する際は、電話連絡をして所在の把握をする。
・洗濯物の管理の仕方を教えていく。
・死角になる可能性のある場所を把握し、見回り・夜間見回りを強化する。
・権利ノートや生活のしおりを用いての、権利や安心・安全な生活づくりについて考える。
・児童の適切な距離感が取れるよう声掛けを強化する。

総括

他ユニットへの移動時の電話連絡や夜間の見回りに関しては今年度も継続して行うことができているため、来年度も継続して行っていく。

洗濯物（下着）を廊下や脱衣所に置き忘れてしまう児童がいたため、都度声かけを行ってきた。しかし改善がみられていない児童もいた。そのため、職員が洗濯物を自室に運ぶなどして他児の目に触れないようにしてきた。来年度も声掛けを行いながら、一般的な価値観が獲得できるようにしていく。

R・M（小４男児）は他児の部屋に無断で入ってしまうことがあったため、権利ノートを使用し、自身と他児の権利について振り返りを行い、安心・安全な生活について学ぶ機会を設けた。

昨年度末から小学生の入所児童があり、児童構成が替わったことから、児童間の距離が近いことが多くみられるようになった。都度声掛けを行うとともに、余暇時間を利用し人との距離について腕１本分以上の距離が心地よいことを伝えている。

≪2019 年度方針≫

・児童が他ユニットに移動する際は、電話連絡をして所在の把握をする。
・洗濯物の管理の仕方を教えていく。
・死角になる可能性のある場所を把握し、見回り・夜間見回りを強化する。
・権利ノートや生活のしおりを用いての、権利や安心・安全な生活づくりについて児童と考える機会を作る。
・児童の適切な距離感が取れるよう声掛けを強化する。

８、質の高い勤務体制のために

８－１）職員集団作り

≪2018 年度方針≫

・意見を出しやすい環境、雰囲気作りを心がけお互いの言葉に耳を傾け意見を集約していく。

総括

棟会議録を会議前までに作成するようになったため、職員個人の意見や質問・疑問を書きこむことが出来、会議日には充実した話し合いが出来るようになってきている。出

てきた意見に関しては色々な立場からの考えを聞くようにして『出来るのが当たり前』を決めつけないように話し合いも行った。

≪2019 年度方針≫

・意見を出しやすい環境、雰囲気作りを心がけお互いの言葉に耳を傾け意見を集約していく。

８－２）勤務体制

≪2018 年度方針≫

・職員としてのそれぞれの役割や心身の健康維持に配慮した無理のない勤務体制が取れるようにする。

総括

仕事とプライベートを分けることにより、気分をリフレッシュし、仕事に対する気持ちも前向きになれ笑顔で働ける時間も増えると考える。希望休・希望勤務についても早めに集約し出来るだけ優先できるように組み立ててきた。また今年度は職員の異動があったため、担当ユニットの児童との関係が築けるよう、1 か月間担当ユニットのみの勤務に従事した。

≪2019 年度方針≫

・職員としてのそれぞれの役割や心身の健康維持に配慮した無理のない勤務体制が取れるようにする。

８－３）研修

①研修

≪2018 年度方針≫

・勤務調整を行い、希望の研修に参加する。
・研修報告は 10 分程度の報告会を行う。

総括

人材対策委員会より経験年数等を配慮した研修が振り分けられ早めに予定を組むことができ参加しやすくなっている。研修報告に関しては棟会議の中で資料配布のみとなってしまっている。来年度は意識して会議内で報告をする時間を設ける。

≪2019 年度方針≫

・勤務調整を行い、希望の研修に参加する。
・研修報告は 10 分程度の報告会を行う。

②新任研修

≪2018 年度方針≫

・勤務体制を調整し、新任研修に参加する。
・職員同士が業務内での気づきに対する助言や、質問に答える時間を作っていく。
・OJT を活用する。

総括

引き継ぎの時間や会議録で話題にあがった事はそのままにせず、会議の際に、様々な立場から意見を言えるような話しやすい環境や場面を作ってきた。OJT に関しては担当職員のみに任せてしまい、計画的に行っていくことが難しかった。担当職員のみならず他の職員とも連携し進捗状況を確認し、取り組んでいく。

≪2019 年度方針≫

・勤務体制を調整し、新任研修に参加する。
・職員同士が業務内での気づきに対する助言や、質問に答える時間を作っていく。
・OJT は会議内で進捗状況を確認し、年間を通して実施できるよう具体化する。

９、他部署との連携

９－１）事務

≪2018 年度方針≫

・請求、精算の期限が守れるよう、棟会議や引き継ぎでの確認を徹底していく。
・領収書チェック表の利用を徹底する。

総括

必要な請求に関しては、引継ぎや棟会議の場で確認を行い、漏れのないように意識して行ってきた。しかし、請求をしても棟日誌への記載が漏れてしまい二重の請求をしてしまったことがあった。今年度領収書チェック表があったものの、棟日誌とは別のファイルにしていたことから記入が漏れてしまっていた。領収書チェック表を棟日誌前に移動し、漏れがないようにする。

≪2019 年度方針≫

・請求、生産の期限が守れるよう、棟会議や引継ぎでの確認を徹底していく。
・領収書チェック表の利用を徹底する。

９－２）FSW

≪2018 年度方針≫

・家庭調整のため情報を共有していく。
・保護者との連絡調整を分担していく。

総括

ケースによっては FSW が窓口となり、定期連絡や面会時の連絡調整を分担して行ってき

た。外泊交流の開始前に家庭訪問を実施してもらい、事前に児童の様子等について保護者との情報交換を行った。H･T（小５男児）に関しては、物のやり取りや外泊後の生活の乱れが多く見られたため、ユニット職員、FSW にて本児を含めて外泊後の約束事の設定を行った。約束事については守って外泊を行うことができるようになってきている。N.M（高２男児）に関しては保護者が児童に沿った関わりができないため特性の理解を深め、かかわり方の改善を図った。またその中で児童が自宅に帰りたいという思いが断ち切れなかったため、母、祖父母を交えて、自宅に戻れないことの原因について本児に伝える機会を設けた。今後も情報共有しながら連携を図っていく。

≪2019 年度方針≫

・家庭調整のため情報を共有していく。
・保護者との連絡調整を分担していく。

９－３）心理

≪2018 年度方針≫

・定期的に児童の様子を伝え、情報を共有する。

総括

心理的ケアが必要な子に対してその都度相談し、専門的部分から助言をいただき日々の支援へ活かしてきた。M・T（高２女児）に関しては、元付き合っていた男性へは施設内の生活や決まり事を伝える場や、本児への首絞め行為等があった為、話し合いの場を設け同席してもらい専門的な見解から話をしてもらった。また、気持ちが不安定になりやすくリストカットが見られた際には、精神科への通院も相談しいくつかの通院先を紹介してもらうことができた。R.M（小４男児）に関しては、トイレ以外での排尿や夜間の徘徊など逸脱行動が多くみられていたため、逸脱行動の一覧を作成し、相談をして通院も含め対応について助言を受けている。心理的ケアが必要な児童については随時相談を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・心理的ケアが必要な児童については通院を含め相談を行い、連携を図る。

９－４）個別対応職員

≪2018 年度方針≫

・定期的に児童の様子を伝え、情報を共有する。
・面談を通して得た情報を共有し支援につなげていく。

総括

N ・M（高２男児）が学校で性的事故を起こした際には、CW と共に学校への話し合いに同席してもらった。園内での日中活動の際にも取り出しを行ってもらい、社会の学習やランニングでタイムを図る等幅広く対応してもらった。また、その中で児童から出た話やユニット内での生活状況の情報共有を図り連携してきた。

≪2019 年度方針≫

・個別の活動を通して得た情報を共有し支援につなげていく。

９－５）治療指導員

≪2018 年度方針≫

・定期的に児童の様子を伝え、情報を共有する。

総括

服薬している児童が多い為、児童の生活状況を共有してきた。通院日にはユニット対応や薬のみの通院を行ってもらった。

今年度服薬が始まった児童に関しては、学校生活の観察や話し合いにも同席してもらい、服薬についての説明をしている。引き続き服薬している児童が多い為、定期的に情報共有を行い連携していく。

≪2019 年度方針≫

・必要に応じて、通院の依頼をする。
・精神科医との相談窓口を行ってもらう。

９－６）自立支援コーディネーター

≪2018 年度方針≫

・入退所児童共に定期的に児童の様子を伝え、情報を共有する。

総括

今年度は A・T（高 1 男児）が YTC へ参加し、毎月の YTC 参加の際には同行してもらった。また、夏休み期間中にはシナジーの職場体験に参加する機会を設けてもらい、将来働く上で貴重な経験をすることが出来た。

今年度は棟から 3 名の児童が自立することとなっており、奨学金関係の窓口を行ってもらい、様々な情報を得ることが出来た。

≪2019 年度方針≫

・自立に向けた取り組みを具体化し、連携を図って早めに計画を立て取り組む。

９－７）地域支援担当職員

≪2018 年度方針≫

・定期的に児童の様子を伝え、情報を共有する。

総括

育成会の行事や地域の夏祭りでの太鼓練習等で引率してもらい児童状況を共有した。次年度も情報共有しながら連携していく。

≪2019 年度方針≫

・地域の行事に参加する際には、状況に応じて引率を依頼する。

９－８）医療機関等連絡調整員

総括

今年度 11 月より医療機関等連絡調整員が入職した。ADHD 等で服薬している児童の薬の管理を行ってもらい、1 週間ごとに必要な日数分の薬をボックスにセットしてもらった。その為、薬の残数管理や日々の服薬も抜けが無いように意識して行うことが出来た。また、突発的な発熱や体調不良を訴える児童の健康状態の確認や通院の対応をしてもらった。今後も児童の情報共有を行い連携していく。

≪2019 年度方針≫

・発熱や体調不良の確認をしてもらい、必要に応じて通院を依頼する。

９－９）専門部（セーフティネット含む）

≪2018 年度方針≫

・セーフティネットを依頼する場合、事前にユニット会議、引き継ぎなどで確認し、期日までに手続きを行う。
・ケース検討の際、各専門職への質問・相談事項をよく確認し、まとめた上で資料を作成する。

総括

棟会議で確認を行い、勤務補助が必要との判断になった際には勤務補助依頼を行ってきた。急に入る部活動の練習試合の送迎等は勤務補助依頼の提出が遅くなってしまうこともあったが、迅速に対応してもらった。また職員の体調不良時には、補助に入ってもらうことで、大きな勤務変更もなく棟の負担を軽減することができた。

必要に応じてケース検討を依頼し、資料の作成を行ったため、質問事項をまとめ棟内で確認をした後にケース検討へ臨むことができた。棟内だけでは解決しなかった問題でも専門的な助言をもらいそれぞれの支援に活かすことができた。

今年度は登校不振や性的問題、SNS の使い方などで昨年度より落ち着かない状況であった M.T（高 2 女児）の個別対応プロジェクトを行ってもらった。支援の具体化をしたことで、生活が大きく乱れることなく、夏休みを終えることができた。

≪2019 年度方針≫

・セーフティネットを依頼する場合、事前にユニット会議、引き継ぎなどで確認し、期日までに手続きを行う。
・ケース検討の際、各専門職への質問・相談事項をよく確認し、まとめた上で資料を作成する。

９－１０）調理

≪2018 年度方針≫

・ホーム行事等で食数が変わる場合は余裕を持って早めの調整を行う。
・部活等の予定表を月初めに必ず調理部に提出する。

総括

棟会議内で面会や外出で食数が変更となる際の確認を行った。しかし、急遽入った部活動の試合や高校生のアルバイトがあった際には、食数変更を伝え忘れてしまうことがあり迷惑をかけてしまった。次年度は、日々の引継ぎから意識し、職員一人ひとりが責任をもって行っていくこととする。

今年度は中学生が 3 名部活動に参加していた。部活動によっては月の初めに予定が出ないこともあったが、部活動の予定が出次第予定表を提出してきた。

≪2019 年度方針≫

・行事等で食数が変わる場合は余裕を持って早めの調整を行う。
・部活等の予定表を配布された時点で必ず調理部に提出する。

10、ユニット総括

ひまわりユニット総括

Ｈ・Ｔ（小５男児）は学校生活において集団での行動が苦手であり、運動部分については苦手意識を持っていた。それにより秋の運動会の練習から授業に出られないことが増え、その際に学校の支援員と個別で関わりが持てたこと、自分の思いが通ってしまったことで授業に出ないことが定着してしまった。職員も授業の様子を見に行くと頑張ろうという意思は見られたが職員がいないと学校の先生に対しては強く出て自分の意思を通そうとし、家庭で生活していた際の母と本児の関係性に近い形になっていた。学校教員にも生い立ち部分を説明し、声掛けにはメリハリをつけてほしいこと、授業への参加の仕方については視覚的に約束事が分かるようにし、学校とも連携を図ってきたことで多少の改善は見られた。

Ａ・Ｔ（高１男児）は今年度から高校生活を開始し、初めは部活も意欲的に参加していた。しかし、夏休み以降から部活での先輩との関係性が原因で一時不登校になってしまった。再登校が出来るように学校の先生にも協力を仰ぎ、先輩との関係性の修復をお願いし、職員との話の中では高校を辞めてしまった際の進路の部分で現実的に働く大変さをハローワークに連れていくことで理解を深めた。次第に本児も自分の置かれている立場を理解したことと学校内での友人関係はうまくいっていたこともあり、１０月から段階を踏んだ登校ができた。

Ｎ・Ｍ（高２男児）は年度初めに学校での逸脱行動や女子児童への性加害問題が発覚し、一時保護を経て振り返りを行った。園内で生活を組み立て、取り組みを継続し、引き続き

知的障害児施設への異動の調整を図ってきた。そして、以前から問題行動（飛び出し行為、暴れる、タバコを食べる）が繰り返されていたため緊急でホスピタル坂東に医療保護入院となった。病院内での生活は刺激も少ないことから安定しており、関係している機関と連携をして施設を探し、いくつか候補先が見つかり、今後体験などと行っていく予定である。

Ｍ・Ｔ（高２女児）は昨年度ＳＮＳに自分の露出の高い写真も載せたことが原因で友人関係も不調となり、通信高校に転学した。本児の生い立ちの部分で性被害を受けた過去もあり、児童相談所と連携をして TF-CBT（認知行動療法）に取り組み、内面的な部分の治療に取り組む段階である。来年度は自立を控えた年齢となり、今後自立していく上で進路の話、家族との付き合い方等も踏まえて丁寧に話し合いを重ねていく。

Ｍ・Ｉ（高３男児）は進学と就職について話をしていく上で就職を選択し、本児の希望する職種の求人票を用いて待遇面を見比べ、一人暮らしを想定した上での生活スタイルの話を行ってきた。こだわりが強く、対人関係が苦手な部分から面接などがなく、知人の紹介などで採用が得られるような会社を探していたが現実的に厳しいこと、職員の実体験も踏まえて面接などの対策なども伝えてきた。最終的には園の近くになる土木関係の職場に採用となったが体験をする中で仕事の大変さを思い知り、働く意欲が低下してしまったため、不安材料を取り除きつつ、進路について改めて話をしていく。

児童の集団としては特性のある児童が多く、児童それぞれが個人で生活しているという意識が強く、集団としてのまとまりがないことが課題であった。また何よりも自分を見てほしいという承認欲求が強い児童が多い。そのため自分を見て欲しいという感情が見られた。そのため、児童個人を認めること、相手の存在を認められるようにすることを繰り返し伝えてきた。少しずつではあるが悪い部分ばかりではなく、個々の特性も踏まえて理解をしていこうという雰囲気は持てるようになってきている。

ジャスミンユニット総括

昨年度末で 2 人が退所し、3 月末に A.H（小 2・男児）が、4 月半ばに R.M（小 4・男児）が新たに入所し、男児 4 名、女児 3 名でユニット生活を行ってきた。職員の異動はなかったこと、高齢児がユニット生活についてよく把握していたこともあり、大きく生活が崩れることはなかった。

ユニット生活に慣れるに従って、R.M（小 4・男児）には他児や学校の備品を盗んでくることや、トイレ以外での排泄行動、窓に石をぶつけるなど逸脱行動が多くみられるようになってきた。その都度話をする機会を設け、犯罪行為であることを伝え、相手への謝罪の場を設けるなどを行ってきた。しかし話をする場でもただ泣いて返事をするだけになっており、言い訳や嘘を吐くことが多々あり同じ話を何度も繰り返すこととなった。どうしてそのようなことをしたのかについては、自身でもよく考えずに行動してしまっていることから、毎日振り返りノートに自身の一日に起きた良かったこと、よくなかったことについて書き、就寝前には職員と振り返りの時間を設けている。現在はノートに書く内容について、テーマを毎日変えて取り組むようにしている。逸脱行動につい

ては心理職とも連携し、必要に応じて通院なども行っていくこととする。A.H（小 2・男児）については、同じ学年の K.M（小 2・女児）と共に遊ぶことも多く、トラブルになることも多い。言葉が過ぎて相手を怒らせたり泣かせたりしてしまうこともあるが、職員が仲介することによって自身のよくなかったことについて振り返り謝罪をすることができている。普段の生活の中でも互いに競い合い、勉強をがんばるなど良い刺激にもなっている。ADHD との診断があり、定期的に通院、服薬を行っている。年齢相応の学力が身に付いておらず、来年度からは特別支援級の利用をするため手続きを行った。集中力にムラがみられ、学習や食事に集中することが難しい様子も見られるが、行わなければいけないことについては時間が掛かりつつもしっかりと取り組むことができている。昨年度幼児ユニットから移動してきた K.M（小 2・女児）に関しては、未だ癇癪を起して泣きわめくこともあるが、A.H（小 2・男児）の存在が良い刺激となっているのか、気持ちの切り替えは早くなり、癇癪を起こすこと自体激減した。学習に関しても特別支援級を利用し、本児のペースで行ってくれていることもあってか、学習に対して意欲的に行えている様子が見られている。

今年度は高校進学を控えた R.K（中 3・男児）、大学進学を控えた C.K（高 3・女児）、J.I（高 3・男児）がおり、進路について話をする機会を多く設ける必要があった。R.K（中 3・男児）についてはこだわりが強いこともあり、自身の成績よりも上位の高校を目指しており、通塾や学生との受験生指導を行っていたが、他人任せにしている様子が強くみられていたため、自身でも努力するよう話をしていた。県立の受験校決定について学校側とも相談し、本児の学力に見合った選択を行っていくこととする。C.K（高 3・女児）、J.I（高 3・男児）については、なかなか進学先を決めることができなかった。C.K（高 3・女児）については、薬学部に進みたいという希望があり、オープンキャンパスへの参加を行った。学力、金銭面、6 年間の学校生活などの現実的な難しさから、本児とも話をする場を幾度も設け、総合的な判断から薬学部ではなく、次点で興味のあった経済学部に進むことを決めた。どの大学に進むか決まらずにおり、夏期休暇後半には不安から気持ちが落ちてしまう様子もあり、一時は「園を出る」と言って職員とぶつかることもあった。十分に話し合い、一緒に考えていくことを伝え、学校とも連携し大学進学先を探していくうちに気持ちも落ち着いてきた。本児の成績が上位だったこともあり、大学については指定校推薦をもらえるところに決めることができた。11 月には受験、合格発表となり、合格通知をもらえたこともあり、気持ちの安定につながっていた。進学に向けて現在は奨学金の申請を行い、住居についても 2 月に探す予定となっている。J.I（高 3・男児）については、自分が何をしたいのかについて不確定な要素が強く、進学先を決め切れずにいた。本児の国際交流についての興味から、学校の先生に相談し、指定校推薦の枠がある国際交流学科のある大学に進むことを決定した。指定校推薦については本児の成績がぎりぎりだったこともあり、枠に入れるか難しい状況であったものの、課題への取り組み、試験の成績を上げるための本児の努力もあり、指定校推薦の枠に入ることができた。11 月後半には入試、合格発表があり、合格することが

できた。現在はC.K（高3・女児）同様、奨学金申請手続きや住居探しを行っている状況である。

今年度は、受験を控えた中3、高3児童が多く、対応に追われてしまうことが多かった。一人一人十分に対応することができるよう、事前の確認や情報を仕入れることなど自立支援コーディネーターとの協力が必要不可欠であることを再認識することとなった。また丁寧に対応することも含め、同じ学年が複数いることについては、議論の余地があると感じている。

さくら棟

2018年度総括、及び2019年度方針

みつばユニット	橋本　浩樹
	横田　真衣
	稲葉　晃大
ちゅーりっぷ	兵藤　鈴子
ユニット	栗原　諒人
	安井　貴士
	大畠　未帆
地域支援担当職員	川村　いくみ
フリー	櫻井　翔太
	小林　拓巳

児童構成

ちゅーりっぷユニット

1	Ｓ・Ｔ	男	未就園児	平成30年4月6日 他施設へ措置変更
2	Ｋ・Ｙ	男	つくば市立筑波幼稚園　年中	
3	Ｒ・Ｏ	女	つくば市立筑波幼稚園　年中	
4	Ｍ・Ｓ	女	つくば市立筑波幼稚園　年中	平成30年5月10日入所
5	Ｈ・Ｏ	男	つくば市立筑波幼稚園　年長	
6	Ｋ・Ｍ	男	つくば市立筑波幼稚園　年長	
7	Ｃ・Ｏ	男	つくば市立筑波幼稚園　年長	

みつばユニット

8	Ｎ・Ｓ	女	つくば市立筑波幼稚園　年長	平成30年9月27日入所
9	Ｓ・Ｏ	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　2年	
10	Ｊ・Ｈ	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　6年	
11	Ｓ・Ｉ	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　7年	
12	Ｓ・Ｃ	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　9年	
13	Ｎ・Ｃ	男	つくば市立秀峰筑波義務教育学校　9年	
14	Ｓ・Ｉ	女	茨城県立筑波高等学校　2年	

１、全体総括

昨年度末にみつばユニットで２名家庭復帰となり、その後Ｎ・Ｃ（中３男児）が入所となったため、みつばユニットは６名、ちゅーりっぷユニットは６名の児童構成でスタートした。４月にＳ・Ｔ（年中男児）の姉の措置されている児童養護施設で空きができたとのことで、姉弟を同じ施設で養護するためＳ・Ｔは姉のいる施設へ措置変更となった。その後Ｍ・Ｓ（年中女児）が入所となり、ちゅーりっぷユニットは６名定員となっている。みつばユニットはＳ・Ｏ（小２男児）を除いて高学年児童のみであり、更に男児５名女児１名の構成であった。入所依頼もいくつかあったが、高校受験を控えた児童が２名おり、年齢構成や男女のバランス、ユニット内の安定を優先とし、しばらく入所がない状態であった。９月になり、Ｎ・Ｓ（年長女児）の入所依頼があり、学童ユニットであるが、棟内で生活の組み立てや対応を確認し受け入れが可能であると判断して入所となった。Ｎ・Ｓが入所したことによりみつばユニットも定員の７名となった。

今年度は年度当初に職員の異動や新採職員が配属されたことで、担当職員の変更があった。年齢も経験も若い職員集団となり、色々なことを経験し、学んでいくということを職員間で確認をし、係の分担、行事の起案、関係機関への連絡調整等分担をして行うことができた。必要に応じて相談や確認を行いながら実施してきた。また、職員それぞれがユニットのみでなく、棟担当職員であるということを再確認し、棟運営に携わることを意識化してきた。ユニットの児童だけでなく、棟の児童についての状況等を把握することに努め、日誌や引継ぎなどを通して実施してきた。引継ぎでは伝える側も受け取る側も当事者意識を持つよう、ただ伝えるだけ、聞くだけではなく、その根拠まで確認しながら行ってきた。

棟の生活作りについては、ユニットはあくまで子ども達の家であるということを確認し、日常生活の中の関わりで何を大切にしていくのかということを考え、話し合いながら生活を形作ってきた。その中で職員各々が自身で考え、主体的に動くことや考えを発信できる場面も徐々に多くなってきた。

今年度も職員集団作りに関して、月に１回、全７回の学習会を行った。職員作りをテーマにその月の担当となった職員が内容を持ち寄り、各職員の考え方を知るものや、スキルアップに繋がる内容など棟職員全員が顔を合わせてテーマについて話し合える場となった。自分たちに必要だと思うことを職員各々が考え、発信し、みんなで取り組む機会であるため、次年度も継続していく。

今年度は年度途中に棟会議におけるファシリテーターなどの役割を持ち回りで意図的に配置した。当初は会議時間の短縮を目的としていたが、ファシリテーターは会議の時間や内容などを把握しなければならないため、各職員の会議に対する意識の向上にも繋がり、結果的に会議時間も短縮されつつある。今後も、会議の質や職員の技術の向上を図るために継続していき、振り返りを通して問題点の抽出や役割の精査を行っていく。

２、養護の基本方向（方針）と重点課題

１）基本方針

≪2018 年度方針≫

・子ども会議の場で行事やユニット内の約束事などを相談し、意思決定を行っていき、それぞれの考えが伝えられる雰囲気作りを行う。
・子ども達と個別の話し合いを通して、良いことも悪いことも共有していく。
・他児が嫌がる言動をしないよう日々の中で伝え、そのような言動があった場合、事の善悪について伝えていく
・重複勤務の際には、意図的に個別の時間を設定し、個々のニーズに合わせた関わりを持つ時間を作る。
・子どもからの話を真摯に受け止め、職員間で共有を図り対応していく。

総括

年度当初掲げた棟の目標である「互いの意見を尊重する」ということを念頭に置き、支援に当たってきた。子ども会議では、外出など行事の希望を聞き取ることやユニットの約束事の確認なども行ってきた。パソコンの使用時間についての約束事を変更したいと子ども達から挙がり、話し合いを通して約束事の変更を行うこともあった。また、約束事が守られていない際には、都度振り返りを行い、職員側もどのように対応していくかを共有して取り組んできた。

子どもからの不満や要望があった際は話を聞き、解決に努めてきた。子どもへ話をする際も職員間で伝える内容や伝え方、役割分担などを行い、効果的に伝えられるようにしてきた。

≪2019 年度方針≫

・子ども会議の場で行事やユニット内の約束事などを相談し、意思決定を行っていき、それぞれの考えが伝えられる雰囲気作りを行う。
・子ども達と個別の話し合いを通して、良いことも悪いことも共有していく。
・他児が嫌がる言動をしないよう日々の中で伝え、そのような言動があった場合、事の善悪について伝えていく
・子どもからの話を真摯に受け止め、職員間で共有を図り対応していく。

２－２）重点課題

≪2018 年度方針≫

・安心・安全な生活ができるように毎週の子ども会議を通して良くない言動を振り返り、より良い生活が築けるようにする。

総括

毎週子ども会議を行い、子ども達からの意見等を聞くことや職員から伝えたいことな

どを伝える機会としてきた。子ども会議を行うことについては、子ども達の中でも習慣化され、スムーズに取り掛かることができるようになっている。また、普段の生活の中で疑問や要望は話し合いで解決していくことを伝えてきており、子ども会議の重要性を実感している。子ども達からの自由な考えや意見が出ることは多くはないが、職員から例や選択肢を提示することで自身の生活について自身で考える機会を増やし、それらを育んできた。

≪2019 年度方針≫

・安心・安全な生活ができるように毎週の子ども会議を通して生活を振り返り、より良い生活が築けるようにする。

3、生活集団への支援（※子どもへの支援内容）

3－1）子ども会議

≪2018 年度方針≫

・子ども会議で話し合ったことを元に日々の生活に反映をさせていく。参加できない児童が居た際の報告に関しては、話し合った内容を紙に記載したものを掲示しておく。
・ユニットの約束毎など子ども会議を利用して振り返る場とする。
・子ども会議では勤務者が自己肯定感を育めるような会議の場にする。（良かった点を褒める）

総括

子ども達が主体的に話し合いに参加できるように一人一人の声を大事にしてきた。また子どもたちからの意見を反映できるように棟会議の場で話し合いを行い、その結果を子どもたちに伝達することを行った。一方で、塾やバイトがある児童が子ども会議に参加できないことも多くあり、参加できなかった児童に対して子ども会議の内容の伝達が疎かになってしまうこともあった。子ども会議に参加できなかった児童に対する伝達については、子ども会議の会議録の整備や担当者の選定など具体的に対策を検討し、抜けがないよう取り組んでいく必要がある。

子ども会議の場で個々を褒める機会を設け自己肯定感を育む取り組みを行ってきた。そのため、子ども達の中で子ども会議が嬉しい時間となり定着してきている為継続して行っていく。

≪2019 年度方針≫

・子ども会議で話し合ったことを元に日々の生活に反映をさせていく。
・子ども会議では勤務者が自己肯定感を育めるような会議の場にする。（良かった点を褒める）

３－２）安心安全な生活のための子どもへの支援

≪2018 年度方針≫

・基本的な挨拶（おはようございます・いただきます・ただいま等）を交わす。
・子ども会議の際に権利ノートの読み合わせをし、参加した職員が記録を残す。
・ユニットの約束について子ども会議を利用し定期的に振り返り、意識出来るようにする。

総括

基本的な挨拶の部分で、自発的な挨拶が不十分な所があるため、職員が率先して挨拶を行い子どもたちにも習慣づけできるように取り組んできた。そのため、おはよう・ありがとう・おやすみなど子ども達からの自発的な挨拶が多くなってきた。今後も職員と子ども、子ども同士での関係性構築の為や楽しいコミュニケーションを繋がるよう継続して取り組んで行く。

約束事は、子ども会議に振り返りを行っているため今後も継続して行っていく。

権利ノートに関しては子ども会議の日に塾やバイト等で子どもの人数が少ない日もあったため、あえて子どもの人数が多い日に設定し行ってきた。子ども達自身にも意識をさせるために権利ノートを児童に読んでもらう機会を作った。読み合わせを重ねてきたことで権利に対して興味を持つ児童が増え活発な意見交換が出来た。今後も定期的な読み合わせを行っていく。

≪2019 年度方針≫

・基本的な挨拶（おはようございます・いただきます・ただいま等）を交わす。
・より多くの児童が参加出来る日を選定し権利ノートの読み合わせをし、児童に分かりやすく権利を伝える。

３－３）行事

≪2018 年度方針≫

・個別外出を計画し、最大限実現出来るようにする。
・棟・ユニット行事の外出を計画し年間予定を作成する。

総括

個別外出に関しては、年度初めに年間の外出のスケジューリングや対象児童の選定を行った。スケジュールに基づいて対象児童のニーズに合わせた外出を実施してきた。個々のニーズに合わせた外出をすることで自分の好きなことを個別で行う事ができ、満足感や充実感が得られ、職員との関係性の構築へと繋がった。また、年間の外出予定の予算立てしたことで計画的に行事を実施することが出来た。

≪2019 年度方針≫

・個別外出を計画し、最大限実現出来るようにする。

・棟・ユニット行事の外出を計画し年間予定を作成し、計画に基づいて実施する。

３－４）生・性教育への取り組み

≪2018 年度方針≫

・生活場面でそれぞれの年齢に応じた生・性の正しい知識を学習する。（プライベートゾーンや異性との付き合い方など）
・性教育委員会と連携して学年に応じて性知識を身に付けていく。
・行事ごとの写真に関しては外付け HD に入れ、管理する

総括

行事毎の写真に関してはデスクトップから外付け HD に入れ、安全に管理することが出来た。行事毎のフォルダに分かれているため今後、児童毎にフォルダ整理をしていく。

児童間で距離感が近い際には、相手が不快な気持ちにならないように人との適切な距離感について繰り返し話をしてきた。その結果、児童間で適切な距離感をつかめてきている為、継続して支援していく。

共有スペースで性的言動（上半身裸で歩き回る、リビングに避妊具を置きっぱなしにする等）があった際には、状況や場所を考慮すること、他児への影響を考えることと具体的に適切な行動が取れるよう伝えてきた。

≪2019 年度方針≫

・生活場面でそれぞれの年齢に応じた生・性の正しい知識を学習する。（プライベートゾーンや異性との付き合い方など）
・性教育委員会と連携して学年に応じて性知識を身に付けていく。
・行事ごとの写真に関しては外付け HD に入れ、児童毎に整理する。

４、一人ひとりの成長のために

４－１）日常生活への支援

①健康・衛生

≪2018 年度方針≫

・入浴後、爪・耳の掃除の意識づけを行っていく。
・手洗い・うがいを毎日行うよう促す
・散髪を定期的に行う。
・保菌検査が全員提出、出来るよう年間予定表を掲示する。
・毎週月曜日に子ども達の布団を天日干しする。

総括

幼児には爪・耳掃除を毎週木曜日に実施し、小学生には児童に応じて職員が対応してきた。中高生には定期的に行うよう促してきたことで自発的に行う児童も増えてきた。

手洗いうがいの促しも行うが中高生にはなかなか定着しない現状がある為今後も継続して声掛けをする必要がある。散髪に関しては児童のニーズ、希望日時を伺いながら実施することができた。

保菌検査に協力してくれた感謝の気持ちとして年度半ばから児童全員提出できた際にみんなで考えたお楽しみの機会を取り入れた。内容としては児童の希望の物を購入することで次回の取り組みに繋げてきた。昨年度半数以下であった提出率が、児童全員の期間内の提出に繋がった。児童のモチベーションや団結力にも影響しているため今後も継続して取り組んでいく。

≪2019 年度方針≫

・入浴後、爪・耳の掃除の意識づけを行っていく。
・手洗い・うがいを毎日行うよう促す
・散髪を定期的に行う。
・保菌検査が全員提出出来るような取り組みを行う。
・毎週月曜日に子ども達の布団を天日干しする。

②衣類

≪2018 年度方針≫

・年齢に応じた洗濯物の管理を職員がサポートし、干す機会を作っていく。
・箪笥整理を意識して行い、時には子どもと一緒に片づける場面を作る。
・裏返しの衣類については、その都度声をかけ、直して洗濯に出すよう支援する。

総括

職員が個々の籠に衣服を入れ箪笥にしまうことを促すことで収納することができている。定期的に子どもと一緒に不要な衣類の整理を行う時間を設けることで衣類の整理の習慣付けを行ってきた。自発的に衣類を箪笥にしまうことは難しいため、自発的に出来るよう一緒に衣類整理を行うなどの働きかけをしていく。中学生は自分の洗濯物は自分で洗濯して干すことが習慣付けられているが、自室に干さずリビングに干しているため自室に干すことが望ましいことを伝えていく。

裏返しの衣類は都度直して洗濯に出すよう伝えていることで意識して行うことができた。

≪2019 年度方針≫

・年齢に応じた洗濯物の管理を職員がサポートし、干す機会を作っていく。
・箪笥整理を意識して行い、時には子どもと一緒に片づける場面を作る。
・裏返しの衣類については、その都度声をかけ、直して洗濯に出すよう支援する。

③整理・身辺自立

≪2018 年度方針≫

・共有で使う物は必ず元に戻すように伝えていく
・私物は自室、収納スペースへ片付ける習慣付けをする。
・片付けが苦手な児童には、職員がサポートし整理整頓の意識が高められるよう支援していく。
・身辺自立（排泄、衣類の着脱）が出来るように個々の能力に合わせて取り組みを実施する。

総括

私物をリビングに出したままにしている児童がおり、物の管理にがさつな面が見られた。共有スペースはみんなで使う場所であることを伝え続けると同時に物の大切さも伝えていく。

定期的に居室の片付けを促し、片付けが苦手な児童の居室には職員が介入し一緒に片付けを行ってきた。しかし、居室が綺麗な状態を維持することが難しく物が散乱していた。今後も居室が綺麗であることで居心地が良いと感じられるよう伝え続けながら必要に応じて片付けに介入していく。

身辺自立（排泄、衣類の着脱）が未自立な児童には職員が寄り添いながら丁寧に声掛けを行ってきた。衣類の着脱の際に毎回前後が逆になってしまう児童には首元に好きなマークを付けたことで間違えずに着脱ができるようになった。

≪2019 年度方針≫

・共有で使う物は必ず元に戻すように伝えていく
・私物は自室、収納スペースへ片付ける習慣付けをする。
・片付けが苦手な児童には、職員がサポートし整理整頓の意識が高められるよう支援していく。
・身辺自立（排泄、衣類の着脱）が出来るように個々の能力に合わせて取り組みを実施する。

④社会性・礼儀・マナー

≪2018 年度方針≫

・日常に必要な挨拶（ありがとう、ごめんなさい、おはよう等）が率先して言えるように支援する。また、ユニットの訪問者が来た際にもきちんと挨拶が出来るように支援していく。
・靴を揃える、しまうことを習慣づける。

総括

普段の生活の中で、職員が良いモデルとなるよう積極的に挨拶の言葉を掛けてきた。中には挨拶が苦手である子もいる為今後も継続して支援していく必要がある。

玄関の靴はいつも整頓しておくことを伝え続けているが中々定着しておらず、職員が都度整頓している現状である。しかし、職員が整頓していると手伝ってくれる児童や、声を掛ければすぐに整頓をする児童も増えている為、今後も声掛けを強化しながら自分で片付けられるよう支援していく。

≪2019 年度方針≫

・ユニットの訪問者や外で人に会った際にはきちんと挨拶が出来るように支援していく。
・靴を揃える、しまうことを習慣づける。

⑤生活日課

≪2018 年度方針≫

・学校から帰園後、片付け・宿題がスムーズに取り掛かれるように支援する。（個々の行動特性に配慮する）
・帰園時間を意識出来るように外出の際には外出場所の確認を徹底し、外出先からの帰園時間についても意識できるように確認していく。
・幼稚園（学校）帰園後、片付けがスムーズに出来るように支援する。（個々の行動特性に配慮する）

総括

学校から帰園した際には一貫して片付け、宿題を行うよう声掛けをすることで習慣化されている。中には宿題をごまかす児童がいたため、職員で宿題内容の連絡帳のチェックを行うよう取り組んできた。

帰園時間に関しては外出前に必ず「誰と、どこに行くか、何時に帰るのか」確認を行い帰園時間の意識付けをしてきた。しかし、中学生を中心に帰園時間を守れない児童もおり児童の安心・安全に繋がること、遅くなってしまうと心配になることを伝え続けている。

幼稚園から帰園した際には片付けがしやすいように個々の籠を用意し片付けを促してきた。その結果、スムーズに片付けを行うことができている為継続して支援していく。

≪2019 年度方針≫

・学校から帰園後、片付け・宿題がスムーズに取り掛かれるように支援する。（個々の行動特性に配慮する）
・帰園時間を意識出来るように外出の際には外出場所の確認を徹底し、外出先からの帰園時間についても意識できるように確認していく。
・幼稚園（学校）帰園後、片付けがスムーズに出来るように支援する。（個々の行動特性に配慮する）

４－２）食事への支援（※本体施設は該当箇所のみ）

①食事場面

≪2018 年度方針≫

・全員が集まる食事の時間を大切にし、それぞれの生活での出来事を共有する中で楽しい食卓が築けるようにする。
・食卓のマナー（食べ方・挨拶）が身につくように声掛けを行っていく。
・食事前後の挨拶をきちんと意識して行い、食事のマナーが守れるようにする。
・家庭のような雰囲気作りとして、食事作りが出来る際には食事作りを行う。

総括

楽しい食卓作りを大切にし、全員揃って食べ始めるよう毎日取り組んでいる。外で遊んでいる児童には夕食時間にユニットに戻るよう声掛けをしている。全員揃って食べることで職員と各児童とのコミュニケーションや、児童同士のコミュニケーションにも繋がっている。

食卓のマナーを守ること、食前食後の挨拶を大切にするよう声掛けを行ってきた。以前は挨拶ができなかった子も出来るようになっている。

季節の行事や誕生会の際にはユニット内での調理を取り入れ、家庭の雰囲気を大事にしてきた。目の前で調理をしている姿を見ることで児童が手伝いをしてくれたり、食欲にも繋がり、温かい雰囲気作りに繋がっている。日常の中でもユニット調理を取り入れていく。

≪2019 年度方針≫

・全員が集まる食事の時間を大切にし、それぞれの生活での出来事を共有する中で楽しい食卓が築けるようにする。
・食事前後の挨拶をきちんと意識して行い、食事のマナーが守れるようにする。
・家庭のような雰囲気作りとして、食事作りが出来る際には食事作りを行う。

４－３）豊かな人間関係づくり

①地域との連携

≪2018 年度方針≫

・地域（水守子供会）の行事には参加できるように調整をする。その中で保護者との連携を図り、情報の共有をしていく。

総括

子ども会行事には積極的に参加し、保護者とも顔を合わせる機会を作るようにしている。そのため職員の顔も覚えられ、様々な場面で協力をしてもらえる関係性になっている。

≪2019 年度方針≫

・地域（水守子供会）の行事には参加できるように調整をする。その中で保護者との連携を図り、情報の共有をしていく。

②親子関係

≪2018 年度方針≫

・学校行事に保護者が参加できるように事前にアナウンスし、調整を図る。また、普段の様子等を伝え情報を共有し親子関係を築く。

総括

交流が実施できている保護者には園内での様子や学校での様子等を伝えることができている。児童相談所への確認を取り、許可を得た家庭については積極的に学校行事へのアナウンスをしてきた。その結果、学校・幼稚園行事等に積極的に参加し、親子関係の構築に繋がった。また、親子関係が希薄になっている児童に関しては、ＦＳＷと連携しながら支援している為継続して行っていく。

≪2019 年度方針≫

・学校行事に保護者が参加できるように事前にアナウンスし、調整を図る。また、普段の様子等を伝え情報を共有し親子関係を築く。

③フレンドホーム

≪2018 年度方針≫

・フレンドホーム候補児童を話し合い、ＦＳＷと早めに調整をする。

総括

Ｋ・Ｙ（年中男児）の家庭状況を考慮し、FH の候補児童として挙げた。１２月に FH マッチングがあり、１月中旬、２月上旬に交流を実施してきた。交流を通して良い関係性が築けてきており、本児の一つの楽しみとなっている。今後もＦＳＷと連携しながら FH との関係を継続していく。

≪2019 年度方針≫

・フレンドホーム候補児童を話し合い、ＦＳＷと早めに調整をする。 ・FH との関係を継続し情報共有を行っていく。

５、学校生活と学力を育てる取り組み

５－１）学校生活への支援

≪2018 年度方針≫

・幼稚園・学校からの連絡の周知の徹底をする。（引き継ぎや書類に書く）
・幼稚園・学校と職員との情報共有を密に行いお互いに児童の様子を把握して連携していく。

総括

幼稚園・学校から連絡があった際には棟日誌、棟会議録への記載をしてきた。また、引き継ぎや棟会議で確認をして周知してきた。

連絡協議会・面談などを通して学校・幼稚園と連携し園での生活や、学校での様子の情報交換を行った。S・I（高２女児)、S・I（中１男児）は自殺をほのめかすような言動、授業渋り等の問題行動があったため、学校に赴き関係者会議を行い支援内容の確認・統一を図ってきた。また、学校の様子等の連絡をこまめに取り合ってきたことで、情報共有がしやすい関係となった。今後も継続して子ども支援に対する情報共有を徹底していく。

≪2019 年度方針≫

・幼稚園・学校からの連絡の周知の徹底をする。（引き継ぎや書類に書く）
・幼稚園・学校と職員との情報共有を密に行いお互いに児童の様子を把握して連携していく。

５－２）ユニットでの取り組み

≪2018 年度方針≫

・個々の学習能力に合った教材や方法を検討する。
・中学生からは通塾を検討していく。
・日中保育の時間を設け、切る・貼る・塗る・書くなどを習得する。

総括

通塾に関しては、受験を控えている児童の希望に基づき会議で検討し実施してきた。苦手な教科の克服、志望校合格を目標にゼミや夏季講習、冬季講習に積極的に参加してきた。通塾したことで勉強に対する意識が高まり実際に学力が向上し進路や将来を真剣に考える良い機会となった。

日中保育に関しては、幼児全員が就園児となり、より出来ることを増やすために月に２回と日程を設定し子どもの能力に合わせた活動を行ってきた。長期休暇には、毎日の取り組みを実施し、ひらがなの読み書きや、カレンダーや時計の読み方、お金の数え方の学習をすることによって日常生活に必要なスキルを習得した。

≪2019 年度方針≫

・個々の学習能力に合った教材や方法を検討する。
・児童の希望に基づき通塾を検討していく。
・日中保育の時間を設け、切る・貼る・塗る・書くなどを教えていく。

６、社会的自立・進学への支援、アフターケア

６－１）社会的自立・進学への支援

≪2018 年度方針≫

・各児童に見合った自立への取り組みを具体化し、日々の生活の直結できるような取り組みを実施する。（掃除、洗濯、調理、社会性、金銭管理など）
・高校生については、生活状況に応じてアルバイトを実施し、自立に向けた貯金を対象児童と話をしていく。
・外出した際には公共の場でのマナーについて伝えていく。

総括

日々の生活の中で個々に合わせた取り組みを実施し、休日は朝の時間で居室の掃除の時間を設けてきた。その時間内で掃除を終えられない児童や、すぐに居室の物が散乱してしまう児童に関しては、個別に掃除の仕方を伝えたり振り返りをするなどして居室を綺麗に保つよう取り組んできた。児童の中でも掃除をする習慣にはなっているが、綺麗な状態を保つことの定着には至っていないため継続して支援していく。
また公共の場でのマナーについても、外出先で楽しみながらマナーを職員から学ぶ事で意識付けに繋げてきた。

アルバイトに関しては、継続して行うことが出来ているが、現状貯蓄より娯楽に向いているままであるため、自立を控えていることもありより具体的にイメージ出来るよう話し合いを更に強化していく。

≪2019 年度方針≫

・各児童に見合った自立への取り組みを具体化し、日々の生活の直結できるような取り組みを実施する。（掃除、洗濯、調理、社会性、金銭管理など）
・高校生については、生活状況に応じてアルバイトを実施し、自立に向けた貯金を対象児童と話をしていく。
・外出した際には公共の場でのマナーについて伝えていく。

６－２）アフターケア

≪2018 年度方針≫

・定期的な電話連絡をして状況把握し、必要に応じて面会を行う。
・自立支援コーディネーター、ＦＳＷと情報共有をし、役割分担をしてアフターケアを

実施していく。

総括

退所した児童に対して不定期ではあったが、FSW と連携し電話連絡をして状況確認を行った。また、来園した際には状況の把握を行い、相談できる場所であることを再度伝えてきた。自立支援コーディネーターと連携し、退園生が来園することが可能となる時間などを再確認してきた。また、他施設へ異動したＳ・Ｔ(4 歳男児)は季節毎に手紙を送り、面会も実施した。

≪2019 年度方針≫

・定期的な電話連絡をして状況把握し、必要に応じて面会を行う。
・自立支援コーディネーター、ＦＳＷと情報共有をし、役割分担をしてアフターケアを実施していく。

７、棟運営

７－１）円滑な棟運営のために

①棟会議

≪2018 年度方針≫

・棟会議を通して情報共有をし、児童支援に活かす。
・担当児童のケースや、棟会議で議論したい内容を会議の前日までに会議録に打ち込んでおく。
・帳簿や補助簿、お小遣い帳に確認し、金額のずれがないようにする。

総括

棟会議を主とし、意見交換を行うことにより、様々な視点から見たユニットの情報共有をすることができ、各児童の支援に取り入れてきた。経験年数や年齢層が若いということから支援の活発な意見交換とは言い難い部分があった。そのため、各々の意見を引き出すために会議の進行や記録などの役割分担をして行ってきた。また、棟職員のみで解決しきれない事案については、関係部署などに意見を求めるなどしてきた。

会議においての役割を分担することにより、職員それぞれが会議の内容について深く考えるようになり、主体的に会議に参加出来るようになった。今後も、職員が意識を持って会議に参加し、活発な意見交換ができるよう、継続し会議の持ち方を模索しながら取り組んで行く。

会議録に関しては、事前に会議録を作成し棟日誌や引継ぎを通して取り組んできた。しかし、記載し忘れが多いことや記入者の偏りが見られたため、年度途中に会議録の重要性や目的などを確認した。その結果、各々が責任を持って会議録の記入を行うようになり、事前の会議録作成の過程で解決できるような事案も多く見られた。未だ事前の入力で議題

が出尽くさずに当日に増えることも多々あるため、記入者は内容の精査をし、抜けがないよう取り組んでいく。

帳簿や補助簿は、記入漏れなどが見られたため、金種別表を忘れずに記入することや、複数で確認することを徹底して取り組んできた。小遣い帳に関しても、小遣い使用後の記入漏れが多く金額が合わないことが多々あったため、使用した際には小遣い帳を記入することを徹底して行ってきた。

≪2019 年度方針≫

・棟会議を通して情報共有をし、児童支援に活かす。
・棟会議で議論したい内容を会議の前日までに会議録に打ち込んでおく。

②記録

≪2018 年度方針≫

・引き継ぎが必要な内容は「いつ、誰が対応するか」を明確に記載するもしくは直近のユニット会議で確認出来るような記載の仕方をする。
・電話連絡や些細なメモでも出来るようにメモ用ノートを活用していく。

総括

棟会議で日程を詰める際は、事前に勤務を確認し、対応者を明確化してきた。また、「いつ、だれが、どこで」など詳細を確認し合うこともでき、実際に対応する職員が把握しやすくなった。さらに細かい部分として書類の作成者や確認者等も含めて行っていき、抜けがないよう確認していく。

電話連絡のメモ用ノートの活用は必要に応じて行うことが出来た。また、メモを取るという意識や技術にも繋がった。

≪2019 年度方針≫

・引き継ぎが必要な内容は「いつ、誰が対応するか」を明確に記載するもしくは直近の棟会議で確認出来るような記載の仕方をする。
・電話連絡や些細なメモでも出来るようにメモ用ノートを活用していく。

③会計など

≪2018 年度方針≫

・帳簿の記入ミスを無くす。また補助簿・金種別台帳の記載を徹底する。
・請求、清算は担当した者が責任を持って行い、期日に遅れないようにする。
・誕生会・個別外出等の起案書・計画書・報告書を担当の職員が漏れなく提出する。

総括

帳簿の記入ミスは職員通しで互いに確認し合う事でミスを減らしていくことに繋がってきた。また、帳簿・金種別台帳の記載は、各職員が声を掛け合っていたが記入漏れが

見られた為、徹底して行っていけるよう取り組んで行く必要がある。

会計に関しては計画書の作成者や、請求の担当者を棟会議の中で、その都度決め抜けがないよう行ってきた。精算の期日が守れるよう、職員間での確認も行い漏れなく遂行できた。

≪2019 年度方針≫

・帳簿の記入ミスを無くす。また補助簿・金種別台帳の記載を徹底する。
・請求、清算は担当した者が責任を持って行い、期日に遅れないようにする。
・誕生会・個別外出等の起案書・計画書・報告書を担当の職員が漏れなく提出する。

７－２）安心安全な環境整備（※職員の取り組み）

①防災への取り組み

≪2018 年度方針≫

・災害時に気をつけることを子どもたちと確認していく。（地震・火事・雷・雪・台風など）
・幼児ユニットがあるため、みつばユニット児童の協力を得ながら避難できるように確認作業を定期的に行う。

総括

避難訓練について、いつ、どこでなにが起こるかわからないため訓練を通して気をつけることを話してきた。みつばユニットは中高生が多いユニットであったが、避難訓練への参加状況が良く、部活や外出など特別な理由がなく不参加となる児童がほぼいなかった。きちんと全員が避難出来た際などは、協力してくれたことへの感謝や、できたことへの称賛を行い、同時に実災害の時には同じように行動してもらいたいことを伝えてきた。

幼児の避難の際には学童児童にも協力を仰ぎ、整列の際など幼児の補助をしてくれる姿も見られた。

≪2019 年度方針≫

・災害時に気をつけることを子どもたちと確認していく。（地震・火事・雷・雪・台風など）
・幼児ユニットがあるため、学童の協力を得ながら避難できるように確認作業を行う。

②環境整備

≪2018 年度方針≫

・共有スペース（リビング、駐輪場など）の清掃・整備を行う。
・行事にあった飾りを行い、季節感を大切にする。

総括

共有スペースに私物や玩具が置きっぱなしになっていることがあり、片付けるよう声を掛けることを徹底してきたことで少しずつであるが綺麗な状態を保てるようになってきた。

駐輪場の清掃・整備に関しては、気付いた職員が自転車の整理等を行ってきた。整理をしている中で、壊れてしまっている物や使用していない自転車も多くあり、精査して処分していく必要性を感じた。中高生に関しては、自身の自転車を棟の駐輪場に片付けられない児童もおり、その都度自身の駐輪スペースに片付けるよう呼びかけを行い、自転車が門扉付近に出したままにならないようにしてきた。

四季を感じられるよう飾り付けを行うことで子ども達の行事に対する興味・感心にも繋がることが出来ていたため次年度も継続して行っていく。

≪2019 年度方針≫

・共有スペース（リビング、駐輪場など）の清掃・整備を行う。
・行事にあった飾りを行い、季節感を大切にする。

７－３）関係機関との連携

①児童相談所

≪2018 年度方針≫

・個々のケースで変化があった場合は報告・連絡・相談をし、情報共有を行う。

総括

年度途中の家庭復帰を控えたケース、保護者の出所に伴い動きがあるケースがあった。その都度、園と児童相談所の見解のすり合わせを行いながら児童の不利益にならないようスケジュール立てを行い、進めてきた。また、各ケースにおいて変化があった場合、定期連絡や、情報共有を密に行ってきた。

≪2019 年度方針≫

・個々のケースで変化があった場合は報告・連絡・相談をし、情報共有を行う。

②学校など

≪2018 年度方針≫

・幼稚園、学校からの連絡の周知・徹底。（棟日誌・養育日誌に記載。丁寧な引継ぎが必要な内容は口頭での説明も行う。）
・個々の生活場面、対外関係での変化等に関しては学校職員とも情報共有を行い、個々の支援に反映させる。

総括

幼稚園や学校からの連絡については棟日誌・養育日誌の記載、メモを活用しながら引

き継ぎを通して情報共有を行うことが出来た。

学校での問題行動や、保護者の状況によって配慮が必要な児童に関しては、その都度学校と連絡を取り合い、情報を共有してきた。必要に応じて、学校を含めた関係者会議を持ち、学校と園で役割を明確化し、より密に情報共有を行っていくことを確認し支援に反映させてきた。

≪2019 年度方針≫

・棟日誌・養育日誌に記載することや口頭での引き継ぎを通して幼稚園、学校からの連絡の周知・徹底を行う。
・個々の生活場面、対外関係での変化等に関しては学校職員とも情報共有を行い、個々の支援に反映させる。

③医療機関（定期通院している場合）

≪2018 年度方針≫

・通院対応した職員が通院後の記録を顧客大臣に記入する事を徹底する。また通院後の直近の会議で記入について確認をする。
・定期通院が必要な児童に関しては棟会議で生活状況を確認し、医師に相談して支援に反映させる。

総括

通院後に顧客大臣への記載まで行うことが出来なかった。顧客大臣を徹底して記入するよう各職員が意識し、声掛けを行っていく必要がある。

定期通院の際には、棟会議内で生活状況の確認を行い、医師に相談するべき内容を共有する事ができた。また、通院後の結果を棟会議内で共有し、支援に反映させてきた。通院の際の職員の入り方や相談内容など事前に職員間で共有していくことは意識的に行い継続していく。

≪2019 年度方針≫

・通院対応した職員が通院後の記録を顧客大臣に記入する事を徹底する。また通院後の直近の会議で通院の結果の共有を行う。
・定期通院が必要な児童に関しては棟会議で生活状況を確認し、医師に相談して支援に反映させる。

④ボランティア

≪2018 年度方針≫

・棟・ユニット内のニーズに合わせたボランティアを活用する。
・学習ボランティアとのミーティング時に情報共有を密に行い、学習面での協力体制を仰ぐ。

総括

ちゅーりっぷユニットで月１回のアートセラピーや月２回の読み聞かせのボランティアが来園し一緒に活動を行っていくことで様々な経験をしたり、本に関して興味を持つ機会に繋がった。

学習ボランティアに関しては、個々の学習状況の把握から、ニーズに合わせた学習内容の精査を密に行ってきた。ミーティングの際には、生活場面から個々の発達の伝達、交流状況の情報共有を行っていくことで児童らの支援に繋がった。学習ボランティアから児童の学習や関係性について相談があり、職員のニーズや期待を伝え、児童に対しても学習ボランティアがどのように考えているかを説明し、それぞれが連携し合いより意義のある活動に繋げてきた。しかし、学習ボランティアのボランティア記録簿への記入が疎かになっており、今後は記入する日を予め決めておくなどし、抜けがないよう記入していく必要がある。

≪2019 年度方針≫

・棟・ユニット内のニーズに合わせたボランティアを活用する。
・学習ボランティアとのミーティング時に情報共有を密に行い、学習面での協力体制を仰ぐ。
・ボランティア記録簿の記入の日を決め、漏れなく記入する。

７－４）性的事故防止のための取り組み

≪2018 年度方針≫

・定期的及び不定期に見回りをする。
・幼児ユニット児童については、生活場面で性知識を伝えていく。
・年齢に沿った異性との距離感や付き合い方について教えていく。

総括

性的事故防止のため定期・不定期に見回りや異性間の居室の出入りを禁ずることで児童間の距離感について徹底して話をし、防止に繋げていくことが出来たため、継続して行っていく。

幼児ユニットではプライベートゾーンの露出や性的な発言が合った際にはその都度場面ごとに話をしてきたことで意識付けへと繋がっていった。

≪2019 年度方針≫

・定期的及び不定期に見回りをする。
・生活場面で性知識を伝えていく。
・他人との距離感や付き合い方について教えていく。

８、質の高い勤務体制のために

８－１）職員集団づくり

≪2018 年度方針≫

・棟会議や引き継ぎの時間を利用し、情報を共有することで子どもの支援に関して統一した対応を取る。
・年間を通して、ミニ学習会を行う。

総括

今年度は、棟として各自が意識を持ち情報共有することを徹底したことで、互いのユニットに対してもより活発に意見を出し合うことが出来た。しかし、役割分担の部分では子どもとぶつかる職員とフォローする職員での棲み分けなどで経験が浅い集団であるがゆえに上手く機能しない点があった。都度、職員それぞれの関わりなどを確認しながら行ってきた。来年度も職員同士が密に情報共有を行い、子どもの支援の統一化を図って行く。

職員集団作りとして、各職員が考えたお題を元に職員間で話し合いをする場を設けてきた。月毎にテーマを掲げ『報告・連絡・相談』『質問力のスキルアップ』『認め合うこととは』『メンタルヘルスとは』『仲間を知ろう』『各職員が大切にしていること・やりがい・どんな棟にしたい』『会議のファシリテーターについて』について話してきた。お互いの話を聞き、また考え方を知ることで相手を知って尊重し合うことの大切さを再確認してきた。

≪2019 年度方針≫

・棟会議や引き継ぎの時間を利用し、情報を共有することで子どもの支援に関して統一した対応を取る。
・年間を通して、ミニ学習会を行う。

８－２）勤務体制

≪2018 年度方針≫

・外出計画などを実施月の前月には計画、検討し勤務に反映させる。
・超過勤務の軽減に努める。
・偏りがない勤務作成を行う。

総括

年度初めに立てた年間の外出や外食の計画に基づき、概ね計画通りの実施とそれに伴った勤務を作成することができた。アルバイトや部活、塾などの予定がある児童が多くいる中、流動的な日程になることもあったが、ユニットや棟での行事には児童がほぼ参加することができていた。

超過勤務については、予定を確認した際に前以て超過勤務が見込まれるときには可能な限り前後の勤務で勤務時間の調整を行ってきた。勤務時間が大幅に長くなる会議日では、

年度途中に棟会議中のファシリテーターなどの役割を決め、会議に臨むことで各々の会議に対する意識も高まり、結果的に会議時間の短縮に繋がった。

今年度は地域支援担当職員を含めたフリーグループがちゅーりっぷユニットの補助に入っていたが、補助に入った際の時間の使い方や子どもへの関わり方など棟とフリーグループとで考え方に差異があり施設長を含めて話し合いを行った。結果として、大人の目が多くなることで子どもの安心安全には繋がるということや、新任職員に関しては複数の職員がいることで安心できるという利点があることを確認し、夜の時間などには相談の上補助の職員は自身の担当業務に戻れることとした。

≪2019 年度方針≫

・外出計画などを実施月の前月には計画、検討し勤務に反映させる。
・超過勤務の軽減に努める。
・偏りがない勤務作成を行う。

８－３）研修

①研修

≪2018 年度方針≫

・職員の希望する研修に参加出来るよう棟内で勤務調整をおこない、積極的に参加する。

総括

希望する研修や勤務年数で対象となる研修など棟内で確認し合い、勤務調整を行いながら研修に参加することが出来た。参加を通して、他施設の職員とも交流を持てたことで他施設を知る機会ともなった。また、研修で得た物を職員会議での報告に留まっていたため、今後は棟会議の中で共有する機会を持ち児童支援に活かしていく。

≪2019 年度方針≫

・職員の希望する研修に参加出来るよう棟内で勤務調整をおこない、積極的に参加する。

②新任研修

≪2018 年度方針≫

・研修で得た情報などを棟・ユニット会議で発表し、支援に取り入れ活かしていく。
・新任研修以外の研修にも参加できるように調整する。

総括

児童部会の新任学習会や県南西の研修などに調整の上参加することができた。棟会議内で学んできたことを共有し、新任職員の目線で見てきたことや、権利擁護の基本的な考えなどを共有した。また、棟内でも OJT 担当者と通常業務の流れや、やり方など業務を通して確認し合ってきた。新任職員は、一ヶ月は棟職員と重複勤務で勤務できるよう調整し、夏休みまでは担当ユニットに慣れるよう、跨ぎ勤務は行わないようにしてきた。

夏以降は、学童ユニットの業務も出来るようにすることや児童との関係性構築を目的とし、跨ぎ勤務も取り入れてきた。

≪2019 年度方針≫

・研修で得た情報などを棟・ユニット会議で発表し、支援に取り入れ活かしていく。 ・新任研修以外の研修にも参加できるように調整する。

９、他部署との連携

９－１）事務

≪2018 年度方針≫

・請求・清算は余裕を持って行い、棟会議や棟日誌を使って引継ぎを徹底していく。 ・棟会議の際には、請求・清算をする人は棟会議録にも記載し、棟会議で確認をする。

総括

請求・清算については余裕を持って行うことが出来た。棟日誌や棟会議録にもしっかり記載し、抜け目なく行うことが出来た。棟会議の際には請求・清算をする担当者を棟会議で確認した。来年度も継続して行っていく。

≪2019 年度方針≫

・請求・清算は余裕を持って行い、棟会議や棟日誌を使って引継ぎを徹底していく。 ・棟会議の際には、請求・清算をする人は棟会議録にも記載し、棟会議で確認をする。

９－２）ＦＳＷ

≪2018 年度方針≫

・ケースの状況に合わせて家庭訪問・関係者会議への同行を依頼する。 ・ケースによっては連絡窓口を FSW にし、情報共有を行いながら家庭支援を行っていく。

総括

ケースの状況に合わせ、家庭訪問や関係者会議の同行を依頼するとともに情報共有を密に行った。ケース状況に応じて連絡窓口を FSW にし、情報共有を行いながら家庭支援を行えた。来年度も継続して支援していく。

≪2019 年度方針≫

・ケースの状況に合わせて家庭訪問・関係者会議への同行を依頼する。 ・ケースによっては連絡窓口を FSW にし、情報共有を行いながら家庭支援を行っていく。

９－３）心理

≪2018 年度方針≫

・必要に応じて心理面談を依頼する。
・定期的に棟内の様子を伝え、情報共有をする。
・ケース状況によっては、助言、検討の場を設ける。

総括

J・H（小６男児）の保護者の真実告知をする前後で心理面談を依頼し行う事が出来た。定期的に棟内、子どもの様子を伝え情報共有を行った。また、S・I(高 2 女児)の学校での問題行動で教育機関などと関係者会議を持った際に同行してもらい、心理の立場から助言等を受ける事ができた。

≪2019 年度方針≫

・必要に応じて心理面談を依頼する。
・定期的に棟内の様子を伝え、情報共有をする。
・ケース状況によっては、助言、検討の場を設ける。

９－４）個別対応職員

≪2018 年度方針≫

・個別対応が必要と思われる児童を選定し、個別対応職員と協議の場を設定する。

総括

棟内で個別対応が必要な児童を精査したが、現在の児童の状況で個別対応が必要と考えられる児童が選出されなかったため、個別対応職員との協議の場は設けなかった。今後個別対応が必要である児童が出た際には個別対応職員に依頼し協議の場を設けていく。

≪2019 年度方針≫

・個別対応が必要と思われる児童を選定し、個別対応職員と協議の場を設定する。

９－５）治療指導員

≪2018 年度方針≫

・発達特性のある児童で通院の必要性がある場合には専門医への相談・連絡調整を図ってもらう。

総括

定期通院を行っている児童の様子などを必要に応じて担当医に伝達してもらった。また、精神的に落ち着かない児童や、入所間ない児童について情報を伝え、小児精神科医から助言等を受ける事ができた。

≪2019 年度方針≫

・発達特性のある児童で通院の必要性がある場合には専門医への相談・連絡調整を図ってもらう。

９－６）自立支援コーディネーター

≪2018 年度方針≫

・中学生、高校生について自立に向けた取り組み内容の情報を貰い、日常生活に中で支援に活かせるものを検討し、実施する。
・幼児に対しては、将来の夢に繋げられるような取り組みをしていく。

総括

Ｓ・Ｉ(高２女児)がＹＴＣへ参加した。職場体験を利用し将来社会で生活していく上で必要な体験を行うことが出来た。しかし、過密日程やＳ・Ｉの精神的状態の把握が不十分であったため最終日は欠席となってしまった。ＹＴＣ参加児童が出た際には児童の普段の様子を密に情報共有する必要がある。中高生を対象にしたあかるい未来作戦会議への参加を今年度から行ったことによって、中高生が将来のことについて真剣に考えるいい機会となった。幼児に対しては将来なりたいものを絵と文字で記入をした。

次年度は卒園を控えた児童がいるため、進路に関することを情報共有しながら取り組んでいく。

≪2019 年度方針≫

・中学生、高校生について自立に向けた取り組み内容の情報を貰い、日常生活に中で支援に活かせるものを検討し、実施する。
・幼児に対しては、将来の夢に繋げられるような取り組みをしていく。

９－７）地域支援担当職員

≪2018 年度方針≫

・育成会の行事などの引率依頼をする。

総括

育成会の行事に関しては必要に応じて引率の調整を行うことが出来た。継続して協力をもらいながら行っていく。

≪2019 年度方針≫

・育成会の行事などの引率依頼をする。

９－８）医療連携連絡調整員

≪2019 年度方針≫

・服薬状況を共有して、相談していく。
・必要に応じて、児童の健康状況の把握や通院を依頼する。

９－９)専門部（セーフティネットを含む）

≪2018 年度方針≫

・必要に応じて棟・ユニット会議に参加してもらい意見交換をする。
・勤務補助依頼する際には、手順をきちんと踏む。

総括

棟会議に参加を依頼することはなかったが、必要に応じてユニット会議に参加して助言をもらい支援に繋げる事が出来た。勤務補助依頼する際にも手順をきちんと踏んで行えた。

今年度はみつばユニットＳ・Ｉ（高２女児）の生活が安定しなかったためケース検討を依頼し、助言をいただいた。来年度も継続して行っていく。

≪2019 年度方針≫

・必要に応じて棟・ユニット会議に参加してもらい意見交換をする。
・勤務補助依頼する際には、手順をきちんと踏む。

９－１０）調理

≪2018 年度方針≫

・食事の変更があった際には調理に報告した事を、棟日誌に記載する。また直近の棟会議時に会議録のスケジュールに記載する。
・幼児送り出しの時間帯にはユニットの留守番を依頼する。

総括

年度初めに、食数の変更の連絡が漏れてしまうことがあったため、棟会議で対応策を協議し、棟日誌に食数変更の連絡を記載する欄を作成し取り組んだ。棟会議での確認、会議録への記載と二重で確認を行えたことで伝達漏れはなくなった。

給食会議の前の週の棟会議にて、給食会議の内容を検討し望むことが出来た。

≪2019 年度方針≫

・食事の変更があった際には調理に報告した事を、棟日誌に記載する。また直近の棟会議時に会議録のスケジュールに記載する。

１０、ユニット総括

みつばユニット

みつばユニットの児童構成は昨年度末にＮ・C(中３男児)が加わり６名でのスタートになったが、年度途中にＮ・Ｓ（年長女児）が加わり７名のユニットになった。職員体制では１名の異動があったため、ルーティンの確認、引継ぎの大切さを改めて確認した。また、年度当初に掲げた職員も児童も「お互いの意見を尊重する」という目標を大切にしてきた。

みつばユニットの長所として年長児が年少児の面倒を率先して見てくれるというところがある。今年度も年長児が率先して外出先などで年少児を気遣う姿が見られた。Ｎ・Ｓ（年長女児）に対しては入所当初は最年少児ということもあり甘やかす姿が見られたが、慣れてくるとＮ･Ｓもユニットの仲間という意識が皆に出てきており、駄目なことは駄目と教えてあげる姿が随所に見られた。

今年度のみつばユニットの反省点として、職員の対応の不足や、職員間での対応の違い、それらを共有できていなかったことから、児童の不満が募り第三者委員へ苦情として挙げられるということがあった。その対応として、職員同士で至らなかった点を確認、共有し、それぞれの対応を見直した。そして一つの大きな方針として、子どもの話をよく聞き、それを共有して支援にあたることを掲げた。そのためにも、普段の関わりの中でも子どもの言動をよく観察し、引継ぎ等でそれらを細かに伝えなければならないことを確認した。苦情申し立てをした児童にはユニット職員から謝罪をし、今後職員が変わっていきたい部分を伝え、理解を得た。児童からもその間で職員が変わってきていると感じる部分があると話があり、今後も互いによりよい生活を作っていきたいことを確認した。

児童状況として今年度はＮ・Ｃ（中３男児）とＳ・Ｃ（中３男児）が受験生ということもあり学業に向き合う時間が長かった。Ｎ・Ｃは園で初めての私立高校受験となったため、私立受験をするにあたり約束事を決めた。受験までは本児の出来ている部分を称賛して受験への意欲向上に繋げてきた。その結果、つくば秀英高校に合格が決まった。今後も月１回振り返りを行い駄目なことは駄目と伝えつつも、本児の出来ている部分を称賛してよりよい高校生活がスタート出来るように支援していく。Ｓ・Ｃに関しても学習意欲が向上しており水海道二高への受験を考えている。受験に対しての不安は感じているため、本児の話を聞くことや今の学習状況が本児の身になっていることを認めながら本児が合格できるよう引き続き支援していく。

Ｓ・Ｉ（高２女児）に関しては遅刻が多くなり生活習慣も乱れていった。まずは学校生活を立て直すように本児と職員で話し合いを設け、バイトの日数を週２回に減らすこととした。高校は卒業したいということも聞けたため職員は朝必死で起こすが、実行するのは本児であることを伝えてきた。また、精神的不安定から自殺を仄めかす言動などが見られたため精神科への通院も行った。躁鬱の診断をされ服薬を始めたことで不眠の改善も見られ学校にも登校出来るようになった。今後も学校、精神科の担当医との連携は必須になってくる。

ちゅーりっぷユニット

ちゅーりっぷユニットは、年度始めにＳ・Ｔ(年中男児)が施設異動となり、5 月にM・Ｓ（年中女児）が入所し、計６名が幼稚園へ登園している。幼稚園では引き続きＨ・Ｏ（年長男児）は加配の先生が付き、個別支援を行い幼稚園と連携しながら支援してきた。

職員体制に関しては、職員の異動や新規採用職員の入職もあり、棟内でルーティンワークの精査を行ってきた。新規採用職員に関しては、引継ぎや会議を通して子ども支援について話し合いを重ね丁寧に確認を行ってきた。0JT も行い、社会人としてのマナーから子ども支援に必要なことなど新規採用職員としての基本的なことを細かく説明を行ってきた。

今年度は身辺自立の特に排泄に関しての支援に力を入れてきた。排泄に関してＫ・Ｙ（年中男児）とＲ・Ｏ（年中女児）とＫ・Ｍ（年長男児）は日中の排泄は自立していたが、夜間の排泄は課題であったためトレーニングを行ってきた。夏場を目途に取り組み計画を立て、本児らと話し合いを行い、トレーニングオムツからパンツへ移行してきた。夜尿が無かった児童には大いに称賛をすることで自信に繋げ、夜尿があった場合には励ましつつ次に繋げられるよう言葉掛けをしてきた。その結果、児童の成功体験となり、自信が付いたことで徐々に夜尿の自立に繋がった。一方で、Ｋ・Mは夜尿の頻度にあまり変化が見られなかった。そのため、Ｋ・Mにも成功体験を積んでもらうことを目的とし、夜間に時間排泄を行った。夜の時間で愚図ることが多くあったため、本児に愚図らないようにするための取り組みを提示し、実施してきた。その結果、夜尿の無い日が増え、成功体験を積むことができた。

幼児単独ユニットとして「家庭的な養護」とは何かを考えつつ幼児間で学べること、幼児単独であっても何が重要かを模索しながら支援してきた。幼児期に生活で必要となるスキルの獲得をすることや、愛着形成を行い、ここが安心できる場所であると認識できることを大切にしてきた。

幼児単独ユニットであったため、幼児のニーズに合わせた外出ができたことや、児童間でのパワーバランスによる安心安全を守りやすいこと、幼児との時間の確保のしやすさがあったことなど利点はあった。幼児の集団であっても一人一人ができることを生活の中で経験して増やしていき、経験の中からたくさんのことを学ぶことによって心身の成長へと繋げていきたい。

つくしホーム

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

ホーム職員　　石引　慶彦
〃　　木村　百花
〃　　端　みどり
宿直補助兼　　櫻井　翔太
日中補助職員　小林　拓巳

児童構成

1.	Y.N	男	茨城県立筑波高等学校	3 学年
2.	T.O	女	茨城県立水海道第二高等学校	2 学年
3.	Y.N	女	茨城県立守谷高等学校	1 学年
4.	S.N	女	大穂学園つくば市立大穂中学校	9 学年
5.	R.M	女	〃	9 学年
6.	K.I	男	大穂学園つくば市立大曽根小学校	6 学年

Ⅰ　全体総括

今年度、安定した高校生活の定着に向けての取り組み、高校卒業後の進路の具体化、高校受験など児童のケースに合わせて支援の具体化を図ってきた。

具体化を図る中で、児童のケースによっては職員の役割分担を明確にし、職員が役割を意識した支援を実践し継続して取り組み、それらを日々の引継ぎやホーム会議時に協議してきた。児童構成が変わらなかったことや職員の異動がなかったことで、日々一人で勤務することが多いグループホームでは、1 日 1 日の児童の様子を確認し、各自で考え支援の具体化を図ってきた。ホーム会議では、児童の現在の状況確認だけでなく、今後の支援の展望についてイメージをすり合わせ、勤務時に職員がどういった支援を行うか協議した。Y.N（高 1 女児）は、4 月の進学を祝う会で目標を発表した中で、高校へ遅刻や欠席をしないで登校することを挙げていた。ホーム会議ではアルバイトの具体化に向けて、本児の学校の様子を担任教諭と確認し、テストの結果や本児の意向を伺いながら進めていった。アルバイトの実施については、短期的な目標として、携帯電話の支払いや遊興費などを貯めること、中長期の目標として進学するための自己資金を貯蓄することを本児と確認した。しかし、最初に働いた飲食店では、先方の勤務作成の手順や組み方に本児の希望などが合わなかったこと、人間関係へのストレスから辞めることになった。こうしたストレスに加えて、睡眠への自律調整への課題が出てきたので、生活改善を目的に心理療法担当職員のアドバイスを受けて、市内の心療内科への通院を具体化していった。

Y.N（高 3 男児）は、昨年度末から本児の大学進学に対して受験する意向を受け、具体化に向けて支援してきた。本児の高校での成績は上位を維持しており、担任教諭へ大学進学を相談した際には、指定校推薦枠で受験することを勧められた。本児はアルバイト代を進学資金に充てるために貯蓄出来ていたので、自立支援コーディネーターと協働し、資金シミュレーションを組み立てた。

R.M（中 3 女児）と S.N（中 3 女児）は、中学校では同じクラスとなった。R は高校進学への具体的なイメージは抱いておらず、また S も自分に合った高校が無いという話をしていて、進学への意欲が低かった。進学については、本児達よりも年上の T.O（高 2 女児）や S の姉の Y.N（女児）が普段から高校での生活の様子を話題に挙げていたことや Y.N（男児）のアルバイトの状況を見ていたことにより、高校進学への意思を固めていった。R に関しては、個別対応職員による受験指導を受けたいと希望が挙がり、日程を調整した。

対外関係において、ホーム・園として学習ボランティアからの協力はとても大きな意味がある。児童の学習に対する意欲や成績、希望する高校への学習指導の内容は年齢を増すごとに細分化されていく。その児童からの希望に対しては学習ボランティアの学習指導は有効である。児童と学生との関係づくりや児童の学習状況に関して、ホームではミーティングの開催や学習後の学生間の振り返り時間を活用し、職員も話し合いに積極的に参加し、児童の様子（特に児童間のトラブルの有無や学校内での様子など）を伝えた。それに加えて、学生と児童間の関係構築を目的として、交流会を定期的に開いた。主に食事会を開いて学生と児童が楽しく会話を交わし、食事を摂りながら関係を築く機会を企画した。

今年度、施設内における他部署との関係を築く目的で、朝の連絡会にホーム職員が参加し、連絡会時の情報共有と他部署との連携を図る機会を得た。年度途中からの取り組みであった為、次年度は継続的に取り組み、連携など他部署の関係について検証する。

職員は児童の生活の拠点が各ユニットとホームにあることを改めて認識する必要がある。日々の児童支援や対外関係との調整を行い、児童の心身の健康状態を確認しながら、児童が社会との接点を多く築いていくよう働きかけていく。卒園後や家庭復帰などで園を出てからも児童がより良い生活を送れるよう、専門職として児童支援の具体化に向けて日々研鑽し、職員個人の 1 日 1 日の支援をチーム支援に繋げていく。

Ⅱ　基本方針と重点課題

1）基本方針

【2018 年度方針】

・良好なコミュニケーションを図り、トラブル時の円滑な解決が出来るよう、お互いの存在を認め、協調して生活する。
・他者と共に生活する上で、自身の考えを大切にし、ホーム全体でのホームの一員として協力して築いていくことを理解する。
・児童一人ひとりが意見を述べられるよう、お互いの意見に耳を傾けて、話し合える環境を整備する。

（総括）

今年度、児童の退園や移動と職員の異動が無く、方針に沿って児童間の良好なコミュニケーションを図る上で環境整備を行った。児童状況については、日々の児童の様子を引き継ぎ、それを継続していく中で、児童間の関係性について情報共有を図った。

R.M と S.N は同じクラスで学校生活を送っている。2 人は共通した話題がある中、クラス内ではお互いに親交のある友達を過ごす事が多かった。その中でも R の自分勝手な言動に対して S が不満を抱くようになっていった。S から R へ距離を取り始め、それに気づかない R は、S の態度を不快に思い、お互いに話し合う機会がなくなっていった。職員は 2 人で解決策を見つけるよう、見守りを中心とした支援を行った。児童状況を確認し合っていた中、担任教諭からも双方の関係性について連絡があり、職員が介入することで関係の改善へと導いた。

児童間の関係づくりや環境は、日々の生活では食事や毎週の子ども会議などが挙がる。日々児童の周囲に起こっている出来事に関心を抱き、児童状況の変化への意識を持つことは重要である。子ども会議では、中高生が多い中でも K.I が発言する機会が増えてきた。今年度は司会や進行役を積極的に行っていた。初めは緊張していたが、今ではスムーズな進行をしている姿が見られるようになった。

職員として、今後もホーム全体を見て、児童間のトラブルの有無や学校での様子などを日々の生活場面やホーム会議で確認して状況を把握する。

《2019 年度方針》

・良好なコミュニケーションを図り、お互いの存在を認め合う。
・他者と共に生活する上で、ホームの一員として協調して生活することを理解する。
・児童一人ひとりが意見を述べられるよう、お互いの意見に耳を傾けて、話し合える環境を整備する。
・異年齢の児童に対して思いやりを持つよう生活する。

2）重点課題

【2018 年度方針】

・子ども会議の機会を活用し、共同に生活する際の約束事を具体化し、お互いに心地よく生活することを目指していく。
・子どもの苦手分野を職員が把握し、学習環境を整え、学習の理解を深められる支援の具体化を図る。

（総括）

自分自身の考えを発信し、他者と話し合う機会は限られているが、子どもの会議の場を有効に活用し、児童間で話し合って解決するよう働きかけてきた。

今年度もテレビ録画については不満が挙がった。児童からはレコーダーの残量が少なくなっているといった状況の話題が出ていたが、それを解決する具体的なアイディアは出てこなかった。今回、寄付の中から録画用の DVD を購入したことで、それを児童自身が

DVD に記録を残していき、DVD レコーダー内のデータを消すことでトラブルは少なくなっていった。

苦手分野に関しては、高校受験を控えた児童 2 名へ希望を伺い、塾での学習機会と学習ボランティアによる学習指導の依頼、個別対応専門職員からの学習支援を調整して学習環境を整備した。また K.I がバドミントンを習いたいと希望が挙がり、スポーツクラブでの体験を経て入会した。現在は、週 2 回の練習にも積極的に参加しており、バドミントンの技術向上に向けて取り組んでいる。

《2019 年度方針》

・子ども会議の機会を活用し、共に生活する際の約束事を確認し、お互いに心地よく生活することを目指していく。
・子どもの苦手分野だけでなく関心の高い分野を職員が把握し、学習環境を整え、または経験できるよう支援の具体化を図る。

Ⅲ　生活集団作り

1）ホーム運営（話し合い）

【2018 年度方針】

・自己主張だけにとどまらず、議題の解決策をみんなで協議し合えるようにする。
・子ども会議で決まったルールは、定期的に振り返りを行い、さらにより良いものになるよう協議を重ねる。

（総括）

今年度は自立の際の貯蓄に向けたアルバイト、受験に向けた通塾や受験生指導での学習時間を優先したことで木曜日の子ども会議は参加児童が少ない日が多かった。限られた時間の中で会議の質を落とさぬよう、重要度の高い議題の解決策を協議する際には木曜日以外の夕食の時間を活用する等、人数の多い時に臨時で会議を行ってきた。園の全体行事（キラリンピック）では、職員からの促しや雰囲気作りによって各競技の作戦会議の際に多くの児童が意見を述べることができた。チームＴシャツのデザイン決めに関しては児童の役割を明確にしたことで担当児童を中心に話し合って決めることができた。

子ども会議で白熱する議題として、録画番組数と録画残量が挙げられてきたが、定期的に子ども会議で録画番組を確認し、作成した録画表をリビングに掲示することで録画番組についての不満は減少していった。子ども達の中でも録画表が定着し、追加したい番組は表に書き入れてもらうことで都度新しい録画表に反映してきた。録画可能時間の確保については、子ども会議で見終わった録画番組を削除するかダビングするかを投げかけ、調整したことで不満は減少していった。

次年度は高校生が 4 名となる為、限られた時間の中で活発な意見交換ができるよう、子ども会議の時間の確保とより良い生活を意識した議題の提案を促していく。

《2019 年度方針》

・自己主張だけにとどまらず、議題の解決策をみんなで協議し、主体的に話し合いに参加する。
・子ども会議で決まった約束事は、定期的に振り返りを行い、さらにより良いものになるよう協議を重ねる。

2）ホーム行事

【2018 年度方針】

・児童の意向を聞き、季節や風土を感じられるホーム行事と個別外出を企画し実施する。
・個別外出について、児童の意向を大切にし、児童にとっての貴重な経験の場をつくる。職員との関係構築を目的として実施計画を立てる。

（総括）

今年度のホーム外出に関しては、事前に児童が行きたい場所を考える時間を設け、子ども会議の際に意見を集約し、外出計画を具体化してきた。アスレチックで遊びたい、桃狩りがしたいとの要望が挙がり、より多くの意見を叶えるべく情報収集をして場所を決定した。児童も要望が叶えられることでスムーズに計画が立ち、とても楽しみにしている様子が窺えた。今年度もしおりを作成したいとの声が上がり、役割を決めて職員と共に作成した。しおりを作成し、外出の目的を記載したことで子ども達にも目的を周知する機会を持つことができた。

前年度に引き続き、中高生中心の児童構成となっている為、部活動や塾、アルバイトなどのスケジュール調整は難しさがあった。夏季行事に於いては科学部に所属している R.M から部活を優先したいとの相談を受け、部活終了後の参加となった。次年度からは半数以上の児童が高校生となる為、自由企画も視野に入れ、一人ひとりが有意義な活動時間となるよう計画を組み立てていく。

個別外出に関しては、前年度に引き続き年度始めに予算の使い方を話し合い、興味関心意欲の湧く計画を対象児童と話し合い実施してきた。T.O は今年度も大洗マーチングバンドの演奏会を観覧し今年の演奏も感動したとのことであった。R は中学校の友人間で話題になっている書物のキャラクターに興味関心を持ち、秋葉原にあるアニメイトに行く計画を立てた。外出中には父親と生活していた頃に遊びに来たこともあったとのことで、普段話さない父親との生活について話をする機会にもなった。個別の時間を共に過ごすことで、関係性も深まり普段見せない表情や本児の考えていることを聞くことができ、普段の生活の中での支援に活かすことができた。次年度も児童一人ひとりの要望に応え、外出の内容を具体化していく。

《2019 年度方針》

・児童の意向を聞き、季節や風土を感じられるホーム行事と個別外出を企画し実施する。
・個別外出について、児童の意向を大切にし、児童にとっての貴重な経験の場をつくる。職員との関係構築を目的として実施計画を立てる。

3）安心・安全な生活作り

【2018 年度方針】

・より安心した生活が送れるよう生活する中で気になったことを子ども会議の場などで共有し改善していく。
・個別外出や児童と個別に話し合える機会を設け、児童一人ひとりのニーズを捉えることでホーム運営と児童への支援の具体化を図る。

（総括）

今年度は R.M と K.I が公共の場でのふざけの延長で言い合いになり、K の言動が気に障ったことで暴力に発展することがあった。R にはその場での注意とホームでの就寝前の時間を使って振り返りの場を設けた。R にはどんな理由であれ暴力はいけないことを伝え、今後はやらないよう話をしてきた。K にも良くない言動があったことを話し、R にも暴力はいけないとしっかり話をしたことを伝えた。その後、R が K に暴力をすることはなくなったが児童間の暴言はなかなか無くならない為、今後も暴言に気づいた際には都度話をし

ていく。
　ホームでの生活の中では、就寝前の時間を利用して児童一人ひとりとの個別の時間を確保してきた。翌日の学校の準備や洗濯干しの補助をしながら、児童との関わりを持ちその時間で児童からの話を聞くようにしてきた。児童も素直に話をすることができ、就寝前のこの時間を楽しみにしている様子も窺えた。今後も継続して取り組んでいく。
　今年度も権利ノートの読み合わせの時間を利用して児童一人ひとりが持つ権利について話をしてきた。次年度も権利ノートの読み合わせの時間を活用して園での生活や卒園後の生活を安心、安全に過ごせるよう補足説明を加え理解を深める場にしていく。

《2019 年度方針》

・より安心した生活が送れるよう生活する中で気になったことを子ども会議の場などで共有し改善していく。
・児童と個別に話し合える機会を設け、児童一人ひとりのニーズを捉えることでホーム運営と児童への支援の具体化を図る。

4）性教育

【2018 年度方針】

・対人関係におけるパーソナルスペースについて理解を深める。
・年齢相応のからだの変化や、成長を理解し、正しい性（生）教育の知識を身につける。
・高年齢児のスマートフォンやパソコンの使用に伴い、インターネットリテラシーを身につける。

（総括）
　前年度に引き続き、K.I の人との距離間については本児と話をしてきた。本児は女性職員と距離が近くなることがあり、腕 1 本分の距離をとるように伝えてきた。伝え続けることで本児から女性職員へ距離を置くような言動がみられるようになっていった。
　女性職員が宿直の際には女児が集まり、恋愛の話から異性との関わりについて話が挙がった。その時間を使って女性職員から性についての正しい情報や危険な行為などの話を伝えてきた。次年度は治療指導員と協同し性（生）教育の場を設けていく。
　高校生が増え、インターネットでの買い物をする児童が増えた為、子ども会議の場を活用し、インターネット通販の危険性についても話をしてきた。次年度も高校生が増える為、インターネットに於ける正しい情報を伝えていく。

《2019 年度方針》

・対人関係におけるパーソナルスペースについて理解を深める。
・年齢相応のからだの変化や、成長を理解し、正しい性（生）教育の知識を身につける。
・スマートフォンやパソコンの使用について、児童の年齢に適したインターネットリテラシーを身につける。

Ⅳ　一人ひとりの成長の為に

基本的生活習慣

1）健康・衛生

【2018 年度方針】

・保菌検査は、期日までに全員提出ができるようにする。
・布団を定期的に干す。

（総括）

保菌検査は、期日までに全員が提出することを目標に今年度も取り組んできた。ホワイトボードや週間予定表等に記載して貼りだすと共に、引継ぎの際に職員間で確認し、子ども会議や食事の場で児童に周知してきた。しかし、今年度は１度も１回で全員が提出できたことがなかった為、次年度は更にトイレなどにも掲示し、児童の意識が高まるよう工夫していく。

昨年度、庭にも干せるように物干し竿を購入した。干せるスペースが確保できたことで、洗濯物も干しながら、布団も干せるようになった。児童からも、自発的に「干してほしい」と要望があがるようになり、定期的に干すことができた。布団を干すと「気持ちがいいし、眠れる」と児童からも声があがっている為、次年度も引き続き取り組み児童の衛生環境を保っていく。

《2019 年度方針》

・保菌検査は、期日までに全員提出ができるようにする。
・布団を定期的に干す。

2）衣生活

【2018 年度方針】

・衣類の整理整頓をする。児童は洗濯をして自分で干す。
・児童には自ら身仕度や、身辺整理への意識を持つよう促していく。

（総括）

衣類の整理整頓に於いては、Y.N（女児）や R.M は乾いた洗濯物を床に置いてしまい、タンスに片付けたり、ハンガーラックにかけることが中々できずにいた。本児達と話し合い、乾いた洗濯物を入れるカゴを購入してからは、床に洗濯物が散らかることが少なくなった。また、期日を設けて掃除を促したことで、年末の大掃除の際には選別を行い断捨離することができた。部屋がスッキリしたことで綺麗に保とうという意識が芽生えた。

洗濯物を自分で干すことは、大半の児童が出来ている。声かけだけで干すことができない児童には、就寝の際に職員が一緒に干し、放置したままにならないように支援している。個別の時間にもなり、いろいろな話を聞くことができ、有意義な時間となっている。

身支度や身辺整理に対する意識は皆高い。特に女児児童は髪の毛やスキンケアに対して日頃から情報交換し、互いにアドバイスし合い、自身の生活の中で実践している様子が見られた。

《2019 年度方針》

・衣類の整理整頓をする。高齢児は自分で洗濯をして自分で干す。
・児童には自ら身仕度や、身辺整理への意識を持つよう促していく。

3）整理

【2018 年度方針】

・自室をきれいな状態に保ち、健康的な生活が送れるよう目指す。
・洗面所やトイレを清潔に保つ。

（総括）

自室の掃除は小・中学生に於いては休日の部活動や習い事、高校生に於いては午前中寝てしまっていたり、アルバイトがある等して習慣化出来なかったことが今年度の現状であ

った。その中でも S.N は意識が高く、自室はいつも整理整頓がされ綺麗に保たれている。クリスマスプレゼントを決める際も「白を基調にした部屋にしたい」とパソコンで情報収集し、金額内に収まるようにテーブル等を購入した。次年度は、休日は児童自身が掃除機をかけられるよう声をかけて促し、苦手な児童には補助に入るなど支援し、習慣化を目指していく。

洗面所やトイレは概ね清潔に保つことができている。気になった際には子ども会議で声をかけることで洗面台に抜けた髪の毛が落ちていることも少なくなり、綺麗な状態を保つことができるようになってきた。また女児児童は洗面台の 4 ヶ所のコーナーを 1 人 1 ヶ所使い、洗面用具やヘアケアに必要な物を置いているが、置ききれずに共有スペースに置いてあることが頻繁にある為、自室で保管するように子ども会議で促している。次年度も引き続き、次に使う人が気持ちよく使えるよう声をかけていく。

《2019 年度方針》

・自室をきれいな状態に保ち、健康的な生活が送れるよう目指す。休日は児童自らが掃除機をかけ、自室の掃除を行う。
・洗面所やトイレを清潔に保つ。共有スペースには私物を置かない。

4）食事に関して

【2018 年度方針】

・楽しく食事をすることを大切にし、食事マナーを身につける。
・食事が自身の健康維持と身体の成長につながることを理解し、栄養のバランスを意識して食べることを促す。

（総括）

今年度は塾やアルバイトがあり全員が揃って夕食を摂る場面は少なかった。楽しく食事をすることはできており、職員も学校であった出来事などを聞く場として大切にしてきた。マナーについては高校生 3 名がスマートフォンを持っているが、食事中は使用しないことを子ども会議で伝え、見かけた際には注意喚起した。

平日の朝食は全員が食べて登校することができているが、休日の朝食は遅く起きてくる児童が多く、朝食を抜くことが多くなっている。職員のほうでも朝食を抜くことがないよう献立を工夫したり、健康な生活をおくる為には朝食を摂ることは大事である事を伝えてきた。また魚や野菜を残しがちであり、成長と共に好き嫌いの主張が強くなってきている現状がある為、都度、なぜ食べた方がいいのかを伝え、一口でもいいから食べるように促している。

調理部から毎月発行される「食育だより」を楽しみにしており、新しい物を掲示した際には夕食時の話題にもなっている。今後も児童の食に対する意識付けの為に活用していく。

《2019 年度方針》

・楽しく食事をすることを大切にし、食事マナーを身につける。
・食事が自身の健康維持と身体の成長につながることを理解し、栄養のバランスを意識して食べることを促す。

5）豊かな人間関係作り
遊び・地域資源の活用

【2018 年度方針】

・外出時は、挨拶をして出かけるようにし、約束を守る。
・児童の交友関係を把握するよう努め、良好な関係を築けるよう支援する。

（総括）

全員が「いってきます」と挨拶して出かけることができており、「どこへ、誰と、何時に帰る」を伝えてから外出している。帰園時間に於いては、大幅に遅れて帰って来る児童はいなかったが、Y.N（女児）は年度後半になると学校帰りに友人と遊んでから帰園することが多くなった。再度、生活のしおりの約束事を本児と確認し、遅れる際には連絡がほしいことを伝えてきた。

K.I は交友関係も良好で、放課後や休日には友人宅に遊びに行くなど良い関係を築くことができている。友人宅にお礼の連絡を職員がした際には、しっかり挨拶ができていると褒められ、称賛した。来年度は中学生となる為、引き続き良好な関係が築けるよう支援していく。

《2019 年度方針》

・外出時は、挨拶をして出かけるようにし、約束を守る。
・子ども会への参加を通して、地域との繋がりを深めていく。

Ⅴ　学校生活と学力を育てる取り組み

1）学校生活への援助

【2018 年度方針】

・翌日の準備を児童自身が行い、習慣化できるようにする。
・日頃の児童の様子を窺い、クラスメイトや友人との健全な関係づくりを目指し学校との連携を図る。

（総括）

翌日の準備は児童自身が行うことができているが、中・高校生に於いては学校からの配布物を〆切が終わった後に「忘れていた」と見せてくることもあった為、子ども会議で全体に向けて注意喚起した。次年度は職員も意識を高く持ち、帰園した際に声をかけるなど工夫していく。

Y.N（女児）は今年度高校に入学した。5 月初めに学校と情報交換の場を設け、本児の特性や服薬などについて情報共有を図った。それよりは担任教諭からも気になることがあると連絡があり、すぐに対応することができた。次年度も各学校と連携し、皆がより良い学校生活を送れるよう支援していく。

《2019 年度方針》

・翌日の準備を児童自身が行い、習慣化できるようにする。低学年の児童は職員と一緒に準備する。
・日頃の児童の様子を窺い、クラスメイトや友人との健全な関係づくりを目指し学校との連携を図る。

2）GH での取り組み

【2018 年度方針】

・学校での学習の進捗状況を把握し、塾や学習ボランティアの時間を有効に活用して、個々に合った学習支援をする。
・通塾や習い事に向けて具体化を図っていく。

（総括）

今年度ホームでは受験生が 3 名おり、Y.N（男児）は指定校推薦で大学受験をした

が、入試前には塾で本番を想定した面接の練習を数回にわたり行ってもらうことができ、自信をもって面接試験に臨むことができた。また高校を受験するS.NとR.Mに於いては、本児達と話し合い夏期講習と冬期講習を受講した。冬期講習は本児達から苦手科目を克服したいとの希望があがり、コマ数を増やした。また学習ボランティアは、通常の学習指導の他に受験生指導とテスト前指導を依頼した。T.O は、定期考査前には必ずテスト前指導を依頼し、本児自らが担当学生と日程を調整する姿が見られた。

10月からK.Iがバトミントンを習い始めた。とても意欲的であり、クラブでも友人ができたと楽しく通うことができている。次年度も希望を聞きながら、通塾や習い事に向けて具体化を図っていく。

《2018年度方針》

・学校での学習の進捗状況を把握し、塾や学習ボランティアの時間を有効に活用して、個々に合った学習支援をする。
・通塾や習い事に向けて具体化を図っていく。

Ⅵ　進路を拓く

【2018年度方針】

・高校生には年度初めに貯蓄の必要性を伝える場を作り、重要性を理解してもらうとともに、具体的な貯蓄額を決める。
・自立支援コーディネーターと連携し、職場体験などを実施し、自分の将来を具体的に考えられる機会を増やす。

（総括）

今年度、高校生が 3 名となり、各々がアルバイトを経験してきた。Y.N（男児）に関しては、アルバイトでコンスタントに貯蓄できたことで、精神的な余裕が見られた。そのため、本児とは主に学費の部分で奨学金を申請する必要性について話をしてきた。T.O に関しては、アルバイトは定着してきたが定期的な貯蓄はできておらず、Y.N（男児）の貯蓄の話を聞いてからは徐々に貯蓄への意識は見られるようになっていった。

今年度は、明るい未来作戦会議が行われ、卒園後の生活について講師より話を聞く機会となった。中学生以上の児童が参加し、課題にも取り組んでいた。

今後も自立支援コーディネーターと連携し、各々が将来を考える場に積極的に参加していけるよう支援していく。

《2019年度方針》

・高校生には年度初めに貯蓄と奨学金の必要性を伝える場を作り、理解を深めるとともに貯蓄額を具体化する。
・自立支援コーディネーターと連携し、職場体験などを実施し、自分の将来を具体的に考えられる機会を増やす。

2）進学への取り組み

【2018年度方針】

・高校選択のための情報を収集し、早めに学校見学等を行い、目標を具体化できるようにする。
・児童と相談し、希望の検定や資格にチャレンジする。

（総括）

今年度はS.NとR.Mが受験校を決定する為、比較も含め複数の高校を見学した。積極的に高校見学に参加することで高校の雰囲気や登校のイメージができた様子が窺えた。R

は受験校決定間際まで迷いが見られ、急遽別の高校見学をすることも検討したが、テストの点数を見て自分の学力に見合った高校を選択した。

検定に関しては、T.O が学校主催の検定を受けたのみとなった。今後も必要に応じて検定の具体化を図っていく。

上級学校への取り組みに関しては、T が高校 2 年生となり学校主催の学校見学会に参加した。その後、本児から夏休みに行われたオープンキャンパス（以下、OC と記す）への参加希望が挙がり、見学したことで早期に大学選択を具体化することが出来た。学校の進路指導と連動し、児童の意欲が向上している時期に柔軟に対応（OC に一緒に参加する）することで主体的に進路選択をするようになった為、今後も児童が主体的に進路選択できるよう先手の対応を協議していく。また、Y.N（男児）がロールモデルとなり、他児が居る中で Y.N（男児）と進路について話をした際には、大学への進路について興味を抱き、一緒に話を聞く児童も見られた。今後も進路選択について考える機会を意図的に作り、話し合える環境を整えていく。

《2019 年度方針》

- 高校卒業後の進路選択のための情報を収集し、早めにオープンキャンパスに参加することで児童が主体的に進路を選択できるようにする。
- 児童と相談し、希望の検定や資格にチャレンジする。

Ⅶ　アフター対応

【2018 年度方針】

- 卒園や家庭復帰予定児童の退所後支援計画書を作成する。
- 卒園または家庭復帰した児童の生活の様子や進学と就職状況について、計画に沿って定期的な電話連絡や面会を行い、近況を把握する。
- FSW と自立支援コーディネーターと共同し、情報の共有を図り、アフター支援を実施する。

（総括）

今年度のアフターについて、Y.N（男児）の退所前ケース検討会議を開いた。退所前の児童状況と卒園後の生活を具体化するに向けて、専門部との協議を行い、児童状況の情報共有と支援について協議を図った。

卒園した児童の H.N（22 歳）は、精神のグループホームで自立に向けて生活している。今年度は H より家族について何度か相談を含めての話が挙がっていた。また H が起こしたトラブルから、先方のグループホームより関係者会議の要請があり、H の同意手続きを行ったうえで愛児園での生活を伝え、また家族の課題ついて協議した。

アフターに関しては、家庭支援専門相談員と自立支援コーディネーターと協働で取り組む必要がある。今年度の退所前ケース検討会議で挙がった事項について、部署内で協議し役割分担しながら、課題の改善に向けて取り組んでいく。そして、次年度は T.0 が大学進学を含めた自立に向けて計画的に退所前ケース検討会議を開いて、自立支援への強化と定着した取り組みとなるよう支援していく。

《2019 年度方針》

- 卒園や家庭復帰予定児童の退所前ケース検討会議を開き、支援について協議する。また、退所後支援計画書を作成し支援の計画を立てる。
- 卒園または家庭復帰した児童の生活の様子や進学と就職状況について、計画に沿って

定期的な電話連絡や面会を行い、近況を把握する。
・家庭支援専門相談員と自立支援コーディネーターと協同し、情報の共有を図り、退所前ケース検討会議を開いてアフター支援の具体化を図る。

Ⅷ　ホーム運営

１）円滑なホーム運営のために

①ホーム会議

【2018 年度方針】

・児童状況への情報を交換し、正確な状況を把握する。また、協議事項の優先順位の有無や協議方法の工夫を積極的に取り入れ、児童への適切な支援に繋げていく。
・ホームの意見をまとめる際には、児童の最善の利益を追求し、よりよい支援につながるよう、職員間のビジョンの共有や、支援方法について積極的に意見を交わし、具体化を図っていく。
・勤務補助も含め複数勤務日を活用し、児童支援の具体化や会議時間の短縮に向けて取り組む。
ノー残業への取り組みを含めて、時間短縮を目指す。

（総括）

今年度、ホーム会議では、児童状況によって協議事項の優先事項を決め、またそこへの協議時間を増やすなど工夫して取り組んだ。児童の状況は、児童一人だけでなく周辺の友人や家族を含めた状況によって変化する。会議録の書式順にとらわれず、児童状況によって協議の優先を決めたことで、時間配分への工夫が未充分となってしまった。協議事項の優先を変更したことで、協議に集中してしまい、到達点の設定など課題が浮上した。次年度は、会議の質を落とさず会議時間内で終わるよう意識して臨む。

また今年度は人材対策委員会からの提案を受けて、棟間交流を実施した。昨年度から始まった取り組みだが、今回は会議への参加や児童の様子をみたことで、所属部署以外の職員間の協議だけでなく、取り組みに至る経緯やその後の児童対応への実践を見ることが出来た。そうした状況をホームへ報告だけでなく、良い取り組みとして、会議録の書式の変更を行った。

ホームで意見を集約することに関して、今年度は児童の受け入れについて協議した。ホームで児童を受ける際に、どういった考えを大切にするか、児童状況の変化を複数年見通した協議を行い、ホームの考えをまとめていった。

勤務補助は、今年度も 4 週 4 泊と 4 日の枠を活用し、対外対応の際にホーム対応を依頼した。主に児童支援についての複数勤務を敷くことで、個別的な関わりが持て、児童の考えや進路についても話し合う機会を得ることができた。

ノー残業へは、将来構想委員会が旗振りとなり、年 3 回のノー残業ウィークを設けて取り組んだ。初めは意識してノー残業に向けて取り組んだが、児童状況によっては協議時間を要した事案があり、取り組みが出来ない日や週が出た。ノー残業への取り組みを継続し、検証を行なうことで残業を減らしていく。

《平成 2019 年度方針》

・児童状況への情報を交換し、正確な状況を把握する。また、協議事項の優先順位の有無や協議方法の工夫を積極的に取り入れ、児童への適切な支援に繋げていく。
・ホームの意見をまとめる際には、児童の最善の利益を追求し、よりよい支援につながるよう、職員間のビジョンの共有や、支援方法について積極的に意見を交わし、具体化を図っていく。

・勤務補助も含め複数勤務日を活用し、児童支援の具体化や会議時間の短縮に向けて取り組む。
ノー残業への取り組みを含めて、時間短縮を目指す。

②記録

【2018 年度方針】

・引き継ぎ事項は、簡潔にまとめ、情報共有していく。
・家族間交流など、児童に関わる日程ついては漏れがないよう、ボードを利用してスケジュール管理を徹底する。
・医療機関への通院記録の記載方法について、ホームで協議し具体化を図る。

（総括）

ホーム日誌の引き継ぎ事項について、ホームでは他部署からの協力を得て、宿直補助や日中補助業務を行っているので簡潔にまとめて情報を共有する必要性が高い。特に対外関係の連絡の有無や、引き継ぎ後に状況が変化することもあるので、情報共有は重要である。今年度も簡潔にまとめて、口頭で補足説明を行なうことで、記録にある児童状況について、対応する職員が戸惑うことなく業務に取り組めるよう図った。公務室内には 1 週間の予定をボードに記載し掲示しておき、先の予定を把握できるよう工夫したことで、引き継ぎ時に漏れがないよう伝えるよう意識した。

医療機関の通院記録に関しては、ホーム日誌の引き継ぎ事項を中心にまとめてきた。また児童の養育日誌に入力することで、外部へ提出する記録をまとめる際は、調べる時間の短縮に繋がった。しかし、複数個所に入力することは時間を要することにもなるので、通院記録簿のデータ化など入力作業の軽減化を図り、情報共有の徹底に向けて取り組んでいく。

《2019 年度方針》

・引き継ぎ事項は、簡潔にまとめ、情報共有していく。
・家族間交流など、児童に関わる日程ついては漏れがないよう、ボードを利用してスケジュール管理を徹底する。
・医療機関への通院記録の記載方法について、ホームで協議し具体化を図る。

2）暮らしやすい生活作り

防災、環境整備

【2018 年度方針】

・毎月、避難訓練を実施し、日々の生活の中でも防災への意識を持つよう働きかける。
・避難訓練では、皆が参加できるように、実施時間の変更を含め、計画を立てる。
・除草作業は、計画的なスケジュールを立てて実施する。
・庭を利用し、野菜や植物を育て、ホームの美化活動を行う。
・自室だけでなく、リビングなどの共有スペースの美化を児童と共に進めていく。

（総括）

避難訓練への協議はホーム会議時に話し合い、具体化を図ってきたが、年度の前半に避難訓練が実施出来なかった月が生じしてしまった。児童の状況によっては、アルバイトや塾があり、それらのスケジュール管理と実施タイミングについての柔軟な取り組みが不十分であった。次年度は、スケジュール管理だけでなく、夕方の実施等を検討具体化し、児童が多く参加できるよう調整し、未実施の月がないようにする。

除草作業では、今年度も用務員の協力を得て、定期的に実施した。また日中補助の職員とも庭の草の状態を確認しながら実施した。

庭の利用については、今年度も野菜や植物を育てた。野菜に関しては、食事の献立に取り入れることで児童からの食への関心を高める機会となった。また野菜や植物に定期的に水やりを行っていた中で、K も水やりを手伝ってくれた。

リビングなどの共有スペースへの美化は、季節の催し物では飾りつけを行い、季節や行事を感じられるよう配慮した。児童の誕生会では飾りつけを率先して手伝う姿が見られた。他児の誕生日を祝うだけでなく、他者の存在や自身の誕生日を大切にする気持ちを養う機会と捉え、こうした手伝いを今後も得られるよう働きかけていく。

《平成 2019 年度方針》

・毎月避難訓練を計画し、実施については未実施とならないようにする。
・日々の生活の中でも防災への意識を持つよう働きかける。
・避難訓練では、皆が参加できるように、実施時間の変更を含め、計画を立てる。
・除草作業は、計画的なスケジュールを立てて実施する。
・庭を利用し、児童の希望を伺い、野菜や植物を育て、ホームの美化活動を行う。
・自室だけでなく、リビングなどの共有スペースの美化を児童と共に進めていく。

Ⅸ　質の高い勤務体制のために

1）職員集団作り

【2018 年度方針】

・ホーム職員の役割分担を明確にし、各々が責任を持ち、児童支援の具体化を図る。
・ホームの決定事項は、補助職員に伝える。対応に支障がないようにすると共に、アドバイス等を得られた際には、ホーム内でも協議し支援に繋げていく。
・児童の支援に関し、各部署へ相談し、児童の支援の具体化を図る。

（総括）

昨年度に引き続き、児童状況や支援方法などに於いては引継ぎ時やホーム会議時に情報共有を徹底してきた。今年度は Y.N（女児）の登校時の対応や服薬について補助職員と支援の統一を図るべく、職員会議後に情報共有の場を 2 回設けた。ホーム対応する全職員が共通認識をもった上で統一した児童支援を行うことは１人勤務のグループホームでは大切なことである為、今後も必要に応じて補助職員を交えた情報共有の場を設けていく。また、ホーム会議時には対外関係、児童対応など「誰が、何を、いつまでにやる」を確認し、役割分担を行い、各々が責任を持ち対応してきた。適宜、ホーム会議やホーム日誌などで進捗状況を報告・確認し、抜けのないようにしてきた。

補助職員との引継ぎの際には児童状況や日程など、より詳細に伝え、抜けのないように心がけた。その際に得られたアドバイスなどはホーム会議で共有し、児童支援に活かすことができた。また他棟の様子や取り組みなども聞くことができ、有意義な時間となっている。

《2019 年度方針》

・ホーム職員の役割分担を明確にし、各々が責任を持ち、児童支援の具体化を図る。
・ホームの決定事項は、補助職員に伝える。対応に支障がないようにすると共に、アドバイス等を得られた際には、ホーム内でも協議し支援に繋げていく。

2）勤務体制

【2018 年度方針】

・宿直補助職員、日中勤務補助職員、調理補助職員と協議し、勤務を作成していく。

・学校行事や部活動の送迎、行事参加の勤務調整の中で、ホーム内で複数勤務を敷くか、宿直補助職員へ 4 週 4 回の日中補助の依頼を打診する。
・職員の休暇取得のバランスを計り、偏りのない勤務を作成する。行事引率または参加職員の超過勤務の偏りを改善するよう、勤務作成に反映させる。

（総括）

今年度は毎月 10 日までに勤務表（案）を作成し、ホーム会議時に全員で確認・修正を行い、15 日までに衛生推進係の勤務調整表に記載するという流れで作成してきた。昨年度までは宿直補助を月火の固定で依頼してきたが、今年度は固定ではなく必要な曜日で依頼した。その為、柔軟に勤務を組むことができた。また日中補助勤務に於いては、対外対応の際にホーム対応を依頼し、安心して業務を行うことができた。

偏りのない勤務作成については、今年度は対外関係が多くあり職員が固定で対応した方が良い場合が多かった為、偏りが出てしまった月もあった。また行事引率などに発生する超過勤務などは日中補助勤務を活用し、時間調整することができた。次年度は有給休暇取得 5 日間が義務づけられる為、バランスの良い勤務表作成を行い、休暇を取得していく。

《2019 年度方針》

・毎月 10 日までに勤務表（案）を作成し、ホーム職員全員で確認する。
・学校行事や部活動の送迎、行事参加の勤務調整の中で、ホーム内で複数勤務を敷くか検討し、宿直補助と日中補助の依頼をする。
・職員の休暇取得のバランスを計り、偏りのない勤務を作成する。行事引率または参加職員の超過勤務の偏りを改善するよう勤務作成に反映させる。

① 研修

【2018 年度方針】

・研修で得た情報等をホーム会議で発表し、支援の具体化に向け協議し取り組む。
・取り組んだ支援の振り返りや取り組みへの課題を抽出し、支援の発展と具体化を図る。
・会議日と重なる研修については、会議時間の確保に向けて協議内容や進行等を工夫し、ホーム職員間で検討調整を図る。（研修の不参加も協議内容に含む）

（総括）

各々が年度当初に掲げた研修テーマに基づいて、今年度も研修に参加することができた。研修後はホーム会議内で研修内容の報告を行い、情報共有を図っていく中で、いま何を求められているかが明確になり、自覚が芽生えたとの声も聞かれ、日々の業務に臨む姿勢に変化が見られた。また今後、受けた研修内容をどう児童支援に活かしていくのかが課題であり、ホーム会議内でも引き続き議論していく。研修報告書に関しては人材対策委員会がとりまとめ、早めに提出できるようにしてきた。

グループホーム制度委員会への参加については、今年度は園内の会議への参加を優先し、毎月参加することはできなかった。次年度も都度参加不参加を協議し、調整していく。

《2019 年度方針》

・研修で得た情報等をホーム会議で発表し、支援の具体化に向け協議し取り組む。
・会議日と重なる研修については、会議時間の確保に向けて協議内容や進行等を工夫し、ホーム職員間で検討調整を図る。（研修の不参加も協議内容に含む）

X　関係機関との協力と連携

1）学校

【2018 年度方針】

・ホームと学校での生活状況と交友関係について情報を共有し、児童の課題解決と改善に向けて協同し取り組んでいく。
・受験に向けて学校側と情報共有し協同して支援していく。

（総括）

今年度 Y.N（女児）は、徐々に生活リズムの乱れや家族・進路等の本児が抱える不安から起床に遅れが見られ遅刻欠席が増えていった。症状を改善するべく心療内科への通院をすることになり、学校へ診断書を提出したことで、軽減措置を受けることになった。担任教諭とは本児の園、学校生活の様子を情報共有し連携して支援してきた。

受験生の Y.N（男児）に於いては無事に江戸川大学に合格した。大学進学に向けては高校と奨学金の申請について手続きを行ってきた。不明な点は都度電話連絡で確認し、手続きを完了することができた。

今後も各学校との連携を密に行い、協同して支援していく。

《2019 年度方針》

・ホームと学校での生活状況と交友関係について情報を共有し、児童の課題解決と改善に向けて協同し取り組んでいく。
・進路の具体化に向けて学校側と情報共有し協同して支援していく。

2）児童相談所

【2018 年度方針】

・双方機関の持っている情報をしっかりと交換し、支援の見通しと具体化を協同する。
・児童と保護者の状況に関して、ホーム職員が全員分かるように確認と引き継ぎをしっかり行う。

（総括）

今年度 R.M は、前年度に引き続き母親と定期的に児童相談所内での面会を実施してきたが、裁判の結果、父親から母親へと親権の変更が決まった。親権が変更したことで母親との関係者会議を設け、今後の交流の流れを確認し家庭訪問も実施した。今後も母子関係が良好に構築していけるよう担当福祉司と協同して支援していく。

N 姉妹は、母子ともに外泊交流の回数が曖昧になっていた為、母親との関係者会議や姉妹と福祉司の面談を行い確認してきた。姉妹から挙がっていた母親への不安要素についても関係者会議の場で確認し、姉妹に伝えたことで不安軽減に繋げた。今後も担当福祉司と協同し支援を具体化していく。

K.I に於いては、父親の性格を考慮し福祉司と家庭支援専門相談員、ホーム職員が役割分担を明確にした上で対応にあたってきた。役割を明確にしたことで父親との関係性も築くことができた。

児童と保護者の状況について動きがあった際には、都度ホーム日誌等への記載と補足説明で引き継いできた。今後も情報共有を密に行っていく。

《2019 年度方針》

・双方機関の持っている情報を共有し、支援の見通しと具体化を図る。
・児童と保護者の状況に関して、ホーム職員や補助職員にも分かるように確認と引き継ぎをしっかり行う。

3）病院

【2018 年度方針】

・定期通院の日程調整をホーム会議や日々の養育の場で判断し、状況に応じ通院にする。
・都度、薬の在庫を確認し、ホーム会議に通院スケジュールを立てる。
・記録方法を精査して情報を管理する。

（総括）

今年度は新たにホーム会議録に通院予定日の記入欄を設けたことで、会議時に必ず確認することができ、予め勤務に反映することができた。その結果、通院の予定がスムーズに立てられ、職員が超過勤務しての通院は軽減された。

処方薬の取り扱いや薬の服薬状況、通院スケジュールといった服薬の管理については、今年度より園に医療機関等連絡調整員が配置され、毎週ホームに来訪し処方薬の補充と確認をしてもらってきた。その際にはホームに居る児童との関わりを持ち、気になることがあれば職員間でも情報共有を図った。児童も医療機関等連絡調整員からの情報に興味関心を抱いている様子が窺えた。

通院記録簿に関しては、ホーム内で精査し、一括して児童の通院記録が確認できるため、今後も活用していくこととなった。今後は抜けが無いようデータ化する等、工夫して記録していく。

予防接種に関しては、保健衛生係から予防接種の未実施をまとめた資料をもとに、計画的に予防接種を受けてきた。受けきれなかったものもあるため、次年度は年間の接種スケジュールの目安を立てる等、工夫をしていく。

《2019 年度方針》

・定期通院の日程調整をホーム会議や日々の養育の場で判断し、状況に応じ通院にする。
・都度、薬の在庫を確認し、ホーム会議に通院スケジュールを立てる。
・記録方法を精査して情報を管理していく。

ＸＩ　本園との協力と連携

1）会計

【2018 年度方針】

・物品の購入や現金受け取りの際は、都度、確認をする。
・学校からの領収書の受け取りを確認できる書式を活用し、領収書の適宜提出を目指す。
・仮払いを利用し、同費目での買い物による支出過多と小口現金のバランスを図る。

（総括）

今年度は、小口現金の残額が 3 万円をきる前に補充を依頼するように心がけてきた。しかし週末で大幅に残額が減ることがあり、急遽補充を依頼することがあった。その為、児童にも子ども会議で説明し、被服費や靴代、散髪などで使用する場合には早めに伝えてほしい旨、話をした。次年度は児童の意向を確認しながら、仮払いで対応できるよう調整を図り、小口現金の補充に余裕を以て依頼できるよう取り組んでいく。

学校関係や習い事の領収書は、前以て職員が連絡し、公印を押印してもらえるかを確認してから持参している。その為、抜けがなく受け取ることができた為、次年度も同様に取り組み、抜けのないようにしていく。

《2019 年度方針》

・物品の購入や現金受け取りの際は、都度、確認をする。

・学校からの集金は職員が領収書の受け取りまで対応し、抜けがないようにする。
・仮払いを利用し、同費目での買い物による支出過多と小口現金のバランスを図る。

2）栄養士

【2018 年度方針】

・アドバイスを受けて、献立と調理に反映する。
・水回りの衛生環境について助言を受け、具体化を図っていく。

（総括）

今年度も栄養士のアドバイスを受け、季節や少し難しいメニュー、児童からのリクエストメニューなども取り入れ、献立を作成してきた。月に 1～2 回夕食作りに来てもらう機会があり、その際には普段作ることが難しいメニューを依頼することができた。また本園で作ったおやつを届けてもらったことがあり、児童からは「買って来たみたい」と大好評であった。夏休みには毎年、児童と一緒にホームでお菓子作りを行う機会を作ってくれ、中・高生は楽しく参加していた。子ども達からは「長期休みにまたやりたい」との声が挙がっている。

今年度は新たな試みとして、職員の調理実習を各職員 1 回行ってもらった。各々苦手とするメニューを選び、料理本やクックパッドでは分からない細かな部分まで教えてもらうことができ、大変勉強になった。

水回りの衛生環境については、夕食作りなどで来てもらった際にアドバイスをもらうことができた。アドバイスを受けたことは都度具体化し、実践してきた。

《2019 年度方針》

・アドバイスを受けて、献立と調理に反映する。
・水回りの衛生環境について助言を受け、具体化を図っていく。
・夕食作りの際には、児童に対して栄養面について具体的な助言をもらう。

3）心理療法担当職員

【2018 年度方針】

・気になる児童の言動や様子の変化があった場合は、相談する。児童に必要なケアを共に考え、具体化を図る。（WISC を活用し、日々の生活支援の具体化を図る）
・職員の働く環境について、アドバイスを受け、環境づくりを具体化していく。
・実施にあたり報告書の提出を依頼していく。

（総括）

Y.N（女児）が夏休み明けから生活リズムが崩れ、眠れなくなってしまい通院したいと話があった。本児の話しをもとに相談し、具体的にアドバイスをもらい新たな病院を紹介してもらった。また日常の中で気になる言動や行動があれば、適宜相談することができている。

次年度も児童で気になることがあった場合には適宜相談し、助言をもらっていく。

《2019 年度方針》

・気になる児童の言動や様子の変化があった場合は、相談する。児童に必要なケアを共に考え、具体化を図る。（WISC を活用し、日々の生活支援の具体化を図る）
・職員の働く環境について、アドバイスを受け、環境づくりを具体化していく。
・実施にあたり報告書の提出を依頼していく。

4）家庭支援専門相談員

【2018 年度方針】

・保護者や家庭環境の把握のため、必要に応じて、家庭訪問の同行を依頼する。
・ホームと共同し、家庭復帰へ向けての園の方針と取り組み支援の具体化を図る。

（総括）

今年度はどのケースも動きがあり、家庭支援専門相談員と情報共有したうえで事前に協議の場を持ち、意見をすり合わせ、関係者会議や家庭訪問を行うことができた。また職員が同席できなかったケースに於いては、家庭支援専門相談員からの報告と共に後日書面で協議内容を確認・共有することができている。

R.M に於いては年末に母親へ親権が変更となった。その際には今後の進め方や交流の流れなどを確認するために関係者会議を行い、家庭訪問にも同席してもらい母親と顔合わせを行った。また K.I のケースに於いては、保護者との連絡を家庭支援専門相談員に一本化し、交流後には振り返りを行い、保護者との関係構築を図ってきた。

次年度も情報共有を行いながら、必要に応じて依頼していく。

《2019 年度方針》

・保護者や家庭環境の把握のため、必要に応じて、家庭訪問の同行を依頼する。
・ホームと共同し、家庭復帰へ向けての園の方針と取り組み支援の具体化を図る。

5）個別対応専門職員

【2018 年度方針】

・児童状況の変化に応じ、必要な時には依頼する。
・実施にあたり報告書の提出を依頼していく。

（総括）

今年度は R.M が受験生となり、月 2 回の個別学習を依頼した。本児の苦手科目である社会科を中心に行ってもらった。点数も伸びてきており、本児の自信に繋がった。また個別学習後には学習の様子などの報告をもらい、ホームでの支援に活かすことができた。

次年度も必要に応じて依頼していく。

《2019 年度方針》

・児童状況の変化に応じ、必要な時には依頼する。
・実施にあたり報告書の提出を依頼していく。

6）治療指導員

【2018 年度方針】

・児童状況の変化に応じ、必要な時には依頼する。
・児童への取り組みや支援に対してのアドバイスを求め、具体化を図っていく。

（総括）

今年度も具体的に依頼することはなかったが、夕食時の場面観察で来訪した際には気になる児童に対して事前に話をし、アドバイスをもらうことができた。また R.M に関しては外部支援団体の招待行事の際に一緒に行動を共にしたこともあり関係性も良く、学校のこと等を積極的に話す様子が見られた。

Y.N（男児）が ADHD で服薬をしていたが、卒園を見据え担当医と相談し休薬した。卒園後の生活を送るうえでどのような配慮が必要かを治療指導員に相談し、担当医に助言をもらうことができた。

次年度は S.N と R.M が高校に進学し、友人関係の変化が予想される為、セカンドステップを依頼していく。また女児児童全員が高校生になる為、合わせて性（生）教育もホーム

職員と協同して行っていく。

《2019 年度方針》

・児童状況の変化に応じ、必要な時には依頼する。
・児童への取り組みや支援に対してのアドバイスを求め、具体化を図っていく。

7）自立支援コーディネーター

【2018 年度方針】

・進路、自立に関して、必要に応じて、対応を依頼する。
・共同し、中高生への自立支援の具体的計画、および実施に向けて協力体制を協議、具体化を図る。

（総括）

Y.N（男児）は 4 年制大学への進学を決め、年度初めより協同して奨学金のシミュレーションや申請を行ってきた。また夏休みには大学のオープンキャンパスや高校の学校説明会が複数回あり、引率やホーム対応を適宜依頼することができた。

明るい未来作戦会議の送迎の際には、その日の児童の様子を報告してくれ、その後の支援に活かすことができた。

次年度は T.O が大学進学を控えている為、自立資金や奨学金のシミュレーションを連携して行っていく。

《2019 年度方針》

・進路、自立に関して、必要に応じて、対応を依頼する。
・共同し、中高生への自立支援の具体的計画、および実施に向けて協力体制を協議、具体化を図る。

8）地域支援担当職員

ホームに用事があって来た際には必ず児童全員に声をかけてくれ、学校での様子などを聞いてくれている。児童が本体施設に行った際にも声をかけてくれ、子ども達も積極的に会話をする姿が見られた。

9）医療機関等連絡調整員

毎週月曜日に 1 週間分の薬の補充と服薬確認の為に来訪している。その間に通院し、薬が変更になるなどした児童がいた場合には適宜報告し、情報共有を図ってきた。また服薬の時間帯についても相談することができ、児童が飲み残すことがなくなった。

次年度も適宜相談し、必要に応じて依頼していく。

《2019 年度方針》

・通院に関して、必要に応じて対応を依頼する。
・服薬管理を依頼する。
・服薬に関する児童の理解を深める為、助言をもらう。

ⅩⅡ　その他

ボランティア

【2018 年度方針】

・各児童の学力向上の意識を高めるにあたり、受験生指導とテスト前学習指導を依頼する。
・学生ボランティアと児童が学習以外に取り組める行事を職員側が企画し、双方の良好な関係を築いていく。
・個人を含めたボランティア活動については、児童の意向を確認して具体化を図っていく。

（総括）

今年度、受験生の S.N と R.M は私立受験日前日まで学習指導を依頼し、過去問を解く等積極的に受験生指導を受けてきた。高校生の T.O もテスト前になると担当学生に依頼し苦手な部分を中心としたテスト前指導を受けてきた。次年度は T が受験生となるので、引き続き学生の協力を依頼していく。

今年度も引き続き、学校行事やまつりつくば、学習ボランティア交流会等に担当学生が参加することで学習以外での交流する機会を持つことができた。2 月には学生とのミーティングを行い、3 月には今年度も送別会を含むホームでの交流会を企画している。

次年度も学生との日程調整を図り交流会を実施することで、学生への感謝の気持ちを形にしていく。

《2019 年度方針》

・各児童の学力向上の意識を高めるにあたり、受験生指導とテスト前学習指導を依頼する。
・学生ボランティアと児童が学習以外に取り組める行事を職員側が企画し、双方の良好な関係を築いていく。
・個人を含めたボランティア活動については、児童の意向を確認して具体化を図っていく。

調理部

2018年度総括、及び2019年度方針

調理部	堀田　弘子 萩ノ谷　歩美 桜井　直美 永田　晴美 稲葉　智美 （12月１日～）

今年度は１名欠員のまま４名体制でのスタートとなりました。４名でも出来る限り無理のないように補助にも努めてきました。ユニットに入った時は、子ども達との時間を大切にし、私達にも出来るアドバイスや支援を行ってきました。つくしへ定期的に行っている効果なのか、特に卒園間近の男児は学校の話やアルバイトの話、進路の話など自分から話を聞かせてくれるようになりました。しっかりとした考えを持っていて自分なりの意見や他人を思いやる気持ちを言う事もありました。餅つき大会の時はラウンジで一生懸命に丁寧に餅を伸ばしてくれ率先して手伝ってくれました。昔は無口だったイメージがありますが、大人になるにつれ成長を感じ感慨深く感じました。
また、１１月末に専門部主催で行ったキラリンピックにもチームの一員とし２名フル参加しました。子ども達とユニット職員と協力しつつ１位を目指し競技に望みました。施設としても初めての試みでしたが、日頃から一致団結して何かをするという経験がない為、とても楽しく味わったことがない感動がありました。また、始まる前に「やるからには１位を目指そう」や競技中も「頑張ろう」などと励まし合い、いつもと違う子ども達の笑顔や姿を見る事が出来ました。見事１位になったユニットと豪華な焼き肉を食べた事や、大きいブロックのままのお肉を職員と切って大変でしたが、楽しい思い出の一つになりました。
完全小舎制になり５年目を迎えます。日々、子ども達の成長を著しく感じます。アラカルトメニューの時など、子ども達の食べっぷりにはビックリしますが、その一方で野菜嫌いな子が多いのが目立つように感じました。職員からの声かけで少しは食べる子もいるのですが、好き嫌いや偏食は一緒に食べる職員がどうして嫌いなのか、どうしたら食べられるのかなど話し合い工夫する事が大切だと思います。おいしく食べるということをもう一度見直し一緒に調理し一緒に食べるというのも方法だと思います。
今後も、棟職員と協力して子ども達の為に支援していきたいと思います。

『チームワーク作り』

今年度は4名でのスタートとなり、約 1 年間1名少ない状態で調理業務・栄養業務を行ってきました。4 名でも業務の質を落とさぬように協力し合いながら務めてきました。また、1 人 1 人の役割も明確にし責任を持って行ってきました。12 月に入り新しいメンバーが増え、調理業務・栄養業務がスムーズに行えるようになりました。また、解りやすい様に、調理業務の一日の流れや仕事内容などを一覧表にまとめ説明を丁寧に行ったり、仕事の引継ぎや次の日の連絡事項などをより詳細にメモを書き残したり、ホワイトボードやカレンダーに記入し情報共有をしてきました。またメニューなどで作った事がない料理の時は、一緒に味見をしたり、作り方を前もって説明し業務をスムーズに行えるように皆で協力してきました。コミュニケーションは皆で日常会話をし、和やかな雰囲気になっています。また、今年度は「笑」を加えて笑いの耐えない、笑顔があふれる調理室、また料理を食べた子ども達が笑顔になれる事を願って「笑」を目標に皆で頑張っていきたいと思います。

『他部署との連携』

今年度も引き続き、ちゅーりっぷユニットの補助、つくしの調理補助を行いました。毎日、ちゅーりっぷで朝食を食べているので居心地が良いです。毎日笑顔で迎えてくれる職員と子ども達にはとても癒されます。幼児さんの成長はとても早く、ビックリする事がたくさんあります。また、出来る事は協力しようと話し合い、勤務が可能な限り他のユニットで依頼があった補助にも入ってきました。少しでもユニットに入り、子ども達と生活すると新しい発見や行動を見る事が出来ます。学校の話やユニットの話を沢山して笑わせてくれます。また、毎日の日課のように学校終わりに調理室に来ては話をする子が定着してきました。今後も他部署との連携を大切にし可能な限り対応していきたいと思います。

Ⅰ．環境整備

2018年度方針

① 倉庫の整理整頓
② 排水溝の清掃
③ ゴキブリなどの害虫駆除
④ ポリバケツの清掃
⑤ ペットボトル・アルミ缶・ビンの分別
　ペットボトルのキャップ・アルミ缶のプルタブ・使用済みの乾電池の回収

総括

① 毎月１日に食品倉庫の整理整頓及びチェック表を記入し、在庫の確認と発注を行ってきました。
② 排水溝の清掃は、毎週日曜日に行いました。また、2ヶ月に1回、業者に汲み取りをお願いしました。
③ ゴキブリなどの害虫駆除は、今年度も行いませんでしたが、2月にネズミによる扉の被害が出てしまいました。業者にお願いし駆除できました。

④ 生ゴミ入れのポリバケツは、ゴミ収集日に合わせ、月・水・金に清掃してきました。
ポリバケツの破損が目立って来た為、今年度は新しく購入しました。
※ゴミを捨てる時は二重に縛って下さい。粗大ごみや燃えないごみを捨てる時は紐で縛るかゴミ袋にきちんと入れてから捨てて下さい。

⑤ペットボトル・アルミ缶・ビン・燃えないゴミの分別を行ってきました。給食会議でも何度か話しをしましたが、ゴミの分別が出来てない事がありました。特に燃えるゴミに空き缶が混ざっている事が多かったです。
ペットボトルのキャップ、牛乳パックはカスミのリサイクル回収 BOX へ持って行きました。乾電池はつくば市役所のリサイクル回収 BOX へ持って行きました。
ペットボトルのキャップは、
※合計 5160 個÷800＝6人分のポリオワクチンを購入できました。
みなさんご協力ありがとうございます。
※ペットボトルのキャップは軽くすすぎ、シールをはがして回収 BOX に入れて下さい。
※新聞紙を捨てる場合は、新聞と雑誌は別にして下さい。ビニール袋から新聞・雑誌を出して捨てて下さい。

⑥古くなり、傷や歪みが目立ち食缶を購入しました。

2019年度方針

① 毎月1日に倉庫の整理整頓を行い、チェック表の記入漏れがないように行っていきます。
② 排水溝清掃は、毎週日曜日に行います。汚れと匂いが酷いため2ヶ月に1回業者に汲み取りをお願いしていきます。
③ ゴキブリやネズミなどの害虫駆除は、業者にお願いしていきます。
④ 生ゴミ入れのポリバケツは定期的に清掃していきます。
⑤ ペットボトル・アルミ缶・ビン・燃えないごみは、分別して捨てるように協力してもらいます。
ペットボトルのキャップ・牛乳パック・使用済み乾電池は引き続き回収していきます。

Ⅱ. 調理業務

2018年度方針

①食中毒予防の徹底
②給食会議の実施
③冷蔵庫点検の実施
④ウエルカムメニューの実施
⑤アラカルトメニューの実施
⑥手作りおやつの実施

総括

① 食中毒及び感染症予防の為、手洗い、器具類の洗浄除菌、定期的に大掃除をし衛生管理

を徹底、調理時間の厳守を行ってきました。また毎月細菌検査を提出し、研修にも参加しました。

② 給食会議は奇数月に行いました。議題によっては前もって棟で話し合いをしてもらい給食会議へ望んでもらうようにしました。会議を行っていく中で何度も同じ内容が出てきました。検便が未提出で期限が守られていないことや、食缶の返却時間、ゴミの出し方、朝食作りの卵が多く戻ってくる、などが何度も会議に出てきました。何度も会議に出てきていると言う事は、改善がされていない事になります。給食会議についてきちんと全員で共有し改善に協力してもらいたいです。また、朝食のパンが足りないとの要望があったため、パンの量を増やしました。なるべく要望に応えられるように調理でも話し合ってきました。

③ 冷蔵庫点検を定期的に行いました。ユニットによっては、2～3日前に出された料理や果物がお皿に残っていたり、お茶やケチャップなどの染みが付いている事が多少ありましたが、比較的に冷蔵庫の中は清潔に保たれていました。こまめに冷蔵庫の中を拭いたり、洗ったりして清潔にしていくように伝えてきました。

④ウエルカムメニューを実施しました。

・4月2日　すいれん　女児

親子カレー　豆腐サラダ　トッピング（3 種類）　手作りゼリー

・4月12日　ジャスミン　男児

かぶとネギのスープ　オムライス　焼きとり　コールスローサラダ　キウイ

・5月10日　すいれん　男児　ちゅーりっぷ　女児

本人から希望メニューが出ず、実施出来ませんでした。

・9月27日　みつば　女児

味噌汁　鶏の唐揚げ　油揚げの春巻き焼き　豆腐とにらの明太和え　手作りゼリー

今年度は、急に入所日を伝えられ、慌てて献立を直す事がありました。また、入所児童には必ず実施できるように、ユニット職員と話し合いをして行きたいと思います。

⑤アラカルトメニューを実施しました。

月に 2 回、3ユニットに別かれて実施しました。ユニットにより食べる量が違ったため作る量を調節しました。今年度は食事を抜く人数を知らされないまま作ってしまった後に、居ない事を言われる事がとても多かったです。また、中高生が部活やアルバイトがあり全員揃って食べる事が少なくなってきました。食べる人数で作る量を調節しているので、必ず食事を抜く人数を伝えて欲しいです。今年度人気だったメニューは、洋食アラカルトとパンアラカルトでした。

4 月　縁日アラカルト

お好み焼き・焼きうどん・たこ焼き

6月　パンアラカルト

ハンバーガー・メンチカツパン・ポテトサンドウィッチ

10 月　麺アラカルト

ジャージャー麺・焼きそば・カルボナーラ

11月　お寿司アラカルト

ネギトロ巻き・韓国風海苔巻き・サラダ巻き

1月　洋食アラカルト

グラタン・ナポリタン・オムライス

3月　井アラカルト（実施予定）

親子丼・かき揚げ丼・カツ丼

④　手作りおやつを実施しました

月に2回実施しました。(8・2月は除く)子ども達が好きなおやつや、季節に合った食材を使用し、イベントに合った物を考慮しました。かぼちゃドーナッツや揚げパン、チョコレートケーキ(ロールケーキ)などが人気でした。つくしホームにも数回届け、とても喜んで貰えました。

4月　バナナドーナッツ・バタークッキー

5月　揚げパン(きなこ)・チョコレートシフォンケーキ

6月　豆乳プリンに黒蜜かけ・カレーひと口パイ

7月　小豆と抹茶のパウンドケーキ・とうもろこし

8月　プリン

9月　スイートポテト・人参シフォンケーキ

10 月　かぼちゃドーナッツ・マフィン

11 月　さつま芋のパウンドケーキ・豆腐ドーナッツ

12月　チーズスフレ・アイスボックスクッキー

1月　蒸しパン・チョコレートケーキ(ロールケーキ)

2月　ティラミス

3月　キャラメルシフォンケーキ・揚げ餅（実施予定）

2019年度方針

① 食中毒及び感染症予防の為、手洗い、器具類の消毒や調理時間を徹底していきます。また細菌検査も責務として毎月提出していきます。

② 奇数月に施設長と棟職員、調理職員で給食会議を実施します。意見や要望をお互いに話し合っていきます。

③ 定期的に冷蔵庫点検を実施します。出張調理の際にも見たいと思います。

④ ウエルカムメニューを実施します。

※ メニューが分かり次第、調理へ伝えて下さい。主菜だけでなくデザートなども沢山聞いてきて下さい。

⑤ アラカルトメニューを実施します。

4 月　パンアラカルト

ハンバーガー・ピザトースト・焼きそばパン

6月　多国籍アラカルト

タコライス・ベトナムフォー・五目あんかけ焼きそば

10 月　洋食アラカルト

オムライス・ミートソース・グラタン

11月　麺アラカルト

ジャージャー麺・カレーうどん・かき揚げそば

1月　お寿司アラカルト

ネギトロ巻・サラダ巻き・えびフライ巻き

3月　肉肉アラカルト
　　鶏の唐揚げ丼・ロコモコ丼・他人丼
⑥ 手作りおやつを実施します。つくしホームにも定期的に届けたいと思います。
4月　ベイクドチーズケーキ・揚げパン
5月　コーンマフィン・カステラ
6月　ごま団子・ベビースター
7月　豆腐レアチーズケーキ・焼きとうもろこし
8月　ぷりん・レモンチーズケーキ
9月　スイートポテト・ほうじ茶ムース
10 月　パウンドケーキ・かぼちゃドーナッツ
11 月　野菜のケークサクレ・シフォンケーキ
12月　ガトーショコラ・クッキー
1月　大福・ロールケーキ
2月　ざくざくチョコバー・マフィン
3月　クレープ・揚げ餅

Ⅲ. 栄養業務

2018年度方針
① アレルギーを持つ子への対応
② 調理会議
③ 選択メニューの実施
④ つくしへの栄養指導
⑤ 検食簿の活用
⑥ 自活、自立訓練の子の対応
⑦ 欠食児童への対応
⑧ 嗜好調査の実施
⑨ 発注の仕方

総括

① 調理上個別の対応が必要な時(ショートステイ児も含め)は、除去食や他の食材を出すなどの取り組みをしました。職員にも同様に対応してきました。
② 定期的に調理会議を開きました。調理業務や検食簿の確認などを行ってきました。また、何気ない会話で、職員や子どもから言われた意見は調理室用ノートを利用し書き留めておくようにしました。買出しの時はノートを利用し、食べたいドレッシングやふりかけなどを購入してきました。
③ 定期的に選択メニューを実施しました。
④ 定期的につくしへ訪問し献立作成や調理業務のアドバイスをしてきました。また、衛生チェックリストも行ってきました。今年度はつくし職員の、調理実習を行いました。前もって自分で学

びたい料理を決めてもらい、つくし職員の日にちに合わせて実施しました。つくしならではの味付けのポイントや時短になる方法などを伝えてきました。

⑤ 今年度も3棟で 1 冊、ラウンジに1冊の合計2冊で実施しました。給食会議の時に何度も伝えてきましたが記入漏れがとても目立ち困りました。書かれた内容は改善に繋げるためにも確実に記入をお願いします。ラウンジで食べる（昼夕）職員も記入をお願いします。

⑥ 今年度も中高生の調理クラブを2回実施しました。1回目も2回目も参加希望者全員一斉に行いました。1回目はイカを使った料理にしました。1人1匹のイカを用意し、さばく所から行いました。生のイカを目の前にし、ビックリしながらも楽しそうな雰囲気でした。イカ飯にする子、イカフライにする子、イカのバターしょうが焼きにする子、自分で思い思いの料理を作りました。2回目は、チャーハンとハンバーグを作りました。男児グループがチャーハンを作り女児グループがハンバーグを作りました。相談しながら塩や醤油を加えて味付けをしたり、炒めやすいようにネギやチャーシューをみじん切りにしてみたり工夫しながら調理していました。皆な調理実習を楽しみにしていて毎年参加している子達からは、自分から意見を言うなどして、成長を感じる事が出来ました。出来上がった料理はラウンジで仲良く食べ学校の話やユニットの話をし、夜の時間での実施でしたがとても充実した時間を送れたと思いました。

⑦ 朝食や夕食の欠食をなくす事は出来ませんでしたが、夏休みや土日、祝日の朝食や昼食の時間にユニットからの依頼があった時は一緒に食事を摂りなるべく残さないで食べれるように声かけをしてきました。

⑧ 今年度も本園、分園とも嗜好調査を実施しました。嗜好調査の結果は献立作りにはとても参考になります。本園も分園もお肉料理が人気です。また、本園ではきのこが嫌いな子がとても多かったです。また、今年も棟職員にも嗜好調査を実施しました。

職員のアンケート結果です。

◎一番好きな食べ物は何ですか？

1位 から揚げ 2位 肉 3位 寿司

◎嫌いな食べ物はなんですか？

1位 特になし 2位 ナス 3位 きのこ

◎朝食の時に子ども達で気になる事はありますか？

1位 朝食を食べない 2位 特になし 3位 煮物を食べない

◎担当ユニットで偏食や欠食で気になる子は誰ですか？

※記入してくれた職員はほぼ同じ子を挙げていました

◎子ども達との食事中に気をつける事、工夫している事、努力している事はありますか？

1位 楽しい雰囲気作り 2位 苦手・嫌いな食べ物を減らす・一口は食べるように声かけをする

3位 マナーや姿勢など注意する

◎土日の朝食作りの感想を教えて下さい

・大変だが楽しい

・子どもの要望に合わせて作れるので良い

・子ども達に良い

・部活や送迎がかぶると大変

・味付けが苦手

・煮物や魚は大変

◎土日の朝食作りで作ってみたいものはありますか？
1位 特になし 2位チャーハン・ホットケーキ・ベーコンソテー 3位 ホットドッグ
◎平日の昼食に食べたいメニューはありますか？
1位 ラーメン 2位 パスタ・とんかつ 3位 魚料理
◎魚料理で何が一番好きですか？
1位 刺身・寿司 2位 サバの味噌煮・煮魚・ほっけ 3位 さんまの塩焼き・銀だらの西京焼き
◎愛児園の料理で何が一番好きですか？
1位 カレー 2位 から揚げ 3位 キャベチー焼き・ベーコンソテー
◎調理室に要望があれば教えて下さい
・いつも美味しいご飯をありがとうございます
・食事抜きを伝え忘れがあり申し訳ありません
・お肉をいっぱい食べたいです
・から揚げの量を多くして欲しいです
・土曜日の遅く来ている分出張調理をしてみてはどうですか
・朝、忙しい時に朝食を運んでもらいたい
・休日の昼食など手が離せない時間、食缶回収等してもらえるとありがたい
・クリスマス会に来て下さい
・パンのジャムやドレッシングを増やして欲しいです
◎つくしの回答◎
・第二弾の調理実習をお願いします。揚げ物が良いです
・献立の組み方のコツを教えて下さい
・いつも気にかけて下さりありがとうございます。調理実習楽しみです
ご協力ありがとうございました。献立作成や今後の調理業務に役立たせて頂きます。
⑨各ユニットともお弁当の有無や急な食事のキャンセルが目立ちとても困りました。また、前日や当日にユニット単位でキャンセルをしてくる事がありました。当日を含まず3日前までに連絡をして下さい。と、決めてありますので協力よろしくお願いします。

2019年度方針

① 引き続き、アレルギー症状のある子や特別配慮の必要な子については、対応をしていきます。医療機関等連携調整員とも話し合っていきたいと思います。また、アレルギー検査が必要な子にはその子に合ったメニューを提供する為にも早急に通院をお願いします。職員でアレルギーが出た人は報告して下さい。

② 定期的に調理会議を開き、意見交換や情報交換をしていきます。

③ 選択メニューを実施します。

④ つくしホームの献立を作成する(担当月)職員と話し合いをしていきます。定期的につくしホームの勤務に合わせて訪問し子どもたちや職員と一緒に作れる食事作りを行いたいと思います。また、職員の調理実習も希望があれば実施します。

⑤ 今年度も3棟で一冊、ラウンジに1冊の合計2冊で有効活用できるようにまわしていきます。月初めに必ず確認しています。記入漏れがないようにお願いします。

⑥ 自活・自立訓練の子には、希望者を募り調理クラブを行います。

⑦ 欠食児童をなくす為に、声かけをし、ユニットに入っていきたいと思います

⑧ 嗜好調査を実施し、子ども達に希望メニューを聞きたいと思います。また、棟職員も実施したいと思います。

⑨ 発注の仕方

1日～15日までの分・・・前月の24日～25日に渡してあります。

16日～末日までの分・・・8日～10 日に渡してあります。

※ 食事を抜く場合、外食をする場合も同様に早目にお知らせください。
また、伝えられた日は、調理室のホワイトボードやカレンダーに記入します。
食事を抜く場合は、当日を含まず3日前までにお知らせください。調理室入り口の扉にも貼ってあります。

※ 学校や幼稚園等で配られたお便りも早めにお知らせください。

※ 長期休暇期間・連休などの外泊の把握は早めにお願いします。

※ 休日前の急な変更は、準備した数と差が出てしまうと材料を確保する為に余裕が必要です。

Ⅳ. 子どもとの関わり

2018年度方針

① ユニットに入っての夕飯作り

② 調理クラブ

③ 野菜作り

④ つくしでの食事作り補助

⑤ 味噌作り

⑥ 梅ジュース作り

総括

① ユニットに入っての夕飯作り

ユニット調理を行う時は献立に記入してきました。すると、子どもによっては「今日はだれが来るの？」「うちのユニットに来てね」と、楽しみにしています。一緒に野菜を切ったり、簡単な料理は自分で作ってくれる子も出てくるようになりました。

餃子を作った時は、めずらしく高校生の女の子が一緒に包んでくれました。部活の話や好きな音楽の話をしながら、初めは、不格好でしたが慣れてくると上手に包む事ができました。目の前で調理をしていると自然と子ども達はキッチンの周りに寄ってきます。また、当日勤務の職員も声をかけてくれたり、手伝ってくれたりする事も多少増えたように感じました。中高生が多い為、作る量が年々多くなってきました。1つのキッチンでは2ユニット分の量を作るのに限界を感じる事があります。今回の様に高校生だけでなく職員もどんどん参加して協力して貰えるように声かけをしていきたいと思います。今年度は3回のみの実施になってしまいましたが来年度は1回でも多く実施出来るようにしていきたいと思います。

4月29日　味噌汁　親子丼　温野菜　マカロニサラダ　グレープフルーツ

6月24日　味噌汁　太巻き寿司　スティック野菜　手羽先の照り焼き

1月26日　豚骨ラーメン　手作り餃子　小松菜のおろし和え　キウイ

② 調理クラブ

今年度は、なのはな２名、すいれん１名、ひまわり１名、ジャスミン１名の合計5名で行いました。全員、開始時間になると、きちんと調理室へ来て調理を始める準備ができていました。また事前に何を作るのかをユニットに貼りに行くと「早く作りたい」「沢山食べたい」などと、楽しみにしている様子でした。調理中はケンカをすることもなく仲良く調理する事が出来ていました。やりたい作業があると独り占めしたそうにしている子もいましたが、子ども達で順番を決め交換しながら作業する姿がありました。調理をしながら、他の人の事も考え作業に取り組めていたのでとても良いなと感じました。また、意欲的に取り組んでいたので、私たちも子ども達との調理クラブにやりがいを感じながら取り組めました。しかし、面会やユニット行事が突発的に入ってくる為、全員での参加はあまり出来ませんでした。クラブ活動の日時や時間は、子どもたちが休みで、ユニット行事がなく、調理業務に支障が出ない時間帯等を考えて実施しているので、今のままの時間で活動するのが望ましいと思いました。

4 月　話し合い

5 月　クレープ

6 月　餃子の皮でアレンジレシピ

7 月　パフェ

8月　パンケーキ

9月　チョコレートクッキー

10 月　手作りピザ

11 月　フォンダンショコラ

12 月　クリスマスケーキ

1 月　いちご大福

2 月　手作りコロッケ（実施予定）

3 月　子ども達と話し合いながらメニューを決めます(実施予定)

③　野菜作り

今年度はジャスミン2名、すいれん1名の参加でした。毎週日曜日に実施し野菜の成長記録をつけてきました。3名とも仲良く実施し、記録も丁寧に書いています。夏野菜を始める前に、用務員に耕運機で畑を耕して畝を作ってもらいました。夏野菜はトマト、ミニトマト、とうもろこしを育てました。少しでも大きく美味しい野菜が出来るようにとネットを張り害虫対策や夏の暑い時期に草取りはとても大変でしたが、そのかいがあり、昨年に増して豊作でした。食べきれない量のトマトが出来てしまい、たくさんの職員に食べてもらったり、つくしホームへおすそ分けしたり、また、冷凍をし、トマトソースなどのメニューに使用したりしました。

冬野菜は大根を作りました。昨年度の失敗を生かし、用務員からもアドバイスをもらいました。今までに見た事がないくらいビックリするりっぱな大根が沢山出来ました。子ども達と大喜びし大根を抜く楽しさを味わう事ができました。味噌汁にしたり、ユニットに配ったりし、しばらくは子ども達と作った大根を日常の食事作りに使用していました。

④　つくしでの食事作り補助

今年度もつくしホームと勤務調整をしながら出来る範囲で調理補助、手作りおやつ、留守番などを行なってきました。また、クリスマス会も調理補助へ行きました。

「今日は何を作ってくれるの？」「美味しそうなど」と子ども達は話かけてくれます。毎年、続けているため、学校やバイトの事などもたくさん話をしてくれるようになりました。コロッケや揚げ物料理をした時、「揚げ物が苦手な子でも美味しいと言って食べてくれました」と職員から話をされた時はとてもやりがいを感じました。また、子ども達や職員から必ず、感想や感謝の気持ちを伝えてくれるのでとても嬉しくなります。定期的に実施する予定でしたが、勤務体制が難しく不定期になってしまいました。１２月より５名体制になったので来年度はより多く行けるように勤務を立てたいと思います。

⑤味噌作り

昔から、「寒仕込み」と言って雑菌が繁殖しにくい1月～2月に仕込むのが一般的だそうです。大寒（冷気が極まって最も寒さがつのる時期）に仕込み、夏の土用の丑（7月下旬）を越え気温が下がってくると味噌に味が乗ってくると言われています。

愛児園味噌も9年目となりました。市販の味噌の味と手作り味噌の味は全く違います。子ども達にも味噌作りが身近になり手作りならではの味を楽しむことが出来るようになりました。今年度は2月下旬に予定しています。

⑥梅ジュース作り

今年度も夏の恒例となった梅ジュースを作りました。子ども達からとても人気があるため量を増やし 50 キロの梅を漬けました。量が多いため準備が大変でしたが、他の職員さんにも手伝ってもらい助かりました。出来上がった梅ジュースは１人１日1杯と決め飲んでもらいましたが、あっという間になくなってしまいました。つくしホームへも数回配りました。手作りの梅ジュースは他ではなかなか飲めない思うので、子ども達の記憶に残る味、調理室の味として今後も梅ジュースを作っていきたいと思います。

2019年度方針

① ユニットに入っての夕飯作り

子ども達と一緒に作れるメニューや子ども達だけでも作れるメニューを取り入れていきたいと思います。各、ユニットには、順番で回っていきたいと思います。また、職員にも協力をしてもらいたいと思います。

② 調理クラブ

小学4～6年生を対象に行います。子ども達の要望や簡単なメニューを取り入れた内容にしていきたいと思います。実施する日や時間は毎月、ユニットと調整していきたいと思います。

中高生を対象に調理クラブを実施します。希望者を募り、メニューを考えたいと思います。

③ 野菜作り

小学1～3年生を対象に畑で出来る野菜を作りたいと思います。日曜日の13時～を利用し記録をつけていきたいと思います。

④ つくしでの食事作り補助

つくし職員と話し合いをし、定期的につくしホームに行きたいと思います。子どもたちと交流し食事作りの補助などを行いたいと思います。

⑤味噌作り

味噌作りを継続して行って行きたいと思います。『愛児園味噌』は、7月以降に味わう事が出来ます。

⑥梅ジュース

梅ジュース作りを行います。配膳室にビンを置き梅ジュースが出来上がるまでの過程を見られるようにしていきたいと思います。

Ⅴ. 研修・給食研究会報告

今年度は12回の研修に参加しました。勤務を調整し、全員が1回は研修に参加出来るようにしました。研修に参加する事により他施設との情報交換を行い他施設の状況を知る事が出来きます。来年度も全員が参加できるように勤務調整をしたいと思います。

4 月 18 日　給食研究会　29年度活動報告、30 年度の活動予定
5 月16日　給食研究会　業務日誌について、グループワーク
6 月20日　給食研究会　赤十字子どもの家施設見学
7月4日　茨児協児童食育委員会　グループディスカッション
7月17日　県南西8施設合同研究会　道心園施設見学
9月26日　給食研究会　ベトレヘム学園施設見学
10 月16日～17日　社会福祉法人東京都社会福祉協議会　中堅職員研修
10 月17日　給食研究会　新人職員研修について学習会
12月5日　茨児協児童食育委員会　茨城学園施設見学
12月17日　給食研究会　　従事者会との合同学習会
1月16日　給食研究会　　グループワーク

2月1日　茨児協児童食育委員会　栄養業務についての情報交換

Ⅵ. ケースカンファレンスの参加

今年度ケースカンファレンスはありませんでした。

Ⅶ.ノロウイルスの時の食事提供について

まずは、私達が研修に参加した時に各施設からの情報を聞いてくることにしました。特に調理職員、子どもやケアワーカーに感染症者が多く出た場合の食事の対応について決まりがある施設が少ない事が分かりました。本園の感染症係りと相談するまでは出来ませんでしたが、今後、多数の感染症者が出た場合は感染症係りと医療機関等連携調整員と相談していきたいと思います。

Ⅶ.朝食作り

今年度のGW明けより土日の朝食はユニットで作ってもらうことになりました。それに至るまで、何度か話し合いをし、色々な意見を出してもらいました。2日間続けて食事作りを行っていますが、定着してきたように感じます。今でも給食会議や日々の会話で意見や感想を出してくれますが、子ども達の目の前で朝の始まりの朝食を作る事はとても良い事ではないでしょうか。朝の欠食児童が多い為、少しでも欠食をなくす支援の一つだと思います。部活の送迎やトラブル対応などで大変だとの意見も聞きますが、一方では「子ども達が手伝ってくれる」「食育にもよい」などの肯定的な意見も聞かれました。また、家庭での生活を少しでも感じる時間になると思います。今後も、意見をたくさん出してもらい協力できる事は支えあって取り組みを継続していきたいと思います。

東京都専門機能強化型児童養護施設制度

2018 年度総括、および 2019 年度方針

治療指導担当職員　高井　志保里
心理療法担当職員　立川　弘司

１．実施要綱（平成 21 年 3 月 31 日付 20 福保子育第 1956 号）の概要

１－１　目的

本制度は、専門機能強化型児童養護施設の運営等について必要な基準等を定め、治療的・専門的ケアが必要な児童への適切な支援を行い、もって児童の社会的自立の促進を図ることを目的とする。

１－２　専門機能強化型施設の運営

専門機能強化型施設は、通常の児童養護施設の職員配置に加え、治療的・専門的ケアが必要な児童に対する手厚い支援ができる体制等を整備し、以下の取組を行う。

１）小規模な生活単位等家庭的なケア形態での運営を推進し、入所児童が抱える課題解決や社会的自立に向けた支援を行う。
２）精神科医師等との連携によりケア職員の個別的ケア能力等の向上を図る。
３）児童相談所と連携した治療的・専門的ケアを行い児童の自立を促進する。
４）個別的ケア、治療的・専門的ケアの向上に向け、他施設等との情報交換、交流会、合同研修等を行う。
５）外部の機関や専門家等を活用し、施設運営の向上の取り組みを行う。

１－３　専門機能強化型施設の指定基準

児童養護施設の一般的な基準を超える機能（職員配置を含む）を有し、以下の取組等が行われていること。

１）非常勤精神科医師及び治療指導担当職員が配置されていること。
２）第三者評価、または利用者調査を毎年度受審していること、および苦情解決の仕組みを構築していること。
３）「東京都養護児童グループホーム制度実施要綱」により指定を受けたグループホームの実施、または「児童養護施設における小規模グループケア実施要綱」に基づく小規模グループケアを実施していること。
４）施設独自の自活訓練事業、自立支援事業等、地域支援事業（児童ショートステイ、トワイライトステイ等）、および先駆的な事業等のうちいずれかの事業を実施（受託）していること。
５）第三者評価機関による評価事項、指導監査による指摘事項などを踏まえ、施設が自ら運営上の目標・課題を設定し、外部の機関や専門家等を活用した「施設運営向上事業」を実施すること。

１－４　専門職員の業務内容等

専門機能強化型施設に配置された非常勤精神科医師、および治療指導担当職員は以下の業務等を行うものとする。

1）職員への事例研修、ケースカンファレンス 2）子どもへの面接、心理ケア 3）児童指導員等職員へのケア技術等に関する助言・指導 4）生活場面での児童の状況観察及び児童指導員等職員へのコンサルテーション 5）心理治療プログラム等の検討・実施 6）施設内の治療的環境づくり

2．目的と指定基準に関する実施報告

2－1　専門機能強化型児童養護施設制度の目的

制度の実施要綱にあるように、①「治療的・専門的ケアが必要な児童への適切な支援」を行なうこと、そして②「児童の社会的自立の促進を図ること」が目的となっている。対応が困難な子どもへの支援はもちろんであるが、より専門的・治療的支援後の「（社会的自立や家庭復帰後の適応を含む）自立」に重点が置かれている。つまり子どもへより専門的・治療的な支援を行ない、それが将来の（社会的）自立促進につながるような、人員配置と支援体制の強化、職員の資質向上が求められていると言える。

2－2　指定基準

専門機能強化事業の指定を受けるためには、実施要綱にある基準をクリアしなければならない。施設機能の多岐にわたることがその基準となっており、施設全体での取組みが必要となる。

1）非常勤精神科医師、および治療指導担当職員の取組み

非常勤医師は「月 4 日以上（少なくとも月 2 日以上)」、1 ヶ月あたり 12.8 時間以上の勤務が確保されていなければならない。治療指導担当職員は、週に概ね 5 日以上の配置が必要となっている。

①非常勤医師の配置

Dr.名	職務分担と勤務スケジュール
森田Dr.	概ね月２回勤務し、保護者支援や事例検討を主に担当した。
鈴木Dr.	概ね月２回勤務し、事例検討や生活場面での子どもの行動観察を担当した。

ア）森田ドクター

森田ドクターには、①新規入所ケース、②入所児のケース、③家庭復帰を見据えたケースについて、子ども支援のみならず保護者支援についても助言等をいただいた。子どもの早期の家庭復帰を検討するためには、保護者側の課題に対してもアプローチする必要があり、それらの課題の精査についても行った。

森田先生の助言等は、児童相談所や関係機関とのケース協議時も活用し、ケース全体の方針策定に反映させた。子ども個人の課題もあり、保護者側の課題もあり、さらに親子が交流する中で生起する課題もある。それらに対して支援を実践することで、より安定した親子交流や早期の家庭復帰につながると考える。

助言いただいた内容の確実な実践にまでは至っていないが、より安定した子ども支援、また親子交流が確保できるように、今後も子どもの状況や保護者の状況を把握してもらい、適切な支援が確保できるように取組みたいと考える。また必要に応じ、関係機関との協議への参加や保護者支援についても具体化をはかっていきたい。

「新しい社会的養育ビジョン」が示され、筑波愛児園の家族支援も新たな枠組みを検討する必要がある。森田ドクターの保護者支援も含めた包括的な家族支援を確立できるよう、今後も関係職員との協議を続けていきたいと考える。

また、今年度は、精神科通院・心療内科に通院するケースが増えた。通院先は子どもの状況をみて選定した。通院・服薬に関してはいろいろな考え方があるかとは思うが、通院。服薬が生活改善のきっかけになるのであれば選択肢として検討すべきだと考えている。ただし、それらの取組みを通じて、子どもと自身の状況や課題などを明確化し、より良い生活のために個別的な支援を具体化する必要があると考える。

この点についても森田ドクターは、通院・服薬は第一選択肢ではなく、いろいろな取組みの中の選択肢として考えてもらいたいと助言いただいている。

イ）鈴木ドクター

鈴木ドクターには生活場面や学校場面の子どもたちの様子を把握してもらい、適応を促す支援や環境調整などについて助言いただいた。学校場面の見学は、新たな学校となったことから、学校側との調整が必要となっている。今年度の実施はないが、必要に応じ、服薬治療の必要性やその効果などを保護者へ説明する取組みも具体化したいと考える。

また学校担任等に依頼し、年2回（7月・2月）、ADHD評価（ADHD Rating Scale－ⅣJ）を継続して実施している。学校担任等とケアワーカーのADHD評価をもとに、顕在化している課題（多動・衝動性）や潜在的な課題（不注意）についてもアドバイスをいただいた。ADHD評価の結果、また生活の様子から医療機関への受診・服薬治療につながるケースもある。鈴木ドクターが院長を務める医療機関に受診するケースが多く、子どもの様子を医療面からもチェックできている。

②治療指導担当職員の配置

治療指導担当職員は、実施要綱に示されている内容からも、ケアワーカーと心理職の中間に位置する。生活場面にも積極的に参与し、生活の中でも子どもの課題や問題行動等の改善に向けたアプローチを展開することが求められる。当然ではあるがケアワーカーとの協議・連携は必須であり、心理職としての観点をもち、生活場面で観察される子どもの様子などからアセスメント・支援につなげることが必要となる。

筑波愛児園では常勤職１名を配置しているが､前年度､体調不良に伴う長期休業となり、この事業の継続が難しい事態となった。安定した事業継続をはかるため、資格要件を満たす職員の複数雇用をのぞみたいと考える。

≪治療指導担当職員の基本業務の概要≫

曜	取組み概要
月	生活場面面接、子どもとの面談等
火	巡回コンサルテーション等
水	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等
木	棟・ユニット別の会議へ参加、事例検討、アドバイス等
金	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等

土	生活場面面接、心理検査等

２）第三者評価の受審等

筑波愛児園では毎年度実施している。

３）グループホーム等の実施

①地域小規模型グループホーム（地域小規模児童養護施設）…つくしホーム

②小規模グループケア…すいれんユニット、なのはなユニット、みつばユニット、ちゅーりっぷユニット、ジャスミンユニット、ひまわりユニット

今年度に実施要綱が改定され、全てのユニットが「小規模グループケア」として承認された。これに伴い新たな職員雇用が可能となる見込みである。この事業の目的に合致するよう、施設のより治療的・専門的ケアが確保され、子ども支援に反映できるような職員雇用・配置を期待したいと考える。

４）施設独自の自活訓練事業、自立支援事業等、地域支援事業（児童ショートステイ、トワイライトステイ等）等の結果

①自立支援事業等

ア）職場体験の実施

自立支援コーディネーターと個別面談を実施し、進路希望・職場体験希望などを把握した。外部支援団体 Living In Peace（以下 LIP）と行ってきた職業インターンについては、LIP の法人格変更に伴い一時休止となっている。

昨年度から、シナジーワールドジャパンさんでの職業体験（借入れた住居からの職場体験）を実施している。より実際の自立に近いかたちの職場体験を実施することができ、その中から子どもが感じること・体験できること、また職員との振返りが実施できたと考える。より多くの機会をつくることも大切だとは思うが、より実際場面に近いかたちで質の高い体験ができるように取組んだ。

シナジーさんの職場体験では、会社近くに住居を確保してもらい、そこから職場体験先に通勤すること、職場体験の日当から自身の食費などを支払うことなどを体験させてもらった。次年度は、複数名の体験の実施、またシナジーさん以外の企業での職場体験など、その内容を充実できるようにさらなる調整を進めていくこととなっている。

また各部署に、個別に自立に関するファイルを用意し、職業レディネステストの結果や奨学金申請に関する書類、自立後の資金シミュレーションなどの書類を綴じた。生活棟と自立に関しての話合いを行う上で、自立に関する情報や子どもの課題などを共有し、より効果的な協議を実施することができた。

≪平成 30 年度職場体験実施状況≫

氏名	実施場所	実施月
Ｔ・Ａ（高１）	シナジーワールドジャパン	H30.8

イ）進路支援

LIP との進路支援の活動は一時休止となっている。2019 年度から再スタートをきることとなっており、中高生を対象に 1 年間のプログラムを予定している。都内の児童養護施設の子どもも参加対象となっており、詳細はさらに詰めていくことになってい

る。

You. lab（ゆうらぼ）代表の五十嵐さんの協力を得て、「あかるいみらい作戦会議」を９月から実施した。このプログラムの目的は、①自らの生い立ちや個性を肯定的に受容できるようにし、自らの将来志向の変化に合わせて、主体的に進路選択をするための基本的な方法を理解する、②退所後の職業、生活設計の具体的なイメージを描けるように、検査などを用いて、退所後の準備のために行動する意欲を養うこととしている。活動実績については以下の表の通りである。

参加者には①年間を通じて活動に参加すること、②この活動を「当たり前と思わず、自分の将来のために活用して欲しい」ことを明確に伝え、活動を実践した。LIP のおしごトリップに参加していた子どもは、このようなプログラム参加に慣れているためスムーズであり、また初めて参加した子どもも積極的に取組む姿勢がみられた。

≪平成 30 年度　あかるいみらい作戦会議実施状況≫

実施日	内容	参加人数
9／23	自己紹介 あかるいみらい作戦会議の目的等の説明	16
10／20 10／28	自身の「あかるいみらい」への心構え、キャンバス、実行プランをつくるための考え方	16
11／18	自分の中の「生きづらさ」を知る	8
12／1 12／2	「業界・仕事」選びの考え方 「世の中を知る」	14
1／12 1／14	「世の中を知る」②	13
2／2 2／11	前回までの確認 自分の「あかるいみらい」を描いてみる	14
3／10 3／16	「あかるいみらい」実現のポイント	10

ウ）進学支援

筑波大学の学生（外部支援団体）に、週に１回、学習ボランティアを依頼している。さらにテスト前などには個別にテスト対策を行い、また受験生は回数を多く学習ボランティアを活用するなどして、基礎学力の向上に取組んだ。

例年、高校３年生に対しては進路希望を把握し、個々の状況・希望にあわせて学校（専門学校、大学等）見学等を行った。また、高校進学者についても、該当棟と自立支援コーディネーターが連携し、子どもが希望する学校の見学を実施した。

また高校生に対し、卒園後の生活のために必要な金銭のシミュレーションを行い、在籍期間に必要な貯蓄額、奨学金等で得られる金額、進学した際の入学金や授業料などを数字で明示して説明を行った。高校１年時から協議を積み重ねることで、卒園後の進路や生活を具体的にイメージし、安定した生活や進路選択につながるように支援した。

②自活訓練事業

今年度の卒園予定児は４名で、生活の中で調理体験や卒園後の資金シミュレーションを実施できるように、自立支援コーディネーターと該当棟で調整をはかった。園内の自活訓練の充実と同時に、シナジーさんのような外部団体の協力も得て、施設外でより質の高い自活訓練が実施できるように具体化をはかっていきたいと考える。

また卒園した子どものケースから課題を精査し、施設のリービングケア等を見直し、施設内外の資源の活用だけでなく、日々の生活自体が子どもの自立につながるような取組みを具体化したいと考える。

自活訓練の目的と内容は、契約のことや社会保険について理解すること、緊急時に対処できるようになること、収支を把握した主体的な生活を送ることなど多岐にわたるものである。大きな枠でいえば、自身の心身の健康を守るために必要なこと、適切な社会生活をおくるうえで理解しておくべきこと、他者との協調した生活を送れるようになることとなる。自活訓練プログラムをさらに精査し、該当棟が取組みやすいものとなるように、また子ども達によってより意味があるものとなるように具体化をはかりたいと考える。

③地域支援事業

ア）ショートステイ、地域の子育て支援の実施

前年度に引き続き、つくば市と龍ヶ崎市とショートステイ事業の委託契約を締結した。今年度、龍ヶ崎市から問合せの連絡はあったがショートステイの依頼はなかった。

今年度は地域支援担当職員と 2 棟のフリー職員で、依頼に応じて勤務調整を行ったが、受入れ態勢の調整がつかず、依頼を断ることが多かった。地域の子育て支援に貢献するためには、ショートステイの依頼に対し、柔軟に対応できることが必要となる。筑波愛児園の置かれている状況により、生活棟の中に依頼があった子どもを預けることはできない。そのため依頼に応じて勤務調整をはかることとなるのだが、次年度はショートステイに対応できる職員が増えることもあり、また市町村ともさらなる連携を行い、地域の子育て支援に貢献したいと考える。

今年度の依頼・利用状況について、依頼は 8 件あり、受入れは 1 件であった。

≪ショートステイ実績≫

	件数	年齢・性別	人数	利用理由	受入可否／理由
5 月	1 件	7 歳男児 3 歳男児	2 名	母親の仕事 祖母の体調不良	否（体制調整不調）
6 月	1 件	2 歳男児	1 名	父親の入院	否（体制調整不良）
7 月	1 件	3 歳女児	1 名	母親の入院	否（子どもが一時保護となった）
8 月	1 件	11 歳男児 10 歳男児 6 歳男児 3 歳男児	4 名	末弟の入院	否（体制調整不良）
11 月	1 件	7 歳女児	1 名	母親の仕事	否（体制調整不良）
1 月	1 件	8 歳男児 6 歳男児	2 名	母親の入院	否（体制調整不良）
2 月	1 件	12 歳女児	1 名	母親の病気	否（体制調整不良）

3月	1件	8歳女児	1名	母親の仕事	可
合計	8件				

イ）学校とのケース検討

定期的なケース検討の実施はないが、必要に応じた開催を行った。特別支援学校在籍の男児のケース検討・関係者会議、高等学校女児のケース検討を行った。

また、小・中学校側と、定期的に連絡協議会を開催し、子どもの施設での様子や学校での様子などを情報交換し、より良い支援について検討を行った。

非常勤小児科医にも学校・授業の様子は報告し、また通院の際には学校担任からのコメントも加えた情報交換ノートを活用した。課題だけでなく、良くできている点なども評価し、子どものアセスメントや支援内容の具体化に反映させた。

ウ）学習会の開催

ケースカンファレンスの開催がなかったため、近隣の小・中学校に案内することはなかった。

エ）研修会等での発表

研修会等での発表の機会はなかった。

オ）講師派遣

今年度、茨城県児童福祉施設協議会から依頼があり、新任職員研修（6／20）、また被措置児童等の権利擁護・虐待根絶のための研修会（9／7）に、心理職が講師として参加した。

カ）その他

近隣の地域から施設見学の依頼があり、可能な限り受入れを行った。民生委員の見学が多いのだが、児童養護施設の様子や実態を理解してもらう機会とした。

５）施設運営向上事業の結果

①運営の質の向上

ア）課題、及び目的

施設の基本理念を踏まえ、また子どもの安心・安全な生活を確保するため、各生活棟・ユニットで支援を実施しているが、それらの運営については東京都・茨城県の指導監査、また第三者評価や第三者委員等から更なる向上を求められている。また性的事故再発防止の観点から、防止策について点検を行い、さらなる支援を具体化する必要がある。

性的事故の防止、また子どもへのより良い支援、さらにはより良い施設・棟・ユニット運営のために、外部からアドバイザーを招聘し、課題の抽出、さらに運営の質を向上するための対策を実践していく。

イ）方法

前田信一氏（前子ども教育宝仙大学こども教育学部幼児教育学科講師）に各棟・ユニットの様子を観察してもらい、子どもと個別面談を実施した。子どもの話、また生活の様子を観察してもらい、顕在化している課題、また潜在的な課題を抽出し、それらについての改善を進めることで運営向上やより良い子ども支援に結びつけた。

ウ）結果

前田先生には、施設全体の大きな動きや子どもの生活状況や問題行動等について報告

し、その後に子ども面談を実施していただいた(以下の表の通り)。

子どもとの面談では、施設での生活や学校生活、また将来のことなどを確認していただいた。多くの子どもが将来のことを自分なりに理解しており、生活の中で楽しかったことや不満に思うことなども率直に話していた。

先生からの助言や子どもの様子などは職員会議で報告し全体周知を行った。第三者的な立場だからこそ、前田先生からは率直な意見やアドバイスをいただくことができ、それらの助言等を活かし、より良い施設運営を目指したいと考える。

日程	内容
5／19（土）	子どもとの個別面談　；　5名実施
7／20（金）	子どもとの個別面談　；　5名実施
9／13（木）	子どもとの個別面談　；　2名実施
10／11（木）	子どもとの個別面談　；　4名実施
12／5（土）	子どもとの個別面談　；　5名実施
1／17（木）	夕食をユニットで摂る 子どもとの個別面談　；　4名実施
3／14（木）	夕食をユニットで摂る 子どもとの個別面談　；　5名実施

②親子関係修復の促進プログラムの検証

ア）課題、及び目的

入所してくる子どもの多くが虐待ケースとなっている。被害を受けた子ども達は入所中に多職種の支援を得られるが、保護者への支援は乏しいものとなっている。

親子宿泊棟で家族と在籍児童の交流の機会は増えており、FSWがマネジメントしている家庭療法事業と森田ドクターの親支援、またその他の家族療法（PCITやコモンセンス・ペアレンティング、サインズ・オフ・セーフティ）などを参考に、筑波愛児園の親子関係修復の促進をはかるプログラムの具体化をはかりたいと考える。子どもと保護者のより適切な関係を構築できるよう、子どもや保護者のニーズに合わせてアプローチすることが重要であり、森田ドクターを含めた関係者で協議をし、包括的な家族支援の確立、親子関係修復の促進プログラムを具体化したいと考える。

イ）方法

Ⓐ対象ケース

家族交流を開始するケース、または再アセスメントをして新たな支援を行うケースをピックアップし、親子関係修復の促進するプログラムを実施していく。そして、より良い親子関係の修復につながるように定期的に評価を行っていく。

Ⓑスタッフ

筑波大学社会医学系准教授、精神科医である森田先生を中心にプログラムの実施を行う。ケアワーカーや家庭支援専門相談員、治療指導担当職員、心理療法担当職員など関係職員と連携して支援していく。また児童相談所の福祉司とも密に情報交換をしていく。

Ⓒ実施スケジュール

月１回のプログラム実施を予定する。保護者が子どもとの交流に来園した際、または親子宿泊棟の利用時にプログラムを実施していく。

Ⓓより機能的な家族支援の具体化

年間を通して親子関係修復のプログラムの実践と評価を経て、筑波愛児園の包括的なプログラムを具体化する。

ウ）結果

家族交流を開始するケース、または家庭復帰を目指すケースについては、森田先生にケース状況を報告し、より良い親子関係の修復につながるよう、子どもや保護者の課題について精査し、支援に反映した。

助言内容は、ケアワーカーはもちろんであるが、担当福祉司とも共有し、必要な支援についての具体化をはかった。

ケースによって対応方法は様々ではあるが、親子交流後の感想からより良い子ども支援について保護者と協議したり、関係機関と連携して対応にあたった。

親子宿泊棟で家族と在籍児童の交流の機会は増えている（以下の「ファミリールーム利用状況」参照）。「新しい社会的養育ビジョン」にも示されているように、保護者支援の新たな枠組み作りが必要であり､FSWがマネジメントしている家庭療法事業と森田ドクターの親支援、またその他の家族療法（PCITやコモンセンス・ペアレンティング、サインズ・オフ・セーフティ）などを参考に具体化をはかりたいと考える。子どもと保護者のより適切な関係を構築するという目的は同じであるが、方法論が異なり、家庭療法事業は日常的な生活経験を通して関係修復を促すもので、PCITやコモンセンス・ペアレンティングは意図的に保護者の行動変容を促すものである。両者のメリット・デメリットがあり、施設として子どもや保護者のニーズに合わせてアプローチすることが重要であると考える。そのためにも、筑波愛児園の家族支援の在り方について、森田ドクターを含めた関係者でさらなる協議を実施し、包括的な家族支援の確立、親子関係修復の促進プログラムの確立を目指したいと考える。

≪ファミリールーム利用状況≫

	利用家族数			利用延べ日数		
	28年度	29年度	30年度	28年度	29年度	30年度
面会交流	11	15	12	75	76	78
宿泊交流	10	8	6	67	76	66
合計	21	23	18	142	152	144

≪家庭訪問、及び関係者会議実施状況≫

	利用家族数		
	28年度	29年度	30年度
家庭訪問	47	39	38
関係者会議	66	84	63

③施設内事故防止

ア）課題、及び目的

リスクマネジメント（Risk Management）とは、リスクを組織的にマネジメントし、ハザード（発生源・発生原因）や損失などを回避、もしくはそれらの低減をはかるプロセスをいう。リスクマネジメントは、①リスクを把握・特定することから始まり、②そのリスクを「発生頻度（発生確率；possibility）」と「影響度（酷さ；severity）」の観点から評価した後、③リスクの種類に応じて対策を講じる、またはリスクが発生した

際に被害を最小限に抑える一連のプロセスをいう。

筑波愛児園のリスクについて考えると、レベル別のリスクが想定される。大災害時には事業継続することが最優先され、それは子どもと職員の生命・健康を守ること、衣食住を確実なものにし、安全を確保することになる。その他、感染症の拡大防止、過重労務や人間関係による職員の体調不良予防、環境因によるケガなどの予防、「子どもー子ども間」また「子どもー職員間」の暴力防止など、想定する場面ごとに異なるレベルのリスクが存在する。

ここでは、施設内の事故防止の観点から、ヒヤリハットの取組みをさらに具体化させ、施設内の事故防止をはかりたいと考える。

イ)結果

各部署でもヒヤリハットを項目として挙げ毎週確認してもらい、それらを係会議で共有をはかった。やはり日常生活上での大きなトラブルは報告としてはあがってきたのだが、ヒヤリハットが目指すべき些細な事象はあがってこなかった。養育日誌上についても、月に数件あがるのみで、それも大きな出来事の報告だった。昨年度「養育日誌の記録から、ヒヤリハット内容を抽出することの限界」があるのではないかと考え、新たな取組みとして各部署会議で共有することを実施したのだが、より効果が期待できる取組みを引き続き検討したいと考える。

従来のかたちのヒヤリハット報告、部署会議でのヒヤリハット報告、リスクマネジメント会議での報告・検討を行い、この取組みを補強できる工夫を検討することで、筑波愛児園全体のヒヤリハット報告のシステムを強化したいと考える。

各職員	部署会議での報告	係会議
養育日誌の記載 ↓ 共有サーバー上の「ヒヤリハット報告」にヒヤリハット事項の貼り付け ↓ ヒヤリハット状況の赤字編集	部署会議でのヒヤリハット内容の報告 ↓ 係会議で全体集約	報告されたヒヤリハットを集計・分析する ↓ 対策等の検討 ↓ 職員会議等に報告

６）個別的ケア・専門的ケア

年度初めに別途報告する。

７）ケアの向上に向けた、他施設との情報交換・交流等計画

ア）小・中学校とのケース検討

イ）学習会の開催

ウ）研修会での発表

エ）講師派遣

４）施設独自の自活訓練事業、自立支援事業等、地域支援事業（児童ショートステイ、トワイライトステイ等）等の③地域支援事業の結果参照。

オ)県南西八施設合同研究会

「新任職員が他施設を知る機会」ととらえ、また他部署の中堅クラスの職員が引率

するかたちで実施した。

筑波愛児園は東京都の児童部会、茨城県の茨児協の各種委員会や研修に参加するかたちとなっており、多くの参加を求めることはできなかったが、近隣施設の様子や情報交換を行い、職員の資質向上に努めた。

≪平成30年度県南西八施設合同研究会の結果≫

日程	開催施設	テーマ	参加人数
5／15	つくば香風寮 さくらの森乳児院	インケアで大切なこと	2
7／17	道心園西ホーム 道心園東ホーム	事務・調理に関する研修	2
9／18	茨城育成園	施設の専門性	3
11／20	自生園	インターネットと子どものリスク ※情報交換会あり	3
1／15	筑波愛児園	アフターケア	9
2／19	窓愛園	地域貢献	1

カ）東社協の委員会、茨児協への参加

東社協主催の各種委員会に参加し、また茨児協へも参加し、他施設との情報交換や支援内容を共有し、より良い施設運営や子ども支援に役立てた。

3．2019年度事業計画

1．機能強化のための職員配置

1）非常勤医師

森田ドクター・鈴木ドクターに勤務してもらう。ケースカンファレンスを実施できるように適任の講師と調整をはかる。

Dr.名	職務分担と勤務スケジュール
森田Dr.	保護者支援や事例検討を主に担う。 月2回
鈴木Dr.	子ども面談や生活場面での行動観察を主に担う。 月2回

2）治療指導担当職員

以下のスケジュールを基に、業務に取り組む。

曜日	取り組み内容
月	生活場面面接、子どもとの面談等
火	巡回コンサルテーション等
水	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等
木	ユニット・棟別の会議へ参加、事例検討、アドバイス等
金	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等

土	生活場面面接、心理検査等

２．第三者評価受審・利用者調査実施

毎年度、実施予定している。

３．グループホーム等の実施

①地域小規模型グループホーム（地域小規模児童養護施設）…つくしホーム

②小規模グループケア…みつばユニット、ちゅーりっぷユニット
すいれんユニット、なのはなユニット
ジャスミンユニット、ひまわりユニット

４．自活訓練事業、自立支援事業等、地域支援事業及び先駆的な事業等の実施

１）自立支援事業

①職場体験の実施

長期休暇を利用し、施設で依頼した事業所にて宿泊、通所の職場体験を実施する。
外部支援団体の資源を活用し、子どもの自立支援・職場体験に役立てる。

②進路支援

ア）外部支援団体の協力を得てキャリアセッション（おしごトリップ／あかるいみらい作戦会議）を実施し、就職や職業選択についてのガイダンスの機会をもつ。

イ）ハローワーク・就労支援団体と連携し、就労支援にあたる。

ウ）会社説明会や大学等の見学の機会をもち、進路支援に役立てる。

③進学支援

ア）外部支援団体の援助を受け、通信教育の講座や教材を活用して、子ども達の進路選択に役立てる。また資格取得も目指し、子ども達が主体的に社会参加できるように支援する。

イ）学習ボランティアを活用し、基礎学力の向上に取組む。

２）自活訓練事業

家族宿泊棟、外部支援団体の資源も活用し、自立を控えた中・高校生の自活訓練を行う。

３）地域支援事業

①ショートステイ、地域の子育て支援の実施

つくば市・龍ヶ崎市の短期子育て支援事業（ショートステイ）を受託し、また地域の子育て支援に貢献できる取り組みを具体化する。

②学校とのケース検討

非常勤小児科医と連携し、発達障害や対応の難しい事例のケース検討を行う。また学校とより連携し、子どもへのより良い支援について具体化をはかる。

③学習会の開催

ケースカンファレンスを実施し、近隣の学校、施設にも参加を案内する。

④研修会等での発表

施設で取組んでいる支援内容を研修会で発表し、子ども支援のさらなる具体化、また他施設との交流をはかっていく。

⑤講師派遣

外部機関の依頼に応じて講師の派遣を行っていく。

⑥その他

外部機関等の依頼に応じ、施設見学を受託し、児童養護施設等の理解を深めてもらう

機会とする。

５．施設運営向上事業

１）運営の質の向上

施設の基本理念を踏まえ、また子どもの安心・安全な生活を確保するため、各生活ユニットで支援を実施しているが、それらの運営については東京都・茨城県の指導監査、また第三者評価や第三者委員等から更なる向上を求められている。

性的事故の防止、また子どもへのより良い支援、さらにはより良い施設運営・ユニット運営のために、外部からアドバイザーを招聘し、課題の抽出、さらに運営の質を向上するための対策を実施していく。

２）親子関係修復の促進プログラムの検証

入所してくる子どもの多くが虐待ケースとなっている。被害を受けた子ども達は入所中に多職種の支援を得られるが、加害側である保護者への支援は乏しいものとなっている。

森田ドクター、ケアワーカーや家庭支援専門相談員、治療指導担当職員、心理療法担当職員が連携し、包括的な家族支援、親子関係修復の促進プログラムを具体化する。子どもと保護者との愛着関係や交流をより健全なものとし、子どもと保護者双方にとってより良い家族再統合を目指していく。

３）施設内事故防止の取組み

包括的・組織的なヒヤリハット報告を確実に実施するため、従来のヒヤリハット報告を補強する取組みを具体化する。この取組みにより、より効率的な報告の確立とヒヤリハット報告の定量分析、内容分析を継続し、施設内の事故やリスクの予防につなげる。

６．個別的ケア・専門的ケアの実施

①個別の関わり通し、子どもに安全・安心な生活を保障していく。

②個別面談の充実を図る。

③積極的な棟・ユニット会議へ参加し、情報の共有化を図る。

④専門部の一員として専門部内における職務を責任を持って遂行していく。

⑤個別対応業務をより精査し、内容の具体化を図っていく。

⑥個別支援計画を策定し、年度末の総括を経てより良い個別対応業務の確立を目指す。

７．ケアの向上に向けた、他施設との情報交換・交流等計画

１）学校とのケース検討

非常勤小児科医と連携し、発達障害や対応の難しい事例のケース検討を行う。また学校ともより連携し、子どもへのより良い支援について具体化をはかる。

２）学習会の開催

ケースカンファレンスを実施し、近隣の学校、施設にも参加を案内する。

３）研修会等での発表

施設で取組んでいる支援内容を研修会で発表し、子ども支援のさらなる具体化、また他施設との交流をはかっていく。

４）講師派遣

外部機関の依頼に応じて講師の派遣を行っていく。

５)県南西八施設合同研究会

近隣の他施設との情報交換や学習会を通して、より良い子ども支援につなげる。

６）東社協の委員会、茨児協への参加
東社協児童部会、茨児協主催の各種委員会、研修に参加し、他施設との情報交換や支援内容を共有し、より良い施設運営や子ども支援に役立てる。

資料　非常勤医師、及び治療指導担当職員の業務内容

≪非常勤医師の業務について≫

１．職務内容

１）子どもとの面談

①発達状況、身体状況の確認

新規入所児の面談を行い、心身の発達状況、また医学的支援の必要性を確認していく。また、既に入所している子どもに対しても同様に面談を行なっていく。

②定期面談

子どもの中には不定愁訴（頭痛、腹痛、不安感など）や情緒的な不調を訴えることがある。子どもとの定期面談を通して安定を図り、また必要に応じて医療機関への受診へとつなげる。

③生活場面での行動観察

子どもの生活状況を把握し、子どもの状態や問題となる行動のアセスメントを行う。そして子どもへのより良い支援につながるよう、具体的なアドバイスやケアワーカーとの協議を行なう。

２）ケースカンファレンス

①園全体でのケースカンファレンス

子どもへの支援内容の検討、医学的支援の必要性の検討、職員とのコンサルテーションを行なう。

②ホーム会議での事例検討

ホーム会議において事例検討を行う。子どもの具体的な状況を確認し、子ども支援や親支援の検討、より適切な環境整備、子どもへの具体的な声かけ・対応など支援内容について検討する。

③職員のスキルアップ

ケースカンファレンスや事例検討を通し、職員のスキルアップを図る。子どもの問題行動等に対し、医学的な観点や支援を知り、職員が包括的な支援を行えるようにする。

３）職員へのアドバイス

①ケースカンファレンス

上記内容に同じ。

②ホーム会議での事例検討

上記内容に同じ。

③心理療法担当職員、治療指導担当職員へのスーパーバイズ

子どもへの心理ケアを行う職員に対してスーパーバイズを行なう。心理ケアを担う職員と医療チームが共通認識を持ち、連携した対応ができるようにする。

２．外部との連携

１）保護者支援

①子どもの症状説明

必要に応じ、保護者との面談し、子どもの症状の説明する機会をもつ。専門家から説明してもらうことで、保護者の子ども理解を促す。子どもの状態や症状にあわせた関わり方のポイントなどを一緒に検討し、保護者が適切に対応できるように促していく。

②親子関係の調整

親子関係を改善・促進させるプログラムを実施し、家族再統合へ向けた支援を行う。

③保護者対応

対応が難しい保護者の状態などを医学的観点からアドバイスいただき、適切な保護者対応や支援内容を検討する。

2）関連機関との連携

必要に応じ、医療機関や幼稚園や学校などの機関と連携を行なう。

3．職務分担、及び勤務スケジュール

Dr.名	職務分担と勤務スケジュール
森田Dr.	保護者支援や事例検討を主に担う。 月２回
鈴木Dr.	子ども面談や生活場面での行動観察を主に担う。 月２回

≪治療指導員の業務について≫

1．職務内容

1）子どもとの面談

①心理ケアプログラムの計画・実施

心理療法担当職員と連携し、心理ケアが必要な子どもに対し、心理ケアプログラムの計画・実施を行う。非常勤精神科医師等とケース検討を行い、より良い支援内容と方法を検討していく。

②生活場面面接

生活場面で子どもの状況観察を行い、必要に応じて、子どもの問題状況等に介入していく。個別の時間には見せない様子を、生活場面では観察することができる。子どもの多面的な様子を観察することで、より的確なアセスメント、より良い子ども支援につなげたい。

2）巡回コンサルテーション

愛着関係の修復・再構築が必要な子どもが多い。養育者を担うケアワーカーと子どもとの関係性が重要となり、ケアワーカーからの手厚く丁寧な支援が必要となる。そこで各生活ホームを巡回し、生活場面観察や事例検討を行い、子どものより良い支援を検討していく。

3）心理検査

定期的に心理検査を行い、子どものアセスメント・支援に役立てる。

4）職員へのアドバイス

①ケースカンファレンス

治療指導担当職員の活動を通し、ケースカンファレンスに参加する。

②ホーム会議での事例検討

ホーム会議において事例検討を行う。子どもの具体的な状況を確認し、その中で子ども支援の方向性を検討し、より適切な環境整備など具体的な支援内容について検討する。子どもとの面談を通し、有用な方法や支援を具体化していく。

2．外部との連携

必要に応じ、医療機関や幼稚園や学校などの外部機関との連携を行う。

3．勤務スケジュール

曜日	取り組み内容
月	生活場面面接、子どもとの面談等
火	巡回コンサルテーション等
水	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等
木	ユニット・棟別の会議へ参加、事例検討、アドバイス等
金	非常勤医師と連携し心理ケアプログラム等の計画・実施、ケースカンファレンス等
土	生活場面面接、心理検査等

運営委員会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

施設長	小林　弘典
事務部	小林　早苗
調理部	堀田　弘子
専門部	田中　義一（記録）
青空棟	安積　雄介（委員長）
太陽棟	坂寄　裕紀
さくら棟	橋本　浩樹（司会）
つくしホーム	石引　慶彦

Ⅰ　運営委員会とは

１構成

運営委員会は施設長及び各部署（事務部、専門部、各生活棟及びグループホーム、調理部）より互選で選出され、施設長より任命を受けた職員各１名、合計８名で構成される。運営委員メンバー内では運営委員長（運営委員会議司会を兼ねる）、職員会議司会者、記録者といった役割が分担される。尚、運営委員の選出方法である互選とは、グループを構成する参加者同士が話し合いを通して相互に推薦しあい役に就く者を選出することである。

２運営委員に求められるもの

運営委員は所属部署の状況把握のみでなく、園の方向性・抱えている課題に対し、部署代表としての考えと同時に運営的視点を持つ事が重要である。それは園の諸事案に対して必要な取り組みは何か課題抽出の気づきと方法の検討、実行に関係するスケジュール管理、役割分担の旗振り、進捗状況の把握、振り返りと改善までを運営的視点を持って取り組む事である。また、考えや意見を発信する力も重要になってくる。意見を表出しないことには運営的な視点をもっていても生かすことが出来ない為、主体性を持って取り組む事が重要である。また、棟・ユニット職員からの意見などを受け止めつつ、運営的判断が下りた際の理解を促す調整力も併せて求められる。

３役割

運営委員会とは各部署の代表（注:運営委員会は、特別な権限を持たない役割の一つである。）であるが、各部署の意見を反映させる役割であると共に施設全体を見渡した判断をする調整機関である。具体的には、部署・係・委員会が提出した議題の整理と連絡調整および職員会議の議題整理をする。また、部署内においては棟運営のマネジメントや意見集約、緊急時対応の職員モデルとなる役割がある。

４業務内容（管理運営規定参照）

運営委員会は施設長及び各部署（事務部、専門部、各生活棟及びグループホーム、調理部の代表により構成し、以下の事項を審議する。

ア施設内各部署の意見集約

イ施設内各部署間の連絡調整

ウ園運営の改善、企画、調査に関すること

エ職員会議の議題整理、原案の作成

オその他、施設運営全体の調整に関すること

Ⅱ全体総括

全体総括

今年度の運営委員会は施設長並びに各部署より互選で選出され、施設長より任命を受けた職員、計８名で構成された。委員会メンバー内で役割分担を行ない、会議の円滑化及び効率化を図り、取り組みを行なってきた。

運営委員として個々の職員が業務に従事するにあたり、主体的に各運営委員からの発信で園全体での取り組みで改善を要する状況があると判断した際には何が課題で対応策は何が必要かを協議し、マネジメントを行い、取り組みの旗振りが出来た。

今年度も役割である部署・係・委員会から提案された議題の整理と調整を含めた業務全般に対して年間を通じて運営的視点を持って携われた。運営委員会に挙がる各部署からの報告事項や検討事項に対し、委員会内で議論を重ねて職員会議が円滑に運営できるよう意見集約や課題整理を行なった。課題整理を図っていく上で提案されている内容のみでは把握が出来ない部分や対応の詳細をより丁寧に記載をすべきと判断をした事案に対しては運営委員会からの意見として職員会議での補足説明を求めた。職員会議時に該当部署から説明を全体にしてもらう事で職員会議の円滑化が一層図れた要因の一つである。また、子ども支援に関する計画に対しては取り組みの計画・実施だけで終わるのではなく、計画を通じて何を大切にしていかなければならないのかを発信し、全体に提起した。

今年度は組織力の向上を目的に外部委員・第三者委員・理事長・運営委員会の職員がメンバーとなる運営検討委員会が発足され、取り組みを行なってきた。取り組みの中では組織力を向上させる為に各職員が何を課題と捉えているのかアンケートを実施した。また、外部委員と上級職員との意見交換の場を企画し、課題の抽出をした。結果、運営委員に求められる役割の確立、当園のボトムアップのシステムに対する職員の認識及び実行する力が必要との結論に至った。運営委員会として各部署及び園全体のマネジメント力の向上と全職員が園のシステムを一層理解し、実行していけるようになる事を目標に次年度は取り組みを行なっていく。

次年度も運営委員に求められる役割・資質について各部署内で理解及び議論をした上で選出をし、施設長からの任命を受けた委員は主体性と運営的視点を持って委員会活動に携われるよう努めていく。

Ⅲ　2018 年度方針

≪全体方針≫

◇運営的視点及び発信力を持って、主体的に運営委員会業務全般に従事していく。

≪重要方針≫

ア施設内各部署の意見集約

◇各部署より出た意見は、迅速に整理し運営的視点を持って十分に議論し集約する。

イ施設内各部署間の連絡調整

◇各部署間の連絡調整は、各運営委員が責任を持って確実に行うことで、園全体における情報共有の強化を図る。

ウ園運営の改善、企画、調査に関すること

◇平成２９年度評価結果報告書に記載されている「更なる改善が望まれる点」についてその内容を園全体で情報共有を図り、改善するための対策を委員会内で十分に議論し具体化していく。また、職務分掌表に記載されている委員会、係の役割一覧表の作成を行う。

エ職員会議の議題整理、原案の作成

◇運営委員会議において運営的視野と考えを持って、より主体的、積極的に意見を交わし職員会議の議題整理、原案の作成を行っていく。

オその他、施設運営全体の調整に関すること

◇人事委員、採用試験業務にあたっても運営的視点を持って従事する。

ア　施設内各部署の意見集約

各部署の意見集約については、運営委員会に各部署からの事案の提案をするまでに様々な視点から議論されていることで補足、訂正をすることが少なくはなってきている。その反面、外出などの棟・ユニット単位で行える企画については形骸化してきてしまっている部分も見られた。そのため各部署で改めて企画の際の目的や児童が経験を積む上で何を大切にしたいかなど様々な視点から話した。また、児童支援の目的を明確化し、支援の向上を図るために成長の記録と自立支援計画書をリンクさせ記録の効率化を図ることや、アフターケアの在り方等についても話し合う機会があった。他にも社会情勢として保護者や施設職員からの虐待の報道が多く拝見されたため、施設運営をしていく上で各部署の児童支援の考え方や見直しについて意見集約をおこなった。今年度、運営委員会として園としての考え方や物事の捉え方などの道筋を示しての話が出来たことで部署内でも年々活発な意見交換が出来ている。今後も様々な視点から物事を捉え、より内容がある意見交換を目指し、取り組んでいく。

入所受け入れ会議については、前年度同様の流れで入所依頼があった直近の木曜日で受け入れの可否を行っている。今年度も児童票に適切は情報が記載されていないケースが拝見されたため、より丁寧な受け入れを行っていく上でも児童相談所との密な連携は必須である。

イ　施設内各部署間の連絡調整

施設全体に関わる事項や各部署間で共有が必要な事項などについては各運営委員が責任を持って全体への周知、共有を行った。今年度、高校進学については、以前は県立高校を第

一志願という流れが多かったが私立高校に通うにあたっての学費についても国で負担できることとなったことで高校の選択の幅が広がった。それにあたり園としても改めて高校進学についての考え方を部署間・自立支援コーディネーターで情報交換をし具体化することとなった。私立高校を志願するにあたり、その学校に行きたい目的等が明確であること。また、県立受験を志願する児童よりも早めに受験が終えることから、その後の生活作りについて理解を図り、安定した生活が築けるようにした。今年度、私立高校単願受験を志望する児童が１名おり、受験後の生活についても棟職員、自立支援コーディネーターと面談を重ねて具体化し、生活の安定を図った。

他には高校進学後の携帯の契約・購入にあたっての貯金額や支払いシュミレーションなど児童の生活支援に関わってくる部分では各部署間で考えの相違がないように意見交換を行ってきた。意見交換をする事案については会議日を利用して行ってきたが全体会議を終えたあとはグループホーム職員は分園に戻ってしまうことや、本園職員からも話し合いの参加の促しなどが弱かったことから意見交換は円滑に行えなかった。そのため、本園職員主体での話し合いとなり、その場での意見交換にはならず、事後報告や十分に情報共有が出来なかったことは反省点である。来年度は先を見据えてのスケジュールを立てて、円滑な情報交換をおこなっていく。

ウ　園運営の改善、企画、調査に関すること

①法人・施設調査について

社会福祉法人及び社会福祉施設に対する指導監査は、社会福祉法などの関係法令・通知に基づき、法人・施設運営、事業経営及び利用者の処遇などの指導事項について監査を行うとともに、運営全般について助言、指導を行うことによって、適正な法人・施設運営と円滑な社会福祉事業の経営の確保を図るものである。

改善又は是正を要すると認められる事項について指摘して頂き、それらを改善･是正することによって、事業の透明性を確保することができる。また、サービスの質の向上に繋がっていく。

今年度は、茨城県による施設調査が行われた。

【茨城県】平成 30 年度社会福祉施設一般検査(書面検査)

◇2018 年 10 月 22 日(月)実施

◇対象：児童養護施設　筑波愛児園

　　地域小規模児童養護施設（つくしホーム）

◇是正又は改善を要する事項、及び処理状況

①火災・地震のほか、風水害等の災害発生時に円滑にかつ迅速な避難、救護を確保するための具体的な計画を策定すること。

→平成 31 年 4 月 1 日付で施行できるよう現在作成中である。

②経理規程が現行の会計基準に準拠したものとなっていないので、速やかに改定するこ

と。
→次回理事会平成 31 年 3 月 27 日（水）で議題提出をする。承認後、改定後の経理規定を送付する。
③平成 29 年度貸借対照表において、資産の部合計と負債及び純資産の部計が合致していないので、精査のうえ次年度決算に反映させること。
→顧問会計事務所へ報告済みである。平成 30 年度事業決算で不合致の部分を反映させる。

②第三者評価結果について

東京都の福祉サービス第三者評価とは、「利用者のサービス選択及び事業の透明性の確保のための情報提供」、「事業者のサービスの質の向上に向けた取組の支援」を目的に、第三者評価機関によって年 1 回行われるものである。評価は事業評価と利用者調査をもとに評価結果報告書が作成され、東京福祉ナビゲーションに評価結果が公表される。事業評価は①経営者層自己評価の作成、②全職員を対象とした職員アンケートの実施、③評価者による訪問調査があるが、今年度も運営委員会では、①について組織マネジメント分析シートを使用し本園の運営業務について自己評価を行った。また、利用者調査では年長児から高校生を対象に、個別面接調査法を用いて評価者による個別の聞き取りで調査が実施された。

今年度方針として挙げていた『平成２９年度評価結果報告書に記載されている「更なる改善が望まれる点」についてその内容を園全体で情報共有を図り、改善するための対策を委員会内で十分に議論し具体化していく』については実施に至らなかった。第三者評価を受けるのみに止まらず、その内容の改善に努めることは重要である。次年度は第三者評価の全体的なスケジュールを早めにすることで、役割分担や改善内容に関する議論をする時間を十分に確保できるように調整を図っていく。

≪H30 年度全体講評≫

〇特に良いと思う点

・子ども達の意向を丁寧に把握し、自立支援計画の策定や見直し、日常生活支援につなげ、子どもの主体的な関わりを促している。
・施設運営を担うリーダー層と合議を主体とするボトムアップの体制が活かされ、良好な関係性、子ども達の主体性につながっている。
・すべての職員は日常生活を余すことなく、子ども達一人ひとりの自立に繋がる支援に取り組んでいる。

〇さらなる改善が望まれる点

・職員集団の実態に則したスーパービジョン体制の確立を図るなど、職員間の支援に生じるさまざまな差異に向けた対応が求められる。
・自立する当事者である子どもたち自身の自覚に向けて自立支援計画をどのように活用していくのか、さらなる検討が期待される。
・協議の進め方や意見の把握・集約などを通じて会議時間の抑制を図っており、さらなる効

率化、意思表明への雰囲気作りも工夫されたい。

③運営検討委員会について

昨年度の職員の不祥事を受け、Living in Peace(以下 Lip)が職員複数名を対象にヒヤリングを行い、筑波愛児園の運営に関して組織力の弱さが指摘された。組織力の弱さとは意思決定から実行へ繋げるプロセスに課題があるとされ、施設運営の改善を図るために運営検討委員会を設置した。運営検討委員会は、法人理事長、Lip、第三者委員、施設長、運営委員のメンバーで、4 月と 8 月を除いて月一回開催され、活動を行ってきた。活動内容としては、運営改善に係る協議に加え、全職員を対象に施設運営に関するアンケートを実施し、更に勤続年数 10 年以上の職員から外部委員によるヒヤリングを行うことで課題の抽出等を行ってきた。外部委員の評価として、情報共有や日々の子ども支援に関して、施設として成長が見られているとあった。一方で上級職員が力を発揮できる場の少なさがあることや、職員としての行動の基準になるものがないことから判断や決定の流れが曖昧になってしまっているなどの課題が明らかになった。運営検討委員会を行ってきた成果として、運営委員が子ども支援の向上や働き続けられる職場づくりのためにマネジメントの中心となり課題発見から実行・改善までの PDCA を行っていくこと、委員会等で委員長を選出するなど上級職員が主体的に施設運営に携われる機会を設けること、愛児園職員の心得となるような行動指針を作成することに至った。

運営検討委員会は概ね月一回の開催をしてきたが、定例的な委員会活動は今年度で終結となる。今後は改善策を実施していく中で、理事会、第三者委員、Lip を含め定期的にヒヤリング等を行い、施設運営について検証をしていくこととなる。

④承認を得るプロセスについて

運営委員会の役割や業務として職員会議の議題の整理がある。運営委員会会議で各部署からの提案を精査し、職員会議にて承認を得ることが現在の意思決定のプロセスとなっているが、運営委員会としては原案通りで実施可と判断され、職員会議において活発な意見交換とならずに承認となる提案が多くある中で、運営委員会が決定機関になっていると誤認されていないか危惧されるところである。

そのため、運営委員会の役割の再確認が必要であると感じている。運営委員会が決定機関でなく、職員会議にて全体の承認を得るプロセスを意識化するために、運営委員会報告において、提案内容についての記載をなくし、運営委員会会議で挙がった意見と確認が必要な事項の欄を設けることとする。また、各職員が主体的に職員会議に参加できるよう、提案をした部署から運営委員会での意見等を踏まえ説明等をし、全体の承認を得る流れとする。

2019 年度　職務分掌

各部署においては各業務内容を十分に考慮し、適切な職員配分、窓口業務の選出を行う。

対外業務	学校関係	幼稚園	対象児のいる棟
		小学校・中学校	青空棟、太陽棟
		高校	対象児のいる各棟
	児童部会関係	児童部会　施設長会	施設長
		〃　従事者会	さくら棟
		〃　書記会	事務部
		〃　給食研究会	調理部
		〃　専門職委員会(FSW･心理･医療)	専門部
		〃　リービングケア委員会	自立支援コーディネーター
		〃　ＧＨ制度委員会	つくしホーム
		〃　子育て支援委員会	専門部
		〃　人材対策委員会	人材対策委員会
	茨城県児童福祉施設協議会		施設長、専門部
	県南西八施設合同研究会		専門部
	施設実習		専門部
	ボランティア		専門部
園内業務	委員会	将来構想委員会	施設長、各部署１名
		性教育委員会	青空棟、太陽棟、さくら棟
		児童会運営委員会（生活のしおり）	青空棟、太陽棟、さくら棟各２名
		行事委員会	専門部、青空棟、太陽棟、さくら棟、調理部
		人材対策委員会／研修	各部署１名(事務部を除く)
	係	広報	事務部
		日用品／保菌検査	調理部
		福利厚生	専門部
		リスクマネジメント	各部署１名(事務部を除く)
		育成会／理念・権利擁護	青空棟
		環境美化／防災	太陽棟
		車両	さくら棟
		保健衛生／感染症	さくら棟、医療機関連絡調整員
	その他	運営委員	施設長、各部署１名
		衛生推進者	各部署１名
		会計・小口現金出納員	青空棟、太陽棟、さくら棟、つくしホーム、調理部
		個人情報保護管理者	運営委員が兼務

		苦情受付担当	施設長より任命
		人事･体制検討会議	運営委員
		給食会議	調理部、青空棟、太陽棟、さくら棟
		給食業者選定会議	施設長、事務部、調理部、青空棟、太陽棟、さくら棟

※係り運営は、個人ではなく部署単位で行っていく。

今年度、運営委員会では会議スケジュールに関して協議をしてきた。変更案での試行の実施、全体での意見交換をした。結果、次年度は各部署会議の質の向上・部署会議時間を多く確保する事で会議日の超過勤務減少に繋げる意図で以下の会議表での実施とする。

2019 年度会議表

	火曜日	木曜日		
時間	１０－１２	１０－１２		１３－１７
		１０－１１	１１－１２	
第１週	運営委員会	性教育委員会 人材対策委員会 将来構想委員会 行事委員会 児童会運営委員会		各部署会議
第２週		職員会議		各部署会議
第３週	運営委員会	係会議 （会計・衛推・リスクは集合実施）	ケース検討	各部署会議
第４週	給食会議（奇数月） 給食者選定会議（随時）	職員会議		各部署会議

※連絡会・・・毎朝９：30～（◆土日祝祭日・長期休み期間はＰＣにて確認）

エ職員会議の議題整理、原案の作成

①運営委員会次第

運営委員会次第は、LAN 環境を整え、共有サーバーで本体施設と各部署と GH 間の情報を共有できるようにした。運営委員会当日の 9:30 までに案件や児童のケース報告を記載し、印刷をかけることが出来た。中には、当日になって別に印刷を行い提案や報告することはあったが、スムーズに印刷と次第検討を行ってきた。

昨年に続いて、記載内容に関しては誤字脱字の他に、部署によっては記載内容の明確不明確といったばらつきが散見された。今年度は、各部署から挙がった行事予算について、事務

部より記載の書式統一といった方法が具体化を検討していると説明があった。書式の統一を行うことによって、企画運営や予算執行状況が見やすく、協議しやすくなると考える。

月初めの運営委員会議で使用する運営委員会次第には、翌月のスケジュールを記載し情報共有をするとともに勤務表作成時に反映させた。ただ、園及び学校等のスケジュールの確定が遅くなったり急な予定変更等があったりしたため、その後の運営委員会や職員会議で都度確認を行う必要があった。次年度も各月のスケジュール確認は定期的に行っていき、各部署が連携を図って計画的に業務を行えるようにしていく。

②議題整理、原案の作成

運営委員会議では各部署、係、委員会からの議題や提案を運営委員会次第という形で集約し、それらを検討し調整して原案を整理し、職員会議での議論を経て全体周知を図ることが目的である。

施設が民主的な運営を目指している中で、運営委員が施設の運営面からの観点と各部署の代表としての意見をすり合わせながら、各部署からの報告事項、議案、ケース報告についてコメントを添えてきた。

昨年度は、運営委員会会議の役割である書記を2名体制にし、分担しながら次第の議題整理と原案の作成にあたったが、今年度は1名体制とし文書作成を行ってきた。書記の業務内容や業務の効率化からすると、書記は1名体制を軸として、必要な時には他の運営委員がサポート体制を取りながら取り組んでいくのが望ましいと考える。

次年度も職員会議が活発に議論されスムーズな進行となるよう、運営委員一人一人が運営的視野と考えを持って、より主体的、積極的に意見を交わし職員会議の議題整理、原案の作成を行っていく。

③運営委員会報告

職員会議での案件は、運営委員会で検討した後に運営委員会報告を印刷して会議で協議し全体承認を得ている。次第での運営委員会によるコメントに対して、職員会議時に担当部署より報告や補足説明を受けることにより、会議内容の議論が活発となることや全体周知を図りやすくなったと考える。

報告書は、職員一人一人が職員会議に望む前に情報共有、意見構築ができるよう早い段階での完成を目指した。度々職員会議間近での完成となってしまったので、次年度は業務スケジュールの組み立てを確実に行い迅速な報告書の提示を行っていく。報告書のデータは共有サーバー上に保存され各自の印刷を基本としている中、報告書作成に時間がかかった場合には、印刷して各棟・ユニットのBOXに配布した。

運営委員会報告をまとめるにあたっては、運営委員会ではどのような議論がされて、どういう結果にまとまったのか等、あいまいな表現は極力避け読み手に分かりやすい記録を目指した。委員会内で多くの意見が出た場合は、ポイントとなる意見が漏れないよう十分に留意し記載した。

オ　その他、施設運営全体の調整に関すること

①人事委員会

人事委員会とは次年度の職員体制に関して委員会として体制案を考えて施設長へ提案する役割を担っている。今年度は、運営委員が人事委員会を発足し協議した。人事については、施設運営の視点を持ち、人材育成を目的とした職員配置となること、また異動を必要とする場合には一部署内での多数の職員が異動をしないことを共通認識として委員会内で議論した。各部署の現状を共有し、各人事委員が忌憚のない意見交換を行い、当初の目的に沿った案をまとめることが出来た。

②採用試験業務

今年度も次年度体制に向けての採用枠に基づき職員採用試験を実施した。運営委員会では、試験準備、試験監督、面接官と採用試験に携わる業務を人材対策委員会と連携し行った。採用面接では運営委員が面接官を務めるので、運営委員会内で採用面接等のスケジュールを検討し、運営委員が出席するよう各部署内で調整することが出来た。試験当日は業務分担を明確にし、各自が業務を遂行したことで滞りなく採用試験を進めることが出来た。

今年度は、内定通知を送った後に辞退の申し入れがあった。職員確保が困難な状況に至る施設もある中、こうした状況をどう防ぐのか運営委員会で協議し、人材対策委員会と連携を図り、人材確保に関する取り組みを検討していく。

③書類

毎年度、成長の記録をまとめる時期が、自立支援計画書評価及び計画の作成と総括方針の書類作成の時期と重なる状況が続いている。将来構想委員会が旗振りしたNO残業への取り組み、運営検討委員会で出た会議日の超過勤務の課題などを運営委員会でも協議した。こうした流れを汲み運営委員会として、今年度は成長の記録について各部署内から意見集約を行った。集約した意見からは、メリットとして「自立支援計画書の作成に役立っている、児童状況を把握しやすい、児童支援のスキルの向上が図れる」といった意見があり、デメリットとして「自立支援計画書と記載内容が重複している、作りっぱなしの状態になりやすい、他の書類作成時期と重なり職員の負担となる」といった意見が挙がった。

成長の記録については、委員会と各部署内で実践している取り組みや集約した意見をもとに既存の書式を精査している。子ども支援の質の向上を目指し、業務の効率化を図ることを目的とし、次年度の８月までに成長の記録の枠組みを提案する。

また総括方針の項目についても運営委員会内で協議した。次年度は項目内容を精査し、業務負担の軽減や業務の質の向上が図れるのか検討し、次年度内に具体的な枠組みを提案する。

2019 年度方針

≪全体方針≫

◇運営的視点及び発信力を持って、主体的に運営委員会業務全般に従事していく。

≪重要方針≫

ア施設内各部署の意見集約

◇各部署より出た意見は、迅速に整理し運営的視点を持って十分に議論し集約する。

イ施設内各部署間の連絡調整

◇各部署間の連絡調整は、各運営委員が責任を持って確実に行うことで、園全体における情報共有の強化を図る。

ウ園運営の改善、企画、調査に関すること

◇平成 30 年度評価結果報告書に記載されている「更なる改善が望まれる点」についてその内容を園全体で情報共有を図り、改善するための対策を委員会内で十分に議論し具体化していく。また、職務分掌表に記載されている委員会、係の役割一覧表の作成を行う。

エ職員会議の議題整理、原案の作成

◇運営委員会議において運営的視野と考えを持って、より主体的、積極的に意見を交わし職員会議の議題整理、原案の作成を行っていく。

オその他、施設運営全体の調整に関すること

◇人事委員、採用試験業務にあたっても運営的視点を持って従事する。

将来構想委員会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

委員長　太陽棟	櫻井翔太
記録　専門部	小松崎比呂子
施設長	小林弘典
事務部	根本敬子
調理部	永田晴美
青空棟	小林拓巳
さくら棟	安井貴士
つくしホーム	木村百花

≪2018 年度方針≫

◇会議録の作成、印刷、配布期日を設け、情報共有を図る。会議録が配布され次第、各部署へ伝達をし、情報伝達に漏れがないようにする。
◇働き続けられる職場を目指す。
・No 残業の取り組みを行い、超勤削減への意識向上、有効な取り組みを共有する。
◇本施設に必要な将来ビジョンを考える。
・新ビジョンに向けた本施設の取り組み状況の把握、有効な取り組みについて検討する。
・荒川区に建設される施設についての具体案を考える。

全体総括

将来構想委員会として今年度は、働き続けられる職場作りについて、No 残業ウィークの提案及び実施、施設の将来ビジョンについて、児童養護施設に今後求められる新しい養育ビジョンを踏まえ、社会的養護についての話し合いを重ねてきた。

会議に関しては、議題の整理を行い、当日にレジュメを配布して会議に臨んだ。年度初めに会議録の記録者を決めたことで、話し合った内容をしっかりとまとめることができ、各委員で会議の内容を共有することができた。会議録の配布については記録者と委員長とで確認を行ってから各委員へ配布を行った。各部署へは、決定事項や検討する事柄について伝達してきた。

働き続けられる職場環境作りに関しては、年度を通して議論を行ってきたが、改めて、働き続けられる職場環境について各職員がどのように考えるのか、今後改善を行う必要がある部分を把握するために全職員を対象にアンケートを実施した。各職員から、会議時間・残業時間・業務内容の整理に関する部分や、人材確保・育児をしながらの働き方・公休や有休取得などに関する部分の意見が多く挙がり、現状把握と課題の抽出を行うことが出来、各委員会と情報の共有を行うことが出来た。

働き続けられる職場環境作りの一環として、前年度から継続して行っている No 残業ウ

ィークについては、業務の整理をすることで効率化を図り、質を高め、超過勤務（以下、超勤と記す）をできる限りなくすために取り組んできた。前年度、各部署で実施時期を選定して取り組んだことに対し、今年度は施設全体で実施時期を統一して取り組みを行ったことで、各々の部署だけでなく施設全体で超勤削減を意識して取り組むことが出来た。その他に、No 残業ウィーク中の取り組みを定着、習慣化できるよう 2 週間という期間を設けたり、超勤時間記録簿に時間調整を記載する枠を設けたりすることで、職員への意識付けや時間調整による超勤時間削減を行うことが出来た。しかし、会議日の超勤に関しては課題の残る部署も多いため、上記のアンケートで挙がった意見をもとに、次年度も継続して取り組みを行う。

将来ビジョンに関しては、荒川区に新設予定だった施設が、本体施設内の人材確保・人材育成を優先し新設を見送ることとなったため、幼児単独ユニットの存続についてという議題を中心に話し合いを行った。2016 年の児童福祉法改正に伴い「新しい養育ビジョン」が示され、その中の“乳幼児の家庭養育原則の徹底と年限を明確にした取り組み”について検討していく中で、幼児単独ユニットを設けることになった経緯を確認した上で、今後懸念される状況を想定し、幼児単独ユニットの在り方について議論を重ねてきた。今年度、委員会としての考え方・方向性を決めることが出来たため、次年度具体案を作成し提案を行っていく。

現在、社会的養護の枠組みに大きな変革が起きている。次年度は、新たな「都道府県社会的養育推進計画」策定されることで、社会的養護全体にとって大変革を迎える始期となるため、将来構想委員会として当園の将来ビジョンについて引き続き議論を深めていく。

１．会議録について

将来構想委員会での情報が、各部署に伝達されず情報共有が上手く図れなかったことから、3 年前より委員会内で年度初めに記録者を決め会議録の整備を行ってきた。議題を整理した次第を用いて会議に臨むことにより円滑に進行でき、会議録を作成することで情報の共有が図れるようになった。さらに、議論する内容を都度確認してきたことで、会議内で挙がった検討事項を、漏れずに各部署に持ち帰り、当日の部署会議で議論や意見を集約することもできた。

制度や情勢が頻繁に変わる昨今、内容が理解できず委員会内で活発な意見交換まで至っていない。まずは委員会内で制度について学ぶ機会を設け理解し、職員会議など全体の場で発信していけるようにしていく。

２．働き続けられる職場環境づくり　～No 残業ウィーク～

前年度に引き続き『働き続けられる職場環境作り』について議論を行ってきた。2016 年度より『働き続けられる職場環境作り』の一環として、無駄な超勤を削減するため

に、No 残業ウィークを実施してきた。これまで実施してきたことで、業務の整理を行ったことや職員の意識向上により、一定の超勤削減ができたが、会議日の超勤については依然課題が残っている現状である。

『働き続けられる職場環境』とは何か、何が必要か当園の現状を把握するため、各職員の意見を集約し、解決の糸口として参考にするべく、アンケートを実施した。集約した意見は職員会議にて全職員へ共有し、結果に基づき、今後具体的な取り組みを検討し提案していくこととなった。今回のアンケートを実施し、意見の多くに会議時間・残業時間・業務内容の整理に関する部分や、人材確保・育児をしながらの働き方・公休や有休取得などに関することが挙がっていた。アンケートの集計結果を職員会議の場にて情報提供したことで、全職員が当園の現状把握ができ、抱える課題を共有することが出来た。アンケートの集計結果を踏まえ『働き続けられる職場環境作り』について、次年度も更なる議論を深めていく。

No 残業ウィークについては、前年度同様、『会議日』が超勤の大部分を占めている現状である。その為、今年度も会議日の超勤をいかに削減できるかという部分に焦点を絞り議論をした。議論の結果、漠然と取り組むのではなく、どのように超勤を削減していくか各部署で検討してから No 残業ウィークを実施することとなった。

実施時期に関しては No 残業ウィーク中の取り組みが年間を通して定着、習慣化できるよう、6 月 7 日～20 日、10 月 19 日～11 月 1 日、1 月 8 日～21 日の各 2 週間の期間を設けて実施してきた。実施報告の際には超勤を削減するために工夫した点や超勤理由を具体的に報告し合い、改善策を議論してきた。

第 1 回目の実施結果を職員会議で報告し、委員会内で出し合った会議内容の工夫点を各部署に持ち帰り会議の見直しを行ったことで職員各々の意識も高まっており、1 回目よりも 2 回目がさらに充実した内容となるよう新しい取り組みを取り入れる部署も見られるようになった。ファシリテーターやタイムキーパー等の各役割を設けて会議に取り組んだ部署や、会議録の欄に超勤分の時間調整の枠を設ける部署もあり、昨年度同様、突発的な児童対応や検討事項があった際にはやむをえず超勤してしまうことはあったが、会議日の超勤は大幅に削減することができた。また、上記のような『やむを得ず超勤してしまった』といった問題にも目を向け、No 残業ウィーク集計結果に時間調整枠を設け、各部署にできるだけ時間調整をするよう促した。このような取り組みも超勤削減に大きな効果をもたらす取り組みの一つとなったと考える。上記の取り組みの中でも補えない超勤時間の削減に関しては会議日の日程変更や会議日を減らすことも案として挙がっている。

今年度、3 回に渡り実施してきた No 残業ウィークから会議の在り方を改めて見直すことができた。各部署の取り組みを共有していく中で、良い点を取り入れたり、足りない部分の改善に取り組んだりする部署も見られた。No 残業ウィークを実施してきた中でそのような良い傾向も見られるようになり、今後も継続していきたいと考えている。次年

度も、No 残業への取り組みの他、人材確保や育成・育児中の職員への配慮・公休、有休取得などのライフワークバランスについても人材対策委員会や衛生推進係と連携し、議論を深めていく。

◎『働き続けられる職場環境づくり』アンケート集計結果

・会議時間が長い　質を落とさず時間短縮する事が望ましい
・会議日を隔週にしてはどうか
・会議日は全員出勤でなくても良いのではないか
・会議を減らす工夫が必要
・会議日のやり方の見直しが必要（タイムキーパーの設置など）
・会議は重要議題に絞って話し合う
・週１の会議はとても負担である
・会議日が超勤になっているので翌日の勤務について考えていく必要がある
（木曜日→明け・金曜日→早）
・残業を減らすため、業務の整理を進めるべき
・残業を減らす意識、取り組みが大切
・職場内での残業が減少しても自宅に持ち帰って作業してしまっては意味がない
・仕事の意義を考え重要度の高い業務を優先させる
・時間を意識して集中して業務に取り組む
・業務を他職員任せにしているのでやめたほうが良い
・勤務補助の有効活用
・書類関係の業務が多いので見直してはどうか
・運営委員会に提案する議題内容について精査する（検討事項・報告事項のすみわけ）
・日常の引継ぎを重視し情報共有をしっかり行う
・スケジュールのみならず業務を明確化することが職員全体の意識向上に繋がるのではないか
・話し合いは会議の場だけでなく日頃の引継ぎの場を有効活用できると良いのではないか
・気づいた職員がやるのではなく、業務を分担し各自やるべき業務を責任持って行なうことが大事
・子どもや対外業務の緊急時に対応できる体制が確立されていて適正に機能している環境
・各自抱えている仕事量、業務内容を把握し全体で共有することが大切
・突発的な児童対応も極力勤務者で対応できることが望ましい
・有休がとりやすい、定時であがれる
・変則休の方が働きやすい
・特別な理由なくとも長期休みの取れる職場
・希望休が優遇されることで仕事に対しての意欲向上に繋がるのではないか

・突発的な児童対応や緊急対応で超勤や休日出勤になることはストレス
・運営面での議題（会議の短縮、有休取得　など）の協議が必要ではないか
・施設長以下フラットではなく、役職などを設け組織構成がある程度必要ではないか
・対外対応で外に出ている時だけでなく施設内にいる時も所在を明らかにする必要がある
・育児、介護規程が改正されたが、現場職員にとって保障される内容となっているのか施設として支え協力する仕組みを作る
・子育て中の人に対しての配慮が必要　施設での取り組みとして託児施設併設はどうか
・職員の子どもを預けられる託児施設を充実させる
・職員の意識改善が必要と考える
・物事のいちばん重要な点（焦点）を見極める
・フリー職員を増員し業務の有効活用を図る
・連絡手段が多いので精査する必要がある　サイボウズを有効に使用してはどうか
・各自、ベストな取り組みを考えることでチームとして向上すると思う
・人材確保とスキルアップが必要
・ワークライフバランスが整っている職場
・基本的な社会人としてのマナーを身につけるためにも講習が必要ではないか
・女性が子育てをしながらも働き易い環境の整備（宿直無し、朝番勤務など）
一緒に働く人（チーム）の理解が必要不可欠
・職員数の増、もしくはパートタイム職員の導入。職員の有給取得、公休消化、宿直回数の減、ルーティン業務の負担減などに繋がる
・調整力、コミュニケーション能力の向上
・職員同士である程度の指導も必要であるが、成長を認めることも大切であり仕事のやる気に繋がる
・職員同士で何でも言い合える環境を作ることが必要
・新任職員、後輩職員の意見をくみ取れるような関係作りが必要
・チーム内の信頼関係が構築できた環境。
・ある程度の緊張感を持って仕事をしていくことも大切ではないか
・業務中に公私混同している場面を良く見るがいかがなものかと感じる
・社会人としての自覚を持つ

◎No 残業ウィーク集計結果

6 月 7 日～20 日

2018ノー残業ウィーク集計結果　詳細　　実施期間(6/7～6/20)

部署名	職員	合計	1週間の残業総時間	曜日別時間数(各部署の勤務時間枠より表記)　※15分を0.25と表記する。													超勤理由	時間調整	工夫した点
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			
青空	A	80.50	18	5	1		1		1	1.5	5		0.5		2	1		会議、業務都合、児童対応、引き継ぎ		
	B		11.5	5	1						5					0.5		会議、OJT実施		
	C		5								4		1					業務都合、会議		隣部署のルーティン等のフォロー
	D		11	5	0.5			1	1			0.5	2	1				会議、引き継ぎ、児童対応、業務都合		引継ぎ前の内容整理
	E		12.5	5			0.5	0.5			5	0.5			0.5		0.5	会議、引き継ぎ、児童対応		
	F		10			2		1		0.5	5	4		0.5			1	会議、保護者対応、学校対応、引き継ぎ	-4	
	G		12.5	5		0.5			0.5		5		1			0.5		会議、引き継ぎ		
さくら	A	82.75	19	6					6		5				2			会議、書類作成等		
	B		11		2				0.75		2		1.5	1.75		3		児童対応、書類作成、会議		
	C		10.5	2		0.25		0.25		1	5		0.5		0.5		1	会議、引継ぎ		
	D		13		0.5			1		1	6	1			2	1.5		会議、書類作成、引継ぎ、児童対応		
	E		6.25	6									0.25					会議、引継ぎ		
	F		7								7									
	G		16	6					5		5							会議		
太陽	A	140.75	21	8	1.5				1.5		7	1			1	1		会議、掃除、児童対応、児相対応		
	B		9.25					2		1.5		0.75	1.5		1.75		1.75	会議、記録、児童対応		
	C		23.5	7	1		1	1	1.5	1.5		8		1	1.5			会議、事務処理、児童対応		
	D		26		1	1.5	6			4	8.5				1	4		会議、事務処理、児童対応		
	E		16	7			1	0.5	0.5		3		1	1	2			会議、事務処理、児童対応		
	F		26.5	7	1		1			1	8		1	2		0.5	5	会議、事務処理、引継ぎ		
	G		18.5	7						1	8.5			2				会議、事務処理、児童対応		
つくし	A	17.50	7			0.5			5.5								1	県学会申請、住民票取得、夏季行事下見		・引継ぎ事項の事前整理
	B		5.5						5.5									夏季行事下見		・会議の時間と内容意識
	C		5			1.5					3.5				11			ホーム対応、会議、福祉司面談対応	-11	
専門	A	29.50	16.25	2	5.5			1		2	4.5	1			2.25			アフターケア、書類作成、児童対応	-2	
	B		1.25	1.25			0.5	0.25		0.25	4							児童対応、書類作成、会議	-5	
	C		2	1							1							会議		
	D		0	2		2												児童対応、アフターケア	-4	
	E		6	1				1			2	1				1		会議、茨児協委員会準備		
	F		0	1							0.5							緊急対応、会議、	-1.5	
	G		4	2							2							児童対応、会議		
調理	A	11.00	1								1							総体弁当作り		
	B		7	4			1	1				1						会議、事務処理、調理補助		
	C		2	1						1								梅ジュース作り、総体弁当作り		
	D		1									1						総体弁当作り		
事務	A	0.00	0																	
	B		0																	
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			

10 月 19 日～11 月 1 日

2018ノー残業ウィーク集計結果　詳細　　実施期間(10/19～11/1)

部署名	職員	合計	1週間の残業総時間	曜日別時間数(各部署の勤務時間枠より表記)　※15分を0.25と表記する。													超勤理由		工夫した点
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			
青空	A	61.25	3.5	2	0.5			0.5		4			0.5					通院対応、引き継ぎ、会議、	-4	
	B		7.25			0.25		0.5		2		1.25	1.25	1.5			2.5	引き継ぎ、会議、児童対応、送迎対応	-2	
	C		9.5	1.25		1.5	0.5				0.5	2				0.75	5	会議、児童対応、引き継ぎ	-2	引き継ぎの効率化を図った。
	D		12.5	0.25			1	0.25	0.25	5	0.25	0.25			0.25		5	引き継ぎ、会議、対外対応		様全体で超勤削減の意識向上を図った。
	E		13.5		1		1		1.5	3		2			1	1	3	会議、児童対応、引き継ぎ、記録、通院		超勤分の時間調整を計画的に図った。
	F		15		1	0.25	0.25		5	0.25	1			1	1	0.25	5	会議、引き継ぎ、記録、児童対応、通院		
	G		0																	
さくら	A	75.00	16.25	0.25			3	1	1	4			1		2		4	児童対応、書類作成、個別外出、塾送迎		
	B		19.25		3	1.25		2		3.5	2.5					2.75	4.25	通院対応、書類作成、会議、引継ぎ		
	C		6.5		0.5	1			0.25	3			0.25	0.5		1		塾送迎、引継ぎ、会議		
	D		11	2	2	2					1		1				3	書類作成、引継ぎ、入浴対応		会議日にファシリテーター、タイムキーパーを設置した。併せてタイムスケジュールの作成をし、スケジュールに沿った会議進行を心掛けた。
	E		5				0.5			0.5	0.5				0.5		3	児童対応、会議		
	F		6.5	0.25	1.25					5							1	入浴対応、会議		
	G		10.5		2.5		1.25			2		0.5	0.25				4	対外業務、引継ぎ、会議		
太陽	A	134.25	14.75	1			2			7.5				0.25		2	2	児童対応、会議		
	B		24	1			1	1		9		2		1		2	7	児童対応、就寝対応、会議		議題の優先順位を決めた。
	C		21.25			2	2			7		1.25			2		7	監査書類整理、児童対応、記録、会議		重点課題のみ話し合いをした
	D		23.5		2		2.25	1.75	0.75	7.5			1	1.25			7	児童対応、面会、監査書類、会議		日誌を空いた時間に記載しておいた。
	E		14		1			5		3	1				1	1	2	児童対応、通院、学校様子見、会議		平日の遅入り・早勤務で時間調整を行った。(遅入り・平日早でしか調整は難しい)
	F		22.25	1.25	1	3				7.5	2				4		7.5	児童対応、監査書類整理、アフター、会議	-4	会議を始める前に一日のスケジュールを確認した。
	G		14.5			3				2.5		2					7	監査書類整理、児童対応、会議		
つくし	A	30.00	6														6	会議		ホーム日誌、会議録への事前記入を行った。
	B		5.5				0.25							0.25			6	引継ぎ、会議	-1	時間を意識しての会議を進行した。
	C		18.5		1	1.5						6	4				6	児童対応、会議		勤務を組み立てる際に事前に超勤にならないよう調整した。
専門	A	38.25	19.75	1				4.5		2.25					4	5	6	アフター、保護者対応、外部対応	-3	
	B		4.5	2.5			0.25		2.5	0.5							3	対外業務、記録整理	-4.25	
	C		1							1								会議		
	D		1.25						0.5	3.5							1.25	児童対応、対外業務	-4	・各自で勤務調整を図った
	E		0																	
	F		7				4	4							2			児童対応	-3	
	G		4.75	0.25		1.5				2.5	1.5					0.5		児童対応	-1.5	
調理	A	12.25	1			0.5										0.5		朝食対応		
	B		6		0.5		1.5			3				1				朝食対応、監査対応、会議、事務処理		
	C		3.25	0.5			0.75		0.5	0.5					0.5		0.5	調理業務、弁当作り、事務処理、監査対応		
	D		2	0.5				0.5								0.5	0.5	朝食対応、通常業務		
事務	A	0.00	0																	
	B		0																	
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			

1月8日～1月21日

2018ノー残業ウィーク集計結果　詳細　　実施期間(1/18～1/21)

部署名	職員	合計	1週間の残業総時間	曜日別時間数(各部署の勤務時間枠より表記)　※15分を0.25と表記する。														超勤理由	調整	工夫した点
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			
青空	A	68.25	10	1.5		1		1				0.25	5	0.25		1		会議、引継ぎ、児童対応		・引き継ぎの効率化を図った。 ・職全体で超勤削減の意識向上を図った。 ・超勤分の時間調整を計画的に図った。
	B		10.5	4	0.5				0.5		0.5	0.5	4			0.5		会議、引継ぎ、送迎対応		
	C		8.5	5			1		0.5		0.5				1		0.5	会議、書類作成等		
	D		10.75	5					0.5	1.25			5					会議、業務都合、引継ぎ	-1	
	E		12.75	5			0.25		1		0.25		5		0.25		1	会議、引継ぎ		
	F		9		0.5	0.5	0.25			2		0.25	5				0.5	会議、引継ぎ、児童対応、個別外出		
	G		6.75	5					1.5	0.25								会議、個別外出、引継ぎ		
さくら	A	68.50	0																	
	B		14	3.5	2	2				1.5	1.5			2.5		1		会議、児童対応、引き継ぎ、係業務		
	C		6.75		0.5		1					0.25	2	1		1	1	会議、児童対応、引き継ぎ		
	D		15	4	1		0.5		2	2			5		0.5			会議、書類作成、引き継ぎ		
	E		5										5					会議		
	F		7.5	3.5				2		2								会議、児童対応		
	G		20.25	5	3				0.75			1	5		1.5		4	会議、児童対応、通院、送迎、引き継ぎ		
太陽	A	108.75	10	7									3					会議		
	B		13		1	2					1		7		1		1	会議、引継ぎ、児童対応、行事手続き		
	C		22.75	7		0.5	2.5	1		0.25	3	1	7			0.5		会議、引継ぎ、関係者会議、研修		・ルーティンを計画的に行った。 ・明けの引継ぎを早勤務にしておいた。 ・児童が落ち着いている時間を利用して日誌を打ち込む。
	D		18.5	1.5		3					1.5		8	1.5		1.5	1.5	会議、児童対応、記録		
	E		13	7					2				2			2		会議、児童対応、引継ぎ		
	F		16.5	7		0.5							7	2				会議、引継ぎ		
	G		15	7								1	7					会議、児童対応、引継ぎ		
つくし	A	28.75	12		2						4		6					会議		
	B		6.75		5				0.25				6					引継ぎ、会議、通院	-4.5	勤務を組み立てる際に事前に超勤にならないよう調整した。 複数勤務の際に時間調整をした。
	C		10					0.5		2.5	3.5			1			2.5	児童対応、会議、通院、引継ぎ		
専門	A	16.25	0																	
	B		0.75	0.75														会議録作成		
	C		1	1														会議		
	D		8.5	0.75	1.75		4	7										児童対応、対外業務、アフターケア	-5	
	E		0																	
	F		3.5										3.5					第三者委員会対応		
	G		2.5	0.75					0.75		0.5		0.5					会議、児童対応		
	H		0																	
調理	A	8.75	1.5			0.5						0.5		0.5				調理業務		
	B		4.5		0.5			1			0.5		1.5			1		調理業務、事務処理		
	C		1.25	0.5					0.75									調理業務		
	D		1.5				0.5						0.5				0.5	調理業務		
	E		0																	
事務	A	0.00	0																	
	B		0																	
				1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目			

3．将来ビジョンについて

現在、社会的養護の枠組みに大きな改変が起きている。2016年児童福祉法の一部改正に伴い、子どもが権利の主体であることが位置づけられるとともに、子どもの家庭養育優先原則が明記された。また、2017年の児童福祉法及び児童虐待防止法に関する法律の一部改正において、在宅での養育環境の改善を図るため、保護者に対する指導への司法関与や、家庭裁判所による一時保護の審査の導入など、司法の関与の強化などがなされた。これらの児童福祉法の抜本的な改正を受けて、2017年8月に「新しい社会的養育ビジョン」が取りまとめられた。改正児童福祉法の理念のもと「新しい社会的養育ビジョン」で掲げられた取り組みを通じて「家庭養育優先原則」を徹底し、子どもの最善の利益を実現することが求められている。

今年度、将来構想委員会では“乳幼児の家庭養育原則の徹底と年限を明確にした取り組み”について議論を交わしてきた。新しい社会的養育ビジョンの中で里親委託の優先が挙げられていることから、当園では今後幼児入所の減少や、より対応の難しい児童の入所が考えられる。

上記の状況を念頭に置き、委員会では当園の幼児単独ユニットの在り方の見直しを図ってきた。当園の現状としては幼児の安心安全を優先することで活動を制限せざるを得ない状況があり、結果、学童ユニットに移動した際の経験不足が目立つようになってき

ているという意見も挙がっている。

委員会では各部署へ意見集約を行い、そこで挙がった意見を踏まえ、幼児単独ユニットへ学童期以降の児童受け入れを検討し、5 年ほどかけて完全縦割りにしていく方向で話がまとまった。但し、幼児単独ユニットを設けることになった経緯は、より手厚い支援での愛着関係の構築、幼児の安心安全な生活を確保する為であったため、完全縦割りに移行していくにあたっての幼児の安心安全を守るための対策を検討していく必要がある。委員会としての考え方をもとに次年度具体案を作成し、提案を行っていく。

荒川区へ施設誘致については、職員の人材育成を優先した為、今回は見送ることとした。今後の情勢によって、当園に必要な措置を検討していく。また、区立児童相談所の設置によって当園が受ける影響についても、引き続き委員会で議論を行っていく。

≪2019 年度方針≫

◇情報共有を徹底する。
・職員会議の場を通して進捗状況の報告を行い、情報を発信し共有を図っていく。
◇働き続けられる職場を目指す。
・無駄な超勤削減の具体案を提案する。その他、有効な取り組みについて随時共有を行う。
・ワークライフバランスについて検討する。（より質の高い勤務について）
◇将来ビジョンについて検討を行う。
・幼児単独ユニットの在り方について、具体案を検討し提案する。
・新ビジョンに向けた本施設の取り組み状況の把握、有効な取り組みについて検討する。
・区立児相設置による本施設への影響を踏まえ、必要な取り組みを検討する。

性教育委員会

2018 年度総括、及び 2019 年方針

青空棟	立川　歩美
太陽棟	関　美穂子
さくら棟	大畠　未帆
専門部	高井　志保里
	野木　　怜
	大澤　　亮

１）全体総括

今年度はメンバーに新任職員を 3 名加え、委員会メンバーがほぼ入れ替わり、新しいメンバーでのスタートとなった。今年度の取り組みとして、「委員会メンバーが知識を深める事、積極的な研修参加、形として引き継げる物を作っていく」ことを意識して活動を行ってきた。

年度初めに新任職員と一緒に Youtube 上にアップされている、過去の報道番組などを参考に映像を見ながら意見交換をする学習会を行い、性的虐待の現状を知る機会を持った。改めて過去の報道などを見る事で、「どうしておこったのか」「どのように予防していけばよいのか」「愛児園で活かせる事はなにか」など職員として振り返る良い機会となった。

以前取り組んでいた月経カレンダーについては、きちんと運用されていない事と、各棟が独自に行っていたため、委員会で卓上カレンダーを購入し、使用方法を確認して取り組んだ。月経周期を確認する事で、体調不良に伴う生理不順を疑う事でも目安となり、今後も継続して対応出来るように委員会でカレンダーの整備を行っていく。

ユニットのトイレに貼る啓発ポスターを作成し、子ども達への啓発活動をおこなった。啓発活動の内容に関しては「からだのことに関わる内容」として各担当でテーマを決めて作成をした。トイレの啓発ポスターに関しては、子ども達も見てくれており、職員との会話の一つとなる事もあった。

新しい取り組みとして『初経セット』を作成し、適齢児が在籍するユニットに置くこととした。どうして月経がくるかということをまとめた手作りの冊子をセットにすることで、子どもたちの理解が深まる取り組みとした。事前に女性職員と内容を確認することを必須とし、今後も適齢児に対して提供し、初経が来た際は迅速に対応できるようにしていく。

２）研修

≪平成 30 年度方針≫

・研修に参加し、職員の性（生）教育に関する知識や認識を高める。 ・外部の研修に参加し、施設間職員と情報共有を行うことで性教育に関する取り組みの幅を広げる。

総括

昨年度に引き続き人材対策委員会と連携し、性教育に関する研修に参加した。今年度は７月１２日に『児童養護施設等における暴力・性暴力問題の理解と対応～成長の基盤づくりとしての暴力対応を考える～』に参加した。実際に施設職員として働いている方を講師に招き、施設内の暴力・性暴力について考えると共に、子どもたちから意見が出やすいような環境作りとして「安全委員会」を立ち上げている施設の実態や、今後「安全委員会」の導入を考えている施設の取り組みについて話を伺った。子どもたちの安心・安全を考える中で安全委員会を導入することの仕組みや実際の施設の変化についても講義をして頂いたことで、施設が徐々に変わりゆくことを学ぶことができる機会となった。

また１２月７日と９日に全国秋季セミナーの『児童養護施設で暮らす子どもたちの生きる力を育むために～生活の中の生と性を考える～』に参加した。生い立ちの整理・安全安心な生活を提供するために必要な支援について・スマホ時代の子どもたちのために等について講義を受けた。自分たちの日々の子ども支援とリンクさせながら、どのような支援が今後の生・性教育に繋がるのかを考える良い機会となった。

３）子どもへのワークショップ

≪平成 30 年度方針≫

・子どもに必要なワークショップを検討し、実施する。 ・各棟と連携し、子どもに必要なワークショップの企画を行う。

総括

今年度も治療指導員が委員の一員のため、昨年度と同様に小学生や幼児を対象にセカンドステップを行った。「権利を奪われそうになったらどうすればよいか」をテーマとし取り組んでいる。子どもたちが理解しやすいように、日常生活で起こるであろう場面を想定して、嫌なことははっきりと嫌と言う」や「相手が嫌だと言ったらそれ以上しつこくしない」などを学習した。

昨年度に作成・掲示を定期的に行えなかった新聞に関しては、「お風呂の入り方・目のくま」などをテーマに作成・掲示を行うことが出来た。また、昨年度同様にトイレに掲示することで読みやすさを重視した。

委員会内で性的なヒヤリハットをあげてもらい子どもたちに知識として知っていて欲しいことや、ケアワーカーが生活場面の中で取り組んでいくにはどうしたら良いか話し合いを行った。今年度は「マスターベーションの後始末が出来ておらず居室からにおいがする。」

や「コンドームを居室の壁やリビングの机に飾る」などのヒヤリハットがあがった。集団生活の中で、他児に対する配慮や他者の目に触れるようなところに掲示する事は不適切であるため、それぞれの児童には自慰行為の事後処理方法やコンドームの意味・扱い方を伝えた。

４）施設内事故防止の取り組み

≪平成 30 年度方針≫

・性的事故防止対策の検証を行い、取り組みの評価・改善をはかっていく。

総括

今年度は「施設内事故防止のために」という部分をどのように行っていくかの具体化をおこなった。園で起きた大規模な性的事故を知らない世代の職員が多く在籍している事から、全体の場で当時の様子やその後の対応、性的事故後の取り組みが現在の生活場面でどのような配慮として組み込まれているかを当時対応に当たっていた、心理療法担当職員から説明を行った。当時の事を知らない職員からすると、今の支援を行う理由や同じ事を繰り返さない良い勉強の機会となった。

性的事故を繰り返さないためには、職員が日々の関わりの中で、違和感を感じ取るセンサーを働かせる事が肝心である。そのために当委員会から問題提起や意識が形骸化しない取り組みを次年度も提案していく。

５）資料等の整備

≪平成 30 年度方針≫

・有用な資料や教材を準備し、各棟・ユニットで活用しやすいように整備していく ・事例検討を行い、各棟の有効な取り組みや支援を検証していく。

総括

委員会内でそれぞれテーマを挙げて作成した。入浴の仕方、目のくまについて、肌の乾燥についての新聞を発行した。入浴の仕方についてはイラストを付けて浴室とトイレに掲示した。目のくまについて、どのような状態からくまが出来るかを分かりやすくまとめた。乾燥については、対処法、保湿の重要性をまとめた。あらかじめ誰が何月に作成するのか決めていたことにより、スムーズに掲載することが出来た。

女子児童の月経については、月経がどういったものなのか委員会内で学習会を行った。今年度から初経を迎えるであろう児童と初経を迎えた女児児童の月経周期を把握するために、月経カレンダーの再整備をおこなった。また初経セットを整備し、適齢児を対象に配布する準備を進めている。初経セットを用意することは、適齢児の児童の不安軽減を目的として取り組んだ。また適齢児に対して、「どうして月経がくるのか」という手作りの冊子をセットにする事で、子ども達の理解が深まる取り組みを行った。

月経カレンダーに関してはこどもたちにシールやスタンプを押してもらい、園の職員や看護師がなにかあった際に確認できるように取り組んでいる。実際に高２女児が月経が来

ていないと委員会で話しが挙がり、カレンダーを元に遅れてくるのか等のスムーズな対応が出来た。

事例検討では各ユニットで性（生）に関するトラブルはあったか、なにか困ったことはないかなど話し合いの場を設けてきた。トラブルや困ったことに関しては勤務年数の長い職員から助言をする事で、日々の支援のヒントを受ける場となった。

6）アンケート

≪平成 30 年度方針≫

・必要に応じてアンケートを実施し、職員の共通認識と意識向上を図っていく。 ・アンケートの結果は職員全体で共有する。

総括

今年度も生･性教育に関する職員の意識向上を目的とし委員から書く職員に対して 1 対 1 アンケートを実施した。長期休暇前より注意喚起という形で性教育員会から棟会議などで声かけを行い、会議中に言い出せない疑問、悩みなどを聞き取れるアンケートとなった。小さな事でも話題にあがるようになれば良いと始めたアンケートだがまだまだ活用の仕方があるため、今後この 1 対 1 のアンケート形式が浸透していけるように改善をしていく。

7）ルールの整備

≪平成 30 年度方針≫

・必要に応じてガイドラインなどの検討し、提案していく。 ・ルールやガイドラインの細部を精査し、また運用しながら改訂していく。

総括

今年度のガイドラインについて、既存のものは大きな変更はなかった。恋愛のルールに関しても変更はなく、今後状況に応じて検討していきたい。入浴に関して、現行のガイドラインから大きな変更はなかった。今後のルールやガイドラインの整備などに関しては、恋愛と入浴の部分で行っていきたいと考えている。

≪平成 31 年度方針≫

1）研修
・研修に参加し、職員の性（生）教育に関する知識や認識を高める。
・外部の研修に参加し、施設間職員と情報共有を行うことで性教育に関する取り組みの幅を広げる。

2）子どもへの性教育
・性的な言動があった児童に対して、ユニット、棟と連携して適切な性知識、性教育を検討し、実施する。
・各棟と連携し、子どもに必要なワークショップの企画を行う。

3）施設内事故防止の取り組み
・性的事故防止対策の検証を行い、取り組みの評価・改善をはかっていく。

4）資料等の整備
・有用な資料や教材を準備し、各棟・ユニットで活用しやすいように整備していく
・事例検討を行い、各棟の有効な取り組みや支援を検証していく。

5）アンケート
・必要に応じてアンケートを実施し、職員の共通認識と意識向上を図っていく。
・アンケートの結果は職員全体で共有する。

6）園内のルール整備
・必要に応じてガイドラインなどの検討し、提案していく。
・ルールやガイドラインの細部を精査し、また運用しながら改訂していく。

平成 30 年度性教育委員会　収支決算書

収入の部

項目	金額	備考
性教育教材費	20,000	
合計	20,000	

支出の部

項目	金額	備考
性教育教材費	10,630	サニタリーカレンダー購入
合計	10,630	

平成 31 年度予算（案）

項目	金額	備考
性教育教材費	20,000	
合計	20,000	

児童会運営委員会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

青空棟　櫻井　あかね
加藤　輝
太陽棟　深井　宏起
道上　紗月
さくら棟　横田　真衣
稲葉　晃大

≪2018 年度方針≫

○児童会活動として話し合いを月１回行う（第２金曜日）
・話し合いの際に、子ども達に内容が伝わりやすくより円滑に話し合いを行なうことができるよう、資料を作成しそれを基に話し合いを行なう。
・ユニットの話し合いで出た意見・要望などを児童会でも共有し、話し合いを行う。
・児童会内での話し合い結果を各棟に伝達し、日々の生活に反映する。
○園全体の行事を企画し、子どもとの話し合い結果を反映させ『自分たちで作り上げている』という意識を持てるようにする。また、積極性や発信力を養う取り組みの一つとする。
○生活のしおりの話題を用いて、園のルールの確認や児童と意見交換をする。必要に応じて、ルールの見直し・改定を行う。
○安全マップを用いて、年度初めに児童と地域の危険箇所の確認を行う。
○様々なスポーツに触れ合う機会を提供することとし、スポーツクラブとして活動を行っていく。
・年間の活動を通して、挨拶等の習慣を身に付けることや、他児との活動の中で協調性や積極性を身に付ける。
○江戸っ子杯の参加に関しては随時検討していく。

１．全体総括

子ども達の話し合いを自治会的な役割として機能させるため、日々の生活の中で疑問に感じている事や要望について話し合いを行った。話し合いの中では意見や要望を主張するのみでなく、何かを変えたいと考える時には責任が伴う事を伝えた。しかし、子どもの構成もあり、昨年度に比べ意見があまり出ず、充実した話し合いを行う事が出来なかった。子ども達が話し合いをしやすい議題を選出し、話し合いのプロセスを職員側で組み立てる作業を導入(話し合いのレジュメ作成)する事で、話し合いの形が出来上がってはきたが、活発な意見交換を行う場としての機能は低い。自治会的な役割として、話し合いの精度を上げていくことが今後の課題であると感じた年度であった。

職員集団としては、昨年度から２名の変更があり、比較的勤続年数の浅い職員構成となった。年度初めに、報告・連絡・相談の重要性について共通認識を図った。また、年間予定の作成、都度の見直しを行う事で、昨年度課題として挙がっていた先を見据えての計画立てや、確認不足による抜けを減らすことが出来た。会議の場では分からない事はその場で聞き、一人ひとりが自身の意見を発言できるようにした。初めのうちは発言者に偏りがあったが、会議の雰囲気作りを意識したことで次第に改善していき、一人ひとりが率先して自らの意見を発信する事が出来るようになってきた。勤続年数の浅さから考えの幅が狭まってしまう場面もあったが、他職員に意見を聞くことの重要性を共有し、より多くの意見をもって委員会に臨むことが出来た。

家庭的養育を目指していく上では、この児童会活動というもの自体は対極にあるものと考える。子ども達の意識も少しずついま目指すべく家庭的養育という方向に向かっている中、どのようにして活動を続けていくのかが今後の大きな課題の一つである。

２．児童会(毎月第２金曜日実施)

話し合いの環境については昨年度同様に小さな空間で話し合いをする事でより集中力を高め、質の高い話し合いになることをねらいとしラウンジで実施した。以下では、各会ごとに総括する。

【小学生会】

小学生会の児童会の活動として、毎月第二金曜日に話し合いを実施してきた。低学年児が多いことから落ち着いて話し合いを行うことが難しいとの判断になり、年度途中から低学年（1～3 年)・高学年（4～6 年）に分けて話し合いを行う形式へ変更した。低学年に関しては決定事項等伝えることを中心に集中力が持つ短時間の中で行い、高学年に関しては児童が主体となり行事や登校班についての話し合いを行った。学年に合った話し合いの形や内容を精査しより自治会的な活動へと繋げてきた。

小学生会では主に納涼祭でのダンス発表や登校の振り返りを行った。納涼祭のダンス発表ではやりたい児童が発表を行うこととし、5 月の児童会でダンス発表をする児童の最終集約を行った。最終的に 7 名の児童で発表を行うこととなり、職員と共に話し合いを重ねガッツ・ソーラン節を踊ることになった。夏休みの期間にはフォーメーションや掛け声等を職員とともに確認し、短時間の中でより集中できるように練習に取り組んだ。当日の発表では全員でおそろいの衣装を着て踊り、見ていた観客に拍手をもらうことや、「上手だった」等と称賛の言葉を貰い参加した児童からやり切った達成感を感じられた。ダンス発表をしない児童も何かしらの形で携わることを提案すると、児童自ら客引きの看板を率先して作る姿があり、当日には看板を提げて呼びかけをすることやステージ下で手作りのうちわを振り大いに盛り上げ、小学生全員で協力して成功させることができた。

登校班については、今年度から学校が合併しスクールバスでの登校へ変更となった。今年度も低学年が多いことから班長への負担が軽減することを考慮し、高学年の間に低学年

を入れるような班編成をした。今年度は月 1 回の児童会の時間を利用して登校班の振り返りの機会を設けてきた。年度初めは慣れないこともあり、バス停までの道のりやバスの座席でのトラブルがあったが、振り返りノートを棟ごとに保管し、トラブルがあった際にはその都度ノートを用いて棟職員から対象児に話をする機会を設け意識の向上を図った。毎月、個々で登校班の目標を立て振り返りの場を設けてきたが、ノートを開かなければ目標が視覚化できない為、意識することへは繋がらなかった。その為、11 月の児童会から振り返りノートを廃止し、児童から挙がった話から安全な登下校をするためにはどのようにしていけばいいのか話し合いを行い、改善を図った。初めは文句や悪口のようにその場の感情で発言してしまうことがあったが、振り返りをしている意味について再確認し、よりよくするために感情的にならずに高学年を中心にそれぞれ感じていることを話に挙げることができた。また、冬休み前にはスクールバスの添乗員さんからバスの乗り方（座席の移動・物を投げる等）に関して指摘され、会議日に児童を集めスクールバスの乗り方に関して改めて話をした。バスにきちんと乗ることができていた児童は数名であり、それぞれが気を引き締めていくようにと再度伝えた。翌週には振り返りの場を設け、児童たちも「自分はきちんとできた」と自己評価し意識して行えている様子が窺え、添乗員さんからもよくなったと評価をもらい、少しずつ良くなってきた。

【中学生会】

中学生会の児童会の活動として、小学生会と同様に毎月第二金曜日に話し合いを実施してきた。今年度も職員が話し合いに混ざり話を進行してきた。昨年度同様に児童が興味関心が持てるようにイラストや写真を用いた資料を作成し話し合いを進めた。子どもたちが資料に目を通しやすくなり、内容の共有に繋げることが出来た。職員の資料作成者は委員会時に話し合いを行い、役割分担をしたことで抜けなく行うことが出来た。

話し合い中にふざけてしまうことは多々見られたが、職員が話す内容の軌道修正を行うことで、子どもたち一人一人の意見が飛び交う場面がよく見られた。子どもたちだけで一つの課題に対しての結論を導き出すまでには至らなかったが、「ここはこうした方がいいんじゃない」といった活発的な意見交換が出来ていた。納涼祭の出し物の話し合いについても、様々な意見が出ており、メリット・デメリットなどを考えながら話し合いを行った。当日の準備では時間通りに集合出来ないことや、食品の調理に意欲的に参加出来なかった児童も見られたが、納涼祭本番では元気な声で客寄せをしたり、子どもたち同士で声を掛け合い販売をすることが出来ていた。自分の役割に責任を持って活動出来ている子どもたちの姿が見られた。

今年度、子どもたちから靴代の増額やバスケットゴール付近の環境整備などといった様々な要望が上がった。しかし、夕飯の時間になっても外で遊び続けるなどといった時間を守らない児童がいたため、まずは自分たちの生活を見直し、園の約束を守らなければいけないことを都度伝えてきた。また、今あるものを変えるということはその分約束事に対して

の責任が伴うことも伝えてきた。次年度も本来の自治会的な役割を果たし、自分達の生活をよりよいものに出来るよう子ども達と話し合いを重ねていく。また、話し合いの議題について自分達で発信できるよう働きかけていく。

【高校生会】

自立に向けてアルバイトをしている児童もいるが、参加を促すとアルバイトのない児童に関しては積極的に参加する姿があった。主に全体行事の意見集約を行ってきたため、毎月の話し合いをせず、数カ月に一度の開催とした。話し合いで意見を聞くと自身の意見を述べることが多くなり、児童会の場は感じていることを話して良い場所であるとの子ども達の認識が出来てきた。

次年度も高校生会は毎月の実施はせず、子どもからの要望や生活に対しての思いを各ユニットにて聞き取りながら、意見表明の場として必要に応じて話し合いを実施していく。

３．全体行事

全体行事に関しては、子ども達へやりたいことの聞き取りを行い、BBQ とスポーツ大会が候補として挙がった。小学生、中学生、高校生を分けて実施するのか、合同で行うのか、それぞれの学年から意見を集約した。BBQ は全体で行うこととし、スポーツ大会は小学生、中高生に分けて実施計画を進めた。分けて行う理由としては、運動能力の差があり、互いに思い切ってスポーツを行ないたいとの意見が挙がった。スポーツ大会は子ども達から出た意見を大切にし、職員はまとめ役として話し合いに参加することで、子ども達からの新鮮な意見を中心に話し合いを進めることができた。BBQ では小学生から中高生まで与えられた役割を行い、楽しみながら食事をすることが出来た。中高生のスポーツ大会では、バスケットボールを主に行った。試合の後に他児を労う姿、試合中に応援をする姿と様々な児童の姿を見ることが出来た。小学生のスポーツ大会ではリレー・パン食い競争・ドッジボールを行った。自身が競技をしていない際には他児を応援する姿もあり、楽しみながら活動を行なうことが出来た。テンションが上がり落ち着かない子どもがいた為、他児から距離を取りバス内でクールダウンし、しっかりと活動を行なう事を職員と確認した。その後は、最後まで参加をすることが出来た。子どもたちが話し合いを行い、自分たちで作り上げていくのが児童会であるということを今後も大事にしながら話し合いをしていく。

４．生活のしおり

昨年度より継続して、全職員への配布、子ども用のしおりの完成・配布を目標に取り組みを行なってきた。実際の生活とリンクしていない部分があったため、各棟から出た意見をすり合わせ、より実際の生活とリンクするしおりになるよう内容を精査した。夏休み前には、職員・各棟へ配布を行った。次年度以降も、生活実態に沿った内容になっているのかということ、子どもから挙がってきた意見を参考にし、必要に応じて見直しをしていく。

また、夏休み前の職員会議で、職員を対象にした生活のしおりの学習会を実施する事が

できた。今年度は夏休み前の一度のみの実施となった為、次年度は長期休暇前に行なう事とする。

５．安全マップ

小中学校が移転したため、子ども達から新たに挙がってきた危険箇所の確認・共有をし、安全マップの作成を行なった。表紙には、本園の電話番号・北警察署の電話番号を記載した。夏休み前の児童会時、安全マップの説明を行なった。また同時に「こどもを守る 110 番の家」の説明を行なった。今後も必要に応じて見直しを行ない、子ども達の安心安全な生活に役立てていく。

６．スポーツクラブ

今年度も様々なスポーツに触れることを目的として行ってきた。年度当初に再度活動に伴う約束毎を確認し参加の希望を取り、昨年度までは小学生全員の参加だったが今年度は参加を希望しない児童もいた。活動に対して自身で行うか選ぶことで、やるからには一生懸命頑張ろうと話をしながら行ってきた。活動に対しては、昨年度同様にスポーツクラブノートに目標を個人で設定し、活動後には振り返りを行い達成する喜びや次回の意欲に繋げてきた。活動後には、職員側から活動を通してのコメントと活動時の写真を載せることで、視覚的にも前回の活動の振り返りを行う事が出来た。

昨年度に引き続き児童の学年が低い中で特性に配慮した活動が求められた。活動は、前年度に引き続きチームスポーツを残しつつ、パークゴルフや野球体験など体験する機会の少ないスポーツも取り入れ活動を行ってきた。パークゴルフでは、使用するクラブに対する危険性の伝達が不足していた部分から怪我をしてしまう児童が出て活動を中止せざるおえない状況になった。再発防止について職員会議で意見を貰い委員会内で状況に応じた対応を協議し、子ども達への注意喚起を徹底することなどを話し合った。野球体験では、つくば国際東風高校野球部に協力を頂き交流を図り、高校生の練習を見せて貰ったり、実際に硬球を使用しての体験や学生と一緒にソフトボールを試合形式で行うなどとても貴重な体験となった。子ども達も高校生との交流を通して、野球に関心を持ち実際に教えて貰うことで、いつもとは違う緊張感もありつつ、振り返りでは「楽しかった・またやりたい」などの言葉が聞かれた。

年度当初は今年度から活動を始めた子はスポーツの難しさから活動を拒否する場面もあった。個々に話をしながら活動の中で各自に出来る事を行いつつ、年長児が優しくサポートしてくれる部分もあり最後まで活動に参加出来た。活動を通して、児童の成長も感じることが多かった。

スポーツクラブとして公共の場に出て活動するにあたり、公共の場でのマナーなど場面に応じた行動が出来るよう活動前には話を行い、意識付けを行ってきた。児童の特性の部分で配慮が必要な児童が多いため筑波大学の学生ボランティアの協力を仰ぎ、活動の充実

と活性化を図ってきた。

3 年間の活動を通して、目的としていた様々なスポーツに触れるという部分には値する活動を行ってきた。3 年間の活動を通して子ども達の成長を感じる事ができ良い経験となったが、児童会活動として子ども達主導の活動ではなく、職員主導での活動の企画・立案・実施という形が出来上がってしまった。子ども達が主体的に活動を行う児童会活動と矛盾した形となってしまっている為、次年度以降のスポーツクラブとしての活動は廃止とする。次年度は学年ごとの話し合いで活動の要望をあげてもらい、企画・実施・振り返りを子ども主体で行えるよう支援する。

◎30 年度年間計画表

	内容	場所
5/20	ドッチボール	吉沼体育館
6/17	バスケットボール	下妻総合体育館
7/15	サッカー	吉沼体育館
8/19	プール	ウェルネスパーク
9/16	パークゴルフ	小貝川ふれあい公園
10/14	野球体験	つくば国際東風高校
11/18	バトミントン	吉沼体育館
12/16	スケート	宇都宮スケートセンター
1/20	卓球	吉沼体育館
2/17	ボルダリング	ユーワールド
3/17	振り返り	地域交流スペース

7. その他（江戸っ子杯など）

江戸っ子杯に関しては、年間を通してスポーツクラブで様々なスポーツを行っており、練習時間の確保も難しく、参加が難しいとの判断になり今年度も参加していない。次年度の江戸っ子杯の参加についても委員会内で話し合いを行い随時検討していく。

8. 予算収支報告

今年度は、スポーツクラブの活動費で更なる活動の充実を図るために備品を揃えることも行ってきた。充実したことで全員が短い活動時間の中で積極的に活動を行う事が出来た。

小中高生全体の児童会行事は、委員会内での協議、子ども達との話し合いを重ね今年度は全体でのバーベキューと小学生、中高生に分かれてスポーツ大会を実施した。

○次年度予算（案）

項目		単価	人数	回数	金額	備考
ドッチボール活動費					20,000	※江戸っ子杯参加時交通費として
児童会活動費	子ども	2,000	40	2	160,000	
	職員	2,000	6	2	24,000	
給食費	子ども	1,700	40	1	68,000	
	職員	1,700	6	1	10,200	
合計					282,200	

※児童会活動費子ども・職員ともに１回分はUBS習い事資金より支出とする。

≪2019年度方針≫

○児童会活動として話し合いを月１回行う（第２金曜日）
- ・子ども達に内容が伝わりやすく、より円滑に話し合いを行なうことができるよう、資料を作成しそれを基に話し合いを行なう。
- ・ユニットの話し合いで出た意見・要望などを児童会でも共有し、話し合いを行う。
- ・児童会内での話し合い結果を各棟に伝達し、日々の生活に反映する。

○園全体や学年ごとの行事を企画し、子どもとの話し合い結果を反映させ『自分たちで作り上げている』という意識を持てるようにする。また、積極性や発信力を養う取り組みの一つとする。

○生活のしおりの話題を用いて、園のルールの確認や児童と意見交換をする。必要に応じて、ルールの見直し・改定を行う。

○安全マップを用いて、年度初めに児童と地域の危険箇所の確認を行う。

○江戸っ子杯の参加に関しては随時検討していく。

行事委員会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針（案）

青空棟	渡辺　茜
太陽棟	柏谷　杏子
さくら棟	栗原　諒人
調理部	萩ノ谷　歩美
調理部	稲葉　智美（2018・12～）
専門部	斎藤　朋義

2018 年度方針

・事業計画書、総括方針をもとに委員会メンバー一人ひとりが、目的の共有、役割分担を通してそれぞれが責務を果たすことで魅力ある全体行事を企画、実施をしていく。
・地域交流、地域還元を目的とした活動を通して、地域との繋がりを築いていく。

Ⅰ　全体総括

今年は、６名での委員会運営となった（12 月～6 名体制）。2018 年度の委員会の目標として「職員が楽しむ気持ち（笑顔）を持って各行事に取り組むことで、子ども達が楽しめる行事になる。みんなで楽しもう！」を掲げた。楽しむためには丁寧な準備・運営が求められた。昨年度の反省を生かし同じ失敗は繰り返さない様に意識して委員会として取り組んだ結果、昨年度の課題はクリアすることが出来た。しかしまだ足りない部分もあるため残りの行事の企画・運営を滞りない様に実施する。また各々が個人目標も設定し委員会活動を行ってきた。昨年度から行事委員会を継続した職員が 3 名の中でスタートした。はじめての職員に対しては、各行事が持つ目的や施設としての全体行事の意味合いを確認しながら継続している職員とペアを組み各行事に参加した。一緒に動くことで言葉だけでは得られない活動をより把握出来る取り組みとなった。全体行事等を知ることは職員にとって大事なことであり、委員会内で情報共有を密におこなった。

各行事がスムーズに企画・運営出来るように委員会内での役割分担を委員それぞれが役割をある程度均一にすることで各行事の準備に時間を持ってあたれる様になった。

今年度の大きな取り組みの柱として①全体行事のあり方②地域との繋がりを持てる取り組み③筑波大学生との話し合いがあげられる。①については施設の全体行事について小規模化・家庭的養育が進められる中でその目的と照らし合わせて施設の行事について議論を重ねた。小規模化・家庭的養育だから全体行事はなくそうと簡単な議論ではない。家庭に近づけるように取り組む反面やはり施設であることには変わりない。施設だから集団だから出来ることがあることを議論の中で再認識した。全体行事のあり方については今年度中に委員会としての考えを提示する。②については今年度、前野地区の清掃活動に参加した。年 3 回の活動に参加して地域住民と汗を流すことで繋がっていくことを実感した。来年度も継

続実施する。③については委員会として筑波大学生の存在は行事運営を考えてもとても大切な存在であることを常に考え行事を運営してきた。ただ感謝の気持ちを忘れず話し合う場を 2 回設定した。話し合いの中で職員が気づかなかった学生側の考えや想いに触れることが出来、今後の行事活動にプラスに作用する取り組みとなった。本来ならば筑波大学生ありきの行事運営になってはいけないとの考えのもとで、企画をおこなうが、納涼祭については筑波大生の参加がないと特に駐車場の運営は厳しい状況である。なるべく職員で回せる行事の実施が出来るように配慮した。

最後に委員会活動を通して、経験することで感じること・考えることがとても多いと感じた。行事運営にあたっては準備・当日の運営・片付けで行事委員会職員の勤務等、調整してもらい、委員会としてみなさんに支えられての活動であることを再確認し、感謝の気持ちを忘れず来年度も「子ども達の笑顔のためにそして職員も楽しめる行事となる様に」力を注いで行く。そのためには改めて職員間の協力が必要であると実感している。

2018 年度　園行事について（事業計画書抜粋）

地域の方々と一緒に過ごせる機会となるように、取り組んでいきます。

①納涼祭

毎年、地域の方々の参加を得て実施し、地域の方も楽しみにしてくれる行事です。ボランティアの協力も得て、焼きそば、かき氷などの模擬店を出店しています。また様々な企業や篤志家からも物品等々の寄附をいただき、開催にあたっては大勢の方達にご協力いただいています。近隣の方には、ミニバザーが好評です。

②餅つき・門松作り

地域の方達にも参加して頂き、毎年１２月２７日にミニ門松作りと餅つきを実施しています。自作したミニ門松はお持ち帰りいただき、つきあがった餅は一緒に食べる機会を持っています。また近隣の方達にも餅を配り地域の理解を得ていけるように取り組んでいます。実施には、学生ボランティアの協力を得ています。

③歩け歩け大会

毎年、外部支援団体やボランティアの協力を得て、筑波山まで往復する歩く会を実施しています。移転後は、旧筑波駅から筑波山頂まで年齢や体力を考慮して完全走破するグループとケーブルカーなどを利用するグループに分かれて実施しています。大勢の地域の方が参加できるように、実施時期や内容を検討しながらすすめていきます。

Ⅱ　納涼祭

納涼祭参加人数はビンゴカードの配布枚数から計算すると約 500 人ほどであり、多くの方が参加してくれた。昨年度同様にステージについては安全面を最大限に考慮して業者にステージ設営を依頼する形となった。ステージ発表はその団体が日頃の練習の成果を発表する場となるため環境整備は重要となる。安心して発表が出来るように整えることが求められている。今後、ステージについては施設として購入できるように準備して行くのか業者に依頼し続けるのか判断する時期に来ていると考える。全体行事の在り方とリンクする部分もあるため全体行の在り方で来年度以降のステージ設営方法については提案したい。

業者とはステージ・照明・音響について昨年度の課題を元により参加者が喜んでもらえる環境整備に必要なことは何かを話し合い形にしてきた。今年度はより参加者に聞こえやすい音響、ステージ発表者が目立つ照明に力を注いだ。音響・照明共に成果はあったが、音響に関しては設置場所からの距離が近い場所では音量が大きく受付でチケット購入者の声が聞き取りにくい等の課題もあり受付の場所も来年度は配慮する必要性がある。事前準備では昨年度の反省を生かすために再度、課題点をピックアップしたことについてはもれなく出来たが、ピックアップしていなかったことについては漏れてしまう部分があった。具体的にはレンタルトイレ内の照明が抜けていたことで利用者が使いづらかったことは反省しなければならない。

新しい取り組みとして 3 点があげられる。①ステージ発表に関するパンフレット作成②地域の方に発表の機会の提供（チアリーディング）③筑波愛児園以外のブースの設置（キャンピングカー）である。①のパンフレットについては配布場所・時間およびそのパンフレットがより必要性の高いものになることが重要となる。一つの例としてパンフレット内にビンゴ抽選番号を記載して切り取り切り取った半券をビンゴ時に引く用に使い、パンフレットは当たった時の半券として活用する等が考えられる。②・③についてはより地域の方の参加が出来るように考えていきたい。納涼祭は地域の方に日頃の感謝と筑波愛児園を知ってもらえる絶好の機会と考える。

運営にあたって大きく変更した点として開始時間を早めた。理由としては開始時間を早め終了時間を早くすることで多くの参加者に最後まで楽しんで頂けることを目的とし実施した。時間帯を早めることをポスター、HP、回覧板などを使って伝達した。そのため時間帯を変更したが序盤から参加者を確保出来ていた。早く終了することについては途中で雨や雷がありスケジュールが変わったことで総括まで出来ない状況であるため、来年度も同じような時間帯で実施する。

今年度は天候が不安定なこともあり、タイムスケジュール管理を徹底した。途中、雷が発生してステージ発表をどうするか決断が求められたが、安全を第１に考え、職員発表・水守太鼓保存会の演奏は中止とすることにして、ビンゴ大会を繰り上げて実施する決断をした。中止となった両団体には事情を説明して理解を求めた。両団体ともに理解をしてくれたこ

とは委員会として改めて感謝したい。その後、職員発表について別の機会での発表が出来ないか模索したが実施するに至らなかったことは残念であった。

最後に片付け等についてはここでも昨年度の反省から時間で区切る対応をおこなった。しかし雨の中での作業であったこともあり想定していた片付けにはならなかったが、全職員で協力して片付けられたことは次につながるものとなった。業者やステージ発表者へのお礼については手作りの色紙を作り発送し、とても喜ばれるものとなった。

毎年、業者（クリエイトレント）にステージ・照明・音響をお願いしている。いつまでレンタルでやっていくのか少しずつ施設として必要物品を購入していくのか考えた時に毎年少しずつ購入をしていくことを考え予算化したい。

最後にあらゆる人に感謝をもって本行事に取り組んだ。人と人を繋げるものは感謝の気持ちである。そのことを大切にして来年度もよりよい納涼祭になるように取り組んで行く。

Ⅲ　餅つき・門松作り

本行事では事前に水守育成会へのチラシ配布を行い、近隣住民への行事参加を促した。しかし当日は、児童の友だちが数名参加するのみであった。地域住民の声として育成会だけであるとチラシを見る人は限定されてしまうため地区の回覧で回してもらうことで地域の参加者も増えるのではないかとアドバイスをもらった。次年度は近隣へのチラシ配布をするなども検討し、地域の参加が増えるようにしていく。

筑波大学生の参加については、役割分担はせず、子ども達の安全面に配慮してもらいながらミニ門松・しめ縄飾りのブースで多くの子ども達に関わってもらう様にした。見守り体制を確保することが出来、怪我人等なく無事行事を終えることが出来た。

門松・しめ縄飾りに使用する物品については、昨年度より予算が増額したことにより松の購入が可能となった。ミニ門松の飾りや固定するための紙粘土、門松作りに必要な工具等を購入したが、他必要な物品については各職員の寄付で調達した。寄付してくれた職員の協力によって行事を完遂することが出来、感謝する次第である。しかし今年度の予算内で来年度門松作りの物品については全て購入出来ることが本年度の取り組みでわかったため来年度は全て購入して対応する。

事前準備の活動内容の精査・役割分担を明確にしたことで、当日は円滑に進めることが出来た。昨年度の状況を参考とし、竹取りにどの程度の人数・時間が割かれるか、買い出しについて検討し、事前準備日前より行事委員会の勤務内で行えるよう、調整した。また、準備時に竹取り後、竹のカット作業を行った。この作業により、職員・児童・学生に怪我はなく、当日のミニ門松作りもスムーズに行う事が出来た。行事後の片付けについては、ある程度ミニ門松の飾りやしめ縄飾りの縄を使い切っていたこともあり、行事委員会のみで迅速に撤収することが出来た。

例年園庭で食事を摂っていたが、寒空の中で凍えている様子が鑑みられ、風などで食事用のトレーが飛んでしまうなどがあったため、地域交流スペースで食べることとした。室内で

寒さもしのげたということも有り、各々のんびりと食事を取ることが出来た。その結果、餅の食べる量も増加した。また、室内にしたことで食後の片付けもスムーズに行えたことも利点であった。

衛生面から今年度も部活やバイト等で参加できなかった児童分の取り置きはしないこととした。食事場所にはアルコール消毒を常備し、手洗いの呼びかけを、徹底した対応を取ったことで食中毒や体調不良者は見られなかった。玄関前の門松作りでは、当初学生の協力も得る予定であったが、事前準備で樽の縄をつけるなどの下準備を行っていたことも有り、職員のみで行った。昨年度は重量が軽く強風で倒れてしまった経緯があったため、今年度は砂を購入し、昨年度残っていた土と合わせて利用した。重みが増したことも有り、倒れてしまうことはなかった。

ミニ門松・しめ縄飾りを作る際は、多くの子どもが参加してくれる様子が見られ、個性豊かな作品ができあがっていた。ミニ門松の飾りについてはひとり 2 個と制限はあったものの、きちんと守ることが出来、行事終了後には数個残るのみでほとんど使い切ることが出来た。しめ縄飾りについては学生や職員に作り方を教わりながら熱心に作成しており、楽しく行っている様子が見られた。またユニット玄関に飾っている姿もあった。

Ⅳ　歩け歩け大会

前年度は行事委員での下見を行い山道の安全確認等を行った。しかし実施日の数日前に雪が降ってしまい、山道の下見に行った結果、山道が凍りついていたため危険であると判断し実施には至らなかった。そのため、今年度行う歩け歩け大会を次年度の総括にあげる。

各種手続き一覧表

項目	手続き場所
① 道路申請	つくば北警察署
② イベント保険	JA つくば市筑波西支店
③ 駐車場	つくば市役所公園施設課
④ マイクロバス	株式会社信輝
⑤ 食事	筑波山山頂の仲の茶屋

Ⅴ　新たな取り組み

①筑波大学生との話し合い

今年度 4 月 11 日と 12 月 12 日に学生ボランティアとの話し合いの場を設けた。4 月には昨年度の行事の反省と感謝の気持ちを伝える場とした。12 月は各年度のリーダー3 名と行事に参加した学生の率直な意見を聞く場とした。学生からは行事の際、3, 4 年生が主に児童と関わることが出来るよう、分担を事前に考えているとのこと。4 月のオリエンテーションの際にはまだ 1 年生が決まっていない状況であるため、行事への参加について説明のタ

イミングが難しいことがあがった。また今年度の納涼祭では学生の参加人数が少なくなってしまっていたため、一人ひとりの負担が大きかったとのこと。今後、参加を促すなど、各行事についての説明する場を事前に設けられるようにしていく。納涼祭で作成した T シャツに関しては、学生内でも学生ボランティア用の T シャツを作るため、もし園の物を一緒に作るのであれば 4 月時点で教えて貰いたいとのことであった。歩け歩け大会では、道順について不安があることや、降りた順に車で帰園するため学生ひとりで小学生数名をまとめなければ行けない状況があって難しかったとのことであった。餅つき・門松作りでは玄関前の門松作りの役割にあたった学生は子どもと関われないと言うことも意見として挙がった。行事に関してはなるべく学生が子どもと関われるような配慮が必要であると感じている。卒園式についてはどの程度学生は参加して良いのか質問があった。園でも多数の来客があるため、明確な人数を伝えられるようにしていく。

②地域還元清掃活動

今年度、前野地区に移転してはじめて地域の活動に委員会として参加することとした。参加の理由としては、筑波愛児園が前野地区にある中で地区の活動に参加していないこと。地域住民と触れ合うことで地域住民とより繋がりを深めることを目的とした。年間 3 回の清掃活動に参加したことで、地域住民の声を直接聞ける場となった。「納涼祭は毎年楽しみにしているよ」「家にいらないものがあるから寄付出来るか」等、話をいただくこととなり、来年度も活動を継続したいと考える。今年度は 1 班に所属していたが、来年度は 2 班の所属となる。参加者については行事委員会だけでなく、地域支援担当職員とも連携を図り参加の継続を図って行く。

【前野地区で行われている清掃活動の詳細】

班の清掃行事→年２回
赤城公園清掃→年１回（6 月か 7 月のどちらか）
→合計年 3 回

・筑波愛児園は住所としては上内地区 2 班に所属する（前年度 1 班）
（区費は払わなくてもよい）
・清掃時に出される飲み物等は区費を払っていなくても準備してくれるとのこと
・年度の切り替わり→前野地区は１月とのこと
（現在新体制に切り替わっている）

③全体行事のあり方について

全体行事について議論を重ねてきた。委員会として全体行事のあり方について今年度中に提案をする。

Ⅵ　会計

委員会では、愛児園で行う全行事通しての会計担当を決め、予算請求を一本化する事にした。しかし、全員が会計担当１人に任せてしまうと、どの行事で何を購入すればいいのか、何が必要なのかが分からない為、行事毎に買い出し担当を決め、分担する事にした。

納涼祭においては、支出内訳のデータを利用したり、前年度の記録を確認しながら、物品購入をする事が出来た。各コーナーの担当者に請求精算を責任もって行ってもらったが、予算を少しだけオーバーしてしまうコーナーがあった。これは、全体の予算から支出する事で対応出来たが、購入する前に予算の確認をもう一度する事に気を付けてもらいたいと伝えた。又、納涼祭後のアンケートには、お客さんが多く来た為、景品が足りなかったというような内容があったことにより、予定していた人数よりかなり上回った人数が来た事が見えてくる。その為にも教養娯楽費の増額をしたいと思う。食品販売では、途中で雨が降ってきてしまい中止になってしまったのにもかかわらず、かなりの多くのお客さんが来てくれて早々と完売してしまう食品があった。食品を楽しみにしてくれているお客さんが多い為、嬉しい気持ちでいっぱいだが、これ以上食数を増やすとなると、調理員だけの作業では限界がある為、人数配置の見直しが必要だと思う。また、他に新たな食品を考える事も一つの方法だと思う。このことにより、食品についても予算の増額をしたいと考える。

餅つき・門松作りは、委員会で一括して請求精算をし、事前準備日に分担して行った。昨年度より増額した分、門松作りに飾る材料を花屋に一括して依頼する事が出来たので、豪華に見える材料を沢山用意してくれて、立派な門松を作る事が出来た。今回の事により実際に門松を作るのにどの位の量が必要なのか、大体の単価が分かったので、来年度は残った予算を工夫し、職員から頂いた藁や熊笹なども購入出来るようにしていきたい。食事については、今年度から地域交流スペースで昼食として食べる事にした。子ども達のお友達も何人か来てくれて、屋内で食べたことにより美味しそうに沢山食べていた。

これからの行事については、今後、各担当と連携を取り進めていきたいと思う。

また、来年度より消費税の値上がりにより各行事の予算の増額をしたいと考えている。

【教養娯楽費】

行事	2018年度予算	今年度執行額	2019年度予算（案）
納涼祭	￥500,000	￥481,560	￥600,000
餅つき・門松作り	￥100,000	￥80,766	￥100,000
歩け歩け大会	￥100,000	未実施	￥110,000
卒園式	￥50,000	未実施	￥55,000
高校進学を祝う会	￥20,000	未実施	￥22,000

【給食費】

行事	2018年度予算	今年度執行額	2019年度予算（案）
納涼祭	￥200,000	￥188,619	￥250,000
餅つき・門松作り	￥60,000	￥58,925	￥80,000
歩け歩け大会	￥245,000	未実施	￥270,000
卒園式	￥150,000	未実施	￥170,000

Ⅷ　2017年度、総括できなかった行事

例年行事委員会総括では、総括後にある行事があり、総括ができない行事があった。今年度は総括で、実施していない行事と、前年度総括出来ていない行事を合わせ、企画・実施に至るまでの経緯を園全体で共有し、次年度行事委員会を担う職員の方へ引き継いでいきたいという思いから総括をおこなった。

①　2017年度卒園式

卒園式では、卒園生１名を温かく、園を出た後、羽ばたく場所で頑張れるように、委員会内で役割分担を明確にし、準備を進めていった。今年度も前年度同様愛児園を巣立って行く子どもに職員全員から気持ちを伝えたいそんな思いで、職員の合唱を食事会時に行った。今回は対象児童が 1 名という事もあり、子どもの好きなアーティストの曲を選出した。それを基に事前にスケジューリングを行い合唱の練習を職員会議後に行ってきた。当日は職員が一丸となり対象児童へ合唱を届けることが出来た。個々の気持ちを歌に乗せて発表し子ども達も職員の真剣な姿を見ることで驚きもあったが、心に響くものとなった。前年度の課題や良かった部分も踏まえ、今年度は子ども達が快く旅立つことが出来るように運営をしていく。

②　2018年度高校進学を祝う会

進学を祝う会は、前年度の行事委員会で事前準備を前日に行い 4 月 3 日に実施した。今年度は３名の児童が高校進学を迎えた。初めて自己選択し、高校生となった子ども達は、全職員、全児童の前で、学校生活や園生活での抱負を発表した。

担当職員からも高校生１人ひとりに新生活での期待や応援する気持ちを伝える場となっている。その後、新任職員の紹介やユニットや棟の１年間の目標を発表した。

今日の式での決意を忘れずに私達職員も子ども達の成長を見守っていきたい。そして、全職

員が一丸となって 3 名が 3 年間高校に通うことが出来るようにサポートしていきたい。

Ⅸ　次年度計画（案）

平成 2019 年度　　全体行事実施予定

内容	実施日	備考
高校進学を祝う会	2019 年　4 月 5 日(金)	前年度の係が担当する
納涼祭	2019 年　8 月 26 日(月) 予備日：2019 年 8 月　27 日（火）	
餅つき・門松作り	2019 年　12 月 27 日（金）	
歩け歩け大会	2019 年　6 月 8 日（土）	
卒園式	2020 年　3 月 14 日（土）	

2019 年度方針

・事業計画書、総括方針をもとに委員会メンバー一人ひとりが、目的の共有、役割分担を通してそれぞれが責務を果たすことで魅力ある全体行事を企画、実施をしていく。
・地域交流、地域還元を目的とした活動を通して、地域との繋がりを築いていく。
・全体行事のあり方について決まった内容の企画・運営をしていく。

人材対策委員会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

青空　茂木　竜也
さくら　兵藤　鈴子
太陽　山田　晃平
つくし　端　みどり
調理　桜井　直美
専門　川村　いくみ
立川　弘司

≪2018 年度方針≫

1）人材の確保
◇情報収集を行い、より効果的な人材確保につながるような取組みを具体化し、実施する。
◇関係する係と連携し、就職希望者の把握と連絡を確実に実施する。
◇学校等へ求人票等を広報し、さらなる応募につながるような取組みを実施する。
◇施設長と密に協議し、職員採用や入職前研修等に貢献できる取組みを具体化する。
◇新採職員へ説明する業務内容を精査し、ハンドブックの充実をはかる。
◇施設実習担当と連携し、学生向け施設説明会を開催する。
2）人材の育成
◇系統的な研修参加を計画し､研修報告や効果測定を確実に実施できるように取組みを具体化する。
◇職員の個別育成計画の確実な実施とさらなる活用を検討する。
◇0JT の課題を精査し、より効果的な 0JT 実施となるように取組みを具体化する。
◇より効果的な園内研修となるように、講師の選定や各機関の事業を活用する。
◇各職員の自己研鑽に活用できるように、書籍の購入を行う。
◇施設内（棟間）交換研修について精査し、取組みのさらなる具体化を検討する。
3）人材の定着
◇人材の定着に資する取組みを検討し、具体化をはかる。
・資格取得に対する施設の助成制度
・「働きがい」に関する調査と取組みの具体化
・産休・育休・介護制度の協議と取組みの具体化
4）児童部会　人材対策委員会
◇委員会へ参加し、施設の取組みに反映させる
5）予算
◇予算執行状況を定期的に確認し、確実な予算執行を行う。

１．全体総括

人材の確保、育成、定着は、安定した施設運営の根幹となる要素であり、そこに携わる委員会メンバーには施設全体を考え、積極的・主体的に関わる姿勢が求められる。委員会

の活動領域の特色として、例えば採用活動や研修参加、働きやすい・働きがいのある職場づくりなど、管理運営と密接にリンクすることから、施設長と協議しながらすすめていくことが重要となる。

人材確保に関する活動は、これまでの取組内容を踏襲し、職員採用活動のスケジュールに合わせて、各学校等への求人情報の明示、施設見学者への対応を実施した。8 月末に求人内容が明確になり、10 月の採用試験には 5 名の応募者が集まった。内定辞退者があったことから追加の求人が 12 月にあり、求人情報の明示と施設見学への対応を行った。

調理員の採用がすすまない状況が続いたが、年度途中に調理員の採用、また看護師の採用があった。

他施設の採用状況を聞くと、いくつかの施設で内定辞退が出ている。社会状況をみると「売り手市場」であり、就職活動をする者にとって有利となっている。これは就活する学生だけでなく、転職をする方にとっても同様だと考えられる。この状況に対し、①内定者に対して連絡を取り合い内定辞退を防止する取組み、②どのような能力やスキルをもった転職者を雇用するのか（したいのか）を明確にする、逆に③離職を防止するような働きやすさや働きがいの具体化などが必要になると考えられる。

人材育成に関する活動は、新規採用職員を中心とした 0JT の実施、より効果的な 0JT 内容の精査、キャリアに応じた研修参加、個別研修・育成計画の実施と精査、施設内交換研修の実施などを行った。各活動に関して、さらに精査する必要があるのだが、取組みを継続する中でそのノウハウを積み重ねていきたいと考える。

人材定着に関する活動は、「働きやすい職場環境」と「働きがい」を軸に協議を重ねた。「〇〇をすれば定着につながる」ということがないため、試行錯誤しながら具体的な取組みを策定していきたいと考える。

委員会活動は３年目となり、これまでの取組み等をより精査し、より充実したものにするべき年度だったと考える。新たに取組んだものもあれば、進捗が停滞したものもあり、反省点は次年度の活動に反映させたいと考える。

限られた時間で多くの取組みを具体化・実践していくためには、各委員が責任をもって分担された業務をこなしていくことが求められる。どの会議においても同様だとは思うが、各委員が主体的に考え、議論をし、結論を出していくことが求められる。会議スケジュールが変更となり、月１回の委員会活動となることから、より効率的な会議を経て、各活動をさらに充実させたいと考える。

２．活動報告

１）人材の確保

①情報の収集と対策

多くの施設で人材確保に関する取組みは工夫しており、施設見学会や実習生への対応などより就活者向けの内容となっている。「待っていれば応募がある」という時代ではなく、いろいろなメディアを通して筑波愛児園のＰＲ、また人材確保に関する活動をする必要がある。

いわゆる「企業イメージ」は重要であり、職員がやりがいを持って働いている様子や職場の雰囲気、子どもたちが楽しく生活している様子などは、応募につながる重要な要

因となる。インターネットが普及している現代において、悪い情報はあっという間に拡散し、それが応募状況に直結することになる。そのため、広報誌やＨＰで広く一般に情報を伝えることは、筑波愛児園のＰＲにとって重要となり、ブログ用の写真や報告の文書、また実習生の対応や対外機関との連携など、日々の積み重ねが筑波愛児園のイメージにつながっていることも念頭においてもらいたい。実際に、実習生などの話を聞くと、実習の様子や施設の雰囲気、職員の様子などは学校・仲間に共有されているという。

近年の社会情勢をみると、福祉分野への就職希望者は減少していくと言われている。2020 年度から、新卒者に対する選考活動（内定を出す時期）のスケジュールが撤廃される予定となっており、早期に内定を出す企業（内定をもらう学生）も増えると思われる。より優秀な人材は大企業などに就職することとなり、福祉分野の採用活動はさらに厳しくなるのではないだろうか。また出入国管理法改正案により外国人労働者が増える見込みとなっている。これらの社会の動きを委員会でも検討し、より良い人材確保につながるような取組みを具体化したいと考える。

②関係する係との連携

㋐施設実習係

児童養護施設に就職希望する実習生を把握し、連絡先の一覧作成を施設実習係に依頼した。実習を担当する各部署においても、実習生との話の中で、児童養護施設での働きがいや大変さなどを意図的に伝えてもらうように依頼した。

就職希望等を把握してもらい、時期に合わせて採用情報を伝えていくことが応募につながると考える。次年度も同様の取組みを実施していきたい。

㋑ボランティア係

施設見学は主にボランティア係が担当するが、就職活動の一環として問合せてくることが多く、その場合は委員会で対応した。

次年度も、ボランティア係と連携し、就職希望者の把握と求人情報の広報を行っていきたいと考える。ただし、就職を希望するボランティアの場合、通常のボランティアと同じような対応でいいのか、それとも実習生と同様に働きがいや大変さなどを意図的に伝える機会をもったほうがいいのかという議論があった。この点についてはボランティア係とも協議し、方針等を検討したいと考える。

③近隣の学校等への求人票等の送付

㋐書面での求人票の送付

1 都 5 県（東京、茨城、千葉、埼玉、福島、宮城）の児童養護施設で働くための資格取得が可能な大学、短期大学、専門学校の一覧を作成した。今年度は教員養成課程の大学等も一覧に加えた。

以前、各学校のキャリア支援（就職支援）担当に電話で問合せをしたうえで、パンフレット等を送付した。これは丁寧に対応することで、少しでも印象を良くしようというものだった。今年度は電話での問合わせ等は実施しなかったが、複数年に一度は電話で問合わせる取組みを実施したいと考える。

８月末に採用スケジュールや求人内容が確定したので、上記の 206 校に対して、施設紹介パンフレット、応募を促すリーフレット（「筑波愛児園で働きませんか」）、求人票を送付した。少しでも学生の目に留まるように、「筑波愛児園で働きませんか」はピン

ク色の用紙に印刷した。12 月の追加の求人内容については、近隣の 84 校に送付した。

昨年度、調理員の求人に対し県内の栄養・調理関係の８校に求人票、リーフレットを送付し、見学者や応募者があったのだが、それ以降の応募はない状況が続いた。調理員の求人に関して、事務の方でも、納涼祭のパンフレットに記載してもらうなど広報に工夫をしてもらった。その結果、何件か問合せがあったのだが、「調理の勤務時間」が定時（例；10～18 時）のイメージがあるようで、いくつかのパターンがあることで断念する方もいた。

調理員の場合、近隣の方の就業が多く、ハローワークを介する求人活動よりも、新聞の折込のような紙媒体の方が効果があると推測され、次年度以降の求人活動ではより効果的な取組みを具体化する必要があると考える。

求人票等の送付については、少しではあるが何件かの問合せ等があり、継続して取組みつつもさらなる効果につながるように検討したいと考える。

応募を促すリーフレット「筑波愛児園で働きませんか」の写真は、行事などの子どもが楽しそうにしているものを使用した。各部署においても、イメージが良い写真があれば委員会に提供してもらいたいと考える。

㋑インターネットの活用

多くの大学・短期大学が、民間の就職支援システム（大学等が共同参加して新規学卒者の求人を受け付けるサイト）を活用している。委員会では、施設長の承認を得て、「求人受付ＮＡＶＩ」と「キャリタスＵＣ」へ登録し、対象とする大学・短期大学へ求人票を公開した。選択した大学・短期大学へ一括送信でき、今年度は全国の対象となる学校等へ求人票を公開した。

求人票の公開は、採用面接スケジュールにあわせ、10 月と 12 月の期間で実施した。大分の大学生から 1 件の問合せがあったが、その他の問合せはなかった。

㋒求人サイトの活用の検討

インターネットが普及し、求職者・転職者はまずインターネットで求人を検索している。求人サイトを運営する企業からも問合せがセールスの連絡も多い。インターネットの求人サイトは、全国の求職者に対してアピールすることができるのだが、TV の CM などでよく耳にする企業もあれば、怪しいと感じる内容のものもある。求人内容を無料掲載する、一定期間の無料掲載、成功報酬型など運営形態もさまざまである。

またタウン情報誌など、紙媒体の求人誌もある。これは地域に密着するかたちとなり、近隣の求職者にアピールすることができる。タウン情報誌への掲載、またはポスティングなど、いくつかの方法がある。

どのような求人媒体を活用するかは、求職者の年代によっても、それぞれのメリット・デメリットがあると考える。

筑波愛児園ではこれらの求人媒体を活用していないが、これからの社会情勢をふまえると、活用を検討する必要が出てくると考える。

④職員採用スケジュール

新卒者に対する就職選考活動（内定を出すこと）は６月からとなっており、平成 31 年度も同様のスケジュールと示されている。公務員試験は、多くの自治体で７月末頃に実施され、９月にはその結果が明らかになる。

筑波愛児園の職員採用スケジュールも、この流れに沿って妥当な時期に実施する必要があると考える。職員採用スケジュールの決定は管理運営事項となっており、その決定内容に従い、委員会としても必要な広報活動等を実施することとなる。

ところが、2020 年度からは就職選考活動のルールが撤廃されることになる。つまり企業は学生に対して早期に内定を出すことが可能となり、より優秀な人材は一般企業に流れていくこととなり、福祉分野へ就職を希望する学生も相対的に減少するのではないだろうか。次年度以降、これらの動きにあわせ、どのような職員採用の取組みが必要かを検討したいと考える。

⑤採用内定者に対するオリエンテーション、及び入職前研修

㋐オリエンテーション

採用内定者に対してオリエンテーションを実施した。12／11（火）に 1 回目、1／30（水）に 2 回目を実施した。3 回目を 2 月中に予定し、実際のケアワークについて学ぶ機会を予定している。

1回目　；　12／11（火）	各棟の様子について 各専門職の業務について
2回目　；　1／30（水）	係・委員会活動について
3回目　；　2 月（調整中）	ケアワーカーの業務（ちゅーりっぷユニット）

説明を行う職員には、パワーポイントで資料作成を依頼し、時間内にプレゼンできるように求め、職員側のスキル向上等も目的とした。

オリエンテーションや入職前研修が、採用内定者にとっては筑波愛児園を知る機会となったと評価してもらえているので、より目的に合致するかたちはさらに精査していきたいと考える。

㋑入職前研修（予定）

平成 29 年度、入職前研修期間は 1 週間ぐらいが妥当ではないかと考え、今年度も同様に計画している。採用内定者にとって、事前に業務内容やルーティンワークを覚えることは入職後にも役立ち、施設側にとってもプラスになると考えている。

昨年度から、社会情勢等を考慮し、入職前研修に対して日当を支払うかたちとなった。入職前研修では調理補助業務（食事の配膳）があり、3 月上旬に保菌検査等を実施し、中旬までに結果を施設側に通知してもらうように依頼している。

オリエンテーションや入職前研修の方法・実施等は施設長と確認をとり、委員会としても具体化をはかり、施設運営等に貢献したいと考える。

⑥新採職員への説明内容の精査、及び「職員の基本業務ハンドブック」の作成

基本業務の明確化は、新採職員への説明だけでなく、業務の標準化をするうえでも重要なものとなる。「職員の基本業務」を分かりやすくまとめ、ハンドブックのような形でまとめる作業を行ってきた。基本業務についてはほぼまとめることができ、現在は各棟・ユニットなどで工夫している点などをまとめている。今年度中には基本的なものをまとめ、次年度以降にその他の業務内容を追加していきたいと考えている。

また、入職時に説明する内容一覧を明確化し、説明漏れなどがないようにしていきたいと考えている。担当ユニットでつど教えるというかたちとなっているが、統一した説明内容・スケジュールを明確にしたいと考えている。

⑦学生向けの施設説明会の実施

今年度、学生・教員向けの施設説明会を 7／7（土）と 9／6（木）に実施し、３月にも実施を予定している。施設説明会の目的としては、学生・教員に児童養護施設についてより理解を深めてもらうこと、その結果、人材確保につなげることとした。また各学校の実習担当、またキャリア支援担当教員とのパイプを作り、学校からはより優秀な人材を推薦してくれるように、施設側は雇用をすることで学校側の就職率などに貢献できるようになることも目的とした。

７月の施設説明会には、学校教員を含めて 11 名の参加があった。９月の施設説明会は、学校のスケジュールなどを考慮して実施したのだが、実習期間中とのことで参加はなかった。就職希望者と実習生を含め４名で実施した。７月の施設説明会参加者の感想等は資料として添付する。

７月は土曜日開催としたため、子どもの生活場所の見学等は実施しなかった。９月は平日開催とし、子どもの生活場所等の見学も実施し、より学生・教員に児童養護施設について理解を深めてもらうことを意図した。３月は学生も休みとなっているかとは思うが、今年度の取組み内容や反省点を次年度活動に反映させたいと考えている。

７月の施設説明会に参加してくれた教員には、求人情報などを個別に送付するなどを行った。教員もゼミ生に求人内容等を周知してくれたとのことだった。

児童部会の人材対策委員会が中心となり、都内の児童養護施設でも施設説明会を実施している。都内の施設でも人材の確保には苦慮しているところであり、都内の施設説明会に参与しつつも、筑波愛児園独自の施設説明会の取組みも精査して取組んでいきたい。施設説明会については、施設実習係とも十分に協議・連携していきたいと考える。

⑧人材確保事業の活用の検討

児童養護施設等の職員人材確保事業があるが、この事業は「実習を受け、かつ内定を出した学生」が対象となっており、活用するためのハードルが高いものとなっている。事業を活用できる条件が整えば検討したいと考える。以下に事業の概要を示す。

１）根拠
　児童養護施設等の職員人材確保事業実施要綱
　児童養護施設等の職員人材確保事業補助金交付要綱
２）実施内容
（１）実習生に対する指導
　児童養護施設等において、施設への就職を希望する学生が実習に来る際に、指導する職員の代替職員を雇う経費を補助する。
（２）実習生の就職促進
　児童養護施設等で実習を受けた学生の就職を促進するため、施設において就職前に一定期間、非常勤職員として採用する際、その経費を補助する。
３　補助単価〔平成 29 年度〕
（１）実習生に対する指導　；　実習１回あたり　86,200 円
（２）実習生の就職促進　　；　１日あたり　3,760 円

⑨福祉就職フェア

6／9（土浦開催）、6／30（水戸開催）、茨城県福祉人材センターが主催する就職フェ

アに参加した。初めて参加したのだが、求職者の数が少なく、次年度は参加を見送ると判断した。10 年ほど前は行列ができるほど求職者が殺到したとのことだったが、年々減少傾向にあるとのことだった。水戸の方が求職者は多かったが、筑波愛児園のブースに訪れる方は数名だった。介護関係の法人のブースが多く、児童養護関係では同仁会さんのみであった。

２）人材の育成

①キャリアに応じた職員像の明示

全養の資料をベースにし、キャリア（就業年数）に応じた職員像を明示した。筑波愛児園の運営はフラット制をしいているが、これは施設内の権限や地位についてのことであり、個々の職員はキャリアに応じての役割や資質向上に努めなければならない。これは全養の倫理綱領にも明示されている。

キャリアに応じた職員像を明示することで、各職員が目標とする職員像を明確にしてもらうことを意図した。またこれをベースに、研修参加や 0JT などを組み立ててもらうことも考えた。運用する中で、もっと具体的な行動等が示され、活用しやすいものに改訂が必要だと反省が出ており、どの程度、各職員が意識しているかは確認できていないが、次年度の取組みなどに反映し、必要に応じて内容も精査したいと考える。

②研修参加基準の明示

キャリア（就業年数）に応じて職員を４段階のクラス分けをし、研修もレベル設定をし、それに応じた研修参加を求めた。

前年度から委員会で研修参加者を選定し、施設長の確認を経て、各部署で勤務調整してもらった。そのため、ほとんどの職員が１つ以上は研修参加したかたちとなった。ケアワーカーはローテーション勤務のため、早めの勤務調整を依頼することが必要となったが、研修参加者を明確にすることでほぼ調整できたのではないかと考える。

専門職の場合、業務に必要な研修に参加してもらうかたちとなるため、複数回の研修に参加している。研修参加数の目安（東社協の研修１回、茨児協の研修１回）があったが、必要な研修には参加するというかたちが妥当ではないかと考えている。

また、「民間児童養護施設等の職員の処遇改善」が示され、処遇改善加算を申請するために、対象職員が指定された研修に参加することを求めた。今年度は指定された研修2種のうち1種だけで加算対象となったが､次年度は2種両方の研修参加が必要となる。次年度の職員配置にあわせ、対象となる職員には研修参加を求めたいと考える。

③研修参加と報告書

研修は参加することが目的ではなく、研修で学んだ内容をケース支援や担当業務に反映・還元させることが目的となる。そのための資質向上であり、子ども支援をするプロとして常に学ぶ姿勢をもち、結果を出すこと（支援に反映すること、取組みを具体化すること）が求められる。

研修報告書の書式には、研修報告と 3 ヵ月後の効果測定も加えてある。研修報告や 3 ヶ月後の効果測定は、㋐まず部署内で確認・協議し、㋑委員会での確認、㋒施設長の確認を計画した。研修参加者に研修報告書の提出を促したが、確実な実施までには至らなかった。職員によっては研修参加後の報告書を提出していたのだが、それを全体に浸透

させるまでには至らなかったと反省している。今年度の反省をふまえ、次年度の活動に反映させたいと考える。

前年度も同様の反省があがったが、3 か月後の効果測定が実施できなかった課題として、誰がいつ研修に行ったのか、そして 3 か月後という日程がいつなのかが分からなかったということがあった。次年度は研修参加一覧の作成を徹底し、そこから研修参加者への促しや確認を実施していくこととする。

④個別研修・育成計画

東京都の指導監査で、職員ごとの育成計画を具体化することが求められ、委員会で書式を作成し、そのシートを活用して個人ごとの目標策定、中間・年度末評価を実施する計画をたてた。

子どもの自立支援計画書と同じように、職員自身も目標を設定し、その目標達成のための努力や自己研鑽を積んでもらいたい。計画をたてることが目標ではなく、目標達成できたかどうかを評価する取組みにしたいと考えた。

施設長とのヒアリングでこのシートが活用され、目標設定や中間評価は実施できたと考える。年度末の評価、そして次年度の目標設定も確実に実施してもらいたいと考える。

委員会では、職員ごとの個別ファイルを作成し、そこに「個別研修・育成計画書」や「研修報告」を綴っていってもらいたいと考えた。職員個人の目標設定に対して、委員会として評価は行わないが、計画策定ができているのかなどを把握・確認のため、委員会としての確認欄を設けた。

この取組みは 2 年目であり、書式の反省や計画自体の精査も含めて、次年度も継続検討をしたいと考える。全養の資料をベースにしているのだが、記載されている内容が抽象的であるため、より具体的な行動指針を明示する必要があるのではとの意見があがっている。これらの意見を含め、より取組みやすい指針を検討したいと考えている。

≪スケジュール≫

以下に個別育成計画のスケジュールを示した。職員採用活動を考慮したものとなっており、参考にしてもらいたいと考えている。

5 月	「個別研修・育成計画書」の策定　※1
7 月～	ヒアリング（1 回目）の実施 ・個別研修・育成計画書について ・施設長から期待すること、また評価 ・年度末退職意向の確認
8 月末	ヒアリング（適宜） ・退職意向者との面談 次年度の職員採用内容の確定
9 月上旬	次年度の職員採用内容の広報
9 月下旬～ 10 月上旬	第 1 回職員採用試験 ※2 回以降は適宜実施
10 月	「個別研修・育成計画書」の中間評価
11 月～	ヒアリング（2 回目）の実施

	・個別研修・育成計画書の中間評価について ・施設長から期待すること、また評価
３月	「個別研修・育成計画書」の年度末評価 次年度の計画策定

※計画策定に関して

全養協の人材育成資料をベースに、個人の目標策定も具体化してもらいたい。

⑤0JT の実施方法（枠組み、0JT 対象者と担当者）の明示

委員会から 0JT（0n Job Training）の実施方法を提案した。0JT 対象者とその担当者を選定し、年間を通じて 0JT 実施を求めた。

担当者から、何をどのようにすすめていいのか分からないとの声があり、委員会としてもさらなる方法等の具体化などが必要だと考えている。年度途中に 0JT 担当者と委員会の協議の場を設ける計画をしたが、時間が確保できず実施できなかった。代わりに 0JT 実施状況を報告してもらい、主体的に対応できている職員のノウハウなどを共有する取組みを行った。

0JT の取組みについても、何をどのように実施すれば良いのか分からないという意見が多く、委員会としてモデルとなるような取組みを例示する必要があるのではないかと考えている。全養の資料から具体的な行動指針を明示し、それをベースに 0JT を実施してもらうことをまずは具体化したいと考える。さらに 0JT に活用できる事例を準備するなど、0JT に活用できる内容の準備をすすめたいと考える。

⑥0JT の実施と評価

前年度の反省から、0JT 対象者と別ユニット職員を 0JT 担当者に選定した。同ユニットだと 0JT 実施のために勤務を調整する必要があり、別ユニットの方が調整がしやすい状況となる。今年度も同様に考えたが、一部では勤続年数との関係で調整をはかった。また年度途中の採用があり、その担当者も選定した。

棟など	OJT 対象者	担当者
青空	加藤Ｔ	茂木 T
	立川（歩）Ｔ	安積 T
さくら	大畠Ｔ	兵藤 T
	安井Ｔ 稲葉Ｔ	橋本 T
太陽	道上Ｔ	深井 T
	櫻井 T	山田 T
つくし	端 T	石引 T
専門	高井Ｔ	立川Ｔ
	川村Ｔ	小松崎Ｔ
	野木 T	大澤 T
調理	稲葉 T	堀田 T

年度途中に 0JT 実施状況を確認したが、担当者によって頻度や内容に差があった。積極的に実施している方の内容や方法等を共有したが、意欲的に取組む方とそうでない方

の差は大きかった。

OJT 実施にはまだまだ課題があり、試行錯誤しながらその精度をあげていく必要がある。委員会では、年度中に OJT 担当者、または OJT 対象者との協議の場を設け、その反省点や課題に対して対策をはかりたいと考えている。OJT 担当者の意識の問題も要因の１つとは考えているが、OJT 担当者が取組みやすい具体例などを集約して、次年度の活動に反映してもらいたいと考えている。

また、前年度は個々のファイルを共有の場所に配置していたのだが、今年度は各自の BOX 内で管理してもらった。このことも要因の１つと考え、次年度は環境的な面でも取組みやすいかたちを提示したいと考える。

⑦園内研修

以前実施していたようなケースカンファレンスの要望は高い。宮本先生は私立大学に転任され、日程の調整がつけばケースカンファレンスに応じてくださるとの返答をいただいている。また、さいたま子どものこころクリニックの星野先生、愛育研究所の山本先生などにも前向きな返答はいただいていたが、日程の調整がつかず実施にいたっていない。

また、人材育成に関してコーチングの研修をトッパンマインドフルネスの岩崎先生にも打診をしたのだが、実施に向けた具体的な協議にはいたらなかった。

今年度中に、各先生方と日程の調整などを行い、次年度の実施に向けて具体化をはかりたいと考えている。

前年度は委員会主催で「園内学習会」を開催した。今年度は実施の具体化までにいたらず開催できていない。これについても、次年度のケースカンファレンスの実施と調整し具体化をはかりたいと考える。

⑧自己研鑽（ＳＤＳ；Self Development System）への取組み

職員の資質向上のためには、OJT と Off-ＪＴ（研修参加など)、自己研鑽が３つの柱となっている。委員会としては資質向上のための文献・書籍を準備することとなり、各部署で回覧するかたちで自己研鑽を促した。今年度は挿絵などを多用した、子ども支援でも活用できるものを準備した。

次年度も予算を計上し、書籍だけでなく、視聴覚教材なども含めて購入を検討したいと考える。

⑨施設内（棟間）交換研修の実施

委員会で企画し、いわゆる「横のつながり」や他棟でどのような支援や会議が行われているのか、リビングなどの環境整備の様子などを知る目的で実施した。昨年度は 3 時間という短時間での実施であったが、今年度は子どもの生活部署に限定し、2 日間に分け、5 時間程に変更した。

≪実施概要≫

日時	研修者	研修部署
11／8（木） 15：00～20：00	茂木Ｔ（青空棟） 端Ｔ（つくしホーム）	太陽棟 さくら棟
11／21（木）	安井Ｔ（さくら棟）	青空棟

15：00～20：00	山田Ｔ（太陽棟）	つくしホーム

実施後の感想からも、他部署の会議の様子などを知ることで、所属部署の会議の反省や気づきにつながり、有意義だったというプラスの意見が多かった。委員会としてもこの取組みを通してより質の高い会議や棟運営につながると考え、次年度の取組みを検討したいと考えている。資料に棟間交換研修を実施した職員の感想を示した。

⑩児童養護施設等の職員の資質向上のための研修事業（東京都社会福祉協議会福祉人材センター）

上記事業があり、①宿泊を伴う研修の参加費・交通費・宿泊費・代替職員雇い上げ等の人件費の助成、②施設間研修に伴う交通費・宿泊費・研修謝礼金・代替職員雇い上げ費等の助成が受けられる。

今年度の助成可能な額を計上したところ 40 万円近くなり、申請対象者には報告書の提出を求めたいと考えている。次年度以降もこの事業を活用したいと考え、対象となる職員の選定や計画的な書類作成等を依頼したいと考える。

⑪県南西八施設合同研究会

県南西八施設合同研究会は人材対策委員会の担当業務となった。委員会では、「新任職員が他施設を知る機会」ととらえ、また他部署の中堅クラスの職員が引率するかたちを計画した。

県南西八施設合同研究会は、「職員の情報共有」が主な目的でスタートした。しかし、次第に「研修」という意味合いが強くなり、研究会の企画・運営、また参加者を調整するうえでも難しい状況が発生している。1 月の筑波愛児園主催の研究会後に各施設の担当者で集まり、次年度以降の研究会の持ち方について意見交換を行った。これらの意見を踏まえ、次年度以降の具体化を各施設担当者と協議したいと考える。

３）人材の定着

人材の定着に関しては、委員会でいろいろ議論はしてきたが、具体的な取組みまでには至らなかった。「これをすれば人材定着につながる」という明確な取組みはないとは考えるが、施設全体でこれらのテーマについて協議し、多面的な取組みの総体が結果的に人材定着に貢献できることが理想だと考える。

各施設でさまざまな人材確保のための工夫を取組みはじめたところであるが、離職が少なくなることが最も重要だと考えている。各職員が結婚や妊娠・出産、育児、介護などライフステージが変化するが、それらの変化が離職に直結してしまうのではなく、就業が継続できるような制度や相互に助け合える仕組み、さらにそのようなことが当たり前となる施設の文化や各職員の認識が重要となるのではないだろうか。

児童部会の調査研究部では、昨年度から「施設職員として長く働き続けるための調査・研究」を目的としたアンケート調査を実施し、今年度も 11 月に追加調査を実施した。これらの結果も参考にし、筑波愛児園の取組みにも反映したいと考える。

①資格取得に対する施設の助成制度に関する協議

施設の運営に必要な資格としては、防火管理責任者と社会福祉士となっている。これまでの経緯から、これらの資格取得をしている職員を複数配置することが必要となっている。

これらの資格取得に対して、施設として助成できる制度が必要だとは考えているが、具体的な提案にまでは至っていない。施設運営に関わることでもあり、次年度も継続検討を行い具体的な枠組みを提案したいと考える。

㋐社会福祉士

社会福祉士は山田Tが所持しており、社会福祉士養成校からの実習を受入れるためには、実務経験3年以上と指導者講習の受講が義務づけられている。今年度から社会福祉士養成校からの実習受入が可能となっている。

助成制度を考える上で、①受験資格を得るためのスクーリング等への助成と②資格取得への助成、③資格の維持への助成などが検討点となる。

社会福祉士の資格取得者は複数配置がのぞましく、まず受験資格がある職員を把握し、資格取得を目指したい職員に対しても、施設の助成制度を具体化する必要があると考えている。助成制度を設ける場合、何らかの条件設定が必要で、どのような条件が妥当であるかなども具体化が必要だと考えている。

㋑防火管理責任者

2 日間の講習を受講することで資格取得が可能である。今年度は小松崎Tが防火管理責任者として書類提出している。年度内に防火管理責任者の資格取得者を確認し、次年度の研修参加を具体化したいと考える。

≪平成31年度研修スケジュール；平成31年2月時点≫

開催地	研修日	申込み	人数
結城	5.17～18（木）	4.4～18	120
水戸	6.5～6（木）	4.26～5.14	180
常総	7.9～10（木）	6.5～6.6	80
つくば	8.7～8（木）	6.8～7.3	140
取手	9.12～13（金）	8.2～7	120
取手	9.18～19（木）	7.11～19	120
結城	10.23～24（木）	9.17～27	200

㋒子ども支援に有益と考えられる資格

これまで筑波愛児園では、セカンドステップを施設全体の支援に組込むべく、資格取得を助成してきた。これまでは資格取得のための受講費用と資格取得から1年間のライセンス（受講費用に含まれる）は施設側が助成した。その後のライセンス更新は個人負担となっている。

この他、子ども支援に有益となる資格も多数存在すると考える。これらについてもまとめ、施設の助成制度の是非を検討したいと考える。

②超過勤務について

将来構想委員会で超過勤務減少のため「ノー残業ウィーク」の取組みを行っている。この取組みを実施する前は、「残業時間を減らすことは無理だ」という意見も聞かれたが、各職員の認識も変わり、残業を減らす（＝勤務時間内に仕事を終わらせる）ことが当たり前のこととなってきている。会議日の勤務時間についても、深夜遅くまでかかっていたものが短縮されてきている。

「無理だ」と考えていたものに対し、2 年間の取組みでだいぶ改善がはかれていることは各職員で意識してもらいたいと考える。運営検討委員会でも会議日の勤務時間は問題視されており、ここにはファシリテーション技術や会議参加者の主体的な動き、会議を効率的にすすめるための環境調整などが必要になると考える。

委員会でも人材定着に関する事項とし、各部署の工夫の共有や意識向上につながる取組みを検討していきたいと考える。

③「働きがい」についての協議

人材定着を考えるうえで「働きやすさ」と「働きがい」が重要であることが示されている。「働きやすさ」は、超過勤務や有給休暇、また育児・介護休暇取得など、目に見えるかたちで分かりやすい指標となっている。しかし「働きがい」については各職員の主観にもリンクするものであり、まだまだ議論が必要な段階だと考えている。全ての職員の働きがいを保障することは容易ではないが、多くの職員が働きがいを感じられるような取組みを具体化することは重要であり、施設全体で協議を継続していくことも必要となる。

④産休・育児休暇、介護休暇について

結婚や妊娠・出産、介護などライフステージが変化しても働き続けられる仕組みが必要になる。若い職員も多いことから、まずは妊娠・出産、育児について検討することとした。

9／27、ケアワーカーで出産・育児を経験した石引さんを委員会に招き、実際に感じたことやどのような仕組みがあれば育児と仕事を両立しやすかったのかを話してもらった。妊娠期間中の業務軽減や宿直勤務について、産休・育休後の復帰する際に感じたこと、育児と仕事の両立についての３つを柱として意見交換を行った。

話を聞く中で、大きな課題として、各職員が制度についての理解が不足していること、必要な提出書類について全く知らないこと、復職の際に子どもや施設の状況が分からなかったことがあがった。委員会として、各職員がこれらの制度を安心して活用できるように、まずは理解を促すところからスタートしたいと考える。

これは介護休暇制度についても同様だと考え、制度は整備されているが、実際に活用する際にどのような条件で活用できるのか、提出する書類についてなど、まずは理解することが必要となる。

４）児童部会　人材対策委員会

児童部会人材対策委員会に人材対策委員会から１名所属するかたちとなった。児童部会人材対策委員会は２つの作業グループ（人材確保グループ、人材定着・育成グループ）に別れ、各グループがそれぞれの課題に対して具体化をはかった。筑波愛児園は人材定着・育成グループに所属し、隔月の定例会とグループの臨時会議に参加した。

今年度の基本方針は「限られた人材の獲得を競合するのではなく、関連部会（児童・乳児・母子福祉・婦人保護）等との協働により人材の裾野を広げ、確保・定着・育成の標準化を図る」とし、3 月の総括を踏まえ次年度の各活動が具体化される。次年度も人材対策委員会から参加者を選出し、部会委員会に参加したいと考える。

３．予算

会計規程の変更で、研修参加に必要な交通費も研修費（研修・研究費）に含まれることとなっている。また児童部会や茨児協などの各委員会等への参加にかかる費用も研修費に含まれる。

さらに「情報交換会」という名目で領収書を受取ることができるのであれば、情報交換会参加費用も研修費から支出することとなった。

今年度、委員会としての予算は研修・研究費 1,471,000 円、書籍購入代 50,000 円、郵送代 20,000 円で計上した。

今年度の予算執行状況であるが、平成 30 年 10 月末時点で 794,338 円となっており、1 月末時点では現在精査している段階である。書籍購入もすすめており、執行状況は別途報告したいと考える。求人票等の郵送は 2 回（8 月；206 校、12 月；84 校）行い、23,200 円執行した。

次年度の予算に関して、今年度の執行状況を確認し、提案したいと考える。

≪2019 年度方針≫

１）人材の確保

◇情報収集を行い、より効果的な人材確保につながるような取組みを具体化し、実施する。

◇関係する係と連携し、就職希望者の把握と連絡を確実に実施する。

◇学校等へ求人票等を広報し、さらなる応募につながるような取組みを実施する。

◇施設長と密に協議し、職員採用や入職前研修等に貢献できる取組みを具体化する。

◇新採職員へ説明する業務内容を精査し、ハンドブックの充実をはかる。

◇施設実習担当と連携し、学生向け施設説明会を開催する。

２）人材の育成

◇系統的な研修参加を計画し、研修報告や効果測定を確実に実施できるように取組みを具体化する。

◇職員の個別育成計画の確実な実施とさらなる活用を検討する。

◇0JT の課題を精査し、より効果的な 0JT 実施となるように取組みを具体化する。

◇より効果的な園内研修となるように、講師の選定や各機関の事業を活用する。

◇各職員の自己研鑽に活用できるように、書籍の購入を行う。

◇施設内（棟間）交換研修について精査し、取組みのさらなる具体化を検討する。

３）人材の定着

◇人材の定着に資する取組みを検討し、具体化をはかる。

・資格取得に対する施設の助成制度

・「働きがい」に関する調査と取組みの具体化

・産休・育休・介護制度の協議と取組みの具体化

４）児童部会　人材対策委員会

◇委員会へ参加し、施設の取組みに反映させる

５）予算

◇予算執行状況を定期的に確認し、確実な予算執行を行う。

資料　「研修参加一覧」

※研修参加一覧については精査している

資料　「棟間交換研修後アンケートの結果」

≪さくら棟≫

良いと思った点・参考点	・　ファシリテーターとタイムキーパーがおり、円滑に会議が進められていた。 ・　会議録にしっかり書き込みがされていた。 ・　意見を求める際に、「〇〇さんはどう思う?」と振っている場面が見られ、若い職員も意見が言いやすいのではないかと感じました。 ・　委員会や係からなどの欄も、担当している職員が責任を持って書き込んでいて、情報共有がしっかりされていると思いました。 ・　毎週会議スケジュール（時間設定）を作成する役割があること。スケジュールを意識しながら会議を進めることで、時間短縮に繋がっていた。また、スケジュール作成者は会議の進行を想像しながらスケジュールを組むため、その日の議題等に対しての意識も向上しているとの事であった。 ・　勤続年数、年齢の若い職員集団だが、それぞれが自分の役割を責任を持って全うしていた。
改善点・疑問点	・　子ども会議の際にその日の勤務者（夜番または宿直）が１人で対応していた。議題の中に注意する事項などがある場合には、内容によっては注意する職員、フォローする職員などの役割を決め、皆で対応する日も必要なのではないかと子ども達の反応を見て感じました。 ・　ユニット児童のケースについて話し合う時間は、やはりユニット職員全員が参加出来るようにすべきではないかと感じた。後に会議録に目を通す事や、引継ぎで知ることで解消される部分もあるが、実際に参加することには劣るのではないかと感じる。 ・　会議スケジュールを意識するあまり、会議自体の質は落ちていないか？ ・　子ども会議に参加する職員についてはどのように決めているのか？また、話し合いの前に職員間でどのように内容について話しをしているのか？子どもからの反応等を想定しながら、伝え方や到達点まで詰めてあると良いと感じた。（※児童Ｓがパソコン時間を守れていない事について伝達していたが、塾の時間に追われてあまり話が入っていないように感じた。）

感想・意見など	・ 午前中に運営委員会と人材対策委員会があった為、会議が早めに進んでいたので、もう少し早めの時間帯から研修がスタートしても良かったかなと思いました。 ・ 子ども達が帰園してからの職員の動き、子ども会議を見学出来たことは有意義でした。 ・ 私の時間配分が悪く、さくら棟の会議自体、ほとんど見ることが出来なかったのが残念でした。次回があるならば、ミニ研修をやっているところを見てみたいです。 ・ 時間帯を遅く設定していたため、会議自体がほとんど進んでしまいあまり話し合いの様子を見ることが出来なかった。 ・ この取り組み自体は、何度やっても良いと思った。お互いの良い部分を取り入れることや、アドバイスしあうことで相乗効果を得られるのではないかと感じた。しかし、本来であればこのような機会を設けずとも、自ら疑問を持つことや相談しに行く事などをそれぞれの職員が主体的に行なう事ができるとより良いと思った。

≪太陽棟≫

良いと思った点・参考点	・ 会議録にしっかり書き込みがされていた。また冒頭に目標が書かれていたり、勤務についての欄があるなどとても参考になった。 ・ 年齢や勤務年数などは関係なく意見を言う姿が見られた。 ・ 書記をしている職員がファシリテーター役を担っており、脱線した話を戻したりみんなの意見をまとめていた。 ・ 会議録に各ユニットの子ども会議の議題や週の日程なども打ち込まれており、子ども会議の際にはそれを使って行っていて、つくしでも取り入れたいと思った。 ・ 話しをしている雰囲気がとても良いと感じた。 ・ ひとつのケースに対して、多くの意見が出ていた。 ・ ユニットのケースについて話し合うときには、基本的にユニット職員が参加する形を取っていた。 ・ 緊急な対応も、状況を見て柔軟に行なう事が出来ていた。 ・ 会議録が見やすく工夫されていた。勤務時間調整の欄については、青空棟でも早速取り入れた。 ・ お菓子を食べながら行なっていた。 ・ 子ども会議（ジャスミン）の雰囲気が暖かく、司会者や書記などが明確であり、良い形で確立・定着しているように感じた。
改善点・疑問点	・ 全職員が公務室にはいたが、顔を突き合わせて会議をしている感じではなかった。 ・ 仕事はたくさんあり、やらなければならないこともあることは理解しているが、違うことをしていた職員が多いなと感じた。 ・ 会議中に別の仕事（書類作成？）をしていたり、書記が壁を向いて打ち込みをしていた為、どこかまとまりがないように感じた。もっと一つになって話し合いができるとより良いと感じた。 ・ 会議録への事前打ち込みが少なかった。他職員の事前打ち込みに対しても、事前に打ち込めると（共感、称賛、別の意見など)、より効率が上がり質も上がると思われる。

感想・意見など	・ 午前中に運営委員会と人材対策委員会があった為、会議が早めに進んでいたので、もう少し早めの時間帯から研修がスタートしても良かったかなと思いました。 ・ 子ども達が帰園してからの職員の動き、子ども会議を見学出来たことは有意義でした。 ・ この取り組み自体は、何度やっても良いと思った。お互いの良い部分を取り入れることや、アドバイスしあうことで相乗効果を得られるのではないかと感じた。しかし、本来であればこのような機会を設けずとも、自ら疑問を持つことや相談しに行く事などをそれぞれの職員が主体的に行なう事ができるとより良いと思った。

≪青空棟≫

良いと思った点・参考点	・ 一つのケース、検討事項が終わると記録を担当している職員が決定事項をみんなに確認しながら読み上げていた。議題への認識が深まっているように感じた。 ・ 全員が発言し、全員で会議に参加しようという意識が伺えた。 ・ 会議録上で誰かの記載に対して別の職員からアンサーの記載があることで、口頭での余計なやりとりが少なくなっているように感じた。 ・ 会議に入るメンバー、児童対応のメンバーが固定化されており会議の円滑な進行に繋がっているように感じた。 ・ 児童対応に職員が出てしまっても基幹的職員はできるだけ会議に残るようにしていた。会議の質を落とさず進行できているように感じた。 ・ 物理的に職員全員が顔の見える位置で会議を行うことが出来る環境を作っている事が良いと感じた。 ・ ファシリテーターが情報の確認や職員へそれぞれ意見を求め、話しを纏めようとしていた。 ・ ひとつひとつの議題、支援方法についてそれぞれの目的・目標を確認しながら行っており、支援の方向性を職員が確認できるようにしていた。 ・ ユニットの児童についての話の際にはユニット職員が最低限出来るようにしている意識して行っている所がいいと感じた。 ・ 児童の帰園後、役割をきっちりと設けていてユニットの職員がユニットの会議を行える様な時間が取れるように工夫されていた。
改善点・疑問	・ 会議録に記載されておらず、口頭で出てくる議題が多いように感じた。ケースに時間が掛かりそうな印象を受けた。 ・ 雰囲気は良さそうに見えていたがファシリテーターからの質問が無いと会議の中で意見を出て来ることが少ない印象を受けた。身構えているような。

感想・意見など	・ 初めて他部署の会議に参加することができた。自部署の会議の為に参考にする点だけでなく、個人的な視点から他部署の職員がそれぞれどのような役割を持って会議に参加しているのかといった点にも着目して見ることができた。自部署の会議の中だけでは感じられなかった、様々な事を感じることができる良い機会となった。この機会を定期的に設けていただきたいと感じた。 ・ 議題等に対しての目的意識を一つ一つしっかりと確認して行くことで職員同士の支援に対しての意思疎通・ひとつの目標に向かっていく雰囲気が作れていくのだと感じた。 ・ 職員としての勤務年数に幅がある中でそれぞれの立場で勤務年数に応じた役割分担がなされていると感じた。

≪つくしホーム≫

良いと思った点・参考点	・ 児童状況や構成の関係もあると思うが、会議録がまとまっており見やすくなっていた。簡潔な記載がされていた。 ・ ひとつひとつのケースを職員それぞれが熟知しており、活発で深い意見交換がされていた。 ・ 児童対応に職員が割かれても会議の進行は止まることが無かった。一人になっても議題に対しての案を考えておき、他職員が帰ってきてから確認をしていた。 ・ それぞれの意見をみんなで聞いてあげる温かい雰囲気があった。 ・ 物理的に全員が顔を合わせて会議が出来るようにしていた。 ・ 人数が少なく、子どもが帰園してから調理などやらなくてはいけない事が多い中で、2 人ないし 1 人でも会議が進むよう、会議前に会議録に現状の様子や進捗上を詳しく会議録に打ちこんでおくことでスムーズに会議が進んでいた。 ・ 会議での決定を前に会議内で確認されるであろう事項を先に考え動いている様子が会議録に入っており、先を見据えた支援が行えていると感じた。
改善点・疑問点	・ 会議自体に人が少なくなってしまうことで一度行った議題に対しての確認事項が多くなっている様子があった。こどものケースを一番頭に行うなど、確認事項が多くなる子ども支援の部分を全員がいられる時間帯に行ってはどうか。 ・ 子ども会議時に話をする内容について職員の中で把握がきっちりとされていないように感じた。話をする内容等をしっかり確認してから子どもに降ろしておくほうが良いのではないかと感じる。

感想・意見など	・ 初めて他部署の会議に参加することができた。自部署の会議の為に参考にする点だけでなく、個人的な視点から他部署の職員がそれぞれどのような役割を持って会議に参加しているのかといった点にも着目して見ることができた。自部署の会議の中だけでは感じられなかった、様々な事を感じることができる良い機会となった。この機会を定期的に設けていただきたいと感じた。 ・ 全体を通して会議までの間に何をしておく必要があるのかが明確になっており、日頃の引き継ぎを含めて先を見た支援をしようという意識が統一をされているなという印象を受けた。 ・ 会議の効率化を図る面では会議前の会議録の打ち込みや日頃の引継ぎを通して行うこと、それぞれが役割を明確にしている事が大切であるのだと感じた。

資料　「施設説明会参加者の感想等」

１．施設見学会はいかがでしたか？

良かった	11
どちらでもない	0
不満	0

（自由記述）

- 私は、保育について４月に短期大学に入ってから学び始めたのでまだ保育や教育についての職業があるのか疑問に思い、今回の説明会に参加しました。児童養護施設がどのような場所なのかを実際に知ることができ良かったです。興味をもつことができました。
- 実際の現場の声を知ることができて、学びになりました。職員の説明から、やりがいの大きい魅力のある仕事であると感じました。
- 施設での設備がしっかりしており、一人１つの部屋など見学をしていて関心を受けました。見学会では、分かりやすく、勉強にもなりました。
- 緑がとても多くて、子どもたちが体をたくさん動かして遊べて良いなと思いました。
- リビングが生活のまん中にあって家庭的で子どもと職員が話す機会が作ることができて良いなと思いました。
- 初めて伺いましたが、最新の配慮を取り入れた施設を見せていただき、大変感心いたしました。
- 施設の説明がとても詳しく丁寧にしていただいたのでわかりやすく魅力を感じました。
- 仕事をする中でのやりがいが良く分かった。
- 施設の環境や子ども達との接し方も見る事ができた。
- 子供たちが伸び伸びと生活できているのが印象的だった。
- 施設も充実していて実習もしやすいのが分かった。
- 職員さんのやりがいや大変なことを聞ける貴重な経験だった。仕事内容を考えると大変なことはたくさんあっても、やりがいを感じられることは少ないのかな、とイメージしていた。しかし、話している時の表情や話しぶりからも、楽しく充実した職場だということが伝わった。

２．施設見学会で知りたかったことは何でしたか？（複数選択可）

施設の様子	6
仕事の内容	6
職員の働いている様子	9
子どもの生活している様子	10
その他	

（自由記述）

- どのような環境で生活しているのか、そもそも児童養護施設はどのような場所なのか、知りたいと思っていました。
- 質問にてお答えいただきありがとうございました。
- 内容だけではなく、職員さんの具体的な活動などを気になりました。
- この施設で暮らす子ども達の生活の様子で見えないところにも気になりました。
- 施設の様子。
- 子どもの生活がのびのびと楽しそうに生活していたり、児童養護施設の仕事内容が分かりやすく知れました。
- 必要な資格や職員と子どもたちの距離感。
- 働きやすさ、仕事の内容、子どもの様子。
- 具体的に１ヶ月どのようなシフトが組まれているのか、スケジュールの例などを見せて頂けたら嬉しかった。しかし特別休暇の話などを丁寧に説明してくださって、分かりやすかった。

３．施設見学会は、今後の進路や就職活動に参考になりましたか？

参考になった	11
どちらでもない	0
参考にならなかった	0

（自由記述）

- 早いうちから、どのような施設があるのかを知ることができてとてもよかったです。
- 子どもでの支援方法や環境、保育などについて、将来での就職に参考になれたと思います。
- 様々な場所を見せて頂いて参考になりました。
- 児童系の職業に就きたいと思っていたため、進路の１つに児童養護施設の職員が入りました。
- 自分のやりたい仕事が見つかった。話を聞く中で仕事内容に興味をもった。
- やってみたい仕事がいくつかあって悩んでいるが、今日この見学会で自分の進路をについて前向きに考えることができた。
- 職員さん同士の関わりや、退園生との関わりなど、踏み込んだことまで教えて下さったので、自分がどのようにお仕事をしていきたいのか、というイメージとすり合わせることができた。

４．筑波愛児園（児童養護施設）の仕事について、どのように感じましたか？（複数選択可）

興味をもった	7
児童養護施設の仕事を検討したいと思った	5

やりがいのある仕事だと思った	8
大変・不安に感じた	1
特に関心はもてなかった	0

（自由記述）

- もともと、児童養護施設のような場所に興味を持っていて、今回はどのようなことをしているのか、どういった施設なのかを知ることができ、ますます興味が持てました。
- 見学に出た際の子どもの表情を見て、非常に良い支援をされているのだと感じました。子どもの笑顔を引き出せるやりがいのある仕事ではないかと思いました。
- 子どもの成長と一緒に自分も成長していることや子どもの成長で自分では気づかないところに気付かせてくれる仕事だと思いました。
- 職員の方が、子どもたちに愛情をたくさん注いでいるのが伝わりました。私も愛児園の職員の方々のような職員になりたいと思いました。
- 大変なこともあるかと思いますが、子どもの成長を見れるのがとてもいいなと感じ私もやりたいと思いました。
- 職員さんの生の声を聞くことが出来たので、仕事をする中でのやりがい、辛いことをよく知ることが出来たため、自分も養護施設で働きたいと思った。
- 子どもが1ヶ月2ヶ月口を聞いてくれない時があった､とかとても不安になるだろうな､と思った。けれど、大変な部分も教えてくださって、うれしかった。

５．ご意見・感想があれば

- とても先進的な考え方、取組みをされていることが大変印象に残りました（ボトムアップの意思決定、残業を減らそうという意思、児童会の存在など）。本日はありがとうございました。
- 子ども一人ひとりに担当を決めるのではなく、職員7人全員で協力して子どもとの関わりを大事にしていることに魅力を感じました。
- 今回、参加することができ、大変学びとなりました。またこのような機会があれば、ぜひ参加したいです。この度はありがとうございました。
- この施設での、職員さんの仕事、子ども達の支援方法など説明、見学をしていて、児童養護施設に対して興味を持ちました。就職の１つとして考えたいと思います。
- とても分かりやすい説明で、愛児園の良い面がとても伝わりました。このような素敵な施設で働くことができたら良いなと思いました。本日は、ありがとうございました。
- 貴園の出身者が本校に入学していただいたことがあり、その節はいろいろとお世話になりました。２名とも担任学生ではなかったので、深く話す機会は少なかったのですが、職員の方々の関わりを学生越しに聞いておりまして、関心を持っておりました。今回、働いておられる方のお話を直接聞かせていただき、就職後の姿をイメージすることができました。本校はつくば市、守谷市からの学生も多く、養護を希望している学生も多いのでぜひ今後、実習、就職の機会につながってくれると嬉しく思います。よろしくお願いいたします。
- 児童養護施設はもっと子どもの行動を制限してしまうと思っていましたが、のびのびと家としての生活を送っていてイメージが大きく変わりました。
- また子どもの関係だけではなく職員同士の関係も大切にしているというのがとても魅力

を感じ大切なのだと学べました。ありがとうございました。

- 子ども達が伸び伸びと生活していたので、とても良い施設なんだと実感できました。また、今日の説明会で、自分の本当にやりたい仕事が見つかりました。
- 職員同士も本当に仲が良いように見え、話をして頂いた茂木さんのような方が先輩でいると思うと、今すぐにでも就職したいと思える施設でした。
- 児童養護施設に訪問したのが初めてで、どんな空気感で生活しているのか想像できなかったが、今回、施設を見学し、子供たちが過ごしやすい環境が整備されていて、とても印象的だった。まだ進路ははっきりしていないが、慎重に考えていきたいと思った。
- ありがとうございました。

従事者会運営委員会

平成 2018 年度総括、及び 2019 年度方針

さくら棟　栗原　諒人

≪2018 年度方針≫

・従事者会で得た情報は毎月運営報告として報告を行い、必要に応じて全体への周知、集約などを行う。
・従事者会ファイルを施設に 1 冊として事務所に置き、有効活用できるように取り組む。
・子どもの虐待死を慎み命を讃える市民集会へ各部署 1 名参加を促し、調整し施設として 2～3 名が参加する。

従事者会運営委員会　活動方針

原則として毎月第三月曜日の午後に開催する。児童養護施設・自立援助ホームにおける従事者活動の推進及び諸課題についての協議を行う。尚、具体的活動内容については情勢を踏まえて会にて適宣検討する。

特に、複雑化したケースへの対応や、児童の権利養護について、家族再統合支援や自立支援など、これら現在の児童養護現場が直面している課題については施設間・従事者間の情報交換を積極的に行い、児童や保護者・地域に対する支援について標準化を進め、専門職としての自覚を高めつつ、提供する支援の質の全体向上を目指す。またそれぞれの施設においては人材育成や人材確保など組織における課題にも直面しているが、これらの課題も含め、現場で直接子どもたちと向き合っている従事者の立場だからこその意見を集約し、吟味し、実施に反映させていく。

今年度中に策定される都道府県社会的養育計画や児童相談所の特別区設置については各専門部会と連携し、運営委員会でも情報を共有していく。また、上記の件について運営委員会の中で従事者の立場としての意見も積極的に集約し、今後の児童養護施設のあり方について行政に訴えていく。

総務部・制度政策推進部・調査研究部・研修部の各部においては引き続き活動を進め、書記会や給食研究会、保育士指導委員会とは引き続き連携しつつ、部会内の各委員とも交流や学習を行う。また他部会や各種団体等との交流等も企画実施する。

子供の虐待死を悼み命を讃える市民集会やオレンジリボンたすきリレー等のソーシャルアクションについては児童部会の後見を受けながら従事者会としても従来通り積極的に参加していく。また児童養護を取り巻く情勢や制度の理解を深めるために、幹事会の中心に広く従事者の参加を募り、東京都との懇談の場を持ち、現場の声を発信していく。

総括

今年度から従事者運営委員会の任期１年目として活動を行ってきた。児童部会の活動では例年通り研修部に所属し、児童部会所属の研修の企画、運営を行った。主な研修としては、新任研修、中堅職員前期研修、中堅職員後期研修があり、講師との打ち合わせを重ねて、当日スタッフとして研修のファシリテーターを担うことが役割となる。今年度の研修部は半数以上が任期１年目の職員ばかりであったため、より丁寧に研修の準備、講師との打ち合わせを行ってきた。その中で研修部の一人ひとりがいかに研修をより良いものとしていくかを考え、議論してきた。また部内でも研修で行われるワーク、ファシリテーションの勉強会を事前に行うことで、任期１年目の職員も安心して研修のファシリテーターを担うことができた。またそれぞれの研修を企画・運営することで自分自身も運営や人材育成の知識を得ることが出来た。そのため、研修部で得た知識を重ね普段の業務へ還元していく。今年度もそれぞれの研修で募集人数を上回る申し込みがあった。来年度も児童部会主催の研修が社会的養護処遇改善加算の必要件に該当するため、受講する施設が増えていくことが予想される。

従事者会運営委員会で得た情報は必要に応じて、運営委員会へ報告事項とし記載を行ってきた。また、全体へ説明が必要なものや集約が必要な事柄に関しては職員会議にて補足説明を行ってきた。次年度は、学習会の内容の報告や、学習会の参加募集を積極的に発信していきたいと考える。また各部の報告等も必要に応じて発信していく。
また、従事者会ファイルに関しては、ファイリングし事務所に置く日程を決めていなかった為、不定期で事務所に置いている形となってしまった。次年度は第３木曜日には従事者運営委員会での資料をファイルし、事務所に設置する。

子どもの虐待死を悼み命を讃える市民集会に関しては、日程や時間等を職員会議の場で確認し、各部署１名の参加を募り集約した。今年度は施設として２名の参加であった。年々集会への参加人数が少なくなってきており規模も縮小されているが、児童福祉に携わる施設として参加することに意義を見出し、今後も参加を促していく。来年度も今年度同様参加を募り、施設として二〜三名が参加できるように調整を図っていく。

従事者運営委員会や、特に研修部として研修等で外部に出ることが多くある。そのため、担当部署の勤務に負担をかけてしまう事になるが、多くの調整をしていただき無事予定された会議や研修に参加することができた。筑波愛児園として、児童部会の会議や、研修の参加状況、調査アンケートなどの提出状況が良い状態である。本施設が都外施設であるため、都内の児童養護施設との繋がりを作り情報共有をするために積極的に児童部会の活動に参加していく。他施設の職員と関わり情報共有をすること、学習会に参加することで他施設の取り組みを知ること、新たな知識を得ることができ、自分自身のスキルアップにも

繋がってくるものとなった。

従事者運営員会の役割として都内との情報共有、国や都の情報の動きを知り、理解しそれらを施設に持ち帰ることを担っているため、あと二年の任期その役割を全うしていく。そしてこれらの活動を通して施設の躍進へ繋げられるようにする。

日時	活動内容
4/16	従事者運営委員会
5/21	従事者運営委員会
6/18	従事者運営委員会
6/25~26	中堅職員研修前期①
7/9	従事者運営委員会
8/20	従事者運営委員会
9/10	従事者運営委員会
10/15	従事者運営委員会
10/9~11	新任職員研修②
11/19	従事者運営委員会

11/27~29	新任職員研修③
12/17	従事者運営委員会
1/21	従事者運営委員会
1/25	中堅職員フォローアップ研修①
2/18	新任職員フォローアップ研修②
2/22	新任職員フォローアップ研修③
3/11	従事者運営委員会

活動日程及び活動内容

≪平成 2019 年度方針≫

・従事者会で得た情報は毎月運営報告として報告を行い、必要に応じて全体への周知、集約などを行う。
・従事者会ファイルを施設に 1 冊として毎月第 3 木曜日に事務所へ設置する、有効活用できるように取り組む。
・子どもの虐待死を慎み命を讃える市民集会へ各部署 1 名参加を促し、調整し施設として 2～3 名が参加する。

茨城県児童福祉施設協議会

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

専門部　　立川　弘司
川村　いくみ

≪2018 年度方針≫

◇茨城県児童福祉施設協議会の新体制の事業内容に基づき業務を行っていく

１．全体総括

今年度、茨城県児童福祉施設協議会（以下、茨児協）は組織改編を行った。これまでの茨児協でも各活動は行っていたのだが、茨児協という組織の下に統合することとし、活動部の再編、新たに職能別委員会を編成、さらに会則も明確にした。

筑波愛児園からは、施設長が施設長会に所属し、役割として研修部を担当し、心理療法担当職員が心理委員会の役員として選出され、従事者部会に参加するかたちとなった。また地域支援担当職員が研修部の運営に携わることとなった。これは、茨児協として研修を重厚なものとするために担当役員だけでは手が回らず、各施設からスタッフ派遣依頼に応えたかたちだった。

茨児協の新たな組織は、東京都の従事者部会をモデルにしている。筑波愛児園は茨児協と従事者部会の両者に参加できる恵まれた環境にあり、両者の組織がより良いかたちとなるように主体的な動きをする必要がある。子ども、また施設も地域との繋がり・連携を模索しながら存続していくものであり、また地域全体の子ども支援の質が高まればそれは社会にとってもプラスとなる。

次年度も茨児協、また所属する活動部・委員会において、筑波愛児園ならではの貢献を実践したいと考える。

≪茨城県児童養護施設協議会会則より≫

目的

本会は、児童憲章ならびに児童の権利条約の精神に従い、茨城県における施設利用児童の権利擁護と自立支援、会員の資質向上及び、児童福祉の発展を図ることを目的とする

事業

本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う

① 施設利用児童の健全育成に関する事業
② 施設利用児童の権利擁護と自立支援に関する事業
③ 児童福祉の啓発活動及び地域貢献に関する事業
④ 児童福祉向上のための調査研究に関する事業
⑤ 施設従事者の福利厚生及び研修に関する事業
⑥ その他本会の目的を達成するために必要な事業

組織　…　資料「茨児協組織図」参照

２．各活動

１）茨城県児童福祉施設協議会従事者部会

心理委員会の副役員（＝従事者部会のメンバー）であるため、隔月開催の従事者部会に参加した。従事者部会では、各活動部・職能別委員会からの報告事項を共有し、共通した課題についての意見交換などを行った。

しかし、この従事者部会の目的・役割が明確化されておらず、それぞれの参加者でイメージが異なっていた。再編成されて初年度ということもあり、今後、従事者部会の役割等が具体化されていくと思われる。

９月以降はオレンジリボンたすきリレーの具体化などに時間が割かれ、共通課題についての議論は少なかった。

２）心理委員会

内原深敬寮の佐名手さんが心理委員会役員であり、昨年度末から年度当初、意見交換などを行い、年間の心理委員会の活動計画を具体化した。心理委員会は年 6 回開催し、その中で外部講師を呼んだ研修やケース検討会などを予定した。

各施設の心理職が集まる組織は初のものであり、参加者の期待は高いものだった。また心理職は基本的に 1 名配置であり、互いの施設の取組みや悩みなどを共有できることに対してはニーズが高かった。

今年度の取組みが、次年度以降のベースとなり、役員として情報交換をしながら運営をすることができた。役員の任期は２年であり、役員として主体的に委員会運営を行っていきたい。

３）研修部

筑波愛児園は東京都の児童部会、茨児協の両者に所属している。茨児協の研修部でも研修機会や質の向上を目指して取組みはじめたところではあるが、茨児協主催の研修への参加は減少している。茨城の他施設職員との交流をはかる機会ともなるのだが、勤務状況なども考慮し現実的な判断も必要と言わざるを得ない。この点は人材対策委員会でも協議してもらいたいと考える。

①研修の企画

研修部では、年間の研修に対して各施設担当者で役割分担を行い、筑波愛児園は救急法講習会と県外の施設見学の担当となった。地域支援担当職員が中心となり、企画内容について具体化をはかった。救急法講習会（6／29）では、17 名が参加し幼児・学童の一次救命処置（心肺蘇生、異物除去、AED の取り扱い）、応急手当（頭部打撲、傷の手当、骨折、脱臼、捻挫、鼻血等）の講義、実技を学ぶことができた。また、県外の施設見学（11／27～28）では、24 名が参加し 1 泊 2 日間の施設見学と情報交換を行った。1 日目は神奈川県にある唐池学園ドルカスベビーホーム（乳児院）の見学で児童養護施設職員にとってどんな様子で生活しているかなどを知ることができた。また、情報交換の際は他施設職員と情報交換などできて有意義な機会ではあったが、遅くまで懇談を楽しんだ結果、翌日の企画に影響が出てしまった。2 日目は東京都にある聖ヨゼフホーム（児童養護施設）の見学と支援内容などについて学ぶことができた。県外の施設見学については、宿泊ではなく日帰りで対応できるようなスケジュール、またより知識や支援内容を身に付けることができるような内容になるよう、研修部の方でも検討する必要がある。

②講師依頼

研修部で企画した新任職員研修（6／20)、また被措置児童等の権利擁護・虐待根絶のための研修会（9／7）に、心理職が講師として参加した。今年度は個人的に依頼を受けたのだが、次年度以降は心理委員会で検討を行い、講師派遣できることが望ましいのではないかと考えている。

４）厚生部の活動

ボウリング大会やゴルフ大会、キャンプリーダー研修など、職員の福利厚生に関する事業がある。

いわゆる「研修」は人材対策委員会がマネジメントし、厚生部の活動については地域支援担当職員がマネジメントする分担を行った。各活動について周知し、参加者を募ったのだが、参加者はいなかった。

１／12（金)、茨児協新年情報交換会が開催され、筑波愛児園から５名参加した。

次年度以降、今年度と同じように周知をはかり、参加者を募るかたちをとっていきたいと考える。また、次年度は関東ブロック野球大会の担当県となるため、各施設からの参加者を募っていく予定となっている。

５）オレンジリボンたすきリレー

11／9（金)、オレンジリボンたすきリレーが開催された。筑波愛児園からは 10 名参加した（職員４名、学ボラ６名)。今年度、急遽「県西コース」が新設され、筑波愛児園はそのコースを担当するかたちとなった。

オレンジリボンたすきリレー自体についての反省は今後の茨児協従事者部会で実施される予定となっている。県西コースについてはそのルートやスケジュールに対して意見が挙がっている状態であり、今後の話合いでそれらの対策が講じられると思われる。次年度以降、学ボラさんの協力を仰ぎながら参加を検討したいと考える。

６）こどもすこやか募金

茨児県児童福祉施設協議会も中心的な役割を果たしている「こどもすこやか募金」がある。この募金は、茨城県共同募金会が「テーマ型募金」を募り、地域課題や社会課題解決に取組む団体の活動を財政面から支援することを目的としている。今年度は４団体が参加しており、茨城県保育協議会の「子育て支援事業」、茨城県児童福祉協議会の「オレンジリボンたすきリレー事業」、茨城県地域活動連絡協議会の「子どもとメディアを考える事業」､茨城ダルクの｢依存症を繰り返すサイクルから治療へ繋ぐプログラムづくり」となっている。

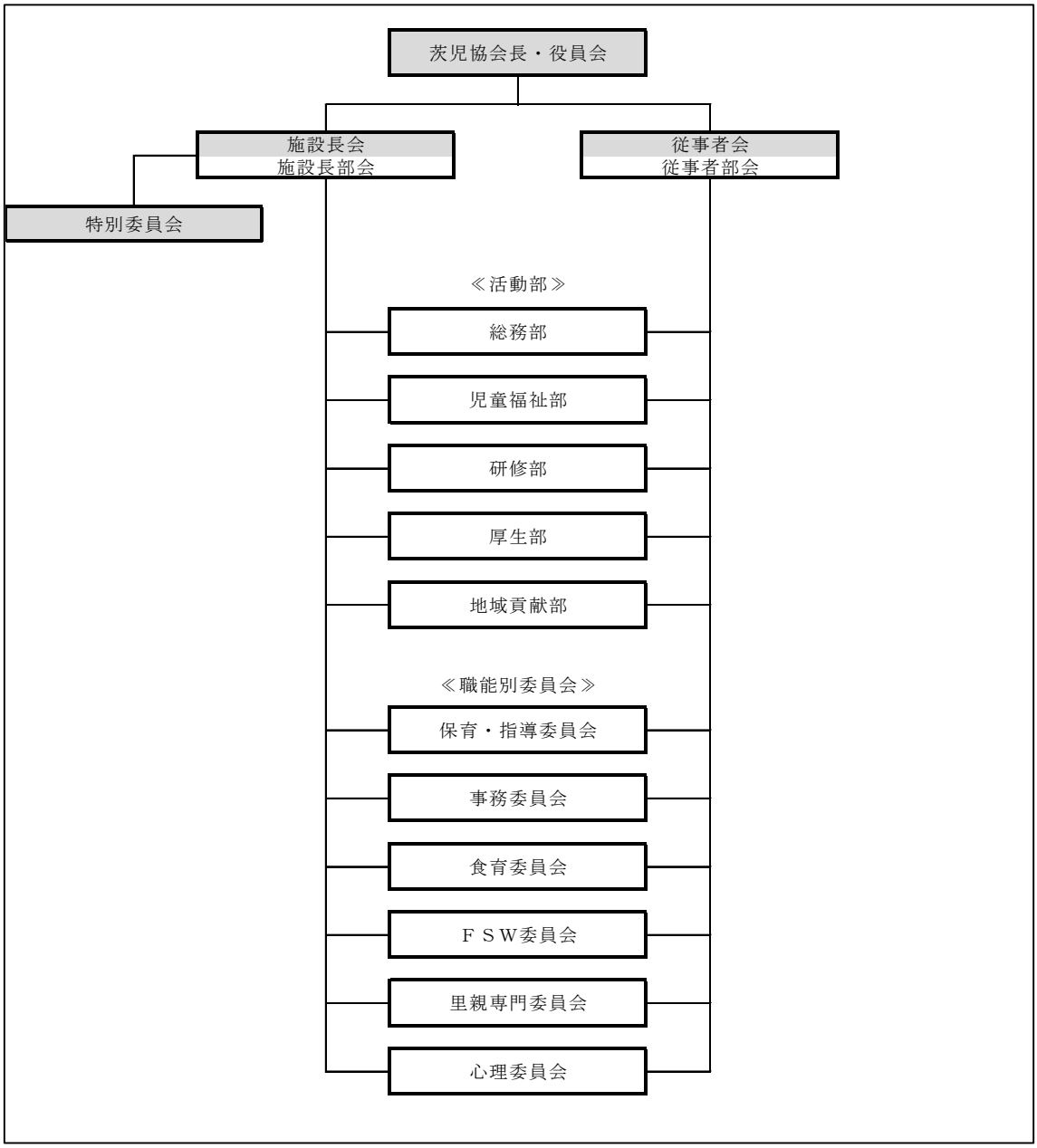
期間は 1／1～3／31 となっており、事務室に募金箱が設置されており、各職員の協力を賜りたいと考える。

≪2019 年度方針≫

◆茨城県児童福祉施設協議会の目的・活動に沿って、所属する職員が主体的に各活動に参加する。

◆茨城県児童福祉施設協議会の諸活動を通し、職員の資質向上に努め、入所する子ども支援、しいては地域へ貢献できるように取組む。

≪資料　茨城県児童養護施設協議会　組織図≫



施設実習

2018 年度総括・2019 年度方針（案）

2018 年度方針

専門部　高井　志保里
斎藤　朋義

１）2018 年度実習生受け入れ計画
「2018 年度実習受け入れ予定表」の通り（別表 2）
２）人材確保の一助となるように各養成校の実習報告会には積極的に出席する
３）実習指導者講習会の受講要件を満たす職員が出た際には対象者の受講を進める
４）実習日誌の丁寧な扱い
（期日厳守や日誌のコメントの記入の敏速化）

1.2018 年度全体総括

今年度は実習担当者を専門部より 2 名配置した。専門部の 1 人が、施設実習係がはじめてであるため､育成の意味から業務を一緒に取り組みながら見て覚えてもらうこととした。12 月までは 2 名で事前オリエンテーションを取り組み 1 月からは 1 人で実施する機会を設けた。これは年度当初から目標にしていたことであるためスムーズにおこなうことが出来た。まずは業務内容を知ることその後、実際に自分でやって見ることが大切である。常に実習生側の気持ちになって我々が何をしたら良いのか考えることが求められた。茨城県内の実習養成校との来年度の実習打ち合せ会や、実習報告会に参加して実習生を送り出す学校側の考えに触れる機会となった。これは施設として実習生をどのように育てていくのかを考えることと同じくらい実習生を送り出す側の考えに触れる機会となった。一面的な考えではなく、多面的な側面で施設実習を考える良い機会となった。

新しい取り組みとして受け入れる側の子ども達の気持ちの準備期間と実習生への理解を目的として､事前オリエンテーション時に実習期間やどのような実習生が来るのか似顔絵/名前/実習期間/好きな歌手・芸能人/趣味・特技/自由記述を書いてもらい担当ユニットに 1 週間前くらいから掲示してもらった。そのことで前年度のような家にいきなり来る人ではなく、今まで以上に実習生に対して子ども達は興味関心を示し、より実習生への理解が深まるひとつの要素にはなったのではないかと考える。実習事後アンケートを各部署に配布した。実習生の声を聞くツールとして今後も日々学びの気持ちを持ってアンケートの声にも耳を傾けていく｡また現在､実習の手引きの改定に取り組んでいるため今後提案する。

改善点として毎年の課題である実習日誌および評価表等の書類の返却が遅くなってしまったことがあげられる。何度も同じ反省点を書くことになっている。現状は、その日に担当した職員が実習日誌に記入するやり方をとっている。しかしその日に書けなければ次、出勤した時に記入することで、もっと記入がずれ込んでしまうことがある。その改善策として来年度は試行期間として次の日の勤務者が記入をする方法に変更したいと考える。1 年取り組み評価し再度やり方を検討したいと考える。

また実習の評価については、本来であれば不合格である実習生を何度か最低ラインの合格にすることがあった。学校側の希望があった所もある。しかし学校側が実習の振り返りをした時に評価で伝えるため、実際の評価より高くすることで振り返りが意味をなさいとの意見ももらっている｡筑波愛児園として実習の中盤で実習担当より実習生の評価を聞き、

あまりにも評価が低いという時はその時点で学校と早めに連携を図りその後の対応を確認するようにする。

来年度に向けて、実習日誌のコメントのやり方の見直し、事前訪問の３か月に１回（年間４回）の事前オリエンテーションの実施・実習振り返りを漏れなくおこなうこと。実習報告会に参加してその後の近況を聞く機会を作っていく。そのことで繋がりを継続し、児童養護施設職員として働きたい人材の確保につながる取り組みとなるようにしていく。

来年度の実習受け入れスケジュールについて、受け入れ時期は実習校がなるべく重ならないことや、４月・年末年始については受け入れをしないようにした。受け入れをしない理由としては、４月については新年度を迎え、新しい体制になり各ユニットが試行錯誤しながらユニットの形を作る大切な時期であること。また年末年始についてはより家庭的な行事（クリスマス・大掃除・大晦日・元旦・初詣等）が多くなる中で家庭的養護を目指す観点から受け入れ時期を考えた。

大きな課題としては、実習日誌の職員のコメントがユニットによって対応がまちまちであった。ほとんど記入出来ていない事もあった。その原因としては以下のことがあげられる

	課題点
ユニット職員	・期日提出の意識の低さ ・日誌コメント記入の流れの未整備
実習担当	・年度当初は最終日の日誌が届いてから 5 日以内の返却をお願いしていたが、未提出の時の働きかけがとても弱かった ・ユニット担当との連携不足

来年度こそ、今年度以上に実習日誌の扱いが日頃の養育日誌と同レベルの扱いとなるように責任の所在を明確にしたい。ユニット毎に実習生それぞれに実習責任者を設け責任の所在を明らかにした形で実習生を迎える体制作りをする。

人物	役割（責任）	
A 実習担当	・ユニット内実習責任者との連携 ・期日までの養成校への書類の発送	⇩ 連携 ユニット内実習担当
B ユニット内 実習責任者 （1 名）	・ユニット内のまとめ役 ・実習担当への書類の提出・連携	実習担当 ⇕ 連携 他のユニット職員
C 他のユニット 職員および調理員 （2 名+α）	・期日までの日誌の作成 ・ユニット責任者への提出	⇩ 連携 ユニット内実習責任者

２．受け入れ計画等について

今年度の受け入れ予定については､例年通り前年度 10 月に開催された県内保育士養成校と連絡調整をしたのちに、茨城県外の学校と実習先を自己開拓する学生からの問い合わせ等スケジュール調整を図った。

筑波愛児園で受け入れた実習は①保育士資格を目指す保育実習②社会福祉資格の取得を目指す社会福祉援助技術現場研修の 2 つである。②社会福祉援助技術現場研修については、実習施設等における相談援助実習を指導する実習指導者は、社会福祉士の資格を取得した後、相談援助の業務に 3 年以上勤務経験あり、実習指導を養成する研修を受講した担当者がいなければ実習の受け入れは出来ない。昨年度、実習指導者の資格を所持した職員が研修に参加した為、今年度は社会福祉援助技術現場実習の受け入れが出来るようになった。実習生の配属先については基本的には承認を得たスケジュールで進めたが、各ユニットの子どもの生活状況や運営状況などを考慮し、配属先を変更するなどの微調整を行った。今後も受け入れユニットと情報交換をしながら柔軟な調整が図れるように進めていきたい。（別表１：2018 年度実習生受け入れスケジュール）

実習が事前になくなった学校が 2 校あったため､昨年度と比べ受け入れ総数は 14 日の減少、受け入れ学校数 3 校の減少となっている。今年度は社会福祉援助技術現場実習として 1 校を受け入れている。

またあかつき寮の施設職員の一か月研修を受け入れている。施設を小舎制にするにあたって、小舎制の施設で研修をしたいとのことであった。

2018 年度、実習生受け入れ状況

【養成校】

時　期	学校名など	種別	人数	日数	延日数	受入ﾎｰﾑ
5/9～5/21	ﾘﾘｰ保育専門学校	保育	2	12	24	ちゅーりっぷ・すいれん
5/23～6/4	ﾘﾘｰ保育専門学校	〃	1	12	12	みつば
7/2～7/12	つくば国際短期大学	〃	2	10	20	ちゅーりっぷ・ジャスミン
7/15～7/27	川村学園女子大学	〃	2	12	24	ひまわり・すいれん
7/13～7/25	川村学園女子大学	〃	2	12	24	ちゅーりっぷ・すいれん
8/9～8/20	聖徳大学	〃	2	11	22	みつば・ちゅーりっぷ
8/24～9/10	淑徳大学	相談援助	2	18	36	なのはな・ジャスミン
9/5～9/17	茨城キリスト教大学	保育	2	12	24	ひまわり・すいれん
9/18～9/30	江戸川大学	〃	2	12	24	みつば・なのはな
10/3～10/15	帝京大学	〃	1	12	12	ジャスミン
10/22～11/3	流通経済大学	〃	2	12	24	ひまわり・なのはな
11/5～11/15	筑波研究学園専門学校	〃	2	10	20	すいれん・ちゅーりっぷ
1/8～1/20	江戸川大学	〃	1	12	12	ジャスミン
2/1～2/11	常盤短大	〃	2	10	20	ちゅーりっぷ・すいれん
2/16～2/28	東洋大学	〃	2	13	26	みつば・ジャスミン

3/1～3/13	川口短期大学	〃	2	13	26	ひまわり・なのはな
総　計	14校		26	197	358	
前年度比	-3校		-6	-14	-39	

※体験日のみ。休日は除く

【児童養護施設職員】

時　期	施設名など	種別	人数	日数	延日数	受入ﾎｰﾑ
11/20～12/20	あかつき寮	施設職員	1	30	30	すいれん・なのはな

３．プログラム及び進行管理について

実習プログラムについては、事前オリエンテーション時に説明をした実習計画の項目ごとに実習に取り組む上での考えをまとめてもらっている。まとめることで実習に望む姿勢が整理されより目的意識が向上する取り組みとなっている。その実習計画をもとに実習がスタートとなる。また施設の選択プログラムとして以下にあげる項目から１～２個選択をしてもらい専門職に話をしてもらっている。施設の諸機能を知る・深める意味でとても良い機会になっている。選択プログラムは以下の 10 項目である。

①FH/養育家庭　②権利養護・苦情解決　③GH 見学　④心理療法担当職員
⑤家庭支援専門相談員　⑥個別対応職員　⑦治療指導員　⑧自立コーディネーター
⑨地域支援担当　⑩ケースマネージメント

来年度は、以下の 13 項目に変更する予定である。（⑫・⑬については職員が配属されてから実施時期については検討する。）

①FH/養育家庭　②権利養護・苦情解決　③GH 見学　④心理療法担当職員
⑤家庭支援専門相談員　⑥個別対応職員　⑦治療指導員　⑧自立コーディネーター
⑨地域支援担当　⑩医療機関等連絡調整員　⑪ケースマネージメント　⑫看護師　⑬子育て支援職員

オリエンテーション時には目的・目標を持って実習に参加して欲しいこと。子どもとの関わりの前に挨拶がコミュニケーションを図る上で何よりも大切であること、子どものことでわからないことがあるのは当然のことであるため積極的に質問をして欲しいことを伝えた。しかし掃除等のルーティンについては数日でどこを実施するかわかるようになる為、それを最終日まで「次に何をやりますか？」等を聞くことはやめてほしいことも伝えた。掃除は自分で見つけることであること。子どもと関わるために来たという気持ちを持つかもしれないが、環境整備（掃除）も子どもの支援に繋がることを説明している。

また今年度から実習生自身に似顔絵や簡単な自己紹介を記入してもらう「似顔絵シート」を作成した。担当ユニットには 1 週間前くらいから子どもたち見やすい場所に掲示してもらった。シートに書かれた内容（スポーツや音楽等）から実習生と子どもたちとの間で会話が広がることもある為、来年度も継続していきたいと考える。

そして実習日誌は出来事日記にならないようにしてもらいたいことや、〇〇の関わりをしたら〇〇と返って来た等、意識的に関わって欲しいこと・子ども達のマイナス面だ

けでなく、プラス面を見つけて欲しいこと等を伝えている。日誌の書き方や実習に望む姿勢等については養成校側と受け入れ施設の考えを双方が理解しないと本当の意味での実習生にとって有意義な学びには結びつかないと感じている。その意味で養成校との協議会や実習担当者会議等には積極的に参加して実習を送り出す養成校側の考えを聞き、受け入れ側の大変さだけにならないようにした。すぐ日誌にコメントがかけなくても口頭で質問事項等に答えて欲しいことも伝えてきた。今後も連携・共有しながら実習生の受け入れを丁寧におこなって行く。

2018 年度　実習生受け入れの流れ

日時	項目	内容
実習約 1 ヶ月前	事前オリエンテーション（実習係担当）	
実習前日	前泊	16 時までに施設へ（実習担当がいない時は宿泊場所へ案内） 夕食は該当ユニット（自己紹介） 実習計画書・細菌検査結果受け取り 選択プログラム確認後、実習担当へ報告 実習予定表を実習生・実習担当へ渡す
実習初日～	実習	初日・中間・終盤での話し合い実施
実習期間中の後半	事後オリエンテーション（実習係担当）	
最終日日誌受け取り後 5 日以内（期限厳守）	評価表・日誌・出勤簿	実習担当に評価表・日誌・出勤簿の提出

↓

2019 年度　実習生受け入れの流れ

日時	項目	内容
実習約 1 ヶ月前	事前オリエンテーション（実習係担当）	5～6 月実習生→第 1 回　4 月実施 7 ～ 9 月実習生→第 2 回　6 月実施 10～12 月実習生→第 3 回　9 月実施 1～ 3 月実習生→第 4 回　12 月実施
実習前日	前泊	16 時までに施設へ（実習担当がいない時は宿泊場所へ案内） 夕食は該当ユニット（自己紹介） 実習計画書・細菌検査結果受け取り 選択プログラム確認後、実習担当へ報告 実習予定表を実習生・実習担当へ渡す
実習初日～	実習	初日・中間・終盤での話し合い実施
実習期間中の後半	事後オリエンテーショ	実習の振り返り

	ン （実習係担当）	→強化事項
最終日日誌受け取り後5日以内 （期限厳守）	評価表・日誌・出勤簿	実習担当に評価表・日誌・出勤簿の提出
実習後	実習報告会	実習生の体験発表を聞く 実習生・先生との話をする場を設ける

４．実習終了後のフォローと人材確保

学生には事前アンケートおよび事後アンケートを取り丁寧に実習での様子を確認することとなった。事後アンケートでは職員から学ぶことが多かったことや、とても良い実習が出来たこと等評価が高かった。しかしまだアンケートには職員の言葉使いの悪さ等の指摘が存在する。私たち職員は学びに来ている学生の前で仕事をしていること。学びの対象者になっている自覚が必要である。またいろいろな方々からの意見に耳を傾け学ぶ姿勢と謙虚さを忘れず仕事にまい進したい。今年度はアンケートを職員に配布してより学生の声を直に知ってもらえるようにした。アンケートを見て「どこのユニットのことだろう？」等の声が聞こえた。アンケートは犯人探しをするものではない。全職員が自分のこととして考えることが必要である。そのためのアンケートであることを再認識してもらいたい。

施設実習は児童養護施設職員になり得る人材を養成したり、児童養護施設職員になりたいと思ってもらえるとても貴重な機会と捉えている。だからこそ実習事前オリエンテーションは大学/短大/専門学校ごとに実施してより丁寧に実習生が実習に来る前の不安軽減のために取り組んでいる。また実習終了時の話し合いについては出来ていないこともあり反省しなければならないと感じている。実習後に各大学/短大/専門学校で行われている実習報告会に参加した。実習報告会では発表された内容についてコメントを求められた。また児童養護施設職員としてのやりがいを話す場を提供してもらった。来年度は実習事前オリエンテーションについては3ヶ月ごと年間4回を実施（①5月～6月②7月～9月③10月～12月④1月～3月）して、実習後の振り返りを強化するため必ず振り返りの時間を組み込めるように実習予定表に施設実習係との話し合いの時間を記載出来るように担当ユニットと調整を図る。また実習報告会へ積極的に参加して、実習生と将来の希望や現状について聞く機会を設ける。児童養護施設を就労先として考えてもらえるように児童養護施設職員としてのやりがいも伝えて行く。

５． 実習指導者の養成について

2007年12月の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正・公布に伴い、社会福祉士養成課程の実習生の受け入れについては、実習指導者を養成するための講習会を修了することが必須になった。今年度も実習指導者講習会の受講要件を満たす職員がいたため研修に参加した。そのことで次年度からは社会福祉士養成課程の実習生の受け入れが出来ることとなった。

社会福祉士介護福祉士学校指定規則（2008年3月24日）
第3 条第一号ワ　実習施設等における相談援助実習を指導する実習指導者は、社会福祉士の資格を取得した後、相談援助の業務に3 年以上従事した経験を有する者であって、かつ実習指導者を養成するために行う講習会であって厚生労働大臣が別に定める基準を満たすものとしてあらかじめ厚生労働大臣に届け出られたものを修了した者であること。

６．2019 年度方針

１）2019 年度実習生受け入れ計画
「2019 年度実習受け入れ予定表」の通り（別表 2）
２）人材確保の一助となるように各養成校の実習報告会には積極的に出席する
３）実習指導者講習会の受講要件を満たす職員が出た際には対象者の受講を進める
４）実習日誌の丁寧な扱い
（期日厳守や日誌のコメントの記入の円滑化）
５）「実習の手引き」の整備
６）GH 配属としての実習を計画する

年　　月　　日

実習誓約書

社会福祉法人　筑波会
児童養護施設　筑波愛児園
施設長　小林　弘典　殿

住　　所
氏　　名
生年月日

筑波愛児園で実習生として活動するに当たり、下記の条項を固く守ることを、誓約いたします。

１．　実習時間を守ります。

２．　実習内容を厳守します。

３．　職員に無断で、入所児童に小遣いや物を与えません。

４．　入所児童に自分の連絡先を教えません。

５．　実習中、知り得た入所児童のプライバシーに関わる情報は、口外しません。

以上の事に違反した場合や、貴園の子ども達の生活が不安定となり得ると判断され、実習を打ち切ることとなった時には、速やかに園の指示に従います。

実習事前アンケート

氏名【　　】

１　児童養護施設に関して、事前学習に活用したものに〇を付けてください

①当園施設パンフレット　②当園ホームページ　③研修(研修名　　)
④書籍（書籍名　　）⑤その他（　　）

２　児童養護施設の業務・事業について、関心を持ったものをあげてください

３　当園の業務等で確認したいこと、詳しく知りたいことなどあげてください

４　実習にあたっての要望等があればあげてください





年　　月　　日

実習後アンケート

氏名　【　　】
学校名【　　】
学年　【　　】





1　児童養護施設の組織と業務内容について
a 理解できた　　b おおむね理解できた　　c 理解できない

2　あなたに対する職員全体の対応はいかがでしたか。
a 大変良い　　b 良い　c 普通　　d やや不十分　e 不十分

３　実習中に悩んだことや疑問、困ったことなどはありましたか？
a ある　　b 特にない

４　３で「ある」と答えた方で、それはどのようなことですか？
a 利用者（子ども）に関わること　b 職員に関わること　c 施設に関わること
d その他（　　）

５　３であると答えた方でそれはどのようなことでしたか？具体的に書いてください。

６　それはどのように解決しましたか？
a 自分自身で理解した　b 職員の説明による　c 学校の教員に相談した
d 解決しなかった　e その他（　　）

7　実習の目的は達成できましたか。
a 達成できた　b どちらともいえない　c 達成できなかった

8　その目的の達成度はいかがでしたか
a 達成できた　　b おおむね達成できた　c あまり達成できなかった
d 達成できなかった　e 学習の機会がなかった

9　実習の満足感はいかがでしたか
１　満足　　２普通　　３不満

10　実習を終えての感想をお書き下さい

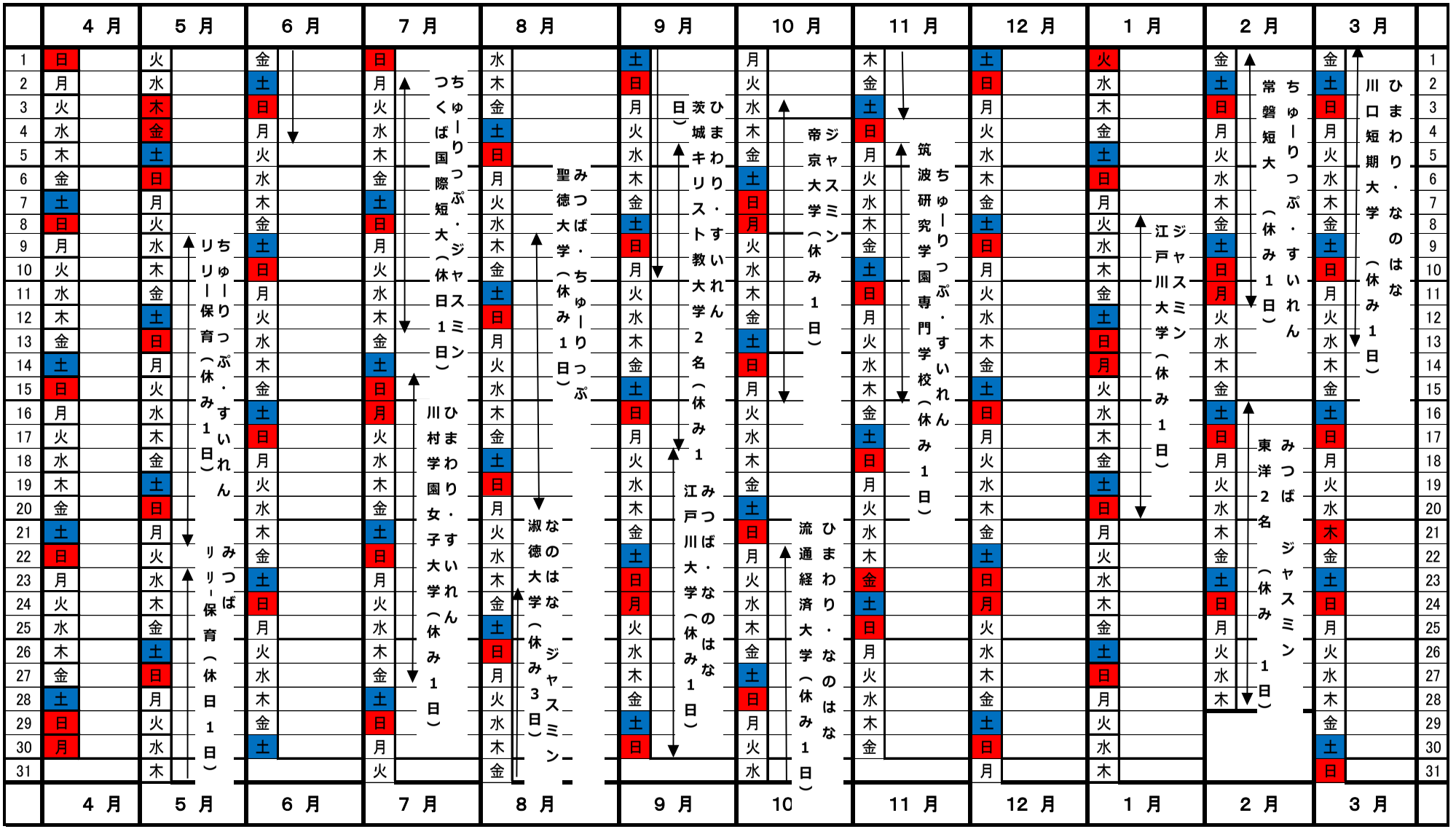
11　実習にあたって当園が改善すべき点や今後、希望することがあればお書き下さい

（今後のより良い実習環境を提供するために必要なものです）

ご協力ありがとうございました

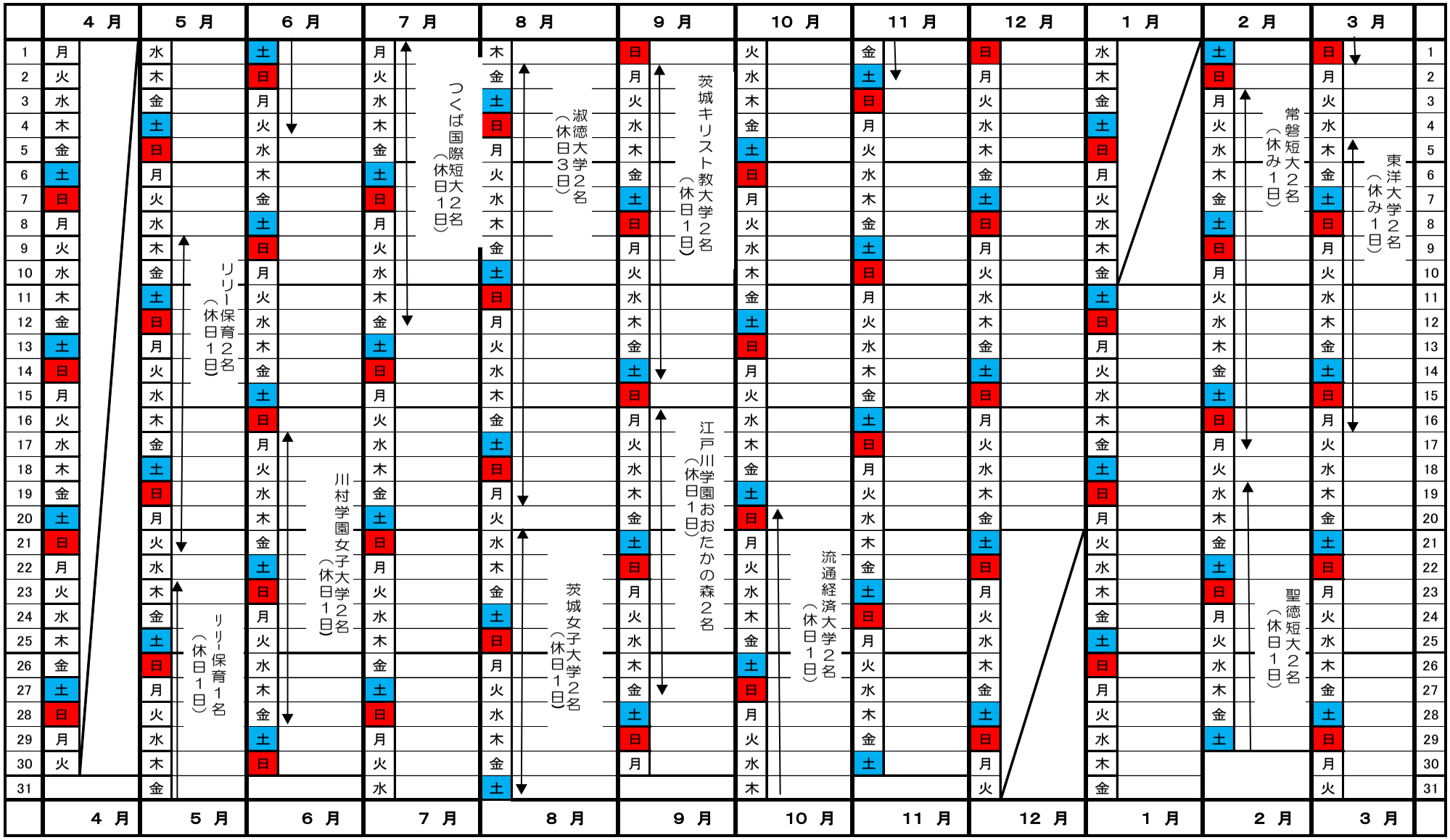
【別表１】

2018 年度　実習受け入れスケジュール（案）



【別表２】

2019年度　実習受け入れスケジュール（案）



ボランティア係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

専門部

≪2018 年度方針≫

・係会議録を整備するなどしてより確実な業務運営を行っていく。
・施設見学受け入れの際は丁寧に調整を行い、必要に応じて人材対策委員会と密に連携を図り協働してく。

Ⅰ．はじめに

福祉施設における各種ボランティアの存在は、子どもに対して充実した支援、安心・安全な生活を提供する上でとても欠かせないものとなっている。更には、本園の子どもが将来社会に出ていくことを考えた時、現在、様々な大人と関わる事は子どもの生きる力を育成する上で重要な経験となりえるものと考える。本施設においてもボランティアの果たす役割は大きく、その受け入れに当たっては、ボランティアに対する考え方を十分に議論する必要がある。ボランティアの存在をどのように位置づけるのか、施設職員とボランティアの関係はどうあるべきか、等大いに議論を交わし、子どもたちへの更なる支援を目指していかなければならない。

さて、本施設を支えるボランティア活動は、子どもが生活するホームのニーズとボランティアのニーズが合致しなければ大いにその成果を発揮することができない。ボランティア係は、両者のニーズを照らし合わせ、ボランティア活動がスムーズ且つ効果的に行われるように窓口となって、子ども達に大いなる支援を提供する役割を担っている。

今年度においても本係が窓口となって多くのボランティアの方々から支援をいただいた。上記の 2018 年度方針を踏まえて今年度の係総括を以下に記していく。

Ⅱ．総括

1　筑波大学の学生ボランティアについて

今年度も年間を通して、筑波大学の学生ボランティアに様々な形でボランティア活動を行っていただいた。ホームの様々なニーズを受け、学習支援を通しての個別の関わり、本園行事等を通しての集団支援等、様々な場面において、全サポートが主な活動である。学生ボランテイアならではの子どもとの関係は職員のそれとは違い、より親しみやすいものであり、職員の支援と相互に影響しあうことで子どもの成長をより良く促している。

係りでは主に学生ボランティア全体を対象とした、オリエンテーションの実施、全体行事、遊ぶ会の人数集約等、関係部署の業務に支障をきたさないよう迅速かつ確実に行ってきた。

また、今年度学生ボランティアより「遊ぶ会で子供たちと一緒に外で遊んでいる際、職員さんたちが公務室内でおしゃべりをしていてこちらを気にしている様子がない。」や「学習ボランティアで子供に勉強を教えている時間、途中職員さんが様子を見に来ることがほとんどない。」との意見が聞かれた。これを受けて各棟には伝達を行い、今一度ボランティアとの関係を見直し職員としての職責を果たすよう促した。職員とボランティアの関係に

おいて、ボランティアが子どもと関わっている場合でも、子供支援全般における業務責任は職員が負うべきものである。「ボランティアが子どもを見ているから大丈夫」ではなく、職員は常に自分が果たすべき職責を意識し、職員としてどうあるべきかを考え行動していくことが重要である。

① 2018 年度筑波大学学習ボランティア活動一覧（2019.2.1 現在）

日　　時	活動内容	備　　考
毎週水曜日 19：00～ （青空棟・太陽棟） 毎週金曜日 19:00～ （さくら棟、つくしホーム）	週 1 学習補助	・個別学習指導
毎週日曜日 10：00～	遊ぶ会	・遊び補助 ・本園園庭利用
年 2 回	各棟学ボラミーティング	
隔週	受験生指導	
夏休み期間	夏休み宿題補助	・集団支援
5 月 26 日実施	百合ヶ丘学園 1～４年運動会	・学生 3 名参加
8 月 27 日実施	納涼祭	・会場準備、ステージ発表参加 ・学生 17 名参加
9 月 8 日実施	秀峰筑波義務教育学校体育祭	
10 月 10 日実施	筑波幼稚園運動会	・学生 2 名参加
11 月 4 日	筑波大学学園祭招待	
11 月 24 日実施	愛児園キラリンピック	・学生 10 名参加
2 月 9 日実施	歩け歩け大会	・学生 10 名参加予定

児童会(スポーツクラブ)行事

日　　時	活動内容	備　　考
5 月 20 日 14 時～16 時	ドッチボール	・学生 5 名
6 月 17 日 14 時～16 時	バスケットボール	・学生 4 名
7 月 15 日 14 時～16 時	サッカー	・学生 3 名
8 月 19 日 14 時～16 時	プール	・学生 2 名
9 月 16 日 9 時～11 時 30 分	パターゴルフ	・学生 4 名
11 月 18 日 14 時～16 時	バトミントン	・学生 7 名
1 月 20 日 14 時～16 時	卓球	・学生 5 名
1 月 27 日 10 時～17 時	スポーツ大会	・学生 4 名
2 月 17 日 14 時～16 時(予定)	ボルダリング	・学生(調整中)

② 学生ボランティアオリエンテーション

年度当初に係と学生ボランティアでオリエンテーションを行い、全体に向けての本園の概要、本園児童の実情、活動ルールの確認、個人情報保護の説明を行った。学生からは養護理念に関する質問から、子どもとの関わりにおける注意点など多くの質問が出さ

れた。真剣に耳を傾ける学生の姿が多くみられるなど、学生とのオリエンテーションは欠くことのできないものである。また、学生ボランテイアは継続して活動しているものがほとんどであるが、新しい学生ボランティアが入ってくることもあり、年度当初に行うオリエンテーションはより充実したものにする必要がある。次年度、係担当が変更になっても引き継ぎがスムーズに行えるようオリエンテーション進行の手順を使用して学生ボランティアオリエンテーションを行っていく。

2018 年度筑波大学学習ボランティアオリエンテーション

次　第

Ⅰ　本園園長挨拶

Ⅱ　本園紹介

1　筑波愛児園基本理念

①　個人の意思の尊重　②発達の援助　③養護の継続と自立支援

2　2018 年度　児童構成（資料参照）

3　2018 年度　年間スケジュール（資料参照）

Ⅲ　ボランテイア活動をするにあたって

①　個人情報保護規程について

・個人情報の流出（資料：筑波愛児園でボランティア活動をされる皆様へ）

②　体罰・差別・セクハラの禁止について

・体罰の禁止

殴る、たたく、蹴る、身体の拘束等肉体的苦痛、無視といった精神的苦痛

・権威的態度の禁止

威圧的態度、乱暴な言動、必要以上に大きな声

・差別の禁止

年齢にふさわしくない接し方

障害の程度、状態、能力、性別、年齢などの差別

・セクハラの禁止

③　職員との関わりについて

・情報の共有化

・各ホームとのオリエンテーション

④　学力を育てる取組み（週１回の学習指導、受験指導）（資料：進学、就職状況）

・教材の工夫、子どもとの関わり方

⑤　行事参加（全体行事、ホーム行事、遊ぶ会等）

・全体行事、ホーム行事、遊ぶ会等（資料参照）

・連絡調整窓口の仕組み（資料参照）

Ⅳ　質疑応答

Ⅴ　ボランティア誓約書配布

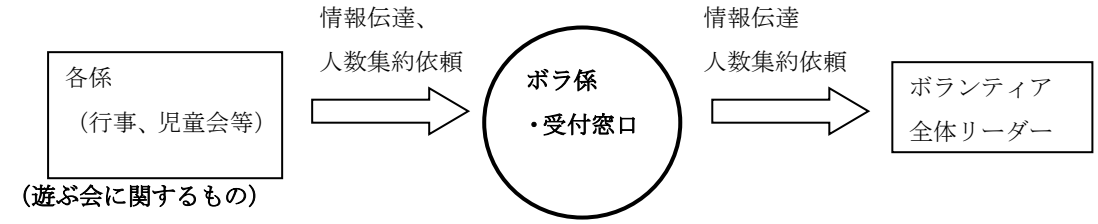
③　学生ボランティア窓口業務

学生ボランティア窓口業務については、以下の体系をもとに連絡調整を行ってきた。学生ボランティア側に担当窓口を明確に提示することで情報伝達が迅速且つ効率よく行

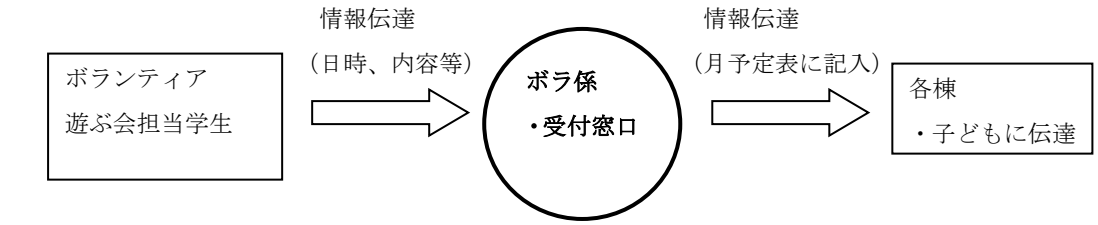
うことができた。次年度も引き続き以下のⅠ～Ⅲをもとに本係の窓口業務を行っていく。

Ⅰ　園全体に関わるものについて

（園行事、その他本園全体に関わるもの）

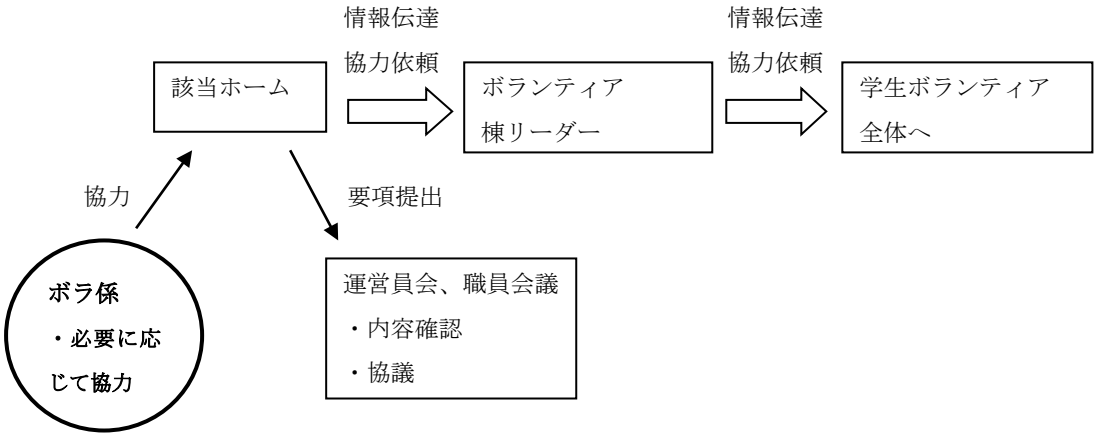


（遊ぶ会に関するもの）

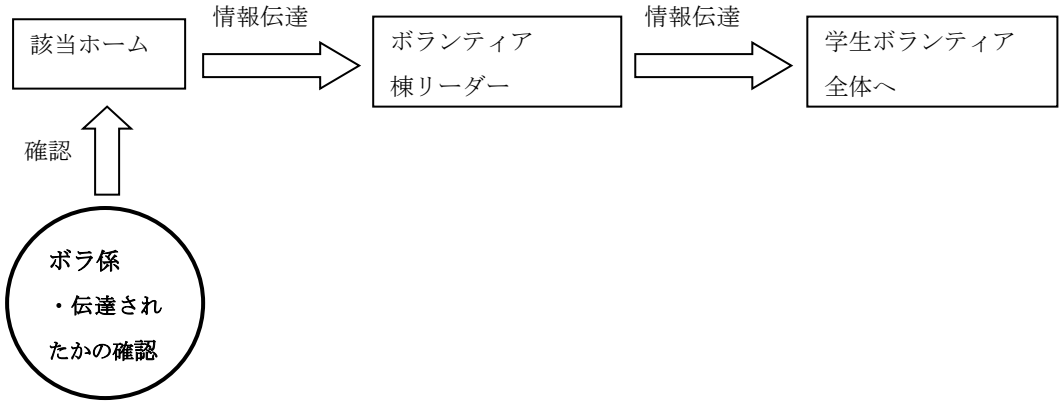


Ⅱ　各ホーム単位で関わるもの

（ホーム外出、除草作業等）



Ⅲ　児童の新規入所、退所、ホーム移動等については、園全体に関わる事であるが、より効率よく伝達させるため該当ホームより直接伝達をする。



④　学習ボランティアとの交流会

今年度、筑波大学習ボランティアより、愛児園の職員さんと交流会を持ちたいと話があ

ったため、係りと学習ボランティアとで調整を図り以下の内容を企画し実施した。交流会当日は、スポーツを通して職員とボランティアが同じチーム内で声を掛けあったり、ボランティアに関する情報を交換し合ったりと互いにコミュニケーションを図り友好な関係性を構築することができた。

学生・職員交流会実施計画

1）目的 ： 一緒に汗を流してスポーツをすることで親睦を深める。
ともに戦った仲間と食事をすることで、普段できないような話をする機会とする。

2）日時 ： 2018 年 9 月 17 日（月）9:00～13:00

3）場所 ： 筑波総合体育館

4）内容 ： ドッチボール・大縄・リレー
昼食（天気が良ければブルーシートを敷いて外で食べる。悪ければエントランスを使用する。）

5）参加人数 ： 職員 11 名
学生 12 名
計　23 名

6）役割分担 ： 進行、全体指揮→学ボラリーダー（柳澤、川村）
掲示物作成、弁当注文→(柳澤・川村)
弁当取り→配達してくれる。
会場準備→参加者全員

7）日程 ：

時間（AM）	活動内容
9:00	筑波大学体育館集合
	ルール説明・準備運動
9:15	自己紹介
9:30	競技開始
9:40	①　出た目リレー
10:00	②　ドッチボール
11:00	休憩
11:15	③　大縄跳び
11:50	片付け・昼食準備
12:00	昼食
12:40	順位発表
13:00	解散

8）費　　用：一人当たり 1000 円（自己負担）

9）協議内容：①出た目リレー　②ドッチボール　③大縄跳び

10）交　　通：　各自、乗り合いで集合

11）準備物　：ボール（２つ)、カラーコーン（３つ)、飲み物、模造紙、油性ペン、景品、救急箱

2　個人ボランティアについて

個人ボランティアの希望があった場合、本係が窓口となりその受け入れの調整を図ってきた。個人ボランティアのニーズを受け、各ホームと協議し運営委員会に提案、職員会議にて承認、各ホームとの日時調整を図り受け入れを行ってきた。また、ボランティア希望者のニーズと本園のニーズが合致しない場合は、受け入れが出来ない旨を丁寧に説明し先方に失礼のないよう対応してきた。

今年度も個人ボランティア一人一人に活動記録簿を用意し、職員との情報共有を図ることで、子どもへのより良い支援の一端を担うよう環境を整えた。実際の活動では、個人ボランティアより、支援の際に必要な情報の提供を願いたいとの申し出があったため、ボランティア用に子ども支援に必要な情報をまとめた資料を活動記録簿に閉じることとし閲覧できるよう整備した。年度末に個別ボランテイア活動記録簿を係で確認し、個別オリエンテーションを開き、今後の活動の有無を含めて次年度の活動計画を協議していく。

・2018 年度個別ボランティア受け入れ一覧（2019.2.1 現在）

受け入れ棟・ユニット	氏名	ボランティア内容	備考
ちゅーりっぷ	大林	読み聞かせ	・通年
ちゅーりっぷ	野沢	読み聞かせ	・通年(休業中)
ちゅーりっぷ	五島	読み聞かせ	・～11 月
ちゅーりっぷ	国廣	読み聞かせ	・11 月～
ちゅーりっぷ	澤村	1 日体験(実習)	・1 日のみ
さくら・青空・太陽	薄田	散髪	・通年月 2 回程度
青空棟	長谷川	子ども支援	・毎週月曜日
太陽棟	畑	子ども支援、学習	・毎週土曜日
	沼田	ヨガ体験	今後については検討

3　団体ボランティアについて

団体ボランティアについても、ボランティア係が窓口となって日時、内容等の調整を図ってきた。本園児童の実情にあった工夫ある企画にするためにも、受け入れ時に行う打ち合わせはとても重要となる。子どもたちへの多大なる善意を通して、ただ形だけでなく誰もが多くの人に支えられていることを子どもたちに伝えていくためにも、更に充実した団体ボランテイアの受け入れを実現していく。

・2018 年度団体ボランティア受け入れ一覧

団体名	内　　容	備　　考
茨城県商工会青年部新筑ブロック	クリスマス企画	・12 月 25 日実施 クリスマスケーキ寄附
オークラフロンティアホテル	納涼祭寄付 クリスマス企画	・8 月 27 日実施 ビンゴ景品寄付 ・12 月 25 日実施 クリスマスケーキ寄附
アートセラピー	臨床美術創作活動	・通年 ・ちゅーりっぷ対象

チーム ST	靴企画 寿司企画	・7 月 26 日 ・2 月実施企画(内容については検討中)
第一生命保険株式会社	クリスマス企画	・12 月 19 日
つくばインターナショナルクリスチャンアッセンブリー	クリスマス企画	・12 月 10 日実施 クリスマスプレゼント
ワンズモータース	クリスマス企画	・12 月 23 日実施 クリスマスプレゼント

4　招待行事について

招待行事の実施は家庭的養護推進を受けて園全体での実施を図るのではなく、棟及びユニット外出として招待行事を活用していくことが望ましいと考える。更に、園内のサーバー環境が整備され、各棟で招待行事に関する情報が閲覧できるようになった。これらのことを受け今年度も招待行事の窓口業務を各棟にお願いした。ただ、招待行事の中で必要な手続きを一括で行った方が効率的であるものに関しては、これまで通り係りが窓口となって申込み等の手続きを行っていく。

・係で受付を行った招待行事

団体名	内　　容	備　　考
つくば科学万博記念財団	科学実験体験	・12 月 15 日実施 ・児童 5 名参加

5　施設見学受け入れ業務について

今年度もボランティア係では、施設見学の受け入れに関する業務に従事した。本園の移転改築後、本園の見学を希望する団体及び個人は増加している傾向にあり、今年度は年度後半に施設見学の依頼が多数あった。また、入職希望者の施設見学については人材対策委員会と連携し情報共有、業務分担等を丁寧に行い実施してきた。

実際の施設見学では受け入れ手順をベースに、先方との連絡調整、備品準備、施設案内等、専門部内で役割分担を行い滞りなく実施することが出来た。各生活棟には見学者の受け入れを都度依頼し、玄関周りや建物内の環境整備をお願いしてきた。次年度以降もスムーズな施設見学の受け入れを目指して業務に従事していく。

① 2018 年度施設見学実施一覧

日時	見学者	人数
4/9(月)　10:00～	ボランティア希望渡辺さん	1 名
5/11(金)　14:00～	ボランティア希望坂本さん	1 名
6/10(日)　13:00～	ボランティア希望ナカマチさん	1 名
6/10(日)　15:00～	ボランティア希望広瀬さん	1 名
7/7（土）　14:40～	LIP オープンハウス	7 名
7/25(水)　11:00～	ボランティア希望ナカマチさん	2 名
9/15（土）12:45～	LIP オープンハウス	9 名

9/21（金）10:00～	入間市役所	40名
9/28（金）10:00～	古河市民生委員	19名
10/9（火）13:00～	ボランティア希望沼田さん	1名
10/26（金）19:00～	ボランティア希望カノウさん	1名
11/4(日)11:00～	ボランティア希望澤村さん	1名
11/4(日)13:00～	ボランティア希望アウメダイアレックさん	2名
11/7（水）10:00～	河内町民生委員	5名
11/17（土）12:45～	LIP オープンハウス	4名
11/27（火）12:30～	唐池学園	4名
1/26（土）12:45～	LIP オープンハウス	7名
2/25（月）13:30～	至誠大地の家（予定）	4名

② 施設見学受け入れ手順

項目	担当	内容	備考
連絡窓口	ボランティア		・ボランティア係が不在の際後日係から連絡する旨を伝える
見学希望者の確認	ボランティア	（確認事項）・名前 ・所属 ・連絡先 ・人数 ・希望日時 ・目的・内容	・受入れの可否については検討して返答する旨を伝える ・個人受け入れは目的が様々なので都度受け入れを検討していく
受け入れ協議	ボランティア	・内容確認し係内で受け入れ協議 ・係として受け入れ可否の判断をする	・実習または施設職員希望者の場合は人材対策委員会と協議を図る
施設長へ報告	ボランティア	・決定した内容を施設長に報告	
決定	施設長	・見学者受け入れ可否の決定	
受け入れ決定後	ボランティア	①見学希望者との調整	・依頼書は施設長宛に送付してもらう ・時間設定や内容は施設に任せてもらうよう伝える ・質問事項などは予め依頼書に記載してもらう ・バスの駐車は職員駐車場を利用してもらうよう案内する ・個人希望者は依頼書なし ・見学日が土日祝日希望の場合先方と調整

		②施設長に報告	・受け入れの返事をしたこと ・依頼書が施設長宛に届くこと
依頼書が届く	ボランティア	・内容検討し専門部会議に提案	
運営委員会報告	専門部		・間近の時には依頼書が届く前に運営委員会に報告
職員会議報告	ボランティア 専門部	・全職員に周知 ・当日の対応職員など確認する	・見学ユニットの調整
事前準備	ボランティア 専門部	・資料の用意 ・飲み物準備　※団体の場合 ・会場設営	・園の概要・広報誌（2 種類） ・人数分のペットボトル ・※パソコン・プロジェクター（必要に応じて用意）
見学者受け入れ	施設長 ボランティア 当日の対応者	・施設長挨拶 ・施設概要 ・その他の説明 ・施設見学	・駐車場の案内

6　係会議について

ボランティア係では会議時間が保障されていないが、都度必要に応じて協議の場を設定し情報共有、役割分担、提案内容の協議等を行ってきた。担当職員が同じ部署であるためスムーズ且つ効率的に会議を運営する事が出来た。さらに今年度は係会議録を整備したことで情報共有の強化が図られ確実な業務に従事することが出来た。次年度も係会議録の整備を着実に行うことでより確実な会議運営を行っていく。

≪2019 年度方針≫

・係会議録を整備するなどしてより確実な業務運営を行っていく。
・施設見学受け入れの際は丁寧に調整を行い、必要に応じて人材対策委員会と密に連携を図り協働してく。

広報係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

事務部　　小林　早苗
根本　敬子

≪2018 年度方針≫

・施設の現状（法人運営、施設運営、支援内容全般）の最新情報を発信していく。
・広報誌作成の際、寄附者（招待含）への感謝の気持ちを込める意味として寄付者名の公開をしていきたい。しかし、個人情報の観点から、公開の有無や記載名の確認など慎重に進めていく。
・ホームページブログ内に身近な出来事を掲載していく。
・ホームページの問い合わせ等に対し、各担当と連携して対応していく。

１．広報係の役割

広報係は、ご支援ご協力いただいている方や、児童養護施設筑波愛児園の認知度を上げる為、園内、園外の行事等さまざまな情報を発信し、多くの人々と繋がる大きな役割がある。発信するにあたり、1 つの行事に沢山の話し合いを重ね、子ども達が様々な経験、交流する事で、子ども達の成長を見守り社会的自立ができるよう支援していきたいと考える。経験した事を広報誌、ホームページを通し、園外広報を行ってきた。また、多くの寄附が届く中、その都度、ホームページに感謝の気持ちを込め掲載している。

今後も、日本中、そして世界中の人々へ情報発信を行うことによって広報係としの業務を遂行していきたいと思っている。子ども達が安心安全に、そして、よりよい生活を送れるよう情報発信を行っていきたい。

２．総括

①　筑波愛児園広報誌について

今年度は 1 回の広報誌を発行した。広報詩は理事長就任挨拶、園内､園外の行事、ご支援ご協力頂いている各ボランティアとの交流状況、園発行の食育だより、様々な情報を掲載している。今年度もたくさんの招待をして頂き、子ども達のさまざまな笑顔を見る事が出来きた。それらの体験や楽しかった様子が伝わるよう写真やイラストで工夫をしてきた。

広報紙の配布は、関係者他本園周辺地区（上田中地区、下田中地区、水守地区、山木地区、前野地区)、約 1,200 部配布している。多くの方に支えられている事を忘れず、職員、子どもとも感謝の気持ちを持ち生活していきたい。子ども達の様々な体験、日々の生活を伝え、園内の行事等の案内し、多くの方に参加していただく事で、児童養護施設の理解を深めていきたい。

毎年恒例行事の納涼祭も、各係りと連携し地域、支援して頂いている方に案内をし多くの方に参加して頂き、盛大に行う事が出来た。

今年度も昨年同様、ホームページ上で広報誌作成の際の寄附者（招待含）への感謝の気持ちを込める意味として寄附者名と頂いた物の写真を紹介している。

今後も内容の更なる充実を図り、地域、社会の皆様へ愛される広報誌作りをして

いきたい。

・2018 度広報誌概要

発行名	内容	備考
平成 30 年第 1 回号	・本園理事長挨拶 ・TEAM ST 様『お寿司イベント』 ・UBS 証券株式会社様招待『ディズニーランド』 ・ハロウィンパーティ ・七五三祝い ・各ユニットクリスマスパーティ ・餅つき＆門松作り ・UBS 投資銀行本部社員の皆さまとのﾁｰﾑﾋﾞﾙﾃﾞｨﾝｸﾞ＆お菓子作り大会 ・親子レクリエーション ・卒園式 ・味噌作り ・食育だより ・職員募集のお知らせ	関係者等約 1,200 部郵送配布。 周辺地区へは各区長に配布を依頼。
2018 年　夏	・暑中お見舞い本園納涼祭開催お知らせ	関係者等約 1,200 部郵送配布。（暑中お見舞い） 周辺地区へは各区長に配布依頼。
2019 年　1 月	・年賀状送付	関係者等約 700 枚郵送。

②筑波愛児園ホームページについて

ホームページ（以下 HP）上で、概要、理念、事業内容、事業決算書等を情報開示を行い、HP 内のブログでは、子どもたちの様子を更新、掲載してきた。また、広報紙のデーターでの掲載もしている。

HP 上に、行事を事前に案内する事で、行事に参加、協力をしていただける方が増え、行事を成功させる事にも繋がっている。

昨今は寄付や施設見学先として､インターネットで事前に調査する事が多くなっている。特に就職希望先としての選択の際、HP の内容の充実が大きく影響しているのは確かである。人材確保の観点からも、より充実したものにしていきたい。

次年度もより多くの人に閲覧して頂けるような印象的な運営をしていきたい。

③係運営

必要に応じた話し合いをし、役割分担を行い効率よく運営することが出来た。行事執行後は、写真、原稿を速やかに所定の場所に入力をするよう声掛けをしてきた。今

後も各係との連携体制を益々充実させていきたい。

④その他

年賀状や暑中見舞いなどは日頃の感謝の気持ちを伝える意味で、各関係機関や寄付者、ボランティア、フレンドホームなど多数の企業団体個人へ送付している。また、納涼祭の開催のお知らせについては、行事係と連携し周辺地域へ回覧物として配布した。

≪2019 年度方針≫

・施設の現状（法人運営、施設運営、支援内容全般）の最新情報を発信していく。
・ホームページブログ内に身近な出来事の他、園内研修などを掲載していく。
・ホームページの問い合わせ等に対し、各担当と連携して対応していく。
・掲載内容について、現状に沿わないものがある為、最新のものへと更新していく。
・ホームページのリニュアルを進めていく。

リスクマネジメント係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

青空　　加藤　輝
さくら　　兵藤　鈴子
太陽　　坂寄　裕紀
つくし　　石引　慶彦
調理　　堀田　弘子
専門　　立川　弘司

2018 年度方針

1）リスクマネジメント会議をより機能化させ、施設全体のリスクマネジメントを行う
2）ヒヤリハット報告のシステムの改訂を行い、リスク要因の分析、及び対応の検証を行う
3）施設内外の危険個所等を点検し、安全対策を講じる
4）危機管理マニュアルを再検討し、必要に応じた改定を行い、また職員会議等で内容確認を実施する
5）リスクに関する事案について、具体化をはかり、全体で検討する
6）担当部署と連携し、子どもへの安全教育を実施する
7）事故防止対策について、関係部署と連携し、要因の検証や対策の評価を行う
8）チェックリストを活用し、職員の意識向上や資質向上に努める

１．総括

リスクマネジメント（Risk Management）とは、リスクを組織的にマネジメントし、ハザード（発生源・発生原因）や損失などを回避、もしくはそれらの低減をはかるプロセスをいう。リスクマネジメントは、①リスクを把握・特定することから始まり、②そのリスクを「発生頻度（発生確率；possibility）」と「影響度（酷さ；severity）」の観点から評価した後、③リスクの種類に応じて対策を講じる、またはリスクが発生した際に被害を最小限に抑える一連のプロセスをいう。

筑波愛児園のリスクについて考えると、様々なレベル別のリスクが想定される。大災害時には事業継続することが最優先され、それは子どもと職員の生命・健康を守ること、衣食住を確実なものにし、安全を確保することになる。その他、感染症の拡大防止、過重労務や人間関係による職員の体調不良予防、環境因によるケガなどの予防、「子ども－子ども間」また「子ども－職員間」の暴力防止など、想定する場面ごとに異なるレベルのリスクが存在する。

これらすべてのリスクに対して係が対策を講じることは不可能であり、各担当者と連携をはかりながら対応することになる。大災害時の事業継続については防災担当、職員の労務に関することは衛生推進担当、日常生活上のリスクについては各棟と連携していくことになる。これらをマネジメントすることで、筑波愛児園全体のリスクマネジメントをはかることが重要となる。

前年度から各部署からメンバーが選出され、定例の係会議が保障された。そのため係会

議で協議された内容を各部署でも共有することができ、施設全体のリスクについてより検討できるようになったと評価する。行政側から示される注意喚起の徹底、また日常生活上のリスクを共有・検討する重要な機会となった。係からより積極的に発信を行い、各職員のリスクについての意識を高め、子ども・職員の安全・安心により貢献できるようにしていきたいと考える。

２．活動報告

１）リスクマネジメント会議

前年度からリスクマネジメント会議が定例化され、感染症などのリスクもあることから、調理部からもメンバーが選出された。各メンバーが業務する中で気づいたもの、また各部署会議などあがったものを係で検討するなど、より多面的な議論が実施できた。

前述したように、施設に存在するリスクは多岐にわたる。そのため関係部署・係などとより連携し、常にその危機意識を維持していくことが重要となる。行政側から示された注意喚起についても、それぞれのメンバーが理解したうえで、各部署で共有・協議してもらえたことは意味があった。

リスク（risk）の定義は、一般的には、「ある行動に伴って（あるいは行動しないことによって）、危険にあう可能性や損をする可能性を指す概念」とされている。リスクもハザード（hazard）も「危険性」などと訳されるが、ハザードは潜在的な危険の原因となりうるものをいい、リスクはそれが実際の危険となる可能性を含めた概念となる。例えば、鋭利な尖った物は「ハザード」であるが、それが子ども達の近くにあればリスクは高く、手の届かない場所にあればリスクは低いということになる。

筑波愛児園のリスクについて考えると、子どもや職員が安全・安心して生活（仕事）できるため、それを阻害する（阻害する可能性のある）要因を減らしていかなければならない。それは大別すると①環境的・物理的要因と②子ども(職員)・関係性の要因となる。子ども（職員）・関係性の要因は、㋐子ども個人の要因（子どもの特徴や性格行動等から予想される危険な行動等）、㋑子ども間の要因（子ども間の暴力やいじめなど）、㋒子どもと職員間の要因（子どもからの暴力、職員の不適切な支援、職員の暴言・暴力など）、㋓職員個人の要因（性格行動、職務遂行能力の不足、職務規定や職業倫理の理解不足など）、㋔職員間の要因（業務分担の不均衡、適切なグループワークの欠如、ケースのアセスメント不足など）に細分される。これらのリスクを０にすることはできないが、よりリスクを低減する取組みがポイントとなる。

リスクの深刻度を考えると、個人でいえば、軽度（ケガや病気等）から中度（長期入院や交通事故等）、重度（後遺症が残るものや死亡等）まで想定される。「予測可能度」と深刻度を考えると、例えば「廊下を走ること」（予測が容易で影響度が少ないもの）から、インフルエンザの流行(ある程度予測できて影響度が高いもの)、大地震などの大災害（予測が困難で影響度が深刻なもの）などさまざまなリスクが想定される。

大災害時の事業継続、感染症や食中毒の予防、職員が健康的に仕事ができるような労務管理など、各担当者がそれぞれの領域で仕事をすることで、総合的なリスク対策が可能となる。次年度もリスクマネジメント会議や各担当者との連携を積極的に行い、筑波愛児園のリスクの低減に貢献したいと考える。

2）ヒヤリハット報告

各部署でもヒヤリハットを項目として挙げ毎週確認してもらい、それらを係会議で共有をはかった。やはり日常生活上での大きなトラブルは報告としてはあがってきたのだが、ヒヤリハットが目指すべき些細な事象はあがってこなかった。養育日誌上についても、月に数件あがるのみで、それも大きな出来事の報告だった。昨年度「養育日誌の記録から、ヒヤリハット内容を抽出することの限界」があるのではないかと考え、新たな取組みとして各部署会議で共有することを実施したのだが、より効果が期待できる取組みを引き続き検討したいと考える。

従来のかたちのヒヤリハット報告、部署会議でのヒヤリハット報告、リスクマネジメント会議での報告・検討を行い、この取組みを補強できる工夫を検討することで、筑波愛児園全体のヒヤリハット報告のシステムを強化したいと考える。

各職員	部署会議での報告	係会議
養育日誌の記載 ↓ 共有サーバー上の「ヒヤリハット報告」にヒヤリハット事項の貼り付け ↓ ヒヤリハット状況の赤字編集	部署会議でのヒヤリハット内容の報告 ↓ 係会議で全体集約	報告されたヒヤリハットを集計・分析する ↓ 対策等の検討 ↓ 職員会議等に報告

3）危険箇所チェック（環境整備）

係会議で、日常生活を送る中でリスクと考えられる事案が抽出された。係でその対応について協議し、必要なものは全体に提案する流れをとっている。以下に検討した内容について示した。

カーブミラー	・ 公道上の危険箇所については全体に提案し、市がカーブミラーを設置した。 ・ 敷地から公道に出る箇所のカーブミラー設置については年度内に設置を予定する。
ウッドデッキ	昨年度、補修を行ったが、デッキの端の部分が欠損した。取扱いの問題ではなく、補修自体の課題と考えられる。
アスレチック	目視確認等で危険がないかチェックはしているが、ペンキのはがれが目立っている。また専門業者に安全を確認してもらう必要があるのではないかとの意見があがっている。継続して検討する。
サッカーゴール	クボタ労働組合から寄付があり、ペグで固定した。定期的にペグ等の設置状況を確認する必要がある。
バスケットゴール	大風で倒れたが、東亜工業さんの善意で固定することができた。
園庭のフェンス	ボールが当たったり、子どもが乗り越えるなどして、破損箇所が目立っていた。東亜工業さんの善意で補修を行った。
降雪への対策	雪かき用のスコップ、融雪剤などの購入を検討する。

玄関のドア等	玄関ドアは重量があり、また開閉の頻度も高いためネジが緩みやすい。定期的にネジを締める必要がある。
転倒防止対策	防災係と連携し、各棟の電化製品や公務室の棚等の転倒防止について対策をはかっていく。
子どもの居室の窓の開閉	業者に対応策等を検討してもらったが、根本的な解決のためには窓枠を交換する必要があるとのことだった。子どもが出入りしている事案があるのだが、職員側の取組みの中で対応をはかってもらいたい。
さくら棟前の外灯	破損して勤続部分が腐食している。修理を予定している。
天窓	青空棟の天窓を開閉する器具が破損した。本来の目的は排煙装置と思われ、日常的に使用することで消耗することが考えられる。
害虫	12 月、ちゅーりっぷユニットでねずみが目撃された。寒くなったためなのか、原因は不明。ネズミ捕りの設置など、ユニット対応を依頼した。 またムカデの目撃も 2 件あった。害虫の発生頻度、また種類などが増えた場合、業者への依頼も検討したい。

これまでハチやムカデ、小さな虫が発生する事案、また職員がムカデに噛まれる事案があった。今後も生活を経る中で新たなリスク事案も発生すると思われ、そのつど対策を検討していかなければならないと考える。

４）危機管理マニュアルを再検討し、必要に応じた改定を行い、また職員会議等で内容確認を実施する

危機管理マニュアルは策定されて改訂がなされていない状況にある。社会変化や現行の施設運営に照らし合わせ再検討が必要だと考えている。しかし今年度は、その他の議案に終始することとなり、そこまで至らなかった。

昨年度、北朝鮮のミサイル等発射によるJアラートとその対応が教育委員会から示され、筑波愛児園の対応としても当面はそれに準じたものを確認した。今後、筑波愛児園の危機管理マニュアルに新たな項目を加えたいと考える。

総合防災計画（BCP）はほぼ完成したのだが、第三者評価において、大災害後の数ヶ月間も含めた対策、建物等が倒壊した場合の復興計画も含めた計画策定の必要性が指摘された。新たにそれらについても検討することとなり、最終的な完成には至らなかった。

５）新たに生起した課題について、全体で協議し、ルール策定を行う

昨年度「子どもがノンアルコール・ビールを購入すること」について、係で協議し、全体でその対応を確認した。

「ＳＮＳを使用した子どもの買物」については、子どもの人権という観点からみると、勝手に開封することはできない。そのため子どもとよく話をし、どのような物を購入したのかを確認してもらう方法しかないと結論に至った。現時点ではトラブルはみられないが、これから起こりうる課題に対して予防的な枠組みを具体化したいと考える。

このことは他の事象についても同様で、新たに生起した（生起するであろう）課題についてもその対策を検討したいと考える。

６）子どもへの安全教育プログラムの実施

「子どもへの安全教育」とは、特別なプログラムを指すのではなく、子どもの安心・安全に寄与する教育的機会の総称となる。細かなものまで数えればきりがないが、ここでは「子どもの身体的・心理的な安心・安全を守るための系統的な教育プログラム」と規定したい。

「安全教育」は毎月の避難訓練も含まれ、火災・地震の際にどのように行動し、どうすれば安全に避難できるかをトレーニングし、万が一の事態に備えている。

以前、高校生女児が帰宅途中に不審者に襲われた事件があり、塾やアルバイトはバスで通うこと、最寄りのバス停まで車で送迎することが指示された。アルバイトを雇い送迎担当としているがその回数は減り、棟職員が対応することも増えている。棟職員が１名になることのリスクを再検討し、子どもの安心・安全を確保できるように対応してもらいたい。またこの取組みの認識が棟間でずれていたことが明らかになり、全体で確認する機会をもった。

「安全教育」の意味では、子供の権利ノートの読み合わせや子ども会議、児童会運営委員会の活動も重要な意味をもつ。継続的に話をする機会を持ち、子どもが自身の権利や安全について考えられるようになることが必要だと考える。

７）事故報告書

育成支援課からの「児童養護施設等における報告様式について」の中で、事故報告として扱うべきものとそうでないものが例示された。

これらを踏まえ、係で事故の基準を「利用者等の生命に関わる事例、職員等による不正行為、または生命に関わるほどではないものの心身に重篤な悪影響を与える事例など」と規定した。

（１）重大事故　等（施設の管理監督責任が生じているもの）

①入所児・職員の死亡事故
②入所児の入院
③ケガ等による医療機関への通院等
（交通事故、犯罪被害、児童間のトラブル等による受診）
④入所児童への権利侵害
（子ども間の暴力、いじめ、性被害、性的関係なども含む）
⑤入所児童の触法行為等で、施設長が報告する必要があると判断したもの
⑥入所児童の所在不明・行方不明で安全が確認できなく、警察に届けた場合
⑦役員・職員の過失により生じた事故や不祥事
（職員の過失による入所児童のケガ、預かり金着服・横領、その他の触法行為等）
⑧入所児の誤飲や誤嚥、誤薬により入院・通院を要したもの
⑨感染症の拡大（1 週間に 10 名以上）
⑩食中毒の発生
⑪施設長が報告する必要があると判断した事案
（児童の身体的・精神的影響及び社会的影響、保護者等の状況などを勘案する）

（２）　事故等（施設の管理監督責任が生じていないもの）

①入所児の入院

②ケガ等による医療機関への通院で、施設長が報告する必要があると判断したもの
③施設長が報告する必要があると判断した事案

事故報告、またヒヤリハット報告の目的は、そこから要因を分析し、対策をはかること、またはリスクを軽減する取組みを実施することである。状況を客観的に把握し、そこから課題を抽出することで初めて効果のある取組みが具体化できる。個々の事案について、事実は事実として受け止め、確実な対策をはかってもらいたい。

今年度の事故報告を以下に示す。子どものケガ・事故などは、予見が難しいものもあるが、その中から課題等を抽出し、事後の取組みと予防的な取組みを継続していくことが重要となる。

また子どもの年齢が高くなると行動範囲が広くなり、また携帯電話などインターネットにつながるデバイスを持つ場合、不特定多数と連絡をとることが容易となる。報道等にもあるように重大事故に巻き込まれることも念頭に入れ、関係職員・機関との連携を密にはかってもらいたいと考える。

また、昨年度と今年度に、自転車通行中に自動車と接触する事故があった。子どもが「大丈夫です」と言ったためにそのまま自動車は立ち去ってしまったケースだった。事故を起こし気が動転するかとは思うが、相手の連絡先を確認すること、事故直後に連絡をすること、車両のナンバーを控えることなどを日頃から教えておく必要がある。

月	所属	概要
5月	太陽棟ひまわり	高校生男児（M．N）の同学校女児への性的加害
9月	青空棟なのはな 青空棟すいれん	スポーツ活動時に小学生男児（H．S）の振ったパークゴルフクラブが、近づいた小学生男児（T．K）の左まぶたに当たりケガをした
9月	さくら棟ちゅーりっぷ	幼児（Y．K）が居室の机に頭部を打ち、2針縫った
11月	太陽棟ひまわり	高校生男児（M．N）がタバコを複数本飲み込み緊急搬送した
1月	太陽棟ひまわり	高校生男児（T．A）の交通事故

8）チェックリスト等の実施

人権擁護のチェックリスト、被措置児童等虐待防止チェックリストなどを実施し、職員の危機意識の向上をはかった。「児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト(職員版)」は年2回(5月・2月)に実施し、「児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト(施設版)」は2月に実施予定となっている。「子どもに性教育をするケアワーカーのためのチェックリスト」は性教育委員会とも連携し、チェックリストの実施だけでなく、そこから見いだされる課題に対しての対策も検討していきたいと考える。

これらのチェックリストを定期的に実施することで、各職員の自己点検につながり、自身や棟・ユニットの支援内容の点検に役立つことを目的としている。チェックリストを「実施する」ことでの自己点検の効果がまず考えられ、各棟・ユニットでも考える機会をつくり、より良い子ども支援を模索してもらうこととなる。より

上位の目的は、課題を明確化し、そこから必要な対策を講じることとなる。自身の専門性を高めるためにも、自己点検を経て、より良い子ども支援を模索してもらいたいと考える。

次年度も以下のように、各チェックリストを実施し、また課題等への対策を具体化する担当を示したい。

チェックリスト等	実施時期 （実施者・集約・報告）	対策の策定
子どもに性教育をするケアワーカーのためのチェックリスト	5月（性教育・リスク）	性教育・リスク
児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト（職員版）；1回目	5月（リスク）	施設長・リスク
被措置児童等虐待防止チェックリスト	7月（リスク）	リスク
児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト（施設版）	2月（リスク）	施設長・リスク
児童養護施設における人権擁護のためのチェックリスト（職員版）；2回目	2月（リスク）	

9）その他の事案について

①個人情報保護の徹底、記録媒体の管理、パソコンやメール添付書類のパスワード設定

個人情報保護の観点から、パソコンや記録媒体（USBメモリ、SDカード等）、携帯電話のデータをより適正かつ厳重に管理してもらいたいと考える。筑波愛児園の個人情報保護規定に則り、在職中、また退職後においても適正に管理することになっている。筑波愛児園の個人情報保護規程を各自で再確認してもらいたい。

また、インターネットやSNSの普及により、それに慣れ親しんでいる子ども（職員）も多い。職員はもとより、子どもに対してもそれらの利便性とリスクを伝えていく必要がある。携帯電話を所持する上で「ネット上に他者の個人情報を記載しないこと」を約束している。これらの約束事と実際の子どもの動きなどを把握し、適正な対応を依頼したい。

さらに、パソコンを起動するうえでのパスワード設定、文書をメール添付して送付する際のパスワード設定をする方がセキュリティの面ではプラスとなっている。これについても係でさらに検討をすすめたいと考える。

②性的事故防止に向けて

性的事故はいついかなる時でも起こり得るものとして、職員は常に危機意識を高めておかなければならない。ほんの10分ほどの間に事故が起こった例もある。

今年度は性教育委員会が中心となり、筑波愛児園での性的事故について全体で確認する機会をもった。事故などの負の遺産（レガシー）は誰でも忘れたいものだが、それを教訓として活かしていくことが、子どもの安心・安全につながることだとも理解し、対策等を確実に実施・引継いでいかなければならない。

入所している子どもの特性、またはインターネットやSNSのさらなる普及、周囲の環境変化などで、新たなかたちの性的トラブルが起こることも考えられる。これまでの支援・取組みについても常に見直しを行い、より効果的な支援につなげていく

ことが求められる。

③通学道等の変化

今年度から秀峰筑波義務教育学校の小学生はバス通学になった。登下校のリスクは下がったのだが、バス内でのトラブルは散見されている。中学生は自転車通学となっており、現段階では大きな事故はないが、「不審者に追いかけられた」という事案はあった。常にそれらのリスクを考え、子どもと一緒に考える機会を継続的にもってもらいたい。

④子ども用ＰＣ

子ども用 PC が整備され、子どもたちの生活は一変した。それまではテレビやゲーム中心であったが、Youtube を視聴している姿がよくみられる。PC にはフィルタリングをかけてあることから、暴力や性描写が高いものは閲覧・検索ができないようになっており、SNS なども利用制限がかかっている。インターネット上でのトラブルはみられていないが、時間が守れないなどの生活上のトラブルは散見されている。

また昨年度、子どもが PC を Wi-Fi アクセスポイントに無断で設定していたケースもあり、利用する中で新たな課題も生起すると考えられる。これらのことも職員が理解し、ルールやマナーを守った使用を促してもらいたい。

⑤インターネットや SNS、アプリなどを使った小遣い稼ぎ

「小遣い稼ぎ」というと聞こえは悪いが、子ども達にとってインターネットや SNS を遣ってお金を稼ぐということは特別なことではない。Youtuber は広告収入を得ており、また「投げ銭」機能を使ってお金を稼ぐこともできるという。高校生女児が SNS などをツールとして、有償の撮影会を募ったケースもあった。

メルカリの機能を使えば、盗品などを販売することも可能であり、売上金をポイントとしてまたネット上に蓄えることもできる。現金を介さずに物の売買が可能であり、これらについても係で検討を重ねる必要がある。

⑥総合防災対策（災害時の事業継続計画；Business　Continuity　Plan）の策定

大災害時の事業継続計画（BCP）については、ほぼ完成に至ったが、第三者評価からの指摘により、大災害後の長期の計画の策定が求められることとなった。茨城県監査指導で指摘された風水害も含めた防災対策は防災係で検討することとなったが、既存の防災対策とBCPを統合したものの策定をすすめる必要がある。次年度以降も防災係と計画的に協議の場を設け、総合防災対策の完成を目指したいと考える。

10）外部研修

リスクマネジメントに関する研修は少ないが、開催の案内がきた際には参加を検討したい。

2019 年度方針

1）リスクマネジメント会議をより機能化させ、施設全体のリスクマネジメントを行う
2）ヒヤリハット報告のシステムの改訂を行い、リスク要因の分析、及び対応の検証を行う
3）施設内外の危険個所等を点検し、安全対策を講じる
4）危機管理マニュアルを再検討し、必要に応じた改定を行い、また職員会議等で内容確認を実施する

5）リスクに関する事案について、具体化をはかり、全体で検討する
6）担当部署と連携し、子どもへの安全教育を実施する
7）事故防止対策について、関係部署と連携し、要因の検証や対策の評価を行う
8）チェックリストを活用し、職員の意識向上や資質向上に努める

苦情受付係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

専門部　　高井　志保里
専門部　　立川　弘司

≪2018 年度方針≫

1）担当者と連携し、子供の権利ノート・生活のしおりの説明を継続する
2）子どもの生活実態調査を定例化し、子どもの抱える問題等に対して迅速に支援できる体制をさらに充実させる
3）第三者委員と連携し、苦情について適切に対応していく
4）第三者委員と子ども・職員との定期的な面談を継続し、適切な施設運営、また棟・ユニット運営となるように助言等を反映させる
5）子どもに理解しやすいよう、相談先の明示や苦情解決の手順等を説明する
6）利用者の苦情や意見・要望を抽出し、より適切な施設運営、また棟・ユニット運営を目指す
7）苦情解決に関する研修は、理念・権利擁護担当係と協議し、参加を検討する。

１．全体総括

苦情とは、「被害を受けたり、不公平な扱いをされたり、迷惑を受けたりしたことに対する不満・不快な気持ち、またそれを述べた言葉」と示されている。苦情受付とは、狭義の意味では、利用者からの不満や不快などを受付けるということになる。

社会福祉の増進のための社会福祉事業法等の一部を改正する等の法律（平成 12 年 6 月 1 日）の施行に伴い、社会福祉法第 82 条で「社会福祉事業の経営者は、常にその提供する福祉サービスについて、利用者等からの苦情の適切な解決に努めなければならない」とされ、その指針の中で「苦情解決の仕組みの目的」は以下のように示されている。

◇苦情への適切な対応により、福祉サービスに対する利用者の満足感を高めることや早急な虐待防止対策が講じられ、利用者個人の権利を擁護するとともに、利用者が福祉サービスを適切に利用することができるように支援する。
◇苦情を密室化せず、社会性や客観性を確保し、一定のルールに沿った方法で解決を進めることにより、円滑・円満な解決の促進や事業者の信頼や適正性の確保を図る。

社会福祉法第 82 条で示される「苦情解決の範囲」は、①事業者が提供する福祉サービスの援助の内容に関する事項、②事業者が提供する福祉サービスの利用契約の締結・履行または解除に関する事項となっている。また苦情は、以下の４種類に分類されると示されているが、福祉サービス全般について言及されているので、児童養護施設の分野にはあてはまらない内容もある。

㋐福祉サービスに関すること…職員の接遇、サービスの質や量、説明・情報提供等
㋑利用料に関すること…利用料関係、負担金関係等
㋒安全に関すること…被害損害、権利侵害

㊦その他（上記以外のもの）

筑波愛児園では苦情件数は例年ほとんどないが、「苦情」というネガティブなイメージでとらえるのではなく「利用者の声」として捉え、支援（サービス）の質の向上に繋げることが重要だと考える。

子どもが苦情や要望を訴えるためには、自身の権利等について正しく理解していることが前提となる。これは理念・権利擁護係がマネジメントし、各棟・ユニットで「子供の権利ノート」の読み合わせを定期的に実施している。子供の権利ノート説明ハンドブックには、時期に合わせて福祉司の訪問説明・確認の実施が示されており、施設側からも福祉司へ依頼してもらいたいと考える。

また権利とは逆に、集団生活をおくる上での約束事がある。それを明文化したものが「生活のしおり」となっている。これらも子どもが十分に理解してはじめて、子どもが主体的に考え、主張することが可能となる。次年度以降も、各棟・ユニット、また児童会運営委員会を中心に、生活のしおりについての確認や理解を深める取組みを実施してもらいたい。

児童福祉法が改訂され、これまで「保護」の対象だった子どもが、「権利の主体者」として位置付けられた。第1条には「児童の権利条約の精神に則ること」、「子どもの自立の保障」、第2条には「あらゆる分野で子どもの意見が尊重され、最善の利益が優先して考慮されること」、第3条には「子どもの保護者(家族)の支援」が盛り込まれた。施設運営、また棟・ユニット運営においても、子どもの権利をさらに尊重した支援が求められることになる。各職員もこのことを十分に理解し、今後の支援に反映させてもらいたいと考える。

２．活動報告

１）子どもや職員の人権意識を高める取組み（子供の権利ノートの活用）

平成24年度に子供の権利ノートが改訂され、子供の権利ノートの配布対象の拡大、リーフレットの作成・配布、児童福祉司による説明の定例化がはかられた。育成支援課の権利擁護担当者が各施設を訪問して説明を行う取り組みも継続されている。子供の権利ノートの子どもとの読み合わせは理念・権利擁護係が担当しており、その詳細は係総括・方針に任せたい。

説明ハンドブックには児童福祉司による説明定例化も規定されている。子どもの面会等で福祉司が来園する機会も多いが、子どもとの面談だけではなく、筑波愛児園での生活が子どもの権利を尊重したものとなっているのか、子供の権利ノートに関しても確認してもらえるように、各棟・ユニットでも意識して促してもらいたい。

また児童福祉法の改正により、「子どもの権利」が明確に示され、「権利の主体者」であることが規定された。「新しい社会的養育ビジョン」もこの考え方に沿っている。これらのことを踏まえ、施設運営や棟運営においても、より子どもの権利を尊重した養育が実践されることとなる。各職員はこのことをよく理解し、日々の支援に反映してもらいたいと考える。

２）子どもの生活の実態調査

子どもからの訴えや生活状況を把握する機会として、複数の相談窓口や実態調査を設定

し、問題・課題の早期把握と早期対応に努めた。これらの取組みを確実なものとし、より機能するような工夫は継続して検討したいと考える。

子どもアンケートは質問内容や質問の仕方によっては作為的になってしまうことも否定できない。子どもが意見を表明しやすいような質問や内容、方法はさらに精査していく必要がある。今年度は2月にアンケート形式での調査を行い、その結果については全体周知する予定としている。次年度の各部署の活動・支援などに反映してもらえればと考える。

≪子どもの生活の実態調査の概要≫

（1）子どもの生活の実態調査

①第三者評価(年1回)

外部評価の利用者調査の結果を精査し、運営や子ども支援に反映させた。

②第三者委員会(年7回予定)

第三者委員と子どもとの個別面談を実施(予定)した。子どもの生活状況の確認や訴え等を把握し、その結果を施設、棟・ユニット運営の改善に役立てた。

③苦情受付係（年1回;アンケート調査;2月実施予定)

係でアンケート方式の実態調査を行い、その結果を全体周知し、施設、棟・ユニット運営に役立てる予定である。子どもアンケートの結果は子どもにも周知することとし、その際に、苦情などの相談がどのような流れを経て、解決まで導かれるかを説明することを予定したい。

④各棟・ユニットの取組み

週一回行われる子ども会議や個別の時間などを通して、子どもの相談や課題についての協議を継続している。日々の子どもの様子、また子ども同士の関係を把握し、課題について早期解決できるように取り組んでいる。子どもの情報は、棟・ユニット、また全体で共有し、適切な対応をはかっている。

さらに、子どもの権利ノートを活用し、ケアワーカーと子どもが人権などを共に確認していく機会をつくっている。

⑤施設長の養育日誌のチェック

施設長任が養育日誌の内容を確認している。対応を要する事案や確認事項などを記載し、対応や支援を迅速に行えるようにしている。

⑥学習ボランティアからの情報提供（適宜)

学習ボランティア(大学生)が週に1回、子どもたちの学習指導のために来園している。子どもと年齢が近いこともあり、学習のみならず、「お姉さん・お兄さん」的な存在として子ども達も関わっている。

その活動の中で、子どもの気になる言動などの情報は職員に伝えてもらい、施設側の支援に役立てた。各棟・ユニットで、定期的に、学習ボランティアと話合う機会を持ち、子どもの様子や学習の様子について情報交換を行った。

（2）相談体制の強化

①相談システムの丁寧な説明

現行の相談システムを、子どもに分かりやすく説明を行う必要がある。直接的な方法は「児童相談所(担当福祉司)に相談する」、「子どもの権利擁護委員会に相談する」、「第三者委員に相談する」、「施設内の苦情受付係に相談する」ことが整備されてい

る。その他にも日常的な相談先として、施設職員や学校の先生などに相談することができる。

間接的な方法は、「子どもの権利擁護委員会にハガキ等で相談する」、「第三者委員に手紙等で相談する」、「苦情受付ポスト（あのねポスト）に手紙等を投函する」などが整備されている。

これらの相談システムについても説明を重ね、子どもの理解の向上をはかる必要がある。

②相談システムの強化

間接的な方法にっいてはさらに整備していくことが求められる。子どもによっては直接話しをすることやプライベートなことを相談することに抵抗を感じる場合もある。手紙など、間接的な方法をさらに整備していく必要がある。「子どもアンケート」が間接的な方法の１つではある。

アンケートの結果をまとめ、子ども達に結果報告することを予定している。個々の状況をまとめるのではなく、大きな枠で集計を行い、アンケートの結果がみえるかたちにすることで、子どもたちに「職員側で検討し、その結果が返ってくる」というポジティブなイメージを醸成していきたい。

その他、聞接的な相談方法をさらに検討し、子ども達からの訴えを重層的に把握できるように具体化をはかっていきたい。

３）第三者委員会

第三者委員の先生方の狭義の役割は、筑波愛児園の苦情が適切に対応されているのかを第三者的な立場でチェックすることになっている。筑波愛児園ではさらに役割を加え、子ども達との面談、職員との面談の機会をつくり、そこから施設運営や子ども支援における課題等を抽出していただくことにしている。つまり第三者委員に積極的な役割を担っていただき、苦情のチェックだけでなく、子どもの生活状況の把握や子ども支援上の課題のピックアップなど多面的な役割を依頼している。

今年度、運営検討委員会が開催され、先生方の都合で月２回来園することは難しく、年度途中から運営検討委員会と同時開催するかたちとなった。会議日と重なることで、各棟には子どもの面談時間を調整してもらった。

例年の課題として、第三者委員からのアドバイス等を施設や棟運営、また子ども支援にどう反映させるか、また反映させた結果がどうなったのかの報告が薄いことがあがっていた。第三者委員からの助言等は、直近の運営委員会に報告するように努め、全体にも周知できるように取組んだ。子どもの様子、また職員の動向など、大きな動きについては、第三者委員に「報告事項」として伝達し助言等をいただいた。

≪第三者委員会の実施報告≫

第三者委員会は以下の表のように実施（予定）した。第三者委員には、子どもとの面談前、施設全体の大きな動きや子どもの大きな問題行動等について報告した。面談する子どもの状況等も報告し、面談に役立ててもらった。

第三者委員は第三者的な立場だからこそ、率直な意見やアドバイスをいただくことができる。それらの助言等を参考にし、より良い施設運営を目指したいと考える。

日程	内容
５／19（土）	子どもとの個別面談　；　５名実施
７／20（金）	子どもとの個別面談　；　５名実施
９／13（木）	子どもとの個別面談　；　２名実施
10／11（木）	子どもとの個別面談　；　４名実施
12／６（木）	子どもとの個別面談　；　５名実施
１／17（木）	子どもとの個別面談　；　４名実施
３／14（木）	子どもとの個別面談

４）苦情

①苦情内容等の訴えに対する対応

係の業務としては、苦情内容を聞き取り、施設長への報告、進捗の確認、記録の作成となっている（規程に明記）。苦情内容に対してどのように対処するのかは苦情解決責任者（施設長）が判断することになっている。

今年度（平成 30 年 1 月末現在）、苦情として受付けたものは 1 件だった。あのねポストに投函された苦情等はなかった。

7 月、みつばユニットの子どもから第三者委員との面談依頼があった。第三者委員から苦情として取扱うようにと助言があり、施設長にも報告し、正式な苦情として取扱った。

苦情受付担当が苦情申出者と面談し、施設長が該当職員との面談を実施した。該当職員の課題、またチームとしての課題が抽出され、それらを該当部署で協議し今後の対応について具体化をはかった。９月にそれらを取りまとめ、苦情申出者と協議をし、苦情申出者の方で了解を得たため苦情については終結となった。

面談内容、また施設としての対応については第三者委員にも報告し、助言等をいただき、また客観性も担保するかたちとなった。さらに、９月に苦情申出者と第三者委員と面談の機会をもち、苦情内容についての事後確認を行った。

苦情を受付けてからすぐに夏季休業に入り、該当部署で協議する機会をつくるのが難しかったが、比較的早期に終結することができたと考える。

苦情、もしくは利用者からの不平・不満はどの職員にも起こりえることであり、係としては、どのようなことが起こったのかを事実確認し、問題点があればそれらを改善し、その後の支援等に反映させる、それが施設運営、または該当職員にとってプラスになるように取組むことが重要だと考えている。1 つひとつの事案からの改善策や経験知が施設の財産となり、それらが積み重なっていくことで我々の専門性が担保されていくと考える。

②苦情等の解決後の対策

上述したように、1 つの事案から抽出した課題は施設全体のこととして考えるべきだと考えている。苦情内容等が解決することは大きな目的であるが、その事例から施設運営や棟・ユニット運営をより良いものにしていくことが本来の目的となる。

小さな事案でも会議などで共有し、その対応を検証すべきだと考える。個々の苦情等を糧に常に支援の質を高めていく取組みが重要となる。

③利用者の要望把握の取組み

苦情にまでは至らないが、子どもや保護者からの要望等を把握することを方針としたが、その具体化までには至らなかった。施設運営や棟・ユニット運営の質をさらに改善するためには必要な取組みではあるが、それが結果的に事務作業が増えて子ども支援の質を落とすようなことになると本末転倒となってしまう。次年度も継続検討事項として、具体化をはかっていきたい。

５）外部研修

２／15(金)、児童部会子どもの権利擁護委員会が主催する学習会が予定されている。理念・権利擁護担当係と協議し、参加を検討したいと考える。

≪2019 年度方針≫

１）担当者と連携し、子供の権利ノート・生活のしおりの説明を継続する
２）子どもの生活実態調査を定例化し、子どもの抱える問題等に対して迅速に支援できる体制をさらに充実させる
３）第三者委員と連携し、苦情について適切に対応していく
４）第三者委員と子ども・職員との定期的な面談を継続し、適切な施設運営、また棟・ユニット運営となるように助言等を反映させる
５）子どもに理解しやすいよう、相談先の明示や苦情解決の手順等を説明する
６）利用者の苦情や意見・要望を抽出し、より適切な施設運営、また棟・ユニット運営を目指す
７）苦情解決に関する研修は、理念・権利擁護担当係と協議し、参加を検討する。

保健衛生係

平成 2018 年度総括、及び平成 2019 年度方針

さくら棟
医療機関等連絡調整員

≪平成 2018 年度方針≫

・健康診断・インフルエンザ予防接種の早めの日程調整
・予防接種の計画的な勧奨
・年末年始の当番医一覧作成を行う。

1．全体総括

今年度も健康診断やインフルエンザ予防接種の調整を嘱託医と行い、1ヶ月前に日程を組んだ。健康診断・予防接種ともにほとんどの児童が日程内で調整を図り実施することが出来た。また、体調不良や学校の予定などで別日実施になった児童もいたが、各棟で調整を行い実施する事が出来た。その為、次年度も嘱託医との調整を１ヶ月前に行い、日程内での実施が行えるよう調整を図っていく。今年度より係に医療機関等連絡調整員も加わり、各棟の予防接種の接種状況の確認、促しを行なった。次年度も同様に看護師と連携し予防接種の接種状況を確認し各児童が滞りなく接種できるように各棟・ホームに実施依頼をしていく。

インフルエンザ予防接種に関して、毎年事前に問診票の記入と母子手帳の用意、予防接種同意書の用意を各棟・ホームに依頼していたが、問診票の記入漏れがみられた為、見本となる問診票の書き方と用意すべきもの一覧を配布し、インフルエンザ予防接種の準備が円滑に行えるように示した。しかし、未だ、問診票の記入漏れがある為、係りとしては各棟に意識して問診票の記入をお願いしたい。また、今年度に事前配布した、未記入問診票の紛失があった為、管理も徹底して行ってもらいたい。

インフルエンザ予防接種の際に問診票、予防接種ファイルを嘱託医に渡す際、児童毎に接種する順番の番号を振り、予防接種当日の朝に届けることで効率的に実施出来きた。そのため、次年度も継続していく。設定した日程で接種をできない児童に関しては各棟・ホーム内で調整しての実施をお願いしたい。また実施日の送迎等に関しては各棟の協力もありスムーズに行うことが出来た。

定期予防接種に関しては、各児童のスケジュール立てを行い各棟・ホームに実施を依頼してきたが、各棟が計画的に実施には至っていなかった。その為、年度途中で児童ごとに接種可能なものを絞り明確にしたことや、医療機関等連絡調整員の協力で多くの児童が予防接種を実施することが出来た。しかし、未実施な児童も多い為、次年度も係としては未実施分を計画的に実施出来るよう調整を図っていく。また、新規入所児に関しても入所後未実施分の把握に努め、計画的な勧奨を行っていく。その為各棟には計画的に予防接種の実施をお願いしたい。年末年始の当番医一覧表に関しては失念していた為、実施に至らなかった。その為次年度は緊急の事態に対応出来るように作成を行う。

2. 活動報告、及び方針

1）健康診断

	実施日
太陽棟	第１回　　6 月 9 日 第２回　　11 月 17 日
青空棟	第１回　　6 月 9 日 第２回　　11 月 17 日
さくら棟	第１回　　6 月 9 日 第２回　　11 月 10 日
つくしホーム	第１回　　6 月 9 日 第２回　　11 月 10 日

2）インフルエンザ予防接種

	実施日
太陽棟	第１回　　11 月 17 日 第２回　　12 月 15 日
青空棟	第１回　　11 月 17 日 第２回　　12 月 15 日
さくら棟	第１回　　11 月 10 日 第２回　　12 月 8 日
つくしホーム	第１回　　11 月 10 日 第２回　　12 月 8 日

※Ｒ・Ｍは予防接種同意書が無い為実施していない。

3）予防接種未実施者の勧奨について

年度当初に予算を計上し、児童毎に年度内接種可能なものを一覧にして、スケジュール立てを行い所属ユニットに配布した。高齢児になる毎に未実施なものが多い傾向があったため、学校・アルバイトなどのスケジュールから定期的に接種することが難しい状況があった。係から各児童の接種状況の確認と勧奨を実施した。新規入所児童については、母子手帳を確認し接種状況の確認を行い、円滑に予防接種を実施できるように次年度始めにスケジュール作成を行って行きたい。

4）医薬品購入

＜医薬品会計報告＞

医薬品の予算　本　園　　200,000 円　　支出円　（H30、1/31 現在）

　　つくし　　50,000 円

【医薬品内訳】

	摘　　要	支　出　額
調理		0 円
さくら棟	生理用品・薬・絆創膏、体温計　等	40,393 円
太陽棟	生理用品・薬・ムカデスプレー、冷えピタ　等	47,878 円
青空棟	薬・マスク・絆創膏・湿布、生理用品　等	36,173 円
つくしホーム	マスク・薬・生理用品・虫除けスプレー　等	29,152 円

※調理に関しては今後購入予定

5）予算　定期予防接種未実施分予算　（2019 年度）

	単価	人数（回数）	合計
ＭＲ	11,000	4 名（4 回）	44,000 円
四種混合	11,000	1 名（1 回）	11,000 円
ポリオ	10,000	1 名（1 回）	10,000 円
日本脳炎	8,000	20 名（20 回）	160,000 円
ＢＣＧ	7,430	2 名（2 回）	14,860 円
ＤＴ	6,000	5 名（5 回）	30,000 円
水痘	9,000	9 名（9 回）	81,000 円
おたふくかぜ	6,850	15 名（15 回）	102,750 円
三種混合	7,000	1 名(1 回)	7,000 円
合計			460,610 円

6）予算　インフルエンザ予防接種予算（2019 年度）

		人数	単価	金額
1	3 歳以上 2 回助成有り	17 名	3,500 円	59,500 円
2	〃　2 回助成無し	7 名	5,500 円	38,500 円
3	〃　1 回目助成有・2 回目無	6 名	4,500 円	27,000 円
4	〃　1 回助成あり	6 名	2,500 円	15,000 円
5	〃　1 回助成なし	10 名	3,500 円	35,000 円
		46 名		175,000 円

平成 2019 年度方針

・健康診断・インフルエンザ予防接種の早めの日程調整をする。
・予防接種の計画的な勧奨をする。
・年末年始の当番医一覧作成を行う。

日用品・細菌検査　係

2018 年度総括・2019 度年方針

調理部

2018 年度方針 ◇ 日用品の在庫確認の徹底 ◇ 日用品の節約 ◇ 細菌検査の全員提出・期限厳守

【細菌検査総括】

今年度も細菌検査は有研さんにお願いしてきました。

細菌検査の提出は職員年 12 回と 4 回、児童は年 4 回となっています。

今年度も１回での全員提出は出来ませんでした。しかし子ども達の検便提出状況が今までよりも良いものとなりました。遅れながらも全員提出ができていました。

細菌検査の提出のために年間提出日を配布し、勤務表へ提出日の記載、連絡会での呼びかけ、未提出者は名前が見えるように貼り出しました。

職員・児童共に必ず細菌検査を行う義務があるのです。

来年度も必ず全ての職員・児童が提出できるようにしていただきたい。

＜今年度追加提出した回数＞

4月→3回	5 月→3回	6 月→4回	7月→5回
8 月→3回	9 月→5回	10月→3回	11月→3回
12 月→2回	1月未定	2 月未定	3月未定

【日用品総括】

今年度予算は50万円で全体日用品を購入してきました。
トイレットペーパー・ティッシュ・食器洗剤などはリコーで購入。ゴミ袋・ラップ・その他の日用品は安価なホームセンターで購入。特に消費量が多い日用品は、ゴミ袋・洗濯洗剤・トイレットペーパー・ラップなどです。１人１人が意識して節約に心がけて下さい。
倉庫内の整理整頓は、在庫確認の時や購入時に、こまめに確認してきました。
今年度は在庫に欠品はなく購入できていました。毎月購入日を決めておいたので、スムーズに行えました。品物が届いたときなどは、他の職員さんが運んでくれたり、声を掛けていただきました。
また、コストコさんから日用品の寄付があったので、とても助かりました。
来年度の予算ですが、物品の値段高騰や来年度より消費税が10％となるため、増額が望ましいと思われます。

＜日用品会計報告＞
日用品の全体予算　年間50万円
435,464　支出円　(H31.1.31現在)

2019 年度方針

◇ 日用品の在庫確認・整理整頓を定期的に行う
◇ 日用品の節約
◇ 細菌検査の全員提出・期限厳守

《細菌検査提出予定日》

4月11日(木曜日)	5月9日(木曜日)	6月13日(木曜日)
7月11日(木曜日)	8月8日(木曜日)	9月12日(木曜日)
10月10日(木曜日)	11月14日(木曜日)	12月12日(木曜日)
1月9日(木曜日)	2月13日(木曜日)	3月12日(木曜日)

※職員は基本毎月第二木曜日提出日
※児童・園長・事務・専門部は網かけ日のみに提出

2019 年度予算案	
◇全体日用品	計５５万円
◇細菌検査	職員(毎月)30 人×432 円×12 回＝155,520 円 職員(年４)11 人×432 円×4 回＝19,008 円 児童 46 人×432 円×4 回＝79,488 円 職員 155,520＋職員 19,008＋児童 79,488＝254,016 円 人数が前後する可能性と、増税を加味して 計 27 万円

衛生推進

2018 年度総括、及び 2019 年方針

専門部　大 澤　亮
青空棟　茂木　竜也
太陽棟　関　美穂子
さくら棟　橋本　浩樹
つくしホーム　端　みどり
調理部　萩ノ谷　歩美
事務部　根本　敬子

≪平成 30 年度方針≫

・毎月の勤務表は、25 日までに作成することを目標とする。
・偏りのない勤務表を作成するために、労働時間の総数を算出し、各棟の勤務状況を把握していく。

＜全体総括＞

今年度の衛生推進係では、「話し合う、相談しあう」という意識の元に、勤務の調整をおこない、新採職員を迎えた部署は人材育成による複数勤務の調整をしてきた。新採職員の負担を少しでも軽減させながらも、偏りのない勤務を作成してきた。

新規採用職員の勤務補償などについては年度当初の会議時間で検討し、必要に応じて実施してきた。毎月の係活動の時間ではさくら棟、つくしホームの補助体制の調整にほとんどの時間を費やしてしまった。調整の部分で各担当が顔を合わせて、調整を出来た事は良い事であったが、補助体制を複数で対応する事の難しさも同時に感じる一年だった。

また今年度も引き続き、月の労働時間の合計の計算をおこなった。勤務に偏りが出ないように意識して勤務作成を行っているが、ユニット、棟の予定や対外関係などで偏りが出てしまう事もあったが、その点は状況をきちんと説明する事で他者理解にもつながり、必要な部分はみんなで支え合うという勤務となった。

衛生推進者同士で勤務の相談をする事で、生活棟の勤務では対応しきれない部分でも専門部と連携し対応する事で、児童対応に厚みを持たせる事も出来た。専門部との連携の部分は専門部の通常業務としての対応や勤務補助依頼に相当する内容かどうかなどを事前に協議出来るような風土が出来た事は、次年度も引き続き意識として取り組んでいく。

今年度新しい取り組みとして、職員の都合で休みを取る場合は有休休暇を使用するという取り組みを行ったが、有給休暇の取得率は上がらなかった。理由としては、有給休暇を使用してしまうと、減ってしまうという考え方が多かったが、次年度は「働き方改革」の一環で有給休暇を年間５日消化しなければならなくなるため、次年度の働き方や有給休暇の取得についても、衛生推進係として、具体化を図っていく必要がある。そのため情報を集め、愛児園でならどのように出来るのかという物を提案していく。

（資料）①平均時間数

≪つくし≫

	A	B	C
4/1～/28	169	163	163
4/2～5/26	166	157	175
5/2～6/23	160	154	159
6/24～7/21	152	150	149
7/22～8/18	150	165	161
8/19～9/15	149	146	147
9/16～10/13	139	141	133
10/14～11/10	150	140	174
11/11～12/8	162	142	168
12/9～1/5	156	152	159
1 年平均	155	152	159

≪太陽≫

	A	B	C	D	E	F	G
4/1～/28	１５９	１６１	１５６	１５１	１５７	１５８	１５６
4/29～5/26	１４４	１４３	１４３	１５０	１４５	１５２	１１９
5/27～6/23	１５３	１５３	１４６	１４６	１５３	１４６	１４１
6/24～7/21	１４４	１４４	１５０	１５４	１５２	１４４	１４３
7/22～8/18	１３２	１２５	１３２	１５４	１４９	１４３	１４３
8/19～9/15	１５３	１５５	１３０	１４５	１４２	１５１	１５０
9/16～10/13	１４５	１３６	１４４	１４５	１５１	１４４	１４４
10/14～11/10	１４８	１５６	１４４	１４５	１３６	１４６	１４８
11/11～12/8	１５３	１４７	１４５	１４５	１５５	１５０	１３３
12/9～1/5	１４８	１４６	１４１	１５８	１３５	１４８	１４６
1年平均	１４８	１４６	１４３	１４９	１４７	１４８	１４２

≪青空≫

	A	B	C	D	E	F	G
4/1～/28	１３１	１３４	１４６	１５０	１４２	１４９	１４７
4/29～5/26	１５９	１３８	１４１	１３７	１２２	１３８	１４４
5/27～6/23	１３０	１４２	１４１	１４６	１３８	１４１	１４０
6/24～7/21	１６０	１３９	１４８	１５０	１５４	１３５	１３０
7/22～8/18	１１９	１４２	１４９	１３７	１３６	１４８	１５１

8/19～9/15	１５９	１５８	１６０	１５２	１８６	１５８	１５６
9/16～10/13	１４７	１５６	１４９	１４８	１４６	１５６	１５１
10/14～11/10	１４４	１４３	１４３	１４０	１５８	１４２	１３３
11/11～12/8	１５７	１４７	１４４	１５１	１４０	１２９	１５５
12/9～1/5	１３０	１５３	１４９	１２２	１４４	１５２	１２９
1年平均	１４８	１４５	１４７	１４３	１４６	１４５	１４３

≪青空≫

	A	B	C	D	E	F	G
4/1～/28	１６０	１６０	１５５	１５７	１５８	１５７	１５６
4/29～5/26	１４５	１４８	１５５	１５３	１５２	１４６	１４２
5/27～6/23	１６０	１３１	１４５	１４７	１４９	１５４	１５２
6/24～7/21	１４５	１３８	１５７	１４２	１５０	１４７	１５９
7/22～8/18	１３１	１４０	１２２	１４６	１３３	１４６	１３９
8/19～9/15	１３１	１４０	１２２	１４６	１３３	１４６	１３９
9/16～10/13	１５２	１４４	１５３	１４４	１２７	１２６	１３６
10/14～11/10	１４１	１５２	１３３	１５３	１３７	１４５	１４２
11/11～12/8	１４０	１２８	１５５	１３７	１５３	１４２	１４５
12/9～1/5	１３０	１２９	１４７	１４９	１４３	１４５	１４３
1年平均	１４４	１４３	１４５	１４８	１４５	１４５	１４６

②平成 29 年度・30 年度　年次有給休暇取得数

	平成 29 年度			平成 30 年度（4 月～12 月）		
	勤務者数	有給取得数	有給取得率	勤務者数	有給取得数	有給取得率
園長･事務	3 名	23 日	19%	3 名	14 日	11%
専門	7 名	61 日	21%	8 名	48 日	15%
青空	7 名	8 日	3%	7 名	29 日	11%
さくら	8 名	10 日	4%	7 名	12 日	7%
太陽	7 名	20 日	8%	7 名	34 日	13%
つくし	3 名	22 日	20%	3 名	20 日	17%
調理	5 名	62 日	34%	5 名	22 日	13%

≪平成３１年度方針≫

・毎月の勤務表は、月末までに作成することを目標とする。
・偏りのない勤務表を作成するために、労働時間の総数を算出し、各棟の勤務状況を把握していく。
・年次有給休暇を５日取得するために、調整を行い対応する。

防災係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

太陽棟

≪2018 年度方針≫

・地震・火災・その他の災害等、状況に応じた避難の設定のうえ実施する。 ・防災備品の購入、管理を行っていく。 ・施設内防災設備の全職員への説明、確認の機会を設ける。 ・実災害時の安全な避難の為に訓練時から意識を持って避難対応が出来るようにする。

総括

防火対策に対しての各種活動を行ってきた。消防計画については今年度 11 月の県監査において、風水害対策の記載が無い為、記載を行うよう指導があり消防計画の変更・追記を行い来年度より新しい消防計画での施行を予定している。なお筑波北消防署に提出をする際には改定冊子が 2 部必要となる。

今年度も方針としていた通り全職員を対象とした施設消防設備使用方法の体験の機会を設けた。今年度は新任職員の試用期間終了後に実施をしたが、災害や緊急事態がいつ起きるか分からない為、使用方法を早くから確認しておくべきであったとの意見があった。次年度は災害や緊急時に備えられるよう 5 月に全職員を対象として説明の機会を設け、どの職員でも使用できるようにしていく。

訓練について本園は 2018 年度方針の避難訓練計画予定表をもとに避難訓練実施要綱（表 3）を運営委員会・職員会議に報告し、年間 2 回の実施を定められている総合訓練（避難・消火・通報)、夜間訓練（18:00 より実施）を含め、毎月 1 回実施してきた。なお、総合訓練の通報訓練については自動通報装置が設置され、避難を優先することになり消防署への事前の報告のみ行い、訓練時の火災通報専用電話機を使用しての通報訓練は行っていない。

訓練は第 1 土曜日を基本として行ったが、他の施設行事と重なった際や雨天時には別日に振り替えて行ってきた。訓練時には避難者記録簿の訓練用のものを用意し、記入担当部署を毎月変更して実施した。なお訓練用の避難訓練簿は係で管理し、記入担当部署に当日の朝に渡している。来年度も実災害が起きた際に誰もが記入し消防署への通報を円滑に行えるよう継続していく。また終了後には災害訓練記録簿を係が記録し翌月の訓練に活かしていく。今年度の防災訓練実施について、訓練実施後の振り返りにおいて児童より「早く避難することが出来て良かった」や「消火は成功することはないのか」などの訓練への意見が挙がっており、児童の積極的な姿勢が窺えた。訓練時、職員が避難を呼びかけて、児童は状況に応じて屋外へと避難することが出来た。

今年度はより実践的な訓練を行うために棟内での火災だけではなく、付近の雑木林や調理部からの出火などについても想定した訓練の実施を検討してきたが、訓練時の伝達や実

施時期について決めていなかったために実施することが出来なかった。来年度は訓練が行えるよう、付近の雑木林や調理部、倉庫からの出火を想定した避難訓練の実施を含めた年間の計画を立案していく。また竜巻や人為的災害などさまざまな災害を想定した訓練の実施を検討していく。

本体施設訓練の参加状況は今年度、訓練の重要性を訓練の総評時、余暇時間等に伝えてきたこと、全国で多くの災害が発生したことで児童の災害対策への意識が高まり大半の児童が総評まで参加することができている。今後も児童の意識が低下しないよう避難訓練の重要性を訓練の時だけではなく余暇時間などを利用し伝えていくとともに、訓練が形骸化しないよう火災場所の変更や風水害、人為的な災害時の訓練等より実践的な訓練の実施を検討していく。職員の動きとしては火元発見後の初期消火、館内放送を使用しての児童への避難指示等を行ってきた。月 1 度の実施のため職員の参加状況に偏りがある。来年度は年間予定を提示し、勤務表に記しておくことで各職員が参加をしやすいように工夫をしていく。

分園の避難訓練状況としては 6 月と 9 月の避難訓練が実施できなかった。それぞれの月のホーム会議時で実施に向けて検討してきたが、児童の参加状況について情報集約が足りず、アルバイトや塾などの事情によって実施が難しいと判断したことで実施に至らなかった。

次年度は、平日の夕方の時間といった比較的児童がホームで過ごしている時間を有効活用するなどの実施時間帯への工夫を検討し、毎月の訓練を企画実施していく。

今年度も災害時の避難の際にどの職員が対応を行っても安全に避難できるように職員への本体施設消防設備の説明時に訓練時の内容について説明を行った。更なる充実の為に実災害時にどの職員が対応しても安全に避難できるよう、災害別避難方法の実践的な学習の機会を検討するなど理解を深めるための活動を計画していく。実災害時に消火器や AED の使用が円滑に行われるよう次年度以降、AED、消火器の使用方法について学ぶ機会をリスクマネジメント係とも連携し検討していく。なお AED は事務棟内、事務室にて管理している。（管理会社：ALSOK）

消防設備は施設機能強化推進費より自主点検や関東防災による点検を行ってきた。防災備蓄品は今年度、簡易トイレや間仕切り等、非常時の衛生用品の購入を検討してきたが、施設強化推進費内での関東防災の点検委託費と消防法改正に伴う消火器の購入があった為に購入には至っていない。次年度、非常時の衛生用品についての購入を検討する。また震災時の家具等転倒防止についても生活棟を優先的に設置できるよう検討する。非常食等の備蓄品については次年度以降も購入していき、同じ時期での期限切れにより備蓄品が足りなくならないように対応していく。なお、消防法の改正については 2011 年 4 月に施行された消火器の点検基準の変更のことであり、消火器の購入より 5 年後から 1 年ごとに消火器の内部点検及び中身の 10 パーセントを交換するという基準がとなった。今年度は購入から 5 年が経過したため、安全面を考慮し内部点検ではなく新品への交換を行った。今後も同じ

ように 5 年ごとに新品に交換していく。次回の交換については 2023 年度になる。

2018 年度収支決算

（収入）

費目	金額
施設機能強化推進費	450,000

（支出）※1 月 31 日現在

内容	金額
点検委託費	232,740
消火器購入（本園 23 本・つくし 3 本・関東防災出張費）	162,000
	計：394,740

≪2019 年度予算案≫

（収入）

費目	金額
施設機能強化推進費	450,000

（支出）

内容	金額
点検委託費	232,740
３ｄａｙｚライフボックススペシャル	150,000
衛生用品（非常用トイレ）	67,260
	計：450,000

在庫確認日　2019 年 1 月

内容	個数	保存期間	保管場所
保存食	240（ヶ）	～2021.3	駐車場倉庫
保存水（２ℓ）	96（本）	～2021.3	〃
３ｄａｙｚライフボックススペシャル	80（セット）	～2020.8	〃
アルファ米（白米）	550（個）		〃
アルファ米（わかめご飯）	350（個）		〃
アルファ米（五目御飯）	100（個）		〃

《2019 年度方針》

・地震・火災・その他の災害等、状況に応じた避難の設定のうえ実施する。
・防災備品の購入、管理を行っていく。
・施設内防災設備の全職員への説明、確認を 5 月に実施する。
・実災害時の安全な避難の為に訓練時から意識を持って避難対応が出来るようにする。

【表 1 ：2018 年度避難訓練実施状況】

本園	
4 月 14 日(土) 避難訓練(火災)・消火訓練	10 月 6 日(土) 避難訓練(夜間)・消火訓練
5 月 12 日(土) 避難訓練(地震)・消火訓練	11 月 3 日(土) 避難訓練(火災)・消火訓練
6 月 2 日(土) 避難訓練(火災)・消火訓練	12 月 1 日(土) 避難訓練(地震)・消火訓練
7 月 30 日(月) 避難訓練(地震)・消火訓練	1 月 1 2 日(土) 避訓練(火災)・消火訓練
8 月 21 日(火) 避難訓練(総合)・消火訓練	2 月 2 日(土) 避難訓練(総合) ・消火訓練 実施予定
9 月 9 日(日) 避難訓練(地震)・消火訓練	3 月 2 日(土) 避難訓練(地震)・ 消火訓練・実施予定
つくし	
4 月 29 日 (日) 避難訓練 (火災)・消火訓練	11 月 25 日 (日) 避難訓練(総合) ・消火訓練
5 月 27 日 (日) 避難訓練 (地震)・消火訓練	1 月 27 日 (日) 避難訓練 (地震)・消火訓練
7 月 31 日 (火) 避難訓練 (火災)・消火訓練	2 月 2 日(土) 避難訓練(総合) ・消火訓練 実施予定
8 月 31 日 (金) 避難訓練 (地震)・消火訓練	3 月 2 日(土) 避難訓練(地震)・児童予告なし 消火訓練・実施予定
10 月 26 日 (金) 避難訓練(夜間)・消火訓練	

【表２：2019 年度避難訓練実施予定表】

本園	つくしホーム
４月 13 日(土) 避難訓練(火災) 消火訓練	４月 13 日（土） 避難訓練（火災） 消火訓練
5 月 11 日(土) 避難訓練(地震) 消火訓練	5 月 11 日（土） 避難訓練（火災） 消火訓練
6 月 1 日(土) 避難訓練(火災) 消火訓練	6 月 1 日（土） 避難訓練（地震） 消火訓練
7 月 29 日(月) 避難訓練(地震) 消火訓練 事務部・専門部参加	7 月 6 日（土） 避難訓練（火災） 消火訓練
8 月 26 日(月) 避難訓練(火災) 消火訓練 事務部・専門部参加	8 月 3 日（土） 避難訓練（火災） 消火訓練
9 月 7 日(土) 避難訓練(地震) 消火訓練	9 月 7 日（土） 避難訓練（地震） 消火訓練
10 月 5 日(土) 避難訓練(総合)	10 月 5 日（土） 避難訓練（総合）
11 月 2 日(土) 避難訓練(夜間) 消火訓練	11 月 2 日（土） 避難訓練（火災・夜間） 消火訓練
12 月 7 日(土) 避難訓練(地震) 消火訓練	12 月 7 日（土） 避難訓練（火災） 消火訓練
１月 11 日(土) 避難訓練(火災) 消火訓練	1 月 11 日（土） 避難訓練（地震） 消火訓練
2 月 1 日(土) 避難訓練(総合) 消火訓練	2 月 1 日（土） 避難訓練（総合） 消火訓練

3 月 7 日(土) 避難訓練(地震) 消火訓練	3 月 7 日（土） 避難訓練（地震） 消火訓練

避難場所

【本園】

第一避難場所：UBS 広場

第二避難場所：本園前調整池

第三避難場所：田水山小学校

【つくしホーム】

一時避難場所：ホーム庭

最終避難場所：大曽根小学校

【表３避難訓練実施要綱】

避難訓練（火災）

時間	内容	児童の動き	職員の動き
9:55	連動スイッチオフ		自動火災通報装置の連動スイッチを切る（係）
10:00	○○棟（雑木林）より火災発生	火災発見・職員報告（児童名）	児童からの報告を受け、館内放送（○○棟職員） ※非常ベルを鳴らし、事務棟で復旧ボタンを押す（部署名）
		各ユニット内、避難経路を確保した安全な場所で待機する	初期消火（全職員）
10:05	初期消火失敗	職員の指示に従い避難する	館内放送（○○棟職員） 児童誘導（ユニット職員）
10:10	避難完了	整列後待機	ホーム児童点呼、統括者へ人数報告（ユニット職員） 統括者（○○棟職員）
10:15	講評		係及び職員より講評
10:20	終了		自動火災通報装置の連動スイッチをオンにする（係）

避難訓練（地震）

時間	内容	児童の動き	職員の動き

9:55	連動スイッチオフ		自動火災通報装置の連動スイッチを切る（係）
10：00	地震発生	机の下など安全な場所に避難	地震発生の館内放送（○○棟職員） 身の安全を守りながら児童の状況の把握を行う
10：03	○○棟（雑木林）より火災発生	火災発見・職員報告（児童名）	児童からの報告を受け、館内放送（○○棟職員） 非常ベルを鳴らす。（○○棟職員） ※事務棟で復旧ボタンを押す（部署名）
		各ユニット内、避難経路を確保した安全な場所で待機する	初期消火（全職員）
10:08	初期消火失敗	職員の指示に従い避難する	館内放送（○○棟職員） 児童誘導（ユニット職員）
10:13	避難完了	整列後待機	ホーム児童点呼、統括者へ人数報告（ユニット職員） 統括者（○○棟職員）
10:15	講評		係及び職員より講評
10:20	終了		自動火災通報装置の連動スイッチをオンにする（係）

夜間避難訓練

時間	内容	児童の動き	職員の動き
17:55	連動スイッチオフ		自動火災通報装置の連動スイッチを切る（係）
18:00	○○棟（雑木林）より火災発生	火災発見・職員報告（児童名）	児童からの報告を受け、館内放送（○○棟職員） ※非常ベルを鳴らし、事務棟で復旧ボタンを押す（部署名）
		各ユニット内、避難経路を確保した安全な場所で待機する	初期消火（全職員）

18:05	初期消火失敗	職員の指示に従い避難する	館内放送（○○棟職員） 児童誘導（ユニット職員）
18:10	避難完了	整列後待機	ホーム児童点呼、統括者へ人数報告（ユニット職員） 統括者（○○棟職員）
18:15	講評		係及び職員より講評
18:20	終了		自動火災通報装置の連動スイッチをオンにする（係）

避難訓練（総合訓練）

時間	内容	児童の動き	職員の動き
9:55	連動スイッチオフ		自動火災通報装置の連動スイッチを切る（係）
10:00	○○棟（雑木林）より火災発生	火災発見・職員報告（児童名）	児童からの報告を受け、館内放送（○○棟職員） ※非常ベルを鳴らし、事務棟で復旧ボタンを押す（部署名）
		各ユニット内、避難経路を確保した安全な場所で待機する	初期消火（全職員）
10:05	初期消火失敗	職員の指示に従い避難する	館内放送（○○棟職員） 児童誘導（ユニット職員）
10:10	避難完了	整列後待機 消防署に通報する	ホーム児童点呼、統括者へ人数報告（ユニット職員） 統括者（○○棟職員） 通報者（○○棟職員）
10:15	講評		係及び職員より講評
10:20	終了		自動火災通報装置の連動スイッチをオンにする（係）

育成会係

2018年度総括、及び2019年度方針

青空棟

≪2018年度総括≫

・育成会行事に積極的に参加し地域との交流を深める。 ・育成会の行事に参加することで社会性やマナーの協調性を養う。 ・地域担当職員と情報共有し、役割分担しながら行事参加にあたる。 ・各行事に必要な職員数を係と地域担当職員で調整し、全体に周知する。

全体総括

今年度も全ての行事に参加する事が出来た。保護者の方々との信頼関係も築くことが出来てきており、子供会の子ども達からも「職員さんだ」と声を掛けてもらう機会が増えた。子ども会の様々な活動に参加する事で、園の子ども達は地域の友人と共に社会性や協調性を養うことが出来た。園の納涼祭にはたくさんの地域の方にご参加いただき、子どもや職員に声を掛けていただけるようになった。地域の方から納涼祭を楽しみにしていると話を受ける回数も増え、地域との繋がりを感じる行事の一つとなっている。水守囃子連の和太鼓演奏も恒例となっていたが、今年度は悪天候により演奏を披露していただく事が出来なかった。その際には行事委員会と調整を図り、先方に説明を行なった。

昨年度同様、立哨当番は朝の児童の送り出しと時間が被ってしまうため、調理部に協力を依頼し対応した。また、役員会・総会をはじめ、各行事の対応職員については、窓口を係に一本化し会長さんからの連絡を受け、都度地域担当職員、他部署と連携・分担して対応した。

◇年間参加行事

５月１３日　自転車点検、除草作業、廃品回収	４月　１日　第１回総会
６月　３日　太鼓練習開始(３年生以上)	７月　１日　第２回役員会
７月２８日　若草子供会山車引き	８日　総会
８月１５日　盆踊り	２月　３日　第３回役員会
８月２５日　ラジオ体操開始（３１日）	１０日　総会
９月２９日　親子キャンプ	
１１月１８日　廃品回収（２回目）	
１２月　２日　クリスマス会及び新１年生を迎える会	
３月　３日　６年生を送る会	

◇立哨当番　４月１０日、５月７日、２９日、６月１５日、１２月３日

◇会計

年会費等、必要な会費以外に今年度は親子行事（ボーリング・BBQ）の実施があった。

【支出】

○育成会費　3,000 円／年・3 人

○子供会費　2,000 円／年・1 人

※途中転入の場合は、月割計算とし月額は次のとおりとする。

育成会費）　250 円／月・1 戸

子供会費）　170 円／月・1 人　　水城子供会・育成会会則より

○親子行事（ボーリング・BBQ）

	ボーリング・BBQ 代	
大人	1,500 円　×3 名	4,500 円
子ども	2,000 円　×13 名	26,000 円
貸靴代		3,720 円
合計		34,220 円

※次年度予算に関しては、親子旅行の実施内容に準ずる。

≪2019 年度方針≫

・育成会行事に積極的に参加し地域との交流を深める。
・育成会の行事に参加することで社会性やマナーの協調性を養う。
・地域担当職員と情報共有し、役割分担をしながら行事参加にあたる。
・各行事に必要な職員数を係と地域担当職員で調整し、全体に周知する。

理念権利擁護係

２０１８年度総括、及び２０１９年度方針

青空棟

≪２０１８年度方針≫

○権利ノートの読み合わせの日には、業務日誌に記載し、連絡会や職員会議で周知する。 ○記録については、共有サーバー内に記載してもらい、係で確認作業を行なう。 ○養育理念については、年２回の読み合わせの機会を設ける。

1.総括

今年度は『理念権利擁護係』として 4 年目の取り組みとなった。養育理念については、職員全員が共通認識を持つことを目的とし、年度初めと年度途中の 2 回職員会議時に音読をした。子どもの権利ノートについては、日程表（※表 1）を作成し、子ども会議の際にユニット毎に読み合わせを行った。読み合わせ日については、業務日誌へ記載し連絡会を通して周知した。今年度からペーパーレス化し、記録用紙を配布せず共有サーバーへデータ入力をして貰った。年度途中に、実施状況の確認を行い、職員会議時に報告をした。ペーパーレス化になったことで、実施後のデータ入力が抜けていることが多く見られた。次年度は読み合わせの翌週に係がチェックし各ユニットに入力を促していく。また、各棟に日程表を配布し、全職員が年間の日程を把握出来るようにする。

記録用紙から、子ども達が読み上げそれに対して職員が補足説明をする読み合わせ方が多く見られた。在籍年数が長い児童に関しては、毎年読み合わせを行なっている為、聞き飽きた様子や嫌々参加する様子も見られたが、職員側の子どもへの継続したアプローチが必要である。新規入所児に対しては、全体の場ではなく個別に丁寧に説明しているユニットも見られた。各ユニット毎に子ども達への説明方法に工夫が見られた。子どもから出た意見は少なかったが、子どもだけでなく職員全員が子どもの権利を理解し、子ども支援を行えるよう、次年度も引き続き読み合わせを行なっていく。

11 月の虐待防止月間は、今年度係が代表して職員会議時に権利擁護や被措置児童虐待について講話を行った。被措置児童虐待が発生することで、職員・子ども共に大きなダメージを受けるだけでなく、更に施設としても大きな信用の損失となる。被措置児童虐待を防止する為に、職員同士で相談できる環境・職員の研修や質の向上・開かれた組織運営が大切である。職員個々の意識を高く持ち、子ども支援にあたる必要性について話をした。発表する側にとっても、事前に調べることで権利擁護の理解が更に深まり良い機会となった為、次年度も係が代表して行っていく。

※表１

≪子供の権利ノートの読み合わせ日程≫

平成３０年度

日付	内容	中高生	小学生用
6/7（木）	・あなたへのメッセージ ・「子どもの権利ノート」ってなに?	P.1～2 P.5～6	P.1～2 P.5～6
7/5（木）	・ひとりの人として大切にされる権利 ・なぜこれからこの場所で生活するのか知る権利	P.7～8 P.9～10	P.7～8
7/19（木）	・これから生活する場所について知る権利 ・あなた自身や家族のことについて知る権利	P.11～12 P.13～14	P.9～10 P.11～12
9/3（月）	・あなたのことがどのように考えられているのか知る権利 ・あなたの意見や希望を言う権利	P.15～16 P.17～18	 P.19～20
9/20（木）	・家族と交流する権利 ・プライバシーが尊重される権利	P.19～20 P.21～22	P.11～12 P.13～14
10/18(木)	・自分の物を持つ権利 ・いろいろな情報や考え方を知る権利	P.23～24 P.25～26	P.15～16 P.17～18
11/8（木）	・いろいろな教育を受ける権利 ・心と体の健康が守られる権利	P.27～28 P.29～30	P.27～28 P.25～26
12/6（木）	・自由に考えたり信じたりする権利 ・趣味・レクリエーションを楽しむ権利	P.31～32 P.33～34	P.19～20 P.29～30
12/20（木）	・いろいろな人と交際する権利 ・体罰やいじめ、いやな思いをしない権利	P.35～36 P37～38	 P.21～22
1/17（木）	・性的にいやなことをされたり、言われたりすることから守られる権利 ・いつでも相談できます ・あとがき	P.39～40 P.41～42 P.43～44	P.23～24 P.33～34

≪２０１９年度方針≫

○権利ノートの読み合わせの日には、業務日誌に記載し、連絡会や職員会議で周知する。
○全員が把握出来るよう、年間の日程表を各棟に配布する。
○記録については、共有サーバー内に記載してもらい、係で確認作業を行なう。
○養育理念については、年 2 回の読み合わせの機会を設ける。
○11 月虐待防止月間の際は、係が資料作成し講話を実施する。

環境美化係

2018 年度総括及び 2019 年度方針

太陽棟

≪平成 30 年度方針≫

○施設の定期的な美化活動を、計画立てて実施する。

総括

前年度の総括時に年間計画（＊１）をたて、それに基づき清掃を実施してきた。当日の運営では勤務時間の調整を行い、各部署２名を選出し、人員を確保した。円滑に進むよう、作業分担の掲示、全体指揮、進行状況に伴っての人員の再配置を行ってきた。今年度も引き続き調理部には飲み物の準備をしてもらった。参加者の協力により作業内容が大幅に遅れることはなかったため、別日に再設定をしていない。夏の一斉清掃に関しては、納涼祭の準備も兼ね行事委員会との合同で実施をした。年度末に粗大ゴミの廃棄を予定している為、用務員との分担を行っていく。

粗大ゴミの廃棄については、法律により事業所から発生するゴミの引き取りが不可になったと説明を受け、クリーンセンターの利用が不可能となっている。それにより日の丸商事（つくば市作谷）の利用をすることとなった。処分料は１kg あたり¥35 となっている。田中地区倉庫内の粗大ゴミに関しては、年度内に日の丸商事に見積もりを取ってもらう予定となっている。

水質検査を大内商事に依頼している。つくば市の規定に準じて年に一度受水槽の清掃を行い、その際に塩素判定も併せて実施してもらっている。害虫駆除においては、建物の周囲やリビングに薬剤の散布をしている。

今年度は刈払機用の消耗品の購入・除草剤の購入を主に行った。支出状況を把握しやすくするため次年度からデータ作成を行っていくこととする。また、次年度の予算執行計画の中には、田中地区の倉庫内の粗大ごみの廃棄を予定している。

次年度に向けての日程及び作業内容は以下の表（＊２）に記載する。作業内容については、状況により変更をしていくこととする。今年度同様に、美化意識を高め計画的な活動を行っていく。

≪平成 31 年度方針≫

○施設の定期的な美化活動を、計画立てて実施する。

（＊１）平成 30 年度　一斉清掃　実施内容

実施日	内容
平成 30 年 5 月 8 日（火）	除草作業（UBS 広場、太陽棟・さくら棟 UBS 広場側）
平成 30 年 7 月 10 日（火）	除草作業（駐車場フェンス付近・田中地区道路沿い）
平成 30 年 8 月 23 日（木）	除草作業（UBS 広場・敷地道路付近）納涼祭事前準備
平成 30 年 12 月 11 日（火）	クリスマスイルミネーション設営 ＊餅つき・門松作成時に片付け実施
平成 31 年 3 月 12 日（火）	自転車廃棄・倉庫整理

（＊２）平成 31 年度　一斉清掃　実施計画

実施日	内容
平成 31 年 5 月 7 日（火）	除草作業（UBS 広場、太陽棟・さくら棟 UBS 広場側）
平成 31 年 7 月 9 日（火）	除草作業（駐車場フェンス付近・田中地区道路沿い）
平成 31 年 8 月 22 日（木）	除草作業（UBS 広場・敷地道路付近）納涼祭事前準備
平成 31 年 12 月 10 日（火）	クリスマスイルミネーション設営 ＊餅つき・門松作成時に片付け実施
平成 32 年 3 月 10 日（火）	自転車廃棄・倉庫整理

平成 31 年度予算（案）

一斉清掃を実施するにあたり必要な物品の購入をする。

金額	使途
¥128,000	・混合オイル・刈払機替刃・軍手・除草剤・田中地区倉庫内粗大ゴミ廃棄料等

福利厚生係

2018 年度総括、及び 2019 年度方針

専門部

≪2018 年度方針≫

◇職員の健康診断は事務部管轄のもと実施状況を把握する。
◇インフルエンザの予防接種への助成は、社会状況等にあわせ、施設側と協議し、適切な対応をはかっていく。あわせて、特別な事情がない職員へ予防接種の実施を促していく。
◇外部の福利厚生サービスを活用し参加しやすい行事を計画していく
◇互助会会則を見直し必要に応じて変更していく

１．福利厚生とは

福利厚生とは、事業所が労働力の確保・定着、勤労意欲・能率の向上などの効果を期待して、従業員とその家族に対して提供する各種の施策・制度である。従業員の生活の向上等を支援する目的で実施されるもので、法律で義務づけられた法定福利と、事業所が任意で実施する法定外福利に大別される。

1）福利厚生係に関する規程等と係活動

筑波愛児園の就業規則の福利厚生の項、及び筑波愛児園職員互助会会則に基づき係活動を実施している。そこで福利厚生係は、職員の福利厚生（親睦会等の企画・運営）や互助会事務（慶弔金、互助会費金の管理）を行っている。

２．全体総括

専門部が福利厚生業務を引き継いで 3 年を経た。「枠組みの整理」「業務内容の明確化」を目的として事務部と連携を図りながら専門部で業務を分担し遂行してきた。親睦会のあり方や互助会会則の見直しを行ってきたが、基準や手順がないため都度確認しながら進めてきた。標準化を目指していく。

昨年度、福利厚生行事についてのアンケートを実施し内容を精査したものをもとに年度当初に年間計画を作成することで職員の交流会については円滑に進められている。交流内容については、職員の意見も取り入れ、円滑なチームワークや働きやすい職場環境作りが出来るような親睦会を企画していく。

互助会会則については、新任職員の互助会費支払い時期や慶弔金、親睦会の一部を実情に合わせて改正した。

会計業務について、慶弔金の支出や台帳記載についても概ね出来ている。今年度は、ソウェルクラブの「クラブ活動支援事業」に申請をして助成金を受け取ることが出来た。活動費を確保するために次年度も継続して申請していく。次年度は施設負担金の不足が予想されるので予算を依頼していく。

３．各活動総括

１）職員の健康診断

事務部管轄のもと実施した。

2）インフルエンザ予防接種への助成

事務部管轄のもと実施した。

3）親睦会等の実施

親睦会等の目的は(①愛児園職員相互の親睦融和をはかるとともに、園の発展のために職員の鋭気を養う。②職員間の親睦・交流をはかることにより、円滑なチームワークやコミュニケーションによる働きやすい職場づくりをめざす) になっておりこの目的に沿って今年度も計画し実施してきた。

昨年度のアンケート結果を受けて交流会の企画を見直した。社会人として必要な交流会は残すべきである。職員負担を減らしたいなど係りの中で意見が挙がり今年度は、3 グループに分けての親睦会（バーベキュー）、忘年会、新年会、歓送迎会を企画し実施してきている。時期や日程についても昨年度の反省を踏まえ調整を図っている。

親睦会について、近場で手軽にバーベキューを楽しめてゆっくり職員間で話ができたとの意見が挙がり、職員間での親睦・交流は必要と感じている。今までは、勤務の都合上横のつながりを重視した企画で進めてきたが、職場を離れて部署ごとの交流があっても良いのではないか、また、有志同士の交流も良いのではないかとの意見が出た。次年度は、円滑なチームワークや働きやすい職場環境作りが出来るような親睦会を企画していく。

年度途中で新しい職員が加わり歓迎会を兼ねての忘年会を実施した。忘年会の参加者について、日頃より当園に関わっている方に参加を促しても良いのではないかとの意見がでたことから係内で議論した。参加者については、福利厚生の目的を重視し職員のみとしたい。

新年会については、前年度同様実施した。

今年度の企画内容については以下の通り実施した。

① 親睦会

目的	食事を通して、職員相互の融和親睦をはかる
実施日時 （参加人数）	① 2018 年 6 月 5 日（火）10:00～（9 名） ② 2018 年 6 月 19 日（火）10:00～（8 名） ③ 2018 年 7 月 3 日（火）10:00～（11 名）
場所	フォンテーヌの森
必要経費	参加費　　各 3,500 円 景品代　　8,857 円（施設負担金より支出）

②忘年会

目的	職員の 1 年間の労をねぎらい、新しい年に向けて一致団結できるように融和親睦を図る 新たに迎え入れる新任職員の前途を祝福する
実施日時	2018 年 12 月 13 日（木）19：00～（33 名）
場所	創作和食　てんてけてん　（研究学園店）
必要経費	参加費　各 3,480 円 余興景品　10,000 円(施設負担金より支出) ※入職した職員の歓迎会も兼ねる

③新年会

目的	親睦融和をはかるとともに、新年を祝い新たな気持ちで園の発展に寄与できるよう鋭気を養う
実施日時	2019 年 1 月 8 日（火）12：00～（41 名）
場所	地域交流スペース
必要経費	弁当、ケーキ　1,000 円程度（給食費より支出） 景品代等　4,942 円（施設負担金より支出）

4）互助会事務

互助会会則に規定されているように、月額 2,500 円の掛金となっており、その内訳は 500 円が慶弔金、2,000 円が親睦会費となっている。

互助会会則改正に伴い新任職員については、試用期間終了後より徴収している。

今年度は、職員間の交流促進や心身のリフレッシュを目的としたソウェルクラブの「クラブ活動支援事業」に申請し助成金を受け取った。

会計内訳は以下の通りです。

①慶弔金

≪2018 年度（2019 年 1 月 15 日時点）の収支概要≫

	内容	小計
繰越金	2017 年度繰越金　　176,861 円	176,861 円
収入	毎月の積立（H30.4 月分～H30.12 月分）163,500　円	163,500 円
支出	弔事（6 件）130,000　円	130,000 円
収支		210,361 円

②互助会費

≪2018 年度（2019 年 1 月 15 日時点）の収支概要≫

	内容		小計
繰越金	2017 年度繰越金	1,860,874 円	
	【内訳】　親睦会費	1,732,369 円	
	施設助成金	128,488 円	
	互助会費利息	17 円	1,860,874 円
収入	毎月の積み立て（2018 年 4 月分～2018 年 12 月分）	690,000 円	
	ソウェルクラブ	38,000 円	
	親睦会費利息	8 円	728,008 円
支出	退職金の返金	109,630 円	
	親睦会費の返金	11,000 円	
	親睦会　（3,500 円×28 名）	98,000 円	
	チャリティーコンサートチケット代	30,080 円	
	忘年会　（3,480 円×25 名）	87,000 円	

	※うち 2 名（新職者）は施設負担金より支出 レクレーション代（施設助成金より支出）　23,799 円	359,509 円
収支		2,229,373 円

③2019 年度　施設助成金予算（案）

項目	内訳	金額
福利厚生（施設助成金）	レクレーション代　30,000 円 歓送迎会参加費（入・退職者分）　20,000 円	50,000 円
ソウェルクラブ（クラブ活動費）	親睦会費の一部に使用　1,000 円×会員分	40,000 円
合計		90,000 円

5）親睦会等の年間予定

次年度の年間予定を以下のように計画する。

行事名	実施時期	備考等
親睦会	5 月～2 月	部署ごとの交流会
忘年会	12 月	前年度不参加職員を優先的に参加できるよう配慮
新年会	1 月	新年 1 回目の全員出勤日に実施
歓送迎会	3 月	退職者・新採職員の都合を早期に調整する

≪2019 年度方針≫

◇外部の福利厚生サービスを活用する
◇参加しやすい企画内容を計画する
◇互助会会則を見直し必要に応じて変更していく

2018年度総括、及び2019年度方針（案）

車両係

さくら棟

2018年度方針

・公用車の利用について職員や子ども達と意識する取り組みとして、車両係りからのお知らせのような広報誌を学期ごとなどに作成し配布する。 ・車両内に必要な物（テッシュカバー、ゴミ箱など）を整備する。 ・本園、分園それぞれにて、車両整備を行い、事務、係へ報告する

総括

昨年度に引き続き公用車の大きな事故は無く安全に公用車を使用することができた。昨年度は車両をぶつけてしまった際に事務への報告を怠ってしまうことが何度かあったが、職員会議の際にぶつけてしまった際の対応をアナウンスしてきたことで速やかに事務部への報告をすることができていた。また、事故を起こした際に、一律した迅速な対応に繋げられるよう、それぞれの公用車が加入している保険会社の説明、万が一物損・人身事故を起こしてしまった際のマニュアル、保険会社の連絡先を各車両に設置し、職員会議で情報共有を行ってきた。

昨年度から各車両にゴミ箱を設け、公用車の使用の度に出たゴミは都度使用した職員で処理をするようアナウンスをしてきた。しかし未だにゴミ箱内に瓶、缶類のゴミを放置したりその他可燃ゴミを放置されているという現状が続いており、ゴミの処理に関しては改善に至っていない。来年度も引き続き職員会議及び子ども会議での呼び掛けを継続し、強化していくことで、車両の使用方法についてのマナーの見直しや、意識付けを行っていく。広報誌の配布に関しては、上記の取り組みを強化することとして来年度の追加方針とする。

運行記録簿に関しては使用した職員から少なくなってきているといった報告を頂けたことで速やかに補充することができた。しかし、ボールペンの紛失や破損が相次いでおり、その都度の対応を図っている状況である。分園の車両整備においてはつくしホームとの連携を図り、オイル交換及びタイヤ交換等をスムーズに行うことができた。

車両の整備・点検に関しては問題がある度に事務部、施設長と確認を行いながら対応してきたことで確認作業の抜けや報告漏れなどを防ぐことができた。また日常の中で車両に不備があった際には各職員からの報告をもらい迅速に車両整備を行うことができた。オイル交換時期に関しては、『交換した日時・次の交換時期』を記載したリマインダーを貼ったことでオイル交換の時期が誰でも分かるように工夫をしてきた。

今年度、これまでに使用していたスタッドレスタイヤの交換時期を迎え、つくしのノア、本園のＶＯＸＹのスタッドレスタイヤを新しく購入している。12月頭に用務員との連携を

図り履き替えも行うことができた。今後雪が降る可能性も視野に入れ、雪の日の運転マニュアルも作成し職員全体で共有を図って行く。また、今年度から洗車代の予算も計上することとなり、園内での手洗い洗車だけでなくガソリンスタンドでの機械洗車も行うことができた。例年、年度半ばと年度末の 2 回のみの洗車に留まっていたが、専門部や各棟職員の協力もあり今年度は 3 回実施することができた。しかし予算の関係もあり 3 回とも機械洗車を実施することはできず、その中の 1 回は園内での手洗い洗車で調整をしてきた。勤務内の時間で洗車を行うことが難しい為、「いつでも誰でも」洗車に行けるよう洗車専用のプリペイドカードの作成を検討している。プリペイドカードの具体的な使用方法に関しては、洗車カードの使用履歴やカード残額が簡易的に閲覧できるよう専用ファイルを作成し、カードと共にさくら棟で管理を行う。各棟職員の勤務形態を見ながら洗車が可能な日を選定し、実施していく。尚、プリペイドカードへの入金額は（1 回の洗車額 500 円×5 台×年間 4 回）と考え 1 万円の予算として検討する。また、各車両のカーナビの地図が古くなっており、対外関係や児童の送迎の際に適切なルートが表示されない事が多い。その為、カーナビ更新も検討していく。バスの洗車に関しては使用頻度も少ない為、専門部への協力を仰ぎながら実施していく。

品物	単価（円）	合計
電池	1000 円	1000 円
洗車用品	10,000 円	10,000 円
合計		11,000 円

≪2019 年度方針≫

・『公用車の使い方』について職員や子ども達と意識する取り組みとして、職員会議及び子ども会議での呼び掛けを強化していく。
・1 年を通して車両の綺麗な状態が保てるよう 3 ヵ月に 1 回の洗車を実施する。
・本園、分園それぞれにて、車両整備を行い、事務、係へ報告する

感染症対策係

2018年度総括、及び2019年度方針

さくら棟
医療機関等連絡調整員

≪2018度方針≫

・感染症に関する正しい知識と予防の啓発活動を流行時期前の子ども会議や棟会議などの場で対処方法や予防方法を確認していくための資料などを配布する。
・子どもたちにわかりやすい感性症の対処法や予防法の啓発ポスターを作成し、各部署、各ユニットに配布、掲示する。

１.全体総括

今年度は、インフルエンザの感染に備え職員会議を通して啓発活動(ポスター作成・クレベリン設置)を行うことができた。また咳エチケット、手洗いの仕方が記載されているポスターの作成も行うことが出来た。これらのことは良かった点である。しかし、ノロウイルスの汚物処理方法や、季節に合わせた感染症の啓発ポスターを作成することが出来なかったことが反省点である。

来年度は年度始めに季節ごとの感染症の把握を医療機関等連絡調整員と連携し行い、季節に合わせた感染症の啓発ポスターの作成をしていく。また、子どもが嘔吐をした際の対応方法が明確でないため、嘔吐の際の対応方法が記載されている書類を作成し、職員会議などの全体の場で学習会を行う機会を設けていく。

２.活動報告

１)啓発活動

今年度は、流行時期の前にインフルエンザの対処方法のポスターを作成し全体の場で共有を図った。それらを各ユニット及びつくしホームに配布し、掲示をお願いした。結果、児童の目に入りやすいところに掲載したことによってポスターを見る児童が増え、例年に比べインフルエンザに感染した児童は少なかった。季節ごとにポスターを作成し、児童の目に入りやすい所へ掲示することで啓発活動に繋げていきたい。

２)施設内の感染症対策

今年度は、インフルエンザが流行は園内では少なく、感染した子どもは幼児ユニット４名、学童１名だけであった。職員では４名がインフルエンザに感染した。インフルエンザに感染した際の対応方法としてマスク着用、子どもたちには居室での静養をさせた。また、棟内で感染した児童がいる場合には他の体調不良者が通院した際にインフルエンザの検査を仰ぐことが他児への感染への予防にも繋がってくることになる。また、感染者が出た場合

に棟の出入りを禁止することでさらなる感染を防ぐことができた。

今年度もインフルエンザやノロウイルス対策とし各ユニットホームへクレベリンを購入した。クレベリンの効果としておよそ２カ月であるため、11月に配置すると流行時期に効果が弱くなってしまっている。その為、来年度は11月と１月の二回、各ユニットの児童が生活することが長いリビングに設置することとする。

３）うがい・手洗い

今年度は手洗いうがいの大切さを改めて感じ取れるよう、ポスターを作成した。日々の感染症を防ぐためには第一に手洗いうがいが必要になるということを記載し、子ども向けの分かりやすいポスター作りを行った。また、子ども会議での子どもたちへの手洗い、うがいの仕方を再度確認するように職員会議の場で呼びかけを行った。

４)2019 年度予算(案)

品物	単価(円)	個数	合計(円)
クレベリン	2,500 円	17 個	42,500 円

≪2019 年度方針≫

・感染症に関する正しい知識と予防の啓発活動を流行時期前の子ども会議や棟会議などの場で対処方法や予防方法を確認していくための資料などを配布する。
・子どもたちにわかりやすい感性症の対処法や予防法の啓発ポスターを作成し、各部署、各ユニットに配布、掲示する。